
ランスIF 二人の英雄

散々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランスIF 二人の英雄

【Nコード】

N5750X

【作者名】

散々

【あらすじ】

本来ならばランスに出会う前に死ぬはずの運命であった、英雄候補であるオリ主。その彼の生存によって、物語はどのように変化していくのか…という感じの作品です。Rance1からのスタートです。

プロローグ（前書き）

原作リスペクトで行きたいと思います。

オリ主以外のオリはモブ以外無し、主人公は現状チートという程強くはありません。

プロローグ

一つの大陸があつた。魂の集合体である存在が、自らの暇つぶしのために創造した大陸。その存在は三体の神を創り出し、大陸の管理をさせた。悲劇と混乱の鑑賞を愉悦とする主を退屈させぬよう、三体の神は争いが永遠に続くようバランスを考え、長い時を掛け世界を構築していった。

魔王… モンスター… ドラゴン… そして人類…

優秀すぎたドラゴンの存在を反省して想像された人類はこの混乱の時代を生き抜くには余りにも弱く、長きに渡り魔王やモンスターといった強大な存在に蹂躪され続けることとなる。

人類誕生から約3500年…

人類は滅びてはいなかった。高い繁殖力によりその数を増し、知識により武器を生み出し、他の種族に対抗する力を身につけていた。

長く魔人の奴隷とされていた暗黒の時代も存在するが、第6代魔王ガイの時代に奴隷から解放されることとなり、各地に国が誕生する。ヘルマン・リーザス・ゼスの三大国だ。これに古くから存在する「APAN」と多くの自由都市の間で、人類同士の争いが長く続くこととなる。魔王ガイの死と、それによる魔人進行からなる地獄が目前に迫っていることも知らずに…

GI1006

- 大陸北西部 とある森中 -

「はあっ…はあっ…」

その男は森の中を彷徨っていた。身につけている鎧はひび割れ、既に防具としての役割は果たしていない。身体中に傷を負っているが、一際目立つのはその胸の傷。モンスターに付けられたのであるうか。その傷の深さから鑑みるに、おそらく…長くはない。

「15年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

自らも死期を悟っているであろう。そう男は呟いたとほぼ同時に、背後で物音がする。

「さて…最後くらい楽に殺して欲しいものだな…」

自分を殺すであろう相手を確認するため、男は振り返る。

本来、男はここで死ぬ運命にあった。多くの平行世界の歴史の中で、GI1006年以降まで男が生き延びたことはない。

「人間…？ なぜこのようなところに…？」

そこに立っていたのは美しき女性であった。しかし、その存在は人間ではない。魔人。人類を蹂躪する存在が、そこに立っていた。

それは創造神の悪戯か。本来ここで死ぬべき運命であった人間が、仇敵とも呼べる魔人との邂逅により、生き延びることとなる。それは即ち、これより後に起こる人類と魔人の戦争に、多くの平行世界

の中で初めてその男が携わることとなるのだ。

-そして10年の時が流れる-

破壊と混乱の時代…

時代は英雄をもとめていた…

時代がもとめる資質を備えた人物は二人…

だが…

その英雄たる資質を備えた人物の一人は…

とっても自分勝手に

とってもスケベで

とっても乱暴で

とても正義とは思えない男だった。

そしてもう一人は…

これは二人の英雄の物語である。

第1話 出会い

LP0001 7月

- 自由都市アイス -

「今回はこの仕事を引き受けて貰いたい」

とあるギルドビルの一室にある部屋で、男二人が仕事の話をしていた。話を切り出した男の歳は40才後半から50才というところだろうが、成金のような服を身につけ、葉巻に火を付けようとしている。この男の名前はキース・ゴールド、このキースギルドのマスターである。

「そろそろ、お前も結婚したらどうだ。なんなら俺がいい女を紹介してやってもいいぜ」

「ふん、くだらないことを言っていないでさっさと仕事の話をしろ」

それに答えたもう一人の男。薄手のプレートメイルとマントを身にまとい、ふてぶてしい態度で佇んでいる。彼の名はランス、キースギルドに所属する戦士にして英雄たる資質を備えた人物の一人だ。しかし、彼の行動理念は「全ては俺様のために」というものであり、美女とは犯してでもHし、邪魔する奴は皆殺しという、とても英雄とは呼べぬものであった。ただ、その実力は本物であり、いつしか彼は一部の冒険者からは鬼畜戦士という通り名で呼ばれるようになっていた。

「せっかちな野郎だな。まあいい、この写真を見てくれ」

そう言い、白い封筒から取り出した写真には白いドレスを着た赤い髪の美しい娘と、青いドレスを着た黒い髪の娘が写っていた。

「ほー、なかなか可愛い娘たちじゃないか。グッドだ！」

「この娘たちを見つけ出して保護して貰いたい」

「なんだ、人捜しか。何者なんだ」

聞けば、赤い髪の娘はブラン家の次女で名をヒカリ、黒い髪の娘はファン家の長女で名をグアンというらしい。どちらも名家のお嬢様だ。

「ヒカリの方は3週間前パリス学園に通っていて行方不明になったそう。グアンは彼女のルームメイトで、ヒカリを自分で見つけ出すと息巻いていたそうだが、こちらも1週間前から行方不明だ。どちらも身代金の要求はない」

「ふむ、営利誘拐では無いのか。まあ、とにかく助け出せばいいんだろう？報酬は？」

「聞いて驚け、1人救出で20000GOLD、2人で40000GOLDだ！」

「なんだと！破格値じゃないか！どうしたんだ？」

ランスが驚くのも無理はない。普通、この程度の依頼なら1人1000〜2000GOLDが相場になる。それが10倍もの報酬が提示されたのだ。俄然やる気も沸いてくる。

「それだけ大事な娘たちなんだろう」

「がはははは！俺様にまかせておけ、すぐに解決してやる。じゃあな」

「それとグアンの方は…行っちゃったよ。まあ持って行った資料を読めばすぐに気がつくだろう…」

キースギルドを後にし、アジトである貸家へと帰る。そこで受け取った資料に目を通し、情報を整理する。普段であればこんなに真面目に取りかかるようなランスではないが、何せ報酬が報酬だ。その上美女のおまけ付き。ここで俺様がかつこよく助け出せば、感動の余り簡単に股を開いてくれるかもしれない。いや間違はなく開く、などと真面目な顔でとんでもないことを平然と考えていると、部屋の奥から女性が現れる。

「ランス様、お茶が入りました」

お茶を持って現れたこの娘はシル・プラインという。特徴的なピンクの毛こもこ髪で、露出の高い白い装束を身につけている。今から3ヶ月ほど前に奴隷商人から15000GOLDで買い取った魔法使いだ。彼女には特殊な魔法が掛けられており、ランスの命令には絶対服従である。

「あの…次のお仕事、決まったのですか？」

「人探しをする事になった」

簡潔に答え、ランスは資料の続きを読む。邪魔としては悪いと思いい、シルは机の上にお茶を置き、部屋から退出しようとしたが、それはランスの声によって阻まれる。

「なんだと！グアンちゃんはジオの町近辺の洞窟をアジトにしている盗賊団と一緒にいたという目撃情報があるじゃないか！キースの野郎、大事なことを言い忘れやがって！」

「お、落ち着いてくださいランス様」

話の途中でさっさと切り上げた自分の失態は棚に上げ憤慨するラ

ンス。しかし、ランスがここまで怒るのにも訳がある。一つは現在ランス家の貯蓄は底をついており、是が非でもこの報酬は手に入れないといけないのだ。そして、もう一つはキースギルドの方針である。何もこの依頼はランスだけが受けたものではない。希望者が多ければ早い者勝ちというギルド方針であるため、手を付けるのが遅れば他の請負人にみすみす40000GOLDを横取りされかねない。

「急いで準備をしろ、シイル！すぐに出発するぞ！」

「はい、ランス様」

キースに文句を言って無理矢理うしバス代を出させ、ジオの町へと向かう。まだこの依頼を受けたものは少ないはず。今なら一番乗り確実だ。

「がはははは！40000GOLDと美女二人の身体はどっちも俺様のものだ！」

- 自由都市ジオ近辺の洞窟 盗賊のアジト内 -

「へっへっへ、今日も楽しませて貰おうかな」

「もう…家に帰してください…」

「まーだそんなこと言ってんのか？お前はもう一生俺たちの奴隷なんだよ！」

洞窟の奥には捕らえられ、さんざん汚されぬいたグアンと、いかにもな盗賊が二人。本来はもう少し盗賊の人数が多いのだが、他の盗賊たちは今外に出払っているため、アジトには三人だけだ。

「でも大丈夫かね…お頭に黙って勝手に女を連れて盗賊団から抜け出して…」

「まだ心配してんのか？お前だっていつもいつもお頭のおこぼれに預かるのは不満だっただろ？ここはジオ、あっちはリーザス城。見つまりやしねーよ！」

距離的には案外近いため、十分見つかる危険があると思うのだが、そこは短絡思考な盗賊。あっさりと納得する。

「そうだな…他にも賛同してついてきてくらた奴らもいるし、何も恐れることはねーな！」

「その通りだ！こつから俺らの新しいサクセスストーリーが始まるんだ！新かぎらない明日戦闘団誕生の瞬間だぜ！俺が団長な！」

「じゃあ俺は副団長か？文句はないぜ」

「ぎやはははははは」

下品な笑い声が洞窟の中に響く。もしかして…本当に一生このまま…グアンは何度も頭に浮かび、その度に考えないようにしてきたことをまた思い浮かべてしまう。

「じゃあ新しい盗賊団の誕生を祝して本日の一発目を…」

「ひつ…誰か…誰か助けて…」

「何回言やあ気が済むんだ？誰も助けになんか来ねーよ！」

「いや、助けは来るぞ。だいぶ遅れてしまったがな」

いるはずのない四人目の声を聞き、盗賊はすぐさま振り返る。その瞬間、副団長だった盗賊の首が飛んだ。団長と名乗った男も、グアンも、状況が飲み込めず呆然となるが、仲間を殺されているのだ。

自分にもこの男は向かってくるだろう。短剣を腰から抜き、目の前に立つ男に向かい声を荒げる。

「てめえ…なにmondつ！ぶち殺されてーのか！」

「名乗る必要があるのか？…今から死ぬ奴に」

- 盗賊のアジト入り口 -

「ふんっ、手間取らせやがって。ここがアジトで間違いなさそうだな」

洞窟の前にはランスとシル、そして先ほどまで盗賊だった肉塊が5つ。ランスたちは運のいいことにアジトに戻る盗賊たちを偶然目にし、うしバスを途中下車してついでしてきたのだ。そしてアジトの前についたと同時に用済みとばかりに後ろから不意打ちを仕掛けた。何人かには反撃してくるが、こんな盗賊に手こずるランスではない。みるみるうちに全員を皆殺しにした。

「さーて、グアンちゃんを俺様がかつこよく助けて一発やらせてもらおう」

「待ってくださいランス様、洞窟の中から誰か出てきます」

「んっ？…なんだとおお！」

洞窟から出てきたのは二人。薄手の鎧とロングソードを装備した、どこからどう見ても冒険者である黒髪の男。両腕でグアンを抱えている。助かって気が抜けてしまったのだろうか、気を失っている。

「ま…間に合わなかった…」

「ん？おたくらは…なるほど、俺同様、依頼を受けた冒険者か。殺す直前に仲間が帰ってくるとか言っていたから警戒していたが、あんたらが片付けてくれたのか」

「あ、はい、そうです。私はシイルといいます。こちらはランス様で、私のご主人様になります」

グアンを抱えた男はそうランスとシイルに向かって話しかけるが、ランスは何かを考え込んで返事をしない。訝しげにランスを見ると、考えがまとまったのか、ランスがしゃべり出した。

「よし、殺そう。そうすれば金も美女も俺様のものだ。我ながらグッドアイデアだな、がはははは！」

「いきなりとんでもないことを言うな、あんたの主人は…」

「むっ、何を勝手に馴れ馴れしく人の奴隷に話しかけているんだ貴様」

「ランス様…一応自己紹介は済ませました…」

「なんだと、勝手なことをするなシイル、ええい、こうしてやる！」

「ひんひん…痛いですが、ランス様…」

両拳でシイルの頭をぐりぐりとし始める。余りにも理不尽な光景である。

「一応ほとんどの盗賊を片付けてくれた礼に、報酬を分けてやってもいいと思っではいたんだがな…」

「なに？それを早く言え。なかなか下僕として見所のある奴じゃないか。分けると言わず全部寄越してしまってもいいんだぞ？」

シイルを解放し、ランスはまだ名も知らぬ冒険者に向き直る。

「ふふっ、おもしろい奴だな、あんた」

「で、貴様の名前はなんというのだ？男の名前など覚える気はないが、こっただけ名乗っているのは気に食わん」

「ああ、名乗りが遅れたな、すまなかった」

それは、本来ならあり得ぬ出会い。世界の理から外れた男たちの邂逅。この出会いが人類同士、果ては魔人との争いに終止符を打ち始まりであったことを、このときはまだ誰も知らなかった。

「俺の名はルーク。キースギルド所属の冒険者だ」

第1話 出会い（後書き）

「人物」

ルーク・グラント（オリ主）

LV 45 / 200

技能 剣戦闘LV2 対結界LV2 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。歳は25才でランスの7つ上。本作の主人公の一人で、英雄候補。GI1006年に行方不明となるが、GI1015年にキースギルドに戻ってきてキースを驚かせた。その間の動向は謎に包まれている。

ランス

LV 10 / ∞

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。本編の主人公にして、本作の主人公の一人。英雄候補。才能限界に上限が無く、世界のバグとされている。

シル・プライン

LV 13 / 35

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ランスの奴隷の魔法使い。ランスのベストパートナー。

「技能」

対結界（オリ技能）

結界を無効化する。LV1で魔法結界などの人類の生み出した結界を、LV2で魔人の無敵結界をも無効化し、直接ダメージを与えることができる。魔剣力オスや聖刀日光と違い、効果は本人のみで

周りの人間がダメージを与えられるようにはならない。ランスの才能限界同様世界のバグであり、ルークのみが保有する技能である。

第2話 奇妙な協力関係

- ジオの街 酒場 -

街の外れにある小さな酒場。そこそこに繁盛しているようで、店内には多くの冒険者たちがいた。冒険の成果を喜び合うもの、静かに飲むもの、酔いが回って口論を始めるもの、酒場の風景としてはよくあるものだろう。その酒場の奥のテーブルにランスたちはいた。

「おごつて貰うのはいいが、分け前はまた別だぞ。わかっているな」
「わかってるって。人の好意は素直に受け取るもんだぞ」

水割りを片手にランスがルークに念を押す。ここの払いは全額ルーク持ちだ。先の礼も兼ねてというのが一つ、一応ギルドの先輩だからというのがもう一つの理由だ。

「しかし酒はまあまあだが、料理が不味いな。こんなに不味いへんでろばなど俺様は認めん」

「酒場の料理なんてこんなもんだろ。ほれ、シルちゃんも遠慮せずには食べな」

「すいません、いただきます」

奢りでありながら文句ばかりのランスに呆れながら、ウォツカを一口飲み、シルにうはぁんを勧める。

「で、仕事の話に戻ろうか。グアンちゃんから聞いた話だと、ヒカリちゃんをさらったのは女忍者だったらしい。深夜にシャワーを浴びていたところを襲われたとのことだ」

「女忍者ねえ…そんなもんがまたいたのか」

「まあ大陸にいるのは珍しいな。JAPANではいまだに多く存在するようだ」

グアンは酒場の近くにある宿で寝かせている。宿に運んだあたりで一度目を覚まし、誘拐時の状況をルークに話してくれたのだ。その後は疲労からか、すぐにまた眠り込んでしまった。

「ヒカリちゃんとグアンちゃんの誘拐は全くの無関係だな。一人救出出来たのはめでたいが、ヒカリちゃんの件は情報を集める必要があるな」

「忍者が犯人などたいした手がかりにもならんぞ、まったく…」

「とりあえず俺はグアンちゃんをリーザスに送り届けて、その後はリーザスで情報収集をするつもりだ。そっちはどうするんだ」

「ふむ…シル、お前パリス学園に入学して情報を集める」

「えっ、学校に行かせてもらえるのですか？」

「ふっ…」

急に話を振られたシルはよくわからない返事をする。しっかりしていると思っていたが、思ったより天然なのか？と考え、ルークは少し笑ってしまった。

「ばか、情報を集めるんだよ、情報を。ヒカリちゃんと親しかった友達などを中心に調べろ」

「はい、わかりました」

「がはははは、グアンちゃんの分の20000GOLDは山分けになっちゃったが、もう20000GOLDは必ず俺様が全部もらうぞ！」

「まったく、いつから分け前が半分になったんだ…で、ものは相談なんだが、この事件お互いに協力し合わないか？」

「は？いきなり何を言い出すんだ？俺様は男と協力し合う気はないぞ」

「いや、こちらとしては早く救出して親御さんを安心させてあげたくてな。それにそちらは知らないだろうが、この案件いつも以上に急ぐ必要があるぞ」

きつぱりと協力の申し出を断ったランスに対し、ルークは意味深なことを言い出す。

「どういうことですか？」

「ええい、もったいぶらずにさっさと急がなきゃいけない理由を話せ！」

協力する気のなかったランスも話の内容は気になったのか、飲み干したグラスを机に強く置き、声を荒げる。

「いや、俺が仕事を受けた段階でラークとノアもこの案件に興味を持っているって話をキースがしててな。今の仕事が付いたら間違いない乗り込んでくるぞ」

「げっ、あいつらか…ノアさんはかわいいから許すが、あの野郎弱いくせに調子に乗りやがって…」

ランスが嫌な顔をするのも無理はない。ラーク & amp; ノアといえど美男美女コンビとして有名な冒険者で、今までにいくつもの困難な事件を解決してきた強者だ。キースギルド所属の冒険者の中ではトップクラスに名前が売れており、彼らがこの案件を引き受けたら20000GOLDとヒカリちゃんゲットの計画に暗雲が立ちこめる。

「むむむむむ…」

「報酬は5：5。お互いにいい提案だと思うがね？」

いつもならば、どうせ俺様が一番に解決すると断っていただろう。しかし、今は本格的に金がないのだ。先の分け前を無理矢理折半に持ち込んだが、10000GOLDでは借りている金を返したら、しばらく遊んで暮らすには心許ない。やはり最低でも20000GOLDは欲しい。それに…

「ぐぬぬぬ…そうだな、今回だけは協力してやらんこともない。ただし、報酬は7：3だ！こっちは2人だからな」

「オーケー。6000GOLDでも破格だし、別にいいぜ。これからしばらくは協力関係だな。仲良くしようぜ」

「よろしく願います」

「ふん、男と仲良くする気などないわ」

シイルが返事をする横で、追加できた水割りを飲みながら悪態をつく。ルークは両の手のひらを上にし、やれやれといった姿を取るが、シイルは内心珍しいこともあるものだと思っていた。いくら時間もお金もないとはいえ、あのランス様が男性と組むなんて…と。

ランス自身気づいていなかったが、先の理由以外にもう一つ組んだ理由が存在していた。ランスは、ルークの雰囲気はどこか懐かしさを感じていたのだ。同じギルドに所属していながら顔を合わせるのとは初めてで、そんなことがあり得るはずがないのに、以前に感じたことのあるような懐かしさ。その理由をランスとルークが知るのとは、かなり先のこととなる…

・リーザス城下町・

シイルは途中入学の審査に楽々合格し、パリス学園への潜入に成功した。ルークはグアンを家族の元に送り届け、リーザスで情報収集を続けている。そしてランスは二人から遅れること1週間、パリス学園がある王都リーザス城へと到着していた。協力関係だとはれないようにするためである。まずランスが目指したのはパリス学園潜入調査をしているシイルから情報を聞く手はずとなっているからだ。パリス学園に到着すると、裏口に回った。女子校なので見つかると面倒だからだ。

「シイル…」

裏口に到着すると、ランスは横にいる人にも聞こえないような小さな声でシイルを呼ぶ。3分ほどでシイルが白い学生服を着て現れた。あのような小声でも呼び出せたのは、初級魔法であるリーダーのおかげである。本来相手の考えていることを読む魔法だが、応用すればこのような使い方も出来るのだ。

「お待たせしました」

「遅いぞばか。で、何かわかったか？」

「ヒカリさんですが、学園長のミンミン先生から特別生徒にされていた優秀な生徒さんだったみたいです」

「ふーん、他には？」

「その他は、なにも」

「使えん」

「すみません…あ、私もミンミン先生から特別生徒にもらったんですよ」

ランスは嬉しそうに話すシイルを見る。こうして見ると白い服が中々に似合っていてかわいいかもしれない。

「あ、ランス様、この服中々似合っていると思いませんか？」

「似合わねえよ、ばか。とりあえずその茂みでやるぞ」

有無を言わず茂みに連れ込むランス。1週間女を抱いていなかったため相当溜まっていたらしい。

「グッドだ」

「ひどいです、ランス様……」

「しっかり調査しておけよ」

一発抜いてすっきりしたのか、ランスはパリス学園を後にし、中央公園へ向かう。今度はここでルークと落ち合う約束になっているからだ。

「ちっ……少し早く着きすぎたか。ルークの奴、気を利かせて早く来ておけてんだ」

「あの……」

声を掛けられ振り向くと、買い物かごを両手に重そうに抱えた娘が立っていた。

「なんのようだ？」

「おサイフを無くしてしまったの。一緒に捜して貰えませんか？」

見れば中々にかわいい娘である。良い事を思いついたと、いやらしい顔をしながら返事をする。

「捜してやってもいいが、報酬は？」

「へ？」

「こっちはプロなんぞ。報酬がないと働かんぞ。ああ、あんたの身体でもいいな」

サイフ捜しにずいぶん大げさなことを言うものである。

「そ…そんな……わかりました…」

顔を真っ赤にしながら、娘は小さな声で言った。これは楽しみだと笑みを浮かべ、どこでサイフを落としたのかを問う。

「あの…この公園なんです」

ランスは公園をぐるりと見渡す。あまり大きな公園でなく、開けた場所でもあるため、サイフが落ちていればすぐに目につくはずだが、見当たらない。

「見当たらんぞ。もう取られたんじゃないのか？」

ランスが振り返ると、そこにいたのはさっきまでの娘だが、服がさっきまでとは違う。黒装束に身を包み、手にはくないとランスのサイフを持っていた。

「ええ、サイフは見つかったわ。ありがとう」

「お、俺様のサイフ…」

「この件からは、手を引いた方がいいわよ。死にたくなければね」

「自分から姿を現してくれるとはな、ずいぶんと優しい誘拐犯さんなこつて」

突然の声に娘が振り返ると、くないが弾かれ、手に持っていたサ

イフも奪われてしまう。

「これは返して貰うぜ」

「くっ…」

娘は懷から煙り玉を出し、地面に投げる。娘の姿を煙が包み、煙がはれる頃には娘の姿は風のように消えてしまっていた。

「おお、ルーク！助かったぞ。まあ俺様一人でもちゃちゃっと取り返せたがな」

「まあ、そういうことにしておいてやるよ」

「しかしあの女、次にあつたら絶対に犯してやる！」

出し抜かれたのが相当腹に立ったのか、声を荒げるランス。サイフをランスに返し、ルークはベンチに腰掛ける。

「で、何か手がかりはわかったのか？これで何もわからなかったとか言ったら、報酬は9：1になるぞ」

「勝手なことを…一応有力な情報を手に入れたが…この案件、俺らの想像以上にやっかいなものかもしれん」

「どういうことだ？」

日が落ち、辺りが暗くなってくる。そのせいなのか、あるいは別の理由からか、ルークの表情が暗くなる。

「俺が手に入れたのは、ヒカリちゃんと思わしき女性がリーザス城に連れて行かれるのを見たという情報だ。この案件、リーザスのお偉いさんが関わっているな」

第2話 奇妙な協力関係（後書き）

「人物」

ラーク

LV 18 / 35

技能 剣戦闘LV1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むノアと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

ノア・セーリング

LV 15 / 33

技能 神魔法LV1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むラークと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

キース・ゴールド

アイスの街にあるキースギルドの主。ごつい見た目と違い、その経営手腕は本物である。ランスやラークの過去を知っている数少ない人物である。

グアン・ファン・ユーリイ（オリモブ）

ヒカリのルームメイト。原作では名無しで、誘拐事件にも巻き込まれない。名前はアリスソフト作品の「零式」より。ファンの方、すいません。

女忍者

いったい何者なんだ…

「技能」

○○戦闘

その武器での戦闘を得意とする才能。

魔法

攻撃魔法や補助魔法といった魔法を使う才能。

神魔法

回復魔法や浄化魔法を使う才能。

「料理／食材」

へんでろば

シチューのような料理。ランスの好物。

うはぁん

高級果物。

ウオツカ

ヘルマン国の地酒。アルコール度数が高い。

第3話 後に語られる出来事

・リーザス城下町・

「だから、通行手形を持たない方はお通しできません」

「ええい、いいからさっさと通せ」

ランスは今リーザス城の前にいた。昨日ルークからリーザス城の中にいる可能性が高いという情報を聞いたため、朝から城の中に無理に入ろうとしているのだ。

「それ以上すると捕まえて牢獄に入れますよ」

「げっ…とりあえず戦略的撤退だ！」

その場から逃げ出すと公園でルークと落ち合う。ルークの方はいくと、通行手形を手に入れる手段がないか朝から情報収集をしていたのだ。

「強行突破は無理だな。そっちの方は何か手は見つかったか」

「そうだな…それにしても疲れがとれん。若干風邪気味だし。昨晚は誰かさんのせいで街の外で野宿することになったからな」

そう、昨晚二人は街の外で野宿をしていた。それというのはランスが昨晚、一人で宿を切り盛りしているJAPAN出身の奈美という娘に襲いかかり、宿を追いついてしまったためだ。因みに奈美は柔道五段の持ち主で、ランスはあっさりと投げ飛ばされてしまい、結局手は出せなかった。

「ふん、あれは俺様のせいじゃない。お前が」JAPAN出身…まさか忍者では…」とか呟くから確かめようとしたただけだ」

「…記憶にないな」

「嘘付け！」

思いつきり目をそらしながら答えては、ランスじゃなくてもそう言いたくなる。

「まあ昨晚のことは置いておいて、話を戻そう」

「お・ま・え・が、始めたんだろぅが！」

「…通行手形は中々持っている人物が少ないみたいでな、どうやら城下町の住民だと酒場のマスターが持っているらしい」

「なんだ、それなら話は早いな」

「…いい加減ランスの行動パターンも読めてきたが、一応聞いておこう。どうするつもりだ？」

「サクツと殺して奪えばいい。うむ、さすが俺様」

「予想通り過ぎて涙が出てきたよ。まあ、殺すのは別にして、とりあえず酒場に向かうか」

城下町の端にある酒場「ぱとらっしゅ」に向かう。途中買い物していたシルと出会い、真面目に潜入調査しろというランスの雷が落ちていた。シルは学園長の頼みと言いかけていたが、問答無用でぐりぐりのお仕置きを受けていた。さすがに不憫である。

酒場に到着し、中に入ると、客は余りおらず、店の中に辛気くさい空気が漂っていた。

「なんだ？繁盛しておらんではないか。これなら殺しても誰からも文句は出ないな」

「文句が出ないかは知らんが、この空気はあのマスターのせいだな。明らかに負のオーラを出している。おかしいな…以前にもこの店は

来たことがあるが、もつと剛胆な性格だったと思ったが…」

二人はカウンターに座り、酒を注文する。ランスが今にも斬りかかってしまいそうなので、どのように話を切り出そうか早急に考える必要があるな、とルークが考えていると、幸いなことにマスターの方から話しかけてきた。

「見た目から察するに、あんたら強い戦士なんだろう？少し頼みがあるんだが…」

「ふん、ゆつとくが俺様は安くな」どういう要件だ？」…おいつ」

せっかくマスターと仲良くなる切っ掛けを自らぶち壊しにしてしまいそうだったので、ランスの発言を遮ってルークは聞き返す。ランスは不満そうだ。

「俺の娘が盗賊にさらわれちゃったんだ。救い出して欲しい」

不満そうであつたランスが急に真面目な顔になり、口を開く。

「その娘…美人か？」

「全然関係ないよな、今」

「親の俺が言うのもなんだが美人だ」

「答えるなよ、おやじ…しかも親バカかよ…」

ルークの頭が痛くなってきたのは酒のせいではないだろう。風邪が悪化しなければいいが。

「がはははは、ならこの俺様と下僕その1に任せておけ。大船に乗ったつもりでいろ」

「誰が下僕だ。盗賊の目撃情報なら情報屋の娘から今朝聞いたぞ。」

第3地区の外れだ」

「よし、早速向かってサクツと救出だ！」

「ありがとう、頼んだぞ。ただ報酬はあまり多くは払えなくてな…
800GOLDで頼む」

「いや、500GOLDで良い。その代わり通行手形を譲ってくれないか？」

「ん？あんなもんでいいなら良いぜ。最近は城の中にも行かないしな」

これで娘さえ救えば通行手形が手に入る。殺すことにならなくて良かったとルークはほっとする。ランスも美人の娘と聞いて俄然やる気だ。殺そうとしていたことなど、もう忘れているだろう。

・リーザス城下町近辺の洞窟 盗賊団のアジト・

「最近似たような洞窟を拠点にした盗賊を倒したような気が…何か関係あるのか？」

「何ぶつぶつ言ってやがる。お前の独り言は二度と信じんぞ。ここがアジトだな。早速入るぞ…なんだ！？生意気にも結界なんぞ張りやがって、これじゃあ入れないじゃないか！」

ランスが喚く横をすり抜け、ルークは結界に触れる。すると結界はルークに対して無効化されたため、ルークは何事もなかったように結界を抜ける。

「なんだ？なぜお前は入れているんだ？」

「ああ、結界を無効化して入っただけだよ」

「なんだ、お前そんな器用な魔法も使えたのか。では俺様も入ると

するか」

魔法という訳ではないんだが…まあ説明も面倒だしいいか、とルークは自らの結界無効化能力の説明を放棄する。というのも、そもそもルーク自身もこの能力に関してよくわかっていないからだ。防御結界や魔法結界を無視できるな、便利だな、程度の認識だ。

「って、入れんではないか！」

「無効化したのは俺だけだからな。結界事態はまだ残ってるから、ランスは入れないぞ」

「ズルだぞ、貴様！これでは美人の女の子を助けられんではないか！俺様も入れろー！」

「大声で騒ぐな、気づかれるだろ…は…はくしょん！！！」

「明らかに俺様の声よりお前のくしゃみの方がかいだろうが！！！」

ゴゴゴゴゴゴ…

風邪気味のルークがくしゃみをすると同時にアジトに掛かっていた魔法結界が解ける。さすがに呆然とする二人。

「…まさかくしゃみで結界を無効化するとは。俺様が爆裂くしゃみと名付けてやろう」

「違うから。どう考えても偶然くしゃみが結界解除の合い言葉だっただけだから」

随分不用心な結界である。まあ盗賊は深く考えていなかったのだろう。意気揚々と洞窟の中に入っていく二人。洞窟内にはいたるところに燭台が立っており、思ったよりも明るく歩きやすくなっていた。思ったよりもちゃんとした組織かもしれない。そうルークが考

えながら歩いていると、分かれ道になった。左に進むと少し開けた場所に出る。ちよつとした小部屋になっており、奥には岩で出来た階段、部屋の中には白髪（しろがみ）の盗賊が一人いた。

「なんだ、てめえら？新しく仲間になりしてきたチンピラか？まあいい、俺は盗賊のムララ。奥に進みたきや200GOLD払いな」

侵入者にそんなことをのたまう盗賊。それでいいのかと問いたい。

「あほか、死ねえええ！！」

「ぎゃーーーーー！！」

問答無用で盗賊をぶった切るランスを尻目に、ルークは奥の階段に目をこらした。どうもあの階段にも結界が張つてあるようだ。この盗賊団には魔法使いも在籍しているのだろうか。ランスもルークもガチガチの戦士タイプであり、魔法使いのシイルは今いないため、もし魔法使いがいるとすれば少し面倒だな、と頭を搔く。

「ランス、奥の階段にも結界が張つてあるぞ。俺一人なら先に進めるが…？」

「馬鹿者、美女はこの俺様がかつこよく救わなければならんだ。解除方法を搜すぞ」

「はい、はい…」

二人は部屋の中を軽く見回したが、解除するような仕掛けもなかったため、先ほどの分かれ道に戻り、今度は右へと進んでいく。少し歩くとまた小部屋にたどり着く。棚やベッドが置いてある。どうやら盗賊の詰め所的な部屋らしい。幸いなことに今は中に誰もいない。二人は部屋に入り、結界解除のための手がかりがないかを搜す。

「むう…特に何も見当たらん。そつちはそうだ？」

「俺様の方も見当たらん。ええい、厄介なことしゃがって。絶対に皆殺しだ！」

「おや、盗賊以外のお客さんは珍しいね？」

と、背後から声を掛けられ二人は身構える。ランスとルークという一流の冒険者が、声を掛けられる直前まで全く気配に気がつかなかったのだ。何者だ…ルークの頬に汗が流れる。振り返るとそこにいたのは壁に埋め込まれた赤い髪のおっさんであつた。

「焦らせやがって。なんだ貴様は？壁の中にいるとか変態か？」

「僕の名前はブリティシユ。好きで壁の中にいる訳じゃないよ。ここから出して貰えると嬉しいな！」

「結界とは違うな。呪いの類か…？だとしたら出す手段を持ち合わせていないな…」

「そんな…」

後の歴史に刻まれる出会いとは、得てしてこのようなものである。ブリティシユも、ランスも、そしてルークもそれを知る由もないが、この出会いは後に人々の間で語り告がれ、教科書にも載るような出来事となる。

LP0001 8月 二人の英雄がかつての英雄と出会う…と。

第3話 後に語られる出来事（後書き）

「人物」

ブリティシュ

LV 50 / 100

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV2

リーザスの近くにある盗賊団の洞窟の壁に埋め込まれている男。その正体は、今より1500年ほど前にエターナルヒーローと呼ばれるパーティーを率いたリーダーであり、英雄と呼ばれていた。魔法使いシンの禁呪を受け、壁に埋め込まれる。新陳代謝が殆ど無くされており、そのために長寿となる。壁の中での長い年月を経て精神を病み、かつて英雄と呼ばれていた頃の面影はない。

堀川奈美

リーザス城下町の宿「あいすくりーむ」を一人で切り盛りする苦勞人。柔道五段。

ムララ

かぎらない明日戦闘団の構成員。本編ではランスが初めて戦う中ボス的な扱い。しかし、洞窟内を歩いているいもむしDXより弱かったりする。

「技」

リーダー

対象の思考や情報を読む初步魔法。複雑な思考やシールドをされていると読むことが出来ない。

「その他」

エターナルヒーロー

1500年前に魔王ジル討伐のために集まったパーティー。過去から現在に至るまで、これほどの者たちで構成されたチームは無かったという。構成員は戦士ブリティシュ、魔法使いホ・ラガ、神官カフェ、侍日光、盗賊カオスの五人である。GL0533年、その消息を絶つ。

GOLD

この世界の通貨単位。1GOLDは約100円。モンスターの間では、キラキラ光ってきれいなこれを多く持っていると幸せになれるという伝説があり、モンスター同士で取り合っており、強いモンスターほど多くのGOLDを持っている。

年号

創世記

Kukuu00012014 魔王ククルククルの時代

AV00010721 魔王アベルの時代

SS00010500 魔王スラルの時代

NC00010960 魔王ナイチサの時代

GL00011004 魔王ジルの時代

GI00011015 魔王ガイの時代

LP0001 魔王リトルプリンセスの時代

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団

- 盗賊団アジト 最奥の部屋 -

「ふへへへ、おら、もつと良い声を上げな」

「いや…もうやめて…」

部屋の中では40才前後と思われる男が少女を犯していた。この男が盗賊たちのリーダー、名をライハルトと言う。周りには部下と思われる盗賊が五人。その内の四人も他の少女たちを犯している最中であつた。その光景を若干冷やかな目で見ているのは、盗賊団唯一の女性構成員だ。

「これだから盗賊家業はやめられねえな。お前らも楽しんでるか？」

「ええ、最高ですぜリーダー。かぎりない明日戦闘団に入って良かったですぜ」

「（…何が最高なもんか。貧しい人たちに盗んだものを分け与える正義の盗賊団だと言われて入ってみれば、中身はただの下衆な盗賊団。さつさと抜きたいが、感づいているのかしつかりとあたしの行動を見張ってやがる…）」

女盗賊が不満そうにしているのを無視し、他の盗賊はご機嫌に話し合う。

「そうだな、俺の作ったこのかぎりない明日戦闘団は最高だ！その内せかいを股に掛けるぜ！」

「おお、さすがですぜ、リーダー！」

「残念だがそんな日は永久に来ないな」

部屋の入り口から声を掛けられ、全員が入り口の方を見る。そこに立っていたのは戦士二人。ランスとルークだ。二人はブリティシュを解放する手段がなかったため、ひとまず彼と別れたのだ。その際、いつか必ず助けに来るとルークが約束すると、ブリティシュは感謝し、階段の結界を無効化する靴の場所を教えてくれたのだった。靴は一足しかなかったが、ルークは自分で無効化できるため、こうして奥の部屋までたどり着いたのだった。

「なんだてめえら、どうやってここまでできた！」

「答える必要はないな。その娘たちを解放して貰おうか」

「面白いことを言うな。俺の機嫌のいい内にさっさと帰りな」

ルークは部屋を見回す。捕まっている娘は一人ではなかった。中にはまだ年端もいかない少女もいた。そのような少女も盗賊たちはお構いなしで、部下の一人が調度犯している最中だった。そのことに静かに怒りを燃やす。

「まあ…こいつらに生きている資格は…ないな」

「当たり前だ。世界中の美女は全て俺様のものだ。あの少女も将来的には美人になっただろうに…むかむか」

「調子に乗るなよ、やっちまえてめえら！！！」

そうリーダーが声を上げると、近くに控えていた部下たちが襲いかかってきた。

「俺様はあのリーダーを殺る。雑魚は任せたぞ」

「ボス一人と部下五人…さり気なく楽な方を選びやがって…しっかりと殺せよ」

「…真空斬」

自らの放った技の名前を良い、再び構える。今の男を一番先に殺したのにも理由がある。他の盗賊は短剣装備だが、この相手だけ斧を装備していたのだ。二発目の準備をしているのを察し、盗賊たちから血の気が引く。

「あれを使わせるな！突っ込めー！！」

「ふん、技を放つ手間が省けたな」

焦った盗賊たちが迫ってくるのを見て、ルークは素早く真空斬の構えを解き、初めに迫ってきた盗賊を斬り伏せる。長剣と短剣だ、リーチの差がありすぎる。その盗賊は何も出来ないまま倒れ込む。正面の男が倒れきるとほぼ同時に、左右から二人目の男盗賊と女盗賊が攻撃を仕掛けてくる。男盗賊の短剣を剣で防ぎ、女盗賊の攻撃は肩だけで避けながら、彼女の腹に蹴りを入れる。

「がつ…」

女盗賊が倒れ込む際、その手に持っていた短剣を左手で奪い取ると、右の男盗賊に向かって斬りつける。頸動脈を捕らえたようで、ぐあ…と声にならない声を上げながら、血飛沫を上げそのまま崩れ落ちる。

「くっ…くそっ…！！」

他の三人と違い、命令するだけで自分は襲いかかってこなかった盗賊がいた。ルークは知らないが、この男が副リーダーだったのだ。典型的な上から命令するだけの臆病で無能な男。ようやく腰から短剣を抜き、身構えるが…

「遅い！」

盗賊が気づいた時には既に目の前に短剣が迫って来ていた。ルークが左手に持っていた短剣を投げたのだ。その刃はそのまま盗賊の額に突き刺さり、その手から腰から抜いたばかりの短剣がこぼれ落ちる。

「ぐっ…命乞いはしない。殺せ…」

腹を押さえながら倒れ込んでいる女盗賊が呻く。

「悪いが殺すつもりはない。あんただけさっきの反吐が出る乱交に参加していなかったからな。女…というのもあるだろうが、あいつらを見る目が明らかに下衆を見る目だった」

「それだけの理由かい？一応あたしも盗賊だよ。ある程度の悪行はしてきている」

「別に時代が時代だからな。盗賊それ全てを否定する気はない。俺ら冒険者も、一歩間違えれば似たようなものだからな」

独自の考えを女盗賊に向かってしゃべると、ふと目を細め若干のさつきを含めた口調になる。

「もちろん…彼女たちの解放を邪魔しようとするなら別だがな」

「いや…邪魔する気はないよ。あたしらの負けだし、ああいった誘拐は正直不本意だった」

「良識があるようでこちらも助かる」

「名前…聞いても良いかい…？」

「ルークだ。あんたは？」

「シャイラ…シャイラ・レスだ」

「良い名前だ。そういえば、ランスはどうしたかな」

目の前の戦いに集中していたルークもシャイラも、ランスとリーダーの戦いに気を向けていなかった。二人が戦っていた方向を見ると、盗賊団のリーダーであるライハルトは既に床に倒れ伏し、命ない肉塊となっていた。その少し奥でランスは先ほどまでライハルトに犯されていた少女を無理矢理犯していた。

「お前なにしてんだーっ！！」

「見てわかるだろう、ナニだ！がはは、グッドだ」

「うつつ、助かったと思ったのに…」

「何を言う。しっかりと助かっているではないか。これはその分の報酬だ」

「無理矢理報酬を貰うな。さて、娘たちを解放しないとな。酒場の親父の娘さんも捜さない」と

「あつ…それなら、私がその娘です…んっ…」

「おお、君があ親父の娘か。確かに言うとおりの美女ではないか、がはは」

偶然にもランスが犯していた少女が酒場の娘だった。名前はパルプテンクス。あの親父、どんなネーミングセンスだ。ランスがお樂しみの間に他の娘たちの鎖を解き、ようやく事を終えてランスから解放されたパルプテンクスも加えてリーザスに戻ることにした。

「俺は彼女たちを連れて先に戻るが…何でこの洞窟に残るんだ、ランス？」

「ふっ…少しやり残したことがあってな。案内に彼女を置いておいてくれればいい。後で向かうから酒場で待っている」

「まあ案内くらいいいけどな…だがこのアジトはたいしたものは置いてねーぜ」

ランスはシャイラを指し、シャイラがそれに答える。娘たちを早く家まで送り届けてあげたいという思いから、ルークは特にその内容は聞き返さず、先にリーザスへと向かう。結論から言うと、ルークとシャイラは見誤っていた。ランスの性欲をだ。ランスと二人で残ることの危険性は考えていたが、先ほどまでパルプテンクスを犯していたのだ、まさかな…と。ルークが洞窟から出ていったのを見送ると、ランスの目が怪しく光る。

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「あんたらなら娘を救ってくれると信じていたよ、ありがとう」

「もう一杯どうぞ。このブランディ、おいしいのよ」

「確かに飲みやすいな」

カウンターでルークは親娘と会話しながらランスを待っている。助けてくれたお礼の通行手形は先ほど貰い、今飲んでいる酒もサービスだ。

「あんたを気にいつちまった。どうだ、俺の娘を貰ってくれないか？」

「もう、お父さんたら…変なこと言わないで」

冒険者をやっているればこの手の話はたまに出る。慣れたように断りの言葉を入れようとするルークだが…

「それに私…ランスさんの方が…」

さすがに今の発言にはへこんだ。おかしい。さっきまでの洞窟での流れのどこにランスに惚れる要素があった。納得がいかない顔で酒を飲んでいるとようやくランスが到着した。

「あ、ランスさん。先ほどはありがとうございました」

「がははは。何、パルプテンクスちゃんもグッドだったぞ」
「ぽっ…」

「遅かったな。洞窟でいったい何をしていたんだ？」

ルークは顔を赤らめるパルプテンクスに対し、「ぽっ…じゃねーだろ！」と心の中で突っ込みながらランスに問う。

「決まっているだろう、ナニだ！」

「…はっ？」

「シャイラちゃんの身体はグッドだったぞ。おっぱいもでかったし。がはは」

「ちよつと待て…まさか、やり残した事っていうのは…」

「ああ、シャイラちゃんを抱いていなかったからな。涙を流して喜んでいたぞ」

「どう考えても歓喜の涙じゃないだろ、それは！」

「まあ別れ際に「必ずいつかぶっ殺してやる」とは言ってたがな」
「超恨まれてるじゃねーか！」

頭を抱えるルーク。せつかく円満に終わったと思っていたのに、と嘆いていると…

「因みにお前も含まれてたぞ。先に帰ったルークの野郎も絶対殺す！」とか言ってたし」

「理不尽だ！！」

酒場にルークの声が悲しく響いた。

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団（後書き）

「人物」

ライハルト

LV 7 / 12

技能 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団リーダー。装備は大鎌。本編では一応初ボスに当たるが、まず負ける相手ではない。

シャイラ・レス（オリモブ）

LV 3 / 25

技能 剣戦闘LV1 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団の女盗賊にして唯一の生き残り。本編では名無しの女盗賊で、本作同様再登場フラグとも思える言葉を発して去るが、その後22年間音沙汰がない。きっともう出ない。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。本作での再登場の予定は一応あり。ファミリーネームを変えたことにはきつと意味がある。

パルプテックス

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主の娘。ランスに好意を抱く。

「ぱとらっしゅ」の親父

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」の店主。意味もなく飲み代を無料にしたりと随分気っぷの良い親父だが、ネーミングセンスはない。

「技能」

シーフ

盗賊としての才能。手癖の悪さともいえる。

「技」

真空斬（オリ技）

使用者 ルーク

剣に溜めた闘気を相手へ飛ばす必殺剣。威力は普通の斬撃と変わらず、ある程度の実力者ならその軌道を読み防ぐことは出来る。風邪気味じゃなく、しっかりと集中できれば連発も可能。後衛にも攻撃できるため、ルークはこの技を重宝している。

「料理／食材」

ブランデー

ポピュラーな酒。よく使われるブランデー表記でないのはアリスソフトのこだわりと言えるだろう。「ぱすちゃこ」ではブランデー表記だった気もするが。

「その他」

かぎらない明日戦闘団

リーザス近辺で活動をする盗賊団。ランスとルークの活躍で壊滅した。

第5話 恐怖

・リーザス城下町　パリス学園・

「という訳で俺様たちはこれからリーザス城に入る。しっかりと調査を続けていろよ」

「はい、わかりましたランス様」

パリス学園の裏口でランスとシイルとルークの三人が落ち合っていた。お互いの情報の確認と今後の動き方を決めているところだ。

「しかし…まさかヒカリちゃんが初めてではないとはな…」

「そのようです。パリス学園ではこの4年間、毎年生徒が1人行方不明になっていました」

「学園の教師が怪しいな、その辺はしっかりと調べたのか？」

「はい、悪いとは思いましたが一応リーダーの魔法で心を読ませていただいたのですが…特にこれといって情報はありませんでした」

「深いところまで読み取れる魔法ではないからな…潔白と決まったわけではないが…」

「あ、一つ気になることがあります」

「なんだ？さつさと言え」

「生徒で一人だけ心を読めなかった女性がいるんです。恐らくシールドの魔法を掛けているのだと思います」

「普通のお嬢様生徒がか？用心のために親がやった可能性もあるが怪しいな。良い情報だぞ、シイルちゃん」

「えへへ…」

「よし、シイル。その生徒をマークしろ」

「わかりました。ランス様とルークさんもお気をつけて」

「ああ、ありがとう」

シルと別れ、二人はリーザス城へと向かった。

- リーザス城 -

ルークは驚いていた。ランスの強運にだ。門番に通行手形を見せると中に入れて貰えたので、まずは城に併設されているカジノに入ると、そこで「牢屋にどこから来たのかわからない女性が捕まっている」という情報を聞きだした。その情報を確かめるため、二人はリーザス城に潜入していた。どう牢屋に潜入したものかとルークが真剣に考えている横で、ランスはリーザス城のメイドたちを犯しているだけだった。が、その行動が全て良い方向に行くのだ。掃除をしているメイドを犯せば城の奥に入れるようになる鍵が手に入り、こっそりパンを盗んでいたメイドを犯せば牢屋の鍵が手に入るのだ。こいつは天から愛されている、と真面目に牢屋への潜入を考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。いや、だが牢屋の鍵を手に入れた方がいいが、牢番が必ずいるはず。見つければ潜入していることがバレてしまう…どうしたものか。

「何ぐずぐずしている。さっさと行くぞ」

「おい、間違いなく牢番に見つかるぞ。考えなしに突っ込むな！」

ランスは何も考えずに牢屋がある部屋の扉を開けてしまった。焦るルークだが、その目に入ってきたのは居眠りをしている女性牢番だった。

「なんか…どうでもよくなってきたな…」

「訳の分からんこと言っただけで行くぞ」

牢番の横を通り、鍵を使って牢を開けるとそこには一人の少女がいた。髪の色は青く、ヒカリではない。

「大丈夫か？君の名前は？」

「…ユキ・デルです…」

「なぜ牢獄に捕まっているんだ？何かしたのか？」

「…王女様に…無理矢理…」

「王女だと？王女が君をこんなところに入れたのか？」

「…すいません、忘れてください…そうでないと、また私…」

そう言っただけで黙り込んでしまうユキ。その瞳はすでに人生を諦めてしまっているように見えた。助け出してあげたいところだが、鎖につながれており簡単には連れ出せない。それに、ここで鎖を斬って助けてしまうと潜入がばれてしまい、今後動きにくくなってしまう。因みにランスが犯したメイドたちはなぜか二人とも報告する気はないようだった。納得がいかん。

「すまない…今の俺たちは君を助けることが出来ない。少しだけ待っていてくれ、必ず君を解放してみせる」

「がはははは、俺様に任せておけ！」

「…」

牢を後にする二人。部屋を出る直前、牢番が目を覚ましたようだが、「なんだあー…勝手に入ってきたや駄目にやんだじょー…」とか明らかに寝ぼけていたので無視した。

「まさか王女が誘拐に関わっているとはな…本格的にやばい案件だな」

「これでは20000GOLDでも割に合わんな。うむ、救出した

ら報酬を釣り上げよう」

「って言いながら部屋に勝手に入るな。誰かいたらどうするんだ！」

またもランスが勝手に行動してしまう。目の前の部屋の扉を勝手に開けてしまい、運の悪いことに部屋にいた女性に見つかってしまった。

「誰、健太郎くん？あれ、違う人みたい」

瞬間、ルークは全身の毛穴から汗が吹き出すのを感じた。そこにいたのはピンクの髪のおとなしそうな少女。どこからどう見ても普通の女の子で、ルーク自身なぜ彼女にここまでの畏怖を抱くのがわからなかった。しかし、確かに感じる。コイツは…やばい…

「じーっ」

「がはは、俺様がそんなに美男子だからって、そう見つめるな」

「健太郎君のほうがかっこいいもん。それで、おじさんたち誰？」

「おじっ…」

ランスはルークの異変に気づかず、普通に少女と話を続ける。

「がはは、君はかわいいな。とぉー」

「きゃっ！」

唐突にランスが少女のスカートをめくる。白いパンツがあらわになり、ランスはご満悦だ。少女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。

「えっちー！」

少女の叫びと同時に、ルークは頭に浮かんだのは死のイメージ。その直後、二人を突風が襲い、部屋の外に叩き出された。壁に打ち付けられる二人。特に大きなダメージはないが、突風が起こった理由がわからず、ランスが呆然としている。

「いててて、今のはいったい何だ？」

「ランス…行くぞ…彼女に、それ以上構うな…」

「おい、勝手に行こうとするな。ええい、こら、待て！」

ルークがこの場を立ち去ろうとすると、ランスは文句を言うが、さっきの突風が多少気に掛かってはいたのが、素直に後についてくる。

「（今は、少しでも早くあの少女から離れなければ…なんなんだ、アレは…）」

・リーザス城 カジノ・

「がはははは、赤の5番で大当たりだ！さあ、脱いで貰おうか、葉月ちゃん」

「あーん、おかあさーん」

がむしゃらにあの場を立ち去って、二人はカジノに来ていた。ランスはのんきに奥で脱衣ルーレットをやっている。エロい顔をした男どもがその様子を眺めていて、ちよつとした人ばかりが出来てしまっていた。

「（ふう…ようやく落ち着いたな…なんだったんだ、あれは…以前

にあの森で彼女の实力を見せて貰った時にもあんな恐怖は感じなかったぞ……」

ルークは心を落ち着けながら、かつての森での生活を思い出す。彼女は元気になっているだろうか……。すると、不意にカジノの店員が話しかけてきた。青い髪の美しい女性だ。

「お客様、先程から顔色が悪かったですが大丈夫ですか？」

「ああ、心配掛けてすまない。大丈夫だ……ん？失礼だがお名前を聞いても良いかな？」

「ふふ、新手のナンパですか？アキ・デルと言います」

「デル……やはりそうか。もしかして、ユキと言うのは君の近親者か何かな？」

「……！あなた、ユキ姉さんを知っているの？ユキ姉さんはどうなったの？」

「ああ。気持ちはわかるが、少し落ち着いて聞いてくれ。彼女は牢屋に捕まっていた」

「そう……まだ牢にいたのね……早く保釈金を稼いで助け出してあげないと……」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、アキは呟く。

「いったい何があつたんだ？彼女はなぜ捕まっている？」

「姉さんは何もしていないのに、王女様に反乱を企てたとして捕まってしまったの。姉さんが……姉さんがそんなことをするはずがない……！！」

彼女の悲痛な叫びを聞いて、ルークは一つの決意をする。アキは懷から石を取り出し、ルークに手渡す。

「もし…ユキ姉さんのもう一度会つのなら…これを渡していただけませんか？」

「これは？」

「私たちの家に代々伝わるやすらぎの石です。この石が…少しでも姉さんの心をやすらげてくれれば…」

「…任された。必ず姉さんに渡しておくよ」

「ありがとうございます。それと、これは少ないですお礼です」

アキはサイフからGOLDを出そうとするが、ルークはそれを制止する。

「それは貰えないな…それと、保釈金を稼ぐためとはいえ無理に働きすぎては駄目だよ」

「でも…少しでも早く姉さんを助け出してあげないと…」

そう言い残し去ろうとするルークに、アキは小さい声で反論する。それを聞いて、ルークは彼女に一度だけ振り返り、口を開く。

「大丈夫、姉さんはもうすぐ帰ってくるよ。約束する」

騒がしいカジノの中で、ルークのその力強い言葉が、アキの心に大きく響いた。

・リーザス城 客間・

その少女は椅子に腰掛け、足をぷらぷらとさせながら、愛しの彼がはんばーを買って戻ってくるのを待っていた。頭に浮かぶのは先ほどのおじさん二人組。スカートをめくられたのは口大きいお

じさんだった。彼女が今考えているのはその奥にいた黒髪の顔の整ったおじさんのほうであった。

「あのおじさん…初めて見る人だね。なんかいやな感じがしたな…。なんだろう?」

そう独りごちる。ルークほどではないが、彼女も何かを感じていたのだろう。

「んー、そろそろリーザスからも離れなきゃだめかな…。結構この国好きだったんだけどな…。健太郎君が戻ってきたら相談してみよつと」

そう自分の中で決意したところでお腹が鳴る。はんばーがーはまだかな、お腹すいたな、と悲しそうな顔をする彼女は、やはりどこからどう見ても普通の少女にしか見えない。彼女の名は来水美樹。しかし、彼女にはもう一つ名前がある。その名を…

「あーあ…魔王になんか…なりたくないのに…」

魔王リトルプリンセス

第5話 恐怖（後書き）

「人物」

来水美樹

LV 1 / ∞

技能 魔王LV1

現在の魔王。魔王名は「リトルプリンセス」。元々は異世界で暮らす中学二年生だったが、先代魔王ガイにこの世界に連れてこられ、魔王にされる。魔王になりたくない彼女は、追ってきた恋人の小川健太郎と共に、大陸中を逃げ回っている。

ユキ・デル

謀反の冤罪を掛けられ、投獄された女性。投獄前は妹と一緒にパン屋をやっていた。

アキ・デル

姉の保釈金を稼ぐためにカジノで働く女性。勝ち気な見た目とは裏腹に、姉思いの優しい女性。ランスクエストに出なくて泣いたのは筆者だけではないはず。デル姉妹大好きです。

甲州院葉月

リーザス城カジノ店員。脱衣ルーレット担当。的中率1/10で配当3・6倍。

お掃除メイド

リーザス城メイド。お掃除に情熱を掛けている。

パン盗みメイド

リーザス城メイド。手癖が悪く、常にパンを盗んでいる。お掃除

メイドと共に、ランスクエストにて22年ぶりの再登場を果たす。
CG出た瞬間に喚起でうおお！と叫んだのはきつと筆者だけ。

リーザス城門番

通行証をチェックする女の子門番。ちゃんと仕事しているほう。

リーザス城牢番

牢屋を見張る女の子兵士。仕事していないほう。牢番エ…

「技能」

魔王

魔王のみが保有する技能。二級神をも上回る力を手にする。

「アイテム」

やすらぎの石

持っている心がやすらぐ。没落貴族であるデル家に代々伝わる家宝。

「料理／食材」

はんばーがー

美樹が健太郎にパシらせていた料理。

第6話 トーナメント

・リーザス城 牢屋・

その女性は、城を出ることを既に諦めていた。身に覚えのない罪で投獄され、王女に汚されぬいた。余計なことをしゃべれば殺すとも言われた。その彼女の心を未だに繋ぎ止めていたものは、かわいい妹の存在であつた。アキに…出来ることならもう一度会いたい…ギイツ、と牢のドアが開く。ああ、また王女が来たのであろうか。そういえばさつきは見かけない男が二人ほど来ていたが、あれはなんだつたのだろうか。既に誰と話したのかさえおぼつかなくなつてきてしまっている。

「どなた…ですか…」

「ただの冒険者さ。妹のアキさんから頼まれたものを届けに来た」
「えっ…」

アキという言葉にぼやけていた意識を取り戻す。よく見れば、先ほども来た二人の冒険者がそこに立っていた。

「アキに…会つたんですか…」

「ああ、これが妹さんからの預かりものだ。受け取ってくれ」

ユキはやすらぎの石を受け取る。ぐちゃぐちゃに汚されていた心が、落ち着きを取り戻していく。涙が流れるのを止められない。

「アキ…ありがとう…」

ふと、冒険者が後ろにいたもう一人の男に声を掛ける。

「ランス…先に謝っておく…すまん」
「ん？」

言うやいなや、冒険者は持っていた剣を振り抜いた。ユキの足に繋がれていた鎖を叩き壊したのだ。

「えっ…どうして…」

「「ぱとらっしゅ」という酒場は分かるな？その親父に既に話を通してある。二、三日の間そこに隠れていてくれ」

突然の出来事に思考が追いつかない。この人は私を助けてくれたのか。なぜそんなことをする。それに、私が抜け出せば城は大騒ぎになる。

「大丈夫。大騒ぎにはならないし、すぐにまた妹さんとも暮らせるようになる」

「どうして…ですか…」

「すぐに…全てを終わらせるから」

そう言って優しく手を引いて立ち上がらせてくれる。まともに歩くのは久しぶりなため、足下がおぼつかない私を見て、そっと肩を貸してくれる。

「さあ、行こう」

「お名前…聞かせていただいてもいいですか…？」

「ルークだ。妹さんと仲良くな」

・リーザス城　コロシウム・

「悪かったな…これで今後は動きにくくなる」

「ん？ユキちゃんが助かったんだ、何も問題はあるまい。がはは」

そう言つて笑い飛ばすランス。器がかいな、とルークはランスを少し見直していた。同時にランスもルークの思わぬ熱い一面が見られ、少しルークの見方を変えていた。

「ああ、つまらないわ、みんな弱い人ばかりで！」

不意にそんな言葉が聞こえてきた。声のした方向を見ると、黄金の鎧をつけた女戦士がいた。

「最近の男はだらしないわね。闘つてもまるで張り合いがない」
「おい貴様、少しばかり生意気だぞ！俺様がお仕置きしてやろうか？」

女の発言に気を悪くしたランスは、怒り心頭で女戦士に突つかか
つていく。

「あら？あなたなら私に勝てるって言つたの？」

「その通りだ」

「自信満々なのね。それなら、このコロシウムで私と勝負しない？
あなたのその自信、打ち砕いてあげるわ」

「むかむか、いいだろう！ただし、俺様が勝つたらやらせてもら
うぞ！」

「私が負けるわけないけど、勝つたらね」

「よし、その身体もらった！」

「ふっ…戦いは明日のトーナメントで。しっかりと申し込んでおき

なさいよ。楽しみにしているわ」

「ふん、身体をきれいにして待っているんだな。そういえば貴様の名前は？」

「ユラン・ミラージュ、このコロシアムのチャンピオンさ！」

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「へー、それでランスさんは明日のトーナメントに出ることになったんですね」

「ああ、今受付に行っている」

ルークはパルプテックスと話しながら、酒を飲んでいる。トーナメントの申し込みに時間が掛かりそうだったので、ランスを置いて先に酒場に来ていたのだ。

「親父さん、悪かったな…無理を言って…」

「なーに、良いつて事よ！パン屋のユキちゃんを救ってくれたんだからな！二、三日と言わず一生住み着いてくれてもいいくらいだぜ」

「そうですよ、気になさらないでください。ユキさんは私の部屋で寝ています。よっぽど安心したんでしょうね。気持ち…少しですが分かりますし…」

この親娘は本当にいい人たちだ。言葉にするとまた何か言われてしまうので、心の中で感謝をしていると、申し込みを終えたランスがやってきた。

「がはははは、申し込み完了だ！これで明日の試合に参加できるぞ！」

「お疲れ様です。どうぞ、まずは一杯」

「おう、ありがとうなパルプテックスちゃん」

「ぽっ……」

もうこの状況になれてしまったルークは特に突っ込まず、酒の追加を親父さんに頼む。考えるのは明日、自分がどう動くかだ。ランスがトーナメントに出ている間、自分だけ何もしないわけにはいかない。しかし、城に潜り込むのはもう無理だろう。

「でも…ユランさんは強敵ですよ？大丈夫ですか？」

「そうだな、本人が望めばリーザス軍の副将くらいにだったら十分なれるって評判だしな」

「ふん、俺様の相手ではないわ」

「そうですね、ランスさんは無敵ですものね！」

「がはははは！！」

「あんまりつけあがらせないでくれ、足下救われるから……」

「ユランの必殺技は幻夢剣っていつてな、ありやすげー技だぜ。でも以前酒場で飲んでた奴が、ヒララレモンを鎧に塗っておけば滑って当たらないとか言っていたような」

「む、それは本当だろうな？親父、ヒララレモンをよこせ」

「相手ではないと言っておきながら万全を期す。戦士の鏡ですね、ランスさん！」

「もう勝手にやっててくれ……」

パルプテックスに煽られてどんちゃん騒ぎを始めたランスを見て、さすがにルークは呆れる。器がでかいんじゃないかって、何も考えてないんだな、多分。

「明日の試合に控えて早めに寝ておけよ。で、俺は明日もう一度城下町で聞き込みをしようと思っている」

「ん？何を訳の分からんことを言ってるんだ？」
「は？」

「明日はお前もトーナメントに参加だぞ。定員が32人で俺様が31人目だったから、気を利かせて申し込んでおいたぞ。感謝しろ」
「何勝手なことしてくれてんだ！！」

・深夜 リーザス城 とある部屋・

「…ユキの動向は？」

「…まだわかっていません」

「…あの牢番はクビにしておきなさい。ユキと侵入者を急いで捜すこと。いいわね」

「…はっ！」

「…ふふ、誰に喧嘩を売ったか教えてあげないとね」

・翌日 リーザス城 コロシウム・

「ふんっ！」

「なぜだ…なぜハニワ神は私を見捨て…ぐふっ」

「それまで！ルーク選手の勝利です。ハニーフラッシュの使い手であるおたま男選手を破り、堂々の準決勝進出です！」

司会者がそう言うのと観客席から歓声が沸く。これで準決勝へと駒を進めた選手は三人。ランス、ユラン、そしてルークだ。ルークは出場者用の観覧席に戻っていく。

「ふん、時間を掛けすぎだ！退屈でしかたなかったぞ」

「劳いの言葉くらいかけられんのか」

戻るやいなや文句を言ってくるランス。ランスは一回戦でサイボーグ戦士であるフブリ・松下を、二回戦でくぐつ伯爵を、そして先ほど巨人のこんごを破り一足先に準決勝行きを決めていた。

「その退屈はすぐに終わるさ。次は私とだからね」

「ふん、もうすぐ貴様は俺の女だ」

ユランが話しかけてくる。彼女も危なげなく準決勝行きを決め、次のランスの対戦相手だ。ルークは会場に視線を戻す。今は準々決勝最終試合の最中で、赤髪の男剣士と赤髪の男武闘家が闘っていた。

「次の俺の相手は武闘家かな」

「まあそうなるだろうね。あっちの若い坊やとはモノが違うよ」

そう話しているとほぼ同時に武闘家の拳が剣士の顎に入り、武闘家の勝利が決まった。

「それまで！アジマフ選手、惜しくもここで敗退です！遂に残すところはあと三戦、果たして誰が優勝という名誉とリーザス軍武将とのエキシビションマッチの権利を得るのでしょうか？司会は私、シユリ・セイハジユウ・ナガサキが引き続きお送りします」

会場がまたも沸き立つ。どうやら貰えるのは名誉と挑戦権だけで優勝賞品はないらしい。名誉や挑戦権などどうでもいいルークは先ほどまで棄権しようかとも思っていたのだが、今の武闘家を見て心変わりしていた。あいつと…手合わせしてみたいな、と。

「我らが偉大なチャンピオン、ユラン選手か？」

「あの巨人のこんご選手すらねじ伏せた剛剣の使い手、ランス選手か？」

「華麗な剣技でここまで無傷で勝ち上がってきた柔剣の使い手、ルーク選手か？」

「あるいは…」

司会者の女性が会場をさらに盛り上げる。それに呼応するように、会場は興奮のるつぼと化している。そのとき、先ほど勝ち上がった武闘家が部屋に戻ってきてルークと目が合う。挑発しているわけではないが、その目が互いに語っている。負ける気はないと。

「大陸を旅する武闘家、アレキサンダー選手か？準決勝、まもなく始まります！」

第6話 トーナメント（後書き）

「人物」

フブリ・松下

トーナメント出場者。身体全体の内、60パーセントが機械化しているサイボーグ戦士。

くぐつ伯爵

トーナメント出場者。脳をえぐるのが最高の楽しみという、恐ろしい男。

こんご

トーナメント出場者。トロール殺しの巨人で、身長は2メートル60。

おたま男

トーナメント出場者。なぜか人間なのにハニーフラッシュを使える。

アジマフ・ラキ（オリモブ）

トーナメント出場者。準々決勝でアレキサンダーに敗れた若き戦士。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

シュリ・セイハジュウ・ナガサキ（オリモブ）

コロシアムの受付兼司会者。大会と言えばこの人。年齢は不明。名前はアリスソフト作品の「闘神都市」シリーズより。

「技」

ハニーフラッシュ

使用者 ハニー族 おたま男

ハニー族が顔の穴から放つ衝撃波。 防御力無視、絶対命中という厄介な技。

「料理／食材」

ヒラレモン

柑橘系の果物。 別名ヒラミレモン。 日常的に料理によく使われるが、値段は高価。 一つ2000GOLDが相場。

第7話 惹かれあう強者たち

・リーザス城 コロシウム・

「はっ、想像以上だよ！私の剣をここまで防いだ男は初めてだ！」

「ふん、当然だ。ええい、俺様の攻撃を避けるんじゃない！」

「嫌なこつたね！」

舞台では準々決勝までとはレベルの違う攻防が繰り広げられていた。金属が衝突し、火花を散らす。ユランは絶え間なく攻撃を仕掛け、手数で多さでランスを圧倒する。一見、ユランが圧倒的優勢にも見える。我らがチャンピオンの優勢を感じ、観客たちは大いに盛り上がる。

「ユラン選手、攻め続ける！ランス選手もそれをギリギリで捌き、なんとか持ち答えています！この状況をどう見ますか？」

実況席のシュリが隣に解説にやってきていたリーザス兵に問いかける。彼が優勝した選手とエキシビジョンを行う予定の兵士だ。髪の色は金、美男子という言葉がピッタリなほど整った顔立ちをしている。

「そうですね…一見押しているのはユラン選手のようにも見えますが…優勢なのはランス選手の方ですね」

「えっ！主導権を握っているのはユラン選手のように見えますが？」

「確かに手数で押しているようにも見えますが、その実攻撃は全て防がれています。一撃たりともランス選手に届いていません。ユラン選手の素早い攻撃を見切る動体視力、そして攻撃の先読みをする

戦士としての勘。申し分ないですね。それに……」

解説の男が言いかけた瞬間、ランスが動く。ユランの連撃の中、一瞬の隙を見つけて剣を振り下ろす。不意を突かれた形になるユランだが、すんでのところで攻撃を躲し、バックステップで距離を置く。ランスの攻撃は地面に当たる。

「むかむか、避けるな卑怯者！」

「（ふざけるんじゃないよ、なんだこのでたらめな威力は）」

ユランが文句を言いたくなるのも無理はない。今の一撃で地面が大きく抉れているのだ。

「ご覧の通り、ランス選手の攻撃は剛剣。もし命中してしまえば、おそらく一撃でユラン選手はリングに倒れるでしょう。ユラン選手はいつ、どこからでも逆転負けの可能性がある。精神的にかなりの負担となりますね」

「なるほど……参考になります。手数 of ユラン選手か、一撃のランス選手か？どちらがこの勝負を制するのでしょうか！」

再びユランが連撃を仕掛け、それをランスが捌く形となる。が、どうしてもユランが攻めあぐねる。互いに決め手に欠ける状態が続く中、先に動いたのはユランであった。ランスの攻撃のパターンを読み取り、避けた直後に下がるのではなく前に出たのだ。

「おおっと、ユラン選手、あの剣の軌道は……！」

このコロシムに通うモノならば誰しもが知っている。チャンピオン、ユランの必殺剣。コロシムで多少強かった対戦相手も、全てこの剣の前に倒れてきた。剣の軌道が妖しくも美しく流れる。観

客も、そして目の前に対峙するランスも、その剣の軌道を目で追ってしまふ。

「（認めよう…あんたは私より強いよ…）」

この技にはユラン以外誰も知らない隠された効果がある。今まで放った相手は、そのほとんどが格下であったため知られずにいた効果。それは、自分よりも格上の相手に放った場合、その威力が増すのだ。それも、格段に。

「（だからこそ、あんたはこの技で敗れることになる！）」

・その軌道、正に夢幻の如し…・

「幻夢剣！！！」

一閃。流れるような動きをしていた剣が、恐るべき早さでランスの身体に迫る。ランスは反応できていない。その場にほとんどのモノがユランの勝ちを確信した。確信していなかったのは二人。ランスの目を見て、何かあると感じた解説の男と、種明かしを知っているルークだ。ユランの剣がランスの鎧に到達した瞬間、その軌道が曲がる。鎧が滑るのだ。

「なんだって！」

「がはははは、幻夢剣破れたり！」

そう、昨日「ぱとらっしゅ」の親父から聞いていた幻夢剣の破り方を実行したのだ。朝の内にパティという女の子が経営しているアイテム屋でヒラレモンを買い、この試合直前に鎧に塗りたくっていた。攻撃を食らえばユランにばれる可能性があったため、ここま

で必死に捌いてきたのだ。そして頃合いを見計らって若干の隙を見せる。ワンパターンな攻撃がそれだ。

「まさか…誘われたのか!？」

「がははは、気がつくのがちょっと遅かったな!」

ランスは剣を両手持ちし、頭上からがむしやらに振り下ろす。

「ランスアタアアック!!」

しかし、その軌道はユランではなく、その目の前の地面に振り下ろされる。地面には昨程までとは比べものにならない大きな穴が開く。まさか…外したのか、とユランは思うがそうではない。これはランスの情けか、はたまたこれから抱く女を傷つけたくなかったのか。直後ユランを衝撃波が襲う。とてつもない威力に鎧は崩れ、吹き飛ばされるユラン。発生源はランスアタックが振り下ろされた地面だ。

「（近くにいた衝撃だけでこの威力とは…直撃していたら今頃私は…）」

吹き飛ばされながらそんなことを考える。地面に叩きつけられ、目を開くと目の前に剣を向けるランスが立っていた。

「どうだ、俺様は強いだろう?」

「そうだね…幻夢剣を破る奴が、アリオス以外にもいるとはね…」

「ふっ、負けを認めるな?ユラン」

「ああ…あんたの勝ちだよ、ランス」

そうユランが宣言する。ユランが負けたことにショックを隠せな

い観客も多いが、目の前のこの凄い技を見せられれば納得するしかない。

「それまで！勝者、ランス選手！決勝進出決定です！」

うおおおお！大歓声が上がる。そんな中、少し違うことを考えている男がいた。ルークだ。

「（あの技…よく似ている…ふつ、考えすぎだな…）」

ランスとユランの試合から十分後、会場に開いた穴の整備などが終わり、準決勝二回戦の開始となる。ルークとアレキサンダーが会場に呼ばれる。

「さあ、興奮冷めやらぬ中二回戦です！ルーク選手とアレキサンダー選手、ランス選手への挑戦権を勝ち取るのはどっちだ！試合、開始です！！」

シュリが宣言するとお互いに構える。お互いに間合いを計った後、先に攻撃を仕掛けたのはアレキサンダーだ。

「この試合はどう見ますか？」

「そうですね…申し訳ないですが、相手にならないでしょうね」

「へ？」

予想外の返答に戸惑うシュリだが、ほぼ同時に歓声が沸く。見れば、状況は余りにも一方的。攻め立てているのはアレキサンダー。それをルークが紙一重で躲す。状況的には先ほどのランス対ユランとよく似ているが、ルークは剣で捌くのではなく、その体術だけで

全ての攻撃を躲しているのだ。それだけではない。アレキサンダーに少しでも隙があれば、拳や蹴りをカウンターで入れるのだ。これではどちらが格闘家なのか分かったものではない。

「ご覧の通り、現在立っているレベルが違いすぎます。アレキサンダー選手も素晴らしい才能の持ち主ですが、相手が悪すぎる」

「ではなぜすぐに決着を付けないのでしょうか？ ルーク選手は剣をほとんど使っていませんか？」

「分かりかねます。無駄にいたぶるような選手でもないと思うのですが…」

一番困惑していたのは解説や観客ではない。対戦相手のアレキサンダーだ。遊ばれている訳ではない。これでは稽古だ。それは、大陸を武者修行し、己の力にある程度の自信があつたアレキサンダーにとっては侮辱とも感じられていた。だがどうあがいてもその拳がルークに届かない。もどかしい思いを抱きながら、まだ仕留める気がないルークの戦い方を逆に利用させて貰う。修行中に編み出した渾身の一撃を何としても決めるのだ。

「ルーク選手…確かに…あなたは強い…」

「まあな、悪いがあんたとはレベルが違いすぎる」

「だが…こちらにも意地がある！」

空気が変わる。アレキサンダーの拳を闘気のようなものが覆う。

「全力の拳を叩き込んでこい！次は避けん！」

「！？…その油断が…命取りだ！！」

アレキサンダーが拳を放つ。アレキサンダーは特に技の名前などに拘る人物ではなく、その技を編み出した際、相手モンスターの装

甲ごと破壊したことから、単純にそう呼んでいる。

「この一撃がこの試合の分水嶺…装甲破壊パンチ!!」

その一撃をルークは剣で受ける。が、拳はルークの剣を叩き折り、その刃が宙を舞った。この拳、届いた…アレキサンダーの集中が一瞬切れる。だがルークは動揺することもなく、既に次の行動に移っていた。宙を舞う刃を左手で掴み、右手でアレキサンダーの顔面を掴み押し倒す。一瞬の間にルークがアレキサンダーの上に馬乗りになり、刃をその首に突きつけていた。その動きを目で追いきれなかった観客も、目の前の現状に息をのむ。既に決着が付いているであろう状況の中、アレキサンダーが口を開く。その瞳には涙。

「私は…私自身を許せない…」

「理由を…聞いても良いか？」

「拳が届いた瞬間…私の心は満ち、集中を欠いてしまった…武闘家としてあるまじき恥だ…」

「ああ…それがあんたの敗因だ」

「…まいった」

アレキサンダーのギブアップ宣言が会場に響き、静かになっていた観客も、熱気を取り戻し、歓声を上げる。

「それまで！勝者ルーク選手！決勝進出決定です！」

宣言されると同時にルークはアレキサンダーから離れ、控え室に引き返そうとするが、後ろから声を掛けられる。

「ルーク殿！もしまた…どこかで巡り会ったら…手合わせしていただけませんか！」

「いいぜ。その腕、鍛え上げておけ、アレキサンダー」

そう背中越しに返事をし、奥へと下がっていく。アレキサンダーは自らの拳を見つめ、決意をする。

「（また一から鍛え直しだな…）」

帰りながらルークは先ほどの戦い方に自ら苦笑する。あのような相手を侮辱するような戦い方は本意ではなかった。しかし、せっかく見つけたダイヤの原石。あの程度の実力で満足してしまつては困るのだ。強者を多くしておく必要がある…後に控える、人類の存亡を掛けた大戦のために…

二十分のインターバルを置き、遂に決勝の幕が上がる。観客のボルテージは最高潮だ。

「皆様、大変長らくお待たせしました。いよいよ決勝戦です！果たして栄冠を手にするのはどちらなのか？それでは、ランス選手、ルーク選手、入場してください！」

うおおおおっ！と観客席から地鳴りのような歓声が沸く。が、なぜか二人とも出てこない。観客席からだんだんと不安そうな声がかかる。シュリも二人が出ないことに戸惑っていると、控え室整備の女性従業員パニイが慌てた様子で掛けてくる。

「た、大変ですシュリさん。部屋にこんな置き手紙が…」

「置き手紙？一体何が…」

シュリが手紙に目を通すと恐ろしいことが書いてあった。

・ユランちゃんと一発やってくるので棄権するぞ　がはは　byラ
ンス様・

・涼しい顔装っていたけど正直剣が折れると思わなかった　戦えま
せん　byルーク・

「これを…発表しろと言うのですか…」

「でも…いつまでもお客様を待たせるわけにも…」

絶望の表情に変わる二人。いつ決勝が始まるんだとヤジが飛び交
う。

「…エキシビションが中止になったことを、あの方にもお伝えしな
ければいけないのでここはまかせます！」

「そ、そんな！ずるいですよ、シュリさん！」

「大丈夫、パニイさん、あなたならやれるわ！じゃあ、頑張っ
て！」

「ま、待つてくださああい」

・リーザス城　コロシウム　VIPルーム・

「というわけで、エキシビションが中止になってしまったんです。
無理を言って解説とエキシビションを引き受けていただいたのに、
本当に申し訳ありません」

「いえ、いいんですよ。しかしお二人ともいなくなってしまうとは
…少し残念ですね…」

シュリから報告を受け、先ほどまで共に解説をしていた男はエキ

シビションは残念そうに口を開く。既にエキシビションに備えて甲冑に身を包んでいるところだった。その整った顔は「忠」の文字が入ったヘルメットに隠されていた。

「残念？リック將軍はあの二人と闘いたかったんですか？」

男の名はリック・アディスン。リーザス赤の軍の將軍にして、世界にその名が知れ渡っているリーザス最強の戦士。

「ええ…ですが、いずれまた会う機会もあるでしょう」

「え？それはどうしてでしょうか？」

「あれ程の強者です。いずれ、どこかの戦場で出会いますよ…必ず」

それは同じ強者であるからこそその勘であろうか。まだ誰も知り得ぬ事ではあるが、リックの予想は見事に的中する。これより約八ヶ月後、ランス、ルーク、リックの三人は、肩を並べ、このリーザスで魔人と死闘を繰り広げることになる。

「お客様、物を…物を投げないでくださああああい」

哀れ、パニーさん。

第7話 惹かれあう強者たち（後書き）

「人物」

リック・アデイスン

LV 38 / 70

技能 剣戦闘LV2

リーザス赤の軍將軍。將軍就任の最年少記録を更新し、就任一年目でヘルマン一個軍をたった一人で撤退させるという活躍を見せ、他国からは「リーザスの赤い死神」の異名で恐れられている。人類最強クラスの剣士。

ユラン・ミラージュ

LV 14 / 27

技能 剣戦闘LV2

コロシアムのチャンピオン。軍には所属していないが、その实力は本物である。これより数ヶ月ほど前、勇者アリオス・テオマンと共にとある奴隷商人を壊滅させている。

アレキサンダー

LV 12 / 77

技能 格闘LV2

修行のため世界を回る武闘家。非凡な才能を持ち合わせており、鍛え上げれば人類最強クラスにもなり得る人物である。ルークに敗れ、一から鍛え直すことを誓う。彼も間違いなく強者、いずれまた巡り会うだろう。

パティ

リーザス城下町のアイテム屋「ちゃん」で働いている女の子。一年中下着姿。

夢色・パニイ（オリモブ）

コロシアムの整備員。不憫。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

「技」

ランスアタック

使用者 ランス

ランスの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす。直撃すればもちろんのこと、周りに発生する衝撃波を食らっても大ダメージを受ける。

幻夢剣

使用者 ユラン・ミラージュ

ユランの必殺技。集中力を必要とするため、連発することは出来ないが、軌道が読みにくく、躲すことは困難である。また、格上相手には威力が2倍以上になる。ヒラレモンの汁で滑るという弱点を持つ。

装甲破壊パンチ

使用者 アレキサンダー

アレキサンダーの必殺技。拳を闘気で覆い、渾身の力で相手に放つ。その威力は相手の装甲ごと身体を破壊する程である。

第8話 牽制

・リーザス城 コロシラム外・

「で、ユランとお楽しみで俺の試合は見ていなかったと」

「がはは、当然だ。誰が男同士のむさくるしい試合など見ていられるか。抱いてるときのユランちゃんはかわいかったぞ。普段とギャップがあつてだな……」

「聞く気はない。興味もない。」

「何だ、インポか？男として終わっているな、がはは」

「違うわ！」

決勝戦をバツくれたルークは会場を出たところでランスと落ち合った。あちらも調度ユランとの情事を済ませたところだったらしい。今後の方針を話し合うため、酒場に向かおうとしていた二人に後ろから声が掛かる。

「すみません。少しお時間をいただけますか？」

振り返り、声を掛けてきた女性を見る。白い薄手のローブを身につけた美しい緑髪の女性。高級そうな服装を見るに、王宮関係者であるうか。

「お、美人ではないか」

「私は、王女様の侍女をしているマリスといいます。先ほどのトーナメント、たいへん見事な腕前でした」

「で、その侍女さんが俺たちに何のようだ？」

「王女様が貴方様方のお力をぜひお借りしたいと言われておられます」

なんという幸運。王女の調査が困難になってしまったと思っていた矢先に、あちらの方からわざわざ近づいてきてくれるとは。切っ掛けはランスが勝手に申し込んだトーナメントということを考えると、やはりこの男、天に愛されている。

「王女様と言うからには美女なんだろうな？」

「それはもう。あれ程の美しさを兼ね備えた方を私は知りません」

「がはははは、では話を聞こう」

「そうだな、こちらにも異存はない」

「それでは案内させて頂きます。私に付いてきてください」

・リーザス城　王女の間・

「はじめまして。冒険者の方なのでご存じないかもしれませんが、私はこの国の王女、リア・パラパラ・リーザスと言います」

そう言っただけで挨拶をしてきたのは優しそうな女性。とてもユキを冤罪で投獄したり、誘拐に関わっているような人物には見えない。

「お初お目に掛かる。私はギルドに所属している冒険者で、名をルークと申します」

「そして俺様が英雄ランス様だ！王女様は可憐だな、100点だ！」

王女様相手にとんでもない挨拶をかますランスだが、それを笑顔で許容する王女。侍女のマリスは無表情で王女の後ろに控えている。

「あなたたちの強さを見込んで一つ頼みがあります。私の大事な魅

力の指輪が妃円屋敷の悪霊に奪われてしまったのです。あなたたちには、その屋敷に行つて悪霊を退治し、指輪を取り返して貰いたいのです」

「王宮の兵士ではなく、なぜ私たちに？」

「それは、この頼みは私の個人的な理由からなるものであるため、王宮の兵士を動かすことは出来ないのです」

「なるほど、そこで強くてかつこいい俺様他一名に頼みに来たわけだな！見返りは？なんなら王女様の処じ「何がいただけるのでしょうか？」」

不敬罪で首が飛びかねない発言をしようとしたランスの言葉を遮り、ルークが聞き返す。ふ、と場の空気が変わった。緊迫感が増す。

「…あなたたちは、ヒカリつて娘を捜しているのでしょうか？その娘に関する情報を提供しましょう」

「…どうして私たちがヒカリという娘を捜していると知っているのでしょうか？」

確かにルークはリーザ城下町で聞き込みを一週間ほど続けた。しかしそこはルークもプロ。足の付くような聞き込みはしていない。ルークの問いに、これまで無言で後ろに控えていたマリスが薄く目を開け、静かに答える。

「…我が国の情報網は完璧です」

「…なるほど、大した情報網だ。忍者でも雇っているのでしょうかね？」

「さて…そのような存在が、大陸にいるのでしょうかね…？」

牽制しあうルークとマリス。一瞬の静寂が訪れるが、ランスがそれをすぐに破る。

「わかった、引き受けよう。ヒカリの情報は頼んだぞ」

「ありがとうございます。妃円屋敷の鍵は情報屋の娘が持っていますので、屋敷に行く前に受け取ってってください」

「了解しました。それではこれで失礼させていただきます」

一礼をし、ランスは先に部屋を後にする。続いてルークも部屋から出ようとするが、後ろから王女が問いかけてきた。

「それと…ユキ、という娘の居所をご存じありませんか？」

「…はて、そんなことは冒険者風情ではなく、後ろの侍女に聞いた方がよいのではないでしょうか？この国の情報網は完璧のようですからね」

ルークの挑発にマリスは表情一つ変えず、リアは妖しく微笑む。誘拐に関わっている人物に見えないと思ったが、前言撤回だ。間違いない、こいつらが犯人だ。

- リーザス城下町 情報屋 -

ひとまずランスとルークは二手に分かれた。ルークは情報屋で鍵を買い、ランスは折れてしまったルークの剣を買いに行き、妃円屋敷の前で落ち合う手はずとなっている。パシリのような仕事にランスは難色を示したが、600 GOLD手渡し、余った金で好きなものを買っていいと言ったら喜んで武器屋に向かった。武器を自分が買い、ランスに鍵を取りに来させるのが本来望ましい行動だろうが、ルークが情報屋に来たのは訳があった。彼女をランスに会わせるのは危険だ。情報収集をしている際に出会ったその女性は、とても美

しかった。が、他人に心を開かない。理由はその足にある。ほとんど動かすことが出来ず、車いすでの生活を余儀なくされている。そんな彼女とランスを会わせるのは、ライオンの檻に野ウサギを入れるようなものだ。

「あ…いらつしゃい、ルークさん…」

彼女の名前は朝狗羅由真。ルークが初めてこの情報屋を訪れた際、彼女は心ない冒険者に暴行される直前にあった。ルークはその冒険者をその場で斬り捨て、由真を救っていた。そのこともあり、彼女はルークにだけは若干心を開いていた。

「事情は分かっています。こちらが鍵です」

「流石は優秀な情報屋、耳が早いな」

「いえ…私をもっと早く気がついていれば…お気づきかもしれませんが、事件の犯人は…」

「待った。それ以上はいけない。どこで聞かれているか分からないからね」

言いかける由真をルークは制止する。敵は強大、彼女を巻き込むわけにはいかない。

「…お気遣いありがとうございます…お気を付けて」

「ああ、ありがとう。事件が終わったら、また寄らせて貰うよ」

情報屋を出たルークはついでに正面のレベル屋に足を運ぶ。

「ようこそレベル屋へ。儀式を行わせて貰います」

「ああ、よろしく頼む」

水晶玉に電流が走り、レベルアップの儀式が行われる。彼女の名前はウィリス。優秀なレベル屋で、今度レベル神への昇進試験を受けるらしい。因みに彼氏持ちである。

「駄目ですね、経験値が不足しています」

「そうか、手間を掛けた」

「ルークさんは既にかなりのレベルですからね。これだけ高い人は滅多にいないですよ」

「ありがとう、それでは邪魔をした」

「あ、ルークさん。今つて外は晴れていますか？」

「ん？快晴だが、どうかしたのか？」

「今日この後彼とデートなんですー」

職務中だぞ、この野郎。お幸せに。

- リーザス城下町 妃円屋敷 -

「遅かったな」

約束の時間よりかなり遅れてランスがやってきた。武器屋方面には特にこれと言って足止めを食いそうな施設はなかったはずだが。

「がはは、武器屋のミリちゃん一発やってきたからな」

「人を待たせて置いて…まあ予想通りだが…」

やはり情報屋に向かわせなくてよかった。ますます由真が人間不信になってしまう。

「とりあえず買ってきた剣を渡してくれ。流石に丸腰では、悪霊がいるらしいこの屋敷では危ないんでな」

「ほれ」

ランスが買ってきた剣をルークに手渡す。ルークは受け取るが、その刀身に違和感を覚える。刃がぶるぶると震えている変わった剣。こんなもので敵が斬れるのだろうか。

「ランス…俺の記憶が正しければ、これはあの店で一番安い剣じゃないか？」

ここでルークはランスの装備が大きく変わっていることに気がつく。どれも一流の冒険者が身につけるような良質の装備である。

「さすがリーザス、中々に良い武器を売っているな。その剣とこの一式でぴったり600GOLDだったぞ。がはは」

「金返せ、この野郎っ!!」

「馬鹿言っつな！貴様のものは俺様のもの、俺様のものも当然俺様のものだ!!!」

口喧嘩をしながら妃円屋敷へ入る二人。すると、今入ってきた扉が勝手に閉まり、どこからともなく悲しげな女性の声が響く。

「…ようこそ妃円屋敷へ。貴方もあの王女の部下かしら…？」

なるほど、これが悪霊か。一筋縄ではいきそうにないな。

第8話 牽制（後書き）

「人物」

リア・パラパラ・リーザス

LV 3 / 20

技能 なし

リーザス国王女。美しい容姿の裏に影を持つ。政治家としても非常に優秀であり、野心家で、既に実の両親である現国王と女王を隠居させる計画も密かに進めている。生まれてこの方人に怒られたことがない温室育ち。誘拐事件の犯人最有力候補。というか間違いない犯人。

マリス・アマリス

LV 25 / 67

技能 魔法 LV2 剣闘 LV1

リーザス国筆頭侍女。事実上リーザスの政治を司っているとさえ言われる影の実力者。戦闘能力も非常に高く、その才能はリーザス最強剣士リックに次ぐが、自ら前線に立つことはほとんどなく、常にリアの側を離れないようにしている。リアを溺愛。

ウリス

リーザス城下町のレベル屋で働く女性。年下の彼氏とはラブラブ。本編では1の時点では名無しの女性であった。その後、現在までに6作品に登場。大出世である。

ミリー・リンクル

リーザス城下町の武器屋「PONN」の女性店員。自殺願望あり。

朝狗羅由真（オリモブ）

リーザス城下町の情報屋「NET」のオペレーター。コンピューターを使う優秀な情報屋であり、本編では名無しの女性。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。情報戦といえば彼女。

「装備品」

えくすかりば

ランスが購入。伝説の聖なる剣の量産品。200GOLD。

ごっずアーマ

ランスが購入。特殊な金属で作られた高級な鎧。200GOLD。

めでうさの盾

ランスが購入。鏡で出来た優秀な盾。180GOLD。

ぶるぶるの剣

ルークが購入（不本意）。ぶるぶる震えて敵に打撃を与える剣。20GOLD。これでピッタリ600GOLD。因みに本編でも本当にこの値段である。

「アイテム」

魅力の指輪

リアの私物。その名前から魅力が上がると思われるが、多分ただの指輪。

第9話 妃円屋敷の幽霊

・リーザス城下町 妃円屋敷・

「とりあえず二手に分かれて探索しよう」

そうランスに提案するルーク。中々に広い屋敷、わざわざ男二人肩寄せ合って一緒に探索する理由はない。

「うむ、しっかり働けよ」

「何いきなりロビーの椅子に腰掛けてるんだ！そっちも捜すんだよ！」

洪るランスを無理矢理立たせて西にある広間や倉庫の探索に向かわせる。ルークは東にある食堂や厨房、応接間を担当する。厨房を調べているとき、一つのメモ帳を見つけた。悪霊が住み着く前、ここに勤めていた料理人が書いたものらしい。パラパラと中身を確認していくと、気になる一文を発見した。

・王女様のお食事の注意・

「この屋敷には王女が住んでいた…？」

ガタツ、と後ろから物音がし、振り返ると四匹のさけび男がこちらに迫ってきていた。ルークは目の前まで来ていた一匹に斬りつけるが、一撃で倒せない。相手が霊体系のモンスターで物理攻撃が効きにくいというのもあるが、やはり剣が悪い。厨房は狭く、戦い辛かったため、隣の応接間までひとまず移動する。部屋に入った瞬間、暖炉の奥の光る何かが目に入る。どうやら剣のようだ。手に取ろう

としたところに二匹目のさけび男が迫ってきたため、その剣で振り抜くと、さけび男が真つ二つになり消滅した。

「この剣は… 火事場泥棒みたいで申し訳ないが、使わせて貰おう」

残りの二匹も一撃の下に粉碎する。中々の業物。誰も住んでいない幽霊屋敷に置いておくのは勿体ないおぼけが出てしまうと考えたルークは、とりあえず頂いておくことにする。冒険者とはこんなものだ。暖炉の奥には代わりにぶるぶるの剣を備えておく。

「何か手がかりはあったか？ む、なんだその剣は？ 俺様に寄越せ！」
「俺の金で新しい剣買ったばかりだろうが！」

ロビーに戻ると西の探索を終えたランスがいた。いきなりたかられるルーク。

「そうだな… この屋敷に王女が住んでいた可能性が高いということくらいだな」

「ふん、使えんな。俺様は倉庫で変な映像を見たぞ。いきなり突風が吹いて、目を開けたら女の子が三角木馬に乗せられて拷問を受けていた。話しかけたらすぐに消えてしまったがな」

「拷問を受けていた女の子… この屋敷の幽霊と関係がありそうだな」
「それとこんなものも見つけたぞ」

ランスが手に持っていたのは、日記帳であった。ルークはそれを受け取り、ページを開く。日記の最後のページには、美しい字体でこう書かれていた。

「また今夜も地獄の時間が始まる。何度死のうと思ったかわからない。でも… 夜9時から11時までの間、この時間が私の地獄の時間」

「これを読んで俺様はこの屋敷の謎に気がついてしまった！どうだ、分かるか？」

「はて…特に新しい情報はない気がするが？」

「ふっ…これが英雄と凡人の差だな。あれを見ろ！」

ランスが指指した先には壊れた柱時計が置いてあった。その時間は10時25分で止まっている。

「この屋敷の時計は10時25分で止まっている。このせいで彼女は死んでも拷問から抜けられないのだろう。つまり、あの時計の時間をずらせば、悪霊はきれいさっぱり消えるというわけだ。がはは！」

「そんな単純な…別にこの屋敷の時計があれ一つという訳でもあるまいに」

「言ったな！ではあの時計で解決したら報酬の分け前は8：2だぞ！」

「関係なかったら6：4な。やれやれ」

呆れるルークをよそに、ランスは時計の時間を12時25分にずらす。何も起こる訳が…と思った矢先、屋敷を覆っていた邪悪な気配がきれいさっぱり消えてしまった。更には奥の厨房の方から大きな音がする。

「なん…だと…」

「がはははは、16000GOLDゲットだ！」

ランスは意気揚々と、ルークはショックを隠しきれない様子で音のした厨房に向かう。すると、地下室への階段が新しく出来ていた。

「おやおや、厨房を散策していながらこんなものも見つけられなか

った冒険者がいるのだな。情けない奴だ、顔を見てみたい。これは分け前が9：1まで有り得るな」

もはやぐうの音も出ない。正反対のテンションで二人は階段を下りていくと、部屋の中央には悲しげな顔で少女が立っていた。その身体は青みがかって若干透けている。

「おお、あの娘だ！さっき俺様が見た拷問を受けていた娘だ」

「彼女がこの屋敷の幽霊か」

「ありがとうございます…あなたたちのお陰で私は地獄の時間から解放されました」

「聞いたか？やはり時間だ、がはは！それじゃあ魅力の指輪を返してくれるか？」

勝ち誇るランスがそう言うのと、彼女の周りの光が一瞬暗くなり、彼女は黙り込んだ。

「あの指輪だけは返すことは出来ません」

「なぜ？」

「それは…」

「君を死に追いやったのが…その持ち主だからか？」

ルークの問いに静かに頷き、自分の身に起こったことを語り始める。

「私の名前はラベンダー、パリス学園の生徒です。私がパリス学園に入学したのは二年前でした。そのときの私は、あの学校の真の姿を知りませんでした。学園長のミンミン先生から優秀生徒に任命されてから一週間後、眠り薬を飲まされて…」

「やはり学園もグル…か…」

「気がつくとも王女様の目の前にいました。王女様は私をペットにすると言って…それからこの屋敷に隔離されて毎日、毎日…」

「この地下室で拷問を受けていたわけだな」

「あの王女様は残忍です。私の前にペットにしていたメイドの女性は、狂い死んでしまったから残念だったと、笑いながら話していました。私に残されたのは、自分から命を絶つことだけでした…」

「それでせめてもの復讐に指輪を奪ったというわけだな」

「はい…王女様が憎い…」

小さな唇を噛みしめながら彼女は言った。その目には涙が浮かぶ。

「こうしている間にも、また他の女の子が王女様の餌食になっていると思います」

「それが…ヒカリちゃんか…」

「わかった。俺様が王女を懲らしめてあげよう。それで、君は安心できるかい」

「！?…ありがとう！」

ランスは彼女に抱きつかれる。ランスの腕に、無いはずの質量が少しだけ伝わってくる。彼女はランスの胸で泣きじゃくった。それを静かに見守るルーク。

「絶対に王女様を止めてくださいね。そうしてくれなかったら、化けて出ちゃうから」

「任せろ。まあラベンダーちゃんみたいなかわいい子だったら、化けて出てくれて構わんな。がはは！」

悪戯っぽく言う彼女に対し、ランスが笑いながらそう返すと、彼女は微笑みながら、その身体を少しずつ消していった。どうやら成仏したらしい。後には、彼女が王女から盗んだ魅力の指輪が床に落

ちているだけであつた。ランスはそれを拾い、懐へとしまう。

「随分と無茶な約束をしたな。王女を懲らしめるとは…大国リーザスを敵に回すつもりか？」

「ふん、関係ないな。悪い娘はお仕置きしてやるのがいい男の勤めだ」

「ただではすまんぞ？」

「ユキちゃんを牢から逃がした奴が何を言ってるんだかな」

ランスはルークを見る。知らないものが見れば、ランスの顔はいつも通りの笑い顔であつた。ただろつが、ルークの見解は違う。ランスは今、戦士の顔つきになっていた。

「ルーク、とつくにお前もリーザスを敵に回す覚悟は出来ているんだろう？」

「当然だ。あの王女、野放しには出来ん」

ランスが初めてルークの名前を呼ぶ。それに気がついていたかは定かではないが、ルークも戦士の顔つきになり、ランスに笑い返す。二人は肩を並べて、屋敷から出て行った。

・リーザス城下町　パリス学園・

「シイルさん、少し話があるのだけど、ちょっといいかしら？」

シイルにクラスメイトのセラが話しかけてきた。以前ランスに報告していた、思考をシールドの魔法でガードし、考えを読み取ることが出来なかつた生徒だ。要注意人物としてマークしていたが、特

に怪しいそぶりは見せておらず、心配のしすぎかとシイルは思い始めているところであった。

「はい、なんでしょうか？」

シイルが振り向いた瞬間、腹部に衝撃が走る。

「えっ…？」

「おやすみ、シイルさん」

倒れていくシイル。だんだんと意識が遠のいていった。

「（ランスさ…ま…）」

それを抱き留めるセラ。彼女の正体は、リア王女の侍女、マリスであった。

第9話 妃円屋敷の幽霊（後書き）

「人物」

ラベンダー

妃円屋敷に出没する幽霊。かつてリア王女に度重なる拷問を受け、自ら命を絶った少女。ランスの腕の中で成仏する。

ラベンダーの前任のメイド（半オリモブ）

ラベンダーの前に拷問を受けて死んだ少女。彼女もこれより数年後、リーザス城に悪霊として出没するようになる。自分の拷問の姿を見せて兵士を怖がらせようとするが、Hな映像であるため男性兵士を喜ばせているだけである。出番はランスクエスト本編で。地下で拷問を受けていたと書いてあったから、おそらく妃円屋敷の被害者。

セラ

パリス学園に通う生徒。その正体はマリス・アマリリス23才。色々な意味で恐ろしい変装である。学園の生徒はきつと見て見ぬふりをしてくれていたのだろう。

「モンスター」

さけび男

アンデッド系。赤いもやが集まって出来たような顔だけのモンスター。物理攻撃が効きづらく、EXPを奪うというような嫌らしい攻撃も仕掛けてくる。

「技」

シールド

リーダーから思考を守る初級魔法。ある程度の魔法使いなら用心のために極力掛けるようにしておく。

「装備品」

妃円の剣

妃円屋敷に隠されていた業物の剣。盾と鎧も存在するが、二人は発見できなかった。

第10話 ここより変わるリーザスの物語

・リーザス城 城門前・

ランスが城門前までやってくる。門番に通行手形を見せて城の中に入ろうとすると、マリスが門から出てきてランスを出迎える。

「ランス様、指輪は手に入れられたみたいですね」

「耳が早いな。手に入れたのはついさっきだぞ」

「リーザスの情報網は完璧ですから。さあ、どうぞこちらへ」

「うむ、案内を頼む」

そう言つて案内をしようとするマリスだが、その歩みを止める。

「ところで…ルーク様はどちらへ？」

「指輪を手に入れたのは知っているのに、それは知らんのだな。少し寄るところがあるから、先に俺様だけやってきたのだ」

そう、今この場にいるのはランスのみで、ルークの姿はない。ランスが説明をするとマリスは納得したようで、王女の間へ案内するため、再びランスの少し前を歩き始めた。後に付いていくランスだが、ふと違和感を覚える。

「おかしいな…来るのは二回目だが、こんな道だったか？」

「王女様の部屋までは特殊な結界が張ってあって、私の案内無しでは何者も侵入できません」

「戦士ランス様、無事に悪霊から魅力の指輪を奪い返していただけましたか？」

部屋に到着したランスに、王女はそう話しかけてきた。マリスは既に王女の後ろに控えている。ランスは先ほど拾った指輪を懐から取り出す。

「これの事か？」

「本当に取り返してくれたのですね。ではその指輪をこちらに……」

「その前に聞いておきたいことがある。屋敷にいた幽霊は、ラベンダーという美少女だった。知っているか？」

言いかけた王女の言葉をランスが遮る。王女は困惑の表情を見せて黙り込んだが、すぐに元の笑顔に戻っていった。

「知りませんわ」

「ふん、まあいい。で、ヒカリちゃんの情報はどうなった？」

「そうでした……マリス、ヒカリをここに」

王女が指示すると、マリスは一度カーテンの後ろに下がる。しばらくの後、カーテンの奥から再び姿を現すと、その横には両手を縛られた少女を連れていた。写真で見ていた少女で間違いない、彼女がヒカリだ。

「ランス様、これがあなたたちお探しのヒカリ嬢ね？」

「ふん、やはりそう言う事か。ラベンダーちゃんの話は正しかったようだな。この変態レス王女め」

ランスがそう言うと、静かに控えていたマリスがカツと目を開き、

声を荒げる。

「口を慎みなさい！リア王女に対し、何という事を！」

「残念だけどヒカリは私のかわいいペット。返すことはできないわ。知りすぎてしまったあなたたちもね…もう一人はこの場にいないみたいけど、どうせ後からのこのことやってくることでしょう。そのときはマリス、ここまで案内して差し上げなさい。目の前でゆっくりといたぶってあげるわ」

そう言い放つ王女。それに対し、素直に返答するマリス。国の上層部にいるものは、得てしてこのような歪みを持ち合わせているものである。それは、リーザスと並び立つ二つの大国、魔法大国ゼスと軍事大国ヘルマンにも言えることである。その歪みがランスとルークの前に立ちはだかるのはもう少し先の話となる。

「がはは、本性を見せたな。ならば力づくで返して貰うまでだ。ついでにレズ王女様にもお仕置きだ！」

王女に飛びかかるうとするランスだが、急に後ろに気配を感じた。振り返ろうとしたランスの首に、細いひものようなものが巻き付く。

「なに！」

後ろから現れた黒装束の娘は、ランスの首に絡ませたひもを締め上げる。もがくランスだが、ひもは外れない。このままでは窒息死してしまう。

「お前は…あのときの公園の…（うぐっ…やばい、このままでは…）」

以前に公園でサイフを盗もうとした女忍者であると気がつく。そうこうしている間に紐は食い込みを増し、ランスの顔がだんだんと青ざめてくる。ランスの意識が無くなりかけてきたそのとき、聞き慣れた声が部屋に響いた。

「マジックミサイル!!」

部屋の外から炎の塊が飛んできて、ランスの首を絞めていた女忍者を吹き飛ばし、ランスの首のひもが緩む。間一髪で事なきを得たランス。

「ランス様！大丈夫ですか！？いたいいたいなの、とんでけーっ！」

シイルがランスに駆け寄り、ヒーリングの呪文を唱えると、ランスの首に出来ていたアザが消え、息苦しさがなくなっていく。

「げほっげほっ、助けに来るならもっと早く来い、バカ」

「なぜこの娘がここに！？隣の部屋に縛っていたはず！」

そう、シイルは王女の次のペット候補兼、いざというときの人質として捕らえられていたのだ。そのシイルがなぜここに…困惑するマリス。

「理由は簡単。俺が助け出したただけだ」

シイルの後ろから声がする。この場にいなかったもう一人の戦士、ルークだ。

「なぜあなたがここに…」

「以前シイルちゃんが優秀生徒になったと聞いていたのを思い出し

てな。ラベンダーも任命された後に誘拐されたと言っていたから様子を見に行ってみれば、既に誘拐された後。流石に焦ったぞ。まあミンミン学園長を拷問したら、あんたが連れて行ったことをすぐに白状したかな。それでこうして助けに来たわけだ。わかったかい？完璧な情報網を持つリーザスの侍女さん」

「あの学園長…処刑ね」

王女が冷たく言い放つ。後ろに控えていたマリスは、今は王女を守るように前に立ち、ルークに対し、再び問う。

「なるほど…ですが一番聞きたいのはそこではありません。なぜ結界を突破できたのですか！？あなたは魔法使いではないでしょうに！」

なるほど、とルークはマリスの疑問に頷く。確かに普通の戦士であつたなら、あの高度な結界を突破することは不可能だっただろう。しかし、今この場にいる男は…

「誤算だつたな。あの程度の結界、俺には何の意味も持たんぞ」
「くっ…」

結局なぜ結界が破れたのかは分からないマリスだが、現実問題としてルークが今ここにいる。状況の悪さから、額に汗が流れる。その状況を察してか、女忍者がルークとランスの前に立ちふさがる。

「リア様、マリス様、ここはお任せを」

その言葉を受け、王女とマリスは部屋の奥に下がり床を持ち上げる。そこには逃亡用の隠し階段があつた。地下へと逃げる二人。

「シル、あそこで倒れているヒカリちゃんの治療をしておけ。ルーク、この場は任せた。俺様は王女を追う。あの王女に説教してやらんとな！」

真面目な顔つきで指示を出すランス。その表情はお仕置きと称して飛びかかろうとしていたときの顔とは違う。その顔を見てルークはそれに答える。

「了解だ。あの王女に世間の厳しさを教えてやれ！」
「簡単に行かせると思わないですよ！」

ランスに対して手裏剣を投げつける女忍者。が、一瞬でランスと女忍者の間に割り込んだルークに、全てはたき落とされる。

「行け！ランス！」
「がはは、俺様に任せておけ！」

そう言い、王女たちを追って地下への階段を下りていくランス。それを追おうとする女忍者だが、ルークに阻まれる。先ほどまでと立場が逆転した。

「さて…ランスが王女の説教係なら、俺はあんたに説教することに
するかな」

「説教ですって！？ふざけたことを…死んで貰うわ！」

女忍者は言うど、手裏剣を放つ。それを全てはたき落とすが、目の前から女忍者が消えていた。いや、消えたのではない、飛んだのだ。両手にくないを持ち、空中からルークに迫る。

「死ね！」

「そんな無防備に空中に飛び上がるとは…」

ルークはそう言いながら腰を沈め構える。そして素早く剣を左下から右上に振り切る。発生した真空波が女忍者に直撃する。

「真空斬、手加減版」

「ぐえっ！」

女の子が出してはいけないような声を出して、女忍者が吹き飛ばす壁に激突し、一瞬意識が飛びかけるが、頭を振り立ち上がろうとする。が、それを阻むように首に刃が突きつけられる。

「戦い方がまるで素人だ…隠密要員であって、戦闘は場数を踏んでいないようだな」

「くっ…バカにして…」

懷から手裏剣を取り出そうとするが、一瞬殺気を込められ、「ひっ…」と声を出して手裏剣を取りこぼす。やはり場数はあまり踏んでいないようだ。

「少し…聞きたいことがある」

「何よ…拷問されたって、リア様のことは話したりしないわ」

そう言い放つ女忍者に対し、ルークは予想外の行動に出る。首に突きつけていた剣を下げたのだ。困惑する女忍者。

「王女の事が聞きたいわけではない。あんたの意見を聞きたい」

「私の…？」

「ああ…君は、王女が行っていた今回の犯罪、本当に正しいと思っていたのか？」

「…っ！」

ルークが尋ねた内容に驚愕し、目を開かせる。一瞬言いよどむが、すぐに返事が返ってくる。

「私の意見などないわ。忠臣として、命じられたことに答えるのは当ぜ…」

「それは真の忠臣ではない!!」

言いかけた女忍者の声を、ルークが遮る。先ほどまでの話し方と違い、その一言一言に、迫力が増す。

「忠臣として等と逃げるのではなく、君自身の意見を言ってくれ」

「…リア様が行っていたことに…間違いなどは…」

「罪もない民を自分の快樂だけのために死なせることがか？それが本当に上に立つ者の行動だとでも？」

「…」

ルークの問いかけに女忍者は答えることが出来ない。その拳が強く握られたのは、何に対しての悔しさからだったのであろうか。

「先ほど忠臣と言ったな。真の忠臣であるのなら、主がその道を違えたら、横つ面引つ叩いてでも道を正すものじゃないのか？」

「それでも…自分の意志を殺してでも主の命に従うのが…忍びとしての役目です…」

自分の意志を殺してでもと言ったのを聞き逃すルークではない。先ほどまでの迫力のある喋り方から一転、穏やかな喋り方になる。

「確かに…忍びとしてはそれが正しいのかもしれない。だが、忠臣

として…人間として…そして、一人の女の子として、その考えは絶対に間違っている」

自然と涙がこぼれる。情けない、恥ずかしい。涙を止めようとするが、止めることが出来ない。

「私だって…あんなことしたくなかった…でも…恩義に報いるために…」

嗚咽混じりに答える。やはり、彼女の行動は本意ではなかったらしい。ルークがそれを感じたのは以前の公園での出来事。あのように姿を現し、手を引けと忠告するのがそもそもおかしいのだ。殺すので忠告などせずにさっさと殺せばいい。彼女は王女を止めることが出来なかった。だからこそ、巻き込まれて犠牲になる様な人を減らしたかったのだ。彼女もまた、足掻いていたのだ。ルークは女忍者の頭に手を置き、泣き止むまでしばらく待ってやった。シイルも気絶しているヒカリを介抱しながら、静かにそれを見守る。少しの後、泣き止んだ彼女は、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「すみません…恥ずかしいところを…」

「いや、気にしてないさ。恩義っていうのを聞いてもいいかな？」

「命の恩人なんです。祖国のJAPANに帰れず、大陸に行くところもなく彷徨っていた私を、リア様が拾ってくださったんです」

「そうか…」

それは、ただの気まぐれだったのかもしれない。あるいは、大陸には珍しい忍者を貴重に思ったのかもしれない。しかし、あの王女が彼女の命を救った、これは一つの真実なのである。なればこそ、彼女は王女に仕えたのだ。たとえ自分の意志を殺してでも、その恩義に報いるために。

「因みに…祖国にはどうして戻れないんだ？捨て駒扱いで切り捨てられたとか、何かの秘密を握ってしまつて命を狙われているとかか？」

ぴくつ、と女忍者の動きが止まる。はて、何か変なことを聞いてしまったのだろうか、と考えるルークに対し、言いくそうに彼女が答える。

「…ゆう…でまい…つて…」

「ん？何か言いくいことだったか？それだったら無理しなくても…」

「…研修旅行で迷子になつて…勘違いで抜け忍扱いされて…帰れなくて…」

屋内なのに冷たい風が吹く。女忍者の顔は、先ほどよりも更に赤みを増している。

「んっ…それは…災難っ…だつたな…くっ…」

「笑つた！今笑いましたよね！！」

「いや…全然笑つてなんかいないぞ…ぷっ…くくっ…」

「隠せてない！全然隠せてないですから！だから言いたくなかつたのにい！！」

今にも泣き出しそうな顔をしてルークに詰め寄る。ルークは必死に堪えるが、笑いが抑えられない。それを見かねて、シイルがフオロ―に入る。

「ルークさん、笑っちゃかわいそうですよ…ふふっ…あははっ！！」「うわああああん！！！！」

まったくもってフオローになっていなかった。

- リーザス城 地下通路 -

ルークは女忍者を引き連れてリア王女が逃げた通路を歩いていた。途中で気絶していたマリスを拾う。ランスの前に立ちふさがり、返り討ちにあつたのだらう。目覚めたマリスに、先ほど女忍者にしたのと同じような事を言った。

「…返す言葉もございません。リア様のための常を考え、叱らずにいたことが…甘やかしてしまっていたのかもしれない…」

そうルークに答えるマリス。だが、話を聞いているとその役目をマリスに託すのは酷であつたかもしれない。リア王女とマリスの年の差は7つで、王女が幼い頃から仕えていたため、どうしても妹を見るような目になってしまっていたのだらう。本来、叱るのは親の役目だが、リアの両親は幼い頃から優秀であつた娘を恐れ、遠ざけてしまっていたらしい。彼女のしたことは決して許されることではないが、彼女が歪んでしまった原因を考えると、彼女もまた被害者なのかもしれない。

「まあ、今頃ランスがしっかりと叱っていてくれるだろう」

「大丈夫なんですか？正直…あの男と二人きりにするのは危ない気が…」

問いかける女忍者に笑いながら答える。

「まあ、大丈夫だろう。別れ際にかなりまじめな顔をしていたからな。ランスも許せなかったんだろう。まだ出会ってから一月も立っていないが分かる。あいつは…決めるときは決める男さ」

言っていると、目の前に光が差し込む。長い地下通路を抜けた先には泉があつた。そのほとりの方で声がする。三人はそちらに向かって走り出した。

「ああっ…もつと、もつと気持ちよくして！」

「がははは、ではもつとお仕置きしてやろう！」

そこにはお仕置きと称して王女とやっているランスがいた。

「はふう…」

マリスが倒れる。目の前の現実に打ちひしがれたのだろう。

「って、やっぱり全然駄目じゃない！何があいつ決めるときは決める、ですかー！」

「キめていたじゃないか…それはもう、バッチリと…」

「何上手いこといった風な顔してるんですか！」

まさか本当に王女に手を出すとは…あの真面目な顔はなんだつたんだろうか。ランスにとって王女とHすることは、大まじめな顔をするに価する出来事だったてことか。

「がはははは！どうだ、もう悪いことはしないな？」

「もう悪いことしません、庶民もいじめません。だからもつとおお！」

「まあ…あれはあれで改心したってことでいいんじゃないか？」

「よくなああああい!!」

- 数日後　アイスの街　ランス宅 -

無事に仕事を終了し、報酬を受け取ったランスはGOLDで敷き詰めた風呂に入っていた。ルークとの分け前は宣言通り8:2にし、計26000GOLDを手にしたランスは満足そうだった。

「がはははは！大もうけだ！だがGOLD風呂は痛いだけだな、もうやめておこう。」

「よかったですね、ランス様」

あの後、王女が許していたので怒るマリスと女忍者を尻目にしっかりと帰路についたランス。ルークとは今朝別れた。俺様が女を抱く邪魔をしないし、色目も使わん。俺様程じゃないまでもそここの腕はある。まあいても邪魔にはならんな、というのがランスのルークに対する評価であった。

「そうだ、一応奴隷として少しは活躍したからな。お前にも服を買ってやるう」

「本当ですか？私、外出用のお洋服が欲しいです」

「そうだな、すけすけのネグリジェか超ミニスカートを買ってやるう」

「…はい、ありがとうございます…：そういうば、ランス様宛に手紙が届いてましたよ」

「ん？俺様宛のファンレターかラブレターか？」

「お城からの手紙みたいですね」

ランスはシルから受け取った封筒を開き、中の手紙を読む。

・親愛なるランス様。我が王家には、初めて交渉した者と結婚しなくてはならないという

代々伝わる伝統があります。それに従ってあなたは責任をとって私と結婚して頂きます。

ではこれより、すぐにあなたの所に嫁がせて頂きます　王女リア・パラパラ・リーザス・

「…シル、逃げるぞ」

「へ？」

結婚などする気のないランスは逃げようとするが、時既に遅く、家の扉が大きくノックされる。

「ダーリン！！開けてー！！リアが参りました！！」

声が聞こえた瞬間に、ランスはシルを連れて一目散に逃げ出していた。

「シル！ついてこい！」

「はい！ランス様、どこへでも！」

・アイスの街近辺　街道・

ルークは一人その道を歩いていた。約束の報酬をランスに渡した後、次のギルド仕事を受け、休む間もなくアイスの街から旅立っていた。歩きながら、ルークは思う。面白い奴であったと。またどこかで巡り会いたいものだ。すると、遠くから声が聞こえてくる。

ルークが歩いている街道の向こう、今考えていた男が、パートナーを連れて王女と侍女から全力で逃げている。最後まで退屈させない奴だ。

「やれやれ…また会いたいとは思ってたが、早すぎるだろう…」

そう思うルークに、こちらに気がついた女忍者が道を外れて近づいてくる。

「どうした？王女様から離れていいのか？」

「すぐに戻りますから。ルークさんに…一言お礼を言いたくて」

「礼などいらんさ。今後、リーザスがどのような道程を辿るか楽しみだよ。道を違えそうになったら…」

「私が戻します。今はまだ無理だけど…いつか、真の忠臣と呼ばれるように…」

「上出来だ」

ふと二人が笑いあう。ランスたちが少し離れてしまったので追いかける一礼し、追いかけようとする女忍者をルークは呼び止める。振り返る彼女に、もっと早く聞いておくべきだった事を問いかける。

「名前、まだ聞いてなかったな」

「かなみ、見当かなみです」

満開の笑顔を向けてくる。これは、良い気分で次の仕事に移れそうだ。青天の下、ルークはそんなことを考えていた。

第10話 ここより変わるリーザスの物語（後書き）

「人物」

見当かなみ

LV 14 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。不本意にも抜け忍になってしまっていたところをリアに拾われ、恩義に報いるため諜報から暗殺まで忠実にこなす。ルークの言葉を受け、少しずつだがリアに自分の意見を言うようになる。意外なことに、関係は以前よりも良好。本編では一応1のラスボス。一応とか言うな。

ヒカリ・ミ・ブラン

ブラン家の次女。リアに誘拐されていたが、実はそのときに色々と目覚めてしまい、リアのことが大好きになってしまう。ランスとルークのことは、気を失っていたのであまり覚えていない。ランス1のサブタイトル「光を求めて」が、彼女の名前と掛かっていることはファンの間では有名である。

ウエンズディング・リーザス

リーザス国国王にしてリアの父。実権は娘に握られている。婿養子であり、結婚前の名前を名乗るなど少し頭がおかしくなり始めている。

カルピス・パラパラ・リーザス

リーザス国女王にしてリアの母。頭の良すぎた娘をあまり良く思っており、知らず知らずの内に遠ざけてしまっていた。

ミンミン

パリス学園の学園長。裏でリアと繋がっており、美少女を定期的に提供していた。事件解決後、全て自分一人で犯行を行ったという遺書と共に遺体で発見される。マリスが一晩でやってくれました。

「技能」

忍者

忍者としての才能。隠密としての素質や、強力な忍術の使用に関わる。

「技」

ヒーリング

傷を癒す初級神魔法。暖かい光で包み込み、傷だけでなく体力も回復させる。

マジックミサイル

炎の塊をぶつける初級魔法。炎の矢よりも威力は低いが、塊であるため敵に命中しやすい。本編では炎の矢の旧名であり同一魔法。後にダイジェスト版が出た際、名前が炎の矢に統一され、その存在が抹消される。本作では別魔法扱い。これは、筆者がマジックミサイルでランスの窮地をシイルが救うシーンが1屈指の名シーンだと思っており、名前を変えたくなかったためである。

第11話 叛逆の少女たち

G I 1 0 0 9

- 自由都市カスタム -

話は少し前にさかのぼる。自由都市地帯のほぼ中央に位置する町、カスタム。この年、とある老魔法使いが魔法塾を開塾する。男の名はラギシス。人当たりが良く、町の住人からの信頼も厚かった。これを受け、カスタムの町では一つの事項を決定する。それは、町を守る魔法使いを育てるため、三人の娘をラギシスに弟子入りさせるというものだ。

幼い娘たちにそのような重荷を背負わせることに初めは疑問の声も上がったが、三人の娘は彼に良くなつき、魔法の修行も自ら進んで行った。三年後のG I 1 0 1 2年にはもう一人娘が加わるが、こちらもすぐにラギシスに懐いた。四人の娘と一人の老魔法使い。師匠と弟子、というよりは親子のようだな、と住人の一人が言った。何を今更、もう彼女たちの育ての親だよ、ラギシスさんは、と聞いていた住人が答えた。

「うわあああ、きれいーい」

本日の授業は草原で行われていた。ラギシスが腕を振るうと、その腕から花びらが舞う。入塾したばかりの紫色の髪の少女は目を輝かせる。

「本当…きれいな」

「そんなのより攻撃魔法を教えて欲しいわ」

「もう…」

赤い髪の娘が言うと、緑色の髪の娘が別の魔法が良いと言う。隣にいた青い髪の娘がとがめるが、ラギスは優しく微笑む。本当に不満に思っているわけではないのを知っているからだ。そう文句を言った娘も、舞い踊る花びらを見ながら優しく微笑んでいたからだ。花びらが彼女たちを包むように回り始める。その美しい光景に、娘たちの目の輝きが更に増す。

「ふうん…目隠しくらいには使えそうね。今日の授業はやっぱこれでいいわ」

「もう…素直じゃないんだから」

あはは、と笑い声が草原に響く。言われた娘はふん、と拗ねた風な顔を見せるが、耐えきれなかったのかすぐに吹き出してしまう。平和な光景が、そこには広がっていた。

そして…月日は流れる…

LP0001 10月

- 自由都市カスタム -

「ラギス！」

ラギスの前には美しく成長した娘たちが立っていた。しかし、様子がおかしい。ある娘は剣先をラギスに向け、ある娘は魔法を使う構えを取る。

「どうしてもやるのか…」

悲しげに呟くラギシス。返ってきたのは言葉ではなく、魔法。紫の髪の娘が、小型の幻獣をラギシスに放った。

「…!!」

それが始まりの合図であった。師であるラギシスだが、既に老体の身。それにリーダー格であった緑髪の娘は、既にラギシスをも凌駕した力を持ち合わせている。更に、四対一。必死に抗戦するが、徐々に追い詰められていくラギシス。青い髪の娘が水の魔法を放つ。防御魔法でそれを防ぐと、剣を持った赤髪の娘がラギシスに迫った。

「くっ・・・」

ギリギリで剣を躲し、距離を置くラギシス。が、すぐに気がつく。誘導させられた、と。他の三人が左右に分かれ、道を開く。今、ラギシスと一直線上に対峙するのは、リーダー格の娘。既に呪文詠唱を終え、放つ直前だ。ラギシスに逃げ場はない。

「死ねえええええ!!!!」

「っ!!」

ラギシスを光が包む。結界を張るが防ぎきれない。吹き飛ばされ、動けなくなるラギシス。柱が崩れ、瓦礫がラギシスの身体に落ちていく。薄れゆく意識の中でラギシスは思った。

「（指…輪…）」

ラギシスの身体が瓦礫に埋もれていく。それとほぼ同時に、空中に魔方阵が現れ、町全体を包む。娘たちの誰かが使ったのであるのか。恐ろしい魔力で魔方阵はカスタムの町を地下に陥没させていった。

住人は言う。娘たちが狂った。育ての親である師匠を殺し、地上に出られないよう封印を掛けた。あの娘たちは悪魔だ。誰か…この町を救ってくれ。四人の娘たちの指には、それぞれ違った色の指輪が妖しく光っていた。

・アイスの町 キースギルド・

男は数多くある依頼書の中から、その依頼書に目を付けた。

・反逆の少女たち、親代わりでもあった師匠を殺し、町を封印する。彼女たちは今こう呼ばれている、カスタムの四魔女、と。・

「なんだ？その仕事受けるのか？こつちとしちゃーありがてーが、報酬はそんなに高くないし、割にあつた仕事じゃねーぞ？」

「割に合わない仕事はいつものことさ。この四魔女というのが少し気になってね…」

「なんだ？遂にお前にも春が来たってか？」

下品な笑みを浮かべるギルドマスターのキースに対し、そんなんじゃないさ、と返す。

「まあ、そこまでお前が興味持ったって事は、受けるんだろ？」

「ああ、この依頼、受けさせて貰う」

「あいよっ！頼んだぜ、ルーク！」

第12話 地下に沈んだ町

- 荒野 -

砂埃舞う荒野をルークは歩いていった。向かうはカスタムの町。アイスの町からそう遠くない町だが、ルークは迷ってしまっていた。

「…おかしいな、地図によるともうそろそろのはずなんだが…」

というのも、ルークはカスタムの町をほとんど訪れたことがない。理由としては二つ。リーザスやポルトガルといった、仕事で訪れることの多い大都市に向かう際の通り道からは少し外れてしまっているというのが一つ。もう一つは、いままでギルドに依頼されるような事件は起こらない平和な町であったため、訪れる機会がなかったのだ。そのような平和な町での異変。一体何が起きているのだろうか。

「訪れるのは約20年ぶり、あの時とはどれほど変わっているのかね…」

前述の通り、ルークはこの町を訪れたことがないわけではない。かつて、たった一度だけこの町に来たことがある。18年前、7つの時だっただろうか。ルークはかつての光景を思い出す。

G I O 9 9 8 冬

- カスタムの町 -

身なりはボロボロ、全身に擦り傷を付けた二人の子供が町の前に立っていた。声を掛けようとする者はいない。その目だ。後ろに連れられている少女は普通だが、もう一人の男児の目が普通ではない。濁っている。まるで、この世全てを恨んでいるかのように。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

そんな中、一人の男が声を掛ける。この町に最近移り住んできた魔法使いだ。それが、ルークとこの男の出会いであった。

LP0001 10月

― 荒野 ―

ふ、と自嘲気味に笑うルーク。懐かしい思い出もあり、同時に出来ることならば思い出さくはない過去である。そう、あの時はまだ彼女が隣にいたのだ…。と。そんなことを思っていると、目の前に洞窟の入り口が見えてくる。そこには一人の少女が立っていた。こちらに微笑んで近づいてくる少女。

「お待ちしておりました。ルーク様でいらっしゃいますね？」

「そうだが、君は？」

少女は顔をパツと輝かせると、深々とお辞儀をした。

「ようこそおいでくださいました、カスタムの町へ。私は町長の娘、チサと言います」

「町…？どこにあるんだ？」

「さあ、どうぞこちらへ。父がお待ちしています」

娘はそう言うと、ルークを案内するように洞窟の中へと入っていく。

「まさか…洞窟の中か…？」

・カスタムの町・

洞窟をしばらく進むと、そこには地下の空洞の中に町があった。

「地下に町が丸々入っているのか！？以前来たときは普通の町だったが…封印というのはこういうことだったのか…」

「以前に町を訪れたことがあるのですか？すいません、町長の娘ともあろうものが、覚えていなくて…」

申し訳なさそうに頭を下げるチサに対し、こちらもすまなそうに返すルーク。

「いや、謝らなくて良い。多分君が生まれる前の話だ。20年くらい前だからね」

「そうだったんですか。…ルーク様から見て、今の町はどのように見えますか？」

周りを見回す。だいぶ過去の話なので記憶も曖昧だが、以前はもっと住人の元気な声が飛び交う町だったはず。それに、所々破壊された家が目に入ってくる。

「正直…以前の姿を知っている者からすれば…信じられない光景だ

な」

「それも全て…彼女たちが…」

悲しそうな、それでいて悔しそうな顔をする。そんな話をしている内に、町長の家に着き、中に案内された

「これはこれは、よくぞ来てくださいました。身体が少し弱いので、床に入ったままで失礼します。私は町長のガイゼル・ゴードといいます」

町長を見るルーク。以前の町長とは違うな。あちらもルークのことを覚えていない。無理もない、18年も前の話だ。それに、この町に滞在していた期間も短かった。

「あなたはキースギルドに所属する冒険者の中でも、特に優秀な戦士だと聞いています。どうか、この町をお救いください」

キースめ、大げさに言いやがったな、とルークは思う。多くの人々を救った優秀な冒険者、という点では、ラーク&ノアコンビの方がよっぽど当てはまる。というのも、ルークの仕事の請負方には癖があるからだ。事件の規模や報酬ではなく、強そうな奴に会えるか、その依頼者との繋がりが大きな意味を持ちそうかという事を最も重要視している。そのため、時には初級冒険者が請け負うようなお使いのような依頼もこなす。以前ラークに苦言を呈されたが、先の大戦を見据えているルークにとって、この方針を変えるつもりはなかった。

「まあ、任せておいてくれ。受けた依頼はきっちりこなすさ」

「それは頼もしい！それでは町の状況を説明させていただきます。チサ、頼んだ」

ガイゼルがそう言うと、チサが一步前に出てくる。

「はい、ルーク様もご存じの通り、この町は元々地上にありました。ですが、少し前に魔法使いたちの戦闘がこの町に起こりました。一人の魔法使いの名前をラギス。この町で魔法塾を開いていた方です。彼は私たちを守って戦ってくださいました。悪いのは四人の魔女たち。ラギスの塾生であつた彼女たちは、突如反逆を起こしました。ラギスの持つていた指輪を奪い、ラギスを殺した彼女たちは、指輪の力でこの町を地下へと沈め、町を封印してしまいました」

「町一つを地下へ沈めたというのか…その娘たちが…」

にわかには信じがたいことである。魔法大国のゼスでも、たった四人でそんなことを出来る者は限られてくるだろう。

「きっと、指輪の力で彼女たちの魔力を増幅させているんです。そして彼女たちは地下に迷宮を築くと、私たちの生活を脅かすようになりました。数々のモンスターが町へ進入してきたり、若い女性が誘拐されたり…」

「彼女たちを倒そうとはしなかったのか？」

「いいえ、青年団が四人の魔女を倒そうと迷宮に潜っていきましたが…まだ誰も帰ってきません…」

そう、肩を落とすチサ。

「酷な話だが…もう生きてはいないだろうな」

「あうつ…か、彼女たちの目的は分かりませんが、お願いです。私たちをお救いください！」

「私からもお願いします。彼女たちを倒して、この町を以前のよう

な平和な町にしてください」

ゴード親子がルークに対し懇願する。ルークは右拳を少し前に出し、力強く握ると、口を開いた。

「任せておけ。すぐにこの町を元の平和な町に戻してやる」

「ありがとうございます！ルーク様！」

ルークの手をチサの手が包み込む。その光景にごほん、とガイゼルが咳払いをすると、恥ずかしそうにチサが手をすぐに下げた。

「…娘はやらんど。で、報酬のことだが…」

「安心してください。どこかの冒険者と違って、節操なしではないんで…」

ルークは三ヶ月ほど前、共に仕事をした男の顔を頭に浮かべる。

あいつだったなら、報酬はチサちゃんが良いとか言い出すだろうな…

「うむ、それならいい。で、報酬なのだが一応20000GOLD用意しています。ただ、依頼した冒険者は一人ではないため、早い者勝ちになつてはしまいますが…」

ふむ、20000GOLDか。事件の規模を考えると割の良い仕事とは言えない。町を沈める程の魔力を持った魔法使いと、命を掛けて戦わねばならないのだ。前回の誘拐事件の割が良すぎたのもあるが、（まあ結果としてあれもリーザス王家が絡んでいたから、割の良い仕事では無かったが）それにしても安すぎる。報酬の額を気にするルークではないが、この案件は個人の依頼ではなく、町としての大規模な依頼。あまり安くされると、キースギルドの名が汚されると同時に、カスタムの町の評判も落ちてしまうのだ。

「少し安すぎますね。復興のための資金を貯めなければならないのは分かりますが、30000GOLDが最低限のラインですね。そうでないと、ウチのギルドだけでなく、カスタムの町の評判も落ちます。それに、その値段では請け負ってくれる冒険者が極端に減るでしょうね。早く解決させた方が、結果として出費を安く抑えられると思いますよ」

「なるほど…申し訳ありません。今までギルドに依頼などしたことが無かったものですから、相場が分からなくて。それでは30000GOLDとさせていただきます」

「了解だ。それでは、正式に受けさせて貰う」

そう言い、部屋を出て行くルーク。

「…なんて頼もしく勇ましいお方。あの方ならきっと大丈夫ですね、お父様」

「うむ、彼になら任せても良さそうだな…だが、娘はやらんぞ」

「…あつ、お父様。もうすぐ次の冒険者様が到着する時間なので、町の入り口まで迎えに行ってくださいね」

ルークは町の中を見て回っていた。時間を掛けて町を一周するが、中々に入り組んだ町であると同時に、モンスターに荒らされてしまっているため、店の場所などを思えることが難しかった。と、チサが歩いているのが目に入る。

「ああ、チサちゃん、ちよつといいかな」

「あら？どうされましたか、ルーク様」

「ちよつと町の地図をいただけないかな？少し覚えるのに時間が掛かりそうだ」

「それでしたら、家にいくつか予備がありますのでついて来てください」

チサの後をついて行き町長の家まで引き返すルーク。道中無言なのも気まずいので、世間話感覚でチサに話しかける。

「そういえば、チサちゃんは買い物か何かかな？」

「はい、ルーク様の次にもう一組冒険者様がお見えになったんですけど、お茶菓子を切らしてしまいました」

そう言い、家の中へ入る二人。すると、町長の部屋の方から大声が聞こえる。これがもう一組の冒険者の声だろうか。それにしてもどこかで聞き覚えのある声な気が…

「がはははは、安すぎる！！報酬は50000GOLDか、チサちゃんの処女だ！！！！そうでないとな俺様は降りるぞ」

「駄目だ駄目だ駄目だー！！チサには指一本触れさせんぞー！！！！」

間違いない、あいつだ。

第12話 地下に沈んだ町（後書き）

「人物」

ガイゼル・ゴード

カスタムの町の町長。病に倒れながらも、町再建のために奔走する。親バカである。

チサ・ゴード

カスタム町長の娘。父親思いの優しい少女である。50000G OLDに吹っかけた冒険者に対しても、頼もしく勇敢で彼なら大丈夫とのたまう辺り、あまり深く物事を考えていないと思われる。

「都市」

リーザス王国

大陸東北部に位置する、人口約5000万人の豊かな国。ヘルマン帝国に反乱を起こしたグロス・リーザスがGI0534年に建国以後、長きに渡りヘルマンとの争いが続くこととなる。土地が豊かで食料に恵まれ、商工業も盛んで暮らしは豊か。魔人界とも隣接していないため、基本的には平和な国である。

アイスの町

自由都市。ランスが生活している町であり、キースギルドの他に、冒険者のお供として有名な回復薬「世色癌」で薬市場の約50%を占めている世界有数の製薬会社「ハピネス製薬」などがある。

ジオの町

自由都市。「ジーク・ジオ」を合い言葉としており、経済力は高い町である。

第13話 トマト爆誕

- カスタムの町 酒場 -

「まさかこんなに早く再会する事になるとはな…稼いだからしばらく働かないんじゃないかなかったのか？」

ルークは自分同様、依頼を受けるためカスタムまで来たランスとシルと共に、町の酒場で食事を取っていた。当然のようにルークの奢りになってしまっている。テーブルの上には注文した料理が並んでいる。口を付けたうろーんが余りにもまずかったので、ビールで口直しをしながらルークが尋ねる。

「ふん、どうせ再会するならヒカリちゃんとかの方が良かったがな。ん？金か？あんなもんとくに使い切ったわ」

言い放つランス。少し贅沢な生活をしていても、しばらくは大丈夫なレベルの大金があったはずなのだが。シルの方を見ると、食べていたチョコレートパフェをテーブルに置き、申し訳なさそうに頷く。本当に使い切ったのか…

「まあ50000GOLDで交渉成立したから、この仕事が終わったら、またしばらく仕事する気はないがな」

上機嫌に出来たてのへんどろばを食べるランス。そう、先ほどガイズルに対する値上げ交渉は見事に成功し、報酬は50000GOLDへと跳ね上がった。娘を守るための苦渋の決断だったのだろつ。

「そこで、提案なんだが。どうだ、またこの間みたいの手を組まないか？」

「ん？まあ…分け前次第だな…」

ルークの提案に珍しく応じる気配を見せるランス。理由としては、ルークの実力を知っており、同時に自分が女を襲う邪魔をしない男というのが一つ。もう一つは四魔女が美少女であった場合、やる気満々なため、ランスはさっさと事件を解決させたいのだ。

「そうだな…俺は10000GOLD貰えれば十分だな」

「むう…まあいいだろう。がはは、俺様のためにしっかり働けよ」

ルークに10000GOLD支払っても、当初提示された報酬よりも多いのだ。それに、ルークと一緒にいると今夜の食事のように、所々で奢らせることが出来る。これ幸いと手を組むことにするランス。

「はい、ご注文のうはあんお待ちませ」

店の自称看板娘であるエレナが追加で頼んだ料理を持ってくると同時に、シルの頭を撫で始める。

「…おい、人の奴隷に何やってるんだ？」

「わつと、ゴメンなさい。私って、人の頭を撫でるのが好き…で…ふああっつ！何これえ！」

頭を撫でていたエレナが突如騒ぎ出す。

「な、なに、この頭…あつたかくて…優しくて…心が引きずり込まれていく…正にゴッドオブヘア…」

「あ…あの…あんまり中で動かさないでください…」
「ええい、さつさと離れろ！」

ランスに引きはがされるエレナ。その顔は恍惚の表情を浮かべている。特徴的なもこもこヘアーだが、あの中はそんなにも気持ちの良いものなのか…？

「…おい、ルーク。何を人の奴隷の頭に手を伸ばそうとしているんだ？」

「…そんな事してないですよ？」

「喋り方が普段と違うし、目を反らすんじゃない！」

ランスが暴れ始めて酒場の中が騒然となる。シイルは周りに平謝り。こうして夜が更けていった。

- 翌日 カスタムの町 アイテム屋 -

迷宮に挑むことになるため、それに備えてアイテム屋に寄るのは冒険者の常識。ということで三人はアイテム屋にやってきていた。

「いらっしやいませですねー？ここはアイテム屋ですかー？」

「…それを店主のあんたが聞いてどうするんだ？」

店に入ると整った容姿の店員がそんなことを行ってきた。頭の弱い娘なのだろうか？ミミックと思われるモンスターが檻に入れられている。どうやらペットのようだ。

「おう、中々にグッドな娘さんだな。名前は何という？」

「トマトですかねー？」

「自分の名前だろうが。オススメの剣と鎧はどれだ？」

「それを私がついているんですか？」

「ええい、お前はここの店主だろう」

「…果たしてそうなんですか？」

「うがー！なんなんだ、この店は！」

駄目だ、頭痛くなってきた。

「ら、ランス様、落ち着いてください。彼女はきつと、語尾に「？」が付くというキャラ付けをしているんですよ」

「だー、面倒な！…ん、良いことを思いついたぞ。この剣はいくらだ？高くて良さそうな剣だ」

「それは我が家の家宝の剣ですね？　そうなら5000GOLDですかね？」

「いいや違う、1 GOLDだ。金は置いていくぞ、がはははは、とくした!」

トマトをかわいそうと思うよりも、頭が回るな、とルークは感心する。店を出て行くとするランスの腕がグワシッ、と掴まれる。

「ふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふるふる！！」

涙目ウルウル首ブンブン状態になった。ちよつとかわいい。

「反省したのだな」

「すいません。ちゃんと反省しました」

⌋
⋮
⌋

「かな？」

トマトの頭に二人のチョップが炸裂した。

「しくしく…何を求められますか」

「自業自得だな、さすがに。ん…棚がすかすかだな」

「町がこんな状況なので、物資があまり届かないんですよ。特に剣が品薄なんですよね？」

「こっちに振るんじゃない。とりあえずこの剣と鎧を貰うかな。ルーク払っておけよ」

「いつから俺はお前のサイフになったんだ！というか、この間俺の金で勝手に買った装備はどうした？」

リーザスで買っていた装備の方が、今選んだ装備より良いものだと思うのだが、とルークは思う。

「ああ、盾は装備してても戦いにくいんであの後すぐに売った。剣と鎧はもうちょい後に生活費の足しにするため売った」

「人の金で買ったものを…」

「すいません、すいません…」

シルが謝る横で、ルークも店内を物色した。剣は妃円の剣がまだまだ刃こぼれを起こしていないので、鎧と世色癌を購入。

「ん？シルちゃんも遠慮しないで買って良いんだぞ？」

「いえ…申し訳ないですし…」

「主人と違って謙虚だな、シルちゃんは。店主、そのローブもついでに買わせて貰うぞ」

「はい、お優しいんですねー？」

「すいません、ありがとうございます」

「あ、こら！勝手に俺様の奴隷に服を着せるんじゃない」

「ダンジョン潜るときくらいは羽織るくらいいいだろ。流石に危な

いぞ…って、何勝手に世色癌そんな大量に買ってたんだ！」

「全部で4000GOLDになりますー？」

「高っ！ランスお前、何買いやがった！！」

「がはははは、高そうな鎧とは思ってたが、中々の値段になったな」

渋々払うルーク。流石に分け前をもう少し上げて貰おう、と心に誓うのだった。トマトはほくほく顔でお金を受け取りながら、先ほどランスから返して貰った家宝の剣を大事そうに抱えていた。

「そんなに大事な剣だったのか？」

「はい、家宝というのがありますが、私、いつか自分で冒険をしたと考えているんです…よね？」

「アイテム屋さんなのにですか？凄いですね」

「全く鍛えてるようには見えんが…危ないぞ。俺様が近くで守つてやろう」

シルが感心し、ランスが下心満載で護衛に志願する。

「鍛えてはいないですけど、何とかありますよ。…その、気合いで？」

「それはある程度ちゃんと鍛えた奴が最後に頼るものだよ。ふむ…でも素質は悪くなさそうだな。鍛えれば一端の冒険者になれるかもしれないな」

「え？本当ですか？わーい、そうなら、いつか一緒に冒険してくださいね？」

「がはは、最強の俺様はいつかじゃなく、今すぐでもいいんだがな」
「いつかそんな日が来るのを待っているよ」

店を出て行く三人を見送るトマト。流石にお世辞なのは分かっていたが、ちよっと剣の修行を試みようかな、と思うのであった。

・カスタムの町 ラギス邸跡・

その家は戦闘の影響でか、崩れかけであった。部屋は薄暗く、床には魔方阵が刻まれている。

「ランス様…ここ、なんだか怖いです。なにか…気配みたいなもの感じませんか？」

「ラギスの亡霊でもいいれのか？馬鹿馬鹿しい、びびりすぎだ」

「で…でも、もしかしたら…」

ブルブルと震えるシル。するとそのとき、ペシーンと音が響いた。

「ひゃあああああ」

「がはは、尻を叩かれたくらいでびびりおつて。情けないぞ」

「ひどいですよ…ランス様…」

悪ガキっぽく笑うランス。シルは目に涙を浮かべながら、腰を抜かして床に座り込んでしまった。その姿が中々にそそる。

「よし、やるぞシル。ルーク、ちょっと外で待ってる」

「はいはい、早めに済ませてくれよ」

「え、え、え、…その…ここは怖いんでせめて場所を変えましょうよ」

シルの胸を揉み始めるランスに、場所替えを提案するシル。それを尻目に部屋から出て行くこうとするルークだったが、部屋の中

心部、魔方阵のあつた辺りが光輝き、青白い人の形を成したものが出来上がっていった。

「こら、神聖なる屋敷で不埒な行いをするんじゃない。その男も出て行かないでちゃんと止める」

「うわっ、なんだこの親父は！おばけか？」

ランスがそう言うと、シイルは怖がってランスの後ろに隠れる。ルークも出て行こうとしていたのを止め、剣に手を伸ばして臨戦態勢に入る。

「お化けにあらず…怯える必要はない。私こそ、この町の守護者、ラギシスだ…」

死してなお、その魔法使いは地縛霊となりこの世に留まっていた。それは自分の弟子を止められなかった後悔からか、あるいは別の未練があるとしてもいふのだろうか…

第13話 トマト爆誕（後書き）

「人物」

ランス （2）

LV 10 / ∞

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

早々にルークと再会した鬼畜戦士。誘拐事件解決時にはLV15ほどになっていたが、その後ほとんど冒険をしないでいたらレベルダウンしていた。

シル・プライン （2）

LV 10 / 40

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ゴッドオブヘアーの持ち主。ランス同様、冒険していなかったため仲良くレベルダウン。

トマト・ピュレ

LV 1 / 37

技能 剣戦闘LV1

カスタムの町アイテム屋店主。趣味は盆栽と俳句で、ミミックをペットにしている変わった娘。大冒険に興味がある。本家2とリメイク版である02で性格がだいぶ違う。本作では02仕様。因みにRance1のパッケージは彼女だったりする。しかし、1に彼女は登場しない。最新作ランスクエストにて再登場。その保有スキルの使いやすさから、お世話になったプレイヤーも多いのでは？

エレナ・エルアール

カスタムの町酒場の看板娘。覆面社交パーティーで抱かれた初恋の男を捜すため、500GOLDで体売っている。

「モンスター」

ミミック

宝箱に潜むモンスター。強力なレーザー攻撃を放つため、油断は禁物。なぜかトマトがペットにしている。

「装備品」

イナズマの剣

ランスが購入。切れ味は並だが、雷属性の武器であり、通が好むとされている。

界陣の鎧

ランスが購入。戦士向けの本格的な鎧で、値段も1800GOLDと中々の値段。

真紅の鎧

ルークが購入。若者に大流行の軽鎧。付属のマントはランスに上げた。

防御のローブ

シルが購入。女性用の防具で、見た目は軽いがそこそこの防御力を持つ。

「アイテム」

世色癌

回復薬。ハピネス製薬が発売しており、冒険者のお供。苦い。どこかの世界にはこれを1000粒くらい一気のみする猛者がいるら

しい。名前はナクト、きつと世色癒食LV3の技能保有者なのだろう。

「料理／食材」

うろろーん

ねちょーりして、ガリンゴリンしていて、それでいて半生の料理。つまり不味い。

うはあん

桃りんごを用いて作る高級料理。果物である「うはあん」と名前が似ているが、別物である。

ビール

ご存じビール。本家2でエレナが勧めてくる。

チョコレートパフェ

ランス曰く男の食べ物。よって、シルはあまり食べさせて貰えない。

第14話 抱く疑念

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

「あんたが四人の魔女に殺されたラギシスに間違いないんだな？」
「いかにも。お主たちはこの町の住人ではないな。雇われた冒険者であるか？」

廃墟と化したラギシス邸跡で、ルークは霊体になったラギシスと話をしていた。未練を残した人間が霊体となってこの世に留まるのは、珍しくはあるが決してあり得ない事ではない。この間の誘拐事件の際も、ラベンダーという幽霊になった女の子がいたように、冒険者を長く続けていれば、何度かは出くわす事もあるケースだ。ラギシスは長髪に髭を生やした、ナイスミドルという言葉がよく似合いそうな、老人一歩手前の中年であった。平穩無事なら、まだまだ余生を過ごせたであろう。

「ふふん、俺様こそ史上最強の戦士、ランス様だ！こっちは奴隷のシイルで、こいつは下僕のルーク」

「よ、よろしく…お願いします…」

「俺はいつになったら下僕を卒業できるんだ…？」

ランスがポーズを取りながら自己紹介をし、その後ろから控えめにシイルが顔を出しお辞儀する。

「そうか…頼む、どうかこの町を救って欲しい。私にはもう、それを行う力はない…」

申し訳なさそうに霊体となったラギスが頼み込む。その顔はどこか悔しそうであった。町を守れなかったこと、弟子たちに反乱を起こされたこと、現世に相当な未練があるのだろう。

「任せておけ。で、出来ることなら事のあらましを本人から聞いたのだが」

「さて、そう言われても…どこから話していいものか…そうだな、私はこの町の守護者として長い間この町を守ってきた。だが、老いには勝てん。力が衰えていくのを感じた私は、魔力に素質のある者を四人集め、後継者として育て始めた。ゆくゆくは、この町の守護者として跡を継いで貰おうと。幼い彼女たちに魔法を教えている時間は、安息に満ちた時間であった。日に日に魔力を増した彼女たちを見るのは…」

「さてさて、要点だけ話せジジイ。お前の思い出話が聞きたいんじゃない。話したいならその辺の石にでも話してろ」
「……………」

バツサリと切って捨てるランス。が、内心ルークは拍手していた。正直ルークも、この先関係ない話が続くような気配を感じ取り、どうしたものやらと考えていたからだ。

「…要点だけ話そう。ある日奴らは私の大事なフィールの指輪を奪っていった」

「フィールの指輪？聞いたことがないな…」

「以前にゼスのとある魔法使いから譲り受けたものでな。はめた者の魔力を数倍にも増幅させるのだ」

話を聞いてルークは驚く。今この男は数倍と言ったか？確かに魔力を増幅させる装飾品が無いわけではない。例えばカラー族のクリスタル等がそうだ。彼女たち一族の額に埋め込まれたクリスタルは、

ある方法を用いると魔力が増幅され、強力なマジックアイテムの材料となる。これを加工したクリスタルリング等は、魔力を増幅させる装飾品と呼べるだろう。が、それでも増幅する魔力はせいぜい二倍。相場20万GOLDのクリスタルを加工した、市場にあまり出回らないクリスタルリングでさえその程度なのだ。なればこそ、数倍にもなるようなマジックアイテムがあれば、国宝になつていてもおかしくはない。それを手放すゼスの魔法使い、そんなことが有り得るのか…

「奴らはこともあろうに、師である私に戦いを挑んできたのだ。普通であれば未熟者が束になろうと負けはせん。が、フィールの指輪を装備した奴らは絶大な魔力を手に行っていた。特に、リーダー格であつた娘は私をも凌駕する魔力…私は敗れ、このような姿になつてしまった。…このまま野放しにするわけにはいかない！」

「待て、今の話し方からすると、フィールの指輪は一つではないのか」

「うむ、全部で四つある」

四つ…一つでも国宝になりかねん、そんな指輪が四つだと…

「ふん、自分の弟子に負けるなど情けない奴め。とりあえず、彼女たちの情報について教えて貰おう。名前、得意技、スリーサイズを答えろ！」

「スリーサイズは知らんが…答えられる範囲で答えよう」

魔力の増幅などに興味のないランスは、指輪の異常さに気がつかず話を進める。ラギスがそれに答え、彼女たちの説明を始めるが、ルークは未だ頭からフィールの指輪のことが離れていなかった。

「まずは、マリア・カスタード。氷雪系の中でも、取り分け水魔法

を得意とする少女だ。魔法以外にも研究や発明の才能もあったな。ひよっとしたら育てればそちらの方が伸びたかもしれん」

「可愛いのか？」

「たとえ殺されようと…どの子も、私にとっては可愛い娘だ」

そう言うラギシスに対し、ちょっと感動したのかシイルがうるうると涙目になっている。奴隷として売られていたということは、両親は亡くなっているか、生きていたとしても長く会えていないのだろう、とルークはシイルを見ながら思った。

「次にミル・ヨークス。他の三人よりも弟子入りしたのが遅く、年齢も一番若い。珍しい幻獣魔法の使い手だ。指輪の魔力を持っている今では、ほぼ無尽蔵にモンスターを生み出すだろう」

「厄介だな。次。」

「三人目はエレノア・ラン。彼女は剣の腕にも秀でた魔法剣士で、初級魔法レベルのものを手広く学んでいる。その中でも幻惑系の魔法を最も得意としている」

「つまり器用貧乏タイプだろ。一番中途半端なタイプだな」

三人目までの説明を聞き、戦い方を考えるルーク。ランスも言ったように、ここまでで一番厄介なのはミルという娘だ。前衛に守らせ、後ろで詠唱をするという魔法使いの基本戦術。基本であるが故に、ただ単純に強い。その前衛を、無尽蔵に生み出すというのだ。単体ではもちろん、他の魔女と組まれると非常に不味い。逆にエレノアという娘は、幻惑魔法にさえ気をつければ、比較的やりやすい。そして、問題の四人目だ。リーダー格であり、指輪を付けていたとはいえ、師であるラギシスをも上回る魔力を持ち合わせた人物。

「そして最後が…ランス、ルークよ、彼女には特に気をつけるんだ。将来的には間違いなく人類最強クラスの魔法使いになるであろう素

質を持っている。魔法大国ゼスでも、これ程の才の持ち主は限られるだろう」

ゼスでも有数の魔法使いか。ふと、一人の青年が思い出される。何度か仕事を共にしたことのある魔法使い。魔法使いにあらずば人にあらずという思想が蔓延するゼスにおいて、そういった思想に捕らわれない珍しい男。初めて出会ったとき、あいつはまだ学生だった。ギルド仕事で学園を訪れた際、モンスターが現れ駆り出されたあいつは、得意の炎魔法で敵を消し炭に変えていった。正直、別のギルドから派遣されていた魔法使いや、その場に居合わせた教師なんかよりも、よっぽど才能を持ち合わせていた。つい先日、約10年ぶりに再会を果たした際、ゼスの兵隊になっていたのを見たときは時の流れに驚かされたものである。まあ、あちらも、10年も顔を見せないから死んだと思っていた俺と再会して、たいそう驚いてはいたが。そんな事を懐かしんでいると、最後の娘の名前を聞き逃す。

「あ、すまない。考え事をしていて聞き逃した。最後の娘の名前は？」

「ぼーっとしてるんじゃない、馬鹿者。志津香だ、志津香！」

「気をつけるよ、彼女も数多くの属性の魔法を……」

「返す言葉もないな。ゼスと聞いて友人のことを思い出していた」

「ん？美少女か？だったら俺様に紹介しろ」

「いや、男だよ」

「なんだ男か。……ん、なるほど、以前女に興味ないとか言っていたが、そういう事か。貴様、ホモだな！」

「一応訂正しておくが、女じゃなくて、お前が誰を抱いたって話に興味なかっただけだからな。」

「ル、ルークさんにそんな趣味が……」

「違うから。あり得ないから。信じないでくれ、シルちゃん！」

がはは、と一歩ルークから離れながら笑うランス、信じてしまったのかショックを隠しきれない様子でルークを見るシル、必死に弁解するルーク。やんややんやと大騒ぎを始める。

「あの…まだ話の途中なんだが…」

- カスタムの町 地獄の口 -

ラギシスから少女たちの情報を聞いた三人は、彼女たちが築いたという迷宮の前まで来ていた。住人の間では、地獄の口と呼ばれて恐れられている場所だ。

「さあ、入るぞ！がはは、とっと少女たちをお仕置きして、報酬ゲットだ！」

ランスが先頭に立ち、その後ろをルークとシルがついて行く。中に入ると辺りは暗く、少し先も見通せないほどだった。ただでさえ暗い洞窟が、地下にあることで光の全く差し込まないダンジョンになっていた。

「とりあえず明るくしますね」

シルが呪文を唱えると、2メートルくらいの位置にミニ太陽が現れ、ダンジョン内を明るく照らす。

「んー、やはり魔法使いがパートナーだと仕事がやりやすいな。もうちょい大事に扱ってやれよ、ランス」

「ふん、こいつは俺様の奴隷だから、俺様がどう扱おうが問題ない。余計なこと言つてないで、さっさと奥に進むぞ」

そう言つて先に歩いていってしまうランス。ダンジョン内はあまり入り組んでおらず、出現するモンスターもきゃんきゃんやミートボール、ハニースライムなど、雑魚モンスターばかり。道中出るモンスターを倒しながらスムーズに奥へと進んでいく三人。と、ランスの足が滑る。足下が急に坂になっていたのだ。

「げー!!」

「うおっ、人の足を掴んで巻き込むな!!」

「きゃあああああ!!」

巻き込まれるルークとシル。三人は下にあつた地下水湖に仲良く落ちていった。

・洞窟内 研究室・

洞窟内のある一室、ダンジョンを築く際、わがままを言つて無理矢理作つた部屋だ。机の上には怪しげな薬品の入ったビーカーや、拡げたままの難しそうな書物が散乱していた。そこに、少女はいた。白衣を身につけ、顔には特徴的なまん丸メガネ。彼女がここで研究しているのは、新たな兵器。魔法の才能を持たない戦士でも、魔法使い同等の威力を持った長距離攻撃を可能とする新兵器を開発していた。

「もしもこれが完成すれば…戦闘の歴史がひっくり変わるわよ…ふふ」

怪しげな笑みを浮かべ、メガネがきらーんと光る。と、そのとき研究室の入り口前からゴゴゴゴ、と音が聞こえる。モンスター進入撃退用のトラップが発動したのだ。左右の壁が迫ってきてモンスターを押しつぶす、彼女の自信作である。

「うがああああ！！なんじゃこりやああああ！！」

「きゃー、ランス様ああああ！！」

「まずい、駆け抜けるぞ！ギリギリ間に合うかもしれん！」

いけない、モンスターではなく人間が引っかかってしまったらしい。慌ててトラップのスイッチを切る。

「ん？止まったぞ？がはは、へっぽこトラップめ、故障したな」

むか。私の作ったものがそんなに簡単に故障してたまるものですか、と聞こえてきた声に腹を立てる少女。程なくして、部屋の扉が開かれる。そこには冒険者が三人立っていた。一応こちらが危険な目にあわせてしまったので、謝罪する。

「すみません、大丈夫でしたか？怪我はないですか？」

「うむ、怪我なら平気だ。ところで君は何者だ？」

一番前にいた口の大きな冒険者が問いかけてくる。彼の言うように、三人ともなぜか濡れているが、怪我はないようだ。ホッとしながら、彼女は男の問いに答える。

「ああ、申し遅れました。私の名前はマリア・カスタード。よろしくお願いします」

第14話 抱く疑念（後書き）

「人物」

ラギシス・クライハウゼン

LV 23 / 30

技能 魔法LV2

カスタムで魔法塾を開いていた魔法使い。故人。弟子でもあり、娘のような存在であった四人の少女たちに反逆され、死亡する。死語は地縛霊となってカスタムに留まる。

「モンスター」

きゃんきゃん

一つ星女の子モンスター。無邪気な性格で戦闘意欲はなく、人間魔物問わず、遊んでと持ちかける。

ミートボール

槍と盾で武装した知能を持った肉団子。食べてもおいしくない。

ハニースライム

体が溶けているハニー。ハニー誕生の儀式に失敗すると、体が固まりきらず、この形状となる。

「技」

見える見える

ミニ太陽を生み出す初級魔法。ダンジョン内を探索するのに非常に役立つ。

「装備品」

クリスタルリング

カラーのクリスタルを加工して作るアクセサリ。魔力を二倍にする効力があるが、非常に高価であると同時に、市場に中々出回らない。

「アイテム」

クリスタル

カラーの額に埋め込まれている宝石。処女を失うと色が赤から青に変化し、膨大な魔力を持つようになるが、クリスタルを抜かれたカラーは消滅してしまう。相場は20万GOLD。カラー族は見目麗しく、クリスタルは犯されれば犯されるほど魔力を増すため、一攫千金を狙う者たちによるカラー狩りが後を絶たない。

第15話 その娘、研究者

- 洞窟内 研究室 -

「こんなに友好的ですと戦い辛いですね、ランス様…何かの間違いじゃないのですか？」

シルが小声でランスに問いかけるのも無理はない。四魔女の一人であるはずの少女は、今自分たちの前で丁寧に自己紹介をしながら、ペコリと頭を下げて一礼しているのだ。シルの言うように、自分の師匠を殺して指輪を奪うような人間には思えない。まあ、そういった初見での評価が当てにならないことは、この間の王女様で証明済みだが。

- リーザス城 王女の間 -

「ぶえつくしっ！」

「リア様、大丈夫ですか？風邪気味なでしたら、今すぐお休みになつて…」

件の王女が大きなくしゃみをしていた。心配そうにする侍女。

「ううん、大丈夫。ところで、ダーリンの居場所は分かった？」

「はい。かなみの調査の結果、現在ランス様は仕事でカスタムの町を訪れているようです」

「じゃあ今すぐ向かいましょう！マリス、準備を」

「申し訳ありません、リア様。例の物を持ち出す許可が下りるのに、もう少々だけお時間が…」

「えー、今すぐ出発したいのにい…ぷんぷん」

仕事を放り出してランスに会いに行くことは特に問題視していないマリスだが、すぐに出発しようとするリアを止める。理由は王女がランスに会いに行くに当たって、城から持ちだそうとしていたモノだ。それは本来持ち出し厳禁の代物で、裏で実権を握るマリスだからこそ、色々と手回しをして持ち出すことが可能なのだ。

「早うしの準備は整っておりますので、許可が下り次第すぐに出発できます」

「急いでね、マリス。待つててね、ダーリン！」

「かなみも準備を進めておくように」

「はっ！」

この部屋にいたもう一人の人物にマリスが声を掛ける。カーテンの裏に潜んでいたかなみはそう返事をしながら、主君が目当てにしている人物とは別の人のことを考えていた。

「（調査しているときに分かったんだけど、ルークさんも今カスタムに滞在してるみたいなのよね…偶然会ったりとかするかな…）」

・洞窟内 研究室・

「なんだか寒気が…」

「大丈夫ですか、ランス様？」

「それで、あんたはここで何の研究をしているんだ？」

ランスが得体の知れぬ悪寒を感じ取っている横で、ルークはマリアにそう尋ねる。すると、マリアがンバツ！と目を輝かせてルークを見た。

「興味ある？興味あるのね！しょうがないな、ちよつとだけ説明してあげる！魔法って才能ある人しか使うことが出来ないでしょ。だから自然と魔法を使えない人は戦士として前衛に立つことが今の戦闘の通例になってるの。でもそれを覆せるとしたら？戦士にも魔法使いと同じだけの破壊力を持った後衛攻撃が出来るようになったら？」

「一応遠距離をこなす戦士も少数だが存在はするんじゃないか？弓矢とかの武器もあるし、遠距離技を使う奴もいるしな」

捲し立てるように喋り出すマリアにちよつと引き気味になりながら、ルークが尋ねる。自分自身、一応真空斬という遠距離技を持っているからこそ、彼女の発言に少し引かかったのだ。すると、マリアはやれやれ、分かってないな！という顔をしてみせる。

「確かにそういった例外もあるわ。でもね、弓矢なんかはある程度のセンスや努力が必要だし、必殺技なんかそれこそ持って生まれた才能が必須になるでしょ。そうじゃなくて、才能も努力も必要としない新兵器の開発をしているの！」

「努力を必要としないというのは無茶じゃないですか？やっぱり強くなろうとしたら、ある程度の努力が必要にはなってくるかと……」

「無茶を可能にする！そういった研究をしてるの！もしもこれが完成すれば……ふふふ……」

シイルの問いに、グツ！と右拳を握りしめマリアが答える。その瞳は燃えていた。一見すればマッドサイエンティストの類に見られ

かねないが、確かに彼女の言う兵器が本当に実現すれば、戦いの歴史は大きく動くだろう。

「そこまで言うとなると興味があるな。どういった兵器か俺様に見せてみる」

「残念だけどそれは秘密。まだ完成していないもん。詳しい質問も受け付けないわよ。私が欲しいのは弟子じゃなくて、研究を手伝ってくれる人なんだから」

「こら待て、俺様を助手扱いとは無礼な！」

「…あれ？助手希望の人じゃなかったの？だったら助けるんじゃないかな」

そう言うてのけるマリア。今の発言に、ルークは少し思うところがあり、問いかける。

「つまり…助手希望の人間でなかったら、死んでしまっていても構わなかったと？」

「うん、だって時間の無駄じゃない」

先ほどまでと何ら変わらない調子で、マリアは恐ろしいことを言うてのける。それがさも当然であるかのような様子に、ルークは若干身震いする。こんな少女が…

「わあ、私たち間違われたおかげで助かったんですね。ラッキーです」

ガクツ、とルークがこける。相変わらずシルは少し天然が入っていた。

「喜ぶな、バカ」

「ん？助手希望じゃないとなると…もしかして敵？」

「うむ！四魔女を退治しに来たのだ！」

「あー、それじゃあお帰りはあちらです。研究の邪魔になるから出て行ってください。早く出て行かないと警備のハニーやグリーンハニーやダブルハニーをたくさん呼ぶわよ」

「ハニーに何かの拘りでも！？」

マリアがお帰りください、とルークたちの入ってきた扉を指さす。警部と呼ばれるという発言を気にする様子もなくランスが答える。

「がはは、そんな雑魚どもは全く怖くないぞ。それより、どうして町を陥没させたんだ？」

「……………」

「質問を変えよう。フィールの指輪は？」

「一つは私が持っているわ。ほら、これがそうよ」

マリアが手をかざすと、その指には青い指輪が填められていた。本当にあったのか…とルークは内心動揺する。

「あなたもこの指輪が目当てなの？でも渡せないわ」

「がはは、なら力尽くで奪うまでだ！」

ランスがそう言うと同時にルークも臨戦態勢に入る。魔力を数倍にするというのが本当なのであれば、油断するわけにはいかない。魔法を使われる前に取り押さえる。

「はあ…なら悪いけど死んでね」

油断したつもりはなかった。初級魔法ならばいくら魔力が上がっていたところで対応は可能だし、中級以上ならば呪文の詠唱をして

いる間に飛びかかれるよう構えていた。しかし、結果はどちらでもなかった。マリアの後ろに水の柱が噴き上がる。

「ほぼ無詠唱で中級魔法だと!？」

「迫激水!!」

水の柱が滝となり、ルークたちに襲いかかる。攻撃範囲が広く、逃げ場がない。

「ぐっ…」

「うがぁ、水が水が水が!!」

「あーん!ぶくぶくぶく…」

滝に飲み込まれ、部屋の外に押し流される三人。それを見届けると、マリアは新しいトラップを発動させて、時間を無駄にしたというような顔つきで研究の作業に戻っていった。

・洞窟内 研究室前・

「うがぁぁぁ!開けろぉぉ!!」

ランスが扉をがしがしと蹴る。かなり遠くまで押し流された三人が部屋の前まで戻ると、扉は固く閉ざされ中に入ることが出来なくなってしまうていた。

「結界…とは違うな。さっきのトラップと同じで、何かしらのカラクリか」

「これじゃあ、マリアさんにもう一度会うことが出来ませんね」

「ひとまず洞窟内に扉を開ける手段がないか搜すぞ！あの女、今度は容赦しないぞ。あんな事やこんな事してやる！」

ぶんすかと怒りながら、洞窟内の先に進んでいくランス。それにルークとシルはついて行くが、ルークは先ほどの見通しの甘さを反省していた。魔力が上がる、ということだけを鵜呑みにし、詠唱時間さえも早まるという可能性を考えていなかった。一つ間違えれば、それが命取りになる。冒険者として気を引き締め直すと、少し開けた場所に出た。

「あ、ランス様！あそこにどなたかいらっしゃいますよ！？」

言われた方を見る二人。そこには傷だらけの女性がいた。格好や近くに落ちている剣を見るに、冒険者だろう。すると、彼女が苦しそうにこちらに問いかけてきた。

「だっ…誰？」

「心配しなくて良い、同業者だ。俺はルーク、こっちの二人は同じく冒険者のランスと、そのパートナーで魔法使いのシルだ」

「ふむふむ、美人じゃないか。…ぐふふ」

「よろしく願います」

「…どうやら貴方たちは奴らの仲間じゃなさそうね。私はネイと言…い…ゲホッ」

挨拶の途中で辛そうに咳き込む。放っておくと危険な状態だ。

「シルちゃん、とりあえずヒーリングを」

「はい。いたい…のいたい…の、とんでけーっ！」

シルが治癒魔法を唱える。彼女の傷がふさがっていき、顔色が

良くなっていく。

「ふう…ありがとう。随分と楽になったわ」

「応急処置だからしばらくは安静にしていた方が良いな。こんな状況ですまないが少し聞いて良いかな？君は一人でこの迷宮に来たのか？」

「いいえ、私たちが迷宮に入ったのは四日前。私、ゼウス、カーネル、バードの四人で入ったの。目的は多分貴方たちと同じ、四魔女退治ね」

「うむ、俺様たちも同じ目的だ。それで、他の奴らはどうした？」

「水の彫像に負けて、みんな散り散りになってしまったわ」

「水の彫像？」

「強いんですか？」

「第二研究室を守っているガーディアンよ。恐ろしく強い上に二体いてね。私たちのパーティーでまともに応戦できていたのはバードだけだったわ」

「それはお前らがへっぽこだったからだろう。で、第二研究室とはなんだ？」

「へっぽ…！？」

ランスの発言に顔を歪めるが、一応命の恩人であるため話を続けるネイ。

「…あの迷宮にはマリアの研究室が二つあるの。一つはトラップで守られた第一研究室、もう一つが水の彫像に守られた第二研究室。基本的にマリアはどちらかにいるわ」

「俺たちが会ったのは第一研究室だな。扉を開ける手段があるか分からんし、第二研究室に向かった方が良さそうだな」

「待つて。第二研究室に向かう途中の扉には鍵が掛かっているわ。頑丈な扉だし、破壊しての進入も難しいと思うわ」

「鍵か…水の彫像まで辿り着いたということは、君たちはその鍵を持っていたんだろう？その状態では探索の継続は無理だろうし、悪いが譲って貰えないかな？」

「ええ、ダンジョン内の宝箱から発見して持っていたわ。でも、彫像から逃げる途中で落としてしまったの。落とした場所は、多分地下水湖だと思う」

「おお、その場所ならさつき通ったぞ。よし、ルーク、捜してこい！」

「俺かよ…」

「当たり前だ！ネイちゃんを町まで送り届けなきゃならんがそれには護衛がいるし、悪化したときのための治療用でシルも必要だからな」

まあ筋は通っている。シルがネイと一緒に行動するのが確定な以上、主人であるランスがそちらの護衛をするのが普通の考えだ。

「ま、いいか。町の酒場で待っていてくれ。ネイは怪我人だからな、無茶はするなよ」

「がはは、任せておけ」

「あ、一緒にかえるの耳飾りも落としてしまったの。大事なものだから一緒に捜してきて貰えないかしら？」

「了解した。じゃあ行ってくる」

そう言って地下水湖に向かうルーク。残された三人の内の一人が、口をにたつと開いた。

「じゃあ、私たちも町に引き返しましょう。帰り木は持ってるのかしら？」

「……………」

「…なんでにじり寄ってくるの？なんで笑っているの？なんで何も

答えないの？なんでそっちの娘は遠い目してるのおおおお！？」

・カスタムの町 酒場・

「いらっしゃーい。お仲間なら奥の席にいるよ」

酒場に入ってきたルークにエレナがそう言って案内する。その後地下水湖まで引き返したルークは、時間を掛けて捜した結果、鍵と耳飾りを発見し、約束の酒場までやってきたのだ。

「戻ったぞ。一応どっちも発見した…ん、ネイはどこに行った？」
「がはは、泣きながら「いつか殺してやる」とか言っでどこかに行ってしまったわ」

…おかしい、この展開、最近どこかで体験したような。

「…無茶はしないように言っておいたはずだが…」
「うむ、英雄である俺様とのHは無茶な行動ではないな。がはは」

…そう、あれは確か盗賊団の…

「そうそう、お前も含まれてたぞ。「治療してくれたシイルはいいけど、あんたら二人にはいつか地獄を見せてやる！！」とか言ってたし」

「完全にデジャブッ！！」

第15話 その娘、研究者（後書き）

「人物」

ネイ・ウーロン

LV 8 / 27

技能 シーフLV1

女冒険者。傷つき倒れたところをランスに襲われる。ランスとルークを恨んでどこかへと姿を消す。いつか某盗賊の娘と一緒に復讐に來たりするかもしれない。

ゼウス

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、モンスターに襲われ死亡。

カーネル

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、足を滑らせ転倒し死亡。

「モンスター」

ハニー

茶色い基本形ハニー。意外なことに、ランスシリーズに初登場したのは6。

グリーンハニー

緑色のハニー。右手にトライデンを持つ。1から長いことシリーズ皆勤を続けていたが、戦国ランスにて遂に記録が途切れる。正直、出して欲しかった。

ダブルハニー

誕生の際、失敗して二体くっついてしまったハニー。右手にトライデン、左手に花を持ち、お腹には日の丸の国旗がある。右と左で性格が違う。

「技」

迫激水

氷系内水類の中級魔法。水の柱が噴き上がり、滝となって相手に襲いかかる。

「アイテム」

帰り木

ダンジョンから脱出する事の出来る冒険者の必須アイテム。一度使うとなくなる。

かえるの耳飾り

ネイの大事なもの。返しそびれたのでルークが一応持っている。

「その他」

ハニー種

ハニワ状の不思議な生物。男女の区別があり、同種内で繁殖可能。人間ともある程度共存している。魔法を無効化する「絶対魔法防御」という特性を持つ。

うし

ムシの一種。丸っこい赤い体でみゃーみゃーと鳴く、世界で最もポピュラーな家畜。足が速く、上手く走らせれば時速100kmに

も達する。はやつまやてはさき等つしよりも速い生物も存在するが、
うしが最も簡単に扱えるため、交通手段としても広く利用されてい
る。

第16話 水使いマリア

・洞窟内 第二研究室前・

「これがネイの言っていた水の彫像か」

「うーん、腰のラインがいやらしい」

三人は洞窟内に戻り、第二研究室前まで来ていた。そこには美しい女神像が二体並んでいた。彼女の話の通りなら、これがこの部屋を守るガーディアン。

「部屋に入ろうとすると動き出すタイプか？」

「では入る前に破壊してしまえばいいんだろう。がはは、とぉー！」

ランスが剣を振りかぶり、女神像を破壊しようとする、轟音と共に二体の彫像が動き出した。

「我らが眠りを妨げる不埒者ども」

「その身で償いをするがよい」

「ええい、部屋に入ろうとしなくても動き出したではないか、この嘘つきが！」

「別に断定してなかっただろうが。ランス、右の彫像は任せた。シルちゃん、後ろから援護を頼む」

「はい！」

ルークはそう言うと、左から襲いかかってきた彫像に対峙する。見るからに頑丈そうな彫像だが、一定の距離で止まると呪文詠唱を始めた。彫像だから物理攻撃メインかと思ったが、どうやら魔法攻

撃タイプのようだ。ルークもその距離で腰を落とし、剣を左から右へ振り抜く。

「真空斬！」

ルークの放った斬撃は彫像の腕に直撃し、右腕が崩れ落ちる。が、特に気にすることなく呪文詠唱を続ける。

「水雷」

「おっと…痛みを感じてないな。一気に破壊するのが得策か」

彫像の放った魔法を躲し、ルークが彫像への戦闘方針を決める。少し離れた場所で、ランスももう一体の彫像と対峙していた。が、その瞳はとろん、と閉じかけている。

「えい、炎の矢！ランス様、起きてくださいーい！」

「おお！くそ、厄介な魔法使いやがって！」

シルが炎の矢を彫像に放ち、寝かけていたランスを起こす。そう、ランスは彫像の放ったスリープの魔法で眠りかけていたのだ。地味ながらも強力な魔法である。

「水雷」

「ふん、一気に仕留めてやる。必殺、ランスアタアアックー！」

彫像の放った魔法を空中に飛び上がることで躲し、その頭に渾身の力で剣を叩き込む。剣の直撃の威力と、そこから発せられた闘気が重なり合い、彫像は粉々に砕け散った。

「ふん、ざっとこんなもんよ」

そう言い、ルークの方を見る。すると、ルークもシルの炎の矢の援護を受け、空中に飛び上がったところだった。その姿が先ほどのランスと重なる。っておい、ちよつと待て…

「真滅斬!!」

闘気を纏った刃が彫像の頭から下半身まで一直線に走る。真つ二つになった、彫像が崩れ落ちた。

「な…な…な…」

「ランス、終わっていたのか。時間を掛け過ぎたな、すまん。」

「パ…」

「パ？」

「パクリだ！俺様のランスアタックのパクリだ！貴様にはプライドがないのか!!」

ランスがそう大声を上げ、慰謝料だ、賠償金だと騒ぎ立てる。

「いや…一応10年以上使っている技なんだがな…」

「ふん、証拠がないな。きつとこの間のユラン戦で見てパクツたのだろう」

「一応キースに聞いて貰えば証言してくれると思うが」

「あんなハゲの言うこと信用できるか！今後その技を使いたければ一回につき10000GOLD俺様に払え！」

「いやいやいや。おかしいから、その金額。それに構えは似てるけど微妙に違うから。俺のは一点集中型。お前のは拡散型。俺にはあんな風に闘気を爆発させて周りを巻き込むなんて芸当、真似出来ないやー、才能の差かな。凄いなー」

「むっ、そうだな。がはは、俺様は天才だからな。うむ、言われて

みれば確かにちょっと似ているだけで、俺様のものとはレベルが違
うな。」

そうルークが煽てると、わかりやすく反応するランス。なんとか
慰謝料だか賠償金だかを払う危機を乗り切ったようだ。上機嫌で第
二研究室に入っていくランス。それを追いかけながら、シイルがル
ークにぼそつと喋り掛けた。

「すみません、ルークさん。…でも、本当に似ていましたね」

そう言ってランスの後を追っていくシイルの後ろ姿を見ながら、
ルークは小さな声で呟いた。

「似てる…よな、やっぱり。ってことは…そういうことなのかね…」

その言葉は、ランスとシイルの耳に届くことはなかった。

・洞窟内 第二研究室・

「……あ……」

扉をくぐると、そこには MARIA がいた。扉の先はすぐに第二研究
室に繋がっている訳ではなかったようで、開けた場所になっており
少し道が続いている。MARIA は別の道を通って、この扉の前に来た
ところだった。おそらく、第一研究室から直通で道が繋がっている
のだろう。

「がはは、さすが俺様の強運！見る見る、すっかり MARIA がいたぞ

！」

「はい、とってもラッキーです」

「げ、なんでここに」

「そちらこそどうしてここに？その道がおそらく第一研究室と繋がってるんだろうが、第二研究室に用事でも？」

「第一研究室は貴方たちのせいで水浸しになっちゃったのよ！責任取ってよね！」

ぶんすかと怒るマリアに対し、どう考えても自分のせいだろ、と思うルーク。

「ふん、そんなことはどうでもいい！さあ、勝負しろマリア！今度は俺様が勝つ番だ！」

「まあ、三対一で申し訳ないが、諦めてくれ」

「ふん、この指輪がある限り、私は負けない。それが死なないと判らないみたいね！」

マリアがそう言つて手を前に差し出すと、詰められていた指輪が妖しく光る。それが戦闘開始の合図だった。

「行くぞシイル、ルーク！」

「シイルークって名前みたいですネ」

「暢気だな、シイルちゃん……」

「迫激水！」

マリアが唱えると、水の柱が滝になって三人に襲いかかる。が、先ほどと違い全員がそれを避ける。第一研究室のときは、部屋が狭く、部屋の外の通路も狭い一本道であつたため逃げ場がなかった。しかし、今は違う。ランスとルークは素早く左右に避ける。そう、ここは開けた場所であるため、多少範囲の広い攻撃でも十分に避け

るだけのスペースがあるのだ。シルも扉をくぐって前の部屋に戻り滝をやり過ごした。

「ちっ、水雷」

続けて水雷を放つマリア。ルークが躲すと魔法は後ろの壁に命中し、壁が崩れた。本来はあまり威力のない魔法だが、指輪のせいであまり凶悪なものになっていた。

「がはは、俺様がお仕置きしてやる」

「水雷水雷水雷水雷もいっちょおまけに水雷！」

「うおっ、連発するんじゃない！！！」

元々連発可能な魔法ではあるが、流石にもうちよつと時間が掛かる。ここまでノータイムで連発されては流石のランスとルークも近寄ることが出来なかった。近寄りさえすれば、一撃で仕留められる。後はどう近づくか…するといつの間にか部屋に戻ってきていたシルが炎の矢で応戦を始める。

「炎の矢、炎の矢！」

「ふん、水雷水雷水雷水雷」

威力が違うため相殺とはいかないが、炎の矢が直撃した水雷は威力が落ち、ルークたちに届く前に地面に落ちる。が、詠唱速度が違いすぎる。

「ええい、シル！もつと連発しないか！」

「すいません、ランス様。これが限界です…」

「いや十分だ。多少余裕が出来た」

シルのお陰で避ける動作に余裕が出来たルークは腰を落とし、剣を振り抜く。

「真空斬！」

放たれた刃が水雷とぶつかり、相殺する。

「嘘…遠距離攻撃が使えたの？威力も高いし…でも速さが伴わなきゃ…」

「真空斬！真空斬！真空斬！」

「れ、連発可能！ずるいわよ！みつ、水雷水雷水雷」

「炎の矢、炎の矢」

立場が逆転する。ルークとシル二人の攻撃をマリアが相殺する形となり、自然とランスに攻撃の手が回らなくなる。

「決める、ランス！」

「おお、くらえええい！！」

マリアの方に前進し、ほどよい距離で空中に飛び上がりランスアタックの構えを取る。狙うはマリアの手前の地面、ユランのときと同じように衝撃波で吹き飛ばすつもりだ。

「引つかかったわね、まずは…迫激水！」

そう言うとマリアがルークとシルに向かい迫激水を放つ。それを左右へと躲す二人。と、同時にマリアの意図が読めたルークは慌てて腰を落とす。マリアはランスに向かって両手を揃えて突き出した。あれは上級魔法。

「さっきまでで斬激の速度は見たわ、すぐに気がついたのは良かったけど、そこからじゃ間に合わないわよ。…死ね、ウォータミサイル！！」

「んげ！！！！」

「ランス様ああ！！」

マリアの両手から強力な水の塊が撃ち出される。指輪で増幅されたその威力は、直撃すれば一溜まりもない。焦るランス。

「ランス、俺を信じて気にせず振り抜け！うおお、真空斬！！！」

ルークが真空斬を放つ。間に合うわけがない、とマリアは思っていた。それが誤算。マリアは先ほどまでの真空斬がルークの全力だと思い込んでしまっていたのだ。真空斬は闘気の量によりその威力、速度、連射性が変化する。先ほどまでは連射性を上げるため、威力と速度をある程度落としていたのだ。そして、今から放つのは闘気を十二分にためたため連射できないが、威力、速度共に申し分ない全力の真空斬。放たれたその刃は、ランスに迫っていたマジックミサイルに直撃し、水の塊が半分に割れる。割れた魔法はランスに命中することなく地面へと落ちていった。

「うそ…そんな…」

「ランスアタアアツク！！」

ランスアタックがマリアの目の前の地面に命中し、衝撃波がマリアを襲う。吹き飛ばされながらマリアはまだ自分の敗北を実感できずにいた。

その部屋にある人影は三体。明かりは点っておらず、顔が判らない。ふいに声が発せられた。

「マリアがやられたようだな…」

「フフフ…奴は四魔女の中でも最弱…」

「冒険者ごときに負けるとは魔女の面汚しよ…」

パチツ、と部屋の明かりが付く。そこにいたのは一人の少女と二体の幻獣であった。明かりを付けたのは新しく部屋に入ってきた女性、四魔女の一人エレノア・ランだ。

「もう、ミル！暗くして遊んでたら目が悪くなるでしょ。それに今の喋り方はなんなの？」

「漫画で読んだの。かっこいいでしょ？」

部屋の中にいたのはミル・ヨークス。こちらも四魔女の一人だ。

「幻獣は立ってるだけで、全部自分で喋っちゃってるじゃない。それに、マリアを勝手に最弱にしたり、負けさせたりしないの。ちゃんと謝っておきなさい」

「はい」

まさか本当にマリアが負けていようとは夢にも思っていない二人であつた。

第16話 水使いマリア（後書き）

「モンスター」

水の彫像

第二研究室を守るガーディアン。スリープ等の高度な魔法を使用してくる強敵。初代2では、運が悪いと本当に何も出来なくなるため、初見で殺されたプレイヤーも多いはず。

「技」

真滅斬（オリ技）

使用者 ルーク

ルークの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす技で、構えがランスアタックと非常に似ている。衝撃波を生み出して広範囲に影響するランスアタックと違い、刃に込められた闘気は拡散することなく直撃した相手を斬り伏せる。単体攻撃だが、直撃時の威力はランスアタックよりも上。

炎の矢

指先から生み出した炎の塊を放つ初級魔法。魔法使いがまず初めのうちに習うことになる基本魔法だが、使い勝手は良い。

水雷

指先から生み出した水の塊を放つ初級魔法。水魔法の使い手は少ないため、割とレア魔法である。

ウォーターミサイル

揃えた両手から濃縮された水の塊を放つ上級魔法。レアな水魔法の上級呪文なため、使い手が殆どいない。

スリープ

対象に眠りをもたらす支援魔法。非常に強力な魔法で、その分使いこなすのに高度な技術を要する。ゼスにはこれだけが得意な珍しい魔法使いもいるらしい。

第17話 明かされた真実

・洞窟内 第二研究室前・

「がはははは、新兵器開発とか言っていたな。これが俺様のハイパ
ー兵器だー！」

「うわ、でか！ーいやー！」

部屋の中からランスとマリアの声が聞こえる。今は勝者の特権、
お楽しみタイムだ。ルークとシイルは部屋の外で待っていた。一般
人や無抵抗の人間を無理矢理犯そうとすれば多少の苦言は呈するが、
基本的に向かってきた相手を犯すことに関してはルークは何も言わ
ない。人によつては外道とも言うであろう行為だが、命のやりとり
をしているのだ、たかだか犯される覚悟もない奴が向かってくるな
というのがルークの考えだった。もちろん万人に受け入れられる感
覚ではないだろう。以前ラーク& amp ;ノアコンビと共に仕事を
した際、この事を話したら理解できないと苦言を呈された。逆にル
ークから言わせるとあの二人が純粹すぎるという感覚。キースから
言わせればどっちもどっち、とのこと。ふと少し離れた位置にいる
シイルを見ると、悲しそうな顔をしていた。

「はあ……」

「どうした、シイルちゃん。ため息なんかついて。やっぱり……こう
いうのは嫌か？」

ため息を吐くシイルを見かねたルークが問いかける。

「いえ、私はランス様の奴隷ですから……」

「…リーザスのかなみと俺が話したとき、側で聞いてたよな。その上での意見かな？」

「…出来れば、止めて欲しいです。でも…」

「まあ、言って止めるような奴じゃないだろうしな…」

「…ランス様にとつて…私なんてどうでもいい存在なのかな…」

そう言つて更に落ち込むシイル。自然と涙が頬を伝う。やれやれ、一番大切な人を悲しませてるんじゃないやねーよ、とルークは思う。まあルークがマリアとの情事を止めなかったのも原因の一環ではあるのだが、それはそれ。

「とおおおお！…！！！」

「ああああああん！」

という声が聞こえたかと思うと部屋の中が静かになる。どうやら終わったらしい。

「どうやら終わったみたいだな。シイルちゃん、部屋に戻ろうか」

「あ、はい。ありがとうございます」

そう言つて部屋に戻ろうと扉に向かう二人。扉に手を掛けながら、ルークはシイルに声を掛ける。

「大丈夫だよ、シイルちゃん。ランスは君のことを大切に思っている」

そう言いながらルークが振り返り見たのは、シイルが魔力を帯びた光に包まれている姿だった。

「きゃあああああああ！」

「あれは…テレポートウェイブ！シイルちゃん！！」

シイルを包んでいた光にルークは見覚えがあった。依頼で魔法使い退治をした際、一度だけ見たことがある。光で包んだ対象をどこか別の場所にワープさせる魔法装置、テレポートウェイブ。ルークは慌ててシイルに手を伸ばすが、その手が届ききる前にシイルは光に吞まれ、この場から消えてしまった。

「しまった…」

どこかに魔女を一人倒したことで気の緩みがあったのかもしれない。一人取り残されたルークは拳に爪を食い込ませながら自身の油断を悔やんだ。

・洞窟内 第二研究室・

「おつかしいなー、この指輪どんなことしても外れなかったのに、どうして外れたんだろう」

部屋の中では情事を終えたマリアが不思議そうに指輪を見ていた。ランスとのHが終わると、それまで絶対に外せなかったフィールの指輪が外れたのだ。

「スケベの力は偉大ということだ。それよりも、今後のことだが…」
「わかっているわ、町の人たちにこんな迷惑を掛けたんですもの。償いはちゃんとする。でも…その前にラギスだけは許せない！」

大きな変化は指輪が外れたことだけではない。マリアの様子が変化していたのだ。自分の行いを悔やみ、町の人たちへの償いをした

いと自ら申し出てきたのだ。反省や心境の変化で済ませるにはあまりにも唐突な異変。

「ラギシスを許せないとはどういうことだ？お前たちが反乱を起こして指輪を奪ったんじゃないのか？」

「違うわ…私たちは…話したら長くなるけど…」

マリアが口を開き掛けたところで、バンツと扉が開く。部屋に入ってきたのはルークだ。が、様子がおかしい。それに一緒であったはずのシイルの姿がない。

「ランス…スマン、落ち着いて聞いてくれ…」

「ん？何だ急に？それにシイルはどうした？」

「…シイルちゃんが攫われた。…俺の失態だ」

「な…なんだとおー！…ルーク、貴様がいながら何をしていた！
！…」

「待って、攫われたってもしかしてテレポートウェーブじゃない？
だったら防ぐのは難しいんじゃない？」

「ああ、テレポートウェーブだ。だが、俺がもつと周りに気を張っていれば、シイルちゃんではなく俺が転送されるという手段もあった。一人で戦うことの出来る戦士ではなく、前衛がいないとともに戦うのは厳しいシイルちゃんが一人になってしまったということが最悪なんだ」

「な…なんてことだ…シイル…」

ランスがへたへたと座り込んでしまう。普段の気丈な態度からは見て取れない落ち込み様だ。先ほどまでとの態度の一変に驚くマリ
ア。

「げ、元気出してよ。きっと見つかるはずだから…」

ランスを慰めながら、マリアはその落ち込みように、実は悪い人じゃないのかも、とランスの評価を改めていた。

「…あいつに有り金全部持たせてたのにー！シルのばかやるー！俺様の許可もなくいなくなりやがってー！！」

「えっ！そんな理由なの！？」

「ふん、まあ俺様がすぐに見つけ出してお仕置きしてやる。シルめ、待っている。がはは！」

そうあっけらかんとした様子でランスが言うのを見てマリアが呆れる。その後、とりあえず今後の方針をまとめるため一旦町まで戻ることとなった。帰り木で町にワープする直前、ルークはランスだけに聞こえるよう小さな声で話しかけた。

「本当にすまない、後でぶん殴ってくれて構わない。…必ず助け出す！」

「…ぶん。しっかりと働けよ」

- カスタムの町 酒場 -

「いらつしゃーい、…あれ？あのゴッドオブヘアーの娘は一緒じゃないの？それにそっちのコートの人は新顔さん？」

酒場に入るとエレナが元気に声を掛けてくる。シルがおらず、代わりにフード付きコートを深く被り、顔のよく分からない人物がいるのが気に掛かり尋ねてくる。

「がはは、あいつは邪魔になったから捨ててやったわ」

「ランスさん、ヒドすぎ…」

「宿泊用の奥の部屋、開いているかな？出来れば少しだけ使いたいのだが」

「開いてますよー。では、三名様ご案内です！」

この酒場は奥の部屋を宿泊施設としていた。本来宿屋が別にあつたのだが、現在建物が崩れていて使い物にならないため、元々は酔った客の介抱用であつた部屋や物置などを片付け、冒険者のために開放していたのだ。部屋まで通され、エレナが出て行つたのを見送ると、マリアがコードを脱ぐ。町をこんなにした犯人の一人であるマリアが見つかればパニックになるため、このように姿を隠していたのだ。

「ふう…暑かつた」

「そついえばそちらだけにさせてしまつて、こちらの自己紹介がまだだつたな。俺はルーク」

「俺様は英雄ランス様だ。そして、今攫われている無能のバカが奴隷のシイルだ」

「もうちよい言い方つてものが…まあ、とりあえず始めましょうか」

そう言つて、マリアは自分たちがどうしてこのような事件を起こしたか、説明を始める。

「私たちはこの町の守護者となるため、ラギスから必死に魔法を教わつたわ。そして、半年前ラギスは私たちに卒業証書だと言つて一人一つずつ指輪を渡したの。それがこのフィールの指輪よ」

「盗んだんじゃないかつたのか？」

「違うわ。あつちから渡してきたの。でもこれは、着けてはいけな
いものだつたの。その晩、私の部屋に志津香がやってきたんだけど、

ラギシスの独り言を聞いてしまったらしいの」

「やはりそうか…全てラギシスの陰謀だったんだな？」

「そう、全てあいつが元凶よ」

「なんだ？ラギシスが怪しいと気がついていたのか？」

「確信は持てなかったが…奴の話に色々引っかかる点があつてな。もう少し情報が集まったら一応お前らにも言うつもりだったんだが…」

奴の言う通りなのであれば国宝級の指輪。それを自らは身につけず弟子に渡すという不可解な行動。これらがルークには引っかかっており、素直にラギシスを信用してはいなかった。

「着けてはいけない…というのは、やはり呪いの類か？」

ルークは当初、指輪がラギシスの言っていたような効果はないのではと疑っていたが、最初にマリアと戦闘した際の魔力量や高速詠唱から、その考えを破棄。次に疑っていたのが装着者が何かしらのデメリットを被る、いわゆる呪いだ。

「その通りよ。この指輪は十人分の魔力を吸い取って成長する恐るべき指輪だったの。既に九人分の魔力を吸い取った指輪を手にしたラギシスは、最後の媒体となる四人の魔法使いを捜していたのよ」
「ほー、つまりラギシスは指輪を回収するためだけにお前たちを育てていたわけだな」

「ええ、そしてそれを私たちが偶然知ってしまった。許せなかった…信じていたのに…」

「なるほど…それが反逆へと繋がるのか」

「ええ、そうよ。それに、魔力の溜まりきったフィルの指輪を四つ全て着ければ、無限の魔力を手に入れると言うわ。でも、この指輪を外されたら最後、私たちは魔力を失ってしまう。だからラギシ

スに戦いを挑んだの。戦いの衝撃で町は地下に陥没してしまったけど……」

「なるほど……ラギススや町長から聞いた話とかけ離れているな。それが真実か」

ルークの発言にマリアが驚きで目を見開く。目の前の男は、死んだはずの人間から話を聞いたと言ったのだ。それも、自らの手で殺した相手。

「ラギススが生きているの！？確かに殺したはずなのに！」

「生きてはいない。奴の館に地縛霊として漂っている」

「そう……後で見に行かないとね……そして、今度こそ……ふふふ」

マリアの目に殺意がこもる。無理もない話ではあるが。

「それで、マリアたち四人が迷宮を築いたのも指輪の影響ってことで良いのか？」

「ええ、この指輪には人を悪の方へ惑わせる力があるわ。気がついたら迷宮を築いて、やってくる冒険者たちを返り討ちにしていたわ。こんな地下迷宮築いて……私たちは何を……志津香たちも救わないと！……なるほどな……」

「ふん、指輪のせいで悪いことをしてるなら、指輪を外してやればいいんだろ？で、この指輪を外す条件は処女を奪うで良いんだな？」

「ん、そうなのか？」

「ええ、多分。きっと魔力を込める対象になるのが処女なんだわ。その条件を失えば、指輪は外れる……っていうことだと思う」

今まで決して外れなかった指輪が、ランスに犯された直後に簡単に外れたことからマリアはそう推理した。ルークも話を聞いてその

見解に賛成した。処女というのは神聖なものとして、儀式の条件などによく持ち入られるものであったからだ。

「なるほど、つまり事件解決のためには俺様が他の三人の処女も奪えばいいんだな！ぐふふ、これは面白いことになってきた。仕方がない、正義の為に俺様が苦勞してやろう」

「…別にルークさんでも良いんだけどね」

「んー…状況が状況だし、相手がランスよりも俺の方が良いと言ったら抱きはするが…」

「ふざけたことを言うな！他の三人の処女も俺様のものだ！よし、そうと決まれば行動だ！まずはあの大嘘つきなラギシスの館に向かうぞー！」

そう言つて腰掛けていた椅子から立ち上がり、外に出ようとするランス。が、後ろからマントを誰かに引っ張られる。振り返ればそれは MARIA だった。決意のこもった瞳をしながら、MARIA は口を開いた。

「私も…連れて行つて！」

「…大丈夫なのか？」

「君は操られていただけだ。責任を感じる必要はないぞ」

「いいえ、操られていたとはいえ、町をこんなにしたのは私たちよ。足手まといにはならないわ、だからお願い！私もみんなを救いたいの！」

MARIA が必死に懇願する。と、ランスが MARIA の手をマントから無理矢理離して部屋から出て行こうとする。焦った MARIA が何か言おうとするが、それよりも先に口を開いたのはランスだった。

「行くぞ、ルーク、MARIA。俺様の足を引っ張るなよ！」

「ああ、シイルちゃんも、操られている三人も救い出さず。よろしくな、マリア」

二人の話の流れについて行けず、混乱していたマリアだが、情報を頭の中で整理していき、その顔がだんだんと喜びに包まれていった。そして、満面の笑顔で二人に返事をする。

「うん、二人とも、これからよろしくね！」

第17話 明かされた真実（後書き）

「人物」

マリア・カスタード

LV 13 / 35

技能 新兵器匠LV2 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。師であるラギスを殺害するが、それはラギスに裏切られたが故の行動であった。現在は他の三人を救うため、行動を共にする。水魔法を得意としていたが、指輪を外された際にその魔力のほとんどが奪われ、その力を失ってしまった。だが魔法以上に非凡な才能を持ち合わせているのは、兵器開発の面。彼女の発明の多くが、今後歴史にその名を残すことになる。

「技能」

新兵器匠

特殊な新兵器を開発する才能。LV2ともなれば、歴史に名を残せるほどである。

「装備品」

フィールの指輪

赤、青、黄、白がある四つの指輪。処女十人の魔力を吸い込んだ四つの指輪全てを身につけることにより、無限の魔力を手に入れることが出来る。長く身につけていると精神が蝕まれ、邪悪な心に支配されてしまうという呪いのアイテム。ラギスがかつてゼスのある魔法使いから譲り受けたものらしい。

「その他」

テレポートウェイブ

対象者を決められた場所にワープさせる魔法装置。敵を分断させたり、自らの逃亡などに使用することが出来る。

第18話 新たな事件とチューリップ

- カスタムの町 ラギス邸跡 -

「こら、ラギス！よくも俺様を騙したな！」

「黙ってないで出てきなさいよ！！」

ラギス邸跡に入るやいなや、ランスとマリアがそう言って大声を上げた。しかしラギスが出てくる気配はない。

「変だな？出てこんぞ」

「どういうことかしら…本当にここにラギスがいたのよね？」

「ああ、ここに確かにいた。逃げたか？だが、俺たちがマリアと合流したことは誰も知らないはず…」

「成仏しちまったか？」

「そんな…そんなのってないわ…私たちをこんな目にあわせて、自分だけ成仏するなんて…」

ラギスをもう一度殺すつもりだったマリアはへなへなと崩れ落ち、悔しそうに呟く。フォローを入れようとしたルークだが、マリアはすぐに立ち上がって、くよくよしても仕方がないから気を取り直して三人を助けよう、と自分で立ち直った。中々にポジティブな性格である。

「前向きだな。いいことだ」

「だって、ラギスは憎いけど、それ以上に他の三人が心配なんだもん。ランスだって、シルちゃんのことを気になるでしょ？」

「馬鹿拔かせ。あいつはただの奴隷だ」

「とりあえず町長の家に向かうか。マリアの誤解を解いておかないと、ろくに町も歩けないからな」

・カスタムの町 町長の家・

「ラーンソーサーー！！ルークー！！」

「うおおお！なんだなんだ！暑かしい！」

家に入るやいなや、町長のガイゼルが涙を流しながら二人に迫ってきた。普段は床に伏している彼が立ち上がって迫ってくるということは、よっぽどのがあったのだろうか。そういえばチサの姿が見えない。買い物にでも行っているのだろうか。いや、この取り乱しようから見るに、もしかしたら…と、ルークは考え、町長に尋ねる。

「チサちゃんは何処へ行った？まさか…いなくなったのか？」

「おお！そうなんだ！大変なんだ！どうやら娘のチサが、あの魔女たちに攫われてしまったみたいなんだ！」

「なんだと！！それでは、もしかしたら今頃あんなことやそんなこと…」

「うおおお！チーサーー！！」

「ちょ、ちよつと待って！私そんなことしてないわ！」

ランスに無駄に不安を煽られて更に騒ぎ立てるガイゼル。身に覚えのないことの犯人にさせられそうになり、慌ててマリアが話に割って入る。

「ん？誰だ…って、わー！ま、ま、マリア・カスタードじゃないか

「ランス、ルーク、敵だ敵だ！」

「ええい、落ち着け！」

「ぐふううううー！！」

そう言つて腹に蹴りをかますランス。一応相手は病人なのだが、容赦がない。若干無理矢理にはあつたがガイゼルを落ち着かせ、ルークたちはここまでの経緯をガイゼルに説明した。

「ふうむ…あのラギシスが…にわかには信じられんが…あり得ない事ではない…か。つまり、娘たちは町の敵ではないと」

「いいえ、私以外はまだ町の敵です。指輪の呪縛から解放されるまでは…」

「安心しておけ。俺たちがすぐに呪縛は解くし、チサちゃんも連れて帰る」

「おお、頼もしい！」

「で、どうしてチサちゃんが魔女たちに誘拐されたと思つたんだ？何か証拠が？」

チサが誘拐されたのは心配だが、これが何か手がかりになるかもしれない。ルークが尋ねると、ガイゼルは言いくそうにしながら口を開いた。

「そ、それはその…四時間も帰つてこなかったから…その、心配で…」

「…本当に誘拐なのか？彼氏かなんかと遊んでいるという可能性は？」

「なななな、なんてことを！チサに彼氏などいないわー！そんなもんいたら、とつくの昔に殺したに決まっているだろうが！」

「その通りだ！チサちゃんの処女は俺様のものだ！！」

「なんでランスまで突つかかってくるんだ！しかも町長、あんた今

とんでもないこと口走ったよな!？」

「はあ…厳格で信頼できる町長さんだったのに…」

今の町長の姿にショックを受けるマリア。彼女の中でガイゼル町長は過去の人となった。

「でも、四時間も帰って来ないのは確かにおかしいわね。この町の状況じゃ、寄り道するようないところもないだろうし」

「そうだな…道中見つけたら保護しておくよ。魔女の誰かが攫った可能性が高いだろうしな」

「おお…頼みます…」

「その分の報酬は別払いだぞ!がはは!」

「…鬼ね」

- カスタムの町 情報屋 -

一応目撃情報がないか、二手に分かれて聞き込みをすることになった。早く洞窟に潜りたいところだが、流石に放っておく訳にもいかない。ルークが情報屋、ランスが教会、マリアが酒場に聞き込みに行った。町長が早々にマリアは操られていただけという情報を町中に回してくれており、また、元々町の住人も小さな頃から知っている彼女たちが反乱を起こしたというのを信じたくなかったという思いがあったようで、既にマリアは町を自由に歩き回れるようになっていた。この行動の早さ、確かに親バカなこと以外は優秀な町長である。

「あら、ルークさんね。いらっしやい。何かご用かしら?」

「ああ、ちょっと聞きたいことがあってな。あれ、妹さんはどこへ

？」

情報屋に入ってきたルークに、コンピュータから手を放して話しかけてくる女性。彼女がこの情報屋を営む双子の姉、芳川真知子だ。ルークはこの町を初日に情報収集で一度店に寄っていたため、既にお互い顔見知りであった。が、今はもう一人店主である妹の今日子の姿が見えない。

「あの子ならどこかへフラッと。困った子ね」

「誰かに誘拐された、ということはないかな？」

「あら、出て行ったのはついさっきなのでそんなことはないと思いますわ。でも、どうしてそんなことをお聞きになるの？」

「まだ事を荒立てたくなくて町長も声明は出していないが、チサちゃんが行方不明だな」

「あら、それは大変。ごめんなさい、その事をお聞きに來たのでしたら、私は何も知りませんわ」

「そうか、邪魔をした。今日子さんにあったら家に帰るように行っておくよ。チサちゃんが本当に誘拐なのであれば、今外を不用心に散歩するのは危険だからね」

「すいません、お願いしますわ」

そういつて店から出て行くルークにペコリと頭を下げる真知子。普段の余裕のある話し方から誤解されがちだが、それでも彼女は妹思いであった。

- カスタムの町 地獄の口 -

迷宮の前までやってきたルーク。情報を集めたらここで合流する

予定であつた。やってきたときにはまだ二人はおらず、泣き濡れた老戦士が洞窟の前に立っていた。話を聞いたら彼の名前はANTというらしく、特に情報は持っていなかった。泣いてる理由も町から出られず困っているということだったので、特にどうすることも出来ず、放っておいたらそのままどこかへ行ってしまった。多分二度と会うことはないだろう。無駄な時間を過ごした。その後、少し待っていると言とランスとマリアがやってくる。が、なんだかランスが疲れた様子だった。

「すみません、待たせちゃったみたいで。ルークさん、何か情報はありましたか」

「いや、こっちは特に何も。そっちは？」

「こちらの特には…聞く前からまだ内緒のはずのチサちゃん誘拐されたことを知ってましたけどね」

「流石は情報飛び交う酒場と言ったところか。ランスの方はどうだった？」

「教会に淫乱シスターがいた…流石の俺様もあれはちょっと…」

「は？」

「ああ…ロゼさんの事ね。あの人は…気にしないに限るわよ。ちょっと変わった人だし…」

ランスがやる気になれなかった敗北感からか、かなり疲れた顔をしている。ランスとマリアの話を纏めると、元凶は教会にいるロゼという名のシスターらしい。よし、教会には近寄らないでこう、と心に誓うルークだった。ふと、マリアが先ほどまで持っていなかった筒状のものを両手に抱えているに気がつく。

「ん？ところでマリア、その手に持っているものは？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました。これこそが…」

「なんだ、このぶっさいくなものは。変わったこんぼうだな」

「…ランスにはこの無駄のない美しい形状が判らないみたいね。これはそんな原始的な武器じゃないわ。その名もチューリップ1号!」

ババン、とチューリップ1号という名らしい筒状の武器を高らかに掲げる。その側面にはチューリップの花の絵が描かれていた。決して口には出さないが、ルークにも無駄のない美しい形状というものは理解できなかった。

「それが以前話していた戦いの歴史をも代えかねない武器か?」

「そう!まだまだ試作段階だけだね」

「ふむ、魔法が使えなくなつてへぼぴーで足手まといのお前を連れて行くのは正直迷つていたが、これで多少は戦えそうだな」

フィールの指輪を外したマリアはその際に魔法力のほとんどを吸い取られ、あの強力な水魔法を使えなくなつてしまつていた。が、これで多少の戦力にはなるとルークとランスは安心する。

「ところでこれはどうやつて使うものなんだ?」

「ヒララ鉱石をエネルギーにして、爆発的な破壊力を相手にぶつけるの。そうね、雷撃の魔法なんかより遙かに威力を出せる武器だと思つていいわ」

「それは凄いな。雷の矢でなく、雷撃以上か」

「ふふふ、私の自信作よ。このチューリップとヒララ鉱石があれば、魔法が使えなくなつたつて役には立てるんだから」

「がはは、これであのバカがいけない分の後衛役は決まりだな」

「ええ、任せて。ヒララ鉱石さえあれば、モンスターなんかちよちよいのちよいなんだから!」

不意にルークは嫌な予感がした。何か先ほどからマリアの言い回しがおかしい。ヒララ鉱石が…あれば?そういえばヒララ鉱石は割

と手に入れにくい鉱物ではなかっただろうか？ランスと笑いあうマリアに、ルークは意を決して尋ねる。

「ヒララ鉱石…あるのか？」

ピタッ、とマリアの笑い声が収まる。ランスも、まさか…という顔でマリアを見る。俯いていたマリアが勢いよく顔を上げる。そしてマリアは、笑顔で元気よく答えた。

「ありません！」

「「お前もう帰れ！！」」

第18話 新たな事件とチューリップ（後書き）

「人物」

芳川真知子

カスタムの町の情報屋。双子の姉で、コンピュータを使って理論的に情報を導き出す。ランスのアプローチをのりくらりと躲す。

芳川今日子

カスタムの町の情報屋。双子の妹で、水晶玉を使って知りたいことを占う。一途な少女だが、若干いきすぎている。

ロゼ・カド

カスタムの町のシスター。神への信仰心は無く、金儲けの手段として使っている。暇さえあれば自分で呼び出した悪魔とのHに耽るなど、数少ないランスをどん引きさせた女性の一人。

牧場野ANT

冒険者。珍しい名前をしており、妹と娘がいる。シリーズでも上位に入るマイナーキャラであったが、2のリメイクとまさかのランスクエストへの再登場により知名度が上がった。ほんの少しだけだが。

「技」

雷の矢

指先から生み出した雷の塊を放つ初級魔法。炎の矢や氷の矢と並んで良く使われる魔法であり、特にゼスでは多くの若い魔法使いがこの魔法を好んで使う。その理由としては、「雷に愛された男」「雷帝」という異名を持つ老魔法使いが、魔法学園の講師をしている

ため、自然と若い頃に触れる機会が多くなるためと思われる。

雷撃

雷を水平方向に飛ばす中級魔法。本来は手から放つ魔法だが、鍛え上げると頭上から雷を落とせるようになる。

「装備品」

チューリップ1号

マリアが発明した新兵器。ヒララ鉱石をエネルギーとし、爆発的な威力を出すバズーカ。側面に描かれたマリア手書きのチューリップの絵が特徴的。

「アイテム」

ヒララ鉱石

レアストーン。特殊な条件下で強力なエネルギーを発生する。

第19話 その占い、今はまだ意味を持たず

・ピラミッド迷宮・

「これは…随分と様子が変わったな？」

結局頑なに帰らなかったマリアを連れて、三人は地下三階まで下りてきていた。するとそこは、二階までのいかにもな洞窟から、一目見て床や壁の石が明らかに人口のものと判る、整った迷宮になった。

「ここからはピラミッド迷宮になっているわ」

「こんなに突然迷宮の内部が変わるものなのか？」

「本来この迷宮は私が支配していた第二層までしかなかったの。ここから先は、他の場所から魔法で持ってきて追加したのよ。この第三層の支配者はミル。リンゲル王のピラミッドを改造したものらしいの」

「ミル・ヨークスとは仲間なんだろう？何か迷宮のことは知らないのか？」

「ごめんなさい、ずっと自分の研究室に引きこもってたから…」

「ちつ、役に立たない奴め」

「むかー、親切で教えたのにー！」

「ほらほら、喧嘩してないで進むぞ」

仲良く喧嘩する二人をなだめるルーク。迷宮の奥へ進んでいく三人。道中棺の並んだ部屋や四つの宝石が並んだ部屋があり、念入りに調査をしたが、特に何も発見することは出来なかった。更に奥へと進んでいくと大きな鏡が壁に埋め込まれた部屋に出る。

「わっ！大きい。こういうのって高いのよねー」

「がはは、鏡に映る俺様もかっこいいな！」

「ん？部屋の隅に石版が置かれているな」

鏡の前でポーズを取るランスを放って置いて石版を拾うルーク。

見れば何か文字が書いてある。薄汚れているが、ギリギリ読めるレベルだ。石版に書かれた文字を読んでいくルークだが、だんだんと呆れた顔になっていく。

「ルークさん。石版に何が書かれていたんですか？」

「あー…誤解しないで欲しいが、俺は書かれていることをそのまま読むだけだからな」

「？いいから早く読め」

「鏡の前で少女のパンティーを露出するべし。さすれば宝石の装置が起動するであろう」

「……なんなの、それ？」

マリアが冷たい視線をルークに向ける。ただ書いてあることを読んだだけのルークからしたら理不尽きわまりない。

「がはは、仕方がない。これも他の三人を救うためだ。とぉー！！」

「きやあああああー！！」

いつの間にかマリアの背後に回り込んでいたランスが一気にマリアのスカートをまくり上げる。下着を白日の下にさらされ、マリアが悲鳴を上げる。

「ばっ、ばかあー！こんな事で本当に装置が起動するわけ……」

怒り心頭でランスに食ってかかるマリアだが、話を遮るように鏡から音声が響く。 - 第一のワープ装置、解除されました - と。

「最低だわこの鏡!!」

「がはは、中々見所のある鏡ではないか」

「第一の… って言ったよな。宝石って… 四つあったよな。つまり…」

「やめてー、ルークさん、考えさせないで - 。私も気がついてはいたけど、気がつかない振りをしていたんだからー!」

- ピラミッド迷宮深部 小部屋 -

「くっそ… があつ!!」

女戦士が近寄ってきたグリーンハニーを斬り伏せる。パリンっという音と共に、その体が砕け散る。が、ハニーに気を取られていた隙にラーカイムの接近を許してしまい、その鋭利なハサミが脇腹に突き刺さる。

「っ…!! 何するんだい!!」

頭頂部の岩ごとラーカイムを粉碎する。部屋の中では大量のモンスターが四人の女戦士を囲んでいた。しかし、応戦しているのはたった一人。既に他の三人の息はなく、おびただしい量の血溜まりの中に倒れ伏していた。残った女戦士も满身創痕の状態だ。傷は浅くなく、愛用のロングソードは既に折れ、今は倒れた仲間が使っていた剣を手に戦っている。

「ルー、チヨルラ、アリーヌ… 巻き込んだ形になっちゃった

ね…すまない。ルー、あんたのアリスソード、自慢してただけの事はあるよ。もうちょっとだけ力を貸してくれ…」

今は亡き仲間たちにそう呟く。モンスターに囲まれているだけでなく、部屋の入り口にはグリーンスライムがへばりついており、通ることが出来ない。逃げ道はない、彼女はたった一人で十体以上いるモンスターの群れを倒さなければならないのだ。普通ならば絶望に打ちひしがれ、生きることを諦めてしまってもおかしくない状況である。だが、こんな状況でも彼女の目は死んでいない。最後まで諦めずに勇敢に立ち向かった仲間のためにも…妹のためにも…

「まだ…俺は死ねないんだよおおお!!」

咆哮し、近くにいたこんにちわを一刀両断にする。それと同時に部屋に爆音が響いた。音のした方向は部屋の入り口、見れば通路をふさいでいたグリーンスライムが吹き飛び、煙を上げていた。敵の増援か、女戦士に緊張感が増す。

「きゃー、やったー、見た見た?これがチューリップの威力よ!」

「凄い威力だな。ピラミッド内にヒララ鉱石の採掘場があつてよかったな」

「むっ、部屋の中に傷だらけの美女を発見!」

そこに立っていたのはランス、ルーク、マリアの三人。ワープ装置で飛んだ先に偶然ヒララ鉱石の採掘場があり、こうしてマリアが戦力に加わった状態で探索を続け、この部屋まで辿り着いたのだ。状況の変化に頭の回転が追いつかない女戦士だが、どうやら敵ではないらしいことを感じ取り安堵する。しかし、あそこで喜んでいる女、どこかで覚えが…

「行くぞ！ルーク、マリア！困っているときにはお互い助け合う！それが冒険者の正しい姿だ！」

「すまないね、恩に着る！」

「もし襲われているのが男だったら？」

「一文の得にもならんから立ち去る」

「期待通りの発言、ありがとう。まあいい、さっさと仕留めるぞ！」

群れを成していたとはいえ、この部屋にいたモンスターは大した強さを持ち合わせてはいなかった。みるみる内に数をその減らしていく。いや、本来であればもう少し苦戦していたかもしれない。元々この部屋にいたモンスターはもっと多かったからだ。ミリは死んでいった仲間たちに感謝しながら、最後のこかとりすを仕留めた。すると、緊張の糸が切れたのか、床に倒れ込む。

「おい、大丈夫か！？せつかくの美女だ、このまま死んだら許さんぞ」

「死にやしないさ。あんたたちのおかげで助かった。礼を言っぜ。」

俺はミリ・ヨークスだ……」

「待つて……ミリ・ヨークス……」

名前を聞いて、先ほど喜んでいた女が近寄ってきた。やはり見覚えがある……と、ミリはすぐにその正体に気がつく。怒りで目を見開き、口元に付いていた血を拭くとマリアに食って掛かるように叫んだ。

「……お前はマリア・カスタード！俺の妹をどこにやりやがった！」

「ヨークス……なるほど、ミルの姉か！」

「ああ、俺は妹を捕まえて始末をつけるために、ここまで来たんだ。あんだだけの事をしでかしたんだ。姉として……俺が始末をつけなきゃならないんだ！」

「そういうことか。そうとなれば、誤解を解いておかねければなら
ないな」

そう言い、自己紹介をすませた後、全ての元凶はラギシスにある
ことを説明するルーク。話を聞いている内に、少しずつ安堵の表情
へ変わっていく。やはり妹が自分の意志で事件を起こしたわけでは
ないということが判って、ホッとしたのだろう。が、ミリはすぐに
真剣な表情に戻し、口を開いた。

「事情は判った。だとしても、このまま手を引く訳にはいかないな。
目的が、操られている妹の救出に変わるだけさ」

「その怪我で探索を続ける気か？」

「…妹は、放っておけないもんさ。だが、俺の仲間は見ての通り全
滅だ。頼む、俺も一緒に連れて行ってくれ！」

「…妹…か。そうだな、放っておいては…いけないな」

「がはは、俺様に任せておけ。だが、弱い奴はいらんぞ」

「ありがとよ、ルーク、ランス！話の判る奴らは好きだぜ！」

「がはは、そのまま惚れてしまっても構わんぞ！」

こうしてパーティーに新たにミリ・ヨークスが加わった。怪我を
押して先を急ごうとするミリだが、ルークがそれを引き留める。

「待った。一旦町へ帰り木で戻ろう。ワープ装置を動かせるから、
ここまでならすぐに戻って来られる」

「なんだい、ルーク！？俺の怪我の治療のためとか言うなら、そん
なもんはいらないよ！」

「そうじゃないさ…」

ルークが床に視線を落とす。ミリもそれに併せて視線を落とす。
そこには、掛け替えのない仲間たちの…遺体。

「葬つてやらんな。戦士の定めとは言え…大事な仲間なんだろう？」
「…すまない」

- 迷宮内 どこかの泉 -

そこに倒れていたのはシル。泉から流れる水が頬を伝い、目を醒ます。朦朧とした意識がはつきりとしてきた。そうだ、自分はレポートウェイブでどこかへ飛ばされてしまったのだ。見覚えのない場所、近くにランスたちがいないか、声を出す。

「ランス様あー？ ルークさんー？ いませんかー？ いたら返事してくださいさあーい」

返事はない。が、ふと岩陰から気配がする。誰かが声に反応したようだ。

「だ、誰かいらっしゃるんですか…？」

「……………」

「も、もしかしてランス様ですか？」

「うう…ぐっ…」

そこには一人の戦士が倒れていた。大きな怪我は無いようだが動けない様子。慌てて駆け寄り、ヒーリングを唱えるシル。

「だ、大丈夫ですか！？ しっかりしてください！ いたいいたいのとんでけっ！」

「ん…ありがとう、もう大丈夫だ…君のおかげでこの命、拾うこと

が出来た」

「よかった、わたしはシル・プラインと言います」

「僕の名前はバード。バード・リスフィ。君の魔法のお陰で助かったよ。改めて礼を言わせて貰う」

「え…えへへ」

こうもはつきりと感謝されることにシルは慣れておらず、ちょっと照れる。ランスが素直に礼を言うなんて事、ほとんど無いからだ。バードという名の戦士が立ち上がり、辺りを見回す。

「君もあの変な魔法でここへ？」

「はい、早くランス様と合流しないと…」

「ならば、互いの目的は一緒だね。僕も君もここから脱出したい。どうだろう、ここからは僕と協力しないか？ 帰り木も奪われてしまったようだね」

「ええ、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく…誰だっ!？」

バツつと後ろを振り返るバード。シルもそちらの方向に目をやる。そこには赤い頭巾に身を包んだ少女が立っていた。緊張を解く二人。

「こんにちは。こんな迷宮内に来るなんてよっぽど物好きな人だね」

「こんにちは。可愛い子ですね」

「お嬢ちゃん？ 君は？」

「失礼しちゃう。アーシーはお嬢ちゃんなんかじゃないわ。こう見えても、てんちゃい占い師なんだから。おかし女が持っているお菓子をくれたら占ってあげてもいいよ」

「干し芋じゃ駄目かい？」

腰に掛けていた袋から干し芋を取り出すバード。

「駄目駄目。干し芋をお菓子のカテゴリーに入れないで」

「甘いんだけどなあ…」

残念そうに干し芋をむしゃむしゃ食べるバード。隣のシイルにも手渡し、シイルもそれを受け取って二人で干し芋を食べ始める。そんな二人を見ながら、アーシーはおかしな事に気がつく。

「あれ…そこのお兄ちゃん…」

「ん？僕がどうかしたかい？」

「…なんでもない。教えて欲しかったらお菓子持ってきてね」

「そう言われると気になるな。でもごめんね、お菓子は持っていないんだ。君もこんな所にいると危ないから一緒にいて来るかい？」

「大丈夫…モンスターさんには占いのお陰で出会わないから」

「そう、じゃあ私たちは行くね。アーシーちゃんも気をつけてね」

そう言っただけで泉から離れ、ダンジョンを進んでいくバードとシイル。その二人の背中を見送りながら、アーシーはぽつりと呟いた。

「あのお兄ちゃん…凶の運命の持ち主だったな。かわいそう。それに、寿命がとつくの昔に無くなっちゃってるのに…なんでまだ生きてるんだろ…悪運？あんな人初めて見た」

アーシーのつぶやきは、誰の耳にも届かないまま虚空へと消えていった。

第19話 その占い、今はまだ意味を持たず（後書き）

「人物」

ミリ・ヨークス

LV 15 / 28

技能 剣戦闘LV1

ミル・ヨークスの姉。腕の確かな女剣士で、Hの腕はそれ以上。ランスがヤルのを嫌がる数少ない女性の一人。妹に事件の責任を取らせるため迷宮に潜っていた。誰にも打ち明けていないが、重い病を患っている。

バード・リスファイ

LV 15 / 42

技能 剣戦闘LV1

冒険者。顔、性格、腕の三重奏揃った戦士だが、幸が薄い。惚れっぽい性格をしており、気がつけば毎回違う女性を連れ歩いているが、本人に悪気はない。

アーシー・ジュリエッタ

LV 1 / 3

技能 占いLV2

魔人バークス・ハムの使徒。姉妹が二人いる。その占いの的中率は100%と言われており、お菓子をあげると占って貰える。

ルー（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリとは三人の中でも一番性格が合い、飲み友達でもあった。ミリが持っているアリスソードは彼女の愛剣である。名前はアリスソフト作品の「DARK」より。

チヨルラ（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリ、ルーと共によく一晩中飲み明かしていた。名前はアリスソフト作品の「D A L K」より。

アリーヌ（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。普段から飲み過ぎな三人に頭を抱えていた苦勞人。名前はアリスソフト作品の「D A L K」より。

「モンスター」

こかとりす

鳥系モンスター。肉の味が絶品で、冒険者によく狙われている。へんでろぱの材料でもある。

こんにちわ

顔が三つある球体のモンスター。怨念が深いと、倒された際こんばんわというモンスターとして復活することがある。

ラーカйм

ヤドカリに似たモンスター。岩を背負い、鋭いハサミを持っている。

グリーンスライム

緑のねばねばしたモンスター。物理攻撃を無効化する。

おかし女

一つ星女の子モンスター。お菓子を作るのが大好きで、その味は

絶品。戦闘能力は低い。

「技能」

占い

物を占う才能。LV2以上になると、未来予知とも呼べるものになる。

「装備品」

ロングソード

ごく一般的な剣。値段の割にはそこそこ攻撃力もあるため、とりあえずこれを装備している冒険者も多い。

アリスソード

柄に女神アリスをモチーフにした紋章が飾られている剣。攻撃力は高いが、見た目以上に軽く、力のない魔法使いや神官でも装備可能。

第20話 未だ見ぬ宿敵

・ピラミッド迷宮 鏡の間・

「今度は鏡の前で少女が胸を見せる、だとさ」

「いーーーーーやーーーーー!!」

「一応言っておくが俺もやらないぞ」

「がははは、全く持ってけしからん!が、これも三人を救うためだ。頑張るのだマリア、カスタムの未来はお前の両乳にかけられたぞ」

「ぜつつつたい、いやっ!!」

一度町に戻り、三人を丁寧に埋葬した一行は、再び迷宮に潜っていた。一つ目のワープ装置を利用しようとしたが、あの先は行き止まりであったとのミリの証言によりそれを中止し、なんとか二つ目のワープ装置を作動させられないか調べるため、鏡の間までやってきていた。その際、偶然にもミリが石版を宝箱から発見していたことを聞き、ルークが受け取り書いてあることを読んだのが今。嫌な予感のしていたマリアは、内容を聞くやいなや悲鳴を上げた。

「そうだ、前は私がやったんだし、今回はミリさんが…」

「嫌だぜ、俺は。そんな馬鹿馬鹿しいこと」

「んがつ!」

「ええい、まどろっこしい!早く見せんか!!」

渋るマリアをランスが後ろから羽交い締めにし、服をずり下げ胸を露出させる。ルークに出来ることはそっぽを向いて見ないようにしてあげることだけだった。南無南無。

「きゃああ！ちょー！いやー！ー！」

「うふふ、可愛い胸だね」

「さあ、鏡様にお前の胸を見て貰うんだ！上下に揺すって乳揺れのサービスだ！」

「こんなのひどすぎるー！ー！ー！」

マリアの絶叫と第二のワープ装置解除の放送が迷宮内に空しくこ
だました。

「あと二回…か…」

「ルークさん、その通りですけど不吉な発言しないでください！」

・ピラミッド迷宮 棺の間・

二つ目のワープ装置を使用し、少し進むと棺が大量に置かれた部屋に辿り着いた。その部屋の奥、他の棺に比べ多少豪華な装飾を施してある棺に、ミイラ男が腰掛けていた。モンスターかと身構える四人に落ち着いた様子でミイラ男が話しかけてくる。

「誰だい。ああ、そう身構えんでいい。戦うつもりなんてないんね」

「なんだ貴様は？」

「なーに、ただのミイラ男さね」

「ただの…ねえ。ただ者には見えないが？」

「え？どういうこと、ルークさん？」

声を聞く限りは中年男。包帯に隠れておりよく判らないが、体格はでっぷりとしており、とても強そうには見えない。ルークの発言にからからと笑うミイラ男。

「おんやまあ。死んでから200年、こんだけ鈍っちまった体なのによく気がついたね」

「座り方がな…隙だらけのようできて、その実、隙がない。生前はかなりの実力者とお見受けしたが？」

「そんな大したもんじゃねーよ。おいちゃんは、リンゲル王ザーハードス6世に仕える親衛隊副隊長、バ・デロス・ガイアロードじゃ」

「なんつー大層な名前だ。まあ今はただのミイラだがな。がはは、情けない」

リンゲル国。200年前に滅んだ国だ。ゼスと隣接した砂漠の中に栄えた国で、近隣諸国との関係も良好であったと文献には残されている。ピラミッドも、国の滅亡後に近隣諸国が建て、集められた関係者の死体を埋葬したものだという。そういえば、マリアがこの迷宮はリンゲル王のピラミッドを改造したと言っていたか。

「砂漠の真ん中であつたんじゃが…いつの間にか地下じゃ。不思議な…」

「あ、ごめんなさい。それは私たちが魔法で移動させたせいなの…」

「ん？ほー、お嬢ちゃん若いのに凄い魔法を使えるんだの？」

「あんな広大な砂漠の真ん中とは、随分とへんぴな国だったんだねえ？」

「廣大？うんにゃ、小一時間も歩けば渡りきれんちつぽけな砂漠さね」

ミイラ男の発言の意味が分かっていない様子のランスとミリ。逆にその意味を正確に理解しているのはルークとマリアだ。

「死んでる期間が長くてボケたのか？」

「違うわよ、ランス。あの砂漠はね、昔はなかったの」

「そうなのかい？」

「ああ、今から200年ほど前、広大な大地を目当てにゼスに攻め込んだヘルマン軍とゼスとの戦争があつてな。ゼスは禁断とも言われた秘術でその大地を砂漠化することにより、ヘルマンの目的をなくすと同時に、以後ヘルマン軍がゼスに侵攻するのを難しくした。なにせ、ゼス中心部に攻め込むためにはその砂漠を通らなきゃならないからな。その秘術を使う際に、媒体としたのが数年前に滅んでいたリッゲル国の砂漠だったと伝わっている」

世界の中心部に位置するキナニ砂漠。専門の案内人なしに越えるのは自殺行為とも言われるほどの広大な砂漠の誕生にはこういった背景があつた。

「あんれま、今砂漠はそんなことになつとんだんか」

「200年の間に、世界は大きく変わっていますよ」

「200年か…言われてみりゃ長いもんじゃ。あの時代が懐かしいわい。アホな隊長とノー天気な部下に挟まれた日々は大変じゃったが、楽しかったなあ…モエモエ国の行方不明だった騎士隊長はその後見つかったんだろうか…娘のリスガドルはどうしとるかのう…」

昔を懐かしみ、遠い目をするミイラ男。平和な国を突如襲った悲劇。ソレは無抵抗な民を虐殺した。ソレは抵抗する親衛隊を全滅させた。ソレはわずか二日で国を滅ぼした。

「200年も前じゃ騎士隊長も娘もとくにじじいばあになつて死んでるだろ。それよりも、ミルという娘を捜してるんだが、何か情報を持っていないか？」

「それもそうか、はっはっは。ミル？その娘かどうかは判らんが、四つ目のワープ装置の先で娘の話し声がよくするぞい。その部屋はこの部屋と壁挟んだ隣でな。因みにワープコードは鏡の前でレス行

為じゃ。以前迷宮内を歩いてるとき石版に書いてあった」

「ぎゃああああ!!」

「おつ、それは俺の出番でもあるな。頑張ろうぜ、マリア」

「なんで張り切ってるんですか!」

「そりゃま、俺は男も女もいけるクチだからな…ふふ、楽しみだねえ」

「がはは、楽しみ…いや、町の平和のためだ。仕方ない。じゅるり」

「もういや…なんで私ばかりがこんな目に…」

「マリア、前向きに考える。三回で済んで良かったじゃないか!」

「全然良くありません!!」

ルークの精一杯のフオローが失敗に終わる。ランスとミリは既に行方を想像しているのか、ランスの表情はイヤらしく、ミリの表情は妖艶なものになっていた。

「情報ありがとうな、副隊長さん。安らかに眠ってくれ」

「おお、ちよつと待った。これ、持ってけ」

部屋を後にしようとするルークたちに対し、ミイラ男は何かを放り投げる。ルークが受け取り、見ればそれは剣。棺同様、装飾が施されているが決して武器を振る邪魔にはならず、斬れ味も良さそうだ。

「それはおいちゃんが生前使っていた幻獣の剣だ。一緒に棺に納められてた。このまま腐らすのも勿体ないからな、あんたらが使ってくれ」

「いいのか?」

「がはは、ルーク、俺様に寄越せ!」

「お前この間新しい剣買ったばかりだろうが。しかも人の金で!」

「はっはっは、誰が使ってくれても構わんよ。おいちゃん、あんた

らが気に入ったからな。やる」

「豪快なおっさんだね。ま、貰えるもんは貰っておくもんさ。俺はルーの剣があるからいらないけどな。さあ、行こうか」

「うう…鏡の間…嫌だな…」

豪快に笑うミイラ男に感謝するルークたち。ランスがまず部屋を後にし、ミリがマリアを引きずりながらそれについて行く。ルークも部屋を出ようとするが、ミイラ男がポツリと呟いた一言に足を止める。

「あんた…ケイブリスって…知ってるかい…」

ケイブリスダーク。その事件は、今より200年前にゼスに侵攻した魔人の名前を取ってそう呼ばれている。多くの人間が虐殺された、地獄の一年。ゼスと隣接していたリングエル国も、この魔人に滅ぼされたのだ。

「…ああ、知っている。見たことはないが…かつて何度も聞いた名前だ…」

「そうかい…あれに出会っちゃいけねえ…ありや化け物だ…ちよつとは腕に覚えがあったが…一分も持たなかったよ…ははっ…」

「そうか…だが会うなというのは無理な話だな…」

「ん？どういうことだんね？」

ルークは一瞬だけ振り返り、静かに笑う。それは己が身に過ぎたる事を言うことへの自嘲か、あるいはもつと別の何かか。

「いずれ…必ず戦わねばならない相手だ。あんたのその無念、俺がこの剣と共に持つて行く」

・ピラミッド迷宮 鏡の間・

「いやー、もういやー！おうち帰るー！！」

「ふふふ、虐めがいがあるねえ、マリアは……」

「おお、いいぞいいぞ。ほれ、もっと股を開け！」

「はいはい、踊り子さんには手を触れないでください……」

こうして最後のワープ装置は解除された。頑張れマリア。

・ピラミッド迷宮深部 通路・

「もう……お嫁に行けない……」

一行は最後のワープ装置を起動させて迷宮の奥へと進んでいく。聞いていた部屋までは少し距離があるようだ。後ろでマリアがさめざめと泣いている。ミリが慰めているが、泣かせた張本人にフオロ―されても効果は薄いだらう。と、少し開けた部屋に出る。なんだか少し寒気がする。

「ねえ、ランス……なんだかこの部屋寒気がするわ……早く抜けましょ
う」

「うむ、こんな部屋に長居は無用だな。ん？なんだこの札は。てい
っ！」

壁に貼ってあったお札を考え無しに剥がすランス。すると、煙と共に角の生えた緑色の神の女性が現れた。その強力な邪気に、ルー

クの緊迫感も増す。すると女性が深々と頭を下げながらこう言った。

「はじめまして、悪魔の札により召喚された者です。事情により名前は言えませんが、以後お見知りおきを」

「悪魔…だと…」

「ちよつと待つて、私たちは別にあなたを呼び出してなんかいないわよ！」

「その戦士の方が札を剥がしてくださいましたでしょう。あれが私を呼び出す方法です」

「で、お前は何しに出てきたんだ？」

悪魔の女性はコホン、と咳払いを一つし、自分のやってきた目的を話し始める。

「私は呼び出された方の願い事を三つだけ叶えます。もちろん、私の力の範囲内なので、不老不死や世界平和などは無理ですが。さあ、願いを仰ってください。ですが、見返りとして…あなたの魂を頂きます。安心してください、魂は死後に引き取りに来ますので、今後の生活が変わるわけではありません」

キャッチセールスの様な口調で話を続ける悪魔。彼女は内心こんなことを思っていた。

「（ようやく悪魔の契約係を任せられるくらいに出世したんだもんね…初仕事頑張らなきゃ…）」

「むつ、それはかなえられる範囲ならどんな願い事でもいいんだな？」

「ちよつとランス、危険よ！」

「確かに俺も危ないと思うぜ。話が美味すぎる」

「契約するなら無理には止めないが…賛同は出来んな…」

彼女はこの日、目の前の男と出会ったことにより転落人生を歩むこととなる。だがそんなことを知る由もない彼女。

「がはは、大丈夫だ。悪魔の娘、その契約乗ったぞ！」

「（やった、初仕事成功！私って幸先いい！！）」

彼女は今、とても幸せそうだった。

第20話 未だ見ぬ宿敵（後書き）

「人物」

バ・デロス・ガイアロード

LV 25 / 33 （生前）

技能 剣戦闘LV1

リンゲル国親衛隊副隊長。平和な国、尊敬できる王、信頼できる仲間、美人の妻と愛娘、その全てを魔人ケイブリスに奪われた。現在はピラミッドの中でミイラとして暮らしている。この生活もそれなりに気に入ってはいるようだ。

「装備品」

幻獣の剣

生前、ガイアロードが使っていた業物の剣。特殊な結界に覆われていてダメージを与えられない幻獣をも斬り伏せる。盗難防止のため本人以外の男性が触ると電流が走る仕掛けとなっているが、その仕掛けを解除してルークたちに手渡した。

「都市」

リンゲル国

自由都市。近隣諸国と良好な関係を築いており、特にゼスやモエモエ国との親交が深かった。ピラミッド内の装置はその名残。約200年前、魔人ケイブリスによって二日で滅ぼされる。

「その他」

GI0802 魔人の後押しを受けゼス建国 モエモエ国騎士隊長

行方不明に

G I 0 8 0 8

モエモエ国、ゼスに併合され滅びる

G I 0 8 1 3

ケイブリスターク発生 リンゲル国滅びる

G I 0 8 1 6

ゼスヘルマン戦争勃発 キナニ砂漠が誕生

第21話 転落人生

・ピラミッド迷宮 お札の間・

悪魔との契約を結ぶことにしたランス。その返事を聞いた悪魔の娘は、嬉しそうに羽尾をパタパタと動かす。マリアは心配そうにランスを見ているが、ルークとミリは何となくこの後の展開の予想がついている。

「おい、お前に叶えられる範囲ならなんでもいいんだな？」

「はい。ではさっそく、願いの方をお願いします」

ランスに問いかけられ、嬉しそうに綻んでいた表情を引き締める悪魔。ランスもキリツと真面目な顔になる。ゴクリツ、息を呑むマリア。

「うむ…俺様の願いはズバリ…」

「ズバリ…？」

「やらせろ！」

「……………へ？」

想定もしていなかったであろう回答に思考が追いつかないのか、ポカーンとアホ面になる悪魔娘。隣では盛大にマリアがずっこけている。

「この男はなんだって、こつ…」

「そうか？俺は言うと思ってたぜ？」

「まあ、これでこそランスというか、何というか…」

予想通りの展開にちよつと誇らしげなミリ。

「どうした？まさかこの願いは駄目だとか言うつもりはあるまい？」

「へあ！？モ、モチロンそんなことありませんよ。ただ…そんな願い今まで話にも聞いたこと無かったので…」

「がはは、それではさっそくゴーだ！」

「え、ここですか？せめて他の方を別の場所にとか…」

ちらりとルークたちを見る悪魔娘。気のせいか視線が助けを求めている気がする。

「なんだ？悪魔のくせに恥ずかしいのか？情けないな！」

「カツチーン！そ、そんなことはありません。さあ、どこからでも来てください！！」

「ああ…まんまと挑発に乗っちゃったぞ、あの悪魔…」

「男慣れしてないんだろっねえ」

「そういう問題なの？」

「ぐふふ、では…とーーーーー！」

「きゃあ！」

悪魔に飛びかかり、情事を始めるランス。ミリがそれをやんややんやと観戦し、ルークとマリアは部屋の隅で壁とにらめっこし、事が終わるのを待つ。もし万が一悪魔が反抗した場合の時に備え、部屋からは出て行かない二人。その背中では哀愁が漂っていた。

「がはは、悪魔はエロエロだぞ！マリアも見ろ！」

「ルーク、あんたもこっちに來たらどうだ？悪魔と人間の行為なんて、中々見られるもんじゃないぜ」

「…ギャラリー増やそうとしないで」

ランスとミリが壁を向いている二人を誘う。ルークを誘ったミリをランスが止めなかったのは、ルークがランスからそれなりの信頼を得ているのか、はたまた気持ちよすぎて深く考えなかったただけなのか。

「悪魔とのHに別に興味ないんでパス。魔人となら見学もちよっと考えた」

「私もパスします。女の子がランスにHされてるとこなんて、見たくないもん」

「がはは、マリアはやきもち焼きだな」

「…馬あ鹿」

「なんか今さらりと凄い発言が飛び出た気がするんだが…俺の聞き間違いか？」

「…胸揉みながら普通に会話とかしないで」

先ほどから悪魔娘がぼそりと抗議を続けるが、誰も聞いていなかった。

二十分ほど行為が続き、しっかりと本番まで終わらせたランス。悪魔娘はぐったりとしながら、人間のくせに…と小さく呟いている。トラウマにならなければいいが。

「ほら、いい加減起きろ。悪魔のくせによわっちいな」

「くうう…（人間のくせに、人間のくせに、人間のくせに…！）」

「さて、それじゃあ次の願い事だが…」

悪魔娘を無理矢理起こして二個目の願い事を頼もうとするランス。一体何を頼む気だろうか。金か？女か？順当にシイル救出の手伝い

か？思考を巡らせるルーク。

「ズバリ、やらせる！！」

「……………」

「……………お、鬼だわ！」

「……………これはさすがに読めなかったな」

「……………大した男だ」

「おねが、お願いです！お願いですから別の願い事に……………いやあああああ……………」

カーン、とどこかでゴングが鳴る音が聞こえた気がする。第二ラウンド突入。それはつまり、ルークとマリアの壁とのにらめっこ第二ラウンド突入も意味していた。

「それでは……………次が最後の願いです……………よく……………よく考えた上でお願いします」

第二ラウンドもたつぷりと時間を掛けられ楽しまれた悪魔娘。まさかの三ラウンドを警戒してか、必要以上に念を押してくる。それに対し、既に三つ目の願いを決めていたのか、ランスは即答する。

「俺様の魂を取るといふ話をなかったことにしろ」

「……………えっ？」

「何だ？お前に叶えられる範囲のことだろう、この願いは」

「……………上手いな」

ルークが感心する。こういう悪知恵に対しての頭の回転は本当に凄い。

「い、いえ…その…あの…」

「まったく、悪魔というのは自分が交わした契約一つ守れないのか。ああ、情けない」

「……わかり…ました…受理させて…いただきます…」

ガクリと頭を下げる悪魔娘。その頬を涙が伝う。なぜかマリアの胸の中に親近感が湧いてきたらしく、私今なら悪魔と仲良くなれるかも…とか呟いている。

「がっはっは、悪魔とタダでHしてやったぞ！とーくしたー！」

「う…うーわん！この悪魔……！！二度と私の前に現れるなー
……！！！」

泣きながらどこかへと去っていく。悪魔に悪魔と呼ばれる人間が誕生した瞬間であつた。

・ピラミッド迷宮 幻獣の間・

その部屋は、ただ広いだけの何も置いていない部屋だつた。ここは四魔女の一人、ミル・ヨークスが改造して造つた幻獣たちと遊ぶ部屋。自分が生み出したたくさんの方獣たちと、あるときは魔法の修行を、またあるときは鬼ごっこやボール遊びを楽しんだ。そういつた目的ゆえに余計な物を置いておらず、ミルの部屋はこの部屋の奥に別に造つてあつた。先ほどまで幻獣たちと遊んでいたミルは自分の部屋に引き返そうとするが、入り口から誰かが入ってきたのが見える。

「だあれ？なにかご用？」

「ミルッ！！」

「おお、あれがミルだな。ぐふふ、彼女も美人ではないか」

「あつ、ランス、言っておかなきゃいけないことがあるんだけど、ミルはね……」

部屋に入ってきたのは四人。男二人は知らない人だが、女性の方は同じく四魔女の一人

マリアと、実の姉であるミリであった。予想外の客人に目を丸くするミル。スレンダー美人であるミルに対し感想を述べたランスにマリアが何か言いかけるが、ミルの言葉に遮られる。

「あれ、お姉ちゃん？もう、なんで来たのよ。私のことは放っておいてよ！」

「ようやく見つけたぞミル！町の人たちにこんなに迷惑かけやがって…指輪を外して姉ちゃんと来るんだ！」

「ふんだ！」

ぷいつ、と頬を膨らませそっぽを向くミル。妹の反抗にミリが額に青筋を立て、声を荒げる。

「こら！いい加減にしないとお尻ペンペンじゃすまさないよ！」

「ひっ……」

「子供かよ……」

ミリの発言もどうかと思ったが、それにびびるミルに対し呆れるルーク。あれではまるで子供だ。

「な、なによ、なによ。全然怖くなんかないんだからね！もう、さつさと帰って……」

ミルがそう言って手を振ると、虚空からザワザワと何かが生まれる。体は青白く、鋭い爪にギョロリとした目。あれが、幻獣。ミルを一瞬のうちに数体もの幻獣を生みだしたのだ。

「やつちゃって、幻獣さん!!」

「まずいわ!!」

ミルの合図と共に、幻獣たちがルークたちめがけて宙を走る。幻獣の呪文とは、無の世界から怪物を召喚する力。その怪物たちはある特殊な性質を持っていた。

「がっはっは、動きが鈍いな!俺様の華麗な剣技で真つ二つだ!!」

そう言って向かってきた幻獣に剣を振るランス。しかし、その剣は幻獣の体をすり抜けてしまう。

「あ、あれ?どういうことだ!？」

「駄目、私のチューリップも効かない!」

「あっはっは、私の幻獣さんにはそんな攻撃効かないわ!!倒したかったら大昔に所在不明になった幻獣の剣でも持つてくるのね!!」
「くそっ、どこまで世間様に迷惑かければ気が済むんだ、ミル!!」

これが幻獣の特性。その体を覆った特殊な結界のせいで攻撃がその体をすり抜けてしまい、ダメージを与えられない。一気に幻獣たちに囲まれてしまうランスたち。

「今ならごめんなさいすれば無傷で帰してあげるわよ。さあ……えっ?」

勝ち誇るミルだが直後信じられない光景を見る。一閃。目の前の

幻獣が先ほどまで静かにしていた男に斬られ、消滅していた。

「わざわざ説明ありがとう。幻獣の剣……っていうのはこいつのことかな？」

「ど、どうしてそれを！卑怯よ、反則だわ！その剣は幻獣使いにとつて天敵なのよ！」

男が持っていたのは先ほどミルが口走った幻獣の剣。あの剣は幻獣の結界を無効化してしまう特殊な剣で、幻獣使いのミルにとっては発言通り天敵とも呼べる代物だった。

「おお、ミイラ男に貰った剣か。仕方がない、今この場で戦えるのはお前だけだ。さあ、働け！」

ランスがルークに指示を出す、今の一撃で何かを確信したルークは、手に持っていた幻獣の剣をランスに向かって投げる。反射的に受け取ってしまうランス。

「ランス、使え。貰いもんなんだから後でちゃんと返せよ」

「むっ、貴様自分が楽するために俺様に剣を渡したな。めんどくさいからお前が……っておい！」

ランスの話が終わる前に、元々の装備である妃円の剣を抜いて幻獣に突っ込んでいくルーク。幻獣が鋭い爪をルークに振り下ろす。

「だめ、ルークさん危ないわ！！」

「何やってんだ！さっさと下がれ！！」

マリアとミリも声を上げる。普通の剣で幻獣に向かうなど自殺行為だ。幻獣の腕とルークの剣が交差する。剣はその体をすり抜け、

爪がルークを引き裂く、とその場にいた誰もが思っていた。が、現実起こったのは全くの逆。幻獣の腕をルークの剣が斬り裂き、そのまま体ごと真つ二つにしていた。

「嘘、どうして！？なんで普通の剣で幻獣さんに攻撃できるの！？」
「残念だったな、ミル・ヨークス。どうやら俺は幻獣使いにとって……」

ミルが先ほど以上に大声を上げる。マリアとミリも目の前の光景に唖然とする。普通であれば幻獣の結界に攻撃は遮られるはずなのだ。普通であれば、だ。しかし、今目の前に立つ男の持つ世界に唯一の技能は普通ではない。対結界。それは、ミルにとって幻獣の剣以上の……

「天敵みたいだ……！」

- 悪魔界 某所 -

「願い事を叶えたのに契約を破棄されたですって、このグズ！フェリス、あなたは降格処分ね……」

「そ、そんなあああああ！！フィオリ様あああ！！！！」

転落人生、スタート。

第21話 転落人生（後書き）

「人物」

フェリス

LV - / -

技能 悪魔LV1

元カラーの悪魔。若くして第六階級まで上り詰めたエリートであったが、ランスのせいで降格させられた。悪魔は通常のLV概念から外れており、階級や功績により強さがある程度変動する。第六階級ともなれば、並の魔人とも同等に渡り合える实力を持つ。降格したが。

フィオリ・ミルフィオリ（ゲスト）

LV - / -

技能 悪魔LV2

フェリスの上司。DS。第三階級悪魔で、広大な領地を持つ君主。その实力は並の魔人では到底太刀打ちできない。最近空中に浮かぶ都市が気になっているとかいいたか。アリスソフト作品の「闘神都市3」よりゲスト出演。

「技能」

悪魔

悪魔としての才能。人間やカラーから転成した者は、転成する際に身につく。

第22話 幻獣使いミル

・ピラミッド迷路 幻獣の間・

「なんで…なんでよ…なんで幻獣さんが倒せるのよ！」

目の前で起こっている事態にミルが声を張り上げる。今までどんな相手にも敗れることの無かった幻獣。ランの剣も無効化し、あの四魔女最強の志津香も幻獣を破る手段は持ち合わせていなかった。それがささやかな自慢だった。だが、その自信が今音を立てて崩れていく。目の前にいる二人の戦士が、次々と幻獣を消滅させていくのだ。茶髪の戦士の方はまだ理解できる、彼が装備しているのは幻獣を打ち破れる特殊な剣だ。では、もう一人の黒髪の戦士は一体何なのか。ミルが魔力を込め、手を振る。先ほど生み出したよりも更に大量の幻獣が召喚される。

「やつちゃって、幻獣さん！特にあの黒い髪のおじさん、絶対許さないんだから！！」

「お…おじさん…」

幻獣を斬り伏せていたルークの手が止まり、顔が引きつる。流石に聞き捨てならない言葉だったのか、ミルに対し反論する。

「失敬な！俺はまだ25だ！お兄さんと呼べ、お兄さん！」

「がはは、十分おっさんだ！」

「あ、結構年上だとは思っていたけど、私よりも8つも上なんです
ね」

「まあ…ミルから見たらおじさんだろうな」

まさかの味方からの追い打ちに肩を落とすルーク。ランスがやーい、じじいと更なる追い打ちを掛けるが、直後のミリの発言にその挑発が止まる。

「つてことは今この場に二十代はあんただけか」

「ん…ちよつと待てミリ、お前年はいくつだ？」

「俺か？今年で19だけど？」

「…なんだと！…！」

「…あんたら二人、後で覚えておけよ」

ふざけながらもルーク、ランス共に一流の冒険者。新しく迫ってきた幻獣の攻撃を躲し、お返しにとその体を両断する。幻獣の動きは基本的に鈍い。攻撃さえ普通に与えられれば、低級モンスターを相手にしているような者ものだ。ふと見れば、ミルが更に幻獣を召喚していた。

「とは言え…キリがないな。指輪のせいで魔力切れも遠そうだし…術者を倒すのが手っ取り早いな」

「ひっ…」

そう言い放ち、ミルに向かって殺気を含んだ視線を飛ばす。その殺気もミリの妹なので多少甘めのものだが、十分効果はあったらしい。

「こ、来ないでよ…幻獣さん！あのおじさん絶対に殺して…！」

四度手を振ると、またも大量の幻獣が生み出される。既に部屋にいたのと併せて、その数は三十体以上にも及ぶ。これを倒すのは骨が折れそうだ。そう思っていると、ミルは走って奥の部屋へと逃げ

て行ってしまう。

「ランス、追え。ミルの指示通り、幻獣は俺を狙ってきている。もしレポートウェイブなんかの装置があつて逃げられると厄介だ。マリアとミリもついて行け。ダメージを与えられない以上、残つていてもしょうがないしな」

「ふん、ならここは任せた。ミルのお仕置きと処女は俺様に任せろ！」

「悪いね、頼んだよ」

「ルークさんも気をつけて」

そう言つて目の前の幻獣をランスが斬り伏せ、ミルを追う三人。幻獣は単純な思考回路らしく、追う三人よりも直接指示を受けたルークの方に寄つてくる。部屋を出て行く間際のミリの背中に向かつて声を掛ける。

「ミリ、必ず妹を救い出せよ！」

「…ああ、恩に着る！」

こうして部屋にはルークただ一人取り残された。周りを囲むのは三十体を越える幻獣。特にルークに近かった幻獣三体の爪が一斉に襲いかかつてくる。そんな状況に置かれながらも、ルークは不敵に笑つた。

「ふっ…最近魔法攻撃中心の敵との戦闘が多くてな…やはり近接戦闘はやりやすくていいな！」

ミルを追ってきたランスたちも、奥の部屋で幻獣を相手取っていた。結果として脱出装置のようなものはなく、単純に追い詰めた形となったが、無制限に生み出される幻獣が面倒なことこの上ない。しかもこの場で戦えるのはランス一人、そんな状況にだんだんと苛立ちが溜まってきていた。

「ああ、なんか面倒になってきたなあ……」

「そんなこと言わないでよ、ランス」

「ほらほら、まだまだ幻獣さんたちはいるんだから、早く帰ってよね！」

「バカ抜かせ！妹を残してどこに帰ってんだ！お前がいるところが、私がいる場所だ！」

「……おねえちゃん……」

やる気をなくしているランスを必死にフォローするマリア。ミりとミルは二人で盛り上がっている。なんだ、姉妹仲良いんじゃないかと思っていたランスはふとある作戦が頭に浮かぶ。

「……うむ、俺様自身恐ろしくなってしまうほどに完璧な作戦だ。これが持つて生まれた才能か」

「？何言ってるの、ランス？」

「まあ、見ておけ」

近場にいた幻獣を倒したランスは、隣で盛り上がっているミリの背後にこそそと回っていく。そして突如ミリを腕で拘束し、その首筋に剣先を押し当てた。

「これが目に入らぬか！ミル！！」
「なっ！！！！」

「おい、ランス…」

「見てろって…この光景を…？最低…」

「さあミル、降伏するんだ！姉のミリがどうなってもいいのか！！」

清々しいまでに外道な作戦を実行したランス。マリアの軽蔑の眼差しなど気にしていない様子で、ミルに降伏するよう迫る。困惑するミルだが、易々とは降伏しない。

「あ、あんた最低！おねえちゃんとは仲間だったんじゃないの！？
…そ、そんな猿芝居に騙されたりなんか…」

「おおっと、手が滑った！」

そう言って剣先を少しずらすランス。ミリの首筋に薄い切り傷が出来、一滴の血が流れる。

「ランス、お前いい加減にしろよ。本気なのか？それなら俺も全力で抵抗させて…」

「バカ。演技に決まってるだろ！お前も協力しろ」

ミリの問いかけに対し、ミルに聞こえないよう小声で回答するランス。その答えにミリが少し安堵の表情を浮かべる。

「まあ…考えてみればそうだな。本気でこんな事するわけ…」

「うむ。だから弾みや流れで殺してしまっても恨むなよ」

「……………うおおおおおおお！！！！」

「バ、バカ。何全力で拘束から逃れようとしてるんだ！」

「もうやめてーーーー！！！！」

危うく作戦が頓挫する直前でミルが大声を上げる。たった一人の大切な姉、放っては置けない。指輪で心が悪に染まっただけでも、そ

の絆までは消されていなかったようだ。

「わ、わかったから…降伏するから…おねえちゃんにヒドいことしないで…」

「がはは、そうか！では命令を聞いて貰うぞ！まずは服を脱げ！それから…」

「ええっ!？」

「ちよつと待ってランス、まだミルは…」

「ええい、うるさい。処女を失わんと指輪を外せないんだろうが！」
「うっ…まあそうなんだけど…」

ランスとマリアが問答をしている間にミルは着ていた服を脱ぎ去った。下着姿で恥ずかしそうにしながら口を開く。

「……これで…いい？」

「まだまだ、さあここからが本番だ。ぐふふ…」

「ほん…ばん？」

・ピラミッド迷宮 幻獣の間・

こちらでは丁度ルークが最後の幻獣を倒したところであつた。見ればその体はほぼ無傷。高レベルな事もあり、近接戦闘であればこの程度の相手がいくらいようと、その動きの鈍さを見切つて無傷で倒しきることは十分可能であつた。とは言え数が数、多少くたびれた様子で肩を回すと、奥の部屋の方を見る。

「さて…俺も行くか。もう終わつてるかもしれんがな」

そう言つて、ルークは奥の部屋へと向かう。戦闘の音がしてこない。やはり決着はもうついてしまったらしい。少し残念そうにしながら入り口を潜る。しかし、ルークは部屋に入って飛び込んだきた光景に驚愕し、持っていた剣を落としてしまう。

「びえーん！痛いよー！！」

「なんだ、なんだ、なんだー！！？」

先ほどまでこの場にいなかった裸の少女がわんわんと泣いており、その横でランスが困惑していた。少女とランスは既に事を済ませた後のようだった。ここまでは見慣れた光景であるが、問題なのはその少女の年齢。明らかにまだ10前後である。

「ランス…お前…あんな幼い娘になんてことを…流石に容認できんぞ……」

「ち、違うわ！こんなちんちくりんなガキ、俺様は知らん！」

「おお…ランスにそんな趣味があつただなんて…よーいちろーがやってきてしまう…」

「だから違うと言つてるだろうが！」

「ランス、ルークさん、これがミルの本当の姿なの」

状況が飲み込めていない二人に、マリアがフォローを入れる。

「なっ？これがミルだと！？全然姿が違うではないか！」

「多分、強すぎる魔力にも耐えられるように、指輪がミルの体を成長させていたんだろうな」

「それを知らずにやつちまつた訳か…因みに今いくつなんだ？」

「ミルはまだ9才だよ」

ぎろっ、とどこかでソフリンちゃんが睨んでいる気がする。聞い

てはいけない質問だったようだ。年齢を聞いて更にショックを受けた様子のランス。

「さて…と、悪いけど俺はここで抜けさせて貰うぜ。ミルを町に連れて帰らないとな」

「あれ？一度置いてきて合流はしてくれないの？」

「ミルを見ててやらないとな。どんな指輪の悪影響があるかも判らないし」

「まあ、そうだな。こっちは大丈夫だから、妹と一緒にいてやれ」
「悪いな。短い間だったけどお前らとの冒険、なんだかメチャクチャで楽しかったぜ。またな、ランス、ルーク！」

そう言つてミルを連れて帰り木で町へとワープしたミリ。それを見届けた後、マリアが張り切った声を上げる。

「なんにしてもこれで指輪はあと二つね。さあ、四層にいるランのところに向かうわよ！」

「あんなガキンチョに…俺様のプライドが…」

「ほらほら、行くぞ」

未だ立ち直れないランスを引きずっていくルークとマリア。四層へと続く階段はミルの部屋の近くにあった。気を引き締めてその階段を下りようとしたとき、下の階から声が聞こえてきた。

「…ス…ま…たすけ…」

「！？ランス、今の声！」

「シイルの声じゃねえか！行くぞ！！」

「え、なにになになに？」

先ほどまでの力の抜けた状態から一転、剣を握りしめながらラン

スは下の階層へと走り出した。

・ピラミッド迷宮 棺の間・

「お、音がやんだな。おいちゃんの剣は役に立ったかねえ？」

壁向こうのミルの部屋から聞こえていた戦いの音が止み、ミイラ男は一人呟く。まさか自分の剣が人質作戦などと言う卑怯な手に使われたとは夢にも思っていない。すると、突然声を掛けられる。

「おほほほ、お久しぶり。聞こえたでおじゃるよ。あの剣、誰かに渡したのでおじゃか？」

部屋に入ってきたのは、体は人間だが顔が猫である何か。真っ赤なタキシードを着て、手には看板を持っている。

「おお、K・D殿、お久しぶりです。またここには暇つぶしで？」
「その通りおじゃ。さあクイズするでおじゃよ。で、質問の返答は？」

「ええ、中々に見所のある戦士が二人いたんで、譲ったんでさあ。こんなところで腐らすよりいいからねえ」

「ふむ、大事な剣を譲るほどに将来有望そうな戦士。まるも見てみたかったでおじゃ」

「はっはっは、ケイブリスの事を言っても、逆に俺が倒してやるみたいだな目をしていたよ。端かりや見りや、世間知らずかただのバカだが…そういう感じでもなかったんね。おいちゃん気に入っちゃったよ」

「おほほほ、それにしてもあの貧弱だったリスちゃんが今や魔人

四天王とは…時代の移り変わりは凄いものでおじゃね」

「またその話ですか。K・D殿の話はどこまで信用して良いのか困りますなあ」

慣れた様子でK・Dの発言を受け流すミイラ男。あまりにもスケールが大きすぎる内容はいつものことのように、全く信用していない。

「本当なんでおじゃがね…」

落ち込んだ様子のK・Dと呼ばれた生物。まだ随分と先の話になるが…彼もまた、ルークと深く関わることになる。K・D。^{キングドラゴン}その正体は、今から4000年以上前の話だが、かつて大陸に統一国家を建国したドラゴン族の王であった。その彼がなぜこのような姿をしているのか、なぜ戦うことを止めたのか…それを知る者は少ない。

第22話 幻獣使いミル（後書き）

「人物」

ミル・ヨークス

LV 10 / 34

技能 幻獣召喚LV1

カスタム四魔女の一人。非常に珍しい幻獣魔法の使い手であり、まだ幼いながらも他の三人にも一目置かれていた。ミリの妹であり、家に帰った後はこつてりと絞られたが、姉妹仲は良好。ランスに処女を奪われる。おお…ソフリンちゃんがお怒りだ。

K・D

クイズ好きの猫人間。その正体はドラゴンの王、マギーホア。かつて大陸を統治したドラゴン族だが、今ではごく少数が翔竜山に生息するのみである。彼らに何があったのか、その真実は謎に包まれている。

「技能」

幻獣召喚

異空間から幻獣を呼び出すことが出来るレア技能。その姿は術者の精神に影響を受ける。

「その他」

よーいちろー

悪い子にしているとよーいちろーがくるよ、と子供のしつけによく使われるなまはげ的存在。やってくるのは可愛い少女のところのみ。

ソフリンちゃん

その睨みはハニーキングをも震え上がらせるというPCゲーム界のドン。その割には6でカーマ、7で香姫、8でオノハと意外に寛容な面もある。

第23話 幻術使いラン

- 妖体迷宮 通路 -

第四層に位置するエレノア・ランの迷宮の中を、シイルとバードは歩いていった。ワープ装置が数多くあり、少しでも手順を間違えれば同じ場所をループさせられるまさしく迷宮。二人は自分たちが今どこにいて、どこに向かっているかも判らなくなってしまっていた。

「彼女たち…一体どこに連れて行かれてしまったのでしょうか…」
「わからない…早く助け出してあげないと…」

彼女たちというのはランに捕らえられていた女性たちだ。以前にチサが話していた誘拐された若い女性たちというのが彼女たちなのだろう。出口を捜すシイルたちが拷問戦士に嬲られているのを発見し、これを救出。しかし、少し目を離れた隙に再度ランに攫われてしまったのだ。

「魔女たちは彼女たちを攫って一体何をしようとしているんだ…」

バードが独りごちる。目的が見えない行動は、それだけで恐怖の対象となる。ましてや相手は魔女。バードの脳裏には先ほど救出した三人が人体実験を受けているシーンが浮かぶ。自然と顔が強ばり、その緊張はシイルにも伝わってしまう。

「私たち…このまま出られないんでしょうか…？」

「何を言ってるんだシイルちゃん！諦めちゃだめだよ」

「でも…もう何時間もこうして歩いているのに手がかり一つ…」

「大丈夫だ！君のことはこの僕が命に代えても守ってみせる！」
「…ありがとうございます。すいません、弱気になっちゃって」

バードは共に迷宮を探索している間にシイルに惹かれていた。本人は積極的にアプローチをしているつもりもなかったが、言葉のそこらかしこにそれが垣間見える。シイルも薄々感づいてはいたが、好意を持っている人物が他にいるため、気がつかない振りをしていた。

「早くランス様と合流しないとイケないですし、弱音なんて吐いてもらえませんよね」

好意を持っている人物であるランスの名前を出し、自分を奮い立てるシイル。しかし、隣にいたバードはその発言に少しむっとする。道中シイルからランスの奴隷であるという話を聞いたバードは、黙っていらなかった。

「シイルちゃん、君はどうしてランスとかいう男と会いたがっているんだ？君を奴隷にしているような奴なんだろう？…そうか、逃げたらかつと酷い目に会うと思ってしまひ逃げられない程に酷いことをされているんだね。なんて最低な男なんだ、ランス！」

「え…いえ、そういう訳ではなくて…」

「無理しなくていいんだ、シイルちゃん！君は僕が救い出す！」

そう言っつてシイルを抱きしめるバード。いきなりの行動にシイルが慌てるが、バードはどんどん話を進めてしまふ。既に彼の頭の中には外道ランスと囚われの姫シイル、そしてそれを救い出す英雄バードの構図が出来上がってしまった。

「安心してシイルちゃん、僕がきつとランスの魔の手から君を救い

出して見せるから」

「あ、いえ…そうじゃなくて…私がランス様と一緒にいるのは自分の意志というか…一緒にいる内にランス様の魅力に気づいて…その…」

「……うん、判った。ランスのことが好き、そう言いたいんだろう？」

「……えっと…は、はい…」

顔を紅潮させながらも小さく頷くシル。どうやら伝わってくれたらしいと胸をなで下ろす。

「そして、そうしなければいけないと思えるほどに酷い目に遭わされてきたんだね！」

「……あれ？」

「うう…もう許しておけない。その外道は必ず僕が倒す！」

シルに同情したのかポロポロと涙を流しながら誓うバード。決して悪い男ではないのだが、若干自分に酔っている。どうしたものかとシルが困っていると、前方から女性が現れる。

「バード、助けに来たわよ。あら…その人は…？」

「えっ！？どうして君がここにいるんだ、今日子？」

現れたのは情報屋の双子の妹、今日子。行方不明になっていたのは誘拐されたわけではなく、バードが迷宮で行方不明になったことを知って、冒険者も連れず一人救出に来ていたのだ。中々に行動力のある娘である。バードがシルを抱きしめている光景を見て、少し目を丸くするが、すぐに冷静な表情に戻る。

「……別に、ここに占いに仕える道具があるって聞いたから探しに

来ただけよ」

「あれ？今バードさんを助けにつて……」

「……聞き間違いじゃないかしら？どうして私がバードを助けに来る必要が？」

「そうだよ、シルちゃん。僕と今日子はただの知り合いだからね」

バードの発言に一瞬だが顔を歪ませる今日子。天然で火に油を注ぐ男である。

「ま、そういうことだから私は行くわ」

「ちよつと待った、今日子。一人は危ない。一緒に行かないか？」

「誰があなたなん」あら？ここにも生気が滾った娘がいるわね……！？」

今日子の言葉を遮るように迷宮に声が響く。すると、突然今日子の後ろから赤い髪の女性が現れた。振り返り顔を見た今日子は、彼女の名前を口走る。

「……エレノア・ラン」

「ふふ、お久しぶりね今日子さん。そして……さよなら」

ランがそういった瞬間彼女の目が妖しく光り、今日子の体が崩れ落ちる。幻惑魔法の使い手であるラン。その彼女が最も得意にしているのがこの催眠の魔法だった。その目を見た者は幻想の世界に投げ込まれ、行動に自由を奪われる。

「今日子さん！！」

「ラン、ここでお前を倒して今日子と三人の娘たちを救い出す！今日がお前の命日だ！」

「あらら、怖い怖い。早く今日子さんを志津香様のところに送りたい

いのだけれど……まあいいわ。私が直々に可愛がつてあげる」

「！？シルちゃん、彼女の目を見てはいけない！」

そう言つて再び目を妖しく光らせるラン。バードはシルの前に立ちほだかるように躍り出る。シルも慌てて目を閉じる。が、直後辺りを切り裂くような悲鳴が響いた。

「うあああああつっ！！！！！」

「バードさんっ！？」

目を開いたシルが見たのは、ランに左腕を肩口から斬り飛ばされるバードの姿だった。腕がゴロゴロと転がる。

「あははは！信じられない！敵を目の前にして二人して目を閉じるなんて。幻惑魔法だけじゃなくて剣も使えるって知らなかったの？それに…攻撃魔法もね。炎の矢！」

そう言つて指先から炎の矢を放つラン。対象はシルでもバードでもない、床に転がっていたバードの左腕だ。炎の矢が直撃し、一気に燃え上がる左腕。辺りに肉の焦げる臭いが充満する。

「これであなたはもう一生片腕ね。冒険者稼業は廃業かしら？くすくす」

「うつつぐううあああああ！！ラン！！！！！」

剣に付いた血を舐めながら、ランが笑う。バードが苦痛に声を上げながらも、剣を握りしめランに向かっていこうとする。

「駄目です、バードさん。ここは一旦引いて早く治療しないと！」
「に、逃がさないぞ！！！」

バードが腕を掴み、逃げられないようにする。しかしその相手はランではなくシル。驚いたシルがバードの顔を見る。その目からは正気が失われていた。

「まさか…バードさん、幻術に!？」
「シルさん」

思わぬランの呼びかけについ振り向いてしまふシル。失策。しかし、後悔してももう遅い。その瞳が妖しく光る。

「あつ…あああ………」
「ふふふ、こんなに簡単に操られるなんて…滑稽すぎるわよ、あなたたち。さて、このまま志津香様のところへ…」

「ランス様………」
「あら?まだ意識が少し残っているのね?催眠が効ききっていないところを見ると、彼女もそれなりに才能ある魔法使いみたいね」

「助けて………」
「助けなんてこないわよ。さあ、志津香様のところへ。それとも少し私が楽しもうかしら」

「ランス様……助けて………」
「うふふふふ、だから助けなんて……きゃいんっ!」

突如ランの後頭部に激痛が走る。振り返れば仲間であるはずのマリアと見覚えのない男が一人。この男にげんこつをされていたのだ。頭を押さえ、涙目になりながら怒りの声を上げる。

「な、な、な、何者よあなた!急に現れて!」
「俺様を知らないのか?勉強不足だな!よく覚えておけ!」

聞き慣れた声が辺りに響き渡る。今の一撃で催眠が解けたのか、シイルの意識が戻っていく。

「ある時は今世紀最強の天才剣士！またある時は女たちのハートを射止める絶世の美男子！そしてまたある時は数々の謎を解き明かす知的な冒険家！」

「あ…ああ…」

シイルの目に涙が溜まっていく。意地悪で口も悪いが、自分のピンチには必ず駆けつけてくれる大好きなご主人様。

「そしてそのピンクモコモコ奴隷のご主人様にして世界の大英雄！ランス様だ！！！」

「そこまで自分で言うの…？」

「ランス様ああああ！！！」

マリアの突っ込みをよそに、シイルがランスに抱きつきに行こうとする。感動の再会だ。ちょっとロマンチックかもしれないとシイルが考えていたが、その頭にすこーんとランスの投げた石がヒットする。

「ひどっ！ちよつとランス、シイルさん可哀想でしょ！！！」

「ばかもん、シイル！こんな雑魚にやられやがって！俺様の奴隷を名乗るならもつとちゃんとしろ！」

「ひんひん、ごめんなさい……」

ロマンチックどころか色々と台無しな再会であった。

「ラン、その指輪には恐ろしい悪の作用があるの！元の優しかった貴方に戻って！」

「恥を知りなさい、マリア！そんな男の軍門に下るなど！こんな男、私が倒してあげるわ！」

自信満々に右手で剣を取るラン。左手に魔力を溜め、目も再び妖しく光り始める。

「がはは、お前みたいな雑魚が俺様に勝てるわけないだろ！」

「雑魚ですって！？バカにして…剣、魔法、そしてこの魔眼！一戦士風情が私に向かって雑魚などと…」

「まあ…雑魚と言われてもしょうがないだろうな。まだ気がついていないんだから」

「へ？」

チャキッ、と後ろから首筋に剣を突きつけられる。固まるラン。剣を突きつけているのはルーク。ランスたち登場の前に身を隠し、ランの後ろに回り込んでいたのだ。

「侵入者の人数くらい把握しておくべきだったな。おおっと、振り返るなよ。幻術を使おうとしたら問答無用で首を飛ばすぞ」

「がはは、雑魚すぎる！」

「……………くすん」

こうして自信満々だったランは、四魔女中最速で敗れ去った。その背中が少し寂しそうであったと、後にシイルが語った。それと時をほぼ同じくして、町の方で二つほど動きがあった。

- カスタムの町 ラギス邸前 -

「お姉ちゃん、ごめんなさい…」

「俺じゃなくて町の人にちゃんと謝るんだぞ」

「はい…」

ルークたちと別れ、一足先に町に戻っていたミリとミル。町長に話を済ませ、今は自宅に帰る途中であった。が、廃墟となったラギシス邸の前を通ったときに異変に気がつく。家の中から気配を感じるのだ。

「誰だ！」

ミリが叫ぶ。すると屋敷の暗闇から、湧き出るように一人の少女が現れた。その瞳は焦点が合っておらず、ぼんやりとしている。

「お姉ちゃん。この人…」

「ああ…行方不明だったチサだ。おい、大丈夫か！」

ラギシス邸にいたのは行方不明になっていた町長の娘、チサであった。程なくして意識を取り戻すが、行方不明の間のことは全く覚えていないようだった。

「攫ったのは…ランか志津香だと思っていたが…違うのか…？」

ミリの呟きに答えられる者はこの場にはいなかった。そしてもう一つ…

- カスタムの町 酒場 -

「お客様、三名様ですね。…随分と高貴な出で立ちですね」

「当たり前じゃない！で、ダーリンはどこにいるの！」

「へ？ダ、ダーリン？」

「リア様、ここはお任せください。私たちはリーザスの者で、ランス様という冒険者を捜しているのですが…」

「（マリス様の話が終わったら、ルークさんのことも聞いてみようかなあ…）」

全ての準備を終え、リア一行がカスタムの町に到着していた。

「…かなみ、心配しなくても一緒に聞いておいてあげますからね」

「へ！？な、何のことですか！？」

第23話 幻術使いラン（後書き）

「人物」

エレノア・ラン

LV 16 / 30

技能 剣戦闘LV1 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。珍しい幻惑魔法の使い手であると同時に、剣も使いこなす魔法剣士。本来は非常に優しく、真面目な性格である。考えすぎてしまう傾向があり、悩みすぎてその内自殺でもしてしまうんじゃないかと一部で心配されていたりもする。雑魚じゃないません、器用貧乏なだけです、とは本人の談。また、エレノアが名前のはずだが、なぜかランと呼ばれることが多い

エルム・トライ

ランに捕らえられていた赤い髪の少女。拷問戦士から空気ポンプの拷問を受けていた。

ゼリフィ・ゴーラ

ランに捕らえられていた緑髪の少女。拷問戦士から逆さ吊りの拷問を受けていた。

レザリアン

ランに捕らえられていた緑髪の少女。拷問戦士から鞭打ちの拷問を受けていた。

「モンスター」

拷問戦士

女の子の拷問を生き甲斐とする残忍な戦士。剣の他に雷撃などの

魔法も使用してくる厄介な相手。

「技」

催眠

魔眼から放たれる光で敵を自分の意のままに操る初級魔法。初級とはいえ、幻惑魔法の使い手は少なく、非常に珍しい魔法である。

第24話 戦士三人

- 妖体迷宮 通路 -

「わたし…町の人たちにあんな酷いことを…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「随分性格が変わったな。って、こらしル、いつまで抱きついてるんだ。ウザイぞ」

「だって…ううつ…ランス様…」

「元は優しい性格だったってマリアがさっき言ってただろ。それと、せつかくの再会なんだ。もう少しそのままにしてあげろよ」

「ラン、落ち込まないで。みんな指輪のせいなんだから」

あの後ランスがすっかりとランの処女を奪い指輪を外すことに成功した。するとランの性格が一変し、今までの自分の行いを悔やみ、ボロボロと涙を零し始めたのだ。マリアがランをフォローし、ランは抱きついて泣いているシルを引きはがそうとしている。ルークは倒れていた男戦士の止血をし、今日子の介抱をしていた。

「でも私…信じられないようなことを…今日子さんにだって…その冒険者さんの左腕だって…全部私が…もう町の人たちに会わせる顔がない…もう町には帰れない…」

言った瞬間ポカーンとランスのげんこつが飛ぶ。二度目のげんこつに再び頭を抱えるラン。

「ふん、終わったことをウジウジと。町の人たちに会えないなら新しい町にでも引っ越すんだな。その町の人たちはお前が何をしたのか知らんから簡単に顔を会わせられるぞ」

「もう、ランス！新しい町なんて引越しても何の解決にもならないでしょ！…あれ、新しい町…それって考えようによっては…」

「もう私に出来ることは…死んでお詫びすることしか…」

「！？ちよつとラン！！」

パン、つと乾いた音が辺りに響いた。もう一度げんこつを飛ばそうとしたランスよりも早く、ランの左頬をルークの平手が打っていたのだ。

「君は今最低な行為を口にした。それは、君をここまで助けに来たマリアに対する侮辱だ」

「……………」

「マリアだけじゃない。ミリもミルも君のことを心配している。町の人だつてそうだ。町長が既に誤解を解いて、町の人たちは君たちの帰りを待っている。その想いを自ら踏みにじるのか？」

「ルークさん……………」

「……………うっ……………」

「死ぬことは償いなどではない。自害という命の投げ捨てなど尚更だ。生きて町の復興に力を尽くせ」

「そうだそうだ！もし自殺なんかしてみろ。お前の死体にいっぱい悪戯してやるからな！」

「うわ…台無し…」

「う…うん、ありがとうルークさん、ランスさん…」

涙を拭いながら返事をするラン。その表情は先ほどまでの沈んでいたものと違い、若干ではあるが笑顔が戻っていた。

「ん？もしかして今のつてランスなりの励ましだったの？優しいところあるじゃない」

「ふん、俺様は可愛い女の子には優しいのだ。シル、いい加減離

れる！」

「きゃん！ランス様あ……」

「ルークさんもありがとう」

「別に礼を言われるようなことは……」

「流石年を重ねているだけのことはありますね！」

「ぐはっ！」

マリアの悪気のない発言に倒れ込むルーク。ミルのおじさん発言をまだ引きずっていたようだ。そのとき、一振りの剣がランスに迫った。

「うおおおおお！！！」

「きゃあああ、ランス様危ない！」

ガキイイン、と音が響く。ランスは迫ってきていたバードの剣を冷静に防ぎ、腹部に矢のような蹴りを入れた。倒れていたルークもすぐさま起き上がり、剣を抜く。

「ぐはああっ！！！」

「なんだお前、新手か？」

「違いますランス様。この方はバードさんと言って、一緒に協力してここまで来た人です」

シイルの発言に今すぐにも斬り殺そうとしていたランスはその殺気を抑え、バードをジロジロと見回す。

「ふうん……つまり、雑魚以下か」

「なん……だと！僕の剣の腕まで侮辱する気か！！！」

「だってお前雑魚のランに負けたんだろ？つまり雑魚以下だ」

「雑魚じゃありません！器用貧乏なだけです！！！」

「そうよ、ランス。ランはちょっと全部が中途半端なだけなんだから!!」

「マリア…とどめ刺してるぞ…」

「え? あれ、ラン? どうしてそんなに落ち込んでるの? さっきまでの元気はどこにいったの?」

ランがまた自殺しそうな顔に戻ってしまった。もう一発、今度はマリアに必要だろうか考えるルーク。

「ランス、貴様と男と男の話がある! シイルちゃんは僕が守る!」

「シイルちゃん…だと? ふん、面白い。聞かせてみる」

「あつ…ランス様…」

そう言つてバードと一緒に洞窟の奥深く潜つて行ってしまうランス。シイルが追いかけてようとすると、ルークが制止する。

「男の話だ。聞かない方が良く。シイルちゃんは今日さんの介抱を頼む」

- 妖体迷宮 通路奥 -

「ランスさん、貴方はいつもシイルちゃんに酷いことをしているそうですね? 貴方みたいな人にシイルちゃんを任せておけない!」

先ほどから少し冷静さを取り戻し、呼び捨てにするのを止める。抑えている左腕は止血したとはいえ、かなりの激痛のはずだ。その苦痛に耐えてでも早急に片を付けなければならぬことがあったのだ。勘違いではある。先走りでもある。しかし、彼は全力で一人の

少女を救い出そうとしていたのだ。その行動は、間違いではない。

「なんだお前、シイルに惚れてるのか？」

「ああ、そうだ！彼女は僕が守る！！」

「ふん、何を勘違いしてるんだお前。シイルは俺様にメロメロなんだよ」

「なんて自信過剰な人なんだ！彼女の幸せのために貴方が立ちはだかるなら…力づくでも…」

「思い上がるなよ雑魚！片腕一本で俺様に勝てる気か？シイルを守るって、お前はシイルのピンチに何をしていた！」

「うつ…それは……」

「それに、助けられたときにシイルがお前ではなく俺様に抱きついてきたのを見ていなかったのか？」

「あつ……」

ランの催眠と左腕の激痛に意識がぼんやりとはしていたが、バードは確かに見ていた。ランスに嬉しそうに抱きつくシイルの顔を。自分には向けてくれなかったあの顔を忘れられるわけがなかった。

「全て…僕の勘違いだったと…言うのか…」

「ふん、やっと気がついたか。じゃあな、勘違い男」

そう言ってシイルたちのいる場所に帰ろうとするランス。その背中に向かってバードが悔しそうに声をかける。

「僕はきつと…この腕を治してもう一度貴方の前に現れる！そのとき…もしシイルちゃんが不幸であつたなら…僕が貴方を倒す！！」

その言葉に、ランスはふん、とだけ言い、返事をすることなく通路を戻っていく。すぐ側にあった曲がり道を曲がったところにルー

クが立っていた。

「……聞いてたのか？盗み聞きなど男らしくないぞ」

「一応、斬り合いにでもなったら止めようと思っていたんだが…割と寛大な処置だな」

「ふん、今の話、誰にもするんじゃないぞ。言ったら叩つ斬るからな。」

「誰にもする気はないさ。それより…」

ルークを通り過ぎ、シイルたちのところに戻ろうとしていたランスに問いかける。

「俺もシイルちゃん、って呼んでいるんだが…よかったのかな？」

「……………ふん！」

- 妖体迷宮 通路 -

「あ、ランス様お帰りなさい。なんの話を…」

「なんでもいいだろう。さあ、帰るぞ」

そう言つて帰り木を使おうとするランス。

「えっ、ちょっと待って。ルークさんは？」

「先に帰つてろだよ。ふん、偉そうに俺様に命令しやがった。…シイル、帰ったらやるぞ！勝手に俺様から離れたお仕置きをする！」

「はい、ランス様！」

「くそっ…くそっ…」

バードは泣いていた。先走ってしまったことに、女性一人守れないことに、左腕を無くしたことに、それらを招いた自分の不甲斐なさに。すると、ランスの去った方から声を掛けられる。

「あつちとは帰りづらいだろ。帰り木、持ってきてやったぞ」

「あなたは…ランスさんたちと一緒にいた…」

「ルークだ。お前と同じ冒険者さ」

現れたのはルーク。手には帰り木を持っており、バードと共に町に帰還するつもりらしい。バードの隣に腰を下ろし、口を開く。

「バードって言ったか。冒険者はまだ続けるつもりなのか？」

「はい」

「……その左腕でか？」

「義手でもなんでも手段はあります。必ず…強くなつて見せます」

「そうか…なら、強くなるまでは女を連れるのは止めておけ」

「…？それはどういった意味ですか？」

思いも掛けないルークの言葉にその真意が判らず聞き返すバード。

「ランスが言っていただろ。守る、守るってお前は何していったつてあれ、間違いじゃない。守る力もないのに弱い者を巻き込むのは…罪だ」

「……………」

「それが元々戦いの中で死ぬ覚悟のある奴ならいいさ。ネイのような生粋の冒険者だったりな。でも……今日子さんやシルちゃんは違う。これから先、そういつた覚悟のない女性と共に冒険をするつもりなら…命がけで守れ。それが出来ないなら安請け合いするな」

「……はい」

「それと……シルちゃんをここまで守ってくれて…ありがとうございます。ランスに変わって礼を言わせて貰う。ああ見えてランスも感謝してるんだぞ。そうじゃなきゃ喧嘩売った時点で殺されてる」

「……ありがとうございます。必ず…必ず強くなって見せます！」

先ほどまでよりも更に大粒の涙を流すバード。しかし、その瞳は先ほど以上に決意に満ちあふれていた。こいつはきつと強くなる、ルークはそう確信しながら帰り木で共に町へと帰還した。

・溶岩迷宮 とある部屋・

「ランもやられたみたいね…」

迷宮第五層、溶岩迷宮のとある部屋で緑色の髪の女性が独りごちる。彼女こそが、カスタム四魔女最後の一人にして、最強を誇る人物。魔想志津香。

「もう準備は整ったことだし…私一人でもどうともなるわ」

そう言っただけで境界維持に回していた魔力を切る。彼女の計画に必要な全ての準備が整い、それを維持する必要がなくなったからだ。この瞬間、カスタムの町を覆っていた境界は解除された。

「ふう…これで大丈夫そうね。あと少し頑張れば…」

そう言って疲れた様子で椅子に腰掛ける志津香。録に寝ていないのか、目には若干くまのようなものが出来ている。机の上に置いてあった竜角惨を飲み、気合いを入れ直す。

「もうすぐ…もうすぐだからね…待っていて、お父様…」

最後の魔女との決戦は近い。

第24話 戦士三人（後書き）

「アイテム」

竜角惨

気力を回復させる黄色い錠剤。冒険者だけでなく、労働者にも愛用されている。

第25話 王女襲来

・カスタムの町 町長の家・

町に帰還後、バードと別れたルークは町長の家まで来ていた。既にランスとシルが先に到着しているが、マリアとランの姿はない。そして驚いたことに、町長の隣に行方不明だったはずの娘のチサが立っていた。

「チサちゃん…無事だったのか？」

「はい、おかげさまで。ラギス邸でミリさんに見つけて貰いました。いなくなっていた間のことは覚えていないのですが…」

「ラギス邸で…？」

「うむ、無事に戻ってきてくれて何よりだ。それと、ラギス邸はもう無い。事の真相を知った町の若者たちが取り壊してしまったよ。チサがラギス邸で発見されたことも怒りに拍車をかけたようだ」

もう一度あの館を調べようと考えていたルークにとって、この知らせはあまり嬉しいものではなかった。が、住人の心境も考え、黙っておくことにする。

「それともう一つ大きな動きがあつてな。町の結界が遂に解けたのだよ。おそらく四人中三人が解放されたことで、維持できなくなったのしょう。これもランスさんとルークさんのお陰です」

「うむうむ、俺様を崇め奉るがいい」

「町の復興にはどれほどかかりそうなんです？」

「うむ…軽く一年以上はかかるかと…ですが町の者みんなで協力して再建していきます。三人の娘たちも積極的に復興に協力してくれているんですよ」

「そうなんです。既にマリアさんは町の外で新しい町の開発の陣頭指揮に、ミルちゃんはお姉さんと一緒に薬屋を営み、ランさんは役所で外交を行っています。みんな町のために精一杯です！」

チサの説明にホツと胸をなで下ろすルーク。彼女たちは悪くないという説明を受けて納得していた町人も、いざ彼女たちが帰ってきたときのような反応を示すか心配していたのだ。が、その心配は杞憂に終わったらしい。町長の家を出た後、それぞれの仕事場を見て回ることにした。ランスとシルは外の工事現場と薬屋を、ルークは役所と今日が無事帰っているか確かめるため情報屋を回ることにし、終わったなら酒場で集合することになった。

・カスタムの町 情報屋・

「あら、ルークさんいらっしやい。今日子を見つけてくれたようでありがとうございます」

「ん？今日子さんの姿が見えないようだが…」

情報屋にやってきたルークは今日子の姿が見えないことに疑問を抱く。ふう、と真知子がため息をつく。

「帰ってきてすぐに旅に出てしまいました。この町にはいられないんだとか」

「何かあったのか？」

「多分：バード君に失恋したんでしょうね。あの子：バード君のことうきだったから。バード君もルークさんの少し前にウチに寄ったのよ。で、今日子がいなくなったって教えたら僕の責任だって追いかけて行ってしまったわ」

「やれやれ…あの左腕で無茶をする。俺の言ったことはちゃんと守るんだろうな…？」

「悪い子ではないんだけどね…ちょっと自分に酔っているところがあるから…」

はあ、と今度は二人でため息をつく。なんだか次に会うときにはもう女の子を隣に侍らしている気がする。もしそうだったら脳天チヨップ確定だな、と心に誓うルークだった。

「バカよね…この世に男性も女性も、一人ではないというのに。もっと魅力的な男性が、たくさんいるかもしれないのにね」

「まあ…な。だが、それだけ一人を好きになるっていうのも、いいものかもしれないがな」

「あら？ルークさんにもそういう相手がいたのかしら？」

「まさか。寂しい独り身さ」

「ふふふ、ルークさんの魅力に気がつかないなんて、周りの女性はよっぽど見る目がないのね」

「リップサービスでも嬉しいよ。じゃ、俺はそろそろ行くよ。真知子さん、お元気で」

「ルークさんもお元気で。志津香さんの件もあるからまだ町にはいるのでしょうか？町を出て行く前に、顔くらい見せてくださいね」

「ああ、必ず寄らせて貰うよ」

そう言って店を出て行くルークの背中を見つめながら、真知子は小さく呟いた。

「リップサービスでは…ないのですけどね。ふふふ、私も今日子の事は言えないわね…一人の男性に…執着しそうになってしまっているんですもの…」

- カスタムの町 役所 -

地下都市の一角を利用した臨時の役所。復興のためにはどうしても必要らしく、早急にでつちあげた場所らしい。他の場所と比べてもかなり忙しいようで、人々がせわしなく動いている。その奥の方の席にランがいた。

「しっかりと復興のために働いてるみたいだな、ラン」

「あ、ルークさん。はい、これが私の償いですから。志津香のこと……よろしく願いしますね。もう……あまり時間はないと思いますから」

「……どういうことだ？」

「結果が解けたのが理由です。あれは三人が解放されたから解けたんじゃないですね。元々結果は志津香一人で張っていたんです」

「なるほど……解けたんじゃない、解いたということか。となると……何かしらの計画の準備が終わった、ということか」

「誘拐された少女たちの安否も心配です。一体彼女たちを使って何を……」

「ま、俺とランスに任せておけ。必ずみんな助け出してみせるよ。志津香もな」

そう言っただけで、とランの頭の上に手を置く。四魔女の中でも最年長であり、他の娘のお姉さん役であることも多かったためか、あまり年上の男にこういったことをされるのには慣れていないらしく、顔が赤く染まっていく。

「……あう」

「あら？ランさん、ひょっとして彼氏さんですか？」

その様子をみた役所の職員がランをからかいにくる。真面目なランの珍しい姿に興味を引かれたのだろう。

「ひゃい！？そ、そんなことないですよ！！」

「お、振られちゃったな」

「残念でしたね、私なんてどうです？」

「はは、名前も知らない女性といきなりはつきあえないさ」

「きゃ、私も振られちゃいましたね」

笑い会う二人をよそに、まだ顔の赤いランは二人の会話が耳に入ってきていないようだった。

「で、ランは今どういった仕事を任されてるんだ？」

「えっ！？い、今は町の再建費用を隣の王国から借り入れする交渉をしています。あちらの王女様が中々曲者で…こちらが必要な額を完全に把握していてカスタムが支配都市になるよう色々条件を突きつけてきて…」

「隣の王国…というとゼスではなくリーザスかな。確かにあの王女と侍女は曲者だな」

ルークの頭に誘拐王女と甘やかし侍女の顔が浮かぶ。ううむ、懐かしい。会いたいような、会いたくないような。

「ご存じなんですか？」

「以前、仕事で顔を会わせたことがある程度さ。そうか…リーザスからの資金か…」

「それでも凄いですよ。なんにしても私、町のために頑張ります」

「ああ、いい町にしてくれ。それじゃ、あまり邪魔しても悪いからそろそろ行くよ」

「はい、本当にありがとうございました。それと…お気を付けて」

・カスタムの町 酒場前・

「お、タイミングぴったしだったな」

「ルークさんもお疲れ様です」

酒場の前まで来たルークは、丁度反対側から歩いてきたランスたちと店の前で合流する。聞けば、ミリとミルは姉妹仲良く薬屋を営み、町の人からも頼られており、マリアは設計の才能があったらしく、新しい町作りのため工事現場を張り切って仕切っているという。そして、どちらからも志津香を頼むと言われたらしい。

「ま、こんだけ女の子に頼られたら…助けない訳にはいかんわな」

「がはは、当たり前だ。志津香の処女も頂いて四魔女コンプリートだ！」

「そこかよ…」

そう言いながら酒場に入っていく一行。入るやいなや、エレナが声を掛けてくる。

「いらつしゃい、ランスさん。二階のお部屋にお客様が尋ねてきていますよ」

「なに？もちろん美人なんだろうな？」

「そりやもう、とびっきりの美人さんが三人ですよ。ランスさん本当にもてるんですね」

「三人も？特徴とか何かあるかな？」

「なんだか高貴なかたでしたよ」

その言葉に先ほど話題に上がったある人物が頭に浮かぶ。が、まさかなとその考えを吹き飛ばす。

「おお、それではすぐに二階に上がるぞ！」

「あつ、待つてください、ランス様！」

「それと…三人の内の一人はどちらかというとルークさんに会いに来たみたいですよ。ルークさんももてますねー」

「俺に…はて？」

そう言われながらランスの後についてルークも二階に上がる。臨時の宿泊施設として使っている最奥の部屋、客人が来ているという部屋の前まで来て、ランスが豪快に部屋を開ける。

「さあ、俺様への客というのは誰かな？」

「きゃあ、ダーリン！！リアです！！」

パタン、と扉を閉めるランス。女好きのランスにしては非常に珍しい反応である。しかし、すぐに内側から扉が開けられる。

「ってダーリンったら酷い。いきなり閉めるなんて！」

「うおっ、やっぱりリアか！結婚はしないと云っただろうが！ダーリンって呼ぶな！」

「そんな…私のことが嫌いなんですか…？」

「うっ…」

「ごめんなさい、ダーリン…でも困らせる気はないの…妻と認めて貰える日までずっと待ち続ける覚悟があります！」

「ええい、そんな日は来んわ」

客人というのはルークの予想通り、やはりリア王女一行であった。

結婚する気はないとはいえ、美人の涙には弱いランス。リアの積極的なアプローチにたじたじとなっている。シルモリアの勢いに呆然となっている。その横でルークはマリスと挨拶を交わしていた。

「久しぶりだな、マリス。息災で何より」

「お久しぶりです、ルーク様。そちら様もお変わりないようで」

「で、リア王女の悪癖は収まったのか？」

「お陰様で。ランス様からもきつく言われたようで、今ではそのようなことは一切しておりません」

「それは何より」

軽く挨拶を交わしているルークとマリス。その間に、ぬっとリアが割り込んでくる。

「ね、マリス。ダーリンを困らせないように妻と認めて貰える日まで待ち続けようとする私ってけなげよね？」

「はい、その控えめな態度がきつといつかランス様に通じることでしょう」

「えへへ、待つてるからね、ダーリン！」

「待たんでいい！」

「…相変わらず甘やかしてはいるみたいだな」

「あら、この程度甘やかしている内には入りませんよ」

まあ悪事をしていないのならいいか、と深く追求することは止めるルーク。騒ぎ続けるランスとリアを尻目に、部屋の隅に控えていたもう一人の女性に声を掛ける。

「…久しぶりだな。息災で何よりだ、かなみ」

「お久しぶりです、ルークさん」

そう言つて軽く礼をするかなみ。若干だが流れてくる雰囲氣が以前とは違う。

「なるほど、前より鍛えられている。忠臣になるべく励んでいるようだな」

「わかりますか!？」

「わかるさ。以前とは纏っている空氣が違う。よく頑張っているな」
「…ありがとうございます」

「そうそう、かなみったら最近以前にも増して張り切っちゃってるんだから」

「わずか二、三ヶ月の間にレベルを四つも上げてくれました。隱密の仕事をこなしながらということを考えれば、十分すぎる成果です。こちらとしても喜ばしい限りです」

リアとマリスにも褒められ、恥ずかしそうにしながらも若干誇らしげなかなみ。それに対してランスが茶々を入れる。

「がはは、へっぽこ忍者も少しは使えるようになったのか？」

「……ふん、今ではランスさんより強いかもしれませんよ」

「がはは、言つたな!今何レベルだ？」

「18レベルです!ランスさんは？」

「今から計つてやろう。レベル神ウィリス、俺様の呼び出しに応じて直ちにこの場に姿を現せ!」

主の前だというのに挑発に乗ってしまうかなみ。精神の修行はまだまだだな、と失笑するルーク。リアも愛しのランスのレベルには興味があるらしく、特に争いを止めるでもなく状況を見守っている。ランスの呼びかけに応じてレベル神が姿を現す。誘拐事件の時はレベル神が付いていなかったはずなのだが、いつのまに契約を結んだのだろうか。

「私は偉大なるレベル神ウィリス、呼び出したのは貴方ですね。レベルアップをお望みか？」

「そうだ。この身の程知らずに力の差を思い知らせてやらんとな」

「…ん？君はリーザスの城下町でレベル屋をしていた子か？レベル神になっているということは昇進試験には受かったのか」

「あ、ルークさんじゃないですか。お久しぶりです。先日無事に合格しました」

「がはは、俺様が手伝ってやったのだ！」

「なるほど、それで専属契約を結んでいる訳か」

誘拐事件から今までの間ずっとサボっていたのかと思っていたが、しっかりと仕事もこなしていたランス。この短期間の間に彼女の昇進試験を手伝い、専属契約を結んでいたのだ。

「というか、ルークさんはレベル神と契約を結んでいないんですか？貴方ほどの人なら結んでいない方が逆に珍しいんですけど？」

ルークのレベルを知るウィリスが問いかけてくる。

「以前カグヤさんというレベル神と契約していたんだが…寿引退してしまっただね。その際の引き継ぎがどうやらトラブっているらしく、今はいないんだ」

「あ、それなら私と契約しませんか？今丁度手が空いていますし」

「お、それは助かるな。ぜひお願いするよ」

「ええい、世間話しとらんでさっさとレベルアップの儀式をしろ！」

「あ、すみません。ルークさんも一緒にしておきますね」

「ああ、頼む」

「うーら めーた ぱーら ほら ほら。らん らん ほろ ほろ
ぴーはらら」

力の抜けるレベルアップの儀式である。以前契約を結んでいたレベル神とは呪文が違うんだなあ、とどうでもいいことを考えるルーク。そんなことを考えている内に儀式が終わったようだ。

「ランス様は経験豊富とみなされて20レベルになりました」

「がはは、どうだ聞いたか、へっぽこ忍者！」

「くっ……」

「きゃー、さすがダーリン、かつこいいー!!」

「流石はランス様。優秀な冒険者ですね」

悔しそくに歯がみするかなみ。しかし、この後のウィリスの言葉に更に追い打ちを掛けられる。

「シイル殿は経験豊富とみなされて19レベルになりました」

「わーい、やったー」

「がーん!!」

「がはははは、俺様の奴隷にも負けるとは情けない。真の忠臣にはほど遠いな」

「ランス、あんまり追い打ち掛けるな。かなみ、隠密の仕事が主である君と違って、こっちは冒険者でレベルが上がりやすいんだ。あまり気にしないでいいんだぞ」

「…はい。すいません気を使わせてしまつて」

涙目のかなみにフォローを入れるルーク。ランスが勝った勝ったと騒ぎ立て、リアも一緒に一緒になつてはしゃいでいる。が、この空気がウィリスの発言で凍り付くこととなる。

「ルーク様は経験豊富とみなされて46レベルになりました」

「……えっ!?!」「……」

「なんだとっ！！」

一気に全員がルークに視線を向ける。その視線にルークとウィリスは一瞬びくつとなる。

「貴様、なんだそのレベルは！！」

「お強いとは思っていましたが、そんなにレベルが高かったんですか！？」

「あれ、ルークさん？みなさんに言っただけですか？」

「あー、話したことはなかったな。まあ冒険者としては少し高い程度さ」

「た、た、高いってモンじゃないですよ、ルークさん！一国の将軍クラス、いや、それ以上ですよ！」

「……マリス！」

「はい、リア様。……ルーク様、こちらにサインをお願いできますか？」

一枚の紙を取り出し、ルークに署名を求めるマリス。勢いでサインしそうになるルークだが、よくよく見るとリーザス国への兵士入隊の書類であった。

「って、おい！何勝手に入隊させようとしてるんだ！」

「……ちっ」

「……ルーク様。リーザス国にはないほどの好待遇で迎え入れる準備がありますか？」

「ん。すまないが、まだどこかに収まる気はないんだ」

「指揮官適正の結果次第ですが、今なら特別に副将の地位もお約束するのですが……」

「わ、私もルークさんにリーザスに来ていただきたいのですが……」

「スマン、かなみ。かなりの好条件だがお断りさせていただく」

「…残念です」

「おい、ルークばかり目立ちやがって。俺様に誘いが無いとはどういうことだ！」

「あら、ダーリンは私の夫としてリーザスの王になって貰うんですもの」

「…しまった」

「ランス様、やぶへびです…」

こうして、リアたちがカスタムの町を訪れた理由もまだ聞いていないというのに、長い時間大騒ぎをするルークたちであった。

「…二階、騒がしすぎて営業妨害だよ…くすん」

下の階では、高貴な相手にも注意に行くことも出来ず、エレナが一人泣いていた。

第25話 王女襲来（後書き）

「人物」

ウイリス（2）

ルーク、ランスと契約を結んでいるレベル神。先日まではレベル屋で働く普通の人間であったが、ランスの助力もありレベル神へと見事昇進を果たす。彼氏には人間を辞めたことはまだ内緒にしている。儀式呪文は「うーら めーた ぱーら ほら ほら。らんらん ほろ ほろ ぴーはらら」。

アガサ・カグヤ（オリモブ）

かつてルークと契約を結んでいたレベル神。黒髪が美しく、ファンも多かったが、一年前レベル神を寿引退。儀式呪文は「さーくーら さーくーら こよいも よるも わが よいの かえる ぴよこ ぴよこ」。名前はアリスソフト作品の「闘神都市2」より。

長柄亮子

カスタムの役所で働く女の子。役所の女の子の中では最もランと仲が良い。

第26話 面影

・カスタムの町 酒場二階・

「で、わざわざランスの顔を見にカスタムまでやってきたのか？…マリス、いい加減書類を仕舞ってくれ」

そう言われ、渋々と書類を引つ込めるマリス。どうやらまだ諦めきれないらしく、ジッとこちらを見ている。まあ三大国の中ではリーザスが一番肌に合っているかなとは思うルークであったが、今はまだその時ではない。

「もつちろん！ダーリンに会いにここまで来たの！」

「…職務はいいのか？」

「万事抜かりありません。三日先の分まで終わらせてありますし、有事の際は優秀な者に後を任せてあります」

「わざわざ会いに来るのにそこまでいい。まったく…」

「あん、ダーリン。リアね、お土産も持ってきたの」

「お土産？なんだ、金目のものか？」

「かなみ、持ってきて」

リアがそう言うのと、かなみがカーテンの後ろにわざわざ隠してあった剣と鎧を持ってくる。どちらも美しい光沢を放っているが、観賞用というわけではなく装備品として一級品であることが見て取れる。

「これは我がリーザス王国に古くから伝わる秘伝の聖剣と聖鎧です。どうぞお納めください」

「それをリアだと思って大事に使ってね、ダーリン！」

「武器をそう思うのは無茶があるな……」

「うむ、貰えるものは全てありがたく頂いておくぞ。がはは」

そう言つて聖剣と聖鎧を装備するランス。今まで装備していたイナズマの剣と界陣の鎧をシイルに手渡し、なにやら耳打ちしている。あいつ、絶対売りさばくつもりだ。俺の金で買ったもんだし、回収してやるうか、とルークは考える。

「というかそんな大事なもんはいよいよ渡しちゃって良かったのか？」

「もちろん！将来の旦那様ですもの！」

「ええい、やかましい。まだ依頼が済んでいないから俺様たちはもう行くぞ！」

「ダーリン、リアはあなたが振り向いてくれるまでいつまでも待っています」

そう言つて貰うものだけ貰い部屋から出て行くランス。その後をシイルが追いかける。随分と静かにしていたが、王女相手に物怖じしていたのだろうか。ルークもそれに続くこうとするが、ふとあることを思い立ってリアとマリスに話しかける。

「少し頼みがある。ムシのいい話ではあるんだが……」

「……あら？確かにムシのいい話ね。そんな要求じゃあ……」

交渉に入つた瞬間、王女と侍女の目つきが変わつた。ランスの前ではあんな状態だが、やはり政治家としての手腕は高い二人である。数分の後、ある程度の落としどころで交渉がまとまる。

「すまないな、無理を言つて」

「まあ、以前の借りもあるしね。こちらの条件も呑んで貰ったことだし」

「ルーク様、リーザはいつでも副将のポストを準備してお待ちしておりますので」

「ま、当分ないと思ってくれ。それじゃあ俺もそろそろ行くとするか」

「お気を付けて。ルーク様には何もお持ちできず申し訳ありません」

マリスが深々と頭を下げる。リアは気にしていない様子だが、かなみも申し訳なさそうにしている。

「んー、そうだな。かなみ。手裏剣とかくないとかの予備があつたら一つ貰えるか？」

「え？あ、くないならここに予備が。手裏剣はしびれ薬を塗つてあるのしかなく、取り扱いが…」

「ごそごそと懐からくないを取り出すかなみ。それをパツと受け取るルーク。」

「リーザからの支援、確かに受け取った。忠臣を目指す者が使う武器、そんじょそこらの支援よりも遙かに心強い。大事に使わせていただく」

そう言つて部屋から出て行くルークを見送る三人。リアがまた政治家の顔つきになり、ぼつりと漏らす。

「やっぱり、一冒険者にしておくには惜しい人材ね。戦闘力、交渉力、視野の広さ、多分指揮官としても優秀でしようね。意志が硬そうだから難しいかもしれないけど、定期的にアプローチは続けておいて」

「かしこまりました。かなみ、受け取って貰えて良かったですね」
「はい。…って、別にそんなことは…」

「そうだ、かなみ。ルークにリーザスに来るよう色仕掛けで迫ってみてくれないかしら？」

「そ、そ、それは私には荷が重すぎます、リア様！」

「ふふ、冗談よ」

・溶岩迷宮 入口・

「なんだこれは、灼熱地獄じゃないか！あ、こらシル、すり寄って来るな！余計暑くなるだろうが！」

「きやつ、ランス様押さないでください…」

「下は溶岩で落ちたら一溜まりもないな…道も細いし気をつけながら先に進む必要があるな」

リアたちと別れた後、ルークたちは最後の魔女、志津香の拠点である迷宮第五層、溶岩迷宮までやってきていた。岩で出来た道は非常に狭く、下は溶岩が広がっているため落ちたら間違はなく即死。外気温も40度ほどあり、吹き出る汗を拭いながら、慎重に先に進む。金とりや人食いTOWNSといった普段であれば相手にならないう。ランの言っていたように全ての準備が整っているのであれば、急ぐ必要がある。程なくして目の前に屋敷が現れる。その館を見た瞬間、ルークの目が見開かれる。

「おお、ここが志津香の屋敷か！ぐふふ、待っているよ！」

そう言って涎を垂らすランス。シルが屋敷の扉を開けようとす

るが、鍵が掛かっていて開かない。

「ランス様、駄目です。鍵が掛かっていて開きません」

「なんだと、そんな鍵破壊してやる。ふん！」

ガキン、と金属がぶつかり合う音が響く。が、鍵は傷一つ付いていない。今度は扉を破壊しようとするランスだが、それも弾かれる。

「うがー、なんだこれは！シイル、その辺の窓から入れないか調べてみる」

「ああ…そんなことをしても無駄だよ」

と、後ろから声を掛けられる。振り返ってみれば、枯れ木のようにやせ細った男戦士がこちらに話しかけてきていた。

「む、なんだ貴様は」

「これは失礼。私は風の戦士シイルフィード、志津香様の部下だ。その屋敷は扉にも窓にも結界が張ってあって鍵がないと中には入れないよ」

「部下ということは貴様鍵を持っているな！さあ、すぐに寄越せ」

「それが…ラルガというサッキュバスに奪われてしまったんだ。私も取り返そうとしたんだが…精気を吸われてしまいこのざまさ」

「ふむ、ならばそのラルガから鍵を手に入れる必要があるな。そいつはどこにいる？」

「この先にラルガの屋敷がある。ラルガの元へ行くならあんたも気をつけた方がいい」

「がはは、無敵の俺様にそんな心配は無用だ。行くぞ、シイル、ルーク。…なんだルーク、ボーツと突っ立って？」

ひとまずラルガの屋敷に向かおうとしたランスだが、ルークがつ

いてこない。見ればブーツと志津香の屋敷を見ている。

「知っている…俺は…この屋敷を知っているぞ…」

「あ、おい!？」

ルークは屋敷に近づいていき、まず扉を調べる。結界を無効化して鍵を破壊することは出来そうだが、鍵になにやら結界とは別の文様が描かれている。無理に破壊すれば何かしらの罠が発動する可能性がある。次に窓を調べる。少し押すと結界が発動するが、それを無効化し窓を開く。扉とは違い、こちらには鍵を掛けていないようだ。

「あ、なんだ開くではないか。では俺様も…って、あちちちっ!」

「きやつ、ランス様大丈夫ですか? いたいなのいたいの、とんでけーっ!」

「窓が開いた…志津香様の結界だぞ…あんた一体…?」

窓に触れた瞬間、ランスの手に電流が走り少し火傷をする。シルがそれを治療し、シルフィードは信じられないものを見たといったように驚いている。

「……ランス、ランの言うとおりなら事態は一刻を争う。俺は先に屋敷に潜入する!」

「あ、おい待て! コンプリートが掛かっているんだ! 勝手に志津香の処女を奪ったら承知せんぞ!」

ランスの抗議をよそに、ルークは屋敷へと一人潜入していく。ランスに言った理由ももちろんあるが、それ以上にルークを突き動かしたのはこの屋敷の形だった。遠い記憶であり、絶対とは言い切れない。が、確かにそれはルークの記憶に残っていた屋敷とよく似て

いた。

- 志津香の屋敷 一階 -

屋敷に入ったルークが感じたのは外で感じたのと同様の既視感。ここまで広くはなかった。が、内装が非常に似通っている。間違いない、あの人の屋敷だ。それは、今回カスタムの町を目指しているときにも思い出していた記憶、18年前、幼いルークたちがほんの数日だがお世話になった夫妻。その屋敷がなぜここに？志津香が迷宮に屋敷を作る際に参考にでもしたのだろうか？考えながら屋敷を探索していると小部屋を発見する。その扉の前に風の戦士が一人。

「むっ、貴様！何者……っ……」

「……邪魔だ」

こちらに気がつき、声を掛けたときには既に風の戦士はルークに斬られていた。倒れこむ風の戦士の横を通り、部屋に入るルーク。そこで一冊の本を発見する。パラパラと中身を読むルーク。その中で他のページよりも明らかに読み込まれたページを発見する。そこには気になる項目が書いてあった。

「時空転移魔法……過去に飛び歴史を改変するだ……？聖女モンスターにそういった力を持つ存在がいるという話をかつて聞いたことがあるが……そんなことが人間に可能なのか？……なるほど、普通では不可能だが術者の莫大な魔力に加え、女性の生気を使うことで擬似的に可能とする。女性を攫っていた理由はコレか！」

ボタン、と本を閉じるルーク。ようやく目的が見えていなかった

志津香の計画の内容に行き着いた。彼女がそこまでして変えたい過去は判らないが、それを止めるためにルークは走り出した。

「過去など変えても、それが救済になどなりはしない。それ以上に過去を変えたことによって、現世にどんな影響が起こるかも判らないんだぞ……」

階段を駆け上がった先に水の結界があつた。本来であればこれも解除する必要があるのだろうが、ルークは結界を無効化し、その先にあつた鉄の扉を開ける。そこには機械が置いてあつた。シルが攫われた際に使われたテレポートウェイブを使った転移装置だ。罠かもしれないと一瞬躊躇するが、その機械を作動させる。すると、周りの風景が夜空のような空間に転移される。辺りの様子を窺っていると、突如目の前の地面が盛り上がり、床をぶち破ってストーン・ガーディアンが現れる。

「ここは志津香様の星域、何人たりとも通すわけには行かぬ」

「……手強い相手だが、今は貴様と遊んでいる暇はない。どけ!!」

そう言うと、ルークは妃円の剣を抜き、一直線にストーン・ガーディアンに突っ込んでいった。

- 溶岩迷宮 ラルガの屋敷 -

「赤い媚薬を使うなんてずるい……ううん、もうダメ……」

「がはは、サッキュバスなぞ俺様の超絶テクの敵ではなかったな! さあ、鍵は手に入れた。行くぞ、シル!」

「はい、ランス様!」

「あれだけ卑怯な手で勝っておいてあんなに勝ち誇るなんて…人間
って恐ろしいにや…」

正攻法のH勝負で一度負けたランスは、卑怯にも媚薬を使ってラ
ルガに勝利し、鍵を手に入れていた。その様子に主人の心配をしな
がらも呆れるラルガのねこ。

「抜け駆けは許さん！俺様が行くまで処女のまま待っているよ、志
津香！」

- 荒野 -

どことも知れぬ荒野の真ん中に、その女は立っていた。最後の四
魔女、魔想志津香。時空転移魔法を使って過去に渡ることに成功し
た彼女は、もうすぐこの場所で起こる出来事に備え、精神を落ち着
けていた。

「大丈夫…やれる…私がお父様を…必ず救い出す…」

そのとき、後ろから気配がする。おかしい、まだ目的の時間には
早い。振り返った志津香が見たのは、黒髪の剣士。自分よりも随分
と年上の顔の整った青年剣士がそこに立っていた。

「…誰？ここにいと危ないわよ。悪いことは言わないからどこか
遠くに行きなさい」

一応忠告をする志津香。その戦士を心配したというより、下手に
邪魔されては困るという想いからの忠告であったが、直後に戦士が

ら発せられた言葉に目を見開く。

「……アスマーゼ……さん？」

「！？ 母を知っているの！？」

目の前に立っていた戦士はルーク。志津香の後を追って環状列石の装置を作動し、過去へとやってきたルークが目にしたのは、かつてお世話になった魔法使いの奥方に瓜二つの少女の姿だった。

第26話 面影（後書き）

「人物」

リア・パラパラ・リーザス （2）

LV 3 / 20

技能 なし

リーザス国王女。今では改心し、誘拐騒動はもう起こしていない。ランスに会うためだけに無理矢理時間を作った。健気と言えば健気。

マリス・アマリス （2）

LV 26 / 67

技能 神魔法LV2 剣戦闘LV1

リーザス国筆頭侍女。リアのわがまを聞いて秘伝の聖剣と聖鎧を一冒険者にプレゼントしてしまう。相変わらずの甘やかしである。

見当かなみ （2）

LV 18 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。ルークの忠告を受け、忠臣目指し目下修行中。その頑張りは城の兵士たちも目の当たりにしており、將軍たちの間でも評価が上方修正されている。上達していることをルークに一目で分かって貰えたことを内心喜んでいるが、ばれないように冷静に勤める。しかし、主と侍女には見抜かれている。

シルフィード

志津香に仕える風の戦士の一人。ラルガに精気を吸われ、干涸らびている。

「モンスター」

ラルガ

四つ星レア女の子モンスター。サッキュバスであり、男の精気を吸い取って生きている。媚薬に使われてランスにH勝負で敗れる。

ラルガのねこ

全滅危惧種女の子モンスター。ラルガの忠実な部下。

金とり

金色に輝く鳥モンスター。こかとりすと違い、あまり美味しくない。

人食いTOWNS

頭がコンピュータのモンスター。雷撃で一撃死するため、初級魔法使いの経験値稼ぎとしてよく狩られる。

風の戦士

志津香の部下。モンスターに属しているが、実は普通の人間の戦士である。

ストーン・ガーディアン

魔法使いによって作られる岩石巨人のガーディアン。地面を岩で囲ってしまい、一度出会ってしまったら逃走することは出来ない。知らなかったのか、ストーン・ガーディアンからは逃げられない。

「装備品」

リーザス聖剣

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる剣。その斬れ味もさることながら、実はリーザス国にある封印の鍵としての役割も

担っている。

リーザス聖鎧

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる鎧。防御力も非常に高いが、実はリーザス国にある封印の間の鍵としての役割も担っている。

くない

かなみが常に懷に忍ばせている忍具。ルークが一本譲り受ける。大陸では武器屋には中々売っていないため、通販で購入している。10本500GOLDのところ、今なら手裏剣5枚もついても値段据え置きのお買い得価格。

「アイテム」

赤い媚薬

ラルガのねこがこっそり隠し持っている媚薬。どんな相手でも敏感になる代物。本編ランス02ではなぜか赤い香水に変更されていた。ランスクエストでは媚薬で勝ったと明言されていたので、本作では旧2仕様の媚薬に。

「その他」

環状列石装置

ストーンサークル。魔方陣よりも効果が高く、これを用いて志津香は時空転移を行った。

聖女モンスター

神に作られた生命の母であり、全ての男の子、女の子モンスターのプロトタイプを生みだした四体の特殊な存在。四体はそれぞれ命、

力、時、地に分類される。神に位置する存在であり、あまり広くは知られていない。ルークはある女性から彼女たちの存在を聞いていた。

レア女の子モンスター

一体しか存在しない特殊な女の子モンスター。死んでしまった場合は、別の場所に転生される。

第27話 恩人の娘 志津香

GI0998 冬

- カスタムの町 -

「飲むといい、暖まるよ」

「おかわりもあるから欲しかったら言ってね」

町の前で拾った傷だらけの少年を自分たちの住む屋敷に連れてきた夫妻は、彼の前にホットうし乳を入れたコップを差し出す。彼が連れていた同じ年くらいの少女は、既に寝室で寝ている。聞けば彼の双子の妹らしい。今この場には夫妻と少年の三人、机を挟む形で向かい合っている。

「私は魔想篤胤。この町に最近移り住んできた者だ。こっちは家内のアスマーゼ。君の名前、聞かせて貰っても良いかな？」

「……ルーク・グラント」

「差し支えなければ何があったのか聞かせて貰っても良いかな？ その傷の量は尋常ではない」

その後、ルークはここに至るまでの出来事を語り始める。平穏な暮らし、それが一変したこと、その原因を担ったのが自分であること、住んでいた町を追われたこと。ルークの過去に関しては、後にまた語ることになるので今回は置いておく。目の前の少年が体験するには、あまりにも荷が重すぎる過去に、アスマーゼの顔が曇る。篤胤も黙ってそれを聞き終えた後、静かに口を開く。

「…もし君さえよければ、しばらく一緒に暮らしてもいいんだが」

「夫婦二人で暮らすには少し大きい屋敷なの。遠慮しないでいいのよ」

「いえ…ありがたい話ですが、明日にも出て行こうと思っています」
「何か協力できることはないかな？」

「…じゃあ、もし知っていたら評判の良いギルドを教えてください」
「その年で冒険者を目指す気か？」

「はい、自分たちの手だけで生きていかなければならないので」

危険性を説いて止めるよう勧める篤胤だが、ルークという少年の決意は固く、最終的には篤胤の方が折れる形になり、アイスの町のキースギルドへの紹介状を書くことになる。

「紹介状を書く代わりといっではなんだが…明日に出て行くのは止めて何日か滞在していきなさい。その傷を治していかないとな。それに、妹さんも少し休ませてあげないと」

「……本当に色々と、ありがとうございます」

こうしてルーク兄妹は数日の間、魔想の家に厄介になることになる。篤胤もアスマーゼも、二人に暖かく接してくれた。特にアスマーゼは、実の子供のように二人を可愛がっていた。

「妊娠されているんですか？」

「ええ、まだ二ヶ月だけど、主人の魔法で女の子ということだけは判っているの」

こうして、数日はあっという間に過ぎた。アイスの町に旅立つ日、夫妻は町の前まで二人を見送りに来ていた。

「この地図通りの街道を通ればほとんどモンスターも出ないはずだ。初めのうちは危険の少ない依頼をこなしていきなさい。そういった

仕事をギルド長のキースが優先して回してくれるはずだ」

「いつでも町に寄ってくれていいからね」

「ありがとうございます。冒険者として一人前になったと思った暁には、立ち寄らせていただきます」

こうして、二人はアイスの町へ向けて旅立った。その背中を見送りながら、アスマーゼが悲しそうに呟く。

「あんな幼い子が…冒険者にならなければいけないなんて…」

「だが、止められなかった。譲れないものがあつたのだろう、目がその信念を語っていた。子供とは思えんほどの決意だ」

「ルーク君、話し方も大人びていましたものね。将来的には娘の結婚相手になんてどうかしら」

「……それとこれとは話が別だ」

「ふふ、はいはい」

時間にしてみれば夫妻と過ごしたのは本当に短い間であった。が、その間にルークが受けた恩義は、今もその胸に残っていた。いつか一人前になったら、そう思いながら今日までカスタムの町を訪れていなかったルーク。その判断は間違いだっただのかも知れない。

LP0001

- 荒野 -

「母…アスマーゼさんの娘さんか。そうか、あの時の！」

「ちよつと、質問に答えなさい。母を知っているの!？」

目の前にいるのがアスマーゼではなく、その娘だと判ったルーク。

今にも食って掛かりそうな少女に対し、落ち着かせるように質問に答える。

「ああ、よく知っているよ。アスマーゼさんも、旦那の篤胤さんもな」

「そう、父と母を知っているのね…名前を聞いてもいいかしら？」

「ルークという。冒険者だ。篤胤さん夫妻には二十年近く前に大変お世話になった者だ」

「……二十年前？」

ルークの言葉を聞いて眉をひそめた少女は、スッと目の前に手をかざす。その行動にどこか不穏な空気を感じたルーク。すると彼女の手のひらに魔力が集まり始める。

「……火爆破」

「っ！？」

瞬間、横へと飛ぶルーク。その直後ルークが先ほどまで立っていた場所で足下から炎の柱が立ち上がる。すぐに少女に向き直るルーク。

「元の時代に戻った際に両親のことを聞こうと思って名前を聞いてみたら、まさか二十年前にお世話になったとか言い出すとはね…あなた、この時代の人間じゃないわね！冒険者って事は私を追ってきたのかしら？」

「そうか…四魔女の話をも町長から聞いているときに上の空で名前をちゃんと聞いていなかったのが徒になったな。君が、四魔女最後の一人…」

「ええ、魔想志津香よ」

言葉と同時に、炎の矢が弾丸めいた速度で連射される。それを躲しながらルークは叫ぶ。

「待て、篤胤さんの娘さんと争いたくはない！話を聞かせてくれ、過去にさかのぼって、君は一体何をしようとしているんだ！」

その言葉に、ピタッ、と炎の矢の連射を止める志津香。

「目的？そんなこと、決まっているでしょう！父にお世話になったとか言っていたのに、娘の私の目的に見当もつかないの！？」

「……見当がつかない。頼む、教えてくれ」

「ふん、まあいいわ。私がここにやってきたのは、卑怯な手段で殺された父を助け出すためよ！」

志津香の言葉を聞いた瞬間、ルークの目が見開かれる。

「殺された…だと。篤胤さんが！？」

- 志津香の屋敷 一階 -

「いたぞ、侵入者だ！仲間をやったのはお前だな！！」

「うおっ、なんだなんだ！！」

ようやく志津香の屋敷に辿り着いたランスだったが、先に潜入していたルークが風の戦士を倒してしまっていた影響で、警備が頑丈になってしまっていた。思わぬ足止めを食ってしまうランス。

「ルークさんはこんな厳重な警備を一人で大丈夫なのでしょううか…」

「ふむ、ルークなどどうでもいいが志津香の処女は心配だ。急ぐぞ！」

この厳重な警備がルークのせいであるとは思っていないランスとシルだった。

- 荒野 -

「……知らなかったの？ ラガルという魔法使いに卑怯な手段で父は殺され、母は連れ去られた……私が生まれて間もない頃にね」

「いや、知らなかった。……キースめ、黙っていたな」

そう言っただけで恩人たちのその後に顔を曇らせるルーク。キースは事の顛末を知っていたが、そのときまだ幼かったルークに話すにはあまりにも思いと考え、いつか話そうと先送りになっていたのだ。が、その後ルークは15才のときから約10年近く行方知れずになるため、キースが伝え忘れていたのだ。

「そう、ならさっさとここから消えてくれる。あなたも父と母にお世話になったのなら、まさか私を止めはしないわよね？」

「……過去の改変など、どんな影響が出るかも判らないんだぞ。それを判っていない君ではあるまい？」

「ええ、今いる世界が変わるのか、平行世界として別の世界が出来るのか、検討がつかないわ。本にも載っていないかったしね」

「……歴史だけではなく、君のこれまでの思い出にも、大きな影響を及ぼすかもしれないんだぞ」

一瞬、躊躇うような顔を覗かせる志津香。頭に浮かんだのは、青

い髪のメガネをかけた親友の顔。が、それを振り払うかのように口を開く。

「構わないわ。父を救い出せる可能性が少しでもあるならば、実行するまでよ！」

「……気持ちは判る。が、町の少女たちを誘拐して生氣を集め、世界にどんな影響を及ぼすかも判らないその行為を認めるわけにはいかない」

「そう、父と母の話を知りたいと思っていたのだけれど……邪魔をするなら死んで貰うわ！」

そう言っただけに魔法を放とうとしてくる志津香。身構えるルークだが、志津香の後ろ、若干遠くはあるが記憶にある男女の姿が目に映る。

「篤胤さん、アスマーゼさん……？」

「っ！？隠れて……！」

そう言っただけで攻撃を止め、ルークを引っ張り物陰に隠れる志津香。ルークもここで夫妻に出会ってしまったては歴史に多少なりとも影響を及ぼしてしまうかも知れないと思い、素直に応じる。無理に戦えば二人にばれてしまう可能性があるため、自然と一時休戦の形となった。物陰から顔を出し、夫妻を見る。志津香が生まれた直後ということは、ルークが会ったときとそう時は経っていない。記憶にあるままの姿で魔想夫妻が荒野に立っていた。

「お父様……お母様……」

横を見ると志津香の瞳が少し潤んでいた。幼い頃に失ったため、写真や人から聞いた話でしか知ることのなかった両親。涙が抑えら

れないのも無理もない。そう思いながら志津香の顔を見ていたルークだが、志津香が見られているのに気がつき、力一杯ルークの右足を踏みつける。

「…っ！…！」

「見てんじゃないわよ！」

すると、夫妻の話し声が聞こえる。志津香の表情が引き締まる。ルークも足を押さえながら夫妻の方をばれないように見る。

「…さんに言われたとおりここに来たけど、いったい何の用なのかしらね？」

「うむ、町にいる間あまり話したこともない相手で、嫌われているのかと思っていたのだがな。こんなところに呼び出すとは、よつぼど周りに聞かれたくない相談なのか…っ！？」

「あなた…！！」

話をしていた夫妻だが、突如篤胤の体を雷撃が襲う。足下に魔力装置の罠があつたのだ。それも、違法なまでに改造を加えたものだ。そのダメージから立っていることが出来ず、崩れ落ちる篤胤。アスマーゼが悲鳴を上げると、ルークたちとは夫妻を挟んで反対側の物陰から男の声が響く。

「ふはははは！いい様だな、魔想よ！」

「…あなたは！？」

「ラガール…なぜここに！？」

漆黒のマントに身を包み、左手には爪を装備した魔法使いに対し、先ほど志津香が父の仇と言った男と同じ名前を篤胤が叫ぶ。この男が…ラガール。

「衰えたな魔想よ…かつての貴様であればこんなに簡単には罠に掛からなかったであろう。その後悔を抱いたまま、愛する者の前で無様に死ね!!」

「させないわ! ラガール、死ぬのは貴方よ!!」

「っ!? 待て!!」

篤胤の危機に、飛び出していく志津香。ルークが止めるが、その腕を振り払っていつてしまう。両親とラガールの前に立つ志津香が、様子がおかしい。篤胤も、アスマーゼも、ラガールも志津香を見ていないのだ。志津香もすぐに気がつき、最悪の想像が頭の中に浮かぶが、それを振り払うかのようにラガールに向かって魔法を放つ。

「ファイヤーレーザー!!」

両手から放たれた火柱が一直線にラガールを襲い、直撃する。が、ファイヤーレーザーはラガールの体をすり抜けてしまう。

「まさか…そんな…」

「…そういうことか。俺らは今過去に実体化しているのではない。過去の…映像を再生しているようなものだ」

三人の反応を見た時点で想定していた最悪の予想をルークに言われ、否定するように志津香が声を荒げる。

「時空転移魔法は成功したわ! そんなはずはない!!!」

「本が間違っていたのか、魔力が足りなかったのかは俺には判らない。が、そもそも過去改ざんなんて悪用される恐れもある無茶苦茶な魔法、実在するのであれば魔法大国のゼスが放置しておくはずが

そう言うルークの右拳に爪が食い込み、血が滴っているのを志津香は見る。恩人の死にルークも憤りを感じていた。

「俺も協力しよう。冒険者の俺の方が居場所の情報を掴める可能性は高いからな。奴を…必ず殺すぞ」

「…役に立たないと判断したら…切り捨てるからね」

こうして仇討ちという目的の下、ルークと志津香は手を結ぶことになった。これより、長く深い付き合いとなる二人の出会いであった。

第27話 恩人の娘 志津香（後書き）

「人物」

魔想志津香

LV 20 / 56

技能 魔法LV2

カスタム四魔女の一人。才能は篤胤、容姿はアスマーゼの血を色濃く継いでいる。ラギス殺害後、殺された父を救うためフィールの指輪と少女たちの生気を使って過去へと飛ぶが計画は失敗に終わる。その後は父の仇であるラガールを殺すことに目的を変更し、情報収集のためルークと手を結ぶ。ルークにとっては恩人の娘であり、守るべき存在。

魔想篤胤（半オリ）

LV 38 / 50（生前）

技能 魔法LV2

志津香の父であり、ルークの恩人。優秀な魔法使いであったが、ラガールに不意打ちされその命を落とす。名前はアリスソフト作品の「ぱすてるチャイムContinue」より。

魔想アスマーゼ

志津香の母であり、ルークの恩人。夫を目の前で殺され、ラガールに攫われる。その後はラガールに犯され、精神を病み衰弱死する。死ぬ直前、妊娠していたという噂もあるが、定かではない。

チエネザリ・ド・ラガール

LV 39 / 50

技能 魔法LV2

志津香の両親の仇である魔法使い。アスマーゼを攫った後の所在

は謎に包まれている。

「技」

火爆破

敵の足下から炎の柱を噴き上がらせる中級魔法。同時に複数の相手に使用することが出来るため、集団戦で重宝される。

ファイヤーレーザー

両手から追尾能力のある高熱光線を放つ上級魔法。ある程度の才能がなければ使用することが出来ない強力な魔法である。

「装備品」

ポイズンガントレット

ラグールが左手に装着していた爪。魔力で遠隔操作も可能な魔法の籠手。ラグールが改造して造り出した。

「料理／食材」

うし乳

うしから取れる白い液体。栄養満点で、子供に飲ませると良いとされている。独特の臭みがあり、好き嫌いの分かれる一品。

第28話 祝賀会

- 志津香の屋敷 二階 環状列石装置前 -

「もうここにいない必要もないだろう。町に帰るぞ。誘拐した娘たちは？」

「奥の部屋にいるわ。もう彼女たちに用もないし、一緒に連れて帰りましょう。一応対等な協力関係だから、ルークって呼び捨てにさせて貰うわよ」

「ああ、別に構わん。こちらも志津香と呼ばせて貰う」

泣き止んだ志津香にルークが町に戻るよう持ちかける。計画が頓挫した今、ここに残る理由もない志津香はそれに応じる。残った問題は指輪だけだ。

「で、その指輪なんだが…それは呪われたアイテムでな。それを身につけていると…」

「ああ、それなら知っているわ。ラギシスに貰って指に填めた瞬間、呪われてるってすぐに気がついたから」

「そうなのか!？」

「ええ。で、こんなもの寄越したラギシスを怪しんで探ってみたのよ。そしたら奴がボロを見せたって訳。とりあえず私たちを利用するつもりだったラギシスを殺して、指輪はありがたく魔力増強に利用させて貰ったわ」

「そこまで判っていないながら指輪を使ったのか？」

「少しずつ魔力を吸われるけど、それ以上に魔力が増えるしね。一時的に魔力ブーストするには十分役に立つわ。心が悪に染まるっていうのも、自分にガード魔法かければほとんど影響を及ぼさないしね」

「なんだって？じゃあ、指輪の悪影響は殆ど受けていないのか？」
「そういう事」

そう言つて赤い指輪をルークに見せる志津香。聞くとところによると、この指輪は外す際に装備者の魔力を大量に奪う仕組みになっているが、普段も微量ながらも少しずつ魔力を吸収しているらしい。だが、吸われる以上に増える魔力量が圧倒的に多いため、魔力増強装備としての効果は本物のようだ。

「志津香の言うとおりなら、外すには処女を失わなければいけない上に、大量の魔力を持つて行かれるんだろ？どうするつもりだ」
「ん？別に外せるわよ、これ」
「は？」

そう言つて右手に魔力をこめた志津香は、左手の中指に填めている指輪を右腕で包み込み、少しずつ外していく。特に何も起こらないまま、指輪は志津香の指から外れた。

「処女を失わなければ外せない、って呪いとしては低級なものよ。ちよつと魔力で覆つてやれば認識阻害することは簡単つて訳」
「…マリアたち、可哀想に」
「えっ！？マリアたち処女失っちゃったの？ミルも？あんたがやったの！？」

キツとこちらを睨み付けてくる志津香に、慌てて弁解するルーク。

「違う、違う。ここにはいないが仲間のランスつて奴が全部やった。まあ緊急事態だったわけだから責めないでやってくれ。それに、処女を奪えばつて言つのはマリアが教えてくれたんだぞ」

「…ちゃんと教えておくべきだったわね。悪いことしちゃったかし

ら」

時空転移装置を完成させることに躍起になっていた志津香は、他の三人への説明を怠っていた。まさか自分たちを倒すほどの相手が来るとは思っていなかったというのもある。流石に友人の処女を奪う原因となってしまったことに、その表情を曇らせる。指輪をマントの裏地にあるポケットにしまいながらルークに向き直った。

「さ、話はこの辺にして娘たちと一緒に町へ帰りましょう」

「ああ。が、その前に……」

そう言つて、ゴンツ、と志津香の頭にげんこつを落とすルーク。帽子の上からなので衝撃は若干和らいではいるが、突然の暴挙と頭に走る激痛に志津香が声を荒げる。

「っ……！！いきなり何するのよ！！！！」

「指輪の影響がなかったってことは、娘たちを攫ったのは素の状態をやったって事だろう？流石にそれは見過ごせないな。篤胤さんやアスマーゼさんだったら、絶対に注意していただろうから、その代わりにな」

「っ、余計なお世話よ！」

「指輪のせいだったってことにしていから、ちゃんと謝るんだぞ。町の人たちにもな」

ふん、とだけ言つて娘たちが捕らわれている部屋に向かう志津香。その後を追うルーク。部屋は環状列石装置の近くにあり、中に捕らわれていた娘たちを解放する。全員が裸であったのはその方が生気を奪いやすいからとのこと。志津香は奪っていた彼女たちの服を返し、全員を着替えさせた。ルークはその間、部屋の外で待つ。部屋の中に耳を傾けていたら、小さくだが志津香が彼女たちに謝罪をし

ている声が聞こえてきた。文句を言いながらも、しっかりと謝れる
辺り、根は悪い子じゃないんだな、と思うルーク。ほどなくして着
替え終わった娘たちを連れて志津香が部屋から出てくる。

「終わったわ。さ、帰りましょう。帰り木は持ってるの？」

「ああ。ん？あれは……」

町へ帰還するため、帰り木を取り出したルークだが、前から誰か
迫ってきていることに気がつく。目をこらしてよく見れば、それは
ランスとシルであった。何か叫びながら全力でこちらに向かつて
くるランス。

「ルークうう！！貴様、そんなに美少女を侍らして何をしてるかあ
あ！！この世の美女は全て俺様のものだああ！！」

「……なにあれ？」

「……あれがさっき話した、仲間のランスだ。まあ、根は悪い奴じ
ゃないんだがな」

厳重な警備に足止めされていたランスが、ようやくここまで到着
したのだ。ルークの前まで駆けてくるランス。後ろではシルが息
切れしている。

「で、どれが志津香だ？抜け駆けしていないだろうな？」

「志津香は私だけど」

「おお、性格はきつそうだが美女ではないか。グッドだ！……ん？」

そう言って手を上げる志津香。イヤらしい目つきで志津香をジロ
ジロと見回すランスだが、あることに気がつく。どちらの手にも指
輪をしていないのだ。

「な、な、な！ルーク、貴様俺様を出し抜いて志津香の処女を奪いやがったな！！はっ、まさか…周りの娘たちも一緒にハーレム行為に及んでいたのでは…ゆ、許さんぞ！！」

そう言つて剣を抜くランス。隣で志津香が汚らしいものを見るような目をしている。

「…これで、根は悪くないとか正気？こいつ頭大丈夫なの？」

「ま、これも味があるというかなんというか。ランス、剣を仕舞え。指輪は別に外す手段があつて、俺は手を出してないから安心しろ」

「ん？そうなのか？がはは、ならば俺様が志津香の処女をゲットして四魔女コンプリートだ。英雄の俺様に抱かれることを泣いて感謝するがいい。とうっ！」

「……粘着地面」

「んがつ！！」

志津香に飛びかかるうとしたランスだったが、両足が地面とくつき、盛大にこける。こけた拍子に今度は全身が地面とくつき剥がれなくなってしまう。

「んがが、なんだこれは。くつついて取れんぞ！」

「さ、馬鹿は放つておいて帰りましょう」

「…ま、娘さんたちを送り届けないといけないしな。剥がすのに時間も掛かりそうだし、悪いが先に帰っているよ。シルちゃん、頑張つてな」

ランスの体を地面から剥がそうと頑張るシルにそう言い残し、帰り木で町まで帰還してしまうルークたち。ワープする直前、志津香がルークにだけ聞こえるように呟いた。

「後でさ…両親のこと聞かせて貰える？」

「ああ、勿論」

「こら、勝手に帰るんじゃない。いたた、シルもつとゆつくり剥がせ、バカ！」

「ランス様、動かないでください。余計外せなくなってしまうです…」

取り残されたランスとシルの声だけが辺りに空しく響いたのだ。
った。

・カスタムの町 祝賀会会場・

その晩、事件解決を祝して町を挙げての祝賀会が催された。町長の屋敷にはたくさんの人たちが集まり、中に入りきれないため臨時の第二会場として酒場を利用するほどの大盛況であった。四人の魔女たちを倒し、町の封印を解き、四魔女たち自身や攫われた少女たちも無事帰ってきたのだ。町中の人たちがルークとランスに感謝しており、会場には「ランスさん、ルークさんありがとう記念！カスタムの町復興祝勝会」と書かれた垂れ幕がかけられていた。その下にはリーザス国提供と書かれた花輪が飾ってある。どうやらこの祝賀会にはリーザスも金を出しているらしい。が、その王女様一行の姿は見えない。気になってルークは町長のガイゼルに聞いてみると、なにやら緊急の案件が国で起きたらしく、駄々をこねる王女をなんとか侍女が説得し、既に帰国してしまったらしい。一緒にいた女忍者も王女を説得しながらも、どこか寂しそうだったとのこと。

「がはははは！酒だ、酒だ！ドンドン、持ってこいよー！お、その君、こっちに来て恩人の俺様に感謝するのだ！」

「ランス様、へんどろば取ってきました。お酒もお注ぎしますね」

ランスが上機嫌に騒ぐ。町に戻ってきたランスはルークに文句を言ってきたが、この見事な祝勝会で機嫌を取り戻したようだ。シルは甲斐甲斐しくランスのコップにお酒を注いでいる。実はこの酒、少し薄めてある。あまり酒に強くないランスを思って、悪酔いしないよう、普段からこっそりとランスの酒を薄めて渡しているのだ。どちらかというとかつこつけの為に飲んでおり、酒の味はあまり分らないランスは、普段からそれに気がつかず飲んでいるのだった。献身的な娘である。

「あ、ルークさんもうぞ」

「ありがとう、シルちゃん。……俺のは薄めなくて大丈夫だからな」

「……知っていらしたんですか。どうかランス様には……」

「大丈夫。そんな野暮なことはしないさ」

ルークもランスの隣で飲んでいた。真犯人であるラギシスの姿が消えたのは気になっていたが、せっかく町の人たちが自分たちの為に開いてくれた祝賀会だ。悪酔いしすぎない程度に軽く酒を飲みながら、会場を見回す。町の人たちはみな一樣に笑顔であった。こういう光景を見られるのも、冒険者稼業の利点だなとルークは思う。そんなルークとランスに今回の事件で特に関わりの深かった人たちが寄ってくる。四魔女やミリ、ガイゼル、トマト、真知子といった人々だ。エレナは第二会場の酒場で仕事をしているのでこちらには不在。

「妹のこと、ありがとうな。感謝してるぜ、ランス、ルーク」

「ランス、今回は本当にありがとうね」

「ミリとミルか。うむうむ、俺様に感謝しておけ。ミルは10年……」

いや、5、6年後にまたやらせる」

「今してもらっても……いいのよ？うふふ」

セクシーな流し目をランスに送るミル。どうやらすっかりランスに懐いてしまったらしい。

「いらね」

「がーん！！」

「ばつさりだな。ま、いるって言うのも問題だが」

「ルーク、ちよつと聞きたいことがあるんだ。後でいいから俺とあつちで飲まないか？なに、ほんの少しいいんだ」

「ん？構わないぞ。ちよつと待っていてくれ、他の人にも挨拶を済ませないとな」

ミリがルークを差し飲みに誘う。思わぬ所からの誘いに驚きながらも、他にも寄ってきた人がいたため、そちらの対応を済ませてからならとそれに応じる。ランスは話しかけてきたガイゼルにチサの処女を寄越せと言って、横で揉めている。ルークの方にはトマトと真知子が寄ってきた。

「ルークさん、お疲れ様ですかねー？ルークさんに剣の見込みあるかもって言われたんで、私も今冒険者目指して頑張っているんですかねー？」

「トマトさんか、相変わらずの話仕方だな。本当に修行を始めたんだな」

「はい、昨日は剣の素振りを五回もしたんですよ？」

「……先は長そうだな。まあ、頑張れ」

「聞いていましたわよ、ルークさん。ミリさんの後は私とお酒を付き合って貰えるかしら」

「真知子さん。どれ位かかるか判らないからその後でも良いなら……」

「ええ、待っていますわ。必ず声をかけてくださいね」

トマトと真知子の二人とそういったたわいもない話をしていると、今度はランが話しかけてくる。ランスも丁度ガイゼルとの話が終わったようで、二人でランの話を聞く。

「ルークさん、ランスさん。本当にありがとうございました。私がしたことは許されることではないですが、お二人のお陰でこうして町の人たちにも受け入れられ…」

「あーあー、酒が不味くなる。辛気くさいのはナシだ」

「俺もランスに賛成だな。ラン、君は普段からもっと明るくしていた方がいいぞ。その方が今よりもっと魅力的だ」

「えっ… あっ… ありがとうございます。頑張ります」

「こら、俺様の女を口説くな」

「ん？別に口説いたつもりはないが」

「というか勝手にランを自分の女にしないの、ランス」

そう言ってやってきたのはマリア。その足下にはゲデゲデに酔っ払った志津香がいた。先ほどのきりりとした姿とのギャップに驚くルーク。

「本当にありがとうね、ランス、ルークさん。二人がいなかったら大変なことになってたと思う。あっ、もちろんシルちゃんもね」

「うむ、当然だな。たっぷり感謝しておけ」

「ところで… 志津香はどうしたんだ？」

「あはははは、あははははは！」

ゲラゲラと大笑いする志津香。どうやら笑い上戸らしい。

「あはは… やけ酒を一気に飲んだらこうなっちゃった… あんまり見

ないであげてください」

「それは難しいな、良い笑顔だ」

「あはははは、殺してやる、ラガール。あはははは！」

物騒な事を言いながらも真つ赤な顔で上機嫌に笑い続ける志津香。その懷から、フィールの指輪が床に落ちる。それを拾うランス。これで四つの指輪コンプリートだ、と騒いでいる。一応後でちゃんと返すように伝えておこう、と思いながら、志津香の顔を見る。このように笑っていると、本当にアスマーゼさんそっくりだなと昔を懐かしむルーク。

「志津香、ちゃんと口にはしないけど感謝してましたよ。ご両親のことを聞けて…」

「たいしたことはしていないさ。ほら、志津香。ここで寝ると風邪引くぞ」

「あはははは、ルーク、しっかりと手がかり見つけなさいよー！」

志津香を起こそうとしたルークに寄りかかってくる志津香。見ようによつては抱き合っているような光景が出来上がる。瞬間、パシヤツとフラッシュ音が響いた。見れば金髪の少女がカメラを向けていた。

「やーやーやー、どうも。写真家のペペって言います。良い写真を激写してしまいましたね。今度ゼスのお抱え写真家オーディションに投稿させて貰いましょう」

「流石に可哀想だから止めてやってくれ。ゼスで写真家をやりたいのか？」

「はい、ゼスで写真家としてのし上がり、ゆくゆくは世界を股に掛ける美人写真家になるのが私の夢なんです」

「そうだな…ゼスの結構偉い軍人に知り合いがいるから、今度紹介

しておいてやる。だからその写真は決して投稿しないこと」

「わふー。こいつはラッキー。ぜひお願いしますね。これ、私の連絡先です。では皆様と一緒に、ラストに一枚！パシャリンコッコッ
コ！」

今度はルークと志津香だけでなく、ランスとシイル、マリア、ラン、ミリ、ミルにトマト真知子も含めた全員の集合写真を撮る。突然ではあったが、笑ってピースするランスと女性陣。ガイゼルは運の悪いことに見切れてしまっていた。

- カスタムの町 祝賀会会場外 -

「で、聞きたい事って言うのは？」

ルークとミリは会場から出て、夜風に当たりながら酒を飲んでいった。会場内の喧騒がほんの少しだけ聞こえるのみで、町の灯りも町長の家と酒場以外はほとんど消えてしまっている。中々に風情のある静かな夜であった。

「ああ…別にたいしたことじゃないんだ。俺がちょっと気にかかっただけなんだが…ルーク、あんた妹いるんじゃないのか？」

「……どうしてそう思った」

「迷宮で初めて会ったときにさ、俺が妹を放っておけないって言ったとき、ちよつと表情が変わったのが気になっただけで、後はただの勘さ。妹を持つ身としてのね」

そう笑いながら酒を一口くい、と飲むミリ。普段の立ち振る舞いからはあまり想像できないが、ミリは周りをよく見ており、中々に

鋭いところもある。

「そうだな。双子だが、妹がいる。いや…正確には、いた…だな」
「…悪いこと聞いちゃったかね」

「気にしなくていいさ。死んだのは二年前で、俺もあいつも成人してからだ。それよりも、冒険に明け暮れて録に故郷にも戻らず、妹が死んだことを一年以上も後になって知った馬鹿な兄貴が問題さ。こんな風にはなるな。ミルを大切にしてくれ」

「そうだったのかい…悪かったね。ま、俺は大丈夫さ。言われなくてもミルのことは大事に育てるよ」

今は亡き妹の話に、少し昔を思いだすルーク。結局、かつて魔想の屋敷で数日の間生活をした四人の内、二人がもうこの世にはいないのか、と感傷に浸る。ルークもその可能性を考えてはいたが、誘拐されたアスマーゼももうこの世にはいない。実際にはあの四人の内で生きているのはルークだけであった。ミリがスツとグラスをルークの目の前に差し出す。

「乾杯し直しといこうじゃないか。亡くなった妹さんにな」

「悪いな。それと、ミルの成長と…迷宮で命を落としたミリの三人の仲間にもな」

ミリの差し出したグラスに、ルークは自分のグラスを当てる。カラン、という音が静かな夜に響く。

「やっぱ…いい男だな、あんた。俺を抱く気はないかい？真知子との酒が終わったら俺の部屋に来ないか？」

「魅力的なお誘いだが断っておくよ。ランスでも誘ってくれ」

「ランスはなあ…体力は凄いいんだがテクニクがまだまだなんだ」

「もうヤッってんのかよ。いつの間に…」

空気を変えるため、あえてそういった話題にシフトしたミリ。ルークもそれに乗り、二人で笑いながら酒を煽る。そういえば、この後酒を飲む約束になっていた真知子も妹持ちである。リーザスで無理をして助けたデル姉妹もだ。知らず知らずのうちに、兄妹、姉妹という存在に惹かれていくのかも知れないな、と酒を飲みながらルークは考えていた。

- カスタムの町 祝賀会会場 チサの部屋 -

「ぶひー、えがっだ…」

ランスは祝賀会会場としている町長の家のホールを抜けだし、チサの部屋のベッドで横になっていた。ルークが出て行ったすぐ後、チサがランスを自分の部屋に誘いに來たのだ。まだチサの処女を奪っていなかったランスはこれを承諾。チサの部屋につくやいなや情事に入り、それを終えた今はベッドの上で脱力感に身を浸らせていた。

「町を救って頂き、本当にありがとうございます。あの、ランス様。その指輪、つけてみても良いですか？」

「ん？別に良いぞ。魔法使いでも処女でもないチサちゃんがしたところで何の意味もないからな」

チサがランスの服の側に置いてあったフィールの指輪を指さす。H後で上機嫌だったランスは、難なくOKを出した。左手の指に四つの指輪を填めていくチサ。すると、突然チサがおかしな笑い方を始めた。目は正気を失っている。

「ふふ、ふふふ、ふふふふふふふふふふ」

「……チサちゃん？」

「ふふふくくく、ありがとう、ランス君。私からも礼を言おう！」

この場にいないはずの初老の男の声が響く。それと同時に、ランスは金縛りに襲われ動けなくなってしまった。ランスはこの声に聞き覚えがあった。チサの後ろに、その男の姿が浮かび上がる。

「なっ、てめえ、その声は生きてやがったのか！ラギシス！！」

「ふはははは、久しぶりだなランス。この娘が行方不明になったことがあっただろう。そのときに内側に潜ませて貰っていたのだ。くくく、結果は上々だ。こうして私の元に指輪を持ってきてくれたのだからな！」

「てめえ、そこを動くな！今ギッタギッタにしてやる！」

「ははは、それは恐ろしい。感謝の意を込めて君は生かしておいてやろう。さらばだ、ランス」

そう言い残し、勝ち誇った笑いを浮かべながら四つの指輪と共に姿を消すラギシス。部屋には金縛りの解けたランスと、気絶しているチサだけが残されていた。

第28話 祝賀会（後書き）

「人物」

ペペ・ウィジーマ

世界を股に掛ける写真家を夢見る少女。思わぬ形でゼスとのパイプが出来そうで上機嫌。撮った写真はちゃんと写っている全員に渡しました。志津香にツーショット写真を渡した際、ネガを燃やすから寄越せと追いかけられる羽目になった。

「技」

粘着地面

一定サイズの地面を粘着質にして動きを止める初級魔法。術者の能力次第で効果範囲や粘着度に差が生まれ、ある程度の術者であれば戦闘支援魔法としても優秀な魔法となる。

「その他」

GI0998 ルーク、カスタムの町を訪れ魔想夫妻の世話になる

GI0999 志津香誕生 直後、篤胤は殺され、アスマーゼは攫われる

GI1006 ルーク、行方不明になる

GI1014 ルークの妹、死亡

GI1015 ルーク帰還、妹の死を知る その数日後、元号がLPへと変化する

第29話 怨嗟

・カスタムの町 臨時宿泊施設・

「頭いたっ……」

志津香が目を覚ますとそこは酒場に作られた臨時の宿泊部屋であった。どうやらマリアが連れてきてくれたらしい。昨晚の記憶がまるでない。どうやら飲み過ぎで仕舞ったようだ、と痛む頭を抱えながらベッドから抜け出す志津香。部屋を出て営業場の方に行くと、何人かの客が朝食を取っている。志津香と同じように二日酔いに頭を抱えているものも多い。奥の席にマリアの姿が見える。マリアもこちらに気がついたようだ。

「あ、おはよう志津香。……調子悪そうね」

「おはよう、マリア。…最悪ね。頭痛いし、昨晚のことは何にも覚えてないし」

「あはは…そうなんだ…」

そう言っただけ志津香はマリアの前に座る。マリアの苦笑いが少しだけ気になる様子であったが、今の状態ではあまり深くは考えられないようで、エレナに水の注文をする。

「はい、水。昨晚は随分とはしゃいじゃったみたいね。あまり気にしない方が良くいわよ」

「あつ、エレナさん！それは…」

「……どうということ？」

水を持ってきたエレナが志津香にフオローを入れる。が、昨晚の

ことを覚えていない志津香にとってそれは逆効果であった。マリアの方に向き直り、昨晚のことを問う。

「ねえ、マリア。私昨晚どんな状態だったか聞かせてもらえる？」

「え、えつとね……落ち着いて聞いてね」

これは隠しきれないと判断し、観念して昨晚のことを話し始めるマリア。親友のことを思い、極力オブラートに包んで説明が続けたが、その努力は無駄になる。志津香の様子を見に酒場に入ってきたミリが、その姿を見るやいなや志津香に向かってこう言ったのだ。

「お、なんだ元気そうじゃないか。昨晚は凄かったな。真つ赤な顔で騒ぐわ、絡むわ、爆笑するわ。抱きつかれたルークが困ってたぞ」

その発言になぜかマリアの血の気が引く。ミリに黙っているようにジェスチャーを送るがもう遅い。志津香は机に突つ伏しながら、二度と酒は飲み過ぎないようにしようと心に誓うのだった。

- カスタムの町 街路 -

町長の家に向かってルークは道を歩いていた。一応事件解決ではあるが、消えたラギシスの問題が残っていたからだ。酒場の前を通ると、店からマリアとミリ、ミル、そして俯いた状態の志津香が出てきた。

「おはよう。みんなで朝食でも取っていたのか？」

「あ、ルークさん。おはようございます」

挨拶をしながら四人の方に寄っていったルークだが、いきなり志津香に右足を踏まれる。見れば志津香がこちらをものすごい顔で睨んでいた。

「……昨日のことは記憶から抹消しなさい。死にたくなかったらね」

「ん？ああ、そのことか。別に俺は気にしていないんだがな……」

「私が気にするのよ！」

「お、仲良いな」

「おねえちゃん、あれは仲良いつて言うの？」

志津香のヤクザキックがルークに飛んでくる。そんな感じで談笑をしていると、町長の家の方からランが慌てた様子で走って来る。マリアがいち早くランに気がつき、声をかける。

「どうしたのラン？そんなに慌てて」

「良かった、みんな揃っている。今すぐ来て、大変なことになったの！」

- カスタムの町 町長の家前 -

「フィールの指輪を奪われたですって！というか、いつの間に私の指輪持って行ったのよ！」

「ランスの馬鹿。40人分の魔力を吸ったあの指輪はとんでもない魔力を秘めているわ。そんなものラギシスの手に渡ったら……」

「ランスのバカ、バカ、バカ！！」

「いた、いた。そんな怒るな」

町長の家の前にいたランスから一行は昨晚の報告を受ける。四魔

女である志津香、マリア、ミル特に激怒しランスに食って掛かる。町長の屋敷に用事があって寄っていたランは、先に報告を受けていたため食って掛かるようなことはしないが、やはり相当怒っていた。ミリは達観した様子で事の成り行きを見守る。ルークは自分の迂闊さを後悔する。ラギシスに対する懸念はあったし、チサがラギシス邸で見つけた話は聞いていた。あの時疑念を抱いておくべきだった、と。

「やはり生きていたか、ラギシス。シルちゃん、ラギシスが今どこにいるかは判っているのか？」

「はい。あちらの森の方に向かわれたのを目撃した住人の方がいました」

「多分まだ指輪の力を完璧には扱いきれていないんだわ。あの森で魔力に慣れるつもりよ」

「…マリア、ミル、ラン、行くわよ。私たちの手でラギシスをもう一度殺しに」

志津香の言葉に三人が頷く。騙されていたとはいえフィールの指輪を完成させてしまった者として、ラギシスの弟子として、四魔女で決着を付けるつもりらしい。

「水くせーな。俺も行くよ。妹だけ向かわす訳にはいかないだろ」

「ま、このまま放っておける存在ではないな。最後まで付き合おう」

志津香の言葉に反応したのは三人だけではない。ミリとルークも共に戦う腹づもりの様だ。が、ランスだけが無然とした態度でこう言っている。

「めんどいから俺様は行かんぞ。俺様の仕事は四魔女退治とこの町の開放だ。後は知らん」

「でもランス様……」

「それに40人分の魔力を持った相手だろう？お前たちに敵うような相手じゃないだろ。俺様ほどではないが多少は強いルークが協力したとしても、死ぬかもしれんぞ」

「それでも行かないといけないのよ」

ジロリとだけランスを一瞥した志津香は、マントを翻して颯爽と歩き始めた。ミリ、ミル、ランがそれについて行く。

「止めたらどうだ？マリア、ルーク」

「そんなわけにはいかないわ。ラギスを放っておけないもの」

「奴を放置するのは危険だからな。指輪に慣れていない今のうちに叩いておくのも冒険者の勤めだ。が、ランスの判断を否定するつもりはない。そちらの言っていることも正しい。仕事でもないのに命をかけてまでやることではないからな」

「……シル、帰り支度をしておけ。そろそろアイスの町に帰るからな」

「ランス様……」

シルが悲しそうな表情でランスを見つめる。どうやらシルはみんなに協力をしてあげたいと思っている様だ。が、主人のランスの意見には逆らえない。

「今までありがとうね、ランス。シルちゃんも元気だね。バイバイ」

「ま、俺が誰も死なせはしないさ。またその内、冒険を一緒にすることもあるだろ」

そう言ってマリアとルークは軽やかに志津香の後に付いていった。

「ふん、馬鹿な奴らだ」
「……………」

・カスタムの町近隣の森・

六人はラギシスがいるという森の中まで入ってきていた。志津香が魔力を察知し、道案内をする。マリアはゴロゴロと砲台を乗せた台車を転がしていた。ルークもそれを後ろから押す。

「すみません、ルークさん。手伝って貰っちゃって」

「気にしないでいい。で、これは一体何なんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！これはマレスケ。長距離用のチューリップ2号です。指輪に魔力を吸われすぎた私が付いて行っても足手まといだからね。ちょっと離れたところからこれでみんなを援護するわ」

「なるほどな、ラギシスの正確な位置は判るのか？」

「GPSっていう物が手に入れば良かったんですけど、手に入らなかったんで志津香の魔法でターゲットして、その位置を特定して発射できるようにしています」

「この辺りが広くてよさそうね。マリア、ここから援護して。頼んだわよ」

「そういえばランとミルは吸われた魔力は大丈夫なのか？」

マレスケを台車から降ろしながらルークが二人に尋ねる。指輪を外すときにこの二人も魔力を相当量吸われているはずだ。魔法を使えないのであればマリアと共にここに残った方が良さそう。

「かなり吸われはしましたが、魔法を使えなくなるほどではありません」

せん。それに、私は一応剣も使えますし」

「幻獣さんの出せる量は減っちゃったけど、少しならまだ出せるよ」

どうやら魔法を使えなくなるほどにまで吸われてしまったのはマリアだけらしい。運が悪かったのか、元々の魔力量に差があったのか。

「志津香、調整が必要だからマレスケが撃てるようになるまでもう少し掛かるんだけど…」

「待てばその分ラギシスが指輪に慣れるわね…いいわ、先に戦っていきましょう。準備が出来次第、援護をよろしく」

こうしてマリア一人を森の広場に残し、五人で奥へと進んだ。少し進むと洞窟が見えてくる。この中でラギシスは指輪の魔力に慣れているのだろう。洞窟の仲ではマレスケの砲撃が届かないため、なんとか外に誘導できないか辺りを窺っていると、突如洞窟の入り口前の時空が歪み始める。その時空の裂け目からラギシスが現れる。

「貴様らか…何故私の前に立つ」

「ラギシス、観念しなさい！」

「貴様を野放しにしておくのは危険なんぞな」

「ふはははは！無限の魔力と生命力を持つこの私に楯突こうとはなよほどの命知らずらしい」

「もう一度殺して、今度こそ地獄に送ってやるわ！」

「おお、ミル、ラン、志津香。私の可愛い娘たちよ。命だけは助けてやったというのに…」

その言葉に志津香がキツとラギシスを睨み付ける

「私の父は一人だけよ！あんななんかじゃない！！」

「くくく…そうか。なら、殺されても文句は言うまい!!!」

その言葉が開戦の合図となった。全員が臨戦態勢に入る。純粋な剣士であるルークとミリがラギシスに向かっていく。その二人に向かって志津香が声をかける。

「私がラギシスの魔法を封じ込めるわ。あまり長くは持たないと思うから、その間に奴を倒して」

「了解、頼んだぜ志津香！」

「こつこつ役回りは俺たちに任せろ。ミルはあまり前線に来るな。ランは志津香が攻撃魔法を使えない分、剣ではなく魔法で援護を！」

ルークが的確に指示を出す。ランとミルもそれに頷き、前衛ルークとミリ、中衛ランとミル、後衛志津香という布陣が出来る。向かってくるルークとミリに対し、ラギシスが何やら呪文を唱えようとするが、その魔力が志津香の妨害魔法によって封じ込められる。

「なるほど…我が魔法を封じ込めるか。簡単な魔法ではないのだが、さすがは志津香だ。これ程の魔力を有しているとは…」

「そうだな。そして貴様は何も出来ないまま死ね！」

「おりゃ！」

ルークとミリの剣がラギシスを斬る。ミリの剣は胸を、ルークの剣がその首を真一文字に斬り裂いた。が、ミリが付けた胸の傷もルークが付けた首の傷も、ジユクジユクと音を立てながら再生してしまふ。

「もはや人間ではないな…」

「無限の生命力を持つと言ったであろう」

「援護します。炎の矢！」

「幻獣アタック！」

ランの放った炎の矢がラギシスの右腕を燃やし、ミルの幻獣が体当たりをする。ミルの幻獣は、洞窟の中で見た凶暴な姿からなにやらファンシーな可愛らしい物に姿を変えていた。これはミルの精神状態で変化する物なので、あの時と違い元の幼い状態で、かつ指輪の悪影響を受けていないミルが呼び出すとこういう姿になってしまうのだった。丸焦げになった右腕が、じわじわと再生していく。

「ちっ、化け物め！」

「ミリ、手を止めるな！再生力を上回るダメージを与えれば勝てる！真空斬！」

「ごさかしい…魔法の攻撃が出来なくとも、我がパワーを防ぐことは出来まい」

「！？ぐあっ！！」

「おねえちゃん！！」

突如、ラギシスの体から鋼鉄の触手が伸び出し、目の前にいたミリに襲いかかった。直撃は避けたミリだが、脇から出血をしている。今この場に回復役はいない。一人の離脱がそのまま戦況を大きく動かしかねない。特に前衛のミリは貴重な存在だ。倒れられるわけにはいかない。ルークがミリの方を見るが、右手を挙げてこちらに合図をしてくる。

「心配しないでいいよ、かすり傷だ！」

「魔力を肉体の改造にも使えるのか。厄介だな」

「外に放たない魔力は抑えることが出来ないわ、悪いけどそつちでなんとかして！」

ラギシスの魔力を抑えているのが相当きついのか、青ざめた顔を

「でかい図体の割には、言うことが小さいな。自分が小者だと伝え
ているだけだぞ」

「なんだと……」

高らかに笑っていたラギシスだが、ルークの言葉を聞きその笑いが止まる。ルークは意味もなく挑発したわけではない。ランもミリモミルも戦意が落ちてしまっている。今襲われては総崩れしかない。だからこそ、自分に意識を向けさせたのだ。

「そうか、そんなに死にたいのか。ならば望み通り死ね、ルーク！
！」

ラギシスが両拳を握りしめ、ルークの立っていた場所に振り下ろす、轟音と共に砂煙が巻き起こる。見れば地面が抉れている。恐ろしいほどの威力だ。ランたちは焦ってその場を見るが、ルークの姿がない。

「ぐあっ！！！」

ラギシスがうめき声を上げる。ラギシスの攻撃を素早く躲したルークが、少し離れた場所で鎧の間から剣を突き刺していたのだ。

「触手同様動きが鈍いな。これではただのでかい的だ」

「貴様あ！炎の嵐！！」

ラギシスが初級呪文を放つが、それを躲しながら鎧の間を攻撃していくルーク。更に執拗にラギシスを挑発し、それに誘導されるようにラギシスはルークばかりを狙い続ける。さすがに完全には躲しきれなくなっていき、少しずつその体を傷つけられていく。

「あそこまでラギシスの注意を引きつけてくれたんだ。俺たちも行くよ！」

「うん、おねえちゃん！」

「ルークさん、今援護します！」

「みんな…頑張つて…」

戦意を失いかけていた三人が再びラギシスへ攻撃を始める。志津香も青い顔をしながら必死にラギシスの魔法を抑えている。今は初級魔法のみで済んでいるものの、志津香が崩れれば一体何が飛んでくるか判つたものではない。早く勝負を付けなければ敗北は必至。ルークはここにきて大技を放つ。狙うはラギシスの右腕。

「真滅斬……！」

「ぐつつつ……！貴様あああ……！」

ラギシスの右腕が斬り落とされる。怒り狂うラギシス。志津香の妨害魔法の影響がある中、無理矢理にでも魔力を込め上級魔法を放とうとする。

「ぐつ……これ以上は……抑えきれない……」

「はははは、死ねえええ……！」

ラギシスがそう言つて魔法を放とうとした瞬間、空が光つた。直後、ラギシスを強力な砲撃が襲い、その体が灼熱に包まれる。

「ぐおおおおお……！！！」

「マリアよ、マリアの砲撃が間に合つたのよ！」

「なんという威力だ……マリアめ、あいつは本当の天才かもしれんな……」

更にもう一発追い打ちの砲撃が飛び、豪華の中ラギシスの体が見えなくなる。鋼鉄の鎧がメキメキと音を立てて崩れていく。

「やった…のか…？」

「大丈夫だよ、おねえちゃん。これでやれなきゃ本当の化け物だよ」
「！？いや、まだみたいだ…」

炎の中から異形の生物が姿を現す。鎧に覆われていた肉の塊が姿を現したのだ。所々から触手が伸び、手足は無くナメクジのように地面を這っている。全長は一体どれほどになるのだろうか。遙か高い位置から見開かれた両目でルークたちを見下ろすラギシス。

「……黒色破壊光線」

「みんな逃げて！！」

ラギシスが強力な魔法を放つ。志津香が叫ぶが、時既に遅し。ルークは他の四人を庇うように前に出るが、防ぎきれものではない。暗黒の光線が五人を包んだ。

・カスタムの町近隣の森 広場・

遠くで轟音が響く。と、同時にマレスケの目標座標も担っていた志津香の封印魔法が解除されてしまった。

「ダメ、これじゃあもう砲撃は出来ない。志津香、お願いもう一度魔法を…」

座標が特定できなければみんなを巻き込んでしまう可能性がある

ため、下手にマレスケを撃つことは出来ない。が、再度魔法が掛けられる気配はない。青ざめていくマリア。

「うそ…みんなやられちゃったの…志津香…」

目に涙を浮かべ、その場に座り込んでしまうマリア。絶望の中呟いたのは、この場に男の名前であった。

「……助けて……ランス……」

・カスタムの町近隣の森 洞窟前・

「あーはっはっはっはっ！身の程を思い知ったか雑魚ども！
！」

ラギス以外その場に立っている者はいなかった。幼いミルは気を失っている。志津香、ミリ、ランの三人は意識を保ってはいたが、全く体を動かせず地面に横たわっていた。一番酷いのはルークだ。庇うように前で直撃を受けたため、地面に倒れ込んだままピクリとも動かない。

「ラギ…シス…」

「私の黒色破壊光線を受けてまだその目が出来るとは、やはり大した奴だな、志津香よ。そうだ、冥土の土産に一つ良いことを教えてやろう」

「良いこと…ですって…」

「そうだ、お前が探し求めていた両親の仇のことだ」

「！？ラガールを…知っているの…」

「知っているとも。何せ、奴に魔想がこの町にいと教えたのは、この私だからな！」

その告白に、志津香の目が見開かれる。苦しそうな声を絞り出してラギシスに聞き返す。

「なん…ですって…」

「目障りだったんだよ、奴が。いきなりこの町に越してきたと思えば、住民とすぐに打ち解けてな。私の研究にもそれは危険だとかケチをつけてきやがった。そんなとき、ゼスで魔想を捜しているという男の情報を聞いてな。情報を提供した相手には魔力増幅の指輪を寄越すとの事だった。くくく、好都合だった」

「魔力増幅の指輪…まさか!？」

「そうだ、このフィールの指輪はラガールが造り出したものだ。魔想夫妻を話があると言って荒野まで呼び出し、ラガールに殺させた。その報酬として指輪を譲り受けた。四つの指輪には既に9人分の魔力が込められていた。そして町にはおあつらえ向きに魔法の才能がある娘たちが数人いた。頃合いを見計らってこの娘たちに指輪を詰めさせればいい。そのために私は貴様らを弟子にしたのだ」

「そんなに昔から…全て自分が指輪の力を手に入れるために…」
「志津香よ。お前に指輪を渡し、それを嬉しそうに指に填める姿を見て、笑いを堪えるのが大変だったのだぞ。探し求めている父の仇が造った指輪を嬉しそうに指に填めるその顔、実に滑稽であつたぞ。ふふふ、はははははははは!!!」

ゲスな笑い声が辺りに響く。志津香が土を握りしめ、目を血走らせる。ミリとランも倒れたままラギシスを睨み付ける。

「……殺してやる、殺してやる、殺してやる!!!」

「外道が……」

「やっぱり…この男だけはもう一度殺す必要があるわね…」

「ふはははは、この無限の魔力を手にした私を殺すだと！それは不可能だ！さあ、話も終わった。貴様らは実によく役に立ってくれたよ。一度殺されたのは誤算だったがな。あの時のお返しだ、志津香。貴様から死ね！」

そう言っつて鋭い触手が志津香に迫る。満身創痍の体では避けることも迎撃することも出来ない。しかし、気丈にも目を瞑ることはなく、その瞳はラギシスを睨み付けていた。迫る触手に自分の死を悟る。恐怖よりも、悔しさが募る。父の仇を…討てなかった…。が、迫っていた触手は志津香の直前で両断される。

「つまり、貴様も篤胤さんとアスマーゼさんの仇って事だな…」

「貴様、まだ立つのか…」

志津香は見る。自分を守るようにラギシスの前に立ちふさがる男の姿を。大きく、頼りがいのある背中。黒色破壊光線の直撃を受け、誰よりもダメージ大きいはずのルークが、それでもまだ立ち上がり、ラギシスと対峙していたのだ。

「ならば貴様はここで殺すぞ、ラギシス！俺と志津香の手でな！！」

第29話 怨嗟（後書き）

「技」

幻獣アタック

使用者 ミル

呼び出した幻獣たちを一齐に体当たりさせるミルの必殺技。幻獣の数が多ければ多いほどその威力を増す。

炎の嵐

小規模範囲を炎で包む初級魔法。火爆破よりも範囲が狭く、ある程度の魔法を習うと徐々に使わなくなるため、あまり戦場で目にすることはないある種レアな魔法。

黒色破壊光線

暗黒の光線が敵を飲み込む最上級魔法。数ある攻撃魔法の中でも最強とされている究極呪文だが、その分扱いは難しく使用者は限られている。本来ラギスはこの魔法を使うことは出来ないが、指輪の魔力で無理矢理使用している。

「その他」

チューリップ2号「マレスケ」

長距離固定砲台のチューリップ2号。驚異的な威力を叩き出すが、座標指定がネックとなる。そこまで大きくないため台車での持ち運びが可能。マリアはまだまだ満足しておらず、砲身をもっと巨大化し、GPSも付けて超巨大長距離固定砲台にしたいらしいが、そんな金はカスタムの町にはない。

第30話 英雄は遅れてやってくる

- カスタムの町近隣の森 洞窟前 -

ポツポツ、と雨が降ってきていた。その雨を頬に受けながら、ルークがラギシスと対峙している。既に体は満身創痍。立っているのもやっとな状態のはずだ。

「私を殺すだと？ほざけ、雑魚がつ！！！」

ラギシスの触手がルークに迫る。頭に血が上ったラギシスは、倒れている四人には目もくれずルーク一人に攻撃を集中させる。それを捌いていくルーク。ルークの体を突き動かしているものは二つ。恩人の仇である目の前のラギシス。そして、後ろにいる恩人の娘の志津香。戦士として、男として、ここで立たないわけにはいかなかった。触手を斬り落しながら志津香に向かって小袋を投げる。

「中に元気の薬が入っている。最後の一本だ。気休めにしかならんが飲んでおいてくれ」

「あんたが…飲みなさいよ…」

「俺は大丈夫だ、まだまだ戦えるさ。それに…志津香、お前の力が必要だ」

「……勝つためってことで…いいのね？」

「ああ、ミリとランには何も出来ずスマン。世色癌はさっきで燃やされてしまっただけなんだ」

「回復させられる一人は…あんたの判断だろ？それを信じるさ…」

「ルークさん…必ず勝ってください…」

「了解だ。志津香、援護はいらない。自分の撃てる最強の魔法を準

備だけしておいてくれ」

左手の親指でランに返事をし、ルークは更に迫ってきた触手を斬っていく。奥でラギシスが魔法を唱えようとすれば真空斬で妨害をし、中級魔法以上のものを撃たせないようにしていた。先ほどの黒色破壊光線をもう一度放たれば、今度こそ命はない。

「ふん、粘りはするが徐々に動きが鈍くなってきたぞ」

「化け物になって目まで悪くなったのか？ あんな下らない理由で力を欲するような小者の攻撃、まだまだ何時間でも捌けるぞ」

「貴様あ！！まだ私を小者というのか！！！」

ラギシスが言うようにルークの体に更に傷が増えていく。完全に触手や魔法を避けきれなくなってきたのだ。だが他の四人に攻撃させるわけにはいかない。あえて更に挑発を続けるルーク。志津香はその姿を見ながら歯がゆい思いであった。ルークがその性格に似合わない挑発を続けているのが自分たちを守るためだというのは判っていた。だが、そんな彼に何もする事が出来ない。ミリとランも気がついていよう、悔しそうに呟いていた。

「あの馬鹿…自分だって限界だろうに…こっちの心配までしてる場合か…」

「こんな形で足手まといになってしまふなんて…」

志津香は既にルークから貰った元気の薬は飲んでいたが、やはりここまでのダメージを負ってしまったてはその回復量は気休め程度であった。体は起こせるようにはなったが、集中できず魔力をあまり溜められない。普段であれば気にもならないのに、今は頬に当たる雨粒一つにも集中力を乱していた。それなのに、雨足は更に強まる。

「炎の嵐！」

「くっ……」

ラギシスの放った魔法を避けるが、横から来た触手に左足を刺される。すぐにその触手を斬り捨て、体勢を整える。じり貧である。端から見れば十分戦えている様にも見えるが、その実、迫ってくる触手を斬るのが精一杯で録に本体にダメージを与えられていない。魔法詠唱妨害の真空斬程度では今のラギシスの生命力ではすぐに再生してしまう。再生するのは本体だけではない。必死になって斬り落とした触手も、少しすれば再生してしまうのだ。この巨大な相手に立ち向かうには、攻め手が足りていなかったのだ。ルークは思う。せめて後一人、背中を預けられるほどの前衛がこの場にいてくれれば……と。

「……………？」

初めに異変に気がついたのはランであった。しかし、それは意外なことではない。ルークは交戦中、志津香は魔法詠唱に集中し、ミリはルークの戦闘を見ながらも気絶している妹が気になる様子。一番冷静に周囲の様子を窺っていたランが一番先に気がついたのは必然だったのだ。

「雨足が強くなっているの……私たちのいる場所だけだわ……」

「真空斬！真空斬！」

「ほらほら、どうした！小者呼ばわりした相手に追い詰められる気分はどうだ？」

ラギシスの触手を必死に真空斬で叩き落としながら、ルークは下品な笑い声を上げるラギシスを見上げる。そこでルークは意外なものを見る。巨大な肉塊に二つの目が付いたもはや人間とは呼べないラギシスの後ろ上方、洞窟の入り口である岩肌の上に一人の男が立っていたのだ。ルークの待ち望んでいた、背中を預けられる戦士。岩肌から飛び、その男はラギシスに向かって剣を打ち下ろす。

「不意打ちランスアタアアアック！！！」

「ぐぎやあああああ！！！」

その男はランス。岩肌から飛び降りながらのランスアタックは、ラギシスの左半身を縦に真つ二つにし、更に剣が地面に付いた際に生まれた衝撃波で周りの触手も吹き飛ばす。斬られた身体の断面から緑色の液体がグジュグジュと流れ出る。

「ランス、貴様あああああ！！！」

「げ、まだ生きてるのか。しぶとい奴だ」

「来てくれるとはな、礼を言う。…仕事は終わったんじゃないのか？」

丁度ラギシスを挟み込むような位置関係になったランスに向かって、ルークが問いかける。ふん、と鼻を鳴らしながらランスがそれに答える。

「お前らに恩を売っておくのも悪くない。それに、むざむざラギシスに俺様の女たちを殺させることもないからな」

「誰があんたの女よ！来るならもつと早く来なさいよ！」

「がはは、英雄は遅れてやってくるものなのだ！」

「ふ、案外そんなもんなのかな」

志津香がランスに文句を言う。と同時に、自分の体の異変に気がつく。先ほどまでよりも傷がふさがり、体力が戻っているのだ。

「これは…」

「体が動く。ミル、大丈夫か！」

「やつぱりこの雨…」

「みなさん、大丈夫ですか!？」

森の茂みからシイルが現れる。ランたちの周りだけ雨足が強まっていたのは、シイルが普通の雨の中に隠して回復の雨を唱えていたからだ。ランとミルも体が動く程度には回復し、ミリは気絶したままのミルに寄っていつて抱き起こす。ランは側に落ちていた自分の剣、ドラゴン・スレイヤーを握るが、その刀身は折れてしまっていて最早使い物にはならない。シイルの姿を見た志津香が声を上げる。

「ありがとう、シイルちゃん。でももう回復の雨はいいから、ヒーリングで私を優先して回復して！」

「え？」

「シイルさん、私からもお願い。この剣じゃもう援護も録に出来そうにないから」

「ルークは志津香を必要としていた。それに、あの二人が前衛なら俺は足手まといさ。ミルと一緒に下がっているよ」

「二人とも…ごめん、ありがとう」

「わかりました。いたいのいたい、とんでけーっ！」

シイルの治療を受けながら、志津香は呪文を唱えながら両手に魔力を込め、ルークに言われた通り自分の撃てる最強の魔法の準備をする。黒色破壊光線より威力は劣るが、光属性最上級魔法に位置する攻撃魔法、白色破壊光線の準備を。

「ふん、くそつ、なんだこの触手は！ああ、めんどい！やはり帰ればよかった！」

「ま、今更引き返せないだろ。しっかり働いてくれ」

言い合いながら触手を蹴散らしていくルークとランス。戦況は一気に変化した。ランスの登場によって触手の猛攻よりもこちらの手数の方が多くなったのだ。徐々にだが触手の数が間に合わなくなってきた。更にそれを後押しする要因がもう一つある。ドゴオオオン、と辺りに爆音が響く。ラギシスの顔面右下が燃え上がっていた。

「くうううう！マリア、育ての親でもある私に歯向かうかあっ！！」
「今更親面しないで。もうあんたには怨みしかないんだから！いつけー、チューリップ！！」

これがもう一つの要因、マリアの参戦だ。座り込んで泣いていたところにランスとシルが現れ、座標の問題から使用できないマレスケを置いて加勢に来ていたのだ。離れた位置からチューリップでルークとランスを援護する。最早優勢なのはラギシスではない。ラギシス自身もそれは判っているようで、徐々に焦り始める。

「無限の魔力を持つこの私が貴様らごときに！こうなれば、もう一度黒色破壊光線でまとめて吹き飛ばしてくれる！！」

「ぐおつ、一斉に触手が集まってきやがった！」

「させるか、真空斬！」

「いつけー、チューリップ！」

魔法詠唱を阻止しようとルークとマリアがラギシスの顔面を狙う。その攻撃はラギシスに直撃するが、呪文詠唱は止まらない。多少の

妨害で集中力を欠いていた先ほどまでと違い、ここへ来てラギシスも全力でこちらを殺しに掛かる。

「ちっ、まずいぞ！」

「ランス、俺が行く。マリア、援護を頼む！」

「あ、はい！了解です！」

ルークが触手の中を縫って全力でラギシスに向かっていく。全ての攻撃を捌くのは追いつかないため、道を阻むもののみ斬って捨てる。その分細かい触手からダメージを受けるがルークは構わず進む。あれを放たれば詰みだ。後先を考えているときではない。ランスではなくルークが向かったのはラギシスまでの距離がランスよりもルークの方が近かったことと、範囲は狭いが直撃時の威力だけならランスアタックよりも真滅斬の方が上だからだ。ラギシス目前まで迫ったルークの前に一層巨大な触手が立ち上がる。が、その触手はチューリップの砲撃で燃え上がる。

「いい援護射撃だ、マリア！お前のチューリップは戦闘の歴史を変えるかもしれない！」

「あつたりまえでしょ！私のチューリップは世界に羽ばたくんだから！いけー、ルークさん！」

崩れ落ちていく巨大な触手を足場にし、ルークは駆け上がったいく。そして、ラギシスの顔面めがけて飛び上がった。

「篤胤さんとアスマーゼさんの仇だ！くらえ、真滅剣！！」

「馬鹿め、掛かったな！私を小者と馬鹿にした報いだ！！」

ラギシスがそう言った瞬間、ルークとラギシスの間に魔法結界が発動する。物理攻撃を遮断する結界だ。これでもうラギシスに剣は

届かない。そうして無防備になったルークを魔法で吹き飛ばす算段であった。これが他の戦士であったなら、この作戦は成功していただろう。だが、目の前に対峙した男が悪かった。ルークの剣は結界を打ち破り、ラギシスの顔面右部を真つ二つに斬り裂いた。

「ぐぎやああああ！！なぜだ、なぜ結界が…」

「運が悪かったな！良い手だったが、俺にだけは悪手だ！！」

「ルーク、いけるわ！離れて！！」

後ろから志津香が叫ぶ。遂に魔法の準備が整ったらしい。触手と戦っていたランスがその声を聞いてその場から離れる。ルークも横に飛び、ラギシスと志津香の直線上を空けようとするが、ラギシスの最後の意地か、その体を触手が掴む。

「ぐっ…」

「あ、馬鹿！何捕まってるんだ！！」

「ふはははは、このまま黒色破壊光線で吹き飛ばしてやろう！！」

ラギシスの顔面目の前で捕らえられたルーク。左手は自由に動くが、剣を持つ右手が触手に捕まっているため、斬って逃げる事が出来ない。このままではルークを巻き込んでしまうため志津香が魔法を撃てないでいる。一方ラギシスは、先ほどまで詠唱していた黒色破壊光線の準備に取りかかる。最早逃げる手段はない、勝ちを確信したラギシスだったが、その巨大な目玉が鋭利な刃物で潰される。

「ぎやあああ！ど、何処に武器を隠し持っていた！！」

ルークが左手に持っていたのは、かなみから受け取ったくない。懐に隠し持っていたそれでラギシスの目を潰し、触手が緩んだ隙に横っ飛びする。

「撃て、志津香！！決着はお前の手で付けろ！！！」

「白色破壊光線！！！！！」

志津香の両手から、強力な光の光線が放たれる。強力な魔力を帯びたその光線は、一直線にラギシスに向かっていく。

「くそがああああ！その程度の魔力、私の黒色破壊光線で……！？」

黒色破壊光線で迎撃しようとしたラギシスだったが、放とうとした瞬間、体が崩れ始める。自分の体内で魔力が暴走しているのを感じる。

「ば、馬鹿な！無限の魔力と生命力を得るのではなかったのか。まさか……ラガールめ、この私を謀ったな！！おのれえええっ！！！」

ラギシスの言うようにフィールの指輪は欠陥品であった。四つ身につければ強大な魔力を手に入れるが、一定のキャパシティを越えたとき暴走をしてしまうのだ。だからこそ、ラガールは簡単にこの指輪を手放した。更にラギシスは知らなかったが、志津香が填めていた指輪だけ魔力の装填が足りていないのだ。外すときの呪いを回避していたため、平常時に吸い出す微量の魔力しか溜まっていなかった。これでは到底40人分に届いていない。欠陥品の指輪に未完成の儀式。その二つの影響でラギシスの体が崩壊を始めたのだ。再生力を維持できなくなったラギシスの体を白色破壊光線が飲み込んでいく。

「こ、こんなはずでは……弟子に二度も殺されるといふのか……お、おのれえええ！私は小者などではない！私が、私こそが最強のまほ……」

ラギシスは最後の言葉すら言い切れないまま、白色破壊光線と指輪の暴走によって塵となって消えた。丁度雨が止み、晴れ間が差し込む。

「勝った…のよね。やった！ラギシスを倒したわ！！」

「がはははは、俺様の敵ではなかったな！」

「やりましたね、ランス様！」

「ランスさん、ルークさん、シルさん、協力してくれて本当にありがとう…」

「あれ？おねえちゃん、ラギシスは？」

「ミル、良かった、目を覚ましたか。安心しな、全部終わったよ！俺たちの勝ちだ！」

その場にいたものが全員、歓喜に打ち震える。そんな中、座り込んで下を向いている志津香にルークは近寄っていく。

「お父様…お母様…やったよ…」

「…お疲れ様」

ルークが志津香の肩に手を乗せる。志津香もそれを振り払うことなく、ルークと話を続ける。

「そつちもお疲れ。正直、助かったわ。……………ありがとうね」

「必要ないさ。この復讐は一蓮托生だろう？」

「…そうね。それに、まだ終わっていない」

「ああ、ラギシスは所詮協力者。本命が…ラガールが残っている。だが…」

「だが、なに？」

「今日くらいは素直に喜ばうじゃないか」

そう言つて、ルークは全員でわいわいと喜び合つランスたちの方を指さす。それを見た志津香が少しだけ微笑む。

「…そうね、賛成だわ」

その笑顔を、ルークはジツと見つめる。見られていることに気がついた志津香は訝しげにルークに尋ねる。

「……何よ？」

「いや、昨日笑っているのを見たときも思ったが、笑顔だと一層アスマーゼさんと似ていると思つてな」

亡き母に似ていると言われ、少し嬉しくなる志津香であつたが、ふと疑問を抱く。昨日見たときも思つたつてどういうことだ。私はルークの前で笑つたことがあつただろうか、と。思考を巡らせて辿り着いたのは、昨晚酔つ払つて爆笑していたという失態であつた。全力でルークの足を踏みつける志津香。

「ぐあつ…け、怪我人になんてことを……」

「忘れないと死ぬつて言つたでしょ？」

その時、消滅したラギスが立つていた場所から煙が立ち上る。全員が一斉にそちらを見るが、そこにいたのは全裸の女の子たちだった。

「おお、美女がいっぱいではないか。君たちは何者だ？」

「というか、なんで裸なんですか！？何か着てください！」

「私たちはファイルの指輪に閉じ込められていた40人の女の子たちの魔力です。今はこうして元の持ち主の体を元に実体化しています。解放していただき、本当にありがとうございます」

「なるほどな、魔力に服も何もあつたもんじゃないってことか。彼女たちは元の持ち主の体に戻るのか？」

「いいえ、一度離れた魔力が戻ることはないわ。それに、もう戻るべき宿主が死んでいる子もいるでしょうしね」

ルークの疑問に志津香が答える。魔力が実体化した彼女たちもそれに頷き、その上でこちらに提案をしてきた。

「なので、私たちが消え去る前に何か一つだけ、あなたたちの願いを叶えたいと思うのですが」

「なんだと？」

「40人分の魔力です。かなりのことが叶えられますよ。自分だけの国？世界の王？最強の体？巨万の富？はたまた不老不死？そんなことでも今の私たちなら可能ですよ。ただ、皆様併せてお一つですが」

思いもかけない規模の大きい提案に、全員がざわつく。ただし叶えられる願いはたった一つ。

「……私、チューリップの「却下だ！」……ちょっと！せめて最後まで聞いてよ！」

「ランスが振り向くくらいバインボインにして貰えないかな……」

「んー、いきなり言われると浮かばないもんだな。ま、それで俺は充実してるって事かもしれないけどな」

「カスタムの町の復興資金をいただけないかしら……いや、それよりも復興自体をして貰った方が……」

「あの……ランス様とずっと一緒に……いえ、なんでもないです……」

「ラガールの居場所を……いえ、もう一度時空転移魔法を……」

「こら、それは駄目だって言っただろ」

口々に自分の願いを呟く一行。そのとき、マリアに突っ込んだ以外ほとんど黙っていたランスが動く。

「がーはっはっは！そんなもん聞くまでもなからう！これだけの美女がよりどりみどり！俺様の願いは…」

「あ、馬鹿！」

「ランス、抜け駆けは…」

「ハーレムだああ！41Pだあああ！！！」

そう言っ素早く全裸になったランスは少女たちに飛びかかり、行為を始めてしまう。

「ちよっ…ま、待つて。今のナシ！」

「申し訳ありません。既に行為に及んでしまっているので願いは確定してしまいました」

「ら、ランスの馬鹿あああああ！！！！！！！」

「あーん、ランス。私も混ぜてー！」

「やれやれ。ま、あいつらしいな。どれ、せっかくだし俺も混ぜてくるか」

「ランスさん…流石にその願いは…」

「ランス様…」

「あいつ、やっぱ殺した方が世のためなんじゃない？」

「人の身には過ぎたものだ。あんまりでかい願いを頼んだらバチが当たるってもんさ」

「それでもこの願いはないでしょうが！」

ランスの暴拳に呆れる面々。そんな中、ルークはあることに気がつく。そういえば40人分の魔力が実体化したと言っていた。見回すと、確かにマリアとラン、そして成長時のミルの姿をした全裸の魔力体がいる。どうやら本当らしい。そしてその奥、吸われたの

は微量の魔力であつたが、一応40人目とみなされたく、全裸の志津香の魔力体が立っていた。

「あ、見つけた」

「っ！見てんじゃないわよ！！！」

志津香の目つぶしがルークに炸裂する。ルークのうめき声と、ランスの笑い声が森に響くのだった。

第30話 英雄は遅れてやってくる（後書き）

「人物」

フィールの指輪の少女たち

フィールの指輪に閉じ込められていた魔力体が実体化したもの。正確には人間ではない。リーダー格の少女の名前はセシル。ランスと乱交をした後、消滅する。

「技」

回復の雨

光の雨を降らせて傷を癒す中級神魔法。神魔法の中ではヒーリングと並んで重宝される魔法。

白色破壊光線

白い光球から光の束が光線となって敵を飲み込む最上級魔法。黒色破壊光線には一歩及ぶが、一握りの天才にしか使うことの出来ない最強クラスの魔法である。

「装備品」

ドラゴン・スレイヤー

ランが装備していた剣。ドラゴン族に大ダメージを与えられるとされているが、そもそもドラゴン族と戦う機会なんてほばないため、効果は役に立たない。それ以外は普通の剣である。

「アイテム」

元気の薬

ミリの薬屋で売っている回復薬。効果は世色癌より上だが、小型の瓶に入った液体のため道具袋の場所を取り、世色癌ほど気軽には持ち歩けない。

第31話 再び太陽の下で

- カスタムの町 工事現場 -

事件が解決し、ルークとランスがカスタムの町を去ってから数日が経っていた。ラギンスが死んだことにより何の懸念もなくなった町には、元の平和が戻りつつある。今は少しでも早く町を復興しようと、住人全員が協力し合っている。

「うん、このペースなら当初の予定の一年じゃなくて、半年くらいで移住が完了できそうね」

「はい、これもマリアさんのお陰です。そろそろ昼の休憩時間ですのでこちらは任せて休んできてください。今日は単純作業が主ですので長めに行って貰って構いませんよ」

「じゃあ、お言葉に甘えてちょっと長めに貰いますね。それじゃあ後はお願いします」

地下から抜け出し、外で町再建の陣頭指揮を執るのはマリア。頭にヘルメットを被り、設計書を睨みながら指示を出していた。若いマリアが指揮を執ることに異論を挟む者は誰もいない。マリアの指示が的確なことも理由の一つだが、今カスタムは町が新しくなるに当たって若い者たちへの世代交代をしつつあったのだ。

- カスタムの町 町長の家 -

「お父様、こういった場合はどのように指示を出せば……」

「うむ、これは役所に先に許可を得る必要があるな」

町長の家では、チサが前町長である実父ガイゼルから町長の仕事を教わっていた。数日前、前町長ガイゼルが引退を表明。新しくチサがカスタムの町長になっていた。

「お父様…やはり私なんかよりも町長に向いた人がいらしたのでは？ランさんとか…」

「いや、私の仕事を一番近くで見てきたお前だ。これ以上の適任はいない。ランさんも確かに優秀だが、まだ贖罪の気持ちが強い彼女にこれ以上の重荷は背負わせられないさ」

娘可愛さでの指名ではなく、しっかりと考えての後任であった。住人もチサの優秀さは理解していたため、反発はなかった。

「でも、どうしてお父様はいきなり引退してしまったのですか？」

「うむ…ルーク殿やランス殿を見て感じてはいたのだが…これから時代が欲しているのは若い力だ。事件後に町の防衛軍を設立するべきだと私に進言し、その細部まで練られた構想を持ってきたお前を見て決心したのだよ」

「あれはマリアさんや志津香さんに協力していただいて…」

「うむ、町長一人で全てが出来ると思っていたらそれは思いうがりで。だからこそ彼女たちと協力し合って新しい町を造って欲しいんだ。そのためには若者同士の方がいいのだよ。頼んだぞ、チサ！」

「…はい！お父様のご期待に添えるよう、精一杯頑張りますね！」

「はい、お薬10GOLDね。ミルが塗ってあげようか？」
「ありがとう、ミルちゃん。店のお手伝いできて偉いねー」
「えへへ」

ヨークス姉妹が営む薬屋ではミルが一人店番をしていた。町の人に迷惑をかけてしまったことへの贖罪と、少しでも姉の役に立ちたいという思いから、9才にも関わらずミルはよく働いていた。その頑張る姿を見ている町の人々、特に年配者からミルは可愛がられていた。カラーン、と店の扉が開く。役所に行っていたミルが戻ってきたのだ。

「あ、おねえちゃんお帰りなさい」

「ただいま、ミル。すっかり店番出来たか？」

「うん、おねえちゃんも防衛軍の話し合い終わった？」

「まあな。有事の際の実戦部隊指揮を任せられた。それと、薬屋があるから不定期にだが訓練も見てやることになった。やれやれ、柄じゃないんだが…」

カスタムの町でも屈指の剣の使い手であるミリは、ランと共に有事の際は最前線で戦うこととなった。それだけならいいのだが、どうも人の上に立つというのは苦手らしく、ポリポリと頭を掻いた。

「頑張つてね、おねえちゃん」

「ま、やるだけやってみるかね…ゴホッ、ゴホッ…」

「あ、また咳してる。風邪だったらゆっくりしてなきゃ駄目だよ！」
「なに、大したことないさ。それよりも薬の配達のお使いに行つてきてくれないか？」

「はい。無理しちゃ駄目だよ、おねえちゃん」

配達の荷物を持って元気よく店を飛び出していくミル。その妹の背中を見送りながら、ミリはまた咳き込んでいた。

「ゴホッ、ゴホッ…うーん、あんま体調良くないな。一度ちゃんと見て貰った方がいいかもしれないな。今度セルのところにも寄ってみるか…」

・カスタムの町 酒場・

「いらっしやい。あら、珍しいですね、真知子さんがウチに寄るなんて」

「ふふ、たまにはね。あら？でも満員みたいね。やっぱりお昼時は混むのね」

「あ、真知子さーん。私のテーブル余裕あるんで一緒に食べませんか？」

「じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとう、トマトさん」

誘いに応じ、真知子はトマトと同じテーブル席に着く。エレナにへんでろばを注文し、既に食事をしているトマトとしばし談笑する。

「トマトさん、防衛軍に立候補したんですって？」

「そうなんですかー？」

「ふふ、貴方のことでしょう。その疑問系で話すキャラ付け、防衛軍として有事の際は場を混乱させるだけだから、今のうちに止めておいた方が良いわよ」

「でも私特徴ないんで、こうでもしないと印象に残らない気が…」

「ミミックをペットにしている時点で十分特徴的よ、あなたは。で、どうして防衛軍に立候補したの？」

「えへへ、冒険者になるのが私の夢なんです。なので、防衛軍で鍛えていただいて、いつか冒険に出たいなーと思っっているんですよ」
「ふふ、素敵な夢ね。それと、私も防衛軍に入ることになったからよろしくね」

「え？そうなんですかー？」

「前線ではなく、後ろで戦略を練る方だけだね。私のコンピュータが役に立つからってお願いって、マリアさんに誘われたの」

「はい、へんでろばお待たせ！」

エレナが出来たてのへんでろばを持ってくる。少し店が空いてきたようで、エレナがそのまま真知子とトマトの話に合流する。

「そういえば今日子さんは帰ってきたの？」

「まだよ。全く、バード君に失恋したくらいでしょうがない子ね。それより聞いたわよ。エレナさん、初恋の人が見つかって付き合っているんですって？おめでとう」

「あ、そうなんですかー。おめでとうございますー。」

「ありがとう、二人とも。偶然酒場に寄った人がそうだったの。今もうラブラブなんです」

「ふふ、先を越されちゃったわね」

へんでろばを食べながら意味深に笑う真知子。彼女の態度にエレナがピンと来る。

「あ、もしかして真知子さんも好きな人がいるのかしら？ひょっとして、この間カスタムを救ってくれた…」

「あ、わかりました！ランスさんですねー！」

「ふふ、残念ハズレ。もう一人の方よ。完全な片思いだけだね」

「おお、ルークさんか！というか、トマトさんはどうしてランスさんだと思ったのよ」

確かにランスもある種の魅力はあるが、普通に考えればルークの方である可能性が高いのに、なぜランスだと思ったのか疑問に思うエレナ。食後のお茶を飲みながらトマトがボソツと呟く。

「だって…そうじゃないと私と一緒になっちゃいますし…」

「へ？」

「あらあら、ライバルになっちゃったわね。他にも多そうだけれども」

- カスタムの町 役所 -

「くしゅんっ！」

「あら？風邪ですか？」

役所ではランがくしゅみをしていた。風邪ではないのでどこかで噂話でもされているのだろう。今は町の復興のために、リーザスからなんとか好条件で再建費用を借り入れられるよう頑張っていた。しかし、ルークに以前話したとおり、資金の借り入れは難航していた。

「ランさん、やっぱりリーザスからお金を借りるのは難しそうですか？」

「うん…こちらの望む金額だと中々条件が厳しくて…あんな条件飲んではしまったら、カスタムはリーザス領になってしまうのも同然なの…」

「難しいですね…ゼスの方からは借りられないんですか？」

「それも厳しいのよ…せつかくみんなが頑張ってくれているのに…」

お金がないんじゃない？」

その時、役所の扉が盛大に開かれる。見れば慌てた様子で役所職員
の亮子が立っていた。

「ラ、ランさん！大変です！！リーザスから書状が届いたんですが、
費用の援助をして貰えるそうです！！」

「えっ！？一体どうして！？」

ランが亮子の持ってきた書状を見る。中には亮子の言うように、
多少の利子はあるもののそれ以外はほぼ無条件で資金の提供をして
くれると書いてあり、リア王女の署名も付いていた。驚くほどの好
条件である。だが、つい先日までこちらの足下を見た条件を出して
きていたのに、いったい、と疑問に思うランだったが、ふとその書
状とは別にもう一枚封筒があることに気がついた。

「あ、そちらの手紙はランさん宛だったんで呼んでいません。そち
らもリーザスからです」

確かにエレノア・ラン宛と書いてある。封を開け、中の手紙を読
むラン。中にはほんの少しの言葉しか書いていなかったが、それを
読み終えたランの目からは、自然と涙が零れていた。

「ど、どうしたの、ランさん！」

「いえ、大丈夫です。……ありがとう、ルークさん」

ハラリ、と机の上に落ちた手紙を亮子が見る。そこにはこう書か
れていた。

・ルークと約束したから資金提供してあげる。ルークに感謝してお
きなさい。 リーザス国王女 リア・パラパラ・リーザス・

・リーザス国　王女の間・

「よろしかったのですか、リア様？」

「ん？どうしたの、マリス？」

昼食に好物のレアステーキを食べているリアに質問を投げかけるマリス。今この部屋にはリアとマリスとかなみしかない。となればそれ相応の密談だろう。

「リア様の指示通りカスタムに資金提供をすることにはなりましたが、本当にあのような条件で……」

「条件っていうのはルークも含んでってことよね？」

コクリ、と頷くマリス。思い出すのはカスタムを訪れた日のこと。酒場の二階でルークとリアの間で結ばれた密約。それはカスタムに資金援助をする代わりに、ルークが有事の際には他国よりもリーザスに優先して協力するというだけのものだった。

「リーザスに兵として来るのならまだしも、一冒険者でしかないルーク様が有事の際に協力したところでたかがしれています。それもあのような曖昧な約束では……」

「ああ、いいのよ、それで。そういう面には期待していないから」

「え、そうだったんですか？…あつ、失礼しました」

リアの返答が予想外だったかなみは思わず声を上げてしまう。主君の話に割って入ってしまう形になったため、すぐに謝罪をする。

「ふふ、かなみはルークに来て欲しいものね」

「……いえ、そういう訳では……」

「それで、期待していないというのは？」

マリアの問いに、スツと政治家の顔つきになるリア。

「元々カスタムとは大した条件を結ぶとは思っていなかったわ。あっちの担当のランとかいう女が結構曲者だったしね。だから最終的には適当な条件で折り合いを付けるつもりだったの。領地にしても反乱を起こしそうな町だったし、それ以外で絞り上げても復興中の町じゃ大して旨みもないしね」

「それならば、恩を売る形にしておく……」

「そういうこと。ルークに聞いたところ、優秀な技師がいて今後伸びる可能性がある町だとか言っていたしね。まあ、これはそんなに信用していないけど」

「なるほど。そのように元々適当なところで資金を出すつもりだったのに、ルーク様からわざわざ要請があったと」

「ラッキーだったわ。こちらとしては殆どノーリスクでルークにも恩を売れるんだからね」

「ですが、あの条件は少し緩いのでは？」

「本当ならもつと良い条件にしたかったんだけど、中々にあっちも狸だったからね。とりあえず恩を売る形にだけしておいたの。まっ、先行投資ね」

「一冒険者のルーク様に、恩を売るだけの価値があると……？」

最後のステーキ片を頬張りながら、リアが薄ら笑いを浮かべながら断言する。

「あるわ。ダーリンほどではないけどね」

「どうしてそのようにお考えで？」

「勘」

「……なるほど。ですが、私もその勘には同意しておきます」

「じゃあ、話はこれで終わりね。かなみ、食後のワインを持ってきた」

「リア様、午後の職務がありますので、ワインは……」

「えー、ステーキ後のワインはド・ハニーワって決めてるのにー」
「珍しく昼からステーキなんて食べるからですよ」

この時点で有事の際にはリーザスに協力するという約束に何の期待もしていないリア。しかし、これより六ヶ月後、彼女はこの条件を結んでいた幸運に感謝することになる。LP0002年4月、歴史に残る戦争、リーザス解放戦争の時に。

・アイスの町 キースギルド・

「がはははは、おら、さつさと金を払え！」

ランスはカスタムの町の事件の解決料を貰いにキースギルドを訪れていた。後ろにはシルが控えている。キースが耳を掻きながらイヤそうな声で答える。

「うるせーな。ほら、これが今回の解決料だ。あつちで色付けてくれたみたいで、ランスとルークにそれぞれ50000GOLDずつだよ。ルークはもう受け取っていつちまったぜ」

「カスタムの町も復興で大変ですのに…ガイズルさんに感謝しないといけませんね、ランス様」

「がはは。まあ俺様の活躍を考えれば当然だな！」

「キースさん、ルークさんはもう次の仕事に？」

「いや、仕事は受けてない。だけどゼスの知り合いに会いに行くって言つて、もう町にはいないぞ」

「やれやれ、忙しい奴だ。帰るぞシル。これでしばらく仕事はせんぞ！」

「はい、ランス様！」

「あつ、ちよつと待て、ランス！」

そう言つて金を受け取り部屋を出て行こうとするランスだが、キースに呼び止められる。

「なんだ？下らん用事だったら殺すぞ」

「いや、ルークには聞きそびれちまつたんだが、お前ら、一緒に仕事をしたのか？」

「まあ、そうだ。俺様の下僕として使つてやったわ！がはは！」

「以前の誘拐事件の時にも一緒に協力して解決したんですよ」

「……そうか、いやなんでもない。悪かったな、変なこと聞いて」

「ふん、下らん用事だったが、金も入って気分が良いから許してやる。がはははは！」

「あ、待つてください、ランス様！」

そう言い残し、部屋を出て行くランスの背中を見送った後、椅子に深く座り込んだキースが一人呟いていた。

「……まさか、あいつらがな。……ルークは知っているのか？」

葉巻に火を付ける。思い出すのはかつてのこと。ルークとランス、その二人の過去を思い出しながら煙を吐いた。

「これも運命なのかね……」

・カスタムの町 志津香の部屋・

「ほら、起きて志津香！」

「ん？ああ、マリア。おはよう……」

「おはようって…もう昼過ぎよ、全く。」

昼の休憩を長めに貰ったマリアは、志津香の部屋を覗きに来ていた。そこには寝ぼけ眼の親友がいた。どうやらこの時間まで寝ていたらしい。

「昨日ちよつと遅くまで調べ物しててね……」

「もう。3時からランと防衛軍のことで話し合いがあるんですよ」

「んー…明日じゃ駄目かな？」

「駄目に決まってるでしょ。ほらほら、起きた、起きた！」

「あんた年々おばさんくさくなっていくわね」

「もう！怒るわよ！」

志津香を布団から無理矢理引っぺがす。観念して起き出した志津香は、マリアが持ってきたお弁当と一緒に取ることにする。

「おいもの塩、きいてないわ。もう少し濃い方がいいな」

「だめよ、体に悪い。志津香、放っておくと気分次第で何も食べなかったりするんだから」

「別にいいじゃない」

「もう…お料理作ったら、志津香の方が上手なのに…」

「気が乗らなきゃ作る気にならないのよね…」

「で、作るのは栄養バランス考えてない自分の好物だけなんだもん」

文句を言い合う二人だが、それも親友だからこそだろう。マリアが数日前の事を思い出しながら話題を変える。

「色々あったね…」

「…そうね」

「本当に、ランスとルークさんがいなかったらどうなっていたか」

「ま、感謝はしてるわ。一応ね」

「私たちを助けてくれた。ラギシスも倒した。町に太陽を取り戻してくれた。…ランスがしょっちゅう自分のことを英雄だと言ってんだけど、ランスとルークさん、本当に英雄だったにして」

「…少なくともランスは違うでしょ。ごちそうさま」

そう言つて弁当箱を片付け始める志津香。そんな親友に、マリアはしたり顔で尋ねる。

「あら？じゃあルークさんは英雄かもって思ってるってこと？」

「………言葉のあやよ。…なにその顔、ふん！」

「い、いたふい…はなひて…」

なんだかむかつく顔をしていた親友の頬を引っ張る志津香。最初こそ真剣な顔をしていたが、段々と笑いが堪えられなくなる。

「ふふ、おかしい顔してるわよ、マリア」

「もう。…あ、そろそろ休憩終わるから行くね。志津香もちゃんと役所にいくのよ！」

「はい、はい」

志津香の家を出たマリアは工事現場に向かって歩き出す。親友のことを思いながら、素直じゃないんだから、と思っていた。マリアは知っている。机の中にペペさんが渡してくれた集合写真を志津香

が大事に仕舞っていることを。あまりそういうのには無頓着で、昔カスタムの人たちで撮った写真なんかは適当にほん投げであつたのに、なぜその写真は大事に取つてあるのか。そんな理由は一つしかない。カスタムの人以外で大事な人が写っているのだ、とマリアは考えていた。

「さて、この写真どう処分しようかしらね」

マリアは知らない。集合写真を仕舞っている場所よりも更に奥、わざわざ魔法で結界までした封筒の中に入っているもう一枚の写真を。ペペがルークに渡す前にネガを処分したので、既にこの世に一枚しか存在しない写真。ルークと、ルークに酔っ払つて抱きつく志津香のツーショット写真。処分したのであればさつさと炎の矢でも燃やしてしまえばいいのに、なぜか未だに処分を先送りしている。その真意は志津香しか知らない。

「うわっ、眩しい。やっぱり太陽って良いわね！」

地下から外へ戻ったマリアは、太陽の明るさに目を眩ませながらも、嬉しそうにしていた。みんなで協力して町に取り戻した太陽。その太陽の下、午後の仕事に一層気合いを入れるマリアだった。

その後、カスタムの町は諸国も目を見張るほどの速さで復興を遂げただけでなく、大陸随一の技術を持った都市としてその名を轟かせる。それらを成し遂げたのは、前町長ガイゼルの見越したとおり、新世代の若者たちであつた。

第31話 再び太陽の下で（後書き）

「料理／食材」

ド・ハニーワ

リアが好んで飲むワイン。食後、特にステーキの後は必ずこのワインを飲む。

「都市」

カスタムの町

自由都市。一度地下に沈んでしまっただ、その後驚くべき速さで実に見事な復興を遂げる。近年ではその高い技術力から諸国の注目を集めている。

第32話 炎の色男

LP0001 11月

-ゼス サバサバ-

ゼス北部に位置し、キナニ砂漠に面した都市、サバサバ。その位置関係からゼスの田舎とも呼ばれているが、町を歩いていた一人の男が呟く。

「これで田舎ならアイスは何世代も前の町だな…」

そう呟いたのはルーク。立ち並ぶ様々な店の数、洋服屋だけでここまで何件見たことか。飲食店も多い。小さな町では酒場しか食事場所がないところもあるというのに。ふう、とため息を付きながら、待ち合わせ場所であるオープンカフェを目指す。ルークはある人物と会うためこの町に来たのだ。目的地のカフェが見えてくると、外に置いてあるテーブル席から赤い髪の方が手を振ってくる。

「おう、ここだ、ここだ！」

「待たせちまったかな？」

「なーに、俺も今来たところさ。…こういうセリフは女の子だけに使いたいもんなんだがね」

「相変わらずだな、サイアス」

軽口を叩き合いながら席に着くルーク。目の前の男の名前はサイアス・クラウン。ゼスの軍に所属する魔法使いである。ルークとはもう10年以上の付き合いになる。

「聞いたぞ、四將軍に抜擢されたってな。兵になってからだった一

年でそこまでいくとはな…」

「国王が変わってから実力主義に変わってきているからな。ま、俺の実力なら当然の抜擢ってとこだ」

一月前、サイアスは炎の魔法団団長に抜擢され、四將軍となっていた。魔法兵になってから一年での異例の出世である。サイアスが軍に入ったのは24才の時。これはかなり遅い年齢である。というのもクラウン家はゼスでも高貴な家柄で、軍に入るのを周りがよしとせず、妨害工作をされていたのだ。国王が変わり、制度が変わってようやく軍に入ることが出来たサイアスは、その頭角をメキメキと現したのだ。

「ふ、ただの学生だったお前がね。感慨深いものがあるよ」

「同じ年なのに感慨深くなってるじゃねーよ」

サイアスがルークと出会ったのは12年前の学生時代、その日はギルド仕事で学校に何人かの冒険者がやってきていた。近くに巣を作ってしまったモンスターを何とかして欲しいという依頼であったが、突如そのモンスターが学校を襲ったのだ。学生であったサイアスも駆り出され、モンスターの対処に当たる。冒険者は大して役に立たず、ほとんどの教師も実戦経験はほとんど無いらしく、狼狽えてばかりであった。まともに戦えていたのはサイアスと臨時講師として偶然居合わせた雷帝力バツハーン、そして自分と同じ年くらいの冒険者の三人だけであった。それが、ルーク。この事件を期に互いに興味を持ち合い、有事の際には互いに協力し合う関係となる。

「ご注文のぴんぐうにゅーん、お待たせしました」

「お、ありがとう」

「この寒いのにそんなにキンキンに冷やしたのを飲むのか」

「いいんだよ。普段から炎ばっかり使ってるから、体を冷やさない

とな」

「……………」

「……お前は何飲む？」

「……そうだな、エスプレッソのダブルで」

「……………」

「だとさ。持ってきてくれるか」

「かしこまりました」

店に来たばかりのルークに注文を聞こうともしない店員。サイアスが気を効かせて注文を頼んでくれる。

「……悪いな」

「なに、もう慣れたさ。……だが、この国は相変わらずか？」

「まあな。3年前、新国王にガンジー様が即位してから色々が変わっては来ているが…膿がでかすぎる」

「親戚もそうだったっけか」

「金融長官のズルキな。ま、わかりやすい膿だ。が、でかすぎて取り除けない」

「難儀なもんだな。それにしても、サバサバがゼスの田舎ってのは誰が呼び出したんだ？」

「田舎さ。呼び出した奴らの言うところの、ゼスの都市の中ではな」

「……なるほど、そういうことか」

これこそがゼスに古くから蔓延る思想、魔法使い絶対主義。魔法使いにあらざれば人にあらざという考えで、魔法を使えない者は2級市民とされ奴隷のような扱いを受けることになる。こういった2級市民の暮らす町も多くあるのだが、サバサバを田舎と言いだした連中はそういった市民が暮らす町を、町として認めていないのだろう。

「で、俺を呼び出したのはどういった要件だ？」

「二つ頼みがあってな。小さい方から片付けるか。一人写真家を紹介するから、実力を見て貰えるよう便宜を図って貰いたい」

「珍しいな、そんな頼み事をしてくるなんて」

「なに、実力が伴わなければ仕事を回す必要はない。あくまで機会を与えて欲しいんだ」

「了解、そのくらいならおやすいご用だ。名前は？」

「ペペ・ウィジーマ。これが連絡先だ」

「女か！？なんだ、なんだ。遂にお前にも春が来たのか？」

大げさに身を乗り出してくるサイアス。それを片手で制止するルーク。

「違う、違う。最近受けた仕事で知り合っただけさ。色々あって、交換条件で受けちゃったんだ」

「なんだ、つまらん。お前はもつとがつつかなきゃ駄目だ」

「お前ががつつきすぎなんだよ」

「エスプレッソお待たせしました」

注文していたエスプレッソが持つてこられる。サイアスの注文は目の前に置いていたのに、ルークの注文はテーブルの端に置いて店員はさっさと立ち去ってしまう。ゼスに来るたびにこういった仕打ちを受け気味なので、もう慣れたものだ。エスプレッソを目の前に寄せ、一口飲んだところでサイアスが話を続けた。

「で、二つ目の要件は？」

「……人を捜している。名前はラガール。中年の男魔法使いだ」

「ラガール……二年前に四天王に就任した奴と名前が一緒だな」

「本当か！？」

「が、そいつは中年の男じゃない。若い女だ。名前はナギ・ス・ラガール」

「……そいつに近親者はいるか？」

「さあな。いないってことはないだろうが、そもそもナギ自身、ほとんど公の場に姿を現さないからな。お陰で口説けやしない」

「……相手は四天王。先走りすぎるのも危険か……もし人違いなら取り返しがつかんしな……」

「……訳ありか？ 必要なら情報を集めるが？」

サイアスの目が若干真剣味を増す。普段の軽い印象とは違つ、真面目な表情。ルークの様子から、ペペの件とは違つて重要な件だと察したらしい。流石は四將軍と言つたところか。

「こちらとしてはありがたいが……ばれたらお前も危ないんじゃないのか？」

「なに、危なくなつたらナギを口説こうと思つてたから調べてましたつて言えば、俺なら逃げられるさ。だが、さっきも言つたように中々公の場に出てこない相手なんでな、時間は掛かると思うぞ」

「いや、どれだけ時間が掛かっても構わない。手がかりもない状況だからな、わずかな情報でも欲しいんだ。スマン、恩に着る」

「なに、いいつてことよ。その代わりと言つちゃあなんだが、この後仕事を手伝つてくれないか？」

「仕事？」

「最近、キナニ砂漠に不気味な塔が突如として現れたんみたいでな。その塔から新月の日に盗賊団が出てきて、近くの町から少女を攫っているらしい。その調査を千鶴子様から頼まれたんだ」

「なるほど、それで待ち合わせ場所をキナニ砂漠に近いサバサバにしたのか。いいぜ、丁度抱えていた仕事も終わつたところだしな」

「そういうこと。話が早くて助かるよ」

そう言つて、残っていたぴんぐうにゆーんを飲み干すサイアス。依頼を受けたルークだが、気になるところがありサイアスに尋ねる。

「ゼスの軍は動かないのか？」

「被害を受けてるのが自由都市なんだな。軍を大々的に動かすと周りを刺激しちまうのさ。で、少数精鋭って事で俺が頼まれたわけ。一応冒険者を何人が雇うのは許可されてるんだが、あまり多くても邪魔なんだな。安心しな、依頼料はしっかりゼスから払われるからよ」

「こっちの頼みも聞いて貰ったんだし、別にいいんだがな……」

「相変わらずか。前から言ってるが、お前は金に無頓着すぎる。いつか痛い目見るぞ」

「こればかりは性分だな……一応心に留めておくよ」

「その言葉聞き飽きたぞ……」

ルークの相変わらずな態度に呆れるサイアス。そんなものかね、と思いながらルークもエスプレッソを飲み干す。

「ってことは、俺とお前の二人だけか？」

「いや、もう一人上層部曰く有望な若手が一緒さ。ま、ガチガチな人物だな。お、来たみたいだ」

サイアスが誰かを捜している様子の少女に向かって手を上げ合図をする。どうやら気を利かせてルークとの話が終わりそうな頃合いを見計らって、待ち合わせ時間をずらしていたらしい。出来る男である。手を上げているサイアスに気がついた少女がこちらに寄ってくる。髪の色は茶、ショートヘアーで、左右を黄色いリボンで止めている。隣に二体の指揮ウォール・ガイを連れている。

「ゼス治安部隊副隊長、キューティ・バンド。ここに。お待ちせしめてしまつて申し訳ありません、サイアス様。今回の抜擢に深く感謝すると共に、粉骨碎身……」

「堅いのはいいさ。ま、よろしく頼むよ」

そう言っただけで長くなりそうなキューティの話の話を切るサイアス。サイアスに敬礼をした後、ルークの方に侮蔑の視線を送るキューティ。そのままサイアスに進言する。

「サイアス様。このような魔法使いでもない冒険者がおらずとも、私が前線もこなせますので大丈夫です！」

「なるほど、ガチガチだ」

「だろ？」

「？」

先ほどのサイアスの言葉を思い出して失笑するルーク。サイアスもそれに答え、何のことだか判っていないキューティは不思議そうにサイアスを見ていた。

「じゃ、そろそろ行くか。お姉さん、領収書を頂けるかな。宛名は王者の塔で」

「まめだな」

「サイアス様の行動は当然のことです。これだから定職と呼べるものについていない下品な冒険者は……」

後ろでぶつぶつ言っているキューティ。完全に魔法使い絶対主義思想に染まっている。あまり気にしないことにしたルークは、領収書を受け取って席を立つサイアスの後を歩きながら、今回の仕事について問いを投げる。

「で、盗賊団の情報とかはあるのか？」

「名前がグリーンスコルピオンってことしか判っていない。ま、町に着いたら情報を貰える手はずになっているから、そこで聞くこと

にしよう」

「突如として現れた不気味な塔……やはり魔法使いの仕業でしょうか？」

キューティがルークに見向きもせずサイアスに問いかける。

「さて、どうだろうな。………そういえば、その塔だが町の人たちはおかしな呼び方をしているらしいぞ」

「おかしな呼び方？」

「ああ、どうも形状が人の形に似てるとかで付いた呼び名らしい。その名も……」

先を歩いていたサイアスが、振り返りルークとキューティを見る。フツ、と少しだけ笑い、町の人たちが呼んでいる塔の通称を口にした。

「砂漠のガーディアン」

第32話 炎の色男（後書き）

「人物」

サイアス・クラウン

LV 34 / 41

技能 魔法LV2

ゼス四將軍の一人にして炎の魔法団団長。高貴な家柄であるため、周りには軍に入ることを見越され、自らの意志で入隊。わずか一年で四將軍へと上り詰めた実力者。趣味はナンパという軽い性格ではあるが、公私はきっちりとしており、目上に対する礼儀もなっているため、上層部からの覚えも良い。ルークとは古い付き合いである。

キューティ・バンド

LV 17 / 28

技能 魔法LV1

ゼス治安部隊副隊長。若いながらに優秀な人材で、今回の抜擢は隊長への昇進も見越し、実戦経験を積ませる意味合いが強い。幼い頃からそう教えられてきたため、ガチガチの魔法使い絶対主義思想家。攻撃魔法よりも支援魔法を得意としている。その真面目一辺倒な性格から友人、恋人はおらず、話し相手は側に控えた二体の指揮ウォール・ガイだけ。

「モンスター」

ウォール・ガイ

ゼス国内で魔法詠唱の間の壁として重宝される生成生物。壁としてだけでなく、雷での攻撃も可能。指揮ウォール・ガイは隊長、副隊長といった一部のものにしか与えられない名誉あるウォール・ガイ

イである。

「料理／食材」

ぴんくうにゅーん

キンキンに冷やすと最高に美味いとされる飲み物。ランスも好んで飲む一品。

エスプレッソ

世界的に飲まれているが、特にゼスのイタリア周辺でよく飲まれているコーヒー。ゼス四天王、山田千鶴子の好物でもある。

「その他」

ゼス四天王

ゼス王国において国王の次に地位の高い四人のこと。国政と四天王の塔の管理が主な役割。かつては名門貴族による世襲制であったが、近年、実力主義制に改められた。

ゼス四將軍

ゼスが誇る魔法部隊、炎軍、氷軍、雷軍、光軍を束ねる四人の団長のこと。政治絡みの四天王と違い、以前より実力主義で選抜されていた。

第33話 グリーンスコルピオン

・ジウの町・

キナニ砂漠南東部に位置する町、ジウ。本来なら専用の砂漠案内人無しに入るのは自殺行為と呼ばれているキナニ砂漠だが、ジウの町は砂漠の中でも本当に端に位置しているため、比較的簡単に立ち寄ることが出来るのだ。これが砂漠の中央に位置するシャングリラに行こうともなれば話は別だが。

「依頼のあった町がジウで良かったよ。シャングリラだったらこの依頼、断っているところだったよ」

「無責任な。これだから魔法使いじゃな……」

「ああ、俺もだ。ん？何か言ったか、キューティ？」

「……いえ、何も言っておりません、サイアス様」

ルークに苦言を呈そうとしたキューティであったが、予想外にもサイアスがルークに乗ったため、何も言えず押し黙る。これから一緒に依頼を受ける仲間だ、少しは仲良くなっておこうとルークがキューティに話しかける。

「ところで、俺は君を何と呼べばいいかな？」

「別に呼ばなくて結構です」

「キューティ、ルークはこれから一緒に戦う仲間だ。仲良くやれ」

「……はっ、サイアス様がそう言うのであれば、善処します。私のことは好きに呼んでください」

「ではキューティと呼ばせて貰おうかな。うん、良い名前だ」

「……馴れ馴れしくしないでください」

「さて、町の案内人が来ているはずなんだが……」

ジウの町に入っすぐの広場に辿り着いたサイアスは、辺りを見回す。すると、執事服を着た老人がこちらに近寄ってくる。

「貴方様がサイアス様で？」

「ああ、案内人ですか？」

「ようこそわざわざお越しくさいました。主人がお待ちですので、どうぞこちらへ」

そう言っこちらの手荷物を受け取り、前を歩き出す老執事。ルークたちはその後を付いて歩きながら、ジウの町を見回す。発展した町とは呼べないが、町のそこらかしこに行商人があり、活気に溢れた町だ。

「文化の遅れた国ですね」

「そうか？活気に溢れる良い町じゃないか」

「我がゼスは貴方の住んでいるところとは生活水準が違いますからね」

「まあ、生活水準は高いのは事実だな。ごく一部の話だが」

ふふん、とルークに自慢げに語るキューティの横からサイアスが一言加える。確かに魔法使いが生活する場所だけを見れば、資源豊かなリーザスよりもその生活水準はかなり上、世界でも屈指と言っているものだろう。その反面、2級市民の生活は悲惨極まりないのである。

「サイアス様まで…より優秀な者が良い暮らしをするのは当然のことではないですか」

「優秀ねえ……」

「魔法が使えるか使えないか。ただそれだけのことなんだがね……」

「それが大事なのです！魔法使いこそが人の上に立つべきなのです！！」

そう熱弁するキューティの前、道案内をしている老執事の表情が若干影を落とす。ジウの町はゼスに近いこともあり、こういった思想の輩が町を訪れることも多い。彼のように年を重ねている者は、それだけ嫌な思い出も多いのだろう。ルークは老人に聞こえないように、キューティに小声で忠告する。

「キューティ、そういった思想を持つのは良いが、ゼス国内を出たらもう少し自重すべきだ。前の老人がいい顔をしていない。それに、変な恨みを買って自分の身を危険にさらすかもしれないぞ……」

「……余計なお世話です」

「さあ、着きました」

町の中央部に位置する一際大きな屋敷。ここにこの町を治めている長であり、今回の調査に当たって協力を申し出てくれた人がいる。執事に誘われるまま、屋敷に入っていく三人。長の部屋の前までやってきて扉を開けると、部屋の中には褐色の肌をした黒髪の美女がいた。

「ようこそ、サイアス様とお連れ様。私がこの町の長を務めます、アニーでございます」

「ほう、貴方の様な美人が長まで勤めるとは。才色兼備であらせられるようですね」

「まあ、お上手ですこと」

顔を見るや否やいきなり口説き文句を言う辺り、相変わらずだなと内心呆れるルーク。まあ、いきなりやらせるとか言いそんな人物も知ってはいるが。

「貴女を口説くのはまた後ほど、仕事が終わってからにするとして、グリーンスコルピオンについてお聞かせ願ってもよろしいかな？」
「三ヶ月前、突如として現れたグリーンスコルピオンという盗賊団によって、この三ヶ月で20人も少女が連れ去られました」
「20人も！？何も対策はしなかったのですか？」

同じ女性であるキューティが食いつく。アニーは目を閉じ、首を横に振りながら答えた。

「この町は元々殆ど武力を持っていません。なんとか寄せ集めの戦力で自警団を作り立ち向かいました。まるで歯が立たず、既に何人もの死傷者が出ています。グリーンスコルピオンについて判っているのは、首領が女性であるということだけです…」

「女性が…男なら少女を攫う理由も判るというものだが…」

想像してしまったのか、キューティの顔が曇る。攫われた少女を心配している様子だ。魔法使い至上主義ではあるが、その辺りの線引きは出来ている辺りまだまともな方である。思想が酷いことになる、魔法使いでない者が死のうが生きようがどうでもいいとか言い始める有様だからだ。

「サイアス、最近少女が裏で頻繁に売られているという情報は？」
「一応少女が攫われているって事は聞いていたから来る前に調べてきたが、特にはなかったな」
「となると別の理由か……」

ふとルークの頭に志津香の顔が浮かぶ。そういえばカスタムの町の事件と同じ展開だ。

「少女の生気を使って魔力を溜めている、という可能性は？」

「なるほど、禁呪か！有り得るぞ！」

「そんな手段があるんですか！？」

サイアスが同意し、キューティが驚く。どうやら志津香も使っていたこの方法は、その非人道的な行いから魔法使いの間では禁呪とされており、ゼス国内で行おうものなら厳しく罰せられるものらしい。若い世代では知らない者も多いらしく、キューティが驚くのも無理はない。

「となると女首領、あるいはそれ以外に魔法使いが関わっている可能性が高いな」

「そのような悪党、魔法使いの恥です！必ず捕まえましょう！！」

ぐつと拳を握りしめて宣言するキューティ。その様子を見ながら、ルークはキューティの評価を改めていた。なんだ、全然良い子じゃないか、と。すると、長であるアニーが物騒な事を言い出す。

「女首領だけは、捕らえるのではなく必ず殺してください！」

「……必ず殺せとは物騒ですね。あまり美人が口にしていい言葉ではない。訳を聞かせて貰ってもよろしいかな？」

「人々を多数殺害した首謀者として、どうしても許しておくことが出来ないのです！塔に攫われた少女たちも心配です。お願いします！」

アニーの瞳は真剣そのもの。しかし、若干ではあるが思い詰めたような表情をしているのをルークは見逃さなかった。町の長としてどうしてもその女首領が許せないのだろうか。あるいは…と、ルークが考える。サイアスも若干思うところがあったようだが、キューティが力強く答える。

「任せてください。こちらのサイアス様はゼスでも屈指の炎の魔法使い、そのような田舎盗賊、パパパツと打ちのめしてみましよう！」
「ま、大船に乗ったつもりでいてください、アニーさん」

- ジウの町 酒場 -

アニーとの会合を終え、情報収集も兼ねて酒場で夕食を取る三人入る前はこんな下品な場所で、とか文句を言っていたキューティだが、こういった場所にはあまり訪れたことがないようで、興味深げにチラチラと店の中を見回している。

「君を注文したいって言ったら卵の黄身が出てきたんだが……」
「下らない注文しているからだ。キューティももつとなじって良いんだぞ」

「いえ、私などが四將軍のサイアス様を非難するなど……」
「つまり、四將軍じゃなかったらとつくに非難の嵐って事か？」
「い、いえ、サイアス様。そういうわけではっ！」

真剣に焦り出すキューティを見て、同時に吹き出すルークとサイアス。からかわれていたことが判り、キューティが顔を真っ赤にする。

「か、からかったんですか!？」
「ま、これで多少肩の力は抜けたかな?盗賊団と対峙する前からそれじゃあ疲れちまうぞ」

「……お気遣いありがとうございます」

納得いかない様子ではあるが、サイアスに強く言うことが出来ず、渋々引き下がりながらキツとルークの方を睨むキューティ。そこに酒場のマスターであるハニーがやってくる。

「お待たせしました。私、この酒場のマスターの飯田橋と申します。お聞きしたいことと言うのは？」

「グリーンスコルピオンについて、知っていることを聞かせて貰いたい」

「盗賊団ですか。私が知っていることと言えば、新月の夜にどこからともなく現れ、少女を攫っていくということしか…初めは皆感謝したので…」

「感謝？盗賊団にか？」

「はい。グリーンスコルピオンが町を初めて襲った際は少女の誘拐はせず、やったことは町のならず者を血祭りに上げたことだけでした。町の者は皆そいつらに困っていたので…魔法使いだからといって町の人たちに乱暴に振る舞うそいつらに…」

「…魔法使い、だつたんですか…」

キューティが尋ねる。体ごとコクリと頷く飯田橋ハニー。先ほどから立て続けに魔法使いの悪行を聞いて、少し気分が落ちている様子のキューティ。最初の事件の話に少し思うところがあったルークは、飯田橋に問いかける。

「……そのならず者、町の長であるアニーさんと何か問題を起こした事はあるかな？」

「ちよつと、何を訳の分からない事を…」知っていらしたのですか！」「…！？」

キューティがルークに苦言を呈そうとするが、飯田橋の大声に遮られる。

「いや、ただの勘さ。…何があつたんだ？」

「あまり言いふらして良いような事ではないのでここだけの話にしてください。……アニー様は以前、そのならず者たちに白昼堂々乱暴をされた事があります。その場に居合わせた町の者たちも、ならず者を恐れ見て見ぬ振りを…」

「そんな…酷い…」

「…確かに言いふらすようなことではないな。言いづらいことを言わせてしまつてすまない。さ、そろそろ店を出て宿に向かうか」

そう言つて領収書を貰い、店を出て行くサイアス。ルークとキューティもその後続く。月が出ていない夜の中、宿を目指し歩く三人。

「ま、ある程度は見えてきたかな」

「そうだな…気が重いな」

「どういうことですか？お二人は事件の真相が分かつたんですか？」

ルークとサイアスが話している内容が気に掛かり、キューティが尋ねてくる。

「ああ、女の生氣を集めて何をする気かまではわからないが、女首領の目星は付いた」

「本当ですか！？」

「十中八九、アニーさんだ」

・ジウの町 アニーの屋敷・

「……もう間もなくね、今晚にでも全てが終わるわ……全てがね……」

長であるアニーが小さく呟き、夜更けに屋敷を出て行こうとする。が、屋敷の入り口に気配を感じ、様子を窺う。見れば先ほど屋敷を訪れたキューティとかいう小娘が屋敷の中を窺うように立っていた。アニーは屋敷の中に引き返し、使用人用の出入り口である裏口から屋敷を抜け出すことにする。

「はあ……見張りまでして、本当にアニーさんが犯人なのかしら……あなたたちもそう思うでしょ？」

そう呟くのはアニーの屋敷を見張っているキューティ。隣に控える二体の指揮ウォール・ガイに話しかける。こくこく、と頷く指揮ウォール・ガイに満足そうにするキューティ。端から見れば中々に悲しい光景だ。先ほどの会話を思い出す。

「アニーさんが！？そんな！？まさか、ならず者を殺したからというだけの根拠で？」

「いや、それだけじゃない。砂漠の塔の事はまだ内密でな。その塔から盗賊団が出てきているっていうのはゼスが掴んだ情報で、まだあまり知られていないんだ。先ほどの飯田橋マスターも、どこからともなく盗賊団が現れてと言っていたしな」

「アニーさんも突如として現れたと言っていましたか？」

「ああ、初めの内はな。だが、こうも言った。塔に攫われた少女たちが心配だな」

ルークがアニーとの会話を思い出しながらキューティに説明をする。それに続けるようにサイアスも補足をする。

「それに、多少だが残留魔力を感じた。アニーさんは魔法使いでもないのに……だ」

「俺は血の臭いも微かにだが感じたな」

そう平然と話すルークとサイアス。キューティは驚く。これら全て、自分は全く気がつけなかったからだ。

「という訳で、アニーさんの屋敷を見張っていてくれるかな。危険な事はしなくていい」

「え？私ですか？サイアス様たちはどうされるんですか？」

ピ、と空を指さすサイアス。上を見上げるキューティ。雲一つ無い夜空だが、月が出ていないため暗い。あ、と気がつくキューティ。

「盗賊団が来るのは新月の夜だからな、ルークと一緒にそちらに備えておくさ」

こうしてキューティはアニーの屋敷を見張っているのである。

「見張りなら、私じゃなくてあのルークとかいう冒険者にやらせればいいのに……そう思うでしょ？」

指揮ウォール・ガイにそう問いかけるキューティだったが、問いかけながらルークのことを考える。あの冒険者は、魔法使いでも無いのに自分の知らないような禁呪の事を知っていた。それがキューティには悔しかった。でも実力ならあんな冒険者には負けない。私は治安部隊副隊長なのだ。そう強く思っていたとき、カンカンと町の鐘が鳴る。見れば、町の入り口の方から火の手が上がっている。

キューティは急いでアニーの屋敷に入る。執事が驚いていたが、緊急事態だからと言ってアニーの部屋まで走る。扉を開けると中はもぬけの殻であった。執事も屋敷の中を捜してくれたようだが、姿が見えなかったようだ。

「逃げられた…やっぱアニーさんが…？」

・ジウの町 広場・

町の広場まで鳥のような生物に乗った盗賊団が侵入する。先頭を走るのは女首領。その後ろを何十人もの盗賊がついてきていた。しかし、おかしい。夜更けとはいえここまで誰とも出会わない。こんなことは初めてだ。

「人がいないのが不思議かな？女首領さん？」

「！？」

広場には二人の男が立っていた。黒髪の剣士と赤髪の魔法使い。ルークとサイアスだ。

「町の人には避難して貰った。そう何度も決まって新月の夜に襲ってたんじゃ、遅かれ早かれそうだったさ」

「サイアス、顔が判るか？」

「いや、覆面でよく判らないな…スタイルはよく似ているが…」

女首領は顔を覆面で隠しており、一目ではアニーかどうかの判別が付けられなかった。盗賊団が跨がっている鳥のような生物に注目するルーク。

「初めて見るな…あれはなんだ？」

「俺も初めて見る。JAPANに生息するてばさきとかいうのによく似ているが…少し違うな」

「サイアス様！申し訳ありません、アニーさんの姿が見えなくなりました！！」

広場にキューティが走ってやってくる。その報告を受け、サイアスが女首領に向かって問いかける。

「ってことは、アニーさんで間違いないかな？」

「……やれ！」

サイアスの言葉に応えず、後ろに控えた盗賊たちに指示を出す女首領。てばさきのような生物に乗った甲冑の盗賊団が猛スピードで三人に迫る。

「聞く耳もたずか…」

「それじゃ、いっちょ暴れさせて貰うとするかね。火爆破！」

サイアスが魔法を放つ。五人もの盗賊がまとめて炎に包まれる。左右から炎を避けた盗賊が迫ってくるが、すぐさま飛んできた斬激を受け鳥のような生物から振り落とされる。

「真空斬」

「相変わらず使い勝手良いな、その技。火爆破！」

「真空斬！まあな、重宝しているよ。真空斬！」

軽口を叩き合いながらも次々と盗賊を撃破していく二人。二人に襲いかかるのは得策ではないと思った盗賊の一人が、キューティの

方に迫っていった。

「!? 雷の矢!」

慌てて雷の矢を放つが、盗賊が乗っている生物は意外にすばしっこく、避けられてしまう。そのままキューティに襲いかかる盗賊。迫ってきた剣に思わず目を瞑るキューティだが、その剣がキューティに届くことはなかった。恐る恐る目を開くと、ルークがキューティを左手に抱きかかえ、盗賊を剣で斬り伏せていた。

「うお、ウォール・ガイがいるから助けて貰わなくても平気です!」

「それは悪いことをしたかな?」

「……………一応、ありがとうございます」

キューティの礼を受けたルークだが、直接斬った際に違和感を覚え、今斬ったばかりの盗賊を見る。先ほどまでは確かに人間に見えたが、今は中身のない鎧だけになっていた。

「なんだこれは、サイアス!」

「ああ、こちらも今確認した。こいつら人間じゃない、魔法で操られた鎧だ!」

「そんな、こんなに精巧なものが可能なんですか!」

キューティが叫ぶのも無理はない。ガーディアンを作り出す魔法使いも多く存在するが、ここまで人間と同じ姿をし、命令にも忠実な知恵をもったものを作り出すなど聞いたことがない。サイアスが呟く。

「……………こんなもの、人間業ではないぞ」

ルークも気を引き締め直す。どうやら、想像以上に厄介な依頼のようだ。三人は気がつかなかった。鎧の裏に小さく書かれた文字に、メイクドラマ3号と書かれたその文字は、一際不穏な空気を纏っていた。

第33話 グリーンスコルピオン（後書き）

「人物」

飯田橋

ジウの町で酒場を営むマスターハニー。酒場を営むハニーは意外に多く、カスタムの町の酒場のマスターもハニーである。

「その他」

グリーンスコルピオン

三ヶ月前に突如として現れた砂漠の盗賊。女首領以外は人間ではなく、魔法で動く鎧である。とても人間業とは思えない魔法である。

第34話　ただ、助けたい

・ジウの町　広場・

「真空斬！」

「火爆破！」

ルークとサイアスの声が響き、広場に鎧の山が出来る。数十人はいた盗賊団の内、既に半数以上が敗れ、中身のない鎧へと姿を変えていた。

「流石サイアス様だわ。でも、あの冒険者がこんなに強いなんて…雷の矢！」

範囲攻撃を持たないはずのルークが、サイアスとほぼ同数の盗賊を倒している事実にはキューティは驚く。それを隙と見たのか、一人の盗賊が近寄ってくるが、今度は確実に雷の矢で撃退する。

「お見事」

「馬鹿にしないでください。さっきはちょっと油断しただけです！」

ルークの言葉に反論するキューティ。今のキューティの攻撃で盗賊団の数は遂に一桁となっていた。すると、分が悪いと見たのか盗賊団が撤退し始める。

「あ、逃げていきます！」

「追うぞ！塔の場所は判っている」

そう言つて、倒した盗賊が乗つていたてばさきのような生物に飛び乗るルークとサイアス。命のない鎧が乗れていただけあり、その操縦は難しくなさそうだ。サイアスが先に駆けていき、ルークもそれに続くこうとするが、ふと見るとキューティがどうしたものかと狼狽えている。

「なんだ、乗れないのか？よつと」

そう言つて生物に跨がりながらキューティを抱え上げるルーク。驚いたキューティがじたばたと暴れる。

「は、離してください！」

「ついてこない気か？ほら、しっかりと背中に掴まっているよ」

「どうして貴方なんかと一緒に乗らなきゃいけないんですか！せめてサイアス様と…」

「時間がないんだ。申し訳ないが俺で我慢してくれ」

そう言つて後ろに座つたキューティの抗議を受け付けず。先に行つてしまったサイアスの後を追いかけるルーク。初めのうちこそ抗議を続けていたキューティだが、速度が上がるに連れて口数は減り、今はルークの背中にギュツとしがみついていた。

- 砂漠の塔 入り口 -

「これが砂漠のガーディアンか…」

「なるほど、あの辺の出っ張りを腕と考えれば、確かに人のような形にも見えるな」

盗賊団の後を追ひ、三人は砂漠の塔の前まで来ていた。着いたと同時に生物から飛び降りたキューティは、非難するような目でルークを見ていた。それを尻目に、妖しく緑に発光している塔を見上げながらルークとサイアスが話す。塔の形に何か思うところがあつたのか、キューティも話に入ってくる。

「人の形というより、なんだかハニーっぽい感じがしますが…」
「ん？……なるほど、言われてみれば確かに」

キューティに言われて再度見直してみると、確かに巨大なハニーを岩でコーティングしたような形に見えてくる。

「さて、中に入るか」

「サイアス様。扉には鍵が…」

「ファイヤーレーザー！」

いきなり扉に向かって魔法を放ち、鍵ごと扉を吹き飛ばすサイアス。唐突な行動であつたため、固まるキューティ。

「ま、盗賊団のアジトにお行儀良く入る必要もあるまい」

「中は暗いな。気をつけて行くぞ」

そう言つて中に入つてくルークとサイアス。キューティも二人の後を追いかけていく。入つてすぐの位置に階段があり、サイアス曰く魔力を上の方から感じるということなのでそれを延々と上つていく。塔の中は暗く、モンスターこそ出てこないが嫌な空気が漂つていた。

「空気が悪いな。歌でも歌うか？」

「はい、サイアス様。では、不肖この私がチューリップの歌でも！」

「なんでその選曲なんだ？…残念だが、歌う必要はなさそうだな」
「そのようだな」

ルークとサイアスの言葉に前を歌おうとしていたのを止め、前を見るキューティ。階段を上りきった先は緑が広がっており、とても塔の中とは思えなかった。その奥にまた別の階段が見える。しかし、その階段の前にはこんにちわの大群と、数体のロンメルが立っていた。

「大した相手じゃないが、数が厄介だな」

「少し時間を稼いでくれれば、俺がまとめて吹き飛ばすが？」

「じゃあそれでいくか。真空斬！」

そう言つて呪文を唱えていたロンメルに斬撃を飛ばすルーク。体が真つ二つになり、そのロンメルが崩れ落ちる。しかし、側にいた別のロンメルの詠唱が終わりこちらに魔法を放ってくる。

「ティーゲル」

「ガードはお任せください！ライトくん、ガード！」

キューティの右に控えていた指揮ウォール・ガイがロンメルの放ったティーゲルからサイアスを守る。それと同時に、今度はこんにちわの大群がこちらに進軍を開始した。その様子を見たルークがサイアスに尋ねる。

「寄られると厄介だが、後どれくらいかかりそうだ？なんなら初級魔法で少しずつ減らすか？」

「いや、もう準備は終わった」

そう答えるサイアス。その両腕に赤い魔力を纏っている。放つ前

だというのに、それはまるで綺麗な炎のようであった。

「灰と化せ。業火炎破！」

瞬間、こちらに迫ってきていたこんにちわが業火に包まれる。絶叫が辺りに響き渡るが、それもすぐに止む。後に残ったのはサイアスの言葉通り灰のみであった。同時に、奥に残っていたロンメルも崩れ落ちる。ルークが真空斬で斬り伏せていた。呆然とするキューティ。業火炎破自体は見たことはある。が、これほどまでの威力を目の当たりにするのは初めて。これが四將軍なのか、と。そのキューティにサイアスが声をかける。

「さ、先に進もうか」

「あ、すいません！気を抜いてしまい…」

「ところでキューティ…」

サイアスに深々と頭を下げ、謝罪の言葉を続けようとするキューティの話を遮るルーク。どうも気に掛かる事があるようだ。

「ライトくんって…ウォール・ガイに名前を付けているのか？」

フツと吹き出すサイアス。どうやらサイアスも気がついていたが、気づかないふりをしていてあげたようだ。キューティの顔が真っ赤に染まる。

「べ、別に良いじゃないですか！私の勝手です！…」

奥にあつた階段を上り、最上階まで辿り着いた三人。より魔力を感じる最奥の部屋に向かつて狭い通路を歩いている。すると、突然目の前に小さなハニーが大群で現れた。

「プチハニー！こんな狭いところで…」

サイアスがそう言い、ルークとキューティにも緊張が走る。しかし無理もない。ハニー族の中でもプチハニーと呼ばれる小型のハニーは、衝撃を受けると爆発するという厄介な性質を持つ。しかし気に掛かるとことが一つ。普通のプチハニーとは色が違うのだ。

「白いプチハニー…新種か？」

「プチハニーなんかじゃないやい。僕たちはこの城を守るメイクドラマ2号こと、白血球ハニーだ！」

そう言つて先頭にいたハニーが飛びかかってくる。ルークはそれを素早く躲し、白血球ハニーが地面に落ちる。すると、ハニーの落ちた場所の石で出来ている通路が溶け始めた。

「こいつら、溶解液を出すのか！」

「かかれー！！」

「ルーク、スマンがハニー相手では戦えるのはお前だけだ。キューティ、援護を頼む」

一斉に飛びかかってくる白血球ハニー。数が多いので真空斬では間に合わない。妃円の剣では溶かされてしまうため、特殊なコーティングのしてある幻獣の剣に変える。先頭の一体を斬り、一応刀身を確認するが溶けていない。そのまま立て続けにハニーを斬っていくルークだが数が多すぎる。上手いこと躲していたルークだが、遂

にその体を一体のハニーが捕らえそうになる。

「レフトくん、ガード!」

「スマン、助かる」

「……この状況、貴方に倒れられたらこちらでも危険ですから」

すんでのところでキューティの援護が入る。指揮ウォール・ガイに阻まれた白血球ハニーにウォール・ガイから反撃の電撃が走る。電撃を受けたハニーはそのまま溶けてしまった。

「!? サياس、こいつら魔法が効くぞ!」

「こちらでも確認した。ならばやりようがある。火爆破!」

ルークとほぼ同時に魔法が効くことに気がついたサイアスはすぐに火爆破を放つ。悲鳴を上げながら、白血球ハニーたちはドロドロに溶けていった。

「なんだっ たんですか、こいつら。ハニーなのに魔法が効くなんて……」

サイアスが溶けてドロドロになった白い液体に少し触れる。溶かされないようにその右手は魔法でガードされている。

「これは…ハニーなんかじゃない。魔力の塊…あの鎧たちとほぼ同じだ」

「つまり、これも人工的に造られたものってことか?」

「そんなことが…可能なんですか…?」

「……わからん。だが、現実にごうして存在している。もしあの鎧も合わせて一人で造り出したとすれば…魔法LV3相当の実力は必須だな」

「ゼスの歩く災厄と同格か…もしこの塔にいとすれば、厄介どころの騒ぎじゃないぞ」

「そんな魔力は感じないからいいと思いたいが…さて、鬼が出るか蛇が出るか…」

不穏な空気を感じながら、ルークとサイアスは奥へと歩みを進めていく。キューティも不安になりながら後に付いていく。突如現れた塔、人間業とは思えない生成物。一体何が起きているのか。

- 砂漠の塔 最深部 -

その部屋には誘拐された少女たちがいた。しかし、目を背けたくなるような行為が繰り広げられていた。少女たちは意志を持っているかのように動く三角木馬に乗せられ、生気を吸い取られていたのだ。

「ひ…酷い…」

「…サイアス、キューティ。早く解放するぞ！」

「この城を建てた奴とは仲良くやれそうにないな、俺は」

捕らえられている少女たちを次々と解放していくルークたち。最後の一人を木馬から解放したところで部屋に笑い声が響き渡った。笑い声のした奥の方を見る三人。壁が崩れ、その向こうに部屋中の壁がピンク色で蠢いている、まるで内蔵の中のような部屋が現れる。その一番奥、壁と融合した形で声の発生主はいた。褐色の肌が特徴的な女性、間違いない、アニーだ。

「やはり貴方が犯人か、アニーさん！」

「ふふふ、遅かったわね。もう全ての準備は整ったわ。間もなく復活する、史上最強のアトラスハニーが！」

アニーが叫ぶと同時に城が大きく揺れ始める。外から外壁が崩れ落ちる音が聞こえる。そのまま、ドシン、ドシンと塔が動き始める。まるで歩いているかのような振動だ。

「状況から察するに…この塔自体がそのアトラスハニーって事か？ キューティの見る目は正しかったって事か」

「その通りよ！少女たちの生气を使ってこのアトラスハニーは復活したわ。今この塔はジウの町に向かって進んでいるわ。この膨大な魔力でジウの町の奴らを皆殺しにするのよ！！」

「サイアス。お前の見立てでは？」

「……可能だな。これだけ巨大な塔を動かすほどの魔力、攻撃に回せば町一つくらい簡単に消し飛ぶぞ」

「そんな…」

「おっほっほ、これでジウの町も終わりよ…うつ、がああ！！」

まるで人が変わってしまったかのように目を見開いて叫ぶアニー。が、突如苦しみだし、うめき声を上げる。訝しげに状況を見守るルークたちだが、顔を上げたアニーの様子が先ほどまでの気が狂ったようなものと違い、町であったときのものに戻っていたのだ。

「サイアス様、ルーク様！私を殺してください！！」

「殺してって…そんな！？」

「どういうことだ。アニーさん、貴方は一体？」

「こうなれば全てお話しします。私はならず者に乱暴された後、自殺を考え砂漠を歩いていました。すると、突然目の前にこの塔が現れたのです。中に入ると、そこには生气の奪い方や塔の動かし方、

そして、アトラスハニーが町を吹き飛ばすだけの破壊力があることが書いてある紙が置いてありました。それを見た瞬間、私の中にもう一人の人格が生まれてしまったのです。乱暴される私を見捨てた町の人を皆殺しにしたい、もう一人の私が！」

「二重人格って訳か！」

「はい、私は今、壁と融合し塔の中枢神経の一部となっています。私を殺せばアトラスハニーは止まるはずです。お願いします、殺してください！うつゝああっ！！」

悲痛な叫び声を上げるアニー。アトラスハニーを止めるため、町の人を救うために、アニーを殺さなければならぬのだ。決断を迫られるルークたち。すると、またアニーが呻き声を上げ、またもう一つの人格が変わる。

「もう一人の私め、余計な真似を…私の邪魔をする奴は皆殺しよ！行け、メイクドラマ1号！！」

突如、地面がせり上がり水色の巨人が現れる。腕を伸ばしてこちらを攻撃してくる。それを躲すルークとサイアス。躲しがてらサイアスが炎の矢を放つが、ほとんど効いていない様子だった。

「効いてないな。少しばかりショックだね」

「ほほほ、その程度の魔法じゃこのメイクドラマ1号には傷一つ付けられないわよ！」

「キューティ、少女たちから離れるな。ウォール・ガイで守り抜いてくれ！」

「は、はい。サイアス様！」

「もたもたしていると町まで着いてしまうな。早急に決断する必要があるな…」

「アニーさんを…殺す決断ですか…」

キューティの声が悲しいものへと変わる。アニーを殺さなければもつと多くの人が死ぬ。そんなことは頭では理解している。だが、目の前の女性も被害者だ。救い出したい。魔法使いとかそんなものは関係ない。その時、ルークがアニーに向かって問いかける声が聞こえた。

「殺す必要があるのか？貴方の体と壁を融合させているその触手を斬れば、それで十分なんじゃないのか？」

「おほほ、浅はかね。この触手は強力な魔法結界でガードされているわ。決して外すことは出来ないのよ！」

アニーの言葉にルークとサイアスがピクリと反応する。

「さあ、町までもうすぐ着くわ。止めたければ殺してみなさい。そんなことが出来るものならね！まあ、メイクドラマ1号を倒せたらの話だけだね！おほほほほ……！」

勝ち誇ったように笑うアニー。どうすればいいか判らないキューティだったが、サイアスとルークが臨戦態勢に入るのが見える。

「とりあえず、役割は決まったかな。俺はあの巨人をやる」

「俺はアニーさんだな。油断するなよ」

「ふ、任せておけ」

「ちょ、ちよつと待つてください！……殺す気、なんですよね……」

そう問いかけるキューティ。判っている、それしか手段はない。それでも尋ねずにはいられなかった。そんなキューティに、ルークは小さく微笑む。

「……キューティは、どうしたい？」

殺さなければ町は滅びる。ただのわがままだ、そんなことは判っている。それでも、俯きながら声を絞り出す。瞳から涙が零れる。

「助けたい…アニーさんも町の人も…だって、あの人も被害者じゃないですか…こんなの…悲しすぎる…」

助けたい。しかし、自分には何も出来ない。魔法使い、治安部隊副隊長、自分の持つ肩書きは、今この場では何の意味も持たない。不甲斐なさから涙が止められない。その姿を見て、ルークがサイアスに呟く。

「ゼスの膿も偶には見る目があるじゃないか」

「急にどうした？」

「有望だ、確かにな」

「…なるほど、同感だ」

「安心しろ、キューティ」

ルークのその言葉に顔を上げるキューティ。アニーに向き直るその背中が、魔法使いではないルークが、ほんの少しだけ、頼りがいのあるように思えた。

「俺たちに任せろ！」

第34話 ただ、助けたい（後書き）

「人物」

アニー

ジウの町を治める長。突如砂漠に現れた塔を偶然発見し、中を見て回る内に乱暴された自分を見捨てた町の人への復讐に駆られたもう一人の人格が生まれる。本来は優しく、穏やかな性格。

「モンスター」

ロンメル

聖骸闘将の一種。服は青く、目の部分には横長の切れ込み。聖骸闘将の中では下位に位置する。

プチハニー

オレンジ色の小さなハニー。衝撃を与えると爆発する厄介な相手。死骸は爆薬として利用される。

白血球ハニー

白く小さなハニーで、正確にはハニーではなく何者かによる生成生物。別名メイクドラマ2号。

メイクドラマ1号（オリ魔物）

水色の巨人。伸縮自在の腕を持ち、並の魔法攻撃ではビクともしない程の高い魔法抵抗を持つ。これも何者かによる生成生物。

「技」

業火炎破

辺り一面を業火が包む中級広域魔法。その威力は火爆破よりも遙かに高い。

ティーゲル

闇の砲弾をぶつける聖魔法。使用してくる闘将によって威力が違ふ。その威力によってティーゲル2、ティーゲル3と分類分けされて呼ばれる。

「その他」

聖骸闘将

かつて聖魔教団という団体が作り出した戦争兵器。魔法使いの死体を使った人造魔法使いや、魂の入っていない巨大メカが主な兵器である。モンスターではないが、聖魔教団が滅んだ後も命令であった蛮人撲滅命令を守り抜いているため、人類に襲いかかってくる。

第35話 激闘は遙か遠く

- 砂漠の塔 最深部 -

アニーに向かって駆け出すルーク。その行く手を壁から飛び出した触手と青い巨人が阻む。触手を避け巨人に斬りかかるが、ほとんどダメージを与えられず、すぐにその傷も再生してしまう。

「やれやれ、この間のラギスといい、最近こんな相手ばかりだな」
「火爆破！」

サイアスが魔法を放つ。触手はその魔法で燃えたが、すぐに次の触手が壁から伸びてくる。青い巨人の方はまるで効いていない様子だった。

「おほほほ、無駄だって言ってるでしょ！天下の四將軍様も大したことないわね！」

「おいおい、雷帝が聞いたら文字通り雷が落ちるようなこと言わないでくれるか…」

「どうだ、やれそうか？」

軽口で返すサイアス。巨人の攻撃を後ろに飛んで避けたルークがサイアスに尋ねる。少し値踏みするように巨人を眺め、サイアスが答える。

「あの様子じゃファイヤーレーザーでも駄目そうだな…となると、詠唱まで1分つてとこかな」

「了解だ。それで確実に薙ぎ払えるものとして突っ込むから、失敗

したら化けて出るぞ」

「男の霊なんかお断りだね。そりゃあ失敗できんな」

そう言つて再度アニーの方に駆け出すルーク。その行く手を巨人が阻み、繰り出される攻撃を躲しながら剣で斬りつけていく。しかし、先ほどと同じく与えられているダメージはわずかだ。勿論、ルークも時間をかければこの巨人を倒すことは出来る。与えたダメージはわずかずつとはいえ確実に蓄積されているからだ。しかし、今求められているのは時間。急がなければジウの町が消し飛んでしまう。となれば巨人を一撃の下に吹き飛ばすような強力な範囲攻撃が必要なのだ。ルークの真空斬、真滅斬は共に単体攻撃。なればこそこの巨人を倒し、アニーへの道を開くのはサイアスの役目であった。

「さて、馬鹿にされたままなのもあれだし、四將軍の実力を見せてやるかね…」

サイアスの全身が黄色く光り始める。次に放つ魔法の為に全身に集中させた魔力が、ほんの少し漏れ出し、そのように黄色く光って見えているのだ。

「す、凄い…なんて魔力量…」

そう呟くのはキューティ。攻撃魔法が得意でない自分でも、今サイアスが放とうとしている魔法がどれだけ凄いのかは感じ取れる。状況は、ルークが迫ってくる触手や巨人の注意を引きつけ、サイアスが魔法を溜めている。少女たちを守るように後ろに控えているキューティだが、どうやら触手の攻撃はここまで届かないらしい。だとすれば、自分にも出来ることがある。

「ええい、ちょこまかと！四將軍の方から先に殺しなさい！」

単純な思考で動いている巨人の注意を引きつけていたルークだが、アニーが痺れを切らし指示を出す。サイアスの方に向かって巨人の腕が伸びる。真空斬で軌道を変えようとするが、その前に巨人の攻撃がウォール・ガイによって阻まれる。

「キューティか。良い援護だ！」

「私だって…アニーさんを救う手助けをしたいんです！防御付与！」

巨人が更に攻撃を加えようとしていたのを見たキューティは、ウォール・ガイに防御付与の魔法を掛ける。これこそが攻撃魔法をあまり得意としていないキューティを今の地位まで押し上げた真骨頂、付与魔法。警備隊という役職柄、優秀な支援魔法の使い手は非常に重宝されたのだ。巨人の重い一撃を、強化されたウォール・ガイが受けきる。

「ぐ…小娘がつ…！」

「サイアス様。今魔法付与を…」

「いや、必要ない。準備は終わった」

そう言ったサイアスの体は先ほどよりも更に光り輝いていた。先ほどまでと違うのは光っている色が黄色だけでないということ。その両腕が灼熱のように真っ赤に染まっていた。魔法使いでないアニーも、何か感じ取るものがあつたのか、焦った様子で巨人に指示を出す。

「殺せ、殺すのよ…！」

その指示を受け、巨人の腕が再度サイアスに向かう。それを見ながら、されど慌てた様子はなく、サイアスはゆっくりと両腕を前に

出し、叫んだ。

「灰すら残すな！ゼットン！！！」

瞬間、サイアスの両腕から炎の塊が放たれ、それを受けた巨人が灼熱の業火に包まれる。奇声を上げながらその巨体が崩れ落ちていく。アニーが驚愕に目を見開く。一撃。あの高い魔法抵抗を持つ巨人がたったの一撃で崩れ落ちたのだ。しかし、直後その目は更に見開かれることになる。崩れ落ちていく巨人の向こうから、若干の残り火を纏ってルークが飛びかかってきたのだ。

「な！？」

サイアスがゼットンを放つと同時に、ルークは巻き込まれない程度に特攻していたのだ。万が一、巨人を一撃で倒せていなかったらその無防備な姿を巨人の前に晒すことになる。そんな特攻が出来たのは、サイアスへの絶対の信頼。触手でガードすることも間に合わず、目の前に剣を振り上げ飛びかかってきているルークにアニーが叫ぶ。

「殺す気かい！本当に！？この哀れな私を！？」

「殺す気など、初めから無い！」

ルークが狙うのはアニーではない。その後ろ、アニーと壁を融合させている触手だ。塔の振動が止まる。アトラスハニーがジウの町の前まで着いたようだった。もう時間がない。サイアスが叫ぶ。それに釣られるように、キューティモルークに向かって叫んだ。

「一撃で決める！ルーク！！」

「お願いします！！！」

「真滅斬！」

振り下ろされた刃が、触手を覆っている魔法結界に食い込む。瞬間、ルークは感じる。この結界、先日のラギシスのものよりも質が上だということを。だが、決して破れないレベルではない。

「うおおおおっ！」

ルークの叫びと共に、その刃は結界を破り、アニーと壁を繋いでいた触手を一刀両断に斬り裂いた。壁と離され、倒れていくアニーを左腕で抱える。

「ありがとうございます…ルーク様」

アニーが気を失う寸前、そう呟いた。最後にまた人格が元に戻っていたのだろう。その礼を聞きながら、ルークは言いしれぬ不安を感じていた。あのフィールの指輪で強化されていたラギシスよりも格上の結界。この結界を張った術者は一体何者なのか、と。こうして、グリーンスコルピオンは壊滅したのだった。

- 数日後 砂漠の塔 -

事件解決より数日、今はジウの町の前にそびえ立っているアトラスハニーこと砂漠の塔の調査にゼスから魔法使いたちが派遣されていた。その場にはルーク、サイアス、キューティの三人も居合わせていた。事件時の状況の説明も終わり、調査を続ける魔法使いたちを横目にルークはサイアスと話をしていた。

「で、アニーさんはどうなる？」

「ゼスで裁かれることになるな。一応口利きはしておくが…重い罪にはなるだろうな」

「盗賊団を組織してならず者殺害に少女の誘拐、その上町一つ消そうとしたんだからな…」

「それに…アニーさんは魔法使いじゃないからな。ゼスだとそれが大きなマイナスだ」

重苦しい空気の中、キューティが話に入ってくる。

「それでも何とか極刑は免れそうなんですよ。町の人たちが請願書を出してきたんです」

「町の人たちが？町ごと吹き飛ばされそうになったのにか？」

キューティの言葉に驚くルーク。いくら慕われていた長だったとは家、自分たちを殺そうとした相手を庇うとは。

「アニーさんがならず者に襲われたとき、見て見ぬ振りをしたことをずっと悔やんでいたみたいです。執事さんと酒場の飯田橋さんが中心になって、署名を集めたんです」

「そうか…これがアニーさんにとって少しでも救いになればいいかな…」

「そうですね。文化が遅れているなんて、酷いことを言ってしまうましたが…いい人たちです」

そう言うキューティに、サイアスがルークに聞こえない程度のボリュームで問いかける。

「町の人たちをそうやって褒めるなんて、魔法使い至上主義は止めたのかな？」

「今でも魔法使いが一番優秀だとは思っています！ただ…」

キューティもルークに聞こえない程度に小さく返事をしながら、ルークの方を見る。魔法使いではないのに、自分に出来なかったアニー救出を成し遂げた冒険者。

「魔法使い以外の人たちも…決して劣っている訳じゃないと考えを改めただけです」

上層部に言われ、渋々連れて行った形になったが、無駄ではなかったなと静かに笑うサイアス。そのサイアスに、少し遠くを指差しながらルークが話しかけてくる。

「ところで…嚴重にバリケードを張っているあの白い球はなんだ？」

ルークが指差す先には巨大な水晶のような球が置いてあった。その周りには嚴重なバリケードが張ってある。

「ああ、あれがアトラスハニーを動かしていた魔力の塊だ。あれに触っちまうとアトラスハニーから魔法が発射されちまうんだ。せっかく食い止めたのに最後の最後にそれじゃ、馬鹿らしいだろ」

「確かに…そんなことになったら苦勞が水の泡だな」

ルークの脳裏に一瞬がはたと笑う冒険者の顔が浮かぶ。なぜかあいつならそんな形で苦勞を水の泡にしまいそうな気がしたからだ。その時、階段から一人の魔法使いが上がってきた。水色の髪に、特徴的な杖を持った女魔法使い。

「アニス・沢渡。ズバツと参上です！」

やってきたのはゼスが誇るへっぽこ最強魔法使い、アニス。サイアスが魔法Lv3相当のものが使われていると報告したため、こうして派遣されていたのだ。因みに、千鶴子は最後まで反対していた。来るや否や辺りを見回し、おおー、と感嘆の声を上げる。そしてその目が水晶を捕らえた。

「むむっ！あからさまに怪しげなものが。どれ、ぺたぺた」

「「「あ！」「」」

この日、ジウの町の一角が吹き飛んだ。居住区でなかったため、奇跡的にも人的被害は0。調査中の事故として内密に処理されたが、ゼスは復興支援金として多額の援助をジウの町にすることになる。

・ゼス 王者の塔・

「…その、以上が今回の報告になります」

部下であるマクシミリアンの報告を受け、額に青筋を立てるのはこの塔の管理者でもある四天王、山田千鶴子。自らの弟子であるアニスの失態に頭を痛めていた。

「だから派遣には反対だったのに…ご苦労。もう行って良いわ」

「は！それと、もう一つご報告が…」

「何？今度はアトラスハニーそのものでも吹き飛ばしたのかしら？」

自嘲気味に言う千鶴子。現在の四天王でまともに仕事をしているのは彼女一人。相当疲れが溜まっているようだ。

「パイア様が今回の事件に興味を持たれ、資料を持って行かれました」

「……パイアが？」

飛び出したのは意外な名前。四天王、パイア・サーバー。千鶴子の親友でもあった彼女は、数年前からその性格が一変し、怪しげな研究にのめり込んでいた。それは昨年四天王に就任してからも変わらず、むしろ研究が楽になるからというだけの理由で四天王になったかのようであった。そのパイアが、資料を持って行った。

「何考えているのよ…パイア…」

変わり果ててしまった親友を思い、千鶴子は小さく呟く。その問いに答える者は誰もいなかった。

・ゼス 跳躍の塔・

「やっぱこれすごいわー。この生気を搾り取る装置すっごい良いゼンスー」

「ぎやはははは！これ造った奴も姐さんと一緒に狂ってるぜ！」

跳躍の塔の研究室に二人分の声が響き渡る。部屋の中には四天王、パイア・サーバーただ一人。持ってきた資料を見ながら、その塔の素敵に狂った構造に目を輝かせていた。

「やーん。この壁と融合させるのなんか格好良すぎて濡れちゃうー」
「ケケケケケ！よっ、この淫乱！」

部屋には確かに一人しかいない。それなのに、どこからともなく下品な笑い声が響いていた。

「この壁と融合させる技術と生気の技術合体させて、女の子を壁一杯に貼り付けた部屋とか素敵そうじゃない？名付けて究極の美女の部屋！」

「融合、合体、コンバイーン！」

「ブイ、ブイ、ブイでビクトリー！」

新しい研究材料を見つけたパイア。部屋からは一晩中笑い声が絶えなかった。

- 魔人界 とある屋敷 -

「お嬢様！大変です！」

屋敷の廊下をぺたぺたと駆ける不思議な生物。灰色の体に長い胴体。今では希少種となったネコムシの一種と思われる。焦った様子で主人のいる部屋に入っていく。

「何よアレフガルド。今お楽しみ中なんだけど？」

部屋の中は目を背けなくなる惨状。答えたのは黒髪の美しい長身の女性。彼女の股間から生えた白い蛇が、既に意識のない少女の股間から内部に進入し、その体を齧っていた。アレフガルドと呼ばれた生物に答えた瞬間、齧っていた少女の腹が裂け、内蔵が飛び散る。

「あ、殺しちゃった。勿体ない…で、何があったの？」

顔に付いた血を拭う女性。口では勿体ないと言いながらも特に気にした様子もなく、アレフガルドに問いかける。

「以前、お嬢様がゼスに建てられたという塔が人間に発見され、機能を停止しました」

「あら？レッドアイに協力して貰ったあの塔？今はあそこゼスじゃなくて砂漠なんだっけ？地下に隠していたはずなのにどうして見つかったのかしら…」

「突如塔が砂漠にせり上がったそうですぞ。原因は不明です」

「せっかくまた人間界に行くことになったら、あの塔で楽しもうと思つてたのに…どこのどいつよ、全く。許せないわ」

「お劳しや、お嬢様…」

彼女の名はメディウサ。若い女性を甦ることを趣味としている女性だ。その正体は人間ではない。人類の敵、魔人。その中でも特に凶悪な思想を持った一人であった。

「あー、なんかドツと気が抜けちゃったわ。寝るから枕よろしく」

「はい、お嬢様。いつも通りこの爺めが膝枕をさせていただきます」

「全く…機能停止させたその人間、もし見つけたら簡単には殺さないわよ」

今ここに新たな因縁が生まれる。しかし、その対象はルークではない。四將軍、サイアス・クラウン。彼はこれより数年後、その命を掛けてメディウサと対峙することになる。その因縁の始まりであったことを、その死闘の凄惨なる結末を、まだ誰も知る由はなかった。

第35話 激闘は遙か遠く（後書き）

「人物」

山田千鶴子

LV 40 / 50

技能 魔法LV2

ゼス四天王の一人。他の四天王がほとんど仕事をしないため、腐敗した長官連中と一人で渡り合う苦勞人。主に情報魔法に長けており、ゼスの未来は彼女の双肩に掛かっていると云っても過言ではない。服のセンスは抜群に悪い。

パイア・サーバー

LV 37 / 48

技能 魔法LV2

ゼス四天王の一人。元々は真面目な性格で、千鶴子の親友でもあったが、数年前に突如性格が一変。怪しげな研究にのめり込む。

アニス・沢渡

LV 54 / 88

技能 魔法LV3

山田千鶴子の弟子にしてゼスが誇るへっばこ最強魔法使い。その魔力は国王すらも上回る。一度出撃すれば、敵味方区別無く全滅させてしまったため、味方殺しのアニスという異名で恐れられている。ジウの町の一角を消し飛ばしたため、千鶴子にこっぴどく説教を受ける。町の復旧にも積極的に協力していたが、周りはまた何かやらかすんじゃないかと冷や冷やしていたという。その際、同じく町の復旧に協力していたルークという冒険者と顔見知りになる。

マクシミリアン

LV 18 / 20

技能 魔法 LV 1

山田千鶴子の忠実な部下。主に政治面で千鶴子を大きくサポートする。魔法使い至上主義にも懐疑的で、腐敗したゼス国内で、千鶴子が信頼し、重用する数少ない人物の一人である。

メデイウサ

LV 105 / 152

技能 剣戦闘 LV 1 魔法 LV 1

ケイブリス派に属するへびさんの魔人。女性を嬲ることを趣味とする残忍な性格。ルークたちの前に姿を現すのはまだ先のこと。

アレフガルド

LV 70 / 77

技能 執事 LV 3

ネコムシ出身であるメデイウサの使従。彼女のためなら何でもこなすスーパー執事。ケイブリス派リーダーであるケイブリスとの中も良好で、茶飲み友達。

「技」

ゼットン

一兆度の高熱火炎弾を敵に放つ最上級魔法。炎属性魔法の中では最強に分類されているが、使用できるのは極僅かな者のみである。

防御付与

仲間の防御力を一時的に上げる支援魔法。非常に使い勝手が良いが、あくまでサポートになってしまったため好んで使う者は少なく、使用者は重宝される。

魔法付与

仲間の魔法力を一時的に上げる支援魔法。ゼス国内では特に重宝される魔法。

「都市」

ジウの町（半オリ）

キナニ砂漠南東部に位置する町。行商人などで活気に溢れている。OVAではジオの町だが、位置関係がおかしいのでオリジナルの町に変更。

「その他」

四天王の塔

王者の塔、日曜の塔、弾倉の塔、跳躍の塔の四つの塔。四天王が管理することになっている。その地下にはある秘密が隠されているが、その事実を知る者は少ない。

アトラスハニー

砂漠に突如現れた塔。正確にはハニーではなく、強力な魔法使いが作り出したものである。魔法LV3相当の技術が使われている。

GI0815 メディウサダーク ゼス国内をメディウサが暴れ回る この際に塔を建設

GI0816 キナニ砂漠が誕生 地面に埋めた塔は発見されず

GI0912 レッドアイダーク レッドアイが使い魔を駆使して塔を魔改造

LP0001 地中より塔が現れる 原因は今のところ不明とされている

第36話 リーザス陥落

LP0002 4月

- リーザス城 深夜 -

時刻は既に日が変わる直前、本来であれば一部の護衛兵を残し城は閑散としている時間帯であった。しかし、この日は城の中にはまだ少数ではあるが普段より多くの兵が残っていた。城のある部屋、そこは一般兵が入ることは許されず、副将以上の地位の者が主に作戦立案などの目的で使用している部屋。そこには七人の男がおり、会話をしていた。いずれも副将以上の地位の者である。

「バレス殿、コルドバ殿。遅くまで付き合って貰い申し訳ありません」

「気にするでない、リック。こういう事も偶にやっておかねば兵の刺激にならん」

「がははは、しかしまた腕を上げたな！」

「（やれやれ、相変わらず將軍たちは甘い。こんなに遅くまで付き合わされるこちらの身にもなって欲しい者だ…）」

リーザス赤の軍將軍のリックが深々と頭を下げる。それに応えたのは黒の軍將軍のバレスと青の軍將軍のコルドバ。この日はリックの発案で赤、黒、青の三軍合同訓練をしていたのだ。勿論全兵という訳ではなく、一部の者たちだけだが。本来もっと早く切り上げる予定であったのだが、三將軍全員がノリノリになってしまい、結局兵たちはこんなに遅くまで付き合わされることになったのだ。心の中で悪態をつくのは青の軍副将キンケード。彼は三將軍と違い、リーザス国を守るといふ熱意は薄く、仕事として軍務を行っていた。

とはいえ大国の副将、その実力は本物である。後ろで黙々と着替え、帰り支度を進めているのは黒の軍副将のドツチ、サカナク、ジブルの三人。リーザス全6軍のトップに立っている黒の軍は、他の部隊とは違い特別に副将が三人存在していた。

「しかし…やはりバレス殿のように上手く兵を動かすことが出来ませんね」

「がはは、リックは攻め気が強すぎるからな。率先して最前線に立つ將軍…ま、兵は鼓舞するがな」

「現状維持で良い訳ではないが大きく変える必要もあるまい。儂の部隊とお主の部隊では求められる役割が違うからの」

進撃部隊である赤の軍、防衛部隊である青の軍、それらを統括する黒の軍。ただでさえ兵の損耗が激しい赤の軍であるが、現將軍のリックは將軍になってからまだ日が浅い。バレスのように損耗を抑える戦い方が出来ず、悩んでいた。その悩みを察し、今回の合同訓練をバレスとコルドバは引き受けたのだった。今日の訓練の総括をしながら、そろそろ帰路につこうとしている三將軍。ようやく帰れるとキンケードが安堵するが、突如一人の女性が部屋に駆け込んできた。

「どうした、メナド。そんなに慌てて」

部屋に入ってきたのは赤の軍副将メナド。まだ少女であるがその剣の腕は本物で、若年ながら副将という地位に就いていた。

「い、ご報告します！ヘルマン軍が突如リーザス城内に現れました

！！」

「……………！？」

あり得ない報告に部屋の中にいた七人全員が驚愕する。北の大国、ヘルマン帝国。鉱物資源は豊富だが気候に恵まれず、民が貧困に喘ぐこの国は、古くからリーザスの豊かな土地を狙い何度となく戦争を繰り返してきた。しかし、リーザスとヘルマンの国境に高々とそびえるバラオ山脈が大規模な軍事行動を邪魔し、今日までリーザス侵略の野望は達成されていなかった。そう、本来であればヘルマン軍が国境警備隊に気づかれずリーザスにやって来られるはずがないのだ。一体どうやって、しかし今はそんなことを考えている場合ではない。

「現れたのは第3軍。城内部外部共にヘルマン兵で溢れており、その数は数万に及ぶと思われます！」

「第3軍…トーマか。厄介なのが来おったな」

「ですが、負けるわけにはいきませんね！」

「絶対に死守するぞ！朝になれば白の軍と魔法部隊、それに帰った兵たちも集まる。今夜さえ凌げば勝機は俺たちのもんだ！」

「やれやれ…今夜はもう帰れそうにないな…」

將軍たちが速やかに武器を取り、部屋から飛び出していく。報告に来たメナドと黒の軍副將の三人もそれに続き、キンケードがため息を吐きながら、されど武器をしっかりと握りしめ部屋を後にする。こうして戦いが始まった。

・リーザス城 一階・

「はあっ！」

金色の鎧を纏った女戦士の一撃にヘルマン兵が崩れ落ちる。彼女

は親衛隊隊長レイラ。本日の合同訓練には参加していなかったが、国王の警備のため組織されている親衛隊は交代制で常に城に駐在。ヘルマン兵が現れた報告を聞き、真っ先に防衛に駆けつけていたのだ。じわじわと押されてはいるものの、必至にこの階を死守していた。その時、ヘルマン兵の波を押し退け、巨体の男がレイラの前に立った。

「……邪魔だ、人間の女よ」

「悪いけど通すわけにはいかないわよ！はあっ！」

・リーザス城 東の塔前・

「この俺に向かうとは良い度胸だ、誉めてやるぞ！生かしては帰さんながな、ふんっ！」

「あ、あれがリーザスの青い壁……」

「リーザスの危機なんだ、給料貰った分は働きたまえよ。行け！」

コルドバとキンケードがまだ城に残っていた少数の青の軍を率い、防衛に当たっていた。その圧倒的な防衛力にヘルマン兵が攻めあぐねる。ここの兵たちを率いているオカマ言葉の中年男が金切り声を上げる。

「なにをもたもたやっているの！早くその下品な男を仕留めなさい！」

「がはははは、後ろからごちゃごちゃ言っていないで自分で来たらどうだ、ヘンダーソンさんよぉ！」

「ふん、ヘルマンー美しいこのわたしの相手をしようなんて100年早いわ。行きなさい！」

「美しいってのは、俺の奥さんみたいな人のことを言うんだよ！おらっ！」

・リーザス城　西の塔前・

「冷静に。訓練の成果をここで見せるんじゃ」

こちらではバレスが黒の軍を率い防衛に当たる。目の前に対峙する兵を率いているのは豚のような外見の中年男。側に二人の拳法家が控えている。

「かつての大拳法家が見る影もないな、フレッチャーよ」

「そんなこと言っていていられるのも今のうちぶり。ボウ、リヨク！お前たちの力を見せてあげなさいぶり！」

・リーザス城　二階・

リーザス城の二階を守るのは、リーザス最強の兵士リックと赤の軍。一階の親衛隊が逃してしまった兵たちを一人残らず斬り伏せていた。二階に上がったきたヘルマン兵は、リックの姿を見た瞬間一人残らず震え上がっていた。世界にその名を轟かす剛の者、リーザスの赤い死神。そのような腰の引けた者たちに遅れを取るリックとメナドではない。が、ここでリックの姿を見ても全く怖じけ付かず、堂々と目の前に対峙する者が現れる。ヘルマン第3軍將軍、トーマ・リプトン。

「トーマ將軍……」

「言葉はいらんど、赤い死神。行くぞ！」

トーマがその手に持つのは鎖の付いた巨大なトゲ付きの鉄球。鉄球をリック目がけて飛ばす。それをすんでのところで躲しながら、リックがトーマに斬りつける。素早く鉄球を手元に戻し、それを難なく受けるトーマ。大陸でも屈指の実力者である二人の対決にメナドが入り込む隙はなく、周りのヘルマン兵を倒しながらも、メナドはその戦いに見惚れていた。

リーザス軍は奮闘していた。不意を突かれた形で最初こそ後れを取っていたが、各所に將軍・副將たちが参戦すると状況は膠着。朝まで持つかもしれない、兵たちがそう思い始めていた。その時、リーザス場内に不気味な音色が響き渡る。

「むっ！なんじゃ！？」

「なんだ？この音色は……」

「これは……なん……だ……力が……」

キンケードの体が崩れ落ちる。いや、キンケードだけではない。各所で音を聞いた兵たちが次々と崩れ落ちていった。バレスとコルドバも例に漏れず、片膝を付き頭を抱え、遂にはその体が地に付く。

「……これは、トーマ將軍。一体何を……？」

片膝を付きながら、それでも意識を失うことを拒み、トーマに問いかけるリック。周りの兵たちはメナド含め既に全員が倒れていた。

「……すまん、死神よ。正々堂々と決着をつけたくはあったが……
こちらには、もう時間がない」
「無様だな、赤い死神よ！」

その時、トーマの後ろから三人の男と一人の女性、そしてガーデ
イアンが二体現れる。その中央に立つ男にリックは見覚えがあった。

「パットン皇子……貴方がこの部隊を率いた張本人か……どうやってリ
ーザスに……」

「そうだ、この私がリーザスを陥落させるのだ。どうだ、死神よ。
これが魔人の力だ！」

パットンの言葉にリックの目が見開かれる。側に控えていた二人
の男と一人の女性を見る。ヘルマン兵とは思えぬ姿。これが、魔人。

「馬鹿なっ……魔人と手を結んだというのか……無謀だ！」

「負け惜しみはそれまでにしてもらおうか。現にノスたちは忠実に
私の命令を聞いている。ははは、これでリーザスも終わりだ！」

「トーマ將軍……貴方は本心で……この作戦に賛同しているのですか！
？」

「……もう休め、死神よ」

「……無念……リア様……申し訳……」

こうして、リックは遂にその意識を手放す。その奥、事態を見守
っていた女忍者が城の階段を駆け上がる。音色に意識を奪われそう
にはなったが、奥にいたためその音色は少ししか届かず、気絶する
までには至らなかったのだ。その女忍者、かなみが目指すのは主君
が隠れる最上階。

・リーザス城 最上階・

「リア様！ご報告です！」

リアが隠れる最上階の部屋にかなみが飛び込んできた。部屋の中にいるのはリアとマリスのみ。不安そうにするリアの背中をマリスがそっと抱き込んでいる。

「かなみ、下の様子は…」

唇を噛みしめながら、かなみはリアの問いに答える。

「地獄です。ヘルマン軍がここに来るのも時間の問題です」

「大丈夫よ。今この城にはリックもレイラもいる。朝になれば国境警備隊が駆けつけてくれるわ」

「…既にリックさん、レイラさん共に敗れました」

「そんな！レイラが！？」

「リックも…ですか」

「はい。奮戦していたリック將軍ですが、突如城内におかしな音色が鳴り響き、それを聞いた兵たちが次々と倒れていきました。恐らくバレス様やコルドバ様ももう…」

「そんな…」

「それと、この軍を率いているのはパットン皇子です。いえ、率いているのは軍だけではありません…魔人と手を結んでいます！」

かなみの報告にリアとマリスの目が見開かれる。人類の敵であり、自分たちを蹂躪する存在、魔人。それとヘルマンが手を結んだというのだ。

「魔人…ですって…マリス、奴らの狙いは…」

「はい、奴らの目的はカオスで間違いないかと」

「…カオス？」

リアとマリスの話の意味が判らず、かなみが問いかける。その時、リアの様子が変わる。震えが止まり、何かを決断したかのようにその目が鋭くなる。政治家として働いているときはまた違う、王女としての威厳を持ったその姿にかなみは何故か不安を抱いた。

「……マリス、聖盾を」

言われるままにマリスが部屋に置いてあったリーザス聖盾を持ちリアに手渡す。この部屋に避難する際、何故かリアが持つてきていたのだ。受け取ったリアは、かなみの目の前に歩みを進め、その盾をかなみに手渡す。

「…リア様、これは？」

「かなみ、リーザス国王女として命じます。この城から貴方だけでも脱出しなさい」

リアの命令に驚愕するかなみ。これが、先ほどの不安の正体。主君を置いて自分だけ逃げると、そう命じられたのだ。

「リア様！出来ません！！」

「かなみ、ただ逃げると言っている訳ではないの。忍者の貴方ならこの城から気づかれずに脱出出来る可能性が高いわ。この聖盾を持つてランス様の元に行つて、この事を伝えて。もし出来ればルーク様にも協力を要請して」

リアがランスをダーリンではなくランス様と呼ぶ。ルークを呼び

捨てではなくルーク様と呼ぶ。リア個人としてではない、一国の王女としての振るまい。断れるはずがない。不甲斐なさに唇を噛みしめながらかなみは盾を受け取る。

「かなみ、早く行きなさい。注意はこちらが引きつけます」

「……必ず……助けに来ます」

「ふふつ、期待して待っているわ。マリス、私と貴方に知識ガードの魔法を掛けなさい。魔人たちに情報が漏れることの無いように」
「はっ！」

「マリス…最後まで付き合ってくれるわね」

「地獄の底までもお供します」

「あら？やっぱり私は地獄行きなのかしら？」

そう言いながらリアとマリスが部屋を出る。部屋の外からいたぞ！という声が響き渡る。かなみが脱出しやすいように自ら囿になったのだ。その姿を見送り、胸が張り裂けそうになりながらもかなみは窓から抜け出す。

- リーザス城 外周 -

今、陥落していくリーザス城から一人の忍者が抜け出した。それに気がついたヘルマン兵はいなかった。いや、正確にはたった一人、その姿に気がついた者がいた。

「……………ん？」

「どうかしましたか、ミネバ様？」

「……………いや、なんでもない」

部下に問いかけられた人物はヘルマン第3軍副将ミネバ。女性でありながら実力でこの地位までのし上がった彼女は、その部下の問いになんでもないと答え、夜の闇に消えていく忍者の背中を見送る。

「（あの距離じゃいまから追いかけても間に合わないね…報告してあの馬鹿皇子にあたしらの責任にされるのも癪だ。黙ってたほうが賢いってもんだ）」

こうして唯一の目撃者があえて報告を怠る。かなみはヘルマン兵に気づかれることなく脱出を遂げた。彼女は向かう、ある男たちの元へ。

「…ルークさん、ランスさん。お願い…リーザスを、リア様を助けて…」

この日、リーザスは陥落した。

第37話 聖装備の秘密

- 数日前 ジウの町 -

「それではルーク様、お元気で！」

「ああ、アニスも元気だな。それと、周りをよく見て行動するように」

リーザス陥落より数日前、ルークはジウの町を旅立っていた。アトラスハニーの事件後、ルークは町の一角が吹き飛んでしまったジウの町の復旧作業の手伝いを行っており、その間に千鶴子に命じられて復旧作業に来ていたアニスに妙に懐かれていたのだった。

「ああ…ルークさんがいなくなったら誰がアニス様の暴走を止めるんだ…」

復旧作業を行っているゼスの魔法使いが嘆く。初めこそ魔法使いでないルークを蔑んでいた復旧作業員たちだが、アニスが妙にルークに懐き、ルークもアニスの暴走を最小限に抑えるよう上手く扱ってくれたため、今では魔法使いでないということに関係なく、復旧作業に来ていたゼスの魔法使い全員がルークに感謝しているのだった。一度千鶴子にこの事を話したら、「絶対に何が何でもゼスにスカウトするように！」と言われたほどだ。一応スカウトはしたが、やっぱりとルークには断られた。因みにキューティも初めのうちは折を見て復旧作業に顔を出していたのだが、年が明けてからあまりその姿を見なくなる。サイアスに聞いたところ、どうも治安隊隊長に出世したらしく、激務の日々を送っているらしい。

「さて、アイスの町に帰るのも久しぶりだな…」

ジウの町の復旧もほぼ完了に近づき、アニスも近々ゼスに戻るように辞令が下るとサイアスから内密に教えて貰ったルークはここらが潮時と考え、アイスに戻ることを決めたのだった。ここ数ヶ月、ギルド仕事も録に受けず、ゼスからの報奨金もジウの復旧に回してくれと断っていたためサイフの中が驚くほど軽い。この事もアイスの町に戻ろうと考えた要因の一端であった。1000GOLDも入っていないサイフを見て少し笑いながらルークが呟く。

「ま、それ以上に貴重な繋がりが手に入ったから良しとするか…」

それが、アニスとの繋がり。以前リーザスでアレキサンダーを鍛えたときのように、ルークはある理由から世界の強者との関わり合いを持つとする傾向がある。勿論、打算的な理由だけでジウの町の復旧を手伝ったり、アニスと付き合っていた訳ではない。アニスとここまで仲良く慣れたのは偶然の副産物だ。その偶然に感謝しながらルークは帰路につくのだった。

- アイスの町近辺 街道 -

かなみは全力で走っていた。少しでも早くリーザスの危機をランスに伝えるために。ランスがここ数ヶ月仕事をせずにアイスの町にいるのは知っていた。リアに命じられ、常にランスの動向を調べていたからだ。しかし、それとは逆にルークが数ヶ月アイスに戻っていないのも知っている。こちらはリアに命じられてはいなかったため、ランスの調査のついでに個人的に調べていたことであつたため、何処にいるかまでは把握できていなかった。何とかルークにも救援

を要請したい。かつて自分に忠臣への道を指し示してくれた人、ルーク。かなみはルークに絶対の信頼を置いていた。だが、居場所の判らないルークを悠長に捜している時間はない。ひとまずランスに救援を要請しなければ。息も絶え絶え、身体中には擦り傷の付いた状態で何とかかなみはアイスの町の前まで辿り着いた。

「……かなみか？」

不意に後ろから声を掛けられる。その声は、かなみが一番会いたかった人物の声。まさか、と思いながら振り返る。かなみがついてきた街道とは逆、ゼスからの街道からその人物は歩いてきていた。その姿を見た瞬間、自然と涙が頬を伝う。何という偶然、何という奇跡。

「どうしたんだ？また王女の命令か？」

「ルークさん！！」

気がつけば、かなみは街道を歩いてきていた男、ルークに抱きついていて。少し驚いた様子のルークだったが、かなみの体に付いた傷やそのただ事ではない様子を見て真剣な顔になる。

「どうした。何があった！」

「…お願い…リーザスを、リア様を助けて…」

・アイスの町 ランス家・

「うーむ…昨日新しく開発した大和流星松葉崩しMK2という体位はあまり楽しくなかったな」

「あれの影響で背中が痛いです…ランス様…」

「うむ、次は世間で噂の乳山嵐を試してみるか」

「ひんひん…出来れば普通なのでお願いします…」

朝食にへんでろばとカレー饅頭を食べながら、ランスとシルは昨晚の情事の話をしていた。食事を取りながらするような話ではないが、そこは流石ランスといったところか。この家は以前まで住んでいた借家ではない。カスタムの町の事件後、とある事件の報酬に無理矢理この一軒家をいただいたのだ。家賃を払う必要も無くなったランスは前よりも更にギルド仕事をしなくなっていた。その時、家の扉がノックされる。

「ランス様、お客様みたいです。出てきますね」

「放っておけ。そのうち諦めて帰るだろ」

「また借金取りでしょうか？ランス様、そろそろキースさんに仕事を貰わないと生活できませんよ」

「またその辺のアイテムや家具でも売ればいいだろ」

「もう売れるものは大半売ってしまいました…本当にお金ありませんよ」

「…ちつ。それにしてもいつまで扉叩いていやがるんだ。借金取りだったら殺すぞ」

その時、扉の外から声が聞こえてきた。

「…ランス、話がある。もし居留守なら開けてくれ」

聞き覚えのある声にシルがはっとする。以前二度も冒険で一緒になった、頼りになる冒険者。

「ランス様、この声は！」

ランスも声を聞いた瞬間ガバツと立ち上がり、扉に向かっていった。よかった、ランス様もあれだけお世話になったルークさんのことをちゃんと覚えていたんだ、とシルはホツとする。

「がはは、来たぞ！金づるだ！」

ズルツとシルがこける音が聞こえた。

訪問者は二人。ルークとリーザスの女忍者かなみであつた。大事な話があるという二人をとりあえず部屋に招き入れ、朝食の続きを取りながら話を聞くことにする。かなみの話を要約すると、突如現れたヘルマン軍にリーザス所が制圧され、リア王女が掴まつたということだつた。

「もぐもぐ、よく判つた。で、俺様に何をしろと言うのだ？」

「リア王女を助け出して欲しいのです。王女はランスさんが助けに来てくれるのを待っているのですよ」

「んー、いやだ。リアは俺様の女の一人ではあるが、そんな面倒な事に関われんな」

「そんな！？」

ランスの返答にかなみが机に身を乗り出す。隣にいたルークはその成り行きを黙って見守っていた。

「お願いします。それじゃアリア王女があまりにも可哀想です！」

「ふん、今時なんの見返りもなく人助けする奴なぞただの偽善者だ。俺様は英雄だが、偽善者じゃない！」

「ランス様…可哀想ですから協力してあげましょうよ…そうだ、リ

ア王女を助けるとご褒美が沢山貰えると思いますよ。ねえ、かなみさん！」

可哀想に思ったシルが助け船を出す。その事に内心感謝をしながら、かなみがその話に乗っかる。

「はい、リア王女を救って下さった暁には、ランスさんに沢山の財宝を用意させていただきます！」

「ふん、財宝は当然一生遊んで暮らせるだけ貰う。だがそれだけじゃ動く気になれんなあ。あともう一つ何か決め手になる物がないと」

そう言ってイヤらしい顔でかなみの体を見始めるランス。シルがランスのその顔に気がつき、まずいと内心想う。

「決め手ですか…私で出来ることならなんでもします。ですから、お願いします！」

「なんでも？なるほど、ではお前の体を……」

「リーザスを救ったら、きっとリーザス中の美女からモテモテだろうな」

「……………何？」

ランスの話を遮るように喋ったのはここまでほとんど黙っていたルーク。その話の内容にランスがピクリと反応する。ルークはそのまま話を続ける。

「そりやそうだろ。リーザスは今ヘルマンに支配されている。そこに颯爽と現れ、リーザスに平和を取り戻す戦士ランス。正に英雄だ」
「うむ、俺様は英雄だな」

「見れば顔も美形。女の子たちは思うだろう、なんて素敵なお方。あの方にこそ私の体を差し出すべきなんだわ」

「うむ、うむ、世界中の美女は俺様のものだからな」

「きゃー、英雄ランス様！私を抱いて下さい（裏声）」

「がはは、よし、俺様が抱いてやろう！」

「何言ってるの、次は私が抱いて貰うのよ！あと1000人は順番待ちしてるんだから（裏声）」

「なんと！俺様ハーレムではないか！」

「でもそんなに沢山の美女相手では前もって精力を溜めておかないと勿体ないわ。今の内からそれに備えておくべきよ、ランス様！（裏声）」

「がはははは、シイル！冒険の準備をしろ！リーザス中の美女が俺様を待っている！」

「はい、ランス様！」

かなみへの要求をすっかり忘れ、上機嫌で冒険の準備をするランス。シイルがランスの指示を受け装備やアイテムの準備をし始める。ランスに引き受けて貰え、ホツとするかなみ。ルークに礼を言うてくるが、自分の貞操の危機であったことには気がついていない様子だった。準備を続けるシイルがルークの側を通ったとき、ルークにしか聞こえない程度の声で呟いてきた。

「相変わらずお優しいですね、ルークさん」

「流石にあのまま放っておくのは可哀想だからな……」

程なくしてランスとシイルの冒険の準備が完了した。かなみはランスに持っていた白い盾を手渡す。

「ん？なんだ、これは？」

「リーザス王家に伝わる聖盾です。この間お渡しした聖剣、聖鎧とセットでお使い下さい」

「がはは、盾は邪魔になるから使わんのだが、貰える物は貰ってお

「うー」

そう言っ盾を受け取るランス。その時かなみはおかしな事に気がつく。ランスが装備しているのが聖剣と聖鎧でなく、安いロングソードとプレイトメイルなのだ。

「あの…聖剣と聖鎧はどこに…？」

「聖盾ならここにあるぞ」

「いえ、盾ではなく剣と鎧です。以前カスタムでお渡ししましたよね？」

「あれはだな、売った」

場が凍り付く。シルが申し訳なさそうにし、ルークがまたかと呆れた表情になる。かなみはランスの言葉がすぐには理解できず、ランスに聞いたです。

「……………売っ……………た……………？」

「中々豪華だったから高く売れたぞ。なあシル」

「はい、セットで2000GOLDでした」

それを聞いた瞬間、バターン、とかなみがその場に倒れ込んでしまふ。駆け寄ったルークに抱え起こされるが、上の空の様子でリーザスが滅んでしまふなどとぶつぶつ言っていた。

「なんだ？売ったらずかったのか？」

そのランスの言葉にガバツと立ち上がり、かなみが食って掛かる。

「当たり前です！あれを売るなんて、どうしてそんな事をしたんですか！！」

「俺様の持ち物をどうしようとか俺様の勝手だろう」

「すいません、かなみさん。実はお金に困って売ってしまったんです」

「かなみ、聖装備に拘るのには何か訳があるのか？」

ルークがかなみに尋ねる。かなみは一瞬考え込んだが、これから協力する三人には真実を話しておこう決断し、口を開く。

「リーザス城に攻め込んできたのはヘルマン軍だけじゃなかったの。彼らの中には魔人もいたわ」

「魔人だと!!」

人一倍反応したのはルーク。ルークの珍しいとも言える異常な反応に少し驚くかなみ。ランスとシルモルークに少し驚くが、それ以上に魔人が人間界に来ていたことに反応する。

「魔人か……」

「どうして……魔人は仲間割れで戦争しているはずです。人間界に来る余裕なんて無いはずなのに……」

「そうだ…戦争をしている……はずなんだ……」

「はい。でも確かに魔人がいたのです。彼らの狙いは、リーザス城の地下に隠されているカオスです」

「カオス？なんだそれは？」

「それは私にも判りません。ただ、リア王女とマリス様が魔神たちの狙いはカオスと言っていました」

「だが、リーザス城が陥落してリア王女も掴まった今、そのカオスは魔神の手に落ちているんじゃないのか？」

「いいえ、いくら魔人といえどそれは無理です。カオスは強力な封印で隠されています。その封印の解くための鍵が……」

「聖剣と聖鎧、そして聖盾と言う訳だな。駄目だ、詰んだな」

「誰のせいですか！！」

ランスがまるで人ごとのように言う。かなみがそれを聞いて激怒するが、横のルークが少し考え込んだ様子でかなみに尋ねる。

「そのカオスは必要な物なのか？」

「リア王女が私に言いました。魔人を倒すにはカオスが必要だと。そして、ランスにならそれを使いこなせると。魔人を倒せるくらいだから凄い武器か何かなんだと思います」

「……………そうか、以前話しに聞いていた剣……………カオスという名前だったのか……………」

ルークが独りごちる。その呟きは三人に届かなかったが、ランスがルークに尋ねる。

「そついえばお前は結界を破れる技があるんじゃないかったか？」

「えっ！そつなんですか！？」

「…………俺も一応考えてはいた。聖装備が無くても俺が解ける可能性はあるが…………もし解けなかったときは相手の懐、取り返しが付かない。それは最後の手段として、聖装備を確実に揃えておくべきだな」

ルークはかつて自分が封印を解くことの出来なかった扉を思い出す。ヘルマン東部に存在する古代の遺跡と呼ばれる迷宮、マルグリット迷宮。その第1層、偶然見つけた隠し扉の奥に佇んでいた巨大な扉。左右には二つずつ、竹を斜めに切ったような台座が置いてあった。扉には強力な結界が張っており、ルークがどんなに試してもその扉が開かれることはなかったのだ。もし万が一、リーザスの封印がそれと同等のものだったら全てが終わる。確実に封印を破る手段があるのであれば、そちらの準備をしておくにこしたことはないのだ。

「それでは、まずは武器屋に剣と鎧を買い戻しに行きましょう」
「既に誰かに買われてたらリーザスはおしまいだな、がはは！」
「だから、誰のせいだと思ってるんですか！！」

・アイスの町 武器屋・

「む？変なおっさんがいるぞ！武器屋の店番はレンチという美少女だったはずだが」
「お前がランスだな」

武器屋にいたのは普段店番をしているレンチではなく、その父親。ランスが入ってくるや否やギロリとランスを睨み付ける。

「俺はレンチの父親だ。お前がいる限り絶対に娘は店番に出さんぞ！」

「なんだ？俺様は何も悪いことはしてないぞ」
「悪いことをしていないだと……さんざん娘を騙して傷物にしたいくせにこのやろう！」

「ランス……お前な……」
「人聞きの悪い。俺様はレンチさんと合意の上でメイクラブしただけだ」

「ちよつと、喧嘩してないで聖剣と鎧の事を聞いてよ」

放っておくとどれだけの時間言い合いをするか判らなかったため、痺れを切らしたかなみが話に割って入る。

「おい、親父。俺様が以前ここに売ってやった聖剣と聖鎧だがまだ

あるか？」

「あるぜ。あんな高いモン中々買い手が付かなくて困ってたんだ」

「おお、ラッキーだ。なら返せ」

「馬鹿野郎！ただで返せるか！しっかり金を払いやがれ！」

「ちつ、確か300GOLDだったな」

「2000GOLDだ！利子が付いて2200GOLD。耳を揃えて払って貰おうか！」

「ま、店の売値じゃなくランスが売った値段にちょっと上乗せしてる分、良心的な値段だな」

ルークがそう言う。普通店に売ったものを買うときは売値の二倍が相場だ。顔と口は悪いが、そこそこには話せる親父のようだ。

「強欲親父め。仕方ない、払ってやろう。行け、ルーク！」

「ん？何の話だ？」

「緊急事態だ。俺様の代わりにお前が払え」

「いや、今俺も持ち合わせがないぞ。しばらくギルド仕事受けてなかったし」

「な、な、な、なんだとー！！」

ランスが絶叫する。随分と意気揚々と武器屋に向かったと思ったら、どうやら初めからルークの金を当てにしていたらしい。

「馬鹿者！お前から金を取ったら、ただのちよつと強い冒険者ではないか！俺様の下僕としての自覚が足りんぞ！！」

「人の金を当てにするな！というかい加減下僕扱いを止めろ！」

「え、何？聖剣と聖鎧買い戻せないの！？」

「すみません、かなみさん……」

「店の中で騒ぐんじゃねえ！」

店の中で口論を始める一行。そんな中ルークはサイアスの言葉を思い出していた。金に無頓着すぎる、いつか痛い目見るぞと。確かにゼスからの報酬を全てジウの町の復興資金に回すのではなく、少しくらい貰っておけばこんなことにはならなかったと少し反省をするルークだった。

「駄目だ、リーザス終わった」

「だから誰のせいだと思っているのよ！ランスー！！」

第37話 聖装備の秘密（後書き）

「人物」

ランス （3）

LV 10 / ∞

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

鬼畜冒険者。カスタムの事件後、一件だけ依頼をこなし自宅をゲット。その後はシイルと共に家でゴロゴロしていたためレベルが下がりまくった。ルークに乗せられリーザス奪還のために動く。

シイル・プライン （3）

LV 10 / 50

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ランスの奴隷。ランス同様冒険をしていなかったため、レベルがかなり下がる。普段は冒険をすることをあまりよく思わないシイルだが、知人の窮地のため、今回は率先して冒険に賛同する。

見当かなみ （3）

LV 27 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。カスタムでの再開後もしっかりと鍛錬を詰め、今では副将たちと模擬戦をしてもそれなりに渡り合えるほどには成長を遂げる。ランスのあんまりな振る舞いに、気がつけば呼び捨てにしていた。

レンチ

アイスの町の武器屋の娘。ランスに散々騙されて傷物にされ、家に引きこもってしまった。それが原因で二重人格になる。

「装備品」

リーザス聖盾

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる盾。防御力も非常に高いが、実はリーザス国にある封印の間の鍵としての役割も担っている。

プレートメール

安物の軽鎧。冒険者を始めならまずはこれ、という触れ込みである初期装備。ある程度の冒険者なら自然と装備しなくなる代物。

「料理／食材」

カレー饅頭

ピリリと辛い饅頭。へんではただではランスが満腹にならないため、シイルがこれも一緒に食卓に出すことが多い。

「その他」

マルグリット迷宮

ヘルマン東部にある古代遺跡。数百年にも渡り探索研究がされているが、その全体像は未だに判っていない。現在では冒険の名所とされており、数多くの冒険者が腕試しに立ち寄る。ルークも10年以上前一度だけこの迷宮に挑んだが、その際に第一層でおかしな扉を見つけることとなる。

第38話 兄と妹、師匠と弟子

・アイスの町 キースギルド・

「おつ、ランスじゃねえか。久しぶりだな、元気にやっとなるか。後ろにるのは…ルークか!？」

「少し金が入り用でな。楽で役得で簡単ですぐ終わって報酬ががっぱりの仕事を紹介しろ」

「んなもんねーよ!」

「あ、ハイニさん、お久しぶりです」

「シイルちゃん、ご丁寧にどうも」

聖剣と聖鎧を買い戻すための金を稼ぐため、キースギルドに仕事を受けに来たルークたち。武器屋の親父には手付け金として500 GOLD置いてきた。ルークが。ランスがキースに無茶な注文をし、シイルはキースの側に控えている美人秘書ハイニと挨拶をしていた。

「ええい、なら何か稼ぎのいい仕事を紹介しろ!」

「一足違いだつたな、ランス。美少女救出という美味しい仕事があったんだが、さっき決まったんだ。ウチのギルドの方針が早い者勝ちだから今から受けても良いが、無駄になると思うぞ」

「何だと。何処の馬の骨だか知らん奴が受けた仕事なぞ、俺様がそいつらよりも早く解決してやる!」

「受けたのはラーク& amp ;ノアだ」

「げっ!」

「あー、そりゃ無駄になるかもな」

キースがその名前を出した瞬間ランスがイヤそうな顔をする。ル

「ルクもその二人よりも早く解決するのは難しいかもと頭を掻く。そんなルクにラク&ノアを知らないかなみが尋ねる。

「その人たちは強いんですか？」

「キースギルドのエースだな。数多くの依頼をこなしてきた一流の剣士ラクと、神魔法も使う攻防一体の女戦士ノア。その上美美女。最近じゃ魔獣カースAを倒したことで、各地で敬意と信頼を得ている」

「もしかしてその方、ルクさんより、強いん……」

「なにに、他人事みたいに言ってやがる。カースAを倒したときはお前もラク&ノアと一緒にだったんだろ。ラクが言ってたぜ、ルクがいなければ勝てる相手じゃなかったのに、自分たちだけ有名になって申し訳ないってな」

かなみの問いかけに被せるようにキースが喋る。そうだったか、とルクはとぼけた様子。

「キース、その仕事の内容を教えろ。真の英雄である俺様がパパッと解決してやる！」

「やれやれ、無駄だとは思うがな。ハイニ、ランスにインダスの説明をしてやれ」

「はい、キースさん」

そう言っって秘書のハイニが資料を持って一步前に出てくる。

「今回の依頼は、インダス書房の会長であるジンゲル・剛・インダスの娘、ローラ・インダスを救出することです。報酬は2300G OLD。ローラさんの写真はこちらです」

そう言っってローラの写真を手渡される。茶色い髪の少女がまだあ

どけない様子で笑っている。

「ふむ、75点といったところだな」

「失礼な奴だな。十分可愛いじゃないか」

「あの…ルークさんはこういった方が好みで…？」

「ん？」

「あ、いえ、なんでもないです！」

「ほう」

かなみの様子を見て何かに気がついたようににやにやと笑うキース。そんな風に見たら駄目ですよ、とハイニがキースを軽く叱りながら話を続ける。

「ローラ・インダスはこの町の北東にあるリスの洞窟の主のリスに捕まっています。洞窟にはリス以外にも様々な魔物が生息しているようです」

「リス？そんなに強い魔物じゃないな。こりゃラークたちが苦戦するとは思えんな…」

「ふん、俺様の實力なら先に出発したラークごときすぐに追い抜いてやる。華麗に解決すれば、ノアさんも俺様の魅力に気がつき、ラークを捨てて俺様に体を許すだろう、がはは！」

「調子の良い奴だ」

「ハイニさんもそんなハゲ親父じゃなく、俺様の秘書にならないか？」

「…困ります」

「おいおい、勝手に人の秘書口説かないでくれるか。というか、ランスもルークもそろそろ結婚しないのか？俺はてつきりランスはシイルとすぐに結婚すると思っていたんだがな」

突然の話題変更は何故か当人たちではなくシイルとかなみに緊張

が走る。その様子を楽しんでいるのか、キースはにやにやとしながらランスとルークを見る。

「アホ、シイルは奴隷だ。それに俺様は結婚なんて面倒な事する気はない！」

シイルが後ろであからさまに落胆する。そのシイルをかなみが励ましている。

「残念だな。俺はお前の結婚式でクソ危ないスピーチをするのが楽しみなのに」

「叩けばいくらでも埃が出てくるからな、ランスは」

「それ以前の問題として、結婚式をしたところでお前は絶対に呼ばん！」

「こんだけ世話してやってるって言うのにつれない奴だ。ルークはどうなんだ？」

シイルを励ましていたかなみの耳が少しだけ大きくなる。

「んー……特にそういう相手はいないな。ランスやラークと違ってモテないしな」

今度はかなみが落ち込み、そのかなみをシイルが励ましていた。なんだかこの二人、すぐにでも仲良くなってしまうような雰囲気だった。

「何がモテないだ。何人にも告白されてるのに、ちつとも受けやしねえ。お陰でランスと違って危ないスピーチが出来ないじゃねえか」「そんなスピーチ、されないに越したことはないだろ」

「何だ、こいつ童貞か？」

「いや、そう言う訳じゃないみたいなんだが……一晩限りとか思い出にとかつてのが多いみたいだ。俺も前調査したんだが、こいつの元彼女みたいなのは見つからなかった」

「何、勝手に訳の判らん調査してるんだ！ランス、そろそろ行くぞ」「うむ、キースのせいで下らん時間を取った。もし先を越されていたら賠償して貰わんといかん」

「お前も話しに乗ってたじゃねーか……。あ、ハイニ。俺はまだちょっとルークと話がある。先にランスたちだけ見送ってくれ」

「？はい、判りました」

そう言って部屋を出て行こうとする一行の中からルークだけ引き留めるキース。どうやら二人きりで話したいことがあるらしい。何となく、ルークにも話の内容に予想がついたため、素直にそれに応じる。ランスたちがハイニ連れて行かれ、部屋の中にはキースとルークだけが残っていた。ルークは近くにあったソファーに腰掛ける。キースが葉巻に火をつけ、一度だけ吸ってから話を始めた。

「あー……聞いときたいことがあってな……」

「言いあぐねるのは柄じゃないぞ、キース」

「ランスのこと何だがな……あいつは……」

「……知っている。ランスがそうなんだろ？」

「！？気がついていたのか？」

驚くキースにルークが表情を変えずに答える。

「リーザスの誘拐事件の時に薄々と、この間のカスタムの時に確信……って感じだな」

「そこまで判っていて……ランスと一緒に仕事をしているのか？大丈夫……なのか？」

フツと自嘲気味にルークが笑う。

「あいつが死んだのは…ランスのせいじゃないだろ。自分のわがままで……ただあの場所での生活が楽しかったからというだけで……十年も帰らなかった……俺の責任だ」

「……あまり気にするな。お前も若かったんだ。それにしても……どうして気がついたんだ？」

「よく似ているよ。迷宮を探索するときのちょっとした癖から、戦い方までな」

そう言っただけで席を立つルーク。話は終わったとばかりに部屋を出て行くこととする。

「あいつに似てるから……一緒にいるのか？」

「そういう訳じゃないさ。何というか……放っておけないんだ」

それだけ言い残し部屋を出て行くルーク。録に吸えずに短くなつてしまった葉巻を名残惜しそうに灰皿に押しつけながら、キースは少し昔を思い出す。

GI1013

- アイスの町 キースギルド -

「おい、聞いたぞリムリア。最近変な坊主と一緒に冒険しているんだってな。独身なのにこぶつきか。ルークが聞いたら悲しむぞ」

キースが依頼を受けにやってきた女戦士に話しかける。黒髪で整った顔立ち。右目は見えておらず、金属製の盾を加工したものを眼

帯代わりにしている。片目ではあるが、この女戦士は紛れもないキースギルドのエースであった。

「ふん、こんな事で悲しむようなやわな兄貴じゃないさ。何せ、もう姿を眩ませて8年だ」

「どこで何やってるんだかな……」

「ま、死んじやいないだろ。帰ってきたら年数分全力で殴るけどな」
「それにしても、どういう気まぐれだ？お前がルーク以外と一緒に冒険をするなんて」

少し考えた後、女戦士はキースに向かってこう答えた。

「なんだか、放っておけなくてね」

LP0002

・アイスの町 キースギルド・

「放っておけないか…兄妹ってのは似るもんなのかねえ……」

キースが二本目の葉巻に火をつけ、フウッと煙を吐き出した。

・アイスの町 キースギルド前・

ルークがギルドから出てくるとランスたちが待っていた。ルークの姿を見るとランスが文句を言ってくる。

「遅いぞ！ルークに負けたらキースとお前のせいだぞ！」

「すまん、だが文句ならキースに言ってくれ」

「それじゃあ、リスの洞窟に向けて出発しましょう」

そうして一行はリスの洞窟へと旅立つことになる。アイスの町を出る直前、かなみがルークに話しかけられる。

「かなみ、さっきの質問の答えなんだが…」

「し、質問ですか！？」

先ほどのキースギルドのやりとりをかなみが思い出し、質問と言われ真っ先にルークの好みを聞いたことが思い浮かび、顔を赤くし焦り出す。

「ああ、俺とルーク、どっちが強いかってことだが…」

あつ、そっちかと落ち着きを取り戻した後、勘違いした自分が少し恥ずかしくなるかなみ。そのかなみの様子を不思議そうに見ながら、ルークは先ほどのかなみの質問に答える。

「まあ、負ける気はしないな」

実に平然と言つてのけるが、嫌味に聞こえない。その頼りがいのある姿を見ながら、偶然町の前で会えた奇跡に、かなみはもう一度深く感謝するのだった。

- リスの洞窟 入り口 -

「ありました、ランス様。この扉にL I S っ て書いてあります」

アイスの町を出て北東に進んだ三人。それほど町から離れていない場所に、その洞窟はあった。緑色の扉にご丁寧なL I S と書いてある。ここがリスの洞窟で間違いないだろう。

「よし、リスの洞窟に入るぞ」

「主はリスって事だが油断はするなよ。もしかしたら、恐ろしい相手が待ち構えているかもしれないからな」

「はい！ルークさん！」

こうして一行は洞窟に入っていく。このルークの予想は的中する。今現在、このリスの洞窟には恐るべき相手が待ち構えているのだった。

・リスの洞窟 三層・

「はあっ！」

「きゃああー」

ラークが女の子モンスターのパステルを倒す。その横ではノアがNEOぬぼぼを斬り伏せていた。この二人がラーク & a m p ;ノア。ここまで来る間に出てきたモンスターをものともせず、ほぼ無傷で三層まで辿り着いていた。

「大丈夫か、ノア？」

「ええ、大丈夫よ。そろそろローラさんを見つけられると良いんだけど……」

「リスがそう洞窟の奥深くまで行けるとは思えない。そろそろ最深处のはずだ」

そう言つてラークとノアは洞窟を進んでいくラーク。流石は歴戦の冒険者といったところか、その予想は当たつていた。もう間もなくラークたちはリスとローラがいる部屋に辿り着く。そうすればリスはラークの敵ではない。ルークたちよりも早く、この依頼を達成するはずだった。そう、このリスの洞窟が普段通りの状態であつたなら、だ。少し開けた場所に出たラークとノア、見ればその前に一人の女性が立つていた。赤い髪に、ボンテージのようなセクシーな黒い服を身に纏つている。

「ローラさん…ではないわね？」

「…ノア、何かおかしい。気を抜くな。貴方は？こんな洞窟の奥深くで一体何を？」

冷静に考えれば普通の女性がこんな洞窟の奥深くにいるはずがないのだ。だがそれ以上に、目の前の女の異質な雰囲気にはラークは緊張を解けずにいた。女がにっと笑う。

「貴方…名前は？」

「……キースギルド所属、ラークだ！」

「聖剣と聖鎧、そして聖盾。持つてるんでしょ？寄越しなさい」

「……………何のことだ？そんな物は知らない」

「ふふつ、嘘を言つても無駄。サテラには判るんだから……」

「嘘なんて言つてないわ！私たちは本当にそんなもの知らないの」

「ふーん…じゃあさ、ちよつといじわるすれば…嘘かどうか判るわよねっ！…」

「「…？」」

瞬間、サテラと名乗った女の後ろに二つの巨大な石の塊が現れる。見ればそれは人の形をしている。

「まさか…ガーディアンだともいうのか…」

「あんなに精巧なものが存在するの…ラーク…」

「ノア、俺の側から離れるな！」

「シーザー、イシス。やって…！」

・リスの洞窟 二層・

「ふん、思った通り大した敵はいないな。予想がはずれたなラーク」

「だから油断はするなど言ってるだろ。それにしてもかなみ、また腕を上げたな」

「あ、ありがとうございます！」

ラークたちもここまでほぼ無傷で進んでいた。出てくるのは雑魚モンスターばかり、その上かなみが以前よりも遙かに成長を遂げているのだ。ランスとシルのレベルが下がっているとはいえ、苦戦するようなダンジョンではなかった。その時、下の階から女性の悲鳴が聞こえる。

「この声は……ノアの声だ！」

「急ぐぞラーク！ラークの奴はどうでもいいが、ノアさんのピンチには俺様が颯爽と駆けつけねば！」

駆け出すラークとランス。シルとかなみもそれに続き、一行は三層へと下りていった。ラークたちが通ったばかりだったのだろうか、それとも何かに怯えているのだろうか、理由は判らないが何故

かモンスターが出現せず、一直線にルークたちは駆けていく。すると、少し開けた場所に出る。そこには地に倒れたボロボロの姿のラークとそれを足蹴にする女、それと二体のガーディアンとノアがいた。ガーディアンの一体は女の側に控えており、もう一体はノアを拘束している。こちらルーク同様かなりの傷を負っている。

「まさか…ラークとノアがやられたのか！？何者だ…」

「イシス。まだ正直に言わないから、ちょっとその女いじめてあげて」

部屋の入り口にいるこちらにはまだ気がついていないようで、女はイシスと呼ばれたガーディアンに指示を出す。そのガーディアンは素早くノアの服を引きちぎる。

「いや…ラーク、助けて…」

「やめろ！ノアを離してくれ！！頼む！！」

「あははは、どうして人間なんかと交渉しないといけない？さっさと喋っちゃえばいいのに」

「本当に知らないんだ…」

「……イシス。やって！」

己の巨大な物をノアの中に挿入しようとするイシス。その瞬間、何者かがイシスに飛びかかってきた。ルークだ。その剣を腕で受けるが、拍子にノアを離してしまう。ルークは素早くノアを抱きかかえると、ガーディアンから一歩離れる。

「……誰？」

「る、ルークさん！」

「ルークだけじゃない！この英雄の俺様もいるぞ！！」

「ルーク…それにランスもか…すまない…気をつける、こいつら普通じゃない！」

ルークとノアが突然のルークの登場に驚く。危ういところを救って貰った形になるが、目の前の敵の強さを実感している二人は安堵の表情を浮かべはしなかった。かなみが素早くルークからノアを受け取り、シイルがヒーリングを掛ける。目の前のガーディアンに対し臨戦態勢のルークだが、ランスは女にどうとうと近づいていき、高らかに宣言した。

「がはは、誰だと言ったな？この俺様こそ、愛と正義のヒーロー、ランス様だ！！こんな酷い行いを見過ごすわけにはいかん。この俺様の正義の熱棒で更正させてやる。がははははは！！」

「……………馬鹿？」

「なんだとおおお！！」

ランスを蔑んだ目で見ながら、女がふん、と鼻を鳴らす。

「本当に持っていないみたいだからもういいわ。シーザー、イシス、帰るわよ。サテラ、馬鹿は嫌いな。馬鹿が移る前に帰らなきゃ」

「俺様が馬鹿だと、ええい、待て！俺様が更正させてやる！！」

「そうです、ランス様は馬鹿じゃないです！」

この場から撤退しようとする女に対し、ランスとシイルが抗議する。が、ルークは女の名前を聞いて目を見開く。

「サテラ…だと…」

「今日は沢山遊んだから疲れたわ。よつと！」

そう言ってシーザーの肩に飛び乗り、この場を素早く離脱する。サテラに向かってランスが叫ぶ。

「待て、逃げるのか！卑怯者め！！」

「どうして魔人であるこのサテラが人間ごときに逃げなきゃならない。見逃してあげるんだから感謝するんだな」

そう言い残し、サテラとガーディアンが消えた。ランスが悔しそうにサテラが消えた方向に文句を言い、かなみとシルはサテラたちがいなくなって気が抜けたのか、気を失ったラークとノアを介抱していた。そんな中、ルークが小さな声で呟く。

「馬鹿な…サテラだと…なぜ…なぜだ…」

それは、普通であれば知り得ないはずの情報。人の身が辿り着くことのないはずの領域。

「なぜホーネット派の魔人が…ここにいるんだ！」

その呟きは誰の耳にも届くことはなかった。

第38話 兄と妹、師匠と弟子（後書き）

「人物」

リムリア・グラント （半オリ）

LV 32 / 70 （生前）

技能 剣戦闘LV2 冒険LV1

ルークの双子の妹でキースギルド所属の冒険者。GI1014年、冒険中にその命を落とす。冒険先で拾ってきた悪ガキの性根を叩き直すため、冒険に連れ歩くことになる。その悪ガキはリムリアに冒険のいろはを教わり、師匠と弟子のような関係になる。その悪ガキが今使っている必殺技も自分で考えたとはいっているが、リムリアが使っていた技に影響を受けている。そのリムリアが使っていた技も、元々は兄が使っていた技の影響を強く受けている。そのため、兄と悪ガキが使う技も、よく似ている。

キース・ゴールド （3）

アイスの町にあるキースギルドの主。ルークとランスの過去を知る数少ない人物であり、その動向を見守っている。秘書のハイニとは恋人関係にある。

ハイニ

キースギルドの優秀な美人秘書。きりりとしたメガネとスーツが決まっている出来る女。ハイニ・ゴールドという名前になる日も近いのでは、と噂されている。

「モンスター」

魔獣カースA

かつてゼスの2級市民を恐怖のどんぞりに陥れた恐るべきモンス

ター。ラーク & amp ;ノアとルークが協力して打ち倒す。身体中つぎはぎだらけで、まるで何者かが人工的に造ったかのような出で立ちであった。

ぬぼぼ

生まれたときから実体を持たない霊体系モンスター。下級モンスターのため、霊体ではあるが武器でも簡単に倒すことが出来る。NEOぬぼぼという上位種もいるが、こちらもあまり強くない。

パステル

全滅危惧種女の子モンスター。鎧や盾で武装した金髪の戦士。昔は各地に生息したが、最近はめっぽう見なくなり全滅危惧種入り。

第39話 それぞれの思惑

・アイスの町 キースギルド・

「まさかラーク&ノアがやられるとは…」

ラークたちはラークとノアを放つては置けないと、一度アイスの町に戻ってきていた。ノアを病院に連れて行く際、ラーク自身も深手であるにも関わらず、先にキースギルドに報告に行くと言って分かれたのだが、姿が見えない。

「ふん、所詮は二流の冒険者だったということだ。ノアさんを危険な目に遭わせやがって。ま、これでこの仕事を受けているのは俺様たちだけだな」

「そうなるな。ちゃんと成功させろよ」

「キース、ラークは？」

「…修行の旅に出るんだとよ。自分の未熟さを知ったって言ってたぜ」

「相手が魔人じゃ仕方ないと思うんだがな…」

「ノアを守れなかったのがショックだったみたいだ。それよりも、本当に魔人がいたのか？」

キースがラークたちにそう尋ねる。隣のハイニが若干怯えた様子だった。無理もない、人類の敵である魔人が現れたのだ。

「…相手はそう名乗っていたな。本当かどうかは判らんが」

「多分本当だと思います。あの女、最初は気がつかなかったけど、リーザス城で皇子の後ろに控えていた女だと思う…」

そう話に入ってきたのはかなみ。これが魔人の力と豪語していたパットン皇子の後ろに控えていた三人の内の一人があのだとすれば、魔人であるという話も信憑性が出てくる。ルークはそれとは別に、彼女の名前から信憑性を持っていたのだが、それは誰にも言っていない。かなみの言葉を聞き終えた後、キースに向き直る。

「……だそうだ。」

「ちっ、魔人がリーザスにいるってのかよ。勘弁してくれ……」

悪態をつきながらため息を吐くキース。ハイ二を抱き寄せ、その不安を和らげてやっている。

「とにかく事件を解決しないとな。いつまでもこうしていても事態は悪化する一方だ」

「うむ、その前にノアさんの様子を見に行くぞ。弱いルークに愛想を尽かした今なら俺様に股を開くかもしれんからな、がはは！」

「あ、病院に行くなら言伝を預かってくれるか。ルークからノアにだ。「すまない、弱い俺を許さないでくれ。君は平穩に暮らしてくれ」、だよ」

「……勝手な男だ。ノアの好意にも気づいているだろうに」

「ノアがもう戦えないことも察したんだろうな」

そう、ノアはもう戦うことの出来ない体になっていた。イシスに犯されそうになった恐怖心から精神を傷つけられ、武器を持つことが出来なくなっていた。ルークはそれを察し、修行の旅に出る自分についてきてくれとは言えなかったのだろう。

「これはルークが置いてった金だ。500GOLD。お前らにだよ」

「……ふん、こんなはした金貰ったところで聖剣と鎧を買い戻すには足りんな。事件解決したら金も十分だし、全く持って俺様たちには不用品な金だ。ああ、最後まで使えん男だ」

そう悪態をつきながら部屋を出て行こうとするランス。出て行く直前でキースに振り返り、こう指示を出した。

「俺様たちには不要だからノアさんの入院費にでも充ててやれ」
「ランス様……」

「ふん、さつさとノアさんに会いに行くぞ！」

「……ちよつと見直したわ」

「ああいう奴なんだよ」

さつさと出て行ってしまったランスの後を三人が追うが、キースがルークを引き留める。

「ルーク、お前にも言伝を預かってる」

「俺にもか？」

「ああ。「必ず強くなって帰ってくる。その時はもう一度一緒に冒険をしてくれ」、だよ」

「……確かに承った。期待して待っているとするかな」

修行の旅というのは大変なものだ。その上あのラークの状況では自分を無理に追い込みかねない。無茶な修行をして分不相応なモンスターと戦い、命を落とす冒険者も少なくない。だけど、あいつは必ず戻ってくる。そうルークは確信しながらギルドを後にした。

「そうですか…ラークが…」

「ああ、確かにそう言っていたらしい」

「ノアさん、お体の調子はどうなんですか？」

「うん、あまり大事には至ってなかったみたいで、これならすぐに退院出来そうなの。ラークさん、ランスさん。ありがとうございます。あの時二人がいなければきっと私たち…」

そう言いながら震え始めるノア。あの時の恐怖を思い出してしまったのだらう。確かに体は大事には至っていない。問題は心。同じ女性のシルとかなみが側に寄っていき、手を握ってあげている。少しずつだが震えが収まってくる。

「ごめんなさい、私…」

「気にしなくていい」

「うむ、美人は震えていても美人だ」

「……もう聞いているかも知れませんが、冒険者は止めて田舎に帰ろうと思っています」

「……そうか」

「いい気になっていたんだと思います。無敵のヒーローだ、なんて町の人たちに言われて。あのサテラという女に会って…初めて冒険を本当の意味で怖いと思いました。全然…無敵のヒーローなんかじゃなかった…ただの臆病な女です…」

そう言って涙を零すノア。掛ける言葉が見つからず、部屋が静かになる中、何度もラーク&ノアと行動を共にしたラークが口を開く。

「ヒーローだったさ」

「そんなこと…」

「魔獣カースAを倒したとき、何人もの子供たちが笑顔で駆け寄ってきてくれただろ。あの時だけじゃない、沢山の冒険をしてきたんだ。何人もの人に感謝をされてきたはずだ」

ノアの頭の中を今までの冒険がよぎる。大変なこともあった。嫌なことを言われることもあった。でも、事件を解決すると必ずみんな笑顔で感謝をしてくれた。駆け寄ってくる子供たち、涙を流しながら感謝する老人。その顔が、次々と浮かぶ。

「その人たちにとって…君らは間違いなくヒーローだったさ」
「……ルークさん、ありがとうございます」

ノアが先ほどよりも更に大粒の涙を流す。だが、その涙が持つ意味合いは大きく変わっていた。まだノアさんとやっていないと騒ぐランスを引っ張り、部屋を出て行こうとする一行にノアが後ろから声を掛ける。

「すぐには…無理だと思います。でも…またいつか、私が冒険者として戻って来られたら…その時は一緒に…」

ラークの時と違い、今度は全員が振り返り返事をする。

「がはは、もつと美女になって俺様の元に来るといい。可愛がつてやるぞ」

「ノアさん。私、ずっと待っています！」

「ほとんど初対面なのにこういうのも何ですけど…頑張ってください」

「ヒーローに出来ないことはないだろ？期待して待っているよ！」

「必ず…必ず戻ってきます！」

・リスの洞窟 三層・

ノアと別れたルークたちは、再びリスの洞窟にやってきていた。捕らえられているローラを早く救い出してあげる必要があるからだ。勿論聖装備を買い直すためでもあるが、モンスターに捕らえられている少女を長いこと待たせるわけにもいかない。サテラたちと出会った場所よりも更に奥に進むと、奥で話し声が聞こえてきた。ローラか、あるいはサテラたち魔人がまだいるのか、四人に緊張が走る。声のした方へ進んでいくと、普通のリスと比べると中々に巨大なりすと、その横に座った少女が話していた。少女の顔は写真で見た顔と一致している。彼女がローラだ。だが、何か様子がおかしい。

「ローラ、僕は君のためならどんな事でもするよ」

「うれしい…でも私にとっての幸せは貴方がいつも側にいてくれる事よ…」

「なんてかわいいんだ…いつか人と魔物の仲が認めて貰える時代が来る。それまでの辛抱だよ」

「はい。お父様とお母様も貴方と話をすればきっと良さが判るはずなのに…」

「…ん？僕たちの愛を引き裂こうとする邪魔者が来たみたいだ」
「え？」

あちらもルークたちに気がついたようで、ジッとこちらを睨んでくる。ルークが頭を掻きながらため息をつく。

「参ったな…モンスターに捕らわれたと聞いていたが…」

「どう見てもあの二人、愛し合っていますよね。種族を越えた愛、ちよつと素敵かも…」

「何者だ！一体何をしに来た！！」

ローラを後ろに庇うようにしながらこちらに向かって叫ぶリス。
ランスが剣先をリスに向けながらそれに応える。

「がはは、そのローラちゃんを返して貰おうか！リス風情が美少女と愛し合おうなんぞ100億年早いわ！」

「リス…私恐い…」

「ローラ、奥の部屋に隠れていて。それと、奥の二人を呼んできてくれるかい」

「はい。気をつけてね、リス…」

そう言っつてローラは奥の部屋へと下がっていく。

「あ、こら！ローラちゃんを返せ！」

「断る！僕とローラは愛し合っているんだ！邪魔をするな！！」

「…三人とも、気を抜くな。今奥の二人と言っていた。新手がいるぞ」

「はい、ルークさん」

「その通り！ローラを僕のいるここまで護衛してくれた二人だ！とても強いんだぞ！謝って帰るなら今のうちだ！」

奥から二人分の足音が聞こえてくる。ランスはふてぶてしい態度のままだが、ルークはいつでも真空斬を撃てるように構え、かなみも忍剣を握り、シイルが後ろでいつでもサポートできるよう身構える。なにせ先ほど会った相手が魔人。否が応でも緊張感が増す。奥から現れたのは二人の女性だった。が、その容姿には見覚えがある。

「…あ！シャイラとネイじゃないか！」

「知り合いですか、ルークさん？」

「知り合いというか…理不尽な恨みを買っているというか…」

現れたのはかつて誘拐事件の時に会った盗賊シャイラと、カスタムの事件の時に会った冒険者のネイであった。

「あ、貴方たち、ランスとルーク!!」

「ここで会ったが100年目!二人ともぶつ殺してやる!」

「あー…やっぱ俺も恨み買っているのね。というかお前ら、なんで一緒に?」

「酒場でお前らの愚痴で意気投合してな。今じゃ共に鍛練を積む相棒さ!」

「鍛え上げた私たちの力、見せてあげるわ!」

そう言つて武器を取る二人。リスも臨戦態勢に入る。その時、部屋にランスの爆笑が響いた。

「がははは。とっても強い?弱すぎて盗賊団を抜け出せなかったへっぽこ盗賊と、水の彫像なんかにやられたへっぽこ冒険者ではないか。うむ、そんな弱い二人はもう一度この俺様が可愛がつてやる」

「「こ、こ、殺す!!!」」

「火に油注ぐなよ…」

目を血走らせながら飛びかってくる二人。リスも二人に続いて駆けてくる。ランスがネイの相手をし、ルークがシャイラの相手をする形になるが、ルークに迫ったシャイラの剣をかなみが防ぐ。

「ルークさんはリスをお願いします。彼女は私が!」

「了解だ」

「くっ…小娘が…あたしの邪魔をするな!」

短剣を振るいながら、器用にも懐から投げナイフをかなみに放ってくる。確かに以前よりは成長しているらしい。だが、成長率という点では相手が悪すぎる。かなみは飛んできたナイフを全て忍剣で捌き、手裏剣を投げる。シャイラのナイフと違い、ほぼノーモーションだ。

「何！？くっ…」

「やつ！！」

「がつ…」

突然飛んできた手裏剣を無理に避けたため体勢を崩したシャイラの間を見逃さず、腹部に膝蹴りを入れる。前のめりに倒れるシャイラの後ろに素早く回り込み、腕を掴んで後ろに回し、そのまま地面に体を叩きつけ拘束する。

「なっ…なんだこいつ…強い…」

「これ以上の抵抗は無駄です。おとなしくして下さい」

ルークの助言を受け鍛錬を続けていたかなみ。既にシャイラ程度が相手になるレベルではない。一瞬のうちに決着がつく。その華麗な動きにシルがぱちぱちと拍手し、かなみが少し顔を赤らめる。

「僕たちの愛の邪魔をするな！」

「応援してあげたいのはやまやまなんだが、こちらも事情があつてね。スマンな」

巨体から繰り出される鋭い爪の攻撃を難なく妃円の剣で受けながら、峰で攻撃を加えるルーク。あの二人の様子を見てしまつては、流石に殺すのは忍びない。攻撃が当たらず焦つたのか、大振りにな

る。がら空きの腹に剣の柄の部分を勢いよく押し込む。

「みぎゃあー！」

そのまま崩れ落ちるリス。悔しそうに涙を零しながら言葉を漏らす。

「ちくしょう…ちくしょう…僕たちが何をしたって言うんだ」

「少なくともローラちゃんのお親に心配は掛けたな。確かに人間と魔物、受け入れられない恋かも知れないが、だからといって洞窟に引きこもって言い訳じゃないだろ」

「でも…僕たちの愛をどうやって認めて貰えれば…」

「他人事でしかないから無責任な発言しか出来ないが…誠心誠意伝えられないんじゃないか？」

「いや、そんなことでは無理だな。人間になれ！気合いと根性があれば人間になぞ簡単になれる！」

「んな、無責任な…」

後ろから無茶な野次を飛ばしてきたランスに振り返る。すると、ランスは思いつきりネイとお楽しみの最中だった。ネイの口を抑え、ばれないようにこっそりとやっていたらしい。ルークはリスと戦い、かなみも暴れるシャイラを取り押さえていたため気がつかなかった。

「またか！またこの展開か！！」

「ちよっ…こんなところで何してるのよ！！」

「ランス様…」

「うっつ…誰か助けて…」

「がはは、久しぶりのネイちゃんの体はグッドだ！」

「（…ネイには悪いが、あっちの相手じゃなくて良かった）」

毎度おなじみの展開に頭を抱えるルーク。その後ろで、リスが決意したように言葉を発する。

「人間…判った。僕は人間になる！」

「おい、そんな簡単に出来る事じゃ…」

「待っていてくれ、ローラ！僕は必ず人間になって帰ってくる！」

そう言っただけで走って行ってしまいうリス。そのリスをルークたちが見送ると、突然奥の部屋に隠れていたはずのローラが出てくる。どうやらリスのことが心配で出てきてしまったらしい。辺りを見回し、リスがいないことに気がつく。

「…リスは？リスは何処へ行ったの？…まさか、殺したの？この魔物殺し！魔物だって生きているのよ！」

「いや…リスは別に死んでは…」

「リスはランスに殺されて経験値になってしまったの！ローラさん、彼らを許しちゃ駄目！」

「そうだ！あたしもこの目で確かに見たぞ！」

「こらっ！そう言うことというのはどの口だ？この口か？ならば俺様の皇帝液でお仕置きしてやろう。とおっ！」

「あんっ！」

混乱するローラに真実を話そうとするルークだが、その声をランスに犯されていたネイが遮り、ローラに嘘を吹き込む。シャイラムそれに便乗する。ローラがジッとこちらを涙目で睨んでくる。どうやら信じてしまったらしい。

「絶対…絶対に許さないんだから！仕返ししてやる…覚えておきなさい、ばかー！」

「あっ、話を聞いて、ローラさん！」

リス同様、走っていつてしまうローラをかなみが呼び止めようとするが、その際にシャイラの拘束が緩んでしまう。

「よし、抜けた。逃げるよ、ネイ！」

「あつ、しまった！」

「こら、待て！まだネイちゃんとかやっていないんだぞ！！」

ネイに一発出して丁度まったりしていたランスの横からネイを奪還し、ローラの後に続いて二人も走っていつてしまう。

「おぼえてろー！！」

最後に三流小悪党のような捨て台詞を残していつた。なんだろう、凄くどうでもいいところでその内また会いそうな気がする、と考えるルークだった。

・リーザス城 ヘルマン軍司令部・

ヘルマン軍司令部、元々は王の間であつた部屋だ。玉座に腰掛けしているのはこの侵攻戦の首謀者、ヘルマン皇子パットン。皇子にしてはマシな方ではあるが、戦士として見ればあまり筋肉のついていないやせ形の青い髪の子。ワインを飲み、側には全裸の女性を数人侍らせている。彼女たちはリーザス城で働いていたメイドたちだ。屈辱なのだろう、その目には涙を浮かべている。

「はっはっは。リーザス全土は、ほぼ我が第3軍が制圧した。これもお前ら魔人の協力があつたからだな。感謝しているぞ、ノス」

「はっ！」

返事をしたのはパットンの後ろに控えていた男。白い髭を蓄え、老人のようにも見えるが、2メートルはゆうに越すほどの巨体。そして、パットンの言ったようにこの男も魔人であった。

「それにしてもお前らの褒美は本当にリア王女だけでいいのか？褒美が欲しければいくらでも言え。何でも与えてやるぞ。何せこの私はヘルマンの皇子。いや、この成功で最早王の座も目の前というものだ！はははははは！」

「いえ、リア王女だけで十分です」

「くくく、本国で私のことを馬鹿にしていた奴らよ。震え上がるがいい。これからは、このパットン様の時代よ！」

「……………」

「ノス、お前たちも俺によく尽くせよ。私が天下を取った暁には、お前たちにも領地を分けてやろう」

「…恐れ入ります。私は少し所用を思い出した故、これにて」

「…つまらん男だ。うつ、ははは、その女、うまいぞ。褒美に1000GOLDくれてやろう。どうだ、嬉しいだろう？わははははは」

口で奉仕していたメイドに上機嫌に笑うパットン。部屋を出て行くノスを見送りながら、先ほどまでの高笑いを止め、思い詰めた表情になる。

「そうだ…これで…次の王は俺だ。くそ親父にも…パメラのババアにも…ステッセルの野郎にも…誰にも文句は言わせない。そのためなら…魔人だって利用してやる」

・リーザス城 地下室への通路・

通路を歩くのは二人の男。一人はノス。もう一人は金髪の美男子。この男が三人目の魔人、アイゼル。立場はノスの方が上なのだろうか。先ゆくノスの後について歩いている。そのアイセルにノスが問いかける。

「我らが動き、主君ホーネット様には気がつかれていないな」

「はっ、ヘルマン第3軍前面で目立っていますので、我らのことには気がついていないでしょう」

「うむ、なんとしてもホーネット様に気づかれる前にカオスを手に入れるのだ。あれさえ手に入れば、我らの天下だ」

「しかし、何故ホーネット様には内密で動いているのですか」

その問いかけに、一瞬だけノスの眉が動くが、すぐに何事もなかったかのように返事をする。

「あまり大げさに動いてはケイブリス共にも感づかれるからな。なに、成功すればホーネット様もお喜びになる。気にするな」

「……はっ！」

「アイゼル、お前は引き続きサテラと共に情報を集めろ」

「お任せを」

「我らが時代まで、あとしばらくの辛抱だ」

話しているうちに二人は地下牢へと辿り着く。そこではリアとマリスがヘルマンの女兵士、サヤに鞭で拷問を受けていた。その美しい身体には、多くのアザが出来てしまっている。

「うふふ、王女さん。そろそろ話してくれてもいいんじゃないの？」

さあ、聖装備を渡した相手の名前を言いなさい！」

「……ふふ、いやよ」

「このっ！これだけの拷問を受けてまだ言わないのか！むかつくだよっ！」

「くっ……あぁっ……」

既に普通の女性が耐えられる範疇を超えた拷問を受けている二人しかし、未だその口は固く閉ざされていた。そのリアとマリスの様子を見ながら、アイゼルが独りごちる。

「下等な人間ながら、見事。これぞ上に立つ者だ。…あの馬鹿皇子とは違う」

人間を下に見ているアイゼルだが、二人の覚悟には素直に感嘆の声を出す。かといって拷問の手を緩めるわけではない。サヤに拷問を更に強めるよう指示を出す。全ては、魔人界の統一のために。

第39話 それぞれの思惑（後書き）

「人物」

ルーク （3）

LV 25 / 35

技能 剣戦闘LV1

キースギルド所属の冒険者。キースギルドの中でもトップクラスの実力者だが、サテラの前に敗れ、修行の旅に出る。いつかまた、ルークの前に姿を現すこともあるかもしれない。

ノア・セーリング （3）

LV 20 / 33

技能 神魔法LV1

キースギルド所属の冒険者。ルークが認めるほどの実力派コンビだったが、サテラに敗れた上に、ガーディアンに犯されそうになった恐怖で戦えなくなってしまう。田舎で療養することを決めた彼女だが、ルークたちとの約束通り、いつの日かまた冒険者として戻ってくるかもしれない。

シャイラ・レス （オリモブ）

LV 8 / 25

技能 剣戦闘LV1 シーフLV1

ランスとルークに恨みを持つ元盗賊。ローラに雇われてリスの洞窟までの警護を担当していた。捨て台詞を吐いて逃走。今回はランスに犯されずホッとしている。

ネイ・ウーロン

LV 12 / 27

技能 シーフLV1

ランスとルークに恨みを持つ女冒険者。シャイラ同様、ローラに雇われていた。今回もランスに犯され、恨みを更に強くする。

サヤ

ヘルマン第3軍所属の女兵士。拷問好きであり、リアたちの拷問役として拔擢される。実は処女である。

「モンスター」
リス

丸い者と呼ばれる種族の最終進化形の一つ。白い毛に覆われており、大きさは様々だが基本的には小柄なものが多い。知性は高いが戦闘能力は低い。

「装備品」

忍剣

JAPANから輸入した忍者用の短剣。かなみが通販で購入。斬れ味はそこそこ。

手裏剣

忍者の必需品。こちらにも基本的に通販で購入。通販大好きかなみちゃん。

第40話 奪われた聖剣と聖鎧

・アイスの町 武器屋前・

「あー、もう閉まっていますね」

「ま、時間を考えると仕方がないか」

リスの洞窟から戻ったルークたちだったが、その頃にはもう辺りは暗くなっていた。一度ラークたちを連れて町に戻っていたため、思っていたよりも時間を取られていたのだ。

「ギルドへの報告も明日にするか。疲れたしさっさと寝るぞ、シール」

「くっ…今は少しでも時間が惜しいのに…」

「かなみ、気持ちは判る。リアたちの安否は心配だ。だが、あまり根を詰めすぎてもまずい。俺たちが倒れたら…本当にリーザスは終わってしまいかねん」

「…はい」

俯くかなみの肩に手を乗せるルーク。

「大丈夫。リアもリーザスも、必ず救うさ」

「ルークさんが言うところ……なんだか信用が出来ます」

「ん？そうか？」

「はい！」

「聖剣と聖鎧買い戻し目前だな、がはは！気分がいいからお前ら二人もウチに泊めてやるぞ。寝るのは床だがな」

「へいへい、ありがとございます」

「あの、お布団は敷かせていただきますから」
「ありがとうね、シルちゃん」

武器屋の前を離れ、ランスの家に向かう一行。その四人の背中を見送る女が三人いたことに、ルークたちは気がついていなかった。

「……聞いたかい？」

「……ええ、目的はこの武器屋にある聖剣と聖鎧みたいね」

「……ふふふ」

・アイスの町 キースギルド・

「依頼は達成したぞ。さあ、報酬を寄越せ！」

翌朝、キースギルドに報告に来たルークたち。ローラは逃げて行ってしまったので依頼達成と言えるかは微妙な状況であったが、キースの口から意外な言葉が飛び出す。

「ああ、インダス家から無事に娘が帰ってきたという連絡を受けている。依頼達成だな」

「……ちゃんと帰っていたのか。よかった」

「しかし、ローラ・インダスは帰ってからずっと泣いていたそうだが、何かしたんじゃないだろうな？」

「ローラには何もしてないな。……ローラにはな」

「がはは、ネイちゃんの体はしつぽりと楽しんだがな」

「……けどもの」

かなみがランスに聞こえないようボソツと呟く。実は昨晚、ルー

クとかなみが寝ている横でランスはシイルと情事を行っていたのだ。中々寝付けなかったことに、それまで積み重なってきたものも合わさり、すっかりランスに対して敬語を使わなくなっていた。

「ネイ？誰だそりゃ？まあいいか、ほらよ。これが報酬の2300 GOLDだ。確認しろ」

「シイル、確認しろ。1GOLDのずれも見逃すんじゃないぞ」

「はい、ランス様。ひのふの…ぴったり2300GOLDあります」

「ちっ、少しくらいサービスしろ。強欲ジジイが」

「ま、何はともあれ、これで聖剣と聖鎧を買い戻せるな。ようやく
第一歩だ」

「うむ、だいぶ遠回りをしたがな」

「…だから…誰のせいだと……」

2300GOLDを受け取るランス。その無責任な発言にかなみの額に青筋が浮かぶ。部屋を出て行く前にルークがキースに尋ねる。

「そういえばリーザスに何か動きはあったか？」

「知らないな。どこで戦争しようと俺には関係ない。流石に魔人に暴れられちゃ困るがな。いや、戦争が起こる事によって仕事が増えるから、俺にとっては良いこと尽くめだぜ」

「そんな！リーザスの危機をなんだと思ってるんですか！」

そう言っただけで笑うキースにかなみが食って掛かる。フツと葉巻を口に咥えながら、キースがかなみに向かって応える。

「悪いな、嬢ちゃん。だが、間違ったことは一つも言っていないぜ。俺はギルドを預かる身だからな。職員や冒険者たちを路頭に迷わす訳にはいかないだろ」

「それでも……戦争を喜ぶなんて……」

「そもそも冒険者なんて職業、平和すぎる世の中だったら食っていけるものじゃないからな。適度な動乱が丁度良いんだよ。それとも嬢ちゃん、ルークの職業も否定すんのか？」

「……」

かなみが俯いてしまう。ハイ二さんがキースを注意しようとするが、ルークがかなみの頭に手を置きながら真剣な表情で口を開く。

「キース、確かに間違ったことではないが途中から話をすり替えるな。俺の否定は関係ないだろ。それに……相手を選べ。かなみはリーザス王女付きの忍者だ」

「……そりゃ悪いことを言ったな。スマン」
「……いえ、大丈夫です」

吸っていた葉巻を灰皿に押しつけ、キースが頭を下げる。かなみもそれに応じる。

「リーザスを占領したヘルマンは周りの町も次々と制圧。既にジオとレッドも数日前には落ちたらしい。今はラジールが狙われているんだとよ」

「なんだ、知っているではないか。このクソ親父が！」

「ということは……白の軍や魔法部隊も、もう……」

「ラジール……まずいな」

「はい、アイスの町の近くですね」

「それもあるが……それ以上にカスタムに近い」

「あつ！マリアさんたち……大丈夫でしょうか……？」

ルークの頭をカスタムの町の人々たちの顔がよぎる。新しく組織した自警団でどれほど持ち堪えられるか、聖装備を手に入れたらリーザスへ向かう道中、カスタムにも寄る必要があるな、と考えるル

ークだった。

・アイスの町 武器屋・

「スマン、本当にスマン!!」

「うおっ、なんだ!お前みたいな親父に頭を下げられても嬉しくないぞ」

「何かあったのか?」

武器屋に入るや否や、親父がルークたちに向かって頭を下げてきた。ルークが尋ねると、申し訳なさそうにしながら口を開く。

「それが…昨晚泥棒に入られちゃって、聖剣と聖鎧を盗まれちゃったんだ!」

「なんだと!!何をしてやがる!!!!」

「スマン、あの装備は諦めてくれ…」

「馬鹿者!そう言われて、はいそうですかと諦められるか!」

「リーザス国が……リア王女が……貴方の責任よ!」

「くされ親父、死んでわびて貰おうか!刀の錆にしてくれる!」

「そうよ!こんな悪人、殺してしましましょう!」

「落ち着けかなみ。似合わないこと口走るな」

「ランス様、かなみさん。このおじさんも泥棒に入られた被害者なのですから可哀想ですよ」

ランスとかなみが激怒し、それをルークとシルが宥める。ランスがこのように言うのは珍しくないが、かなみがこんな事を言うのは驚きだ。ランスのせいで疲れが溜まっているのだろうか。

「…はっ！いえ、ルークさん。これは違うんです。気の迷いというか…」

「よしよし、疲れが溜まっているんだな。気にしなくて良いぞ」

「あうう……恥ずかしい……」

「親父、盗んだ相手に心当たりは？」

「ああ、盗まれた場所に置き手紙があつた。これだ。どうもお前たち宛みたいだぞ」

「ふん、そういうのはさっさと出せ。シイル、読んでみる」

そう言つてランスに手紙を渡してくる武器屋の親父。それを受け取つたランスは、シイルに手紙を読ませる。

「はい、ランス様。……軽蔑すべきランスとルークへ」

「なんだと、シイル！」

シイルの頭にポカーンとげんこつを入れるランス。シイルが涙目になりながら口を開く。

「ひんひん、違いますランス様。手紙に書いてあるのを読んだだけです」

「というかどう考えてもそうだろ。ちよつと可哀想だぞ」

「ふん、ならさっさと読め」

「はい…軽蔑すべきランスとルークへ。聖剣と聖鎧は私たちが盗んでやったわ。悔しいだろ、ばーか」

「むかむか、なんてふざけた手紙だ。シイル、送り主は誰だ！」

「なんとなく察しは付くが……」

「ローラ、シャイラ、ネイ。ローラさんと昨日の二人ですね」

ルークの予想通り、聖剣と聖鎧を盗んだのはあの三人だった。どこかでルークたちの目的が聖剣と聖鎧であるということを知つたの

だろう。実に的確な嫌がらせである。

「ローラさんは恋人が奪われたって勘違いしてますからね。どうしよう…聖剣と聖鎧がないと…」

「せめて三人がどこへ向かったかが判ればいいんだが…」

「あら？女性の三人組ですか？それならカンラの町に向かうと言っていましたよ」

武器屋に入ってきた少女が突然声を掛けてくる。見覚えのない娘だ。武器屋の親父に薬を手渡している。ランスに犯されて傷ついているレンチへの薬のようだ。

「君は？今の話は本当か？」

「申し遅れました。私、最近この町でアイテム屋を始めたコリンと言います。今朝女性の三人組が店に来て、世色癌を買っていったんですが、その時カンラの町に行くと話していました」

「隣町だな。よし、向かうぞ。あの三人め、見つけたらたつぷりとお仕置きしてやる！」

「それがますます恨みに拍車をかけてるんだがな…」

武器屋を出て行こうとするルークたちだったが、親父が引き留める。

「手付け金で預かっていた500GOLDだ。こんなことになっちまってスマン」

「盗みに入られたのは俺たちのせいだし、それは迷惑料として取っとしてくれ」

「いや、それじゃあ俺の気がすまねえ。だったらウチにある武器を持っていってくれ」

「がはは、なら遠慮無く貰っていくぞ！シイル、この店で一番高い

武器を探せ」

「はい、ランス様！」

「って、おいランス！お前はウチの娘を傷物にしたんだ。お前は持つてくな！」

親父の文句を無視し、装備を見繕うランス。結局ランスが日本刀と鋼鉄の鎧を、シルがシルフの杖を無料で持つて行く。ルークは妃円の剣と幻獣の剣、真紅の鎧で事足りているため、かなみは忍者用の装備が売っていなかったため何も貰わずに店を出る。丁度ランスとシルは装備品を全部売っており、心許ない装備だったため、これからの戦いに向けて良い補強にはなった。こうしてルークたちはアイスの町を後にする。向かうはカンラの町。

- カンラの町 酒場 -

「あつという間に着いたな」

「隣町ですしね」

カンラの町に辿り着いたルークたちは情報収集のため酒場にやってきていた。店に入るとウェイトレスが注文を取りに来るが、その格好はかなり大胆なものであった。下着を履いておらず、スカートには大きく切れ込みが入っている。

「いらっしゃーい」

「おおつ、なんと素晴らしい！」

「ちよつとあなた、なんて淫らな格好をしているのよ！」

「あの…下着を履き忘れていますよ」

「ああ、ここはサービスの一環としてこういうことをしてるんだよ」

「あら、ルークさん。お久しぶり」

ウェイトレスのセティナがルークに声を掛ける。かなみが悲しそうな瞳でルークを見る。

「あの…ルークさんはこういう店によく来られるんですか？」

「ん？冒険者だからな。酒場にはよく来るが？」

「あ…いえ、そうじゃなくて…」

「くすくす。その忍者さん、心配しないで。ルークさん、私がいくら誘っても全然乗ってこない人だから」

「……………どうも」

「馬鹿者。こういう店はさっさと教える。ぐふふ、この俺様がこれから常連になってやるう」

「ありがとうございます。こちらメニューです」

「あ、注文ついでに後で手が空いたら加藤さんを呼んで貰えるか」

セティナに注文をし、バーテンの加藤さんの手が空くのを食事を楽しながら待つ。バーテンハニーの加藤はこの町一番の情報屋でもある。ランスがカレーマカロリを貪り食う。シイルとかなみは焼き肉そうめんを二人で摘んでいるが、あまり美味しくなかったようでそれぞれレモンティーとほうじ茶で口直しをしている。しかしかなみ、ほうじ茶とは渋いな。ルークがダボラベベをバリバリと食べながら、かなみに話しかける。

「そういえばこの町の武器屋の親父が変わっていてな、しゃもじなんだ。後で一緒に行かないか？アイスで何も買わなかったし、この町は日本刀以外にもJAPANからの輸入品を取り扱っているから、何か買って上げるよ」

「えっ、はい、ありがとうございます。……ひょっとして、それはデートなのでは…」

かなみがぶつぶつと言っていると、ようやく手が空いたのか、加藤がこちらのテーブルにやってくる。

「お待たせしました。ルークさん、お久しぶりです」

「久しぶり。少し聞きたいことがあってな。ローラっていう女の子を知らないか？15歳くらいの茶髪の少女だ。他に二人ほど女を連れているんだが」

「ああ、知っているよ。ここでミルクセーキを飲んでいた子だ。もうこの町にはいないよ」

「何処へ行ったか聞いてないか？」

「確かラジールの町に向かったよ」

「まずいな…キースの話が本当ならラジールは今ヘルマンに襲われているはずだ…」

「いえ、その情報は古いですね。ラジールは二日前に占領されましたよ。今ヘルマン軍はカスタムの町を攻めています」

「なんだって！」

「ランス様、マリアさんたちが…」

「ええい、あのハゲ親父。古い情報なんぞ渡しおつて！」

現状は着々と最悪の方向へ進んでいる。ローラは敵の渦中に飛び込んでいつてしまい、カスタムは既に戦火の真っ直中。どちらも放っておくわけにはいかない。

「ラジールの町への街道は先ほどヘルマンによって封鎖されたみたいです。ローラという娘たちはぎりぎり通れたでしょうが」

「そうなるならローラを追うのは難しいな。だが、封鎖された町の中にいるなら、ローラたちはある程度安全だろう。まさか奴らも彼女たちが聖剣と聖鎧を持っているとは思わないだろうし」

「それなら先にマリアさんたちを助けにいきましょう！」

「でも、ラジールの町を通らなきゃカスタムまではいけないわ」

「……加藤さん、カスタムの状況は判るか？」

「かなり強固に防衛しているみたいですよ。なんでも数千にも及ぶヘルマン軍に、たった数百人で渡り合っているみたいです」

「ふん、やるな。流石俺様の女たちだ」

カスタムの町を復興させる際、新しく組織した防衛軍が活躍しているようだ。早く救援に行きたいが、ヘルマン兵に占領されたラジールを通ることは出来ない。頭を抱えるルークたち。

「しかし、カスタムもあれだけ抵抗してしまうと、制圧された際には酷い扱いを受けるでしょう。早く降伏してしまった方がいいのに……」

「しない……だろうな。彼女たちの性格を考えれば」

ルークの頭に真っ先に浮かんだのは志津香。彼女が降伏する姿など想像が付かない。志津香だけではない。カスタムの少女たちは全員強い意志を持っている。降伏など絶対にしないだろう。その時、ルークたちの会話に入ってくるように女性の声が聞こえる。

「ほんと、あの子たち頑固なんだから。さっさと降伏すれば苦しい思いをしなくてすむのに」

「ん……げっ、ロゼ！」

「お久しぶり、ランスさん。それと、そちらの方がルークさん？」

「そうだが……どちらさんだ？」

「カスタムの町の神官さんです、ルークさん」

振り返ってそこにいたのはカスタムの町の淫乱シスター、ロゼ。カスタムの事件の際にランスから話を聞いたルークは教会を避けていたため、顔を会わすのはこれが初めてである。

「ん…待て。どうしてここにいるんだ？」

「カスタムの町は今や戦乱真っ直中よ。逃げて来たに決まってるじゃない」

堂々と胸を張るロゼにかなみが疑問を投げかける。

「神官なのに、傷ついた人を見捨てて逃げたんですか？」

「ナンセンスよ。そんな慈善事業、今時流行らないわ。神官の仕事ってというのは安全な場所で戦争を非難する事よ」

「……ま、いいがな。カスタムの状況は？」

「防衛軍が相当頑張っているわね。特にマリアと志津香が中心になって、みんなを鼓舞しているわ。でも、もう町全体を包囲されていたから、時間の問題ね。もう町からは誰も逃げられないわ」

「マリアさん、志津香さん、ミリさんとミルちゃん、ランさん、チサさん、真知子さんに今日子さん、トマトさん、エレナさん、ペペさん、それから…みなさん元気なんですか？」

ガイゼル…心の中で涙が止まらないルークだった。

「元気よ。今のところはだけどね。明日、明後日とどうなるかは判らないけど」

「待て、そんなギリギリの情報を持っているという事は最近まで町にいたんだろ。包囲された町からどうやって逃げ出してきたんだ？」

「この町の近くにカスタムの町と直通で繋がっている悪魔の通路と呼ばれる道があるのよ。そこを通ってきたの。私の体を使ってね。中々楽しかったわ」

「楽しかった？」

「悪魔の道にはデーモンがいてね。通行料は女の体。もう思い出す

だけで濡れちゃうわ」

「ちつ、悪魔の分際で生意気な。俺様がぶつ殺してやる」

「ロゼ、悪魔の通路の場所を教えて貰っても良いか？」

「ふふ、いいわよ。あー、体が火照ってきたわ。後でもう一回行っちゃおうかしら」

「それなら一緒に来てくれないか？カスタムに付く前に引き返してくれて構わないから」

「んー、寄付金ちょうだい」

「あまり持ち合わせが無くてな…500GOLDでいいか？」

「まいどー！」

こうして一時的にロゼがパーティーに加わる。悪魔の通路がある洞窟はカンラの町から南に下った所の山の麓にあるらしい。カスタムの町を救うため、ルークたちはカンラを後にし、ロゼに案内され悪魔の洞窟を目指すのだった。因みに町を出る前に武器屋には寄りました。全員で。なぜか、かなみが少し落ち込んでいた。

- 悪魔の洞窟 入り口 -

洞窟の前には門番が立っていた。緑色の髪が特徴の悪魔の女。ぶつぶつと文句を言っている。

「くそっ…元六階級悪魔の私がどうしてこんな下っ端の仕事を…」

その女悪魔は、以前カスタムでランスに召喚され、さんざんやられたあげく契約を破棄され上司に降格処分を言い渡されたあの悪魔だった。六階級というエリートだった彼女だが、今は九階級まで降格させられていた。

「全部あの男のせいだ。今度会ったら八つ裂きにしてやる！」

ぶんぶんと持っていた鎌を振り回す女悪魔。やはり相当恨んでいるようだ。

「……でも、こういう地味な仕事を頑張って勤め上げて、いずれは元の階級に戻してもらうんだから。頑張れ、私！」

不幸は確実に近づいていた。

第40話 奪われた聖剣と聖鎧（後書き）

「人物」

ロゼ・カド（3）

LV 5 / 20

技能 神魔法LV1

カスタムの町の淫乱シスター。町のピンチにさっさと逃げ出す。薄情といえば薄情だが、現実主義者とも言える。悪魔の通路が気に入ったので、ルークに雇われて一時的に旅に同行する。

ローラ・インダス

モンスターであるリスと恋に落ちた少女。最愛の彼が殺されたと勘違いし、ルークとランスに復讐を誓う。シャイラ、ネイと共に聖剣と聖鎧を盗んで逃走。

コリン

アイスの町でアイテム屋を営む少女。店は最近オープンしたばかり。熱心なハニワ教の信者でもある。

セティナ

カンラの町の酒場のウェイトレス。店の方針で常にノーパンである。何度かルークにアプローチを掛けるも、やんわりと断られている。

加藤清森

カンラの町の酒場のバーテンハニー。町一番の情報屋でもあり、ルークとは顔見知り。

しゃも一郎

カンラの町の武器屋の親父。しゃもじ。ゼスに弟がいるらしい。

「装備品」

日本刀

ランスが無料でゲット。JAPANからの輸入品の刀。斬れ味がよく、好んで使う冒険者も多いため、輸入品ながら多くの町で取り扱われている。

鋼鉄の鎧

ランスが無料でゲット。巷で生産されている鎧の中では最高クラスの品質。重量があるため、それなりの体格でなければ装備するのは逆効果。

シルフの杖

シルフがちゃっかり無料でゲット。魔法工房シルフ社製作の杖。中々に高性能な杖で、愛用する魔法使いも多い。

忍服

かなみがルークに買って貰った新しい服。JAPANからの輸入品で取扱店が少ない。大事にするとか普段は着ないようにするとかなみは言っていたが、防具なので普段から着なさいとルークに窘められる。

「料理／食材」

カレーマカロロ

イタリアの神秘。フランスパンをくり貫いてシチューと餃子を詰め、うどんで巻いたもの。珍味。

焼き肉そつめん

冷たくて暖かいお袋の味。鍋に入ったカレーライスを思わせる食べ物で、臭いはチャーシューメン。かなり好みの分かれる一品。

ダボラベベ

大層な名前だが、普通のせんべい。食べると経験値が入る。子供の成長を祈って誕生日などによく食べる地方もあるらしい。

「都市」

カンラの町

自由都市。アイスの隣町で、これといって特色もない普通の町。

第41話 悪魔との契約

・悪魔の洞窟 入り口・

「はい、到着！」

「ここが悪魔の通路がある洞窟か」

「ランス様、あそこに誰かいます」

「あら？私を通ってきたときはいなかったのに」

ロゼの案内で悪魔の洞窟の前までやってきたルークたち。シルの指さす先、洞窟の入り口の前には一人の女悪魔が立っていた。しかし、どこか見覚えがある。あちらもルークたちに気がついたようで、訝しげにこちらを見た後、突如大声を上げた。

「あーっ、お前はランス！」

「…そうか。見覚えがあると思ったら、カスタムの事件の時の悪魔か」

「おお、あの時のドジな悪魔だな」

洞窟の前で門番をしていた悪魔が、かつてカスタムの事件の際ランスに召喚され、散々酷い目に会わされたあげく、契約を破棄されて逃げ帰った悪魔であることに気がつく。ランスの言葉に猛抗議をしてくる女悪魔。

「何がドジよ。卑怯な手で私を騙したくせに！」

「がはははは、騙されるお前が悪い。悪魔のくせに人間様に卑怯など、片腹痛いわ！」

「ルークさん。この悪魔とは知り合いですか？」

「以前カスタムでの事件の時、ランスと契約を結んで魂を持っていたとした悪魔だ。ま、失敗したかな」

かなみの問いかけに応えるルーク。その言葉を聞いたロゼが首を傾げる。

「魂回収役？ だったら結構な上位悪魔のはずだけど？ どうして門番なんかしてるのかしら？」

うぐつ、と女悪魔が顔をしかめる。どうやら指摘されなくなかったことらしい。ランスを睨みながら静かに呟く。

「……お前のせいで六階級悪魔だった私は……今じゃ九階級よ……」

「がはは、自業自得だ」

「くつ……」

「とにかくそこをどいて貰おうか。俺様はその洞窟に用があるんだ」「悪魔でないあなたたちを通すわけにはいきません」

そう言って両腕を広げ、入り口を通せんぼするような姿になる女悪魔。

「なら力尽くまで通して貰おうか。ついでにまたその体も楽しませて貰うとするか、がはは！」

「……やる気？ 悪魔であるこの私と？ 九階級だと思って甘く見ない事ね。上司の温情でまだ実力は六階級のままだから」

女悪魔がそう言った瞬間、空気が変わる。女悪魔から物凄い量の殺気が発せられたのだ。ルークとかなみが身構える。ランスも額に汗を掻いている。

「ルークさん…この悪魔…」

「ああ、やばい相手だ。…気を抜くな」

「そりゃそうよ。六階級悪魔だったら、多分下級の魔人とならそれなりに渡り合えるわよ」

「魔人並か…ちつ、覚悟を決める必要があるな…」

ロゼが平然とそう言い放つ。それはかなり絶望的な言葉だ。この戦力でそんな強敵とやり合えというのか。ルークがかなみとロゼを庇うように前に出る。ランスも意識しているかは判らないが、シイルを庇うように前に出ている。

「どうやらやる気みたいね。丁度良いわ。ランスには恨みもあることだし、八つ裂きにして魂を回収させて貰うわ」

「あら？やりあう必要なんか無いわよ？」

「何？」

この状況であっけらかんと言い放つロゼ。後ろを見れば、鼻歌交じりに何やら魔方阵のようなものを地面に書いている。そして、ルークとランスに向かってこう言い放った。

「ね？悪魔の下僕、欲しくない？」

「その女、何を…？」

「いでよ、ダ・ゲイル！」

ロゼがそう言うと、魔方阵が光り出し、目の前に全身が青い毛で覆われた悪魔が現れる。角と羽が生え、目は三つ。予想だになかった事態に、女悪魔の目が見開かれる。

「あ、動いちゃ駄目よ悪魔さん。貴女、九階級って自分で言ってたわよね。ダ・ゲイル！」

「んだ。その小娘、動くでね。オラは八階級悪魔だべ。オラより下なんだから命令に従って貰うべ！」

「……くっ。」

「黙ってねで、返事は？」

「………はい」

ダ・ゲイルと呼ばれた、ロゼの呼び出した悪魔の命令に素直に従う女悪魔。

「どういうことだ？ロゼ、その悪魔は？」

「悪魔って完全な階級社会でね。上司の命令には逆らえないの。この悪魔はダ・ゲイル。私の大事なパートナーよ。主にHのね」

「んだんだ。オラ、ロゼ様の忠実な下僕だ」

「神官なのに悪魔とそんなことをしているんですか！？」

「あら？人間なんかよりよっぽど填るわよ？今晚貸してあげようかしら？」

「結構です！！」

神に仕える者としてあるまじき発言を平然とするロゼ。やはり信仰心というものは皆無らしい。かなみが苦言を呈すが、それを気にする様子もない。シルがロゼに恐る恐る尋ねる。

「ロゼさん、どうして悪魔を支配できているんですか？もしかして…その悪魔より魔力が高いとか？」

「魔人じゃあるまいし、そんな魔力無いわよ。悪魔を下僕にするには、一つのキーワードを知ればいいの」

「キーワード？なんだそれは？」

「名前。真の名を知られた悪魔は、その相手に絶対の服従を誓わなければいけないのよ」

ピクツと女悪魔が震える。その事を知っている人間がこの場にいるとは思わなかったのだろつ。女悪魔を横目で見ながら、ロゼが話を続ける。

「ただし、一人の人間が覚えられる真の名は一つだけよ。新しく悪魔の名前を聞いたら、どっちを下僕にするか自分で決めるの。そうじゃなきゃ私もあと数体の悪魔を下僕にして乱交パーティーするんだけどねー」

「なるほど。つまり、この悪魔の名前を知れば俺様は好きに出来るという訳だな」

「そう。いつ呼び出して命令するのも、Hするのも自由って訳」

ニヤリとランスがイヤらしい目で女悪魔を見る。続けてロゼもイヤらしい目で女悪魔を見る。既に女悪魔は涙目だ。

「ダ・ゲイル！聞き出しなさい！」

「ちよっ…待っ…」

「八階級悪魔として命ずるべ。真の名をオラに教えるだ！」

「……フェリスです」

「んだ。ロゼ様、これでいいだか？」

「お疲れ。また今晚呼び出すから帰っていいわよ」

ロゼがそう言うと、ダ・ゲイルは煙のように姿を消す。残されたのはルークたちと、真の名をばらされた女悪魔。ランスが声高らかに宣言する。

「悪魔フェリス。契約に基づき命じる。この英雄ランス様に従え！」
「う……」

「悪魔の契約を無視したら灰になって消えちゃうわよー」

「……はい、ランス様。第九階級悪魔フェリス、これよりランス様

の忠実な下僕になることを誓います」

「がはははは、悪魔の下僕ゲットだ！」

「貴女たちはどうする？ 契約結べるわよ」

ロゼがシルとかなみにそう問いかける。二人とも物怖じしながらロゼに応える。

「ランス様が契約されたので私はいいです。恐いですし……」

「どんな恐ろしいことがあるか判らないし……私もいいです」

物怖じしながら断る二人。その時、二人の横から宣言する声が聞こえる。

「悪魔フェリスに命じる。契約に基づき、真の名を知るこのルークに従え」

「……はい、ルーク様。第九階級悪魔フェリス、ランス様同様、ルーク様にも忠実な下僕として仕えさせていただきます」

契約を結んだのはルーク。その行動が意外だったのか、シルとかなみが心配そうにこちらを見る。最初に口を開いたのはロゼ。

「あら？ 意外ね。こういうのは可哀想とか言ってやらないフェミニストかと思ってたのに」

「そうですよ、ルークさん。危険です！」

「せっかくの機会だ、結べるものは結んでおくさ。契約に基づいているから危険も少ないだろうしな。まあ、下僕のように扱う気もないから心配しなくて良いぞ、フェリス」

「……ありがとうございます」

「がはは、この俺様も紳士に扱ってやろう。とりあえず今晚呼び出すから、準備をしておけ！ どうだ、嬉しいだろう？」

「……………ありがとうございます」

こうして二人の主を持つことになったフェリス。片方は当たり前だが、もう片方が大ハズレだ。転落人生の第二幕の始まりであった。がはは、と笑うランスと肩を落とす悪魔を見ながら、ルークが一人呟く。

「魔人と渡り合える力…みすみす見逃す訳にはいくまい…」

「ん？何か言った？」

「いや、なんでもない。ところで、後で悪魔を呼び出す魔方陣の書き方を教えて貰えるか？」

「魔方陣？」

「さっき書いていただろ？」

「ああ、あんなもの書く必要ないわよ。カモーン、とか言って呼び出せば飛んでくるわ。レベル神とかと一緒に」

「……………じゃあさっきのは？」

「その方が気分出るでしょ？」

「……………」

何となく、ランスがこのロゼを苦手に行っている理由が判ってきたルークだった。この性格は、勝てない。

・悪魔の洞窟 一層・

フェリスと契約を結び、洞窟の中に入ったルークたち。因みにフェリスはもう悪魔界に帰った。夜にはランスに呼び出されるようだが。大層な名前の割に大した敵はおらず、特に苦戦もなく先に進む。すると、結界に守られた魔方陣が目の前に現れた。横にはねこのよ

うな生物が浮いている。ルークたちに気づいたその生物は、こちらに話しかけてくる。

「ここは悪魔の通路です。善良な心を持つ人間は通ることが出来ません。速やかにお帰り下さい」

「ロゼ、これは？」

「ああ、簡単よ。横の部屋にある光の神のプレートを踏んづければ結界を通れるようになるの。それで信仰心を調べているのよ」

「仮にも神官の貴女は…もちろん踏んだんですよね」
「当然！」

ロゼに連れられて隣の部屋に移るルークたち。その部屋には確かに床に老人が描かれたプレートが置いてあった。あれが光の神の絵らしい。何やら大層な光を放っている。あれは結構マズイ代物なんじゃないかと思ったルークは、ウィリスを呼び出す。

「レベルアップの儀式ですか？ルークさん」

「いや、そうじゃないんだが、あのプレートは神のウィリスから見ても相当な代物か？」

「へ？…あ、あれは光の神様のプレートではないですか！？お、恐れ多い代物です！！」

「やつぱりか…ランス、それを踏むのはあまりよくない…」

そう声を掛けようとしたルークだが、時既に遅く、ランスは思いっきりプレートを踏みつけ、ぐりぐりと動かし、挙げ句の果てに上でジャンプまで始めた。すると、バキツという音と共にプレートが壊れる。

「がはは、やわな絵だ。壊れてしまったぞ」

「あちゃー…遅かったか…」

「なんてことをー！わ、私は何も見ていません！」

そう言い残し、ウィリスが姿を消してしまう。がはたと笑いながら元の結界の部屋に戻っていくランス。シイルとかなみが踏む前に壊れてしまったようで、どうしたものかと悩んでいたので部屋に戻っているように指示を出す。部屋に残ったルークは割れて散らばったプレートを集めて、くつつけることは出来ないまでも見た目だけは元の状態に戻す。そのルークの姿を見て、同じく部屋に残っていたロゼが声を掛ける。

「あれ、ルークさん信心深い人？AL教？」

「そういう訳ではないんだが…このプレートはなんかマズイ感じがしてな」

「冒険者の勘？」

「そんなとこだな」

なむなむと手を合わせた後、ルークとロゼも結界の部屋に戻っていく。そのとき、プレートの部屋から声が聞こえた気がした。

「許さん……あのランスとかいう男、必ずバチを与えてやる……」

部屋に戻ったルークたち。まずランスが結界を通り、その後ルークが結界を無効化して通る。ロゼも既に踏んでいるため難なく通るが、シイルとかなみは踏んでいないため通れない。ルークがねこのような生物に、ランスがプレートを壊してしまつて踏めなくなつてしまったと言いつつ、三人が通つたことで善良な心の持ち主ではないと判断したのか、結界を解いてシイルとかなみも通れるようにしてくれた。結界を抜け、魔方陣を目の前にするルークたち。

「ランス様、どうやらワープの魔方陣みたいです」

「ふん、これがカスタムに繋がっている通路だな」

「そう、この先が悪魔の通路。同時にリターンデーモンの住み処となっているわ」

「リターンデーモン？強いのか？」

「強いというより厄介な相手ね。戦おうとするとリターンっていう魔法で洞窟の入り口まで飛ばされてしまうの」

「そんな、それじゃあ通れないじゃないですか」

「何か方法はあるんですか、ロゼさん？」

シルのその問いに、ふと真剣な表情を見せるロゼ。先ほどまでのふざけた雰囲気とは違う。

「あるわ。たった一つだけ、誰かの犠牲の上に成り立つ、恐るべき手段がね」

誰かの犠牲という言葉に緊張が走る。かなみがゴクリと唾を飲み込み、シルがランスの背中に抱きつく。そして、ロゼの口からその方法が発せられた。

- 悪魔の洞窟 悪魔の通路 -

「あつ、ああつ、んっ！さあつ、私が犠牲になっている間に、早く通って！んっ、いいっ！」

「何が犠牲だ。自分が楽しんでいるだけではないか！」

ロゼの乱交を見て悪態をつくランス。ロゼの言うところによると、リターンデーモンは人間の女を性的にいたぶるのが趣味らしく、体

を差し出すことによって悪魔の通路を通して貰えるらしい。口では犠牲と言いながら、喜んで体を差し出す口ゼ。

「だが、口ゼがいなかったら通るのは大変だった。そこは感謝しなきゃな」

「確かに…考えただけでも恐ろしいです」

リターンデーモンにいたぶられる自分を想像してしまったのか、かなみが身震いをする。自分の快樂のためとはいえ、結果的に口ゼのお陰で通路を通れるようになったのは事実。その事に感謝しつつ、ルークたちは先へ進んでいく。奥にあった階段を上っていくと、光が差し込んでくる。どうやら洞窟を抜けたようだ。階段を上りきったルークたちは爆音を耳にする。やはりカスタムは戦乱の真っ直中のようだ。みんなは無事なのか。周りを見回すと、そこにはルークたちを囲むように女の子たちが立っていた。どうやら本当にカスタムの町の一角に直通だったらしい。囲んでいた少女たちの内の一人が声を掛けてくる。数ヶ月前、よく耳にした声だ。

「ランス、ルークさんも！どうしてここに！？」

「むっ、むちむちの太もも娘が話しかけてきたぞ。俺様のファンか？」

「ランス様、この方はマリアさんですよ！」

「へっ？」

話しかけてきたのはマリア・カスタード。数ヶ月前、カスタムの事件で共に協力し、強敵ラギスを打ち破った懐かしい仲間だ。悲しそうな顔でランスを見つめる。

「私よ、マリア・カスタード。ランス…忘れちゃったの？」

「なんだ、マリアか。髪型が変わっていたから一瞬判らなかったぞ。」

ちゃんと俺様の許可を取ってから髪型を変える」

「もうっ！どうしてわざわざランスの許可を取る必要があるのよ！」

マリアは髪型を変えていた。まだ幼さが残っていたサイドポニーを止め、肩くらいまでの長さに下ろした髪型になっている。服装もワンピースから作業着のような色気の少ないものになっている。

「久しぶりだな、マリア。少し大人っぽくなったかな」

「えへへ、ありがとうございます。ルークさん」

「あ、こら。俺様の女に色目を使うな！」

「もうっ、誰がランスの女よ！」

階段から抜け出したルークたち。口論を始めるランスとマリアだが、マリアの表情はホッとしたものになっている。戦乱の中、ランスたちの顔を見て安心したのだろう。その時、近くで爆音が響き、同時に少女が走ってやってきた。

「マリアさん、東のランさんの部隊に攻撃が集中していて、危険な状態です」

「そんな、すぐに救援を…あ、ルークさん！」

・カスタムの町防衛線 東の部隊・

「ランさん、もうみんなボロボロですー！」

「くっ…ここに来て攻撃を集中してくるなんて。もうすぐ撤退まで追い込んでいるのに…」

トマトの報告に、部隊を指揮するランがつい弱音を吐く。防衛軍

の働きにより、ヘルマン軍を撤退寸前まで追い詰めていたが、残っていた兵を集中させ、一点突破を狙ってきたのだ。もう少し、もう少し耐えれば他の部隊の増援が来てくれるはず。その時、後ろから声が聞こえる。西の部隊を指揮していた、ランが信頼を置く少女の声だ。その声に一瞬気が緩む。その隙を、目の前にいたヘルマン兵が突いてくる。

「貰った、死ねええ!!」

「…っ!!」

目の前にヘルマン兵の剣が迫る。後悔しきれない油断。避けることも出来ず、ランが目を瞑る。が、聞こえてきたのはヘルマン兵の悲鳴と崩れ落ちる音。恐る恐る目を開けるラン。そこには戦士が立っていた。この戦乱の中、何度か彼が助けに来てはくれないものか、そう思い描いていた姿。

「無事か？ラン！」

「ルークさん…」

「おお、ルークさんですよ！これで百人力ですかねー！」

トマトも感激のあまり声を上げる。残っているヘルマン兵を真空斬で撃退しようとしたルークだが、突如残っていたヘルマン兵が炎に包まれる。ランでないとするなら、こんな強力な魔法を使用出来る者は、カスタムには一人しかいない。

「火爆破…久しぶりね、ルーク。救援に来てくれたのかしら？」

後ろから掛けられた声にルークが振り返る。緑の長い髪を風になびかせ、その少女は立っていた。

「まあな。無事か、志津香！」

「当然。来たからにはしっかりと働いてよ」

怪我などあるはずないだろう、と不敵に笑う少女、魔想志津香。肩を並べてラギシスを倒した仲間でもあり、共に復讐を誓ったパートナー。こうしてルークは、カスタムの人々と再会を果たすのだった。

第41話 悪魔との契約（後書き）

「人物」

マリア・カスタード （3）

LV 18 / 35

技能 新兵器匠LV2 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。カスタム防衛軍の総司令官を務めており、圧倒的な戦力差を覆す活躍を見せている。チューリップ1号の生産も徐々にだが行っており、チューリップ砲火部隊も指揮している。

魔想志津香 （3）

LV 23 / 56

技能 魔法LV2

カスタム四魔女の一人。カスタム防衛軍魔法部隊指揮官。志津香以外はせいぜい炎の矢程度しか使えない者が殆どだが、志津香自身が前線に立ち、それを補ってあまりあるほどの活躍を見せている。

エレノア・ラン （3）

LV 20 / 30

技能 剣戦闘LV1 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。実戦部隊第一軍指揮官。持ち前の剣と魔法を合わせた臨機応変な戦い方で前線を支える。危うくヘルマン兵の攻撃で大けがを負うところだったが、ルークに助けられる。

トマト・ピュレ （3）

LV 10 / 37

技能 剣戦闘LV1

カスタム防衛軍所属のアイテム屋店主。実戦部隊第一軍所属。初めこそ不安視されていたが、みるみる内に上達し、防衛軍の中でも

頼りになる人物の一人にまで成長を遂げた。

フェリス (3)

LV - / -

技能 悪魔LV1

ルークとランスの二人と契約を結んだ悪魔。以前の失態で降格をさせられ、今は第九階級。しかし、実力は以前の第六階級のままであるため、並の魔人なら同等に渡り合える。

ウイリス (3)

ルークとランスを担当するレベル神。光の神のプレートを踏むという暴挙に恐れをなし逃げ帰ってしまう。

ダ・ゲイル

ロゼが呼び出した第八階級悪魔。田舎弁が特徴。決して高位の悪魔ではないが、降格させられたフェリスは彼の言うことに従うしかなかった。

「モンスター」

リターンデーモン

悪魔の通路を住み処としている悪魔。実力は悪魔の中では並だが、リターンという厄介な魔法のせいで倒すのが難しい。人間の女を性的にいたぶるのが趣味。

「技」

リターン

対象をダンジョンの入り口まで強制転移する特殊魔法。攻撃性はないが、避ける手段も少なく、厄介な魔法。

第42話 変身人間

・リーザス城　ヘルマン軍司令部・

「ふふふ、既にリーザスは、我が手中にあり。そして、もうすぐ自由都市地帯も制圧されるだろう」

玉座に深く腰掛けながら、パットンが高らかに宣言する。部屋には数人のヘルマン兵がいる。隊長や司令官たちは自由都市制圧に出払っているため、パットンの警護をするのは下っ端の兵たちだ。玉座の後ろにはノスとアイゼルが控えている。パットンの言葉を聞いた周りの兵たちから賞賛の声が上がる。

「おめでとうございます。パットン皇子。いえ、もう皇帝とお呼びになった方がよろしいでしょうか？」

「くく、皇帝か。中々に見所のある奴だ、名前は？」

「アイザックと申します」

「ふっ、覚えておこう」

周りにいる兵は全員パットンにおべっかを使っている。元々皇子という立場のため、普段から持ち上げられてはいたが、今は異常なほどだ。誰しもが勝ち馬に乗ろうと必死だった。それを無言で見ている魔人の二人。特にアイゼルの方は、下らないものを見るかのよきな態度が若干表情に表れている。その二人にパットンが声を掛ける。

「どうした？あまり見ていて面白いものではないかな？」

「……………いえ」

「まあ、無理に付き合っている必要はないぞ。お前らもリア王女から情報を聞き出すのに必死なのだろう？ 魔人の世界を支配するための物の情報をな……」

「！？」

ノスは無表情のままだが、アイゼルの表情が明らかに変わる。この辺りは場数の違いといったところか。それを見たパットンが不敵に笑う。

「見くびるなよ。私が何も知らないと思っているのか？」

「……」

「なあ、ノスよ。その捜している物とやらは必要な物なのだろう？」

「……御意」

「はっはっは、好きにするがいい。ただし……私に齒向かうな」

パットンが目を鋭くし、ノスとアイゼルに釘を刺す。二人は無言でそれに応じる。その時、部屋に一人のヘルマン兵が入ってきた。

「ぐ、ご報告に上がりました」

「何だ、騒々しい。そうか、ようやくカスタムの町を降伏させたのだな？」

「い、いえ……カスタムの町への攻撃は失敗に終わりました」

「……………何？」

「敵は、司令官マリア・カスタードを中心に、少数ながら見事な防衛線を展開しています。更に、どこからともなく加勢に現れた冒険者一味がこれまた手強く……」

「言い訳はいい！」

ドン、とパットンが玉座の肘掛けを叩く。報告に來た兵が震えながら、話を続ける。

「う、ご安心を。既にカスタムの町は包囲しています。次の攻撃で必ずや占領して見せます」

「…前線司令官のヘンダーソンに伝える。次にしくじったら、命はないと思え、とな！」

返事をし、報告に来た兵が部屋を後にする。数時間後、この報告を聞いた前線司令官ヘンダーソンは、すぐにカスタムの町に大規模な攻撃を仕掛けることになる。

- 翌日 カスタムの町 作戦会議室 -

前日、カスタムに到着したルークたちの協力の下、なんとかヘルマン兵を退け一息ついていた一行であったが、今日になって再び、しかも前日より大規模な部隊の侵攻準備が進んでいることを知り、緊急の作戦会議を開いていた。部屋の中には総司令官のマリア、各部隊を率いる志津香、ラン、ミリ、作戦参謀の真知子、現町長のチサ、そしてルーク、ランス、シル、かなみの計十人だ。

「お久しぶりです、ルークさん。救援に来て下さり、助かりましたわ」

「久しぶりだな、真知子さん。まさか作戦参謀とは驚いた。礼ならまだ早いさ。何とかしてヘルマン兵を退けないとな…」

「ええ…防衛軍も限界が近づいていますからね…」

昨日はバタバタしていて顔を合わせていなかったため、軽く挨拶を済ます。シルやかなみも周りと挨拶を交わしている。特にかなみは初めて会う顔も多いため、自己紹介も兼ねた挨拶をしていた。

程なくしてマリアが部屋の前に立ち、壁に掛けられた防衛軍とヘルマン軍の部隊配置図を手で叩きながら話を始めた。

「さあ、作戦会議を始めるわよ！」

「了解だ。とりあえず敵の規模は判るか？」

「真知子さん、お願い」

「ええ。次に攻めてくる敵の規模は約六千。内訳はヘルマン軍二千とリーザス軍四千といったところね」

「リーザス軍！？一体どうして！？誇り高いリーザス軍が、自主的に裏切るなんてあり得ない！」

マリアに促され、報告を始めた真知子だが、敵軍にリーザス軍が含まれていることになみ驚きの声を上げる。志津香がそれに応える。

「敵に洗脳を得意とする魔法使いがいるみたいね。でもこれだけの人数の洗脳、そう離れた場所からじゃ出来ないはずよ。多分、カスラム侵攻の司令部があるラジールにその魔法使いがいるはずよ」

「となれば、そいつを倒せばリーザス軍は丸々味方って訳か？」

「でも、それも容易ではありません。敵は人だけではないんです」

「そう、敵の部隊にモンスターも結構な数が加わってるぜ。最初はモンスターがいる意味が判らなかったが、魔人が手を引いているなら納得がいくつてもんだ」

ルークの問いにランとミリが応える。昨日の内にヘルマン軍の裏に魔人がいることをルークたちは話していた。パニックになるのを避けるため、それを知っているのはここにいる面々と元町長ガイゼル、それとミリがすっかり口を滑らしてしまったミルだけだ。チサが不安そうに呟く。

「魔人…私たちは勝てるでしょうか…」

「がはは、チサちゃん。俺様に任せておけ。魔人など相手ではないわ。マリア、カスタム防衛軍はどんな感じなんだ？」

「ミリとランが各100名を指揮、それと志津香の魔法部隊が30名ほどと私のチューリップ砲火部隊が約20名。総勢250名といったところね」

「相手は六千だろ。話にならん。よく持ち堪えてきたもんだ」

「250名全てが戦える訳でもないだろ？」

「ええ、今まで何とか防衛してきたけど、傷ついて戦えない人も徐々に出てきてるわ。実際に戦えるのは…」

「多分、100人もいないわ」

マリアが言いあぐねているのを見かねて、志津香がきっぱりと言う。恐らく、次の侵攻を持ち堪えることは出来ないだろう。だが、ミリがきっぱりと言い放つ。

「ふ、まだまだこれからさ。奴らにカスタムの町を侵略するには、高い血の代償がいることを教えてやるぜ」

「こんな所で死ぬ気はないけど、やるからには少しでも多くの敵を道連れにしてやるわ」

既に次の侵攻を完全に防ぎきるのは難しいことを皆悟っているのだろう。死なば諸共とも取れるミリと志津香の発言を否定する者は誰もいない。この空気を切り裂いたのはランスの笑い声だった。

「がはは、天才の俺様には確実に勝てる作戦が閃いたぞ！」

「本当！？」

「マリア、どうせ碌な案じゃないわよ。聞くだけ無駄」

「何だと！志津香、やはりお前には一度その体に判らせる必要が…」

「ランス、時間がない。どうせこのまま戦っても勝ち目は薄いんだ。」

その案を教えてください」

「ちっ、まあいい。成功したら町の娘たちにはたっぷりとサービスして貰うぞ!」

こうして、ランスが思いついたという作戦を聞く面々。数分後、部屋に非難の声が飛び交う。

「酷すぎるわ、ランス!そんな作戦、マリアさんが可哀想よ!」

「やっぱり碌な案じゃなかったわね。だから言ったでしょ、マリア」
「うっ……流石にそれはちよつと……」

「ランス様……私もマリアさんが危険だと思います」

ランスに非難が集中する中、顎に手を当てて考え込むルーク。真知子も何か思うところがあるのか、ルークに話しかけてくる。

「……ルークさん、この作戦……意外と……」

「……ああ、妙案だな。一か八か、やる価値はあるかもしれん」

ルークの意外な言葉に驚き、部屋にいた全員が一斉にルークの方を見る。ランスが上機嫌に笑い出す。

「がはは、この作戦の素晴らしさが判るか?」

「ちよつと、ルーク!本気!?」

「マリアに危険を強いることにはなるが……このまま戦っても勝ち目は薄い」

「俺も賛成だ。ランスの作戦に乗ってみるのも悪くない。マリアが一時防衛軍からはずれるのはきついが、このままじゃ負けるだけだからな」

「……これしか勝つ手段がないなら……」

「マリア!?」

ミリモランスの作戦に乗り、マリアも作戦を実行する決意をする。親友の事が心配なのか、志津香はやはりこの作戦には反対のようだ。声を荒げる志津香に、ルークが真剣な表情で口を開く。

「大丈夫だ。マリアは必ず守りきる」

「がはは、マリアは俺様の女だからな！任せておけ」

「……傷一つでもつけたら、承知しないわよ！」

「ああ、任せろ。それと、一時的に俺とランス、シイル、マリアの四人が戦線から外れる。かなみ、志津香、ラン、ミリ、苦戦を強いと思うが頑張ってくれ。真知子さんとチサちゃんは後方から援護を」

反対していた面々もルークが賛同したことで納得したのか、強く返事をする。

「任せて下さい、ルークさん！」

「マリアを頼んだわ。何ならランスくらい犠牲にしても構わないわ」

「こちらの事は心配しないで下さい」

「ふ、腕が鳴るな」

「後方支援は私のコンピュータに任せて」

「シイルさんも気をつけて」

「ありがとうございます」

こうして、一行は各々持ち場に着くため、作戦室を後にする。失敗すれば全てが終わる、一か八かの作戦。鍵を握るのはルークとランス、そしてマリアだ。

・ラジールの町 入り口・

占領され、街道を封鎖されたラジールの町。町の入り口にはヘルマン兵が数人立っており、出入りを固く禁じている。カスタム侵攻に向けて、町の中の司令部では着々と準備が進んでいる。でつぷりと太った兵がぶつぶつと文句を言っている。

「育ちが良い僕がなんでこんな下っ端の仕事を…」

「おら、オルグ！サボってんなよ！」

「……ちつ、あんな雑魚兵士、僕が本気になつたら…ん、誰か近づいてくる」

オルグと呼ばれた門番が、カスタムの方向から四人の人影が近づいてくるのに気がつく。その内の三人はヘルマン兵のようだ。連れている少女を指差しながらオルグが尋ねる。

「待て、そいつは誰だ？」

「はっ、こいつは敵の司令官マリア・カスタードです。一人で油断して歩いているところを捕獲しました！」

「何？ぐふふ、それが本当なら、こんな面倒くさい仕事ももうすぐ終わるぞ」

「門を開ける、極悪指導者マリア・カスタードを捕まえてきたぞ！」

「…ちよつと、極悪つて」

「捕虜が口答えするな！えーい、こうしてやる！」

マリアを連れていたヘルマン兵の一人がマリアの胸を揉み始める。マリアの顔を確認した門番たちは、特に疑う様子もなく、四人を中に招き入れ、司令室へと連れて行く。そう、これこそがランスの考えた作戦だ。マリアを連れてきたヘルマン兵はルーク、ランス、シイルの三人。カスタム防衛戦時に戦死したヘルマン兵の服を奪い、

カスタムの防衛軍でないため顔が割れていないこの三人がマリアを捕まえて事にしてラジールへと潜入したのだ。目的は司令官とリーザス軍を操っているという魔法使いの撃破。絶対に失敗することは許されない。

・ラジールの町　ラジール家・

ラジールを治めるラジール家の館に案内された三人。どうやらここを司令部として利用しているようだ。出迎えたのはちよび髭を生やしたオカマ言葉の中年男だった。

「ほほほ、でかしたわよ、確かにマリア・カスタード。このつやつやとした肌、間違いないわ」

「ちよつと、触らないでよ！」

これがこのラジールの司令官、ヘンダーソンだ。マリア曰く、以前からこの男から熱烈なラブレターが届いていたらしい。その数1099通にも及ぶという。

「うふふ、ヘルマンーの美形、みんなのアイドルであるこの私の誘いをあんなに断るなんていけない娘ね。さ、今からたっぷりと可愛がってあげるわ」

「誰がヘルマンーの美形よ、この変態じじい！」

「おほほほほ、この元気いっぱいなところがたまらないわ。貴方たち、お手柄よ！」

「はっ！ありがとうございます！」

その気持ち悪さから、今すぐにでも斬りかかってしまいそうなら

ンスをルークとシルが抑える。まだこの部屋にはヘルマン兵が数名いる。ここで騒ぎを起こせば全て台無しだ。

「スプルアンス、スプルアンスはいる？」

「はっ、ここに！」

ヘンダーソンがそう叫ぶと、奥から甲冑を着込んだ太った男が現れた。先ほどのオルグといい、軍人とは思えないような体型だ。

「マリアのいないカスタム軍なんて赤子の手を捻るも同然よ。失敗は許されないわ、すぐに叩きつぶしておしまい！おほほほほ！」

「はい、ヘンダーソン様！リーザスの洗脳部隊も投入されますか？既にナースが集団コントロールを出来る状態になっておりますが」

「当然投入よ！地下にいるナースにそう命じておきなさい。町の近くで反抗が続いている傭兵部隊に少し向かわせて、後は全て他のヘルマン軍と一緒にカスタムに向かわせなさい！これでカスタムもおしまいよ！おほほほほ！」

この言葉にルークが無表情ながら反応する。リーザスを洗脳している魔法使いは地下にいるらしい。それさえ倒してしまえば、カスタムに向かうリーザス軍は味方になるのだ。それともう一つ、町の近くで傭兵部隊が戦っているようだ。誰に雇われたかは判らないが、ヘルマン軍と戦っているということは味方になり得る可能性がある。出来れば合流したい。

「じゃあ私は奥の部屋でマリアとメイクラブしてくるから、二時間ほど誰も通しちゃ駄目よ。スプルアンス、後の指示は任せたわよ！」

「はっ、お楽しみを、閣下！」

そう言っマリアを抱きかかえて奥の部屋へと下がっていくヘン

ダーソン。ご丁寧にも入らないように指示を出すおまけ付きだ。千載一遇のチャンス。スプリアンスに一礼をし、ヘンダーソンの後をこっそりと追うルークたち。その時、屋敷にいたメイドに声を掛けられる。

「……もしかして、ルーク様ですか？」

「！？ミークルちゃんか！スマン、ちょっとこっちへ」

「おい、この美少女は誰だ？俺様に紹介しろ！」

「ランス様、騒ぐと周りのヘルマン兵に怪しまれてしまいます……」

声を掛けてきたのはラジールの町を代々治めるラジール家の娘、ミークルだ。ラジールの町はラジール家と都市長が協力して治めている町だ。かつてギルドの依頼で何度かこの町に立ち寄ったことがあるルークは、ラジール家とも都市長のアム口とも知り合いであった。ミークルに事情を話し、同時にあちらの事情も聞く。ヘルマン軍に占領された後、父と母は地下牢に閉じ込められ、自分はメイドとして兵の慰安をさせられていたという。そのミークルをそっと抱きしめるルーク。

「もう安心していい。必ず、ヘルマン軍は倒す」

「そうだ！ヘルマン兵は残らず俺様が皆殺しにするから、後で精一杯サービスするように！」

「ありがとうございます。ルーク様、ランス様！」

「とりあえずあのオカマ野郎をプチツと殺してくるかな、がはは！」

「あっ、待って下さい。ヘンダーソンの部屋に入るには合い言葉が必要です。「うつきーまるまる」と尋ねられたら、「朝ご飯食べたいな」と応えて下さい」

「…随分と変わった合い言葉だな」

ミークルに合い言葉を聞いたルークたちはヘンダーソンの部屋の

前までやってくる。部屋の前に立っていたヘルマン兵がこちらに尋ねてくる。

「ん？誰も通すなと言われているが？」

「警護が変わるようスプランス様から仰せつかってきた。いざという時のために三人配置した方が安全だからな。あんたは休憩しに行ってくれ」

「そうか？では合言葉だ。うつきーまるまる」

「がはは、知っているぞ。朝ご飯食べたいんだ！」

「よし、それじゃあ後は任せた」

扉の前で警護をしていたヘルマン兵が去っていく。これで邪魔者はいない。扉を開け、部屋の中に入ると服を脱がされ下着姿のマリアに今正に襲いかかるうとしていいるヘンダーソンがいた。こちらに気がついたヘンダーソンが不機嫌そうに言ってくる。

「貴方たち、入るなと言っておいたはずでしょう」

「マリア、何とか大事には至ってないようだな」

「がはは、もうちょい待ってから来た方が全裸になっていてよかったですかな？」

「もう、ランスス！」

「…不愉快ですね。さつきから美しいこの私を無視するなんて…」
「がはは、不男が何か言ってるぞ」

ランススがヘンダーソンを指差し笑う。ヘンダーソンが驚いている隙について、マリアが服を掴んでこちらに駆け寄ってくる。侮辱された事に腹を立てたのか、ブルブルとヘンダーソンが肩を振るわせる。

「ぶ、無礼な。この美しい紳士である私になんてことを…」

「美しいのを自負するのはいいが、自分になびかない女をこうして無理矢理犯そうとするのは紳士のする事じゃないな」

「紳士というのは俺様のような者のことを言うんだ！」

ルークとランスにそう言われ、怒りが限界に達したのかスツとヘンダーソンが立ち上がり、こちらに向き直る。表情は先ほどまでのものと違い、真剣そのもの。

「…どうやら私を甘く見ているようね」

「何だ？ただの変態スケベ親父だろ？」

「そうよ！絶対に許さないんだから！」

「ふふふ、ただの親父が、ヘルマン軍司令官になれる訳ないでしょう？」

そう言い放つと、ヘンダーソンの姿が少しずつ変わっていく。足と手の先が、岩に覆われていくのだ。

「まさか、リカーマンか！？生き残りがいたのか」

「そう！私はリカーマンの生き残り。ストーン・ガーディアンに変身するこの能力で、八つ裂きにしてあげるわ！！」

リカーマン。変身人間とも呼ばれる種族で、姿形を変える能力を持つ種族である。数年前、ゼスで実施された異文化撲滅政策により虐殺され、絶滅したと思われていたが、政策よりも前にヘルマン軍に所属していたヘンダーソンは虐殺から逃れていたようだ。

「普通のストーン・ガーディアンとは思わない事ね！数倍の強さよ！！」

「ちっ…」

「ランス様…」

「そんな…」

ヘンダーソンの腕と足が徐々に岩に覆われていく。

「ラ ポタン ポタン ペロ…」

徐々に、徐々に覆われていく。

「ホシトマリノトヒソ ビー」

「…………ふああ」

ようやく腕は肘の辺り、足は膝下まで岩で覆われた。シルがあくびを掻いている。

「…………ランス」

「…………うむ」

「おほほ、後十分ほど待ってなさい！この私の能力で…」

そう言った瞬間、ヘンダーソンの体にルークとランスの剣が突き刺さる。信じられないものを見るような目でこちらを見てくる。

「うつ…卑怯者…変身の呪文の最中に攻撃をするなんて…反則よ…」
「隙だらけだ、馬鹿」

「来世ではもう少し早く変身できるようになるんだな」

おびただしい量の出血をしながら、ヘンダーソンが崩れ落ち、程なくして息絶えた。これで目的の一つは果たした。後は地下の魔法使いを倒すだけだ。その時、部屋の窓から外の景色が見える。町の外、すぐ側で戦っている音が聞こえる。あれが先ほど話しに出ていた傭兵部隊。遠目からでも壊滅寸前な事が判る。

「ランス、マリア、シイルちゃん。地下の魔法使いは任せていいか。リーザス兵を操るのに精一杯で大した驚異ではないはずだ」
「ルークさんはどうされるんですか？」

シイルの問いかけに、窓の外を親指で指さすルーク。

「あそこでリーザス兵と戦っている傭兵部隊とやらの加勢に行ってくる」

「集団戦なんだ。貴様一人が行ったところで何も変わるまい」

「いや、戦力としてではなく、伝令だな。あと少し耐えればリーザス兵の洗脳が解け、戦いが終わるっていう事だな。戦いの終わりが迫っていると判れば、それだけで大分持ち堪えられるはずさ」

「ふん、まあ魔法使いは任せる。ナースという名前からして、女だろう。ぐふふ……」

「頼んだ、出来るだけ早く片付けてくれ。俺もカスタムのみんなもあの傭兵たちもいつまで持ち堪えられるかは判らんからな」

「任せて下さい。ルークさんも気をつけて！」

そう言っで一時的にルークはランスたちと別れる。ランスたちは屋敷の地下を目指し、ルークはヘルマン兵に化けて屋敷を後にし、戦いが行われている町の外へと駆け出す。洗脳されているリーザス軍の手によって、壊滅寸前にある傭兵部隊を救うために。

・ラジールの町周辺 荒野・

一人、また一人と傭兵が倒れていく。決して傭兵たちも実力が無い訳ではないのだが、圧倒的な物量に押されている。そして、モチ

ベーションを下げているもう一つの理由がある。

「参ったねえ。まさか雇われたリーザス軍に襲われるとは……」

「こういうゲスな行動をする国ではないはずだが……ヘルマンに無理矢理やらされているのか？」

そう、この傭兵たちはリーザスに雇われたのだ。リーザス陥落後、国を救うための戦力増強のため、白の軍將軍エクスが雇ったのだ。しかし、仲介役を通して救援に駆けつけてみれば、そのリーザス軍が襲ってきたのだ。これではモチベーションが上がるわけがない。傭兵部隊を仕切るのは二人。モヒカンの男戦士と、赤い甲冑に身を纏った女戦士。ボロボロになりながらも、二人は必死にリーザス軍の猛攻を耐えていた。

「これじゃ、報酬は無しか？プル・ペット様になんて言やぁいいんだあ？」

「ふん、報酬よりも生き延びることが先決だな。しかし……流石に厳しいな」

「おいおい、俺はまだまだ殺したりねえぞ！」

1000名引き連れてきた傭兵たちも、既に100名を切った。周囲を囲まれている為、逃げることも出来ない。年貢の納め時か。諦めにも似た空気が漂う中、ラジールの町の方から一人のヘルマン兵がこちらに駆けてくる。仲間であるためリーザス軍は手を出さず、その男は傭兵たちの前までやってきた。

「なんだい、新手か？」

「いや、違う。俺はヘルマン兵じゃない。加勢に来た。それと、あと少し耐えればリーザス軍は正気に戻るはずだ」

「どういうことだ？」

「リーザス軍はヘルマンの魔法使いに操られているんだ。今仲間が魔法使いを倒しに向かっている。あと少しの辛抱だ」

突如現れたヘルマン兵の格好をした男の言葉に驚きを隠せない二人。

「どうする？信じるか？」

「ふ、わざわざこの状況で嘘を言いに来る奴もいないだろ。判った、救援感謝する！」

「あーあ、でも国がこの状況じゃ、報酬は期待できそうにねえな」

「いや、そんな事はないぞ。どうせこのまま帰ってもほぼ無報酬だろ？このままリーザス解放戦に協力してくれないか？成功したらリーザス王女からたんまりと報酬が出るぞ」

「何だ？随分と大口を叩くな？」

「ま、一応知り合いなんぞな。王女も侍女もそういうのにケチな性格でもないし、一応口利きをしてもいいが」

意外な返答に目を見開く二人の傭兵。モヒカンの男が問いかけてくる。

「おいおい、あんた思ったより大物か？」

「そんなんじゃないさ、ただの冒険者だ。偶然知り合う機会があつてな」

「ふ、乗った。どうせこのまま帰ってもプル・ペットの奴に小言を言われるだけしな」

「まだヘルマン兵を殺し足りないと思ってたところだ。俺も乗るぜ！」

「じゃあこれからは仲間だな。短い間だが宜しく頼む」

そう言い合い、武器を握りしめ迫ってくるリーザス軍に向き直る

三人。リーザス解放まで約束を取り付けたんだ。ここで死ぬのは傭兵としても、口利きを約束した者としても契約違反だ。

「俺の名はルーク・グラント。リーザス解放のために動いている」

「ルイス・キートワックだ！しばらくの間世話になるぜ！」

「セシル・カーナだ。宜しく頼む」

- カスタムの町防衛線 -

「ルークさんに任されたんです！ヘルマン軍はそこまで迫っていますが、みなさん、張り切ってくださいますよー！」

トマトが部隊の仲間たちにそう宣言する。ルークに声を掛けられてから、明らかに張り切っている。誰がどう見てもルークに何かしらの感情を抱いているのはバレバレだった。かなみがため息をつく。

「やっぱりルークさんって…もてるんだなあ…アイスでもそんな事聞いたし…」

「かなみさん…で、よかったわよね？」

後ろから声を掛けられる。振り返ると声を掛けてきたのは魔法部隊を指揮する魔想志津香。先ほど作戦室で自己紹介をした相手だ。その時はクールだけど優しそうな女性と思ったが、何故か今は、口は笑っているのに目が笑っていない。

「はい、かなみで合っています。志津香さん、何か用ですか？」

「いえ、ちょっと面白いことを耳にしたものだから気になってね。今の話し、少し聞かせて貰ってもいいかしら？」

「今のって…ルークさんの事ですか？」

「そう。アイスの町でどんなことを聞いたのかしら？」

「その…ギルドの人に…よく告白されていたとか…ひ、一晩限りの関係をよく持っていたとか…聞きました…」

「……………へーえ」

・ラジールの町周辺 荒野・

「…急に寒気が」

「おいおい、戦いの最中に倒れなくてくれよ？」

第42話 変身人間（後書き）

「人物」

ミリ・ヨークス （3）

LV 20 / 28

技能 剣戦闘LV1

カスタムで薬屋を営む女戦士。実戦部隊第二軍指揮官。指揮官には向いていないとは本人の談だが、前線で颯爽と戦うその姿に他の者たちも引つ張られる形となり、中々に良い形に収まっている。

チサ・ゴード （3）

カスタム町長。父親の後を引き継ぎ、精一杯頑張っている。防衛戦では戦えないながらも、手当や炊き出しなど奔走している。

芳川真知子 （3）

カスタムの町の情報屋。防衛軍作戦参謀。コンピュータを駆使した作戦は、素人とは思えぬ働きを見せる。ルークと久しぶりの再会を果たし、内心はかなり喜んでいいる。

ルイス・キートワック

LV 23 / 39

技能 剣戦闘LV1

腕利きの傭兵。プル・ペットという商人を仲介役としている。恩義があるようで、彼には頭が上がらないらしい。殺しに快楽を覚える危ない性格だが、義理堅く、受けた依頼を途中で投げ出すこともない。才能でこそセシルに劣るが、傭兵稼業はルイスの方が長く、経験でまだルイスの方が上回っている。

セシル・カーナ

LV 21 / 42

技能 剣戦闘 LV 1

腕利きの傭兵。プル・ペットという商人を仲介役としている。紅の天使の異名を持つ実力者で、女としてではなく戦士としての評価を欲している。ミリとは親友の間柄。

ミーキル・デバ・ラジール

ラジール家の娘。ヘルマンに慰み者になり、人生を諦めていたが、ルークたちに助けられ希望を取り戻す。

ヘンダーソン

LV 12 / 18

技能 変身 LV 1

ヘルマン第3軍司令官の一人。気持ちの悪いオカマだが、カスタムの町侵攻を指揮していた。絶滅したと思われるいたりカーマンであり、変身能力を有する。変身できていれば強敵であった。

スプルアンス

ヘルマン第3軍小隊長。ヘンダーソンの忠実な部下で、カスタムの町侵攻を前線で取り仕切る。豚のような醜い姿をしている。

アイザック

ヘルマン第3軍小隊長。パットンの護衛に残っていた下っ端の中では一番偉い存在。評議員のハンティに憧れており、いつかカラーの恋人が欲しいと思っている。

オルグ

ヘルマン第3軍一般兵。スプルアンスに負けず劣らず、見にくい豚のような姿。生まれが良いらしく、自分の階級にいつも愚痴を言っている。

「技能」

変身

自分の姿を変身させる技能。自分より強い者に変身することも可能。変身出来る時間は対象の強さで変化。

第43話 リーザス解放軍

・ラジールの町周辺 荒野・

「ぎゃっはっはっは！死ね、死ね！死んじまえい！！」

叫びながらルイスが愛用の剣を振り回す。握る箇所以外は余計な装飾が付いていない、ただ斬ることだけに特化した珍しい剣だ。敵を殺すのに最適な形を考えルイス自身が特注したものだ。チンピラ風の見た目に反し、ルイスの実力は本物であった。押し寄せてくるリーザス軍を次々に斬り伏せていく。

「油断するな、あと少し耐えれば戦いは終わる！」

周りの傭兵に檄を飛ばしながら、セシルが華麗に舞う。数に劣る傭兵部隊がここまで耐えきれているのは二つ理由がある。一つは、洗脳されているリーザス軍は深い思考の基で戦うことが出来ず、攻め方が単調になる。そしてもう一つの理由迫ってきた男兵士を峰打ちで気絶させながらルークが呟く。

「赤の軍だっ たらここまで耐えきることは出来なかっただろうな」

「それが不幸中の幸いというものだ」

ルークたちを取り囲んでいるリーザス兵が纏っている鎧の色は白。カスタム侵攻のため、ラジールにいたリーザス軍は二部隊。黒の軍と白の軍だ。その内、黒の軍全部隊と白の軍の大半はカスタムに向かい、残りの白の軍が傭兵部隊討伐にやってきたのだ。白の軍、この軍は情報戦に長けた軍であり、戦力としては他の色の軍に劣って

いる。勿論、有事の際には遊撃部隊もこなすため決して弱い訳ではないが、ルークと残っている傭兵部隊を壊滅させるには決め手に欠けていた。ルークも疲弊しきっている周りの傭兵に檄を飛ばす。

「冷静に戦え！情報戦特化の軍の単純な攻撃、こんなので死んだら傭兵の名が泣くぞ」

周りを鼓舞するため、あえて白の軍を貶めるような事を言う。だが、効果は絶大。元々ルイスのように血の気の多いものが大半の傭兵たちは、この言葉に奮起した。これならまだ耐えられる、ルークがそう思った瞬間、今まで迫ってきていた兵たちとは比べものにならない速さの剣戟がルークを襲った。すんでのところを妃円の剣で受け止め、相手を見る。それは女性であった。その目は洗脳によって濁っているが、整った容姿。シルと同じピンク色の長い髪を風になびかせながら、再度ルークに剣を振るう。それを躲しルークも剣を振るうが、相手もそれを躲す。深い思考が出来ないはずの洗脳兵がここまでの動きを出来るのは、本能によるものだろう。それだけで、目の前の女性が普段からどれほど鍛錬を詰んできたかが判るというもの。

「情報戦特化の白の軍とはいえ、流石に本物の一人や二人いるものだ。ランス、急いでくれ。これほどの猛将、ここで殺すには惜しい」

ルークは知らなかったが、目の前に対峙するのは、白の軍副将ハウレーン。これほどの剣戟を受けながら、自分が負けるのではなく、相手を殺すのが惜しいと平然と言っている。ハウレーンの剣を捌きながら、ルークはランスが洗脳を解いてくれるのをひたすら待った。

・ラジールの町 ラジール家 地下・

「ランス様、女の人です！」

「がはは、見つけたぞ、あれがナースちゃんだ！」

地下に潜ったランスたちが見たのは巨大な鍾乳洞。屋敷の地下にこんなものを作れるということは、相手にも相当の魔法使いがいる。それが今リーザス軍を洗脳しているナースなのか、はたまた別の魔法使いなのか。中は迷宮のようになっており、ナースを見つけるのに相当の時間が掛かってしまっていた。なんとか鍾乳洞の最奥の部屋まで辿り着いたランスたちは、部屋の中央で座禅を組んでいる赤い髪の魔法使いを発見する。あれがリーザス軍を洗脳している魔法使い、ナースに間違いないだろう。よほど集中しているのか、ランスたちが部屋に入ってきたことにすら気がついていない。

「ランス様、この方の集中を止めればリーザス軍の洗脳が解けると思われます」

「よし、シイル、マリア！ちょっとそこで見張りをしている」

「へ？」

「まさか…」

「紳士の俺様が暴力で集中を乱すのは似合わないな。では…あの手段しかあるまい…ぐふふ」

イヤらしい顔をしてナースに近づいていくランス。悲しげな顔をして後ろを向くシイルとその様子を見てため息をつくマリア。マリアもシイル同様後ろを向こうとしたが、その時ナースの左右に置いてある二つの水晶が目飛び込んでくる。

「（…あれ？あの女よりもあつちの水晶の方が強い魔力を…）」

「お、なんだ、マリア？混ざりたいのか？」

「ば、馬鹿！そんな訳ないでしょ！」

ランスの言葉に、ふん、と後ろを向くマリア。数分後、部屋にナースの悲鳴が響き渡った。後ろを向いていたマリアは気がつかなかったが、悲鳴が響く瞬間、左右の水晶にヒビが入り、音もなく砕け散っていたのだった。

・ラジールの町周辺 荒野・

「…はっ！私は…」

ルークに迫っていたハウレーンの剣が止まる。攻撃を止めたのはハウレーンだけではない。周りのリーザス軍が一斉に攻撃を止め、ざわつき始めたのだ。ルイスがルークに尋ねてくる。

「旦那あ？こいつはどういうことだ？」

「…ランスだ！どうやらリーザス軍の洗脳が解けたみたいだな」

「ふう、やれやれ。これで一息つけるか」

そう言いながらセシルがルークに向けて手を差し出す。

「重ね重ねになるが、感謝する、ルーク殿。貴方がいなければ持ち堪えられなかっただろう」

「こちらこそ、今後のリーザス解放戦でも協力して貰えるんだ。頼りにしているぞ」

固い握手を結び合う二人。周りでは傭兵たちが歓喜の声を上げており、洗脳から解けたリーザス軍が傭兵たちに謝罪をしている。どうやら洗脳されている間の記憶も、臆気ながら残っているようだ。厳しい戦いはこれからが本番だが、ひとまずこの戦況を乗り越えたことを全員で喜び合うのだった。

「ところでルイス。その旦那って呼び方は何とかならないか？お前の方が年上だろ？」

「けっけっけ。一応雇い主になるわけだからな。ルークの旦那って呼ばせて貰うぜ」

- カスタムの町防衛線付近 荒野 -

「来たわ！ヘルマン軍よ！」

「ルーク、間に合わなかったの…？」

忍者のかなみがいち早くこちらに向けて進軍してきたヘルマン軍をその目に捕らえる。連れているリーザス軍の洗脳が解けている様子は無い。作戦は失敗したのか。その報告を受けた面々に緊張が走る。

「ふふふ、ヘンダーソン殿下の仰られた通り、今のカスタムなぞ赤子の手を捻るも同然よ」

カスタムの町へ向けて進軍をしているヘルマンリーザス合同軍。その指揮を執るのはヘンダーソンの側近、スプリアンスだ。

「スプランス様。カスタムの町を滅ぼしたら、その後はお楽しみ
って事でいいんですよね？」

「ああ、男は殺し、女は犯し尽くせ。これほどの抵抗を行った見せ
しめにもなる」

「流石、スプランス様は話が分かるぜ！」

「下卑た笑い声を上げるヘルマン兵。スプランスが側にいた年の
いったりーザス兵の頭をぼんぼんと撫でる。

「くくく、リーザスの猛将、バレスもこうなつてはただの耄碌ジジ
イだな」

「はっはっは、ナース様の洗脳は完璧つてもんだ。あの猛将がただ
の耄碌ジジイになっちまうんだからな！」

「……確かに、儼も耄碌したものじゃな……」

頭に手を乗せていた目の前の老兵、リーザス軍総大将バレスが静
かに呟く。瞬間、スプランスは異変に気がつく。洗脳されている
はずのリーザス兵が何故喋れるのだ。だが、スプランスがその答
えに到ることはなかった。答えに到る前に、バレスによって首を飛
ばされたからだ。

「目の前の敵をみすみす見逃していたのだから！皆のもの、目を
覚ませ！ヘルマン軍を打ち倒すのじゃ！！」

響き渡る怒声。洗脳から解けたリーザス軍が、ヘルマン軍に襲い
かかったのだ。虚を突かれた形になったヘルマン軍は次々に打ち倒
されていく。

「！？リーザス軍がヘルマン軍と戦っている！」

「どうやら間に合ったみたいだぜ！」

「ならばこちらも援護しましょう！突撃！」

「おー！張り切っていきますよー！」

リーザス軍の洗脳が解けたのを確認したカスタム防衛軍も動く。カスタムに侵攻してきた兵の内訳は、ヘルマン軍2000に対しリーザス軍4000。これにカスタム防衛軍も加わり、ヘルマン軍は壊滅した。リーザス軍は即座にラジールの町に引き返し、町に残っていたヘルマン軍も打ち倒す。こうして、カスタムの危機は去り、ラジールの町は解放されたのだった。

・ラジールの町 司令部・

「ルークさん、お疲れ様です！」

「かなみたちも、無事で何よりだ」

ラジール解放に成功した一行は、ラジールに簡易の司令部を作った。洗脳から解けたリーザス軍とカスタム防衛軍が合流し、新たにリーザス解放軍と名付けられた。ルークが司令部に入ってくるとかなみが声を掛けてくる。今この部屋では、今後に向けての作戦会議が行われていた。部屋にいるのは各代表者たち。リーザスからは黒の軍將軍バレス、副將ドツヂ、サカナク、ジブル、白の軍副將ハウレーンが出席していた。ハウレーンの隣に空席がある。白の軍將軍がまた来ていないようだった。カスタム防衛軍側からは司令官マリアと、部隊を率いるミリ、ラン、作戦参謀の真知子。これにルークとかなみが加わり、部屋の中には計十一名。ルークがこの場にいるのが不思議な二人の話題を出す。

「マリア、ランスと志津香はどうした？」

「ランスはそんな会議面倒くさいからパスだつて。志津香は疲れたから寝るつて。今までカスタム防衛で一番頑張っていたのは志津香だから目を瞑つてあげて」

「魔法は集中しなきゃならない分、精神的負担も大きいしな。ま、いいさ」

ランスと志津香が欠席している理由を聞き、納得したように席に着くルーク。すぐに思い出したように言葉を続ける。

「そうだ。申し訳ないが、後で誰かランスの部屋に行つてくれる人を捜してくれないか。作戦前に、成功したらたつぷりサービスするようにとか言っていたからな。こういうことを反故にするとヘソを曲げかねん」

「ガキかよ」

「ま、大きい悪ガキつて感じたな。だが、頼りにはなる。ヘソを曲げられて、部隊を抜けられるのは困るからな。最悪、町で娼婦を買つてきてカスタムの娘だと名乗らせても構わん。誰もお礼に行かせないのだけはちよつとマズイ」

「じゃあない、俺が行くか」

「スマン、ミリ」

「なあに、解放してくれたことには感謝してるしな」

気にするな、と手で合図をするミリ。これでランスがヘソを曲げることもないだろう。程なくして会議が始まる。前に立つのは両司令官のバレスとマリア。まずはバレスが謝罪の言葉を口にする。

「リーザス総大将、バレスじゃ。操られていたとはいえ、リーザスの為に戦ってくれていた人たちに刃を向けたこと、真に申し訳ない。この非礼、儼の首を持って許していただきたい…」

いきなり剣を抜きだしたバレスをマリアとハウレーンが慌てて止めるに入る。

「止めて下さい！償いたいって言うのなら、一緒にリーザス解放のために戦って下さい！」

「父上……いえ、バレス將軍！そんなことをしても、リーザスの為になりません！」

「だが……」

「バレス將軍。リア王女を見捨てる気か？捨てた命であるなら、もう一度リア王女の為に捧げてくれ。貴方の力が必要だ」

気がつけばルークもバレスの前に立っていた。剣を持つ手を取り、バレスの目をジッと見る。頭を下げ、剣を仕舞うバレス。

「……ルーク殿と言ったか。恥の上塗り、かたじけない。……迷惑を掛けたが、もう迷いはない。共に戦わせていただく」

「ああ、これから宜しく頼む」

席に引き返そうとするルークに、白の軍副将ハウレーンが一礼をする。先ほど父上と言っていたことから、バレスの娘なのだろう。手で合図をし、黒の軍副将の三人とも一言ずつ交わした後、会議が再開する。

「騒がせてしまい申し訳ない。これから我々はヘルマン軍からリーザスを解放するため、戦争を仕掛けることとなる」

「これは正義の戦いよ。悪のヘルマン軍を絶対に許す訳にはいかないわ！」

「おもしれーじゃねえか。ここでヘルマン軍を叩いておかないと、いずれまたカスタムの町に攻めて来やがるからな。徹底的にやっ

やろうぜ！」

「そうですね。それに、最早この戦争はリーザスやカスタムだけの問題では無い。魔人が絡んでいる以上、世界の命運をも握っていると言っても過言では無いわ」

「捕まっているリア王女様も助け出す必要がありますし…負けられませんね。」

マリアの言葉にミリが奮起する。真知子とランも決意を新たにし、会議に臨む。リア王女の名前を聞いたバレスがかなみに一礼をする。

「かなみ、良くやってくれた。お主がいなかったら、今のこの状況はない」

「いえ、私なんか…リア王女をみすみす敵に…」

「いや、あの場ではそれが最善の策であったのだろう。リア王女とマリス殿がそう決断したのだ」

「あの二人なら判断を間違えるということもないだろう。気にするな、かなみ。必ず助け出す」

「…はい！」

「マリア。現状は？」

「私たちの軍は、カスタムの軍200とリーザス軍4000、傭兵部隊80。リーザスの内訳は黒の軍1000、白の軍500、及び市民兵が2500よ。これなら十分やれるわ！」

マリアが現状を報告する。リーザス軍に襲われていた傭兵部隊はかなり損耗し、戦える人数は100を切っていた。カスタムの人数に引っかけたルークがマリアに問う。

「カスタムの戦える人数は100を切っていたんじゃないのか？」

「ロゼさんが町に戻ってきてくれて、治療をしてくれているの」

「ロゼが？」

悪魔の通路で別れたロゼは、あのまま引き返したと思っていたのだが、どうやらカスタムにやってきて治療をしてくれたらしい。どういった心変わりだったのだろうか。

「対するヘルマン軍つてのはどの程度いるんだ？」

「うむ…儂が答えさせて貰おう。リーザスを占領しているのはヘルマン第3軍。その数1万。それに加え、洗脳したリーザス兵を儂らの他にあと1万と、魔物によって構成されたモンスター部隊2万。計4万。」

「なんて数…これでは…」

「心配召されるな、ラン殿。恥ずかしながら我が軍のように洗脳されたリーザス兵は、その洗脳を解けばそのまま味方になります。また、城に居らず洗脳を逃れた兵が、各地で抵抗を続けている」

「ええ、その人たちを加えて軍を強化していけば、必ず勝てるわ！それに、私たちには秘密兵器チューリップ3号がある！」

ナースの他に各地にリーザス軍を洗脳している魔法使いがいるらしい。少し考え込むルーク。心配そうに顔をのぞき込むかなみだが、思い至ったのか、口を開く。

「……捕らえたナースにヘルマン兵を洗脳させることは可能か？」

「ルーク殿！？それは騎士道に…」

「ハウレーン、申し訳ないがそれを問答している段階は過ぎている。リーザス奪還のために手段を選んでいる場合ではない」

「その意見には僕も賛成ですが、どうやら無理みたいですね」

ルークとハウレーンの会話に一人の男が割り込んでくる。言葉を発したのは丁度司令部に入ってきた男。白い甲冑を身に纏い、軍人

には珍しくメガネをかけている。

「遅くなりました。白の軍將軍、エクス・バンケットです」

「ルーク・グラントだ。他の者の自己紹介は後にしよう。無理というのは？」

「ええ、僕が遅れていたのはそのナースの尋問に立ち会っていたからなのですが、どうやら彼女の魔法で操っていたのではなく、アイゼルという魔人に貰った水晶の力で操っていたということのようです」

「……っ！」

魔人の名前を聞き、一瞬顔をしかめるが、すぐに元に戻し、会話を続ける。

「やはりか。ゼスならともかく、これほどの魔法を使える者がヘルマンにそう何人も居るはずはないと思っていたが……」

「ええ。魔人の力によるものです。利用できれば大きな戦力になったのですが、水晶は既に割れてしまい、使い物にはなりませんでした。それと、都市長が挨拶をしたいとお見えです。会議中ですがすぐに終わるとのことなので通しましたよ」

そう言ったエクスの後ろから都市長のアム口と、秘書のレイリイが現れ、一礼する。

「ラジールの町、都市長のアム口でございます。このたびはこの町を救っていただき、ありがとうございました」

「町の者、皆が感謝しております。ラジールの町はリーザス解放軍を全面的に支援します。この町には武力はありませんが、必要な資金は可能な限り捻出します」

「おお、かたじけない」

「ありがとうございます！」

アムロとレイリイが代表であるバレスとマリアに全面支援を宣言する。今は少しでも人手が欲しいとき。資金援助の申し出はかなりありがたい。部屋の人たちにも一礼をしていたレイリイがルークに気がつく。

「ルークさん！？貴方も解放軍に？」

「おお、ルーク様。そうですね、貴方がラジールの危機をまた救っていただいたのですな」

「知り合いですか？それにまたとは」

アムロの言葉にエクスがほう、と声を漏らす。

「一年ほど前に冒険者の仕事で町のモンスターを倒しただけさ。お久しぶりです、アムロ都市長、レイリイさん」

「お久しぶりです。謙遜なさないください、ルークさん。今でも町の者は貴方に感謝しているのですから」

「依頼をこなしただけさ。資金援助をしていただけるのは非常にありがたい。そこで、取り急ぎやって欲しい事がある。資金で傭兵部隊を……」

「ああ、失礼。それなら僕が既に頼んでおきました。二、三日中に傭兵部隊が千人ほど合流する予定です」

「……早いな。流石は白の軍將軍と言ったところか」

「それが僕に求められている仕事ですからね」

その後、会議は円滑に進んでいった。マリアの秘密兵器というチユーリップ3号の完成と傭兵部隊の到着し次第、リーザスに向けて進軍。ひとまずの目的としてラジールとリーザスの間に位置するレッドの町の解放が最優先事項となった。ハウレーンやジブルからす

ぐにでも進軍すべきとの声も上がるが、ルーク、エクス、真知子の三人がこれに反対。レッドの町にはリーザス最強を誇る赤の軍がいるという情報を真知子が得ていたのだ。急がば回れ、負けの許されないこの戦争では確実な勝利のために、あえて数日待つことに決めたのだ。会議も終わりに近づき、バレスが大事なことを決め忘れたと言い、口を開く。

「解放軍のリーダーだが、ルーク殿か MARIA 殿のどちらかにお願いしたいのですが…」

「えっ！私！？」

「バレス將軍、貴方が一番適任なのでは？」

「いえ、愚かにも敵に操られていた儂がおめおめと総大将に収まる訳にはいきませぬ。ここはカスタムの司令官である MARIA 殿か、ラジール解放の立役者でもあり傭兵部隊をまとめ上げたルーク殿が適任かと」

「エクス將軍は？」

「リーザスの総大将であるバレス將軍を僕が率いる訳にはいきませぬので」

この場にランスが居れば、バレスはランスにも話しを振っただろうが、流石にこの場にいない者をリーダーにするわけにもいかず、ルークと MARIA に話しを持ちかけたのだ。

「じゃあ…ルークさ…」

「MARIA が適任だな」

「へあ！？」

「私もルークさんが良いと思うのですが…」

まさかの指名に MARIA が驚きの声を上げ、かなみが MARIA に同意する。

「俺に上に立つほどの器はないし、指揮官としての経験もないからな。総司令官は後衛で全体を見通した方が良い。カスタムを少人数で守りきった経験もあり、後衛であるマリアが文句なしに適任さ」

「ふむ…まあ一理ありますね」

「では、マリア殿！これから解放軍のリーダーとしてお願いします！」

「あはは…えっと、到らないところはあると思いますが、よろしく願います！」

こうしてリーダーにはマリアが就任し、会議は終了した。司令室を出ると辺りはもう暗くなり始めていた。流石に戦い疲れたルークも、ランスに習って早めに休むかと宿に向かおうとする。酒場で飲んだくれているというローラがこの町から出ないように見張って欲しいと都市長のアムロには伝えてあるため、急いで合いに必要も無い。が、後ろから呼び止められる。振り返るとそこに立っていたのはエクスだった。

「エクス將軍か。何か用で？」

「いえ、協力の感謝と、傭兵部隊を引き繋いでくれたことへの改めの礼を。洗脳が解けた後に僕らが説明をしても、今の今まで襲ってきていた相手の言うことを聞いてくれるかは微妙でしたからね。お陰で仲介役との繋がりも切れず、傭兵の補充を取り付けることも出来ました」

「ま、勝手に解放後の報酬上乘せを約束してしまったがな」

「構いませんよ。今、すぐに、戦力が欲しいのですから。それと、傭兵部隊はしばらく貴方が指揮していただけますか？」

「人の上に立つのは苦手と言ったはずだが？」

「何、とりあえず名目上だけでいいですよ。実際にはセシル殿が指揮を執っていただけでしょうし。ただ、傭兵が一番上に立つ部

隊があるというのはあまりよろしくない。普段は冒険者でしょうが、今の貴方は解放軍でも上位に位置する。その貴方が指揮官であるなら、後々文句が出にくくてね」

不敵に笑いながら、メガネの位置を直し、エクスが話しを続ける。

「……僕は貴方がリーダーになってくれる事を望んでいたのですがね」

「……マリアの就任には賛成だったのではないのか？」

「反対ではないですよ。ですが、一理あると言っただけで、ベストだとは思っていません」

「俺がベストだと？ 買い被りすぎさ」

「……僕はそうは思いませんがね。どうです、リーザス解放の暁には白の軍に入隊する気はありませんか？ 歓迎させていたいただきますよ」
「悪いな、まだどこかに所属する気はないんだ。これで失礼させて貰う」

そう言っただけで立ち去っていくルークの背中を見送りながら、エクスは陰に隠れ控えていたハウレーンに声を掛ける。

「ハウレーン、どう見えますか？ 先を見据えて傭兵部隊を繋ぎ止めた手腕、洗脳を有効活用しようとする広い視野、カスタムやラジールの人々からの信頼も厚そうでしたし、僕は適任だと思うのですがね」
「申し訳ありません、エクス將軍。そういった事は私には判りませんが……一つだけ確かなのは、ルーク殿は私よりも遙かに強いということです」

「……ほう？」

「洗脳されていた際、臆気な記憶ですがルーク殿と戦いました。私の剣を難なく捌き続けたあの手腕、恐らくリック將軍とも同等かと……」

「なるほど、リックとですか。ますます欲しい逸材ですね」
「多分、無理ですよ。エクス將軍」

話しに入ってきたのはかなみ。不思議そうにエクスがかなみに問う。

「何故そう思うのですか？」

「ルークさん、リア王女とマリス様直々に一度軍に誘っています。それも、副将の地位を約束してです。それでも断られましたから」

「な！？副将の地位を！？」

「ほう……」

ハウレーンが驚愕している横で、エクスは更にルークへの興味が増す。白の軍とは言わない、リーザスの為になんとか味方に引き込みたい。そのような思いを更に強くしていた。

宿に向けて一人歩くルーク。先ほどの会議で出た名前を思い出し、一人静かに呟く。

「サテラに続き……アイゼルもか……ホーネット派に何が起こっているんだ……」

その呟きは誰の耳にも届くことなく、夜の闇の中に消えていった。

第43話 リーザス解放軍（後書き）

「人物」

バレス・プロヴァンス

LV 30 / 37

技能 剣戦闘LV1

リーザス黒の軍將軍にしてリーザス軍總大將。リアの祖父の代からリーザスに仕える隻眼の名將で、その名は世界中に知れ渡っている。8人の子供がおり、ハウレーンはその内の一人。妻亡き後、男手一つで育ててきたが、少し男勝りな性格に育ってしまったことを悩んでいる。

ドッチ・エバンズ

LV 21 / 25

技能 剣戦闘LV1

リーザス黒の軍副將の一人。常に黒い兜で顔を隠しているが、これはリック將軍に憧れて真似をしているだけで、特に深い理由はないらしい。

サカナク・テンカ

LV 22 / 24

技能 剣戦闘LV1

リーザス黒の軍副將の一人。三人の副將の中では一番年配で、他の二人をまとめる存在。リーザスを思うあまり時に過激な発言が飛び出すこともあるが、全ては愛国心によるもの。

ジブル・マクトミ

LV 20 / 26

技能 剣戦闘LV1

リーザス黒の軍副将の一人。真つ赤な髪と太い眉毛ともみあげが特徴。黒の軍の副将は、一人一人の実力は他の軍の副将に劣るが、総大将として多忙なバレスを文武共に補佐している欠かせない人材である。

エクス・バンケット

LV 17 / 29

技能 剣戦闘LV1

リーザス白の軍将軍。リーザス一の知将と呼ばれており、直接剣を交えるのは苦手と本人は言っているが、そこそこに腕も立つ。四色の将軍の中では最も年が若く、同じく年の若いリックとは親友の関係でもある。ルークに興味を持ち、何とかしてリーザスに来て貰えないものかと考えている。

ハウレーン・プロヴァンス

LV 28 / 36

技能 剣戦闘LV1 盾防御LV1

リーザス白の軍副将。名将バレスの娘として幼い頃から父の背中を見て育った為、父に似て非常に生真面目な性格となる。騎士として生きることを望んでおり、結婚なども今は考えていないため、普通の女性として暮らして欲しいバレスは頭を悩ませている。

ナース

ヘルマン第3軍魔法兵。元々は大した実力ではないが、魔人アイゼルから貰った水晶の力によりリーザス軍を操っていた。ナース以外にも他に数人、同様の魔法使いがいるらしい。

アムロ

ラジールの町都市長。弱気な性格で、ヘルマン軍にすぐに降伏をしてしまったが、町を救ってくれた解放軍に感謝し、支援すること

を決める。ルークには以前町に侵入したモンスターを倒して貰ったことから、恩義を感じている。

レイリイ・芹香

LV 2 / 17

技能 秘書 LV 1

ラジールの町の敏腕秘書。美人秘書だが、寄ってくる男の誘いは全て断っている。密かに都市長のアムロに片思いしているが、アムロには妻がいるため思いを打ち明けられずにいる。

「都市」

ラジールの町

自由都市。自由都市でも中央部に位置し、各都市との交通が便利
なため、中継点として経済は発展している。

第44話 新パーティー結成

- 翌日 ラジールの町 -

ラジール解放戦から一日が経った。町はヘルマンに占領されていた際に破壊された建物の復旧作業で人が忙しく動いていた。それを横目で見ながら、ルークはローラが居るという酒場を目指す。歩いていると、目の前になみと志津香の姿が見えた。

「おはよう、かなみ、志津香。戦いの疲れは取れたか？」

「あ、ルークさん。おはようございます」

「……ああ、誰かと思えば色男さんね」

「は？」

元気に挨拶を返してくれたかなみとは対照的に、不機嫌そうにそう言ってくる志津香。それを不思議そうに見ていると、突然足を思いつき踏まれる。

「がっ……いきなり何を……」

「あら、ごめんなさいね。でも、父の復讐に協力するとか言っておいて、何の協力も無しに女の子と遊び回っていた人には良い薬じゃない？」

「（もしかして、私のせい？それに……志津香さんがこんなに不機嫌なのって、もしかして……）」

「一体何の話をしているんだ……？と、そうだ。こんな時だが、これを渡しておく」

踏まれた足を押さえながら、ルークは道具袋の中から紙束を志津

香に手渡す。何かの資料のようだ。

「…これは？」

「ゼスに住むラガル姓の人物の資料だ。この中に篤胤さんの仇に繋がる奴がいるかは判らんがな」

「!？」

志津香が目を見開き、資料をパラパラと見る。そこには四人の人物が載っていた。アスビ、スター、アルブランド、ナギ。最後のナギの資料は少なかったが、他の三人はかなり詳細なことまで書かれている。自分の冒険の傍らにここまで調査をしてくれていたのかと驚く。

「こんなに…いつの間に…」

「ゼスの上層部に知り合いがいてね。色々協力して貰ったんだ。今渡してもらーザスを解放するまでは意味のない代物だが、モチベーションは上がるかと思ったんで、一応渡しておくよ」

ルークの言葉通り、この資料はサイアス協力の下作られたものだ。ナギの調査は未だ進んではないが、ゼスの住民票に記載されているラガル姓の者を調査し、ジウの町の復興作業を手伝っていたルークにその情報を渡してくれたのだ。

「あ、あの…」

「ん？何か資料に不備があったか？」

「いえ…さっきは遊び回っていたとか言って…悪かつ…」

志津香が何かを言おうとしたその時、ランスがこちらに向けて全力疾走してくるのが見えた。かなみと志津香の後ろまで迫ると、叫びながら思いつきり二人のスカートを捲り上げた。

「なんで昨晚サービスに来たのがミリなんだああああ!!」

「っ!?!」

「きゃあああああ!!」

志津香は直に、かなみは下に着込んだ鎖かたびら越しにだが下着が丸見えになる。すぐに目を反らしながら、ルークがランスに向かって応える。

「いや、ミリもカスタムの娘だろ。その言い方はミリに失礼だぞ」

「違う、ミリの身体には何の文句もないが、あいつの相手は疲れるんだ!ええい、マリアに文句言って一発やってやる!」

そう言つて司令部の方へ走つて行つてしまふランス。その背中を見送つたルークだが、直後場の空気が凍り付くを感じる。見ればかなみと志津香がこちらを睨んでいる。

「……見た?」

「……見ましたか?」

「いや、丁度目に埃が入つて……」

「二人とも可愛い下着だったわね」

「白とかえるだったな」

「!?!ふんっ!?!」

つい柄を応えてしまったルークの腹に、志津香が正拳突きを決めて立ち去つてしまふ。かなみも顔を真っ赤にしながら走つて行つてしまった。ルークが腹を押さえながら、後ろから声を掛けてきた人物に文句を言う。

「ロゼ、変なことを言わないでくれ……」

「あはは。ま、目の保養にはなったんじゃない？」

声を掛けてきたのはロゼ。マリアに聞いたとおり、カスタムでの治療を終え、ラジールまでやってきていたのだ。

「ところで、どうして前線のラジールにいるんだ？悪魔の通路で引き返したと思っていたんだが……」

「そりゃ、より安全なところにいるのが当然ってものでしょ」

「アイスやカンラにいるよりも、ここの方が安全だと？」

「ま、勝ち馬には乗る主義なのよねー」

そう言いながら、ルークを指さす。

「買い被り過ぎじゃないか？だが、治療をしてくれたことには感謝する」

「後でたつぷりと請求させて貰うわよ」

「それはリーザスに頼む。それじゃあ、俺は酒場に用があるんで、この辺で」

「はいはい。あ、レッドの町に攻め込むならさ、一つお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「あの町にさ、優秀な神官がいるみたいなのよねー。商売敵だから、どさくさに紛れて殺してくれない？プチッと」

「物騒なお願いをしないでくれ……」

・ラジールの町 酒場・

ロゼと別れ、酒場までやってきたルーク。入り口の前に立っ

た男が、ローラが店の中にいることを報告してくる。アムロとレイ
リイに頼まれ、監視していた者らしい。一言礼を言い、店の中に入
っていく。バーテンハニーの伊集院がルークの顔を見て挨拶に寄っ
てくる。

「お久しぶりです、ルークさん。聞きましたよ、今回もラジールの
町を救ってくれたのは貴方なんですって？」

「なに、ちよつと協力しただけだよ。ところでローラという娘は？」

「話しは聞いております。あちらの席です。少しくらい騒いでしま
つてもこちらでフオーローしますので……」

「荒事にはならないよう、努力はするさ……」

そう言つて、奥の席に進んでいく。そこではローラとシャイラ、
ネイの三人が昼から飲んだくれていた。ローラが飲んでいるのはミ
ルクセーキなので、実際に酔っ払っているのは二人だけだが。

「数日ぶりだな」

「あ、お前はルーク！」

「ええい、ここであつたが100年目！」

「止めとけ、そんな酔っ払った状態で俺とやるつもりか？来るなら
…手加減はしないぞ」

「はうっ……」

一瞬だけ睨みを聞かせると、それだけでシャイラとネイが黙つて
しまふ。そのままローラの正面に座る。

「……なによ？」

「盗んだ物を返して貰おうか。あれはリーザス王家の大事なものな
んだ」

「いやよ！私の大事なリスを奪つておいて、よくもそんなこと言え

たものね！」

「…それは誤解だ。リスは死んでなんかいない。人間になるために旅に出ただけだ」

「そんな嘘に騙されるもんですか！もし生きているって言うのなら、この場にリスを連れてくることね！そうしたら返してやつても良いわ」

「あれがないと、この戦争が終わらないんだ」

「ふん、剣と鎧で戦争が終わるなんて信じられないわ。剣と鎧はある場所に隠したし、その場所は私しか知らないわ。例え拷問されたって場所は話さないわよ。リスのいない世界に未練なんて無いもの！」

頑としてルークの申し出を拒否するローラ。その決意は固いらしく、目を見る限り確かに生半可な拷問程度では話しそうになかった。この状態から口を割らせるには…ローラを殺す覚悟でやらないと難しいだろう。ヘルマン兵ならまだしも、ローラは巻き込まれただけの一般人。出来ればそれは避けたい。リーザス奪還まで成功し、魔人を倒すためにカオスが必要になるその最後の瞬間まで…その手段を使いたくはない。ローラから聞き出すのは難しいと判断したルークは、ちらりと横のシャイラとネイを見る。

「な、なんだよ？やる気か？」

シュツシュ、とシャドーボクシングをするシャイラ。だがその汗には汗が流れていた。二人に睨みを聞かせるルーク。

「ちょっと来い」

「「はいっ！」」

素直に応じ、ローラとは離れた奥の席に二人を連れて行く。そこ

で二人を前にし、話しを始める。

「確かに、お前らが俺とランスを恨むのは判る。いや、俺はとばっちりだが、この際置いておくとする」

「はい……」

「だがな、一般人のローラを巻き込むのは酷すぎるだろ？あまつさえ恋人が死んだなんて嘘までついて」

「仰る通りです……」

「だったら、お前からからもローラを説得してくれないか？あの剣と鎧は、この戦争を終わらせる大事な鍵なんだ」

「そ、それなんだけどよ……」

ポリポリと頬を掻きながら、シャイラが口を開く。

「あたしらもさ…恋人が死んだと思い込んで泣いているローラを見て…流石に悪かったかな、と思って死んでないって教えたんだけどさ…」

「その…慰めてくれるのね、ありがとってな感じで…全然信じてくなくて…」

「しかも、あまりにもそんな話が続くもんだから、最近じゃあたしらの事もあんまり信用してないみたいで…」

「剣と鎧の隠し場所…私たちにも教えてくれないの…」

「……最悪だ」

「ええい、使えん!!」

「「うわっ!!」」

いつの間にか後ろにいたランスが、シャイラとネイの胸を揉む。突然のことに驚く二人。そのまま二人を引きずっていく。

「悪い娘にはお仕置きだー、がはは!!」

「ふざけんな、おい、離せ！」

「いやああ…この前されたばかりなのがいい……」

「ま、今回は自業自得って事で…南無南無」

連れて行かれる二人に手を合わせるルーク。そのまま酒場を後にし、司令部へと顔を出す。入り口に衛兵が立っているが、ルークは顔パスで通れる。中に入ると、バレスとエクス、ハウレーンの三人がリーザス兵の動き方について会議をしているところだった。

「おお、ルーク殿。どうかされましたかの」

「軍の機密話し中、すまない」

「気にされなくていいですよ。今は同じ解放軍なのですから。むしろ貴方には参加して欲しいくらいですよ」

「リーザス兵の動かし方の作戦会議にか？」

「ええ…きつといつか役立つときが来ますよ」

「ほう…エクス殿。それはもしや……」

「いや、しばらくは来ないさ」

あえてしばらくと言うルーク。誘いであるのは判っていたが、エクスもそれに応じる。

「しばらく…ですか。まあ、今はその辺りで手を打っておきましょう。それで、こちらに寄せられたのはどういった用で？」

「ああ、一つ追加の頼みがある。酒場のローラの監視をしているのは聞いていると思うが、その恋人のリス…モンスターなんだが、その足の取りも追って貰えるか？同時に、ローラが隠した聖剣と聖鎧の隠し場所も、可能な範囲で搜索を頼む」

「なっ！？人間とモンスターが恋人！？」

「ふむ…承りました。それと、リーザス奪還までどちらも達成できなかった場合は…不本意ではありますが…そういう事でよろしいで

すか」

「……やむを得ないな。だが、ローラは一般人だ。それは最後の手段にしてくれ」

「当然です。僕も女性を傷つけたくはありませんからね」

最後の会話はバレスとハウレーンに聞こえぬよう、小さく話し合う二人。騎士道を重んじる二人には、反対されかねないからだ。

「そういえばルーク殿。マリア殿がルーク殿がこちらに見えられたら、工場の方に寄って欲しいと言ってましたぞ」

「マリアが。判った、行ってみる。邪魔をした」

そう行つて司令部を後にするルーク。その背中を見送つた後、バレスが口を開く。

「それ程か？」

「ええ、武はリック並み、知は手前味噌ながら僕相当、人の上に立つ器もある。ですが、リア王女とマリス様直々に副将の地位を約束しても断られたようです」

「なんと……ただ者では無いと思っていたが。儂も軍人としてはそう長くはないだろう」

「父上!？」

「ハウレーン、ここではバレス將軍と呼べ。……リーザスでは儂、ヘルマンではトーマとレリユーコフ。もう古い時代の人間じゃ。もうそろそろ、世代交代の時じやろう。儂がまだ現役の内に、是非とも黒の軍に来て欲しいものだ」

「申し訳ありませんが、彼は白の軍が貰いますよ」

「ふふ。この調子では赤と青も狙ってきそうじゃの。リーザス奪還の暁には、一つ勝負と行くか」

「負けませんよ、バレス將軍」

ニヤリ、と笑いあう二人の将軍。その様子を見ながら、ハウレーンは将軍二人にこれほど認められているルークの凄さを改めて目の当たりにし、自分の中での評価も上方修正するのだった。ルークの知らないところで、争奪戦が始まっていた。

・ラジールの町 工場・

ここは MARIA が秘密兵器である チューリップ3号 を作るために臨時で建てた工場だ。狭い工場であり、中は物凄い騒音であった。

「あ、ルークさん！来てくれたのね」

「ここは凄い騒音だな」

「あはは。チューリップ3号を大急ぎで開発してますから」

「ところで、以前から話に出ていたが、そのチューリップ3号というのは？」

「よくぞ聞いてくれました！チューリップ3号というのは…」

「先生。チューリップ3号の事は極秘事項なので、あまり話すのは…」

MARIA が言いかけたのを、奥から出てきた黒い髪の女性が止める。彼女も MARIA 同様メガネをかけており、服も MARIA と同じ作業着を着ている。

「ああ、いいのよ、香澄。ルークさんは仲間だし、解放軍の中でもかなり上の人だから」

「MARIA、彼女は？」

「彼女は香澄。私の助手で、チューリップ3号開発に大きく関わっ

ているわ」

「初めまして、香澄です」

「ああ、ルークだ。よろしく頼む」

ペコリと挨拶をした後、マリアに指示を受けて作業に戻る香澄。カスタムの事件後、いつの間にか助手まで出来ていたのかと驚くルーク。

「それでね、チューリップ3号っていうのは物凄い兵器なのよ。ストーン・ガーディアンよりも強固で、ファイヤードラゴンより破壊力がある無敵の戦車なの。これが出来たらヘルマン軍なんか簡単に蹴散らしてやるわ!」

「そいつは頼もしいな。で、俺を呼んだ用っていうのは?」

チューリップ3号の素晴らしさを延々と語っていたマリアだが、ルークの言葉にピタッと止まる。

「あのね、チューリップ3号は動きさえすればヘルマン兵を簡単に蹴散らせるの…」

「ほう、動きさえすればか。以前にも聞いたような話だな。で、燃料か?」

「ピンポーン! 流石ルークさん、話が早い! 燃料になるヒララ合金が届かないの。烈火鉱山から送って貰える約束になっていたんだけど、鉱山で事故が起こったみたいで…」

「なるほど、それを取りに行つて欲しいわけだな。了解だ、他に同行者は?」

「聞いた話だと、鉱山の事故の原因はモンスターみたいなもの。みんな次のレッド解放戦の準備に向けて忙しいから、あまり戦力は避けないけど、なんとかミリさんとトマトさんに同行をお願いできたわ。ランス、シイルちゃん、かなみさんも独立部隊だから、六人で行つ

てください」

「ミリか。戦力として文句はないな」

「それじゃあ、お願いします。気を付けてくださいね」

・ラジールの町 入り口・

マリアからの依頼を受け、工場を後にしたルークは、烈火鉱山に向かうメンバーが町の入り口に揃っているという事なのでそこに向かう。ルークの前に既に他のメンバーには話しを通していたようだった。ルークが町の入り口に到着すると、既に全員揃っていた。いや、いたのは五人だけではない。何故かセシルもこの場にいた。

「遅れてすまない」

「何、こっちも今揃ったところさ。また一緒に旅が出来て嬉しいぜ」

「ルークさんこうして一緒に冒険が出来るなんて、感激です！」

ミリが二つと笑い、トマトが右手を振り回しながら大げさに喜ぶ。その横でかなみが赤い顔をしながら俯き、ぶつぶつ独り言を喋っていた。

「…どうして今日に限ってかえるなんて履いて…いや、それよりもあんな恥ずかしい姿を見られたからには…せ、責任を取って貰うしか…」

「かなみ、どうかしたか？」

「ひゃい！？いえ、何でもありません、ルークさん！」

「？ならいいが、それとセシルはどうしてこの場に？一緒に来るのか？」

「いや、補充の傭兵部隊がいつ到着するか判らないから、それに備

えて町には残るよ。このミリとは親友でな、見送りに来ていただけさ」

「そうだったのか。一応俺がトップにはなっているが、傭兵部隊のことは任せる。ルイスと協力して二人でまとめてくれ」

「了解だ。こちらの心配はいらない。それより、ミリの事をよろしく頼む。前に突っ込みすぎて、怪我をしやすい性格だからな」

「おいおい、俺は猪か？」

「そんなところだろ」

笑いあう二人。親友だからこそその独特の空気がそこにはあった。ランスとシルにも話しかける。

「ランスも協力してくれるのか？」

「がはは！ま、俺様の女の頼み事は聞いてやらんとな」

「ランス様は、シャイラさんとネイさんを抱いた直後で機嫌がよろしかったんです」

シルがそつとルークに耳打ちしてくる。ランスにしては珍しく素直に応じたと思えば、どうやらそういうことらしい。

「じゃあ、そろそろ行くか」

「うむ、さつさとヒララ合金とやらを取ってくるぞ」

そう言ってセシルを残し、門を潜る一行。ラジールを出たところに、一人の少女が立っていた。特徴的な緑の髪に、大きな帽子と風になびいたマント。志津香だ。

「志津香、どうした？」

「私も行くわ。ランスがいたんじゃない不安だしね。後衛もシルちゃん一人じゃ大変でしょ？」

「なんだと！」

「戦争の準備は良いのか？」

「大丈夫、任せてきたわ」

「…頼りにしてるぞ、志津香」

「任せて」

こうして志津香を加え、七人は烈火鉾山を目指しラジールを後にした。まだ見ぬ秘密兵器、チューリップ3号。その燃料を手にするために。

・ラジールの町 工場・

「マリア、大変よ！志津香がいないわ！！」

「えっ！？魔法部隊の準備は？」

「それが…こんな置き手紙が…」

工場に慌てて入ってきたランから、マリアは志津香が置いていったという手紙を受け取る。

・ランへ ちよつと烈火鉾山に行つて来るから、魔法部隊の準備はよろしく 志津香・

「……ラン、頑張つて！」

「ただでさえミリがいなくて大変なのに、これ以上は無理よ！」

「大丈夫、ランならやれるって、私信じてる！」

ランの顔が絶望に沈む。こうしてランは、三人分の仕事をする羽目になった。

「私だって…ルークさんと一緒に烈火鉾山に行きたかったのに…くすん」

とぼとぼと工場を後にするランの横を、二人の女性が泣きながら通り過ぎた。

「「うえええん！覚えてろ、ランス、ルーク！絶対復讐してやるんだからああ！！」」

「……誰？」

そのまま町から出て行ってしまった二人を見送りながら、ランはこれからの仕事量を考えて胃が痛くなるのだった。

第44話 新パーティー結成（後書き）

「人物」

香澄

LV 6 / 24

技能 新兵器匠LV1

マリアの助手にして弟子。マリアの才能に憧れ、弟子に志願する。実は彼女自身も類い希なる才能の持ち主で、マリアも彼女を開発主任の立場にし、絶対の信頼を置いている。年齢はマリアと一つしか変わらないが、まだ弟子になったばかりなので遠慮しているところがあり、マリアのことを先生と呼ぶ。

伊集院

ラジールの町の酒場のバーテンハニー。アムロやレイリイ同様、ルークに信頼を置いている。

アスビ・ラガール

ゼスで洋服店を経営。仇候補。

スター・ラガール

ゼスで喫茶店を経営。仇候補。

アルブランド・ラガール

ゼスで大工として働く。元傭兵であるため、仇最有力候補。

第45話 烈火鉱山

・烈火鉱山 入り口・

ラジールを出て数時間、烈火鉱山に辿り着いたルークたち。採掘場ともなれば、もう少し活気がありそうなものだが、今は人影一つ無い。辺りをきよきよ見回しながら、トマトが言葉を発する。

「誰もいないんですねー？」

「マリアさんに聞いたところ、モンスターが現れて殆どの作業員の方は逃げ出してしまったみたいですよ」

「ランス様、静かですね」

「うむ、人影が無いのは丁度いい。金目になりそうな鉱石があれば拾って置けよ、シイル」

「何馬鹿なこと言ってるの。さ、鉱山の中へ入るわよ」

志津香の言葉に従い、中に入る。モワツとした空気が顔に当たる。鉱山独特の臭いが充満し、気温も高い。ミリが不満を口にする。

「ちつ、あんま空気は良くねーな」

「ああ、こんな場所に長居は無用だ。とつとヒララ合金を見つけろぞ」

「そうね。ヒララ合金は鉱山の奥にあるとマリアは言っていたわ」
「では向かうぞ。俺様の後についてこい！」

「はい、ランス様！」

ランスが先頭に立ち、奥へと進んでいく。少し進んだところで、まだ鉱山に残っている作業員を発見する。

「おい、その田舎臭い親父！」

「オラか？おっと、私はラインハルトってもんだ。なんだ、あんたら？」

「ラインハルトさんですか？顔と全然合っていない名前ですかねー？」

「トマトさん……」

「鉱山で事故があつたと聞いてな。約束していた物が届かないから直接取りに来たんだ」

「ああ、第8発掘現場の事故の件か。そういやヒララ合金を送るとか言つてたな。残念だが、そりや第8発掘現場でしか取れないぞ。

奴ら地底怪獣を掘り当てやがってよ。おかげでモンスターがうじゃうじゃ出没するようになって困っているんだ」

「あんたは逃げ出さないのか？」

「そりや逃げ出したら金になんねーからな。それに、私の担当は第6発掘現場だし」

「それで、第8発掘現場へはどう行けばいいの？」

「ああ？よく見りゃいい女ばつかじゃねーか。あんたらがサービスしてくれたら教えてやってもいいぜ。けっけっけ」

「なっ！？」

イヤらしい顔をしながら下品な笑い声を出すラインハルト。女性陣が体を隠しながら侮蔑の視線を送り、ランスが明らかに不機嫌になる。

「……よし、この俺様がたたっ斬つて……」

「まあ待て、ランス。今この鉱山に残ってる作業員は殆どいないみたいだし、ここでこの親父を殺すのは時間のロスだ。まあ、任せておけ」

そう言ってランスを制止し、ルークがラインハルトに近づいていく。

「なんだ？男はお呼びじゃねーぞ」

「まあまあ、そう邪険にせずに、話くらい聞いてくれ」

そう調子良く喋りながらラインハルトの首から肩にかけて手を回し、肩を組むような形になる。

「なんだ？何のはな…し…ひっ…」

訝しげにしていたラインハルトだが、ルークの肩から回された手の先、自分の首元につくのが突きつけられていることに気がつく。以前、カスタムの事件の時にかなみから貰っていたくないだ。

「悪いな、時間がないんだ…何なら指を一本ずつ斬って体に聞いてやろうか？丁度作業員も殆どいないことだしな…」

「お、奥のトロツコに乗れば第8発掘現場にいける」

「情報感謝する。人間、素直が一番だぞ。さ、行くぞ」

そう言い残すと、ルークはくなくいを仕舞ってラインハルトから手を離し、ランスたちのところへ戻ってくる。

「何だ、やってることは変わらんではないか」

「殺しちゃいけないさ。ああいう輩には金を払う気にもならん」

「ま、同感だな」

「い、意外な姿でした…」

ランスとルークがトロツコに向けて歩いて行き、ミリとシイルも話しながらその後続く。後に残された三人の内、トマトがぼつり

と呟いた。

「……ワイルドなルークさんも素敵ですー」

「……そうですね、危険な魅力というか……」

「（ああ、トマトさんだけじゃなくてかなみさんもそうなのね。おモテになることで……）」

- 烈火鉱山 トロッコ乗り場 -

ラインハルトの言っていた通りに進むと、確かに奥にトロッコが一台あった。これに乗れば事故の起きた第8発掘現場にいけるのだろう。

「よし、トロッコに乗り込んで奥へと進むぞ！」

そう言って一番に乗り込むランス。全員が乗り込んでいくがどうにもトロッコが狭い。

「ランス様、七人も乗ると凄く狭いです」

「確かに、二回に分けて乗った方が……」

「馬鹿者！今は一刻を争うときだ。ぐふふ……」

「……みんな、俺の後ろに回れ」

「？」

「ああ、そう言う事か。俺は前でいいよ。一人もいないんじゃないか嫌になりそうだ」

「いいのか？悪いな、ミリ」

イヤらしい目つきのランスに何かを察したルークとミリは、出発

前にトロツコ内の位置を調整する。前にランスとシイルとミリ、中央にルーク、後ろにかなみと志津香とトマトという配置になった。

「では出発だ！がはは！」

そう言っただけでブレーキを外すと、トロツコは奥の発掘現場に向けて滑り出した。少しスピードが出たところでランスがわざとらしく体勢を崩す。

「おおっと、手が滑った！」

「きゃっ！ランス様！」

「おい、尻を触るな」

「がはは、狭いんだからしょうがない！」

「……ああ、そう言う事」

「すいません、ルークさん。気を回して貰って……」

「おかげで助かりましたー」

発車後、ランスが前で暴れ出してから後ろの三人も思惑に気がついていたらしく、中央でランスの魔の手が伸びないようにガードしてくれているルークに礼を言う。

「いや、わざわざ礼を言われるような事じゃ……おっと！」

トロツコが急カーブを曲がる際、ルークが体勢を崩す。その右手がトマトの胸に当たってしまう。

「きゃん！ルークさん！」

「あ、すまない」

「ぽっ。……言ってくだされば……ルークさんにだったら私……」

「ふんっ！」

トマトがおかしな事を口走ると同時に、ルークの両脇腹に拳がめり込む。

「がっ…んっ？志津香は判るが二人？」

「しまった…つい…」

かなみ思わず手を出してしまっていた。その様子を見て、志津香の中で先ほどの疑惑が確信へと変わっていた。

・烈火鉦山 トロッコ乗り場終点・

「がはは！それでは先に進むぞ！」

トロッコに乗っている間中、シイルとミリ相手にお触りタイムを行っていたランスは上機嫌に先へと進む。ミリはなんとも無いようだったが、シイルはかなり疲れた様子だった。ルークたちも続けて下りるが、突如奥の方から少女の悲鳴が聞こえてくる。

「むっ！美少女の悲鳴だ！」

「急ぐぞ！」

駆け出す一行。少し進んだところで、黄色い巨体のモンスターに少女が襲われそうになっていた。

「きゃあああ！助けてええ！」

「真空斬！」

「炎の矢！」

「火爆破！」
「はっ！」

遠距離攻撃を出来る面々がそれぞれ技を繰り出し、少女に迫っていたモンスターを倒す。かなみが再度手裏剣を構えながら、ルークに問う。

「あのモンスターは？」

「ちゃそばだ。主に鉱山なんかに出没するモンスターだな。となると、掘り当てた地底怪獣つてのは、ちゃそばクイーンだな」

「ちゃそばクイーン？」

「大量の卵を産み落として、ちゃそばを延々と増やす厄介な敵だ。そいつを倒さないことには永久に増え続けるぞ」

「それじゃ、やることは決まったわね。ヒララ合金の回収とちゃそばクイーンの退治。どうせそいつを倒さなきゃヒララ合金は回収できそうにないし。火爆破！」

「ふん、雑魚どもが。まとめてなます斬りにしてくれるわ！」
「げこーっ！」

モンスターの数は多いが、こちらも手練れ揃い。次々とその数を減らしていく。ミリが襲われていた少女に駆け寄っていく。

「おい、大丈夫か？名前は？」

「は、はい。ありがとうございます。カーナと言います」

「どうしてこんな所に？」

「この鉱山の奥にコーンという私の恋人がいるんです。彼のことが心配で…」

「そうかい。今から一人で引き返すのも危険だな。どこにちゃそばが潜んでいるかも判らないし。俺たちの側から決して離れるなよ！」
「は、はい。お姉様！」

「お姉様？ふ、恋人がいるのに悪い娘だね。後でたつぷり可愛がつてやるよ」

「おいミリ、真面目に戦え！ええい、その娘は俺様も狙っていたんだぞ！」

「ランスも真面目に戦つてよね！」

「うふふ、楽しいですね」

かなみが苦言を呈しながら側にいたちやそばを忍剣で斬る。トマトも懂れていた冒険を出来ることが楽しいようで、笑いながらちやそばと戦っていた。トマトの戦いぶりを心配してルークは側で戦うようにしていたが、ちやそば程度なら無理なく渡り合っている様子を見て安心する。

「どうですか？ルークさん、私の戦いぶりは？」

「素晴らしいぞ。正直、ここまで成長しているとは思わなかった」

「えへへー。ありがとうございます」

不安要因であったトマトが十分強くなっていたため、安心して戦うルーク。程なくしてこの場にいたちやそばは全滅した。ふう、と一息つきながらルークが口を開く。

「さて、奥に進むぞ。ちやそばクイーンの周りにはもっと大量のちやそばがいると思われるから、気を抜くなよ」

「えーい、面倒だ。俺様から素晴らしい提案だ。ヒララ合金は全て壊れていたことにして帰らないか？」

「駄目に決まってるでしょ！行くわよ！」

「カーナ、ついてこい」

「はい、お姉様！」

降りたがるランスを無理矢理引っ張り、奥へと進んでいく。ルー

クもそれに続くが、部屋の端にキラリと光る何かを見つけ、それを手に取る。なにやら少女の絵が中途半端に描いてある鏡だ。

「これは…？とりあえず持っておくか」

「ルーク、ちよつといい？奥にはちゃそばが大量にいるって言ったわね？奥に着くまで私は戦闘に参加しないでいいかしら？」

「別に構わんが…何かする気か？」

「出会い頭に放つため、ちよつと集中力高めておくわ」

「志津香！貴様一人だけ楽しようとしているな！」

「ランスは黙ってなさい！後で判るから！」

こうして志津香を欠いたメンバーだったが、特に苦戦することもなく奥へと進んでいった。が、ここまでの戦いでルークが一つ疑問を持つ。他のみんなに気がつかれないよう、こっそりとミリに近寄っていく。

「ミリ、話がある」

「お、なんだ？遂にルークの方から夜のお誘いか？」

「……調子悪いのか？」

「……どうしてそう思った？」

「以前、カスタムの事件の時の戦い方に比べて、明らかに切れが悪い」

「……なーに、ちよつとサボっちゃってただけだ。すぐにレベルも戻るさ」

「ならいいが…無理はするなよ」

そう言つて離れていくルークを見ながら、ミリが誰にも聞こえないよう呟く。

「流石にいい男は違うね。いつまで騙し通せるか……お荷物になる

訳にはいかないからね」

そのまま進んでいくとかなり開けた場所に出る。そこでルークたちが目にしたのは、ちゃそばよりも更に一回り巨大なピンク色のちゃそばクイーンと、その周りにある100を超える卵、そして、50以上はいるであろう、大量のちゃそばだった。

「気持ち悪いです、ランス様……」

「やっぱり帰るぞ！こんな数と戦ってられるか！」

「大丈夫よ、シルちゃん。すぐに数は減るから」

そう言って一步前に出る志津香。見れば両手が赤く染まっている。ここまで来る間に魔法詠唱をし、準備していたようだ。その輝きにルークは見覚えがある。ルークの旧友、あの男が得意としている技。

「使えるのか、志津香！？」

「あら、何を使うかは判っているみたいね。当然、使えるわよ」

「流石だな。みんな、少し離れている」

ルークが全員を一步下がらせる。自分が言う前にみんなを下がらせてくれたことに内心感謝しつつ、志津香が両手を前に出し、魔法を放つ。

「灰になりなさい！業火炎破！！」

両腕から放たれた業火が、部屋の中にいた全てのちゃそばと卵を包み込む。絶叫しながら崩れ落ちていくちゃそば。灰と化していく卵。志津香の魔法が凄いことは知っていたが、ラギス戦に参加していなかったかなみとトマトは、これほどの魔法を目の当たりにす

るのは初めて。驚きに声を漏らす。

「す…すごいですー」

「なんて魔力…」

「これよりもつと凄い魔法も使えるぞ、志津香は」

「そんな！？それじゃあ、もしかしたらメルフェイスさんやチャカ様よりも上かも…」

「チャカ？……どこかで聞いたことあるような……駄目だ、思い出せん」

かなみが名前を挙げた人物の一人に聞き覚えがあるような気がしたルークだが、どうにも思い出せない。部屋の業火が段々と消えていく。志津香の一撃で、部屋の中にはところどころに焼け跡を残しながらこちらを睨んでくるちゃそばクイーン一体を残すのみとなった。

「あら、流石に親玉は根性あるわね。後はお願い」

「上出来だ！行くぞ、ランス！」

「がはは、ズルしてサボっていたことは許してやるぞ！」

「げこおおおー！！」

真つ先に駆け出すルークとランス。子供たちを殺された怒りに燃え、こちらに体当たりを仕掛けてくるちゃそばクイーンだが、我を忘れた単調な攻撃ほど避けやすいものはない。ランスとルークが同時に飛び上がる。

「ランスアタアアック！！」

「真滅斬！！」

「あはあああああん！！」

二人の必殺技の直撃を受け、それぞれの攻撃箇所が両断される。丁度右、中央、左と三部位に分かれ、絶叫しながら死んでいくちゃそばクイーン。

「がはは、三枚おろしだ」

「ランス様かつこいいです。ぱちぱち」

「ルークさんもかつこよかったですー！」

全員が駆け寄ってくる。ランスは上機嫌に笑いながら、ヒララ合金があるであろう、ちゃそばクイーンがいた奥へと進んでいく。その後を追うルークたちだったが、トマトがふいにルークに聞いてきた。

「それにしてもランスさんの技とよく似ていますですねー？ひよつとして、二人は生き別れの兄弟とかですかー？」

「やめてください、トマトさん！ルークさんとランスが兄弟だなんて、考えたくありません」

「そうね、考えるだけでもおぞましいわ」

かなみと志津香が全力で否定する中、ルークは心の中で呟いていた。今は亡き、妹に向けて。

「（そうか、やっぱり似ているってよ。聞こえているか、リムリア……お前が育てた悪ガキだ）」

・烈火鉦山 最深部・

「あつたぞ！これか！？」

鉾山の最深部に一際輝く鉾石を発見する。以前ピラミッド迷宮で発見したヒララ鉾石によく似ている。恐らく間違いないだろう。ミリがランスの指さす鉾石を見て声を上げる。

「ああ、これだ。マリアから図鑑を見せられたことがある。間違いないぜ」

「そうだったかしら？」

「志津香、親友なんだからもうちょっと真面目にマリアの話聞いてやれ」

「……放っておいたら五時間くらい平気で訳の判らない兵器の話しをされるのよ」

「あー、そりゃすまんかった」

ヒララ合金の発見に安堵する一行だったが、途中からついてきていたカーナが言葉を発する。

「コーンが……どこにもいないの……」

「あつ……」

「ここに来るまでそれらしい人はいなかったわ。部屋の中にも、どこにも……」

「となると答えは一つだな。哀れコーンはちゃそばに食べられてしまったのだ。死んだ恋人のことなんか忘れて、俺様と新しい恋をしないか？」

「ランス、空気を読みなさいよ！」

「コーン……うつっ……」

「……ひとまず、この鉾山を出よう」

ルークがそう言い、帰り木を使用する。瞬時に一行は鉾山の外にワープする。直後、見慣れない男が声を掛けてくる。

「カーナ！無事だったのか？」

「コーン！？良かった、生きていたのね」

「そりゃそうさ、僕は第8発掘現場とは一番離れた第1発掘現場で働いていたんだから。君が第8発掘現場に向かったと聞いて、今から助けに行こうとしていたところさ！」

「ああ、コーン！」

「カーナ！」

ヒシッと抱き合う二人を尻目に、ルークたちはため息をついていた。

「なんて人騒がせな……」

「結局、ただ危険な目に会いにいっただけか、カーナちゃんは……」

「でも、二人が再会でできて良かったです」

「良くない！俺様の女になるはずだったのに……」

ランスが悔しがる横で、ミリが静かにカーナに近づいていき、そつと耳打ちをする。

「戦争が終わったらカスタムの町に来な。人騒がせな娘にたっぷりお仕置きしてあげるよ」

「は、はい。お姉様！」

「？どうかしたのかい、カーナ？」

「気にしないで、コーン」

両刀にして百戦錬磨のミリ。この辺りは流石の手腕といったところか。

・ラジールの町 工場・

辺りも暗くなっていたため、迷惑を掛けた礼ということでカーナの家で一泊した後、ラジールの町へ戻って来たルークたち。マリアの工場にヒララ合金を届けに行く。ヒララ合金を手にした瞬間、目の色を変えて喜ぶマリア。

「これよ、これ！これでチューリップ3号が完成するわ！」

「こら、マリア！まずはこれを取ってきた俺様に礼を言うのが先だろっ！」

「ありがとう、ランス。それにみんなも！」

「うむ、それでいい！がはは！」

「マリア、完成はどれくらいだ？」

「一日もあれば完成するわ！任せておいて！」

そうマリアが宣言すると同時に、工場にルイスが入ってくる。

「ルークの旦那はいるかい？ちよつと報告が……」

「うおっ！見るからに悪役顔な男が！この俺様が叩斬ってくれる！」

「危ねえ！なんだ、なんだ！」

「ランス、止める！そんな顔だが仲間だ！」

ルイスに剣を振りかぶっていたランスを止めるルーク。チツと何故か舌打ちしながら一応剣を仕舞うランス。

「随分と血の気の多い奴だな」

「お前も似たようなもんだろ。で、どうした？」

「ああ、追加の傭兵部隊が到着した。部隊としての準備も含め、ま、明日には十分戦えるぜ」

「なるほど、丁度いいな。司令部に行つてバレス將軍たちにも伝えるぞ。レッド侵攻は明日だ!」

こうして、レッドの町への侵攻が明日に決定する。最後の準備を進める各部隊。ルークも傭兵部隊の準備に付き合い、司令部で開かれる会議にも参加をする。そんな中、若干問題が発生している所もあった。

「ラン、悪かったわよ。機嫌を直して」

「ふーんだ!」

「ラン、確かに志津香がいなかったらもつと苦戦していた。許してやってくれ」

「っーん!」

「あらあら」

志津香がランに平謝りし、ミリもフォローを入れるがランの機嫌は直らなかった。それをクスクスと笑つて見ている真知子。どうしたものかと頭を抱える志津香だが、ミリに妙案が浮かぶ。

「そうだ、この戦争が終わつたら俺がルークとの二人っきりの食事をセッティングしてやるよ。それでどうだ?」

「ちょっと、そんなにランが……」

志津香がミリに苦言を呈そうとするが、ランが面白いほどに釣れる。

「本当っ!やだ、嘘!?何着ていこうかしら!」

「……ランもそうだったの」

「知らなかったのか?見りゃ判るだろ」

「ミリさん……」

そう言われ、肩を叩かれるミリ。振り返ると真知子が笑顔で立っていた。

「私にもお願いします」

「え、いや……」

「お願いします！」

「あ、ああ。判った……」

「はあ……あの女誑しが……」

・翌日 ラジールの町 入り口・

翌日、町の正門前に来たルークが見た光景は凄まじい物であった。立ち並ぶリーザス軍、カスタム軍、傭兵部隊。その数約5000。そして、その先頭には巨大な戦車がある。前面にチューリップの絵がペイントされている。その前に立っていたマリアがこちらに声を掛けてくる。

「おはようございます、ルークさん！」

「おはよう。これがチューリップ3号か？」

「その通りです！これが無敵戦車、チューリップ3号！これでヘルマン兵を一網打尽よ！」

「頼りにしているぞ」

そう話しをしていると、突如辺りが静まる。バレスたちの方を向くと、丁度演説が始まるようだった。

「諸君！我らはこれより、悪のヘルマン軍からリーザスを取り戻す

「！覚悟はいいな！」

「うおおおお、と怒声が鳴り響く。特にリーザス軍のやる気は凄まじいものがある。」

「我らが負ける要素は何もない！正義はこちらにある！総司令官ランス殿の下、ヘルマンを打ち破るのじゃー！」

「バレスの後ろからがはは、と笑いながらランスが出てくる。更に沸き立つ兵たち。」

「なっ、総司令官だと！？いつの間に……」

「あはは…昨晚私の所に来てね、俺様にやらせないとここで降りるって暴れて……」

「そんな事していたのか…まあ、周りでフォローしてやれば問題ないか…？」

バレスからマイクを受け取り、ランスが侵攻の宣言をする。

「がはは、俺様の手に掛かればヘルマン軍などちよよいのちよいだ！行くぞ、ヘルマンを殲滅だ！！」

「周りから大歓声上がり、皆が武器を取り進軍する。マリアもチーリップに乗り込み、ルークは傭兵部隊の先頭より少し中に入った位置に行く。これより、リーザス解放戦の第一段階、レッド解放戦が始まる。」

・ラジールの町近辺 丘の上・

ラジールから進軍していく解放軍を見ている男がいた。ヘルマン兵ではない。ボロボロの服を身に纏い、肩には荷物を抱えている。旅の者といった感じであつた。

「風の噂に聞き、リーザス付近まで来てみたが、戦争をしているというのは本当だったのか…」

その時、男の目に一人の戦士の姿が飛び込んでくる。

「あれは、ルーク殿！そうか、あの御仁もこの戦争に…ならば、修行の成果を見せるまたとないチャンス！」

そう言つて男は丘を降りていく。目指すはリーザス軍。対峙するためではない。共に戦うために。赤い髪 of 武闘家は全力で丘を駆けていった。

- レッドの町 司令部 -

「フレッチャー指令、無謀にもリーザスの残党が現れました」

リーザス軍がラジールからこちらに向けて進軍していることに気がついたヘルマン兵は、司令官のフレッチャーに報告に来る。でっぴりと太った司令官、フレッチャーは椅子に腰掛けながらニヤニヤと笑つ。

「ぶーぶー。それは面白いぶー！力の違いを見せつけて上げるんだぶー！」

「はっ！」

そう言って報告に来たヘルマン兵が部屋を後にする。フレッチャーが横に控える弟子、ボウとリヨクに向かって喋りかける。

「ヘルマン軍だけでなく、リーザス赤の軍と魔法軍がいるレッドに攻めてくるなんて、なんたる無謀ぶー」

「その通りです」

「それに、もしこの部屋まで奇跡的に辿り着けた者がいたとしても、絶対に勝てないぶー」

「ええ、世界最強の格闘家、フレッチャー様とその弟子の我ら。そして、今この部屋には…」

ちらりと部屋の片隅を見る三人。そこには二人の騎士が立っていた。洗脳されているリーザス兵。一人は青い髪に赤い甲冑を纏った騎士。赤の軍副将メナド。そして、もう一人。同じく赤い甲冑に身を纏い、顔を覆った兜。その額には「忠」の文字が輝く。世界にその名を轟かす、リーザス最強の騎士。

「くくく…リーザスの赤い死神、リックを打ち破れる者がいる訳ないぶー！」

フレッチャーの高笑いが、いつまでも部屋に響いていた。

第45話 烈火鉷山（後書き）

「人物」

カーナ・オオサカ

烈火鉷山で働く恋人がいる少女。恋人が事故に巻き込まれたと聞き、単身救出に向かうが、それはただの勘違いであった。ミリの事をお姉様と呼び、メロメロになる。恋人がいるが、本人曰くミリは女だから浮気にはならないとのこと。

コーン・マーガリン

烈火鉷山で働く鉷夫。カーナの恋人。事故には巻き込まれておらず、発掘現場に入っていてしまったカーナを心配していた。

ラインハルト

烈火鉷山で働く鉷夫。大層な名前だが、ただのスケベな中年男。

「モンスター」

ちゃそば

鉷山などでよく発生するカエル型の独立種族。動きは遅いが体力、腕力が高く、雑魚モンスターとは呼べない強さを持つ。これと渡り合えるトマトの成長は立派なものである。

ちゃそばクイーン

ちゃそばの上位種。大量の卵を産み落とすため、ちゃそばを駆除するにはまずこいつを倒す必要がある。

「その他」

チューリップ3号

ヒララ合金を使ってマリアが作り出した世界初の近代戦車。鉄壁の装甲と強力な砲撃を兼ね備えたマリアの秘密兵器。

第46話 レッド解放戦

- レッドの町近辺 荒野 -

レッドの町からそう離れていない荒野。ここにヘルマン軍は集まっていた。ヘルマン兵2000と洗脳されたリーザ兵4000、そして大型モンスターを含むモンスター部隊5000だ。リーザス軍は赤の軍と魔法軍で組織され、数だけ見れば解放軍の二倍以上。だが、ヘルマン軍は油断をしていた。自分たちが負けるはずがないと。だからこそ司令部がある町からそう離れていない場所まで引きつけて、一気に叩こうとしていたのだ。しかし、それは悪手であった。

「へへへ、あんだけやられといてまだ向かってくるなんざ、リーザスの連中はマゾか？」

「ぎゃはは、違いねえ！お、来たみたいだぜ」

下品に笑いながら、ヘルマン兵が遠くから迫ってくるリーザス軍を視界に捉える。まだまだ戦闘が始まるには距離がある。だが、直後に近くで爆発が起こり、さっきまで笑いあっていたヘルマン兵が吹き飛ばされる。

「な、なんだあ！？」

それは、想像だにしていない距離からの砲撃。軍の先頭を走る巨大な鉄の塊が、こちらに向けて砲撃してきたのだ。その砲身が、再度こちらを向く。

「う、うわあああ!!」

叫びと共にもう一人のヘルマン兵が吹き飛んだ。マリアのチュールップ3号による砲撃は、油断していたヘルマン兵に致命的な混乱を与えた。その隙を解放軍は見逃さない。一斉にヘルマン兵に進軍する。

「がはははは! 皆殺しだ!!」

チュールップ3号と共にランスが先頭を駆ける。総司令官だといふのに隠れるなどということは微塵も考えていない。だが、その剛剣を止められるほどの者はこの戦場にはいなかった。獅子奮迅の活躍を見せる。その姿を見ながら、前線で黒の軍を指揮するバレスが感激に打ち震える。

「おお……あれこそ理想の総大将の姿! ルーク殿だけではない。あのランス殿も素晴らしい御仁じゃ!」

「リーザス軍総大将、バレス。貴様が死ねばリーザスは総崩れだ! 死ねえええ!!」

ランスの方を見ていたバレスにヘルマン兵が迫る。が、バレスは即座に迫っていた剣を柄で弾き、その首を一突きにする。血飛沫が舞い、ヘルマン兵が崩れ落ちる。

「悪いのお。ルーク殿やランス殿ならいざ知らず、まだまだお主らごときにこの命くれてやるほど老いばれてはおらんぞ」

老いてなお猛将。その威風堂々たる佇まいに、ヘルマン軍が怯み、解放軍は奮い立つ。

「バレス將軍の手を煩わせるな！自らの手でリーザスを奪還するんだ！」

「行くのだ、我々の信念のために！」

「訓練の成果、今見せずにいつ見せる！続けええ！！」

ドツヂ、サカナク、ジブルが兵を率いて突撃する。ランスたちと黒の軍の活躍により正面の敵は総崩れとなる。

「あせらないで。しかし油断しないようにね」

左翼に広がるのは白の軍とミリ率いるカスタム第二軍。戦力でいえば一番劣っているとも思われるこの部隊だが、エクスの的確な指示により、当初の予想を覆し、現状最も被害の少ない部隊となっていた。

「行くぞ！遅れを取るな！」

ハウレーンが周りを鼓舞し、自らも華麗に敵を打ち倒していく。その横ではミリが同様に敵を斬る。最前線に立つのは美しき女性二人。負けていられるかと男兵士も奮起する。左翼のボルテージはマックス。が、一人脂汗を流す者がいる。ミリだ。もしこの場にルークがいれば、烈火鉾山の時以上に制裁を欠いている動きに気がついただろう。だが、周りはミリの戦いを見たことがないリーザス兵が大半を占める。ゆえに、異変に気がつかない。

「ふう……生きて帰れたらいいねえ……」

その呟きは喧騒の中に飲み込まれていった。

「雷撃！みんな、深追いは禁物よ！」

「とー！悪のヘルマン軍覚悟ですかー？」

右翼に展開するのはルーク率いる傭兵部隊とラン率いるカスタム第一軍。ランが魔法で周りを援護しながら、声を上げる。第一軍に所属するトマトがランの援護を受けながらヘルマン兵と渡り合う。本来であれば流石に正規の軍人相手は厳しいだろうが、チューリツプ3号によって混乱しきっている今のヘルマン兵は、トマトに何人も打ち倒されていく。

「町の娘に負けていたら傭兵の名が泣くぞ！続け！」

「ルイス、リーザス軍は極力殺すな！洗脳が解ければ貴重な戦力だ！」

「へいよ、努力はするぜ、ルークの旦那！おらあ、右がから空きだぞ！フォローに周りやがれえ！」

セシルとルークが傭兵部隊を指揮する。ルイスは前線でヘルマン兵やモンスターを殺すことに専念しているが、ちよくちよく周りにいる荒くれに的確な指示を出している。顔に似合わず気も回るらしい。

「了解だ、援護に回る。一式、ハヤブサ！」

ルイスの指示に素早く援護に回った赤い髪の戦士が剣を振りすると、鎌鼬が起こり敵数人を一度に斬り刻んだ。

「お、やるじゃねえか若造！そっちは任せたぜ」

「ああ、任された！」

「ほう……」

リーザス解放軍の猛攻に焦り、中央部で部隊の指揮をしていた小隊長が声を荒げる。

「馬鹿野郎、押し負けるな！リーザスの魔法軍を出せ！」

「その、洗脳されていると大した魔法を使えないみたいで」

「問題ねえ！どうせあっちに魔法を使える奴なんざ…」

瞬間、目の前に業火が迫っているのが見える。そして、ヘルマン軍の体が炎に包まれた。放ったのは志津香。後衛からカスタム魔法軍を率い、全軍をサポートする。

「業火炎破！さあ、まだまだいくわよ！」

圧倒するリーザス解放軍。荒野での戦いは二時間もしない内に決着がつく。解放軍の圧勝だ。ヘルマン軍の敗残部隊はレッドの町へと逃げ込み、町の外と中で最後の抵抗を続ける。解放軍は町の周りを包囲し、残党を殲滅していつている。ルークも傭兵部隊を率いて殲滅戦に当たる。抵抗していた敵を斬り伏せようとするが、ルークが斬る前にその額にくないが刺さりヘルマン兵が倒れる。飛んできた方を見ると、かなみがこちらにやってきていた。

「ルークさん！ランスが話があるみたいです」

「ランスが？」

直後、最前線にいたはずのチューリップ3号がこちらに近づいてくる。運転席からマリアが顔を出し、手を振ってくる。

「ルークさん！」

「マリア？持ち場はどうした？」

「それがね……」

「ようルーク！俺様のために精一杯働いているか？」

マリアの後ろからヌツとランスが顔を出す。最前線で戦っているかと思っていたら、いつの間にかチューリップ3号に乗り込んでいたらしい。

「これからレッドの町の中に侵入して敵の司令官を叩く。お前も来い！」

「落ちるのは時間の問題だと思うが？」

「馬鹿者！それでは俺様の活躍が目立たんだろうが！他の雑魚共が雑兵を片付けている間に、敵司令官を颯爽と倒している英雄の俺様やはりこうでなくてはいかん！」

実にランスらしい理由である。だが、ランスが自分を誘いに来たことがルークは意外だった。

「なるほどな。それで、わざわざ俺も誘いに来てくれたのか？」

「がはは、光栄に思え！たっぷりこき使ってやる。それと狭いからお前は戦車の外に座ってついてこい」

「ま、ついていくとするかね。かなみも来るんだろ？」

「勿論です！一緒に戦車の外で待機しています！」

こうしてチューリップ3号の上に座る形で乗り込むルークとかなみ。中にはランスとシル、マリアと志津香がいるようだった。

「志津香？来て良かったのか？」

「大丈夫よ。もう大した敵の量じゃないし、ヘルマン軍やモンスターがかなり減ったから、これ以上はリーザス軍を大量に巻き込みか

ねないからね」

「なるほどな。セシル、ルイス、それと…その赤い髪の。傭兵部隊の指揮を頼んだ！」

そう言つて、この場から離れる前にルークが指示を出す。セシルとルイスが了解だと返事をするが、赤い髪の戦士がこちらに問いかけてくる。

「俺もか？」

「ああ、お前だ！この場の傭兵の中でも文句なしに強い。後は頼んだぞ！」

「ええい、いつまで喋っている。マリア、出発だ！」

そう言い残し、チューリップ3号がレッドの町内部に向けて進軍を開始する。残された赤い髪の戦士に、セシルが話しかける。

「私もルークと同意見だ。お前になら背中を任せられる。名前はなんという？」

「アリオス・テオマンだ。一応勇者をやらせて貰っている」

「ほう…勇者ねえ…よく判らんが、いい目をしているな。気に入ったぞ！」

残された傭兵部隊は、残存部隊は次々と殲滅していく。他の部隊も同様で、ルークの言うように、最早レッドの町が落ちるのは時間の問題となっていた。

・レッドの町 広場・

「行け！殲滅だああ！！」

「ランス様、狭いのであまり暴れないでくださ…」

チューリップ3号を駆り、ルークたちは町の内部へと侵攻する。ヘルマン兵が弓を射ってくるが、チューリップ3号の装甲には傷一つ付かない。上に乗っている自分たちに射られた矢を真空斬と手裏剣で確実に叩き落としながら、ヘルマン兵を殲滅していく。町の中を見回し、かなみが言葉を漏らす。

「酷いですね……」

町の建物が所々崩れており、町の住民が避難しながらこちらを羨望の眼差しで見てる。レッドは降伏が早く、本来ならこれほど酷い状況になっっているはずがないのだ。ヘルマンがどれほど非道い占領をしていたかが判る。町の中を進軍していくと、教会が見えてくる。教会の前ではヘルマン兵が一体のデカントを引き連れ、シスターを人質にしていた。デカントの腕にシスターが握られている。

「来るんじゃないぞ！この女が握りつぶされなくなったらな！」

「ええい、貴重な美女になんて酷いことを！」

「……外道ね！」

「ランス様…どうしますか…」

「かなみ、俺が合図をしたら、ヘルマン兵の注意を引きつけてくれ」
「……了解です」

チューリップ3号からランスたちも飛び出してくるが、シスターが人質に取られているため動けずにいる。その後ろ、ヘルマン兵に見えないようにランスたちの陰に隠れ、腰を落とし、ルークが静かに気を溜める。シスターが悲痛な声を上げる。

「わ、私に構わないで下さい…」

「馬鹿者！俺様がやる前に軽々しく死ぬなんて言うんじゃない！」

「こんな時に何言ってるの、ランス！」

「へへへ、それじゃあまず武器を置いてだな…」

優勢と見たヘルマン兵がゆつくりとこちらに近づきながら、要求を出してくる。デカントから視線を反らす。

「かなみ、今だ！」

「はい！はっ！」

「真空斬！！」

かなみがルークの合図と同時に煙玉を投げる。周囲を煙が覆い、ヘルマン兵が喚き立てる。

「舐めやがって！デカント、女を握り潰…」

「うごおおおおっ！！」

「！？」

ヘルマン兵が指示を出す前に、デカントの絶叫が周囲に響き渡る。シスターを持っていた右腕が真空斬よって両断され、そのまま右腕が落ちてくる。

「きゃああああああ！」

「ふっ！」

真空斬を放つと同時に駆けだしていたルークが、落ちてきたシスターを抱きかかえる。

「怪我はないか？」

「は、はい。大丈夫です」

「ああ、馬鹿者！それは俺様の役目だろうが！」

「う…う…おおおお…！」

ランスが騒ぎ立てるが、その声をかき消すようにデカントが怒りに絶叫し、ルークに向けて左腕を振り抜いてくる。志津香が炎の矢を放とうとし、ルークもシスターを抱きかかえたまま冷静に軌道を見据え、避ける体勢に入るが、どちらも成されることはなかった。

「この一撃が……分水嶺」

突如、ルークとデカントの間に男が駆けてきて飛び上がる。そして、デカントの腹に渾身の一撃を放つ。

「装甲破壊パンチ…！」

「ぐがああああ…！」

「うわああ、馬鹿。こっちに倒れて来るな…ぎやああああ…！」

強烈な一撃を食らったデカントは、後ろに倒れ込む。そのままへルマン兵を押し潰し、絶命する。突如現れた武闘家に、全員が目を向ける。

「凄い…」

「何者？」

「ランス様、ご存じですか？」

「知らん！」

「いや、ランスは会ったことあるはずなんだがな…」

「男の顔なぞ、いちいち覚えてられるか」

「お久しぶりです、ルーク殿。息災で何より」

件の男がルークに向けて挨拶をしてくる。忘れようはずもない。

自分がわざわざ強くなるようにけしかけた相手だ。だが、ルークは驚く。男の纏う空気だ。強くなるとは思っていたが、これ程とは。

「久しぶりだな。ここまで腕を上げているとは、流石に驚いたぞ。アレキサンダー」

その男はアレキサンダー。かつてリーザスのコロシウムでルークに敗れ、一から鍛え直すべく修行の旅に出ていた武闘家だ。

「いえ、まだまだ修行の身です」

「協力感謝する。それで、ここへはたまたま寄ったのか？」

「いえ、リーザス解放軍の中にルーク殿の姿を見たゆえ」

そう言うと、両の拳を胸の前で合わせ、一礼をしながらルークに宣言をする。

「及ばずながら、この私もリーザス解放のための手伝いをさせていだきたい！」

「ありがたい！期待しているぞ、アレキサンダー！」

「なんだ、男はいらんぞ」

「ルークさん、この方は？」

「後で詳しく紹介する。アレキサンダー、頼りになる男だ」

こうして解放軍に新たにアレキサンダーが加わる。と、シスターが恥ずかしそうにルークに話しかける。

「あ、あの…そろそろ降ろしていただけるとありがたいのですが…」「いつまで抱きかかえているつもりよ！」

志津香がルークの足を全力で踏み抜いた。

・レッドの町 教会・

「どうも危ないところを助けていただき、ありがとうございます」

「がはは、俺様の手に掛ければ軽い軽い！」

「ランスは何もやってないでしょ」

ランスが胸を張り、ふんぞり返るがそれを見たマリアが苦言を呈す。

「私はこの町で神官をしています、セル・カーチゴルフと言います。貴方がたは？」

「うむ。悪のヘルマン軍からこの町を解放しに来た英雄ランス様とその女& amp;下僕たちだ！」

「誰があんたの女よ！」

「まあ、それではこの町を救いに……」

「がはは。お礼に一発やらせてくれてもいいんだぞ！」

グツと人差し指と中指の間に親指を差し込み、セルの前に突き出すランス。

「神の教えに反しますからそれは出来ません。そもそも、そのような事を言っでは……」

「セルさん。ランスへの説教は後で好きなだけやっていい。が、今は時間がない。ヘルマン軍の司令部へはどう行けばいい」

「こら、ルーク！俺様は説教など聞く気はないぞ！」

そう、ヘルマン軍の司令部への入り方がルークたちは判らなかつたのだ。かなみが先行して偵察してきたところ、司令部の前は町の中にも関わらず崖のようになっており、進入することが不可能であった。志津香曰く、魔法で無理矢理崖を作ったとのことだった。唯一かなみだけが、ギリギリ飛べるかもしれないという距離ではあったが、単身突入させる訳にはいかない。崖向こうにはヘルマン兵もいるため、ロープなどを掛けて貰う訳にもいかなかった。

「それならば、この教会の地下道から司令部へ入れます。こちらです」

そう言ってセルが教会の奥へ案内する。避難道として町の都市長が大昔に作ったものらしい。ヘルマン兵はこれを使って崖向こうの司令部からこちらへ渡ってきているとのことだった。

「それでは行くぞ!」

「うっ…地下道じゃチューリップ3号は入れないから、私は留守番か…」

「任せて、マリア。必ず司令官を倒してくるわ」

「皆さん、お氣をつけて…」

マリアとセルが教会に残り、六人になった面々は地下道を通って司令部を目指した。

・レッドの町 ヘルマン軍司令部・

「ぶー!まだリーザスの奴らを殲滅出来ないのかぶー!」

「はっ!申し訳ありません」

部屋の中でフレツチャーが喚き立てる。弟子であるボウがそれを宥める。部屋の中にはフレツチャーとボウ、リヨク、リーザス軍を洗脳している魔法使いのルナン、ルナンに洗脳されているリックとメナドの六人だった。と、その時どこからともなくフレツチャーの後ろから新たに二人の人物が部屋にやってくる。

「……何をモタモタしている」

「ぶー！魔人アイゼルぶー！まあ見ているぶー！」

部屋にやってきたのは魔人アイゼル。金に染まった長髪を梳きながら、フレツチャーに汚らわしいものを見るかのような視線を送る。側に控えているのは女剣士。その瞳はリックやメナド同様、輝きを失っている。その時、司令部の扉が強く開け放たれた。

「だ、誰ぶー！」

「がはは、英雄ランス様登場！ヘルマンの司令官め、覚悟しろ！」

「ランス様、豚が椅子に座って話しています。不思議です」

「本当。なんでこんな所に豚がいるのかしら」

シイルは天然で、志津香はわざとフレツチャーを挑発する。フレツチャーと横にいる弟子二人が怒りに顔を赤くする。

「ぶー！許さんぶー！」

「フレツチャー様になんと無礼な！」

「生きては帰さんぞ！」

「フレツチャー…まさか、あの世界最強の格闘家か！」

アレキサンダーが声を上げる。ルークもそれを聞き、驚く。まさかあの世界にその名を轟かす格闘家が、この目の前の豚のように太

った親父だともいうのか。

「おいおい、名を語るならもうちょっと騙せそうなものにしろ」

「馬鹿を言っな！この方がフレッチャー様本人だ！」

「……間違いないのか？」

「当然ぶー！」

ルークが眉をひそめ、アレキサンダーに問う。

「どう見る？」

「……あの者が本人かは判りかねるが、横の二人はそれなりに手練れだな。となると、可能性はあるかと」

その時、部屋の隅にいた人物を見て、かなみが声を上げる。

「そんな…メナド！リックさん！！それに、レイラさんも…」

「リック…まさか、赤い死神！？嘘でしょ！」

「他の二人も知り合いか？」

「はい、赤の軍副将で私の親友のメナドと、親衛隊隊長のレイラさんです」

「おいおい、強豪揃いじゃないか…」

相手の面子に流石にため息をつきなくなるルーク。ニタニタと笑いながら、フレッチャーが指示を出す。

「この最強の布陣にお前らなんかが勝てる訳ないぶー！ボウ、リョク、リック、メナド、レイラ！奴らを殺すぶー！」

その言葉にスツと前に出てくるレイラ以外の四人。フレッチャーが不思議そうにアイゼルの方を見る。

「おい、何をしてるぶー？」

「……この女は貴様の部下ではない。私の部下だ。何故私が貴様に手を貸さねばならない？」

「き、貴様！ふん、そこで見てるぶー！四人だけで十分ぶー！」

「なんだ？仲間割れか？見にくい豚が喚いているぞ、がはは！」

ランスが更に挑発を加えている横で、ルークがかなみにそっと指示を出す。

「かなみ、奥にいる集中している魔法使いの娘。恐らくあれがリーザ兵を操っている。俺たちが目の前の四人を倒すから、隙をみてあの魔法使いを気絶させてくれ。だが、奥の男には気をつける。イヤな気配がする」

「はい！……あつ！」

ルークに言われ、奥の男に目をやりかなみが見覚えのある顔に気がつく。

「ルークさん！あいつ、魔人です！」

「なんだとっ！？……んっ！！」

再度奥の魔人を見ようとしたルークだが、突如迫ってきた剣をすんでのところで受け止める。が、すぐに二撃、三撃と振るわれる。恐るべき早業。それを全て捌きながら一瞬の隙を突いて横薙ぎにする。しかし、相手もすぐに剣先を下に向けてそれを受け止める。

「なるほど……これがリーザスの赤い死神か……魔人に気を向けている場合ではないか……」

「ルークさん！」

「やれぶー！殺すんだぶー！！」

その声に反応するように、更にルークに攻撃を加えるリック。驚異なのは尋常ではないその手数。かなみが援護しようにも、目が追いきれない。忍者であるかなみがこれなのだ。シルと志津香も同様で下手に手出しが出来ずにいた。その太刀筋を、ルークは全て受けきる。あまつさえ隙を見ては反撃の太刀を繰り出しているのだ。だが、リックもその反撃を全て受けきり、超スピードでの攻防にも関わらず、未だどちらも一撃も受けていない。この剣速を完全に受けきるルークの強さを改めて目の当たりにする女性陣三人だが、その様子を面倒くさそうに見ながら、左隣からランスが文句を言う。

「馬鹿者！今の上段に反撃を取れただろうが！」

「何を適当な事を…」

「馬鹿言え！今の無理に取りに行ったら、次の攻撃で俺の胴体が両断されている！」

「それは貴様が遅いからだ！」

文句を言いかけたかなみと志津香が目を見開く。まさか、ランスにはこれが見えているのか。二人が驚いていると、ルークの右隣からアレキサンダーの声も飛ぶ。

「ルーク殿！先ほどからの相手の攻撃にはいくつかのパターンがあります！」

「ああ、把握している。数が多いんでまだ全てではないがな！」

まさか、アレキサンダーにも見えているのか。その時、ランスの前にメナドが、アレキサンダーの前にボウとリヨクが歩み寄ってくる。

「いつまでよそ見をしている気だ？」

「さあ、我々ともやりあつて貰うぞ。勝負になればいいがな……」

二対一。志津香がアレキサンダーの援護に入ろうとするが、それを手で制する。

「志津香殿。この密集した部屋では貴女の実力は発揮できないでしょう。ここは任せて貰おう」

「貴方、一人で戦うつもり！？」

「ルーク殿やランス殿の相手に比べれば、二対一が妥当な相手。問題ありません」

そう平然と言つてのけるアレキサンダー。そう言われたボウとリヨクが額に青筋を浮かべながら、冷静を装つてアレキサンダーに問いかける。

「ふっ…まさか貴様、フレッチャー様の弟子でもある我らと、無謀にも一人でやるつもりか？」

「ふんっ！！」

ボウの言葉と同時に、リヨクが右腕を開いた状態で前に思い切り押し出す。張り手をするような形になるが、突如アレキサンダーの横を突風が襲つた。その頬に一筋線が入り、血が流れる。

「これぞ我ら二人がフレッチャー様より教えを受けた奥義、真空波」
「格闘家の最大の弱点である遠距離を克服した我らはフレッチャー様に次ぐ実力を得た」

「それでも一人で十分などと言うつもりか？驕るな！」

「我らの実力、侮るな！」

ボウとリョクの言葉に、アレキサンダーが静かに腰を落とし、静かに口を開く。

「驕った訳でも、侮っている訳でもない。貴殿らの實力は本物だ。だが、それを冷静に考慮した上で……一人で十分だと判断したに過ぎん！」

「「き、貴様あああ……！」」

部屋の左隅ではランスがメナドと対峙していた。メナドが間合いを詰めている段階で、ランスににじり寄ってきている。

「おお！中々に可愛いじゃないか！ぐふふ、むさい男共はあっちの二人に任せて、お楽しみといくか」

「ランス！メナドは私の親友なんだから、変なことをしたら許さないわよ！」

イヤらしい顔をしているランスにかなみが文句を言う。シルモランスに声を掛ける。

「ランス様、援護を……」

「いらん。こんな密集した部屋じゃ邪魔だ。それに、メナドちゃん
は傷つけずに手に入れなければならんからな。がはは！」

無防備に笑うランスを隙だらけと見たのか、メナドが一気に間合いを詰めてランスに斬りかかる。直後、剣が後方に飛ぶ。それはランスの剣ではない。メナドの剣だ。冷静にメナドの太刀筋を見切ったランスが、下から上に剣を振り上げ、メナドの剣を弾き飛ばした。と同時に、両腕でメナドの胸を鷲づかみにする。

「がははー！ターツチー！」

「ぎゃああああ！メナドに何するのよ！！！」

かなみが悲鳴を上げると同時に、メナドが胸を押さえながら後方に飛ぶ。剣を拾いながらランスを睨み付ける。洗脳されて大して意識は残っていないはずだが、それでも羞恥心はあるらしい。

「ちつ、鎧の上からでは全然感触が伝わらん」

「ランス！次そんなことしたら手裏剣投げるからね！！」

「ふん、まあ鎧の上からではつまらん事も判ったし……」

そう言っ て剣を構えるランス。顔はにやけたままだが、メナドはランスの纏う空気に動けないでいた。メナドに向き合いながら、ランスが平然と宣言する。

「とつとと終わらせるとするか」

そして部屋の中央部、ルークとリックは未だ高速の剣舞を行っていた。不謹慎にも、ルークの口に笑みがこぼれる。洗脳され、実力を出し切れていないはずなのに、これほどか。再度リックに斬りかかるルークだが、その剣はまたもリックの剣に受け止められる。が、そのリックの腹に蹴りを繰り返す。先ほどまで剣の攻撃しかしていなかったため、不意を突かれた形のリックはそれを食らう。一步後ろに下がりがら、すぐに体勢を整えるリック。洗脳されているリックも、いつの間にか笑みを浮かべていた。

「滾るぞ、赤い死神！」

この状況を見てなお、フレッチャ―は勝利を疑っていなかった。

愛弟子に赤い死神、負ける要素が見当たらないからだ。だが、フレッチャーは知らなかった。洗脳によりリックの実力が出し切れていないことを。そして、目の前に対峙する三人の男がいずれもリックと肩を並べうる人類最強クラスの男であることを。

第46話 レッド解放戦（後書き）

「人物」

アレキサンダー （3）

LV 36 / 77

技能 格闘LV2

世界を旅する格闘家。7話でルークに敗れた後、一から鍛え直すべく世界を放浪していた。リーザスが陥落したという噂を聞き、リーザスを訪れルークと再会を果たす。

アリオス・テオマン

LV 14 / 99

技能 剣戦闘LV2

現在の勇者にして、ランス本編における三人の主人公の一人。正義感が強く、困った人を放っておけない性格で、リーザス解放軍にも自ら志願した。レベルの低さは勇者の特性によるもので、実力は本物である。

セル・カーチゴルフ

LV 18 / 44

技能 神魔法LV1

レッドの町の神官。真面目な性格で、町の人からの信頼も厚い。神官としての腕もかなりのもので、回復魔法の腕はシルよりも上いきなりとんでもない事を言い出したランスを改心させようと誓いつつ、抱きかかえられるなど初めての経験であったため、ルークに少しドキドキしている。

「モンスター」

デカント

巨人のモンスター。手に持った棍棒で敵を粉碎する。知性も多少あり、時には傭兵として雇われることもある。

「技」

一式ハヤブサ（半オリ）

使用者 アリオス・テオマン

アリオスの必殺技。一太刀振るえば周りに鎌鼬を起こし、敵を一度に斬り刻む技。発生した鎌鼬を飛ばすことも可能なため、近、遠距離両方で活躍する

真空波

フレッチャーが編み出した遠距離用格闘技。空気を押し出すようにし、鋭い風を相手に放つ。

「その他」

勇者

魔王を倒す力を持った存在。いつの世にも必ず一人存在する。13歳になると能力を発揮し、20歳になると引退となる。一度受けた攻撃はすぐに見切れるようになる、どんなピンチでも絶対に死なない、レベルが上がりにくいがレベルダウンをしないなど、物凄い能力が付加される。また、人類の数が減れば減るほど威力を増す勇者の剣、エスクードソードを使うことが出来るのも勇者のみである。

第47話 決着は再戦の誓いと共に

・レッドの町 ヘルマン軍司令部・

「はっ！」

「……っ！」

部屋の中央では再びリックとリックの高速の戦いが繰り広げられていた。リックがたかが一戦士相手に苦戦していることに、フレッチャーが怒りの声を上げる。

「何をモタモタしているぶー！さっさと片付けるぶー！」

「（…愚図が。戦況すら判らぬのか？）」

フレッチャーの言葉に、後ろで事態を見守っていたアイゼルが内心、悪態をつく。確かに目の前で繰り広げられている打ち合いは、一見先程までと変わらないように見える。が、その実、徐々にではあるがリックが押され始めているのだ。目の前の一戦士に。この段階でそれに気がつくことが出来るのは相当の手練れであろう。だが、アイゼルは難なく事態の変化に気がつく。

「（このままではこの豚は負けるな…）」

そう考えながらも、アイゼルに動く気配はない。レイラを横に携えたまま、不気味に部屋の奥に佇んでいた。

「真空波！どうした？大口を叩いて置きながら、逃げ回るだけか？」

「真空波！いつでもかかってきていいのだぞ？出来る者ならな！」

部屋の右隅で、ボウとリヨクがアレキサンダーとある程度の間合いを保ちながら真空波を連発する。それを躲し続けるアレキサンダーだが、真空波は二人から休むことなく放たれるため、近づけずにいた。だが、その顔に焦った様子はない。集中した様子で、何かぶつぶつと言葉を発している。

「……万物の祖よ……私に力を……」
「何をぶつぶつと……真空波！」

ボウが放った真空波に対し、アレキサンダーは避けるのを止め正面から受ける。右拳を突き出し、真空波とアレキサンダーの正拳がぶつかり合った。

「はあっ！」

「馬鹿め！貴様の右手が風によって切り刻まれるだけだ！」

そう叫んだボウだが、結果は違った。風の塊である真空波が大気に四散した。アレキサンダーの右拳は無傷、いや、実際には無傷かどうか判らない。なぜなら、アレキサンダーの拳は燃えさかる炎を纏っていたからだ。

「し、真空波が！なんだそれは！？」

「貴様、魔法使いだっただのか！？」

「いえ……魔法とは少し違う……」

ボウとリヨクが驚愕の声を上げるが、魔法使いである志津香は、アレキサンダーが纏う炎が、魔法使いが体内の魔力を変換して生み出す炎とは違うものであることに気がつく。

「ルーク殿に敗れ、己の未熟さを知った私は一から鍛え直すべく修行に明け暮れた。その修行の日々の中、ある時私は感じ取ったのだ。八人の神を」

「か、神？」

「狂っているのか？こいつは？」

アレキサンダーの突然の発言に、正気を疑うボウとリヨク。それを気にすることもなく、アレキサンダーは続ける。

「八人の神がどこにいるのかは判らない。恐らく、人が立ち入れる領域ではないだろう。だが、私は彼らの存在を確かに感じ取った。その事に八人の神も驚き召され、私ごときに多少の興味を持っていただけだ。そして、彼らにとっては少しばかり、だが私にとっては大きな力を貸していただけの事になった」

そう言つて、炎を纏った右拳を前に突き出す。距離があるにも関わらず、怯むボウとリヨク。

「これが、その力の一つだ！はっ！」

そう言つてアレキサンダーが駆け出す。慌てて真空波を放つボウとリヨクだが、その風は全てアレキサンダーの拳に四散させられる。風の威力が弱すぎるため、右拳の炎の威力を更に増すだけで、傷つける前に四散してしまうのだ。為す術もないまま、目の前に迫ってくるアレキサンダーにボウは恐怖する。

「し、真空波がなぜ破られる！」

「奥義が破られたときの準備くらいしておくべきであつたな！」

そう言って、アレキサンダーは炎を纏った右拳を全力でボウの顔面に放つ。

「属性パンチ・炎！」

「ぎゃあああああ！」

「ボウっ！！！」

崩れ落ちるボウの姿にリヨクが声を上げる。が、すぐにアレキサンダーはリヨクに狙いを定め駆け出す。右拳に炎を纏いながら近づいてくるその姿に恐怖し、リヨクが絶叫する。

「く、来るなあああああ！」

部屋の左隅ではメナドが攻めあぐねていた。洗脳され、意識が殆どなくても理解できる。目の前の男、ランスの纏う空気が自分のものとは比べものにならないことを。一瞬隙だらけに見えて、その実攻め込む隙がないことを。その時、ランスがこちらに向かってゆっくりと歩み始める。

「がはは、来ないならこっちから行くぞ！」

「ランス！殺したりしないでよ！あと、変なことも絶対にしないと！」

「殺す訳ないだろう。メナドちゃんには傷一つつけん。最初に傷物にするのはベッドの上だからな！」

「だからそれも駄目って言うてるでしょ！」

隙を見いだせなかったメナドだが、ランスとかなみが言い合いをするのを隙と見たのか一気に距離を詰める。それと同時に、ランスは剣を両手持ちで上に構え、一気に振り下ろす。

「いきなりランスアタアアック!!」

「……っ!!」

ランスアタックが地面に放たれる、だが、そこから発生した衝撃波でメナドの剣が後方に吹き飛ばされる。それを見たランスが距離を一気に詰める。先程メナドの胸を揉んだのと似たような流れだが、今度は剣をしっかりと握り、メナドに向かって剣を振るう。

「はっ!はっ!」

「……っ!っ!」

「まさか、リックが押されているのかぶー!？」

部屋の中央部、ルークとリックの高速戦。ここへ来てフレッチャーも遂に気がつく。その圧倒的な手数で押していたはずのリックが、いつの間にか相手の手数に防戦に回る一方になっているのだ。

「当然だ。あの男は人間にしてはそれなりに強い。洗脳によって全力で戦えぬあの死神では負けるだろうな。……いや、例え全力であったとしても判らぬか。あの男も、全力で戦ってははいない」

「せ、洗脳で全力では戦えないだぶー!無能な魔法ぶー!お前のせいだぶー!それに、どうしてあの男も全力で戦っていないぶー?」「ふ、技の一つも使ってこない相手に、自分が技を使うのも失礼だとも思っているのだろう。嫌いではない考え方だがね。ほら、決着がつくぞ」

フレッチャーの罵詈雑言など気にした様子もなく、目の前で繰り広げられる戦いに終わることを伝えるアイゼル。その言葉にフレッチャーが目を向けると、ルークが下から上に剣を振り上げ、リック

の剣を弾き飛ばしたところであつた。

「死神よ！奥義の一つもあるだろうに、それすら使えず不本意である。こんなことで決着がついたとは思わん。いずれまた、互いに全力で！」

「……」

ルークの言葉に、洗脳されているリックが確かに笑う。是非、という声がルークには聞こえた気がした。そして、無防備になったその体に、剣を振り抜く。

「はあっ！」

「妙技、手加減アタアアック！」

「属性パンチ・炎！」

三人がほぼ同時に言葉を発し、リック、メナド、リョクが同時に崩れ落ちる。

「ば、馬鹿なぶー！」

「今だっ！」

敵が減ったことにより、かなみが遂に動く。部屋の奥まで一気に駆け、魔法でリーザス兵を洗脳している魔法使いルナンの腹に一撃入れ、気絶させる。

「くくく、洗脳も解けたな」

「笑ってるなぶー！こうなったら流石にお前が行けぶー！魔人の力を見せるぶー！」

そう指示を出すフレッチャーだが、冷たい目を送りながらアイゼ

ルがそれを再度断る。

「お前は醜すぎる。私は、限度を超した醜い者の指示を受ける気にはなれない」

「な、なんだとぶー！」

「たまには自分で戦わないと太りすぎて動けなくなるぞ。拳法の達人なんだろう？」

「アイゼル、この事は後でパットン様に報告してやるぶー！」

「おい豚、次に殺される奴は決まったか？」

怒り狂うフレッチャーに向けて、ランスが挑発をする。キツとこちらを睨んでくるフレッチャー。そして、その重い腰を遂に上げる。

「…どうやら死にたいらしいぶー！世界最強の格闘家と言われた私の力、見せてあげようぶー！光栄に思えぶー！」

「あれが…世界最強…私は夢を見ているのか……」

「油断するなと言いたいが…あれは……」

アレキサンダーの言葉に、ルークも同意してしまう。でつぶりとした肉を揺らしながら、ふっ、はっ、とフレッチャーが拳や足を繰り出す。その度に肉が揺れ動く。どう見ても強そうには見えない。

「どこからでもかかってきなさいぶー！必殺のモデル脚で、全てにカウンターを取ってやるぶー！」

「ぶーぶー、うるさい！さっさと死ねえええー！」

「ぶひひひひひー！」

ランスの一太刀にカウンターなど合わせることが出来る訳もなく、絶叫と共にフレッチャーが瞬殺された。

「世界最強も、驕り高ぶるとああなるといい良い見本だな」

「私たちも気をつけなければなりませんね……」

「ランスならともかく、ルークとアレキサンダーさんは大丈夫ですよ」

「ランス様があんな体になってしまったら……うう、嫌です……」

フレッチャーの死体を見ながら話す二人に志津香も加わる。シルはでっぴりと太ったランスを想像してしまったらしい。

「志津香殿、自分が呼び捨てでないのに変な話してはありますが、呼び捨てで構いませんよ。恐らく年もそう離れていないでしょうし」

「待て、アレキサンダー！お前今いくつだ！」

「今年で20になります。まだまだ若輩の身」

「と、年下……だと……」

「ふふっ、パーティー最年長はまだまだ譲らないわね。ルークおじさん？」

「大丈夫です、まだまだルークさんは若いです！」

「そうですよ。10代……いえ、20代前半でまだまだ通じます！」

アレキサンダーの予想外な年齢に驚くルーク。志津香が笑いながらおじさんと呼んでくる。かなみが部屋の奥からフローし、シルもそれに続くが、シルのはあまりフローになっていなかった。

「ええい、ルークが中年の親父なことなどどうでもいい！」

「ぐはっ！」

「ルークさん！しっかり！」

「魔人アイゼルとやら、次はお前だぞ！」

崩れ落ちるルークを尻目に、ランスがアイゼルに向けて剣を突き出す。それを見ながら、アイゼルは高笑いを上げる。

「はははは、よくぞその醜い肉塊を倒してくれた。あんなのが仲間にいるのは、非常に不愉快だったのだ」

「そりゃそうよね。私だって、あれが仲間だったら不愉快だわ」

「ふふ、貴女とは美的センスが似ているようだ」

志津香の言葉にアイゼルが気をよくする。ルークたちを見回しながら、言葉を続ける。

「君たちをここで倒すのは簡単だが……」

「なにい！」

「ここで戦うと私がああ豚の仇討ちをしたようで気分が悪い。今日の所は帰るとしよう」

「逃げる気か！この卑怯者が！」

「見逃されているという事に気がつかないとは愚かな。まあいい、いずれまた会うこともあるでしょう」

「待て！アイゼル！」

「ん？」

「……くっ……」

「……あっ……僕は……」

「！？」

逃げようとするアイゼルをルークが引き留める。こちらを向くアイゼルだが、それとほぼ同時に倒れていたリックとメナドが意識を取り戻し始める。かなみがルナンを倒したことが切っ掛けだろう。それを見たルークが言葉に詰まる。もし、この場にランス、シイル、かなみ、志津香だけであつたのなら、ルークは言葉を続けていたかもしれない。だが、信用しているとはいえ共に行動をし始めたばかりのアレキサンダー、そしてリーザス軍人であるリックとメナドの前で話せる内容ではない。言いあぐねるルークを不思議そうに見な

から、アイゼルが言葉を続ける。

「人間ごときが私を引き留めるな。レイラ、私はこの場から去るが、聞き分けのない奴らが私の妨害をしようとするんだ」

「はい、アイゼル様」

「レイラさん！どうして洗脳が解けてないの！」

「多分、レイラさんは魔人に直接操られているのよ！」

「ほう、聡明な魔法使いもいるんですね」

アイゼルの命令を聞くレイラの姿にかなみが声を上げるが、志津香が冷静に分析する。アイゼルが志津香の事を更に気に入った様子で声を漏らす。

「レイラ、私の為に奴らを倒してくれるね」

「はい、愛するアイゼル様の為でしたら何でもいたします」

「良い子だ。では、私の為に戦ってくれ」

「はい、アイゼル様」

そう言うと、レイラが剣を取りこちらに向かってくる。リックを含む強敵たちを倒したこの面子に、レイラ一人で敵うとはアイゼルも思っていないだろう。ただの時間稼ぎの捨て駒だ。迫ってくるレイラの剣をランスが受け止める。ルークがアイゼルを追おうとするが、すぐにレイラが立ちふさがる。勝つことなど考えていない、ただアイゼルが逃げるのを手助けするだけの妨害。流石に多勢に無勢、レイラはすぐに崩れ落ちることになるが、その時には魔人アイゼルの姿はどこにもなかった。

「……くそっ」

「ふん、俺様に恐れをなして逃げたか」

「ランス様、違うと思いますけど…」

「口答えをするな、シイル！」

「ひんひん、痛いです、ランス様……」

「とりあえずレッドの町はこれで解放完了ね」

「リーザスの方々を運びましょう。立てますか？肩を貸しましょう」

「すみません……」

「そうですね。とりあえずバレス將軍の下へ」

「ではナイスバディーのレイラさんは俺様が運ぼう。メナドちゃんも後で運ぶからそのままにしておけ」

「そんな事出来る訳ないでしょ！まったく……」

「あ、こら！どさくさに紛れてレイラさんの胸を揉まないの！」

シイルの頭に拳骨を入れるランス。志津香が戦いの終わりに一息つき、アレキサンダーが近くにいたリックに肩を貸す。ランスがレイラの胸を揉みながら運び、かなみと志津香に文句を言われている。ルークがメナドに声を掛ける。

「大丈夫か？意識ははつきりしているか？」

「あ……はい……貴方は……？」

「俺はルーク、解放軍の者だ。君たち赤の軍はヘルマンに洗脳されていたんだ。だが、もう大丈夫だ」

「そうだったんですか……ぼんやりとですが覚えています……あつ……」

ふらふらと立ち上がろうとするメナドだが、足がもつれて倒れ込む。

「あはは……すいません、もうちょっと掛かるみたいなんで先に……」

「そうだな、それじゃ悪いが失礼して……よつと」

「ひゃあ！」

そう言っつてメナドを抱き上げる。お姫様だつこのような状態にな

り、メナドが顔を赤くする。

「な、何を…お、降ろしてください。一人でも歩けます!」

「嫌かもしれないが、少しだけ我慢してくれ。可愛い女の子が無理するもんじゃないぞ」

「か、可愛い!? ぼ、ぼくが!? そんな、ぼくなんて男みたいだし…」

「ん? 十分魅力的だと思うけどな」

「あ…あう…」

顔を更に赤くし、黙り込んでしまうメナド。そのままメナドを運ぶルークの様子を後ろから見つめる二人の女性。

「（やばい…全力で足を踏みたい…でもセルさんと違って、あの状態のメナドさんじゃルークがもし落としたら危ないわよね…くっ!）」

「（メナド…お願い、その段階で留まって…親友の貴女と取り合うのだけはイヤっ!）」

ルークたちは司令部を後にし、バレスたちの下に戻ると、残存兵を全て倒し終えたところで、これから司令部に乗り込もうとしているところだった。突如リーザス軍の洗脳が解けたことに驚いている様子だったが、先行したルークたちが司令部を落としたことに驚き、感激するバレス。こうして戦いは終わった。魔人アイゼルは逃したものの、フレッチャー率いるヘルマン軍を打ち破り、リーザス赤の軍と魔法軍の洗脳も解いた。圧倒的な勝利でレッドの町の解放に成功したのだ。

「やれやれ…なんとか生き残れたな…」

ミリがため息をつく。周りでは解放軍が忙しく動いている。勝利の喜びに浸る間もなく、解放軍は戦後処理に大忙しであった。怪我人の治療や壊れた建物の修復、また、ラジールに置いていた司令部をより前線に近いレッドに移動させることも決定した。ランスは捕まえた女魔法使いのルナンとお楽しみ後、既に宿で寝ていたが、それ以外のものはしつかりと働いていた。ルークも各部隊の手伝いや、町の復興、更に作戦会議にも参加と休む間もなく奔走していた。

「メナド副将！無事だったんですね！」

「…ああ、ザラック。うん、ぼくは大丈夫。みんなも怪我はない？」

「はい、解放軍がリーザス軍には手を抜いてくれたお陰で、それほど大きな被害はありません」

「…そう、良かった」

「それにしても心配しましたよ！強いとは言ってもメナド副将は弱い女の子ですから、ははは！」

「…そう。ごめんね、心配かけて。作戦会議があるからぼくは行くね」

「あ、あれ？」

どこか上の空の様子でこの場を離れるメナド。どこか当ての外れた様子でザラックはその背中を見送る。

「…ちつ、おかしいな。メナド副将は女の子扱いすれば簡単に落とせると思ったんだが」

とぼとぼと会議室に向かっていくメナド。ザラックの言葉はあまり届いておらず、女の子扱いされたことにも気がついていなかった。その頭の中を占めるのは先程のお姫様だっこ。

「ど、どうしよう…あんな風に女の子として扱ってくれる人なんて

初めてだ。うう、まだドキドキしてる…ルークさんか…」

タッチの差でメナドを初めて女の子として扱ってくれた男性がザラックではなくルークに変わる。それによりザラックの魔の手から逃れる形となったメナドだが、その代わりとしてかなみの願いは破られる形となってしまった。

・リーザス城 ヘルマン軍司令部・

「ハンティ、遠路はるばるよく来てくれた！」

「きしし、場所さえ判れば距離は関係ないさ」

玉座から立ち上がり、パットンが両手を広げて喜ぶ。目の前に立つのはハンティと呼ばれた黒髪のカラー。無邪気に笑うその見た目は若いが、少なくとも数百年は生きているカラーだ。パットンの乳母であり、姉のような存在でもある。このハンティは、パットンが最も信頼する人物だ。再開に喜び合う二人だが、ハンティが顔を引き締めながら、パットンに報告する。

「それより、今回のお前の行動で皇帝はかなりご機嫌ななめだ。パメラが焚きつけた形だな。大丈夫なのか、パットン？」

「なーに、この作戦が成功すればどうとでもなる。それより、紹介しておかないと。こいつが魔人のノスだ。アイゼルとサテラという二人の魔神を引き連れ協力してくれた、中々頼りになる奴だ」

「……」
「……」

紹介されたノスがハンティの方に少しだけ頭を下げる。それをジ

ツと見るハンティ。一瞬不穏な空気が流れるが、パットンはそれに気がついた様子もなく話しを続ける。

「ハンティ、お前も協力してくれるんだろう？」

「当然。その為に来たんだ、あんたを守るのがあたしの役目だから」

「頼りにしているぞ」

その時、部屋に伝達兵が駆け込んできた。

「申し上げます。レッドの町にてフレッチャー司令官の部隊が…」

「どうしたのだ？」

「リーザス解放軍と戦闘状態に入り…壊滅しました。レッドの町も敵軍に制圧されました」

その報告に目を見開くパットン。周りに控えていた護衛兵にもざわざわと騒ぎ出す。その兵たちをハンティが一括する。

「いちいち騒ぐんじゃないよ！護衛だろうが、あんたらは！…」

「負けた…そんな馬鹿な…フレッチャーはどうした！」

「はっ、勇猛にも敵兵100人に戦いを挑み、後一步の所で無念の戦死をしたと伝えられています」

「…20年前ならいざ知らず、今のフレッチャーがねえ…」

その報告にハンティが疑いの眼差しを向ける。どうやら全く信じていないようだった。パットンが頭を抱えるが、伝達兵は更に報告を続ける。

「リーザス解放軍はレッドの町で既に進軍の準備を続けている模様。このままでは、ジオの町まで落とされる危険性があります」

「くつ、トーマに我が軍の主力を集めさせて解放軍を撃破させる。急げ！」

「ですが、我が軍はリーザス各地に散らばっております。今この軍を動かすと、各地で反乱の火の手があがる恐れが……」

「構わん。まずはリーザス解放軍を撃破することが先決だ。これ以上、奴らが大きくなる前にだ！」

「はっ！判りました。全軍をトーマ將軍の下に集結させます」

そう言つて伝達兵が部屋を後にする。玉座に座り込むパットンに、ハンティが声をかける。

「あたしが行つてやろうか？」

「い、いや……今回は俺の力でやってみたい」

「……そうか」

普段の「私」ではなく、ハンティの前では「俺」という一人称になる。皇帝に相応しい言動をと普段から気を張っているパットンだが、彼女の前でだけは素の自分に戻れる。だからこそ、情けない姿を見せる訳にはいかない。彼女の手は借りず、自分の力でリーザス解放軍を叩きつぶす。気がつけば、右拳を固く握りしめていた。

・リーザス城 地下牢・

地下牢には鎖に繋がれた状態のマリス。先程までサヤの拷問を受けていたが、今は奥でリアが拷問を受けている。毎日激しさを増す拷問、ここまで耐え切れているが先行きは不安である。その時、サヤがリアを連れて戻ってくる。

「ふふ、残念だったね。リア王女は墜ちたよ。さあ、言われたとおりにしな！」

「うふふ、マリス。リアと楽しみましょう？」

「リア様！？」

虚ろな表情をしながら、リアがマリスに迫ってきて、その胸を揉み、秘所を触ってくる。墜ちた、ということはランスたちの話を話してしまったのか。マリスが焦るが、サヤが話しを続ける。

「まさか本当に何も知らず、全て侍女であるマリスに任せていたとは、王女様はとんだ無能だね。だが、聞いたよ。あんたはリアからの熱烈なアプローチを頑なに拒んでいたんだってね。そんなあんたにはリアにいたぶられるのが最大の拷問になりそうだ。今日から夜は徹底的にこの拷問で行くよ。覚悟するんだね！」

「（…なるほど、そう言う事ですか。流石はリア様）」

ジッとリアを見返すマリス。その虚ろな瞳の奥に、強い意志を秘めているのを確かに見た気がした。マリスも嫌悪の声を上げる演技をしながら、格段に楽になった拷問を受けきる。必ずランスたちが助けに来る、そのことを信じて二人はひたすら耐えるのだった。

第47話 決着は再戦の誓いと共に（後書き）

「人物」

リック・アデイスン （3）

LV 40 / 70

技能 剣戦闘LV2

リーザス赤の軍将軍。リーザス最強の戦士だが、洗脳されルークたちの前に立ちふさがった。ルークに敗れ、洗脳も解けた今、最も頼りになるリーザス軍の一人。臆気な記憶ではあるが、ルークが手を抜いていたことにも気がついており、いずれもう一度、互いに全力でやり合いたいと思っている。

メナド・シセイ

LV 29 / 46

技能 剣戦闘LV1

リーザス赤の軍副将。まだ若いが、その实力を見いだされ副将に抜擢される。かなみの親友。男兄弟の中で育った為、本人も男のよきな性格をしている。それゆえ今まで口説かれたりした経験はなく、女の子として扱ってくれる男性に弱い。

ザラック

LV 14 / 20

技能 なし

リーザス赤の軍一般兵。メナドの部下だが、实力は高くない。メナドのことをチョロそう女として密かに狙っていたが、当てが外れる。

ハンティ・カラー

LV 126 / 1000

技能 魔法LV3 剣戦闘LV1

ヘルマン国評議委員の一人。パットンの乳母であり、最も信頼を置く人物。親友であったパットンの母親に頼まれ、幼い頃から彼の身辺警護を務める。パットンが立派な皇帝になるのが彼女の夢でもある。背中に二本の鉄の腕を背負い、併せて四本の腕から魔法を同時に繰り出す実力者。今では微かに伝説に残るのみだが、かつては黒髪のカラーと呼ばれ、人類から英雄視されていた。

フレッチャー・モデル

LV 5 / 100

技能 格闘LV3

ヘルマン第3軍司令官の一人。かつては大陸にその名を轟かす世界最強の格闘家であったが、慢心故に修行をしなくなり、今ではぶくぶくと太りまともに動けない体になってしまった。20年前の彼であれば、ルークやランスなど一瞬で叩き伏せていたであろう。

ボウ

LV 22 / 30

技能 格闘LV2

フレッチャーの弟子。肥えた師匠とは違い、実力は本物。師より教わった真空波で敵を切り刻むが、それに頼りすぎたためアレキサンダーの前に敗れる。

リヨク

LV 22 / 30

技能 格闘LV2

フレッチャーの弟子。こちらも真空波を放つことが出来るため、実力は本物。師匠のことを盲目的に尊敬しており、それゆえ既に動けない体であることに気がついていない。

ルナン

ヘルマン第3軍魔法兵。捕縛後はランスに美味しくいただけました。名前はアリスソフト作品の「闘神都市2」そしてそれから……」より。ディアと名付ける予定が間違つてルナンに。ルナンは男だ。まあ女っぽい名前なのでそのままにしました。

「技」

手加減攻撃

使用者 ランス

ランスの必殺技。どんな相手でも殺すことなく必ず体力を残す妙技。

属性パンチ・炎

使用者 アレキサンダー

アレキサンダーの必殺技。炎の神の力を借り、己の拳に炎を纏わせる。格闘家でありながら属性攻撃を可能とする脅威の技である。

モデル脚

使用者 フレッチャー・モデル

フレッチャーの必殺技。相手の攻撃に対してカウンターで蹴りを繰り出す。その威力は絶大で、これを受け手立ち上がることの出来た者は一握りである。

「都市」

レッドの町

自由都市。町を覆う赤レンガが特徴的だが、警備体制としては甘い。最近教会に新しく赴任した美人神官セルが話題の的である。

「その他」

永遠の八神

人間界にその存在を知られていない、高位の神々。地位は三超神に次いで高い。本来は人間界に興味はなく、支配も望んでいないが、自分たちの存在に気がつくことの出来たアレキサンダーに少しばかり興味を示し、力を授ける。それぞれの仲は悪いため、同時に複数の力を借りることは出来ない。

第48話 魔人の足音

- レッドの町 司令部 -

レッドの町を解放し、次なる戦場であるジオの町奪還に向け、司令部では会議が行われていた。参加者は前回の面々に加え、欠席していたランスと志津香、更にはシルとリックとメナドが加わる。エクスが遅刻してきた際、横に魔法軍副将のメルフェイスを携えてきて、そのままメルフェイスも加わる。総勢18人、それもリーザスの将軍、副将が半数以上を占める。流石に壮観であった。何故かメナドがちらちらとルークの方を見ている事がリックは気になってしたが、会議は円滑に進む。話しも終盤にさしかかった頃、会議の始まりからずっと寝ていたランスが起きる。

「ふあああ、おい、終わったか？」

「ふふふ、おはようございます、ランスさん」

「もう！ずっと眠っているだけなんだから！」

真知子がクスクスと笑い、マリアが苦言を呈す。このランスの対応にリーザス兵の評価は割れる。バレスやリックは剛胆と感じ、評価を下げていない。逆にエクスやハウレーン、黒の三副将などはあまり良く思っていないようだ。メナドは心ここにあらずで、ランスの事を考えている余裕がなかった。

「ランス殿、もうすぐ会議が終わるところでしての。後は解放軍の被害の確認と、補給経路の確認、それと…」

「なんだ、確認ばかりではないか。そんなものはパスだ。それより、レッドの解放で俺様たちの部隊にはどれだけ仲間が増えたんだ？」

「赤の軍と魔法軍、それと義勇軍が志願してきて、併せて約2000。更に、リーザス親衛隊も赤の軍に組み込まれ参加していたため、仲間になりました。これで残すリーザス軍は青の軍を残すのみですよ」

「ジオの町を守るヘルマン軍は約2000。司令官ガイヤスもそれ程優秀な指揮官ではないため、よほどの事が無い限り負けることはないでしょうね」

バレスとエクスがそう報告する。いくら被害が出てヘルマンが痛まないためか、リーザス軍はより前線に配備されていた。そのことが幸いし、解放軍の規模は巨大なものになっていた。

「そうだ、親衛隊で思い出した。あの美人のレイラさんはどうした？助けてやったんだから、お礼くらい…じゅるり」

「むっ…それは…」

ランスの言葉にバレスが言いにくそうにする。他の面々も同様に表情が変わる。

「何だ？レイラさんに何かあったのか？」

「…彼女には他の洗脳魔法とは違う、特殊な魔法が掛かっていて…」

「えーい、うだうだ言っな！さっさと結論を言え！」

「…判ったわ、こつちについてきて。それと、ルークさんやかなみさんも」

「マリア殿、それは…」

「…あまり男性に見せる姿ではないと思うのですがね」

「エクス、それほど酷いのか？」

「…ええ、特にリック。君は絶対に見てはいけませんよ。彼女のことを思うならね」

「？」

そう言うエクスは既に見ているのであろう。光景を思い出し、顔を歪める。リックは他のリーザス兵から止められ、その様子を見てはいない。かなみもまだ確認していなかったため、マリアはルークとかなみをランスと一緒に奥の部屋へ連れて行くこととする。

「見て貰った方が早いし、緊急性も伝わると思うわ。それに…ランスは見なきゃ納得しないと思うし…」

「ふん、とにかく案内しろ」

「さて、俺もついて行くか」

「ルーク！」

そう言うて席を立つルーク。隣に座っていた志津香が声をかけてくる。

「出来れば、すぐに忘れてあげて。というか、忘れないと踏むわ」
「了解」

「メルフェイス。君も行つて説明の補助を」

「はい、エクス様」

マリアに案内され、ルークとランス、シイルとかなみ、そしてメルフェイスは奥の部屋に向かう。廊下を歩いていると、奥の部屋から悩ましげなあえぎ声が聞こえてくる。部屋まで辿り着き、中の様子を覗く。そこでは、狂ったように乱れ、裸で自分を慰めているレイラの姿があった。

「そんな…レイラさん…」

「おおおっ！これは俺様を誘っているのか！」

「馬鹿言わないの！レイラさんは昨日の晩からずっとこの状態なの」

マリアの説明に補足するように、メルフェイスが一步前に出て説明を始める。

「レイラさんは、どんどん衰弱しています。彼女だけは他のリーザス兵とは違う洗脳をされたようです」

「はあ… ああ… アイゼル様あ…」

「アイゼルだと？」

レイラの上げた声に、ランスが反応する。メルフェイスとマリアが説明を続ける。

「ええ、レイラさんは魔人アイゼルに直接洗脳を受けたようです」

「術を解く方法は、アイゼル自身が術を解くか… アイゼルを倒せば解けるはずだわ」

「アイゼルを倒す… か…」

「がはは、簡単ではないか！それでいこう！無事にレイラさんを助けた暁には、たっぷりと礼をして貰うことにしよう」

「ランス様、その事なんです… アイゼルの居場所が判らないので、会議では無理だという結論になったんです」

「なに？進軍していけばその内、出会うんじゃないか？」

「いえ、レイラさんはもって数日。間に合わないわ」

「なんだと！それじゃあ、何か別の方法はないのか！」

ランスが騒ぎ立てる。みすみす美人を死なすことは納得がいかないのだろう。会議にちゃんと参加していたルークが口を開く。

「ある。真知子さんが見つけてきてくれた方法だ。ラジールの町から東の迷子の森に生息する、聖獣ユニコーンの蜜。それを飲ませればどんな催眠、洗脳もたちどころに消えるらしい」

「それさえあれば、きっとレイラさんを救えるわ」

「がはは、それではユニコーンを捕まえに行くとするか。その後はレイラさんと…ぐふふ…」

「お願いね、ランス。私たちはジオの町に攻め込む準備をしているから」

こうしてレイラを救うべく、少数精鋭の部隊が組まれることになった。リーザスの將軍たちは部隊を纏める必要があるため参加できない。マリアはチューリップの整備、ランも不参加、ミリも今回は部隊を纏めるからとパス。ミリにしては珍しい行動であった。そのため、ユニコーン捕縛に参加するのは、ルーク、ランス、シイル、かなみ、志津香、アレキサンダー、それと…

「トマト、復活です！」

両手を高々と上げながら叫んでいるトマト。先程までレッド司令部に連れて行って貰えなかった事に文句を言っていたが、迷子の森に連れて行って貰えることが決まり、こうして全身を使って喜んでいった。その側には、何故か神官のセルもいた。ルークが問いかける。

「セルさん。貴女も一緒に？」

「はい。迷子の森には少女がモンスターと一緒に住んでいるという噂があるんです。本当なら、放つては置けません。教会で保護しなければ…」

「なるほど。だが、部隊の治療は？」

「昨日までで大体終わらせました。それに、ロゼさんという方が引き継いでくれたので」

「ロゼか…本当に俺たちについて来ているんだな」

「がはは、美人のセルさんなら大歓迎だ。俺様と一発…」

「あ、ランスさん。貴方にお話したいことが…」

「しまった！ええい、説教を聞いている暇などない。さっさと行く

ぞ！」

ランスがセルから逃げるように町を飛び出していき、他の者もそれに続く。目指すは迷子の森のユニコーン。

- 迷子の森 入り口 -

「ランス様、大きな森ですね。迷子になりそうです」
「うむ」

「この森の名前の由来もそこから来ているんですよ」

「つけた人はネーミングセンスないですかねー？」

「そうですね？単純明快で、良い名前だと思いますが」

「ルークさん、アレキサンダーさんのセンスって……」

「……突っ込まないであげてくれ」

シルの言葉にセルが説明をし、トマトがバツサリと命名者を切り捨てるが、アレキサンダーが不思議そうに返す。そのアレキサンダーをかなみと志津香が呆れた様子で見る。森の中を進んでいく一行だが、モンスターの気配が全くない。

「モンスターが出るとい話したたのでは？」

「おかしいですね。この森を訪れた冒険者の話ではそうになっていたのですが……」

「！？ルークさん！」

「ああ、みんな止まれ、気配を感じる！」

セルと話していると、それまで感じなかった気配が近くからする。いち早く気がついたのは忍者のかなみとルーク。ランスとアレキサ

ンダーもほぼ同時に気がついたようで、ランスは剣を抜いている。他の者もルークの言葉と同時に構える。すると、巨大な木の下に湧き出るように一人の少女と変な生き物が現れる。

「ルークさん、あれが森で住んでいるという…」

「女だ！美少女だ！がはは、俺様のものだ！」

セルの言葉を遮るようにランスが叫ぶ。目の前に現れた少女は、赤い髪に美しい容姿、そして、野性的な薄い服を纏っていた。こちらを睨みながら、少女が言葉を発する。

「コノ モリ ラブ ノ オマエタチ デテケ！」

「ん？なんだ？」

「ランス様、どうやら森を出て行けと言っているみたいです」

「片言だな。だが、人語が判るならまだやりやすいか」

「そうですね。ねえ、私たちと一緒に町に戻りましょう？」

「スー イカナイ ケイコクダ スグニ デテカナイト シヌ ワ
カッタナ」

セルの言葉に聞く耳持たず、それだけ言い残すと少女はこの場から瞬時に消え去った。

「瞬間移動！？…いえ、ワープしただけね」

「高度な魔法か？」

「瞬間移動だったらすうだけど、ワープだけならたいしたことないわ」

「あの少女を捜すぞ！こんな森に一人で放っておく訳にはいかんからな、ぐふふ」

「そういう事は、少しは顔に出さないで言ってよね。何考えしてるか丸わかりよ」

「だが、あの少女を捜すのは賛成だ。保護する目的もあるが、この森に住んでいるんだ。ユニコーンの場所も知っているかもしれない」「ですがルーク殿。どこへ行ったか見当が…」

消えた少女を捜すことに反対する者はいなかったが、どこへワープしたか見当がつかない。アレキサンダーの言葉に一同困った様子になるが、志津香が不敵に笑う。

「大体的見当ならつくわ。行きましょう！」

「流石だな。頼りになる」

「ふん、煽てても何も出ないわよ」

志津香が先頭を走り、それに他の面々が続く。ルークの言葉に軽く返した志津香だが、その表情は少しだけ嬉しそうであった。その表情を見たトマトが、そつとかなみに耳打ちする。

「もしかして、志津香さんもラブってますかー？」

「……どうして私に聞くんですか？」

「それは勿論、ラブってる筆頭のかなみさんに聞くのが一番かとー」

「（嘘、バレてるの！？に、忍者として上手く隠していたはずなのに！）」

- 迷子の森 中間部 -

志津香が走った先、最初に目指していた箇所にはいなかったが、次に目指した箇所確かに先程の少女がいた。巨大な木に腰掛け、やってきたルークたちを不思議そうに見る。

「マダ イタノカ ドウシテ ココガ ワカッタ？」

「ワープ呪文なら座標を固定しなきゃいけないでしょ。貴女が最初に現れた大木、若干魔力を感じたのよ。周りを見れば、この森には頭一つ突き出した木が数本あったわ。となれば、ワープ先はその大木のどれか。どう、当たってる？」

「アタリダ オマエ スゴイナ デモ ケイコク ムシシタ」

そう言いながら、こちらを睨み付けてくる少女。

「オマエタチ モリ アラス アクニン ラプ イジメル ニンゲン」

「ラプ…ラプ…」

少女の側に控えていた小さな妖精のような生き物が怯えた声を出す。

「そうか…あれがラプか。初めて見た」

「知っているんですか？」

「丸い者の一種でリスとかの仲間だな。歌を愛する平和的種族だが、その美声を見世物にしようとした悪人から狙われ、森でひっそりと暮らしているという」

「ほえー。流石ルークさん、何でも知っているんですねー。解説役みたいですよー。知っているのかー、ルーク！」

「あまり嬉しくない例えだな…」

ラプという種族がいた事を思い出したルークがかなみに説明する。トマトが感心して誉めてくるが、何故かあまりいい気はしなかった。そんなルークたちに、少女が持っていた槍を向ける。

「スー タタカウ オマエタチ テキ」

「待ってください。私たちは貴女を保護しようと…」

「スー ノ ミラクルパワー！」

スーという少女がそう言うと、ルークたちの体を魔力が包む。

「まずい！ワープ魔法だわ！」

「バイバイ トンデケー！」

スーがそう言うと、ルークたちを包んでいた魔力が白く発光し、次の瞬間この場からルークたちの姿が消えた。森のどこかへワープさせられたのだ。

「スーたちモ ムラ モドル」

「ラブ！」

- 迷子の森 最深部 -

「みんな、怪我はないか？」

「はい。なんとか」

「バラバラに飛ばされないで助かったわね」

巨大な木の下には全員が揃っていた。だが、ワープで無理矢理飛ばされたため、完全に迷っていた。頭一つ抜き出た大木も、多すぎてどれが先程のものか見当もつかない。と、木の上の上って辺りを偵察していたかなみが降りてくる。

「ルークさん、近くに村みたいなものがあります」

「村？森の中にか？ラブの集落の可能性が高いか…だが、ワープし

た先にある訳が…」

「とりあえず向かうぞ。こんな所で話し合っても仕方ないからな！」

かなみが見つけたという村に向かって歩くルークたち。その場所は近く、数分で村の前まで辿り着く。村の中ではラブたちが生活しており、こちらを見ると驚いて村の奥へと逃げて行ってしまった。追いかけてよとしたが、先程の少女、スーが村の奥から現れる。

「シマツタ マチガエテ ムラ ノ ソバ トバシテ シマツタ」

「なるほどね。おかしいとは思ったが…」

「ドジですかねー？」

ポリポリと頭を掻いていたスーだが、突然キツとこちらを睨み付けてくる。

「ヨクモ ココマデ キタナ ホメテヤル」

「無かったことにした！」

「ルークさん！可愛いです、あの子！」

「ダガ ラブノムラ シラレタ イキテ カエサナイ シネ ニンゲンドモ」

「待って、貴女たちの生活を邪魔する気は…」

セルの言葉に耳を貸さず、スーが宣言する。すると、周りにモンスターが集まってくる。どうやらラブだけでなく、他のモンスターとも仲良く暮らしているようだ。パワーゴリラズ、ラーめん、ライカンスロープ、そしてラブと様々なモンスターの混合部隊となっていた。

「カカレ！」

スーの合図で一斉に襲いかかってくる。迫ってくるモンスターを見ながら、ルークが冷静に分析する。

「厄介なのはパワーゴリラZくらいか？」

「では私とルーク殿で担当しましょう」

「ランスは？」

「既に女の子モンスターの方に…」

「やれやれ。かなみとトマトはラブを頼む。超音波にだけ気をつければ大した相手じゃない。志津香とシルちゃんは状況を見て援護を。セルさんは回復を頼む」

「了解。任せておいて」

「みなさん、気を付けてください」

ルークの指示に従い、各々が散らばっていく。パワーゴリラZを目の前にして、アレキサンダーが数を数え始める。

「ふむ、九体ですな。どうですか、ルーク殿？どちらがより多く倒せるか勝負というのは？」

「まあ、いいだろう。だが油断するなよ」

「御意！」

そう言う二人がパワーゴリラZに向かっていく。パワーゴリラZは決して弱いモンスターではないが、相手が悪すぎる。真空斬で次々と斬り伏せていくルーク。対するアレキサンダーも装甲破壊パンチを腹部に放ち、パワーゴリラZを倒していく。

「何よ、あつちは援護なんていらないじゃない。火爆破！」

「炎の矢！」

「はっ！」

「とりゃー！」

志津香が悪態をつきながら、ラブに向かって火爆破を放ち、シイルも炎の矢を放つ。二人の援護を受けながら、かなみとトマトは確実にラブを気絶させていく。その奥ではランスがライカンスロープに向かっていった。

「変身！ワープリンスス！」

「がはは、らーめんに続き、ワープリンススゲットだー！」

「きやああああ！」

「ランスさん！女の子モンスターにとって人間の精は毒なんです！手を出してはいけません！」

左手にらーめんを抱えながら、ライカンスロープが変身した姿の一つである、ワープリンススの胸を揉みしだく。そのランスの様子にセルが苦言を呈す。次々と数を減らしていくモンスター。既にこの程度のモンスターでは足止めすら出来ないほどに、ルークたちのパーティーは強力なものになっていた。三分と掛からずにモンスターが全滅する。

「六体、俺の勝ちだな」

「くっ…三体です。まだまだ修行が足りませんね」

「まあ、俺は遠距離攻撃持っているからな。そう気を落とすな」

「なに、遊んでいるのよ！全く…」

「バカナ コンナニ ツヨイ ナンテ」

スーが驚いていると、奥から年老いたラブが現れる。どうやら村の長老らしい。悲しそうな瞳でこちらに問いを投げる。

「人間はなぜ我々をそっとしておいてくれないんだ…我々の生活を

破壊しないでくれ…」

「ユルセナイ コロセ」

「待て、勘違いしているぞ」

「私たちはここに戦いに来たんじゃありません！」

「嘘を言うな。こちらは何もしていないのに、多くの同胞がやられたのだぞ」

「勝手なことを言うな。先に仕掛けてきたのはそっちだろ！」

「私たち、この森にはユニコーンに会いに来ただけなんです！」

「それと、森で暮らす少女の確認と保護を…」

ルークとセルの言葉を信じようとしないう長老だが、ランスの言葉を聞いてその表情が驚きに変わる。シルとセルも補足し、それを聞いた長老がスーの方を見る。

「スー！これはどういう事だ！」

「エッ… ダッテ ニンゲン テキ ワルイヤツ」

「スー、敵かどうか確かめずに攻撃したんだな？」

「…ゴメンナサイ」

それを聞いた長老が、こちらに深々と頭を下げる。

「申し訳ありません。こちらの早とちりだったようです」

「ゴメンナサイ」

「ランス様、どうやら無事に和解できそうですね」

「うむ、以後俺様に協力を誓うなら許してやろう」

「ありがとうございます。ささやかですが、謝罪の意味も込めて宴に案内させていただきます」

「そんな時間は…」

断ろうとしたかなみだが、そのお腹がくーとなり、顔が真っ赤に

なる。考えてみればそろそろお昼時だ。

「じゃあ、お言葉に甘えるか。長居は出来ないが、昼食を取るくらい問題ないだろ」

「そうね、丁度お腹も空いたことだし」

「そうですー！ペコペコですー！だから、かなみさん。あんなに盛大にルークさんの前でお腹を鳴らしても、気にしないでいいんですよー！」

「お願い…トマトさん。追い打ちを掛けしないで…」

トマトの天然追い打ちを食らい、かなみが羞恥で死にたくなる。先日のかえるパンツといい、最近不運だと思っかなみだった。まだまだこの程度で不運と思えているあたり、かなり幸せなことなのだが。

- 迷子の森 ラプの集落 -

ラプに振る舞われた食事を取りながら、ルークが一息つく。流石に冒険の最中であるため、酒は断った。ルークの側にはかなみと志津香、トマトとセルが座り、ランスとシル、アレキサンダーは三人で少し離れた所に座っていた。先程までランスと話していた長老が、今度はルークたちの方に近づいてくる。

「この度は真に申し訳ないことを…」

「気にしないでくれ。反撃とはいえ、こちらも手を出したんだ」

「どれよりも、スーさんはどうしてここで暮らしているんですか？」

セルの問いかけに長老が悲しそうに口を開く。

「スーは心ない人間に捨てられた捨て子だったのです。私たちがなんとかここまで育てました」

「そんな…」

「決して少なくはない話です。風の噂で聞いた話ですが、別の森でも捨てられた娘がモンスターたちと暮らしていると聞きました。そちらの森には人語を教えられるモンスターがおらず、娘は喋ることにすらままならないそうです。名前もなく、周囲からはキバ子と呼ばれているそうです」

「酷い話だね…」

「そのキバ子という娘も、何とか保護してやりたいものだが…」

「しかし、スーはやはり人間。そろそろ人間界に戻って生活をしないと…スーの幸せのためにも」

その長老の言葉に、セルが優しく応える。

「それでは、スーさんは私の教会で保護します。レッドの町の方はいい人ばかりなので、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。スーは文化というものを知らない。色々と迷惑をかけるとは思いますが、スーをお願いします」

「任せてください。ところで、スーさんは？」

セルが周囲を見回す。確かにスーの姿が見当たらない。おまけに、ランスの姿も。先程までシイルと騒いでいたはずだが、今はシイルとアレキサnderが静かに話しながら食事を取っていた。

「先程ランス様にも同じ話をしたら、スーに人間界の上流階級にも通用する文化を教えてやると、張り切って連れて行かれました。素晴らしいお方です」

「まあ、ランスさんにもようやく神の言葉が届いたんですね」

長老が嬉しそうに話し、セルも喜ぶが、それ以外の面々が一斉に立ち上がる。が、時既に遅し。笑いながらスーを引き連れて戻ってきたランス。スーの頬は赤く染まっていた。

「遅かったか…」

「スー シラナカタ アンナ オオキナ モノガ ハイル ナンテ」

「がはは、グッドだったぞ、スー！」

「ニンゲン ノ ブンカ スゴイ」

- 迷子の森 湖 -

長老にユニコーンがいるという湖の場所を教えて貰い、そこへ向かう一行。少し歩くと言われたとおり綺麗な湖に辿り着く。

「ランス様、いました。レア女の子モンスターのユニコーンです！」

「よし、捕まえて蜜を搾り取るぞ」

「待ってください、ランス様！」

そう言つて駆け出すランスだが、シイルが引き留める。

「ん？何だシイル？」

「ランス様では捕まえることは出来ません。ユニコーンは、男の人が近寄るとすぐに逃げてしまいます。物凄い速さなので、触れることも無理かと…」

「ちっ、それじゃあシイル。お前が捕まえてこい」

「…それも無理です、ランス様。ユニコーンは、乙女にしか気を許

「さないんです」

「乙女？」

「……処女の女の子です。私は……違います」

「面倒な。それじゃあこの中で処女のやつ、手を挙げろ」

ランスがそう言うのと、次々と手が挙がる。かなみ、志津香、トマト、セルの四人。なんと、この場にいる女性で処女でないのはシルだけであった。その事に驚愕するランス。

「な、な、なんだとおおお！言われてみれば、お前らの処女を奪っていないではないか！俺様ともあろう者がこれではいかん！とおおおっ！」

「粘着地面」

「んがつ！」

「さあ、馬鹿は放っておいて、私たちがユニコーンの蜜を採取しましょう」

ランスが地面にくっついていてる間に、さつさとユニコーンの蜜を回収しようと湖に近づいていく志津香たち。四人もいたため、難なくユニコーンを捕獲し、その蜜を回収することが出来た。セルが嬉しそくに話しかけてくる。

「皆さん、身持ちが堅いんですね。素晴らしい事です！」

「ああ、良い事だ」

「誰か思い人でもいるのでしょうか？」

「……どうなんだろうな」

ルークがセルの問いかけに静かに返すが、その言葉を聞いていた三人が内心想う。

「（ルークさんです、ルークさんです、ルークさんです！）」

「（あんなに判りやすいかなみさんとトマトさんに向かってそう言うの！本気で言ってるなら殺すわよ…）」

「（トマトの初めては、ルークさんに決めていますですー！）」

こうして蜜を無事に回収したルークたちは、途中村にもう一度寄って教会で保護することになったスーを連れ、レッドの町へと引き返す事となった。ランスが騒ぎ立てているが、セルが説教をしている。帰り道でルークがアレキサンダーに問いかける。

「そういえば、村での食事の時に、どうしてランスたちの方にいたんだ？」

問われたアレキサンダーは、シイルの方を見ながら静かに呟いた。

「……可憐だ」

「なん…だと…」

・リーザス城下町　うし車屋・

「で、王女は確かにそう言ったんだな」

「は、はい！ランスという冒険者に、剣と鎧を届けなきゃと…」

城下町では、うし車屋を営む店主がガーディアンに頭を握られて持ち上げられていた。いつまでも口を割らない王女と侍女の拷問とは別に、ノスの命令でこうして城下町でも情報収集を続けていたのだ。それが、遂に実る。この男は、かつてリアたちがカスタムを訪れる際に利用したうし車を運転していた男だ。その時に聞こえてき

た会話の内容を話してしまう。こうしてリアとマリスの懸命の努力が水泡と化する。

「そう、じゃあもう用はない」

「それでは命は助けて貰え…」

「ばいばい」

グシャ、という音と共に男の頭がガーディアンによって握りつぶされる。血飛沫が辺りに飛び散り、店主の首から下だけになった体が下に落ちる。頬に少しだけついた血を指で拭いながら、少女が嬉しそくに呟く。

「聖剣と聖鎧の保有者、遂に見つけたぞ。このサテラ直々に出向いてやる！」

第48話 魔人の足音（後書き）

「人物」

メルフェイス・プロムナード

LV 24 / 48

技能 魔法LV2

リーザス魔法軍副将。かつて故郷を賊から守るため、禁断の秘薬を飲み強大な魔力を手にするが、その代償として二ヶ月に一度自分より強い男に抱かれないと気が狂ってしまう呪いを受ける。今は定期的にエクスに抱いて貰っている。

スー

迷子の森でラプに育てられた少女。長老の願いもあり、セルが教会で保護することになる。セルが留守の間も町の人たちが親切にしてくれている。

「モンスター」

ユニコーン

四つ星レア女の子モンスター。迷子の森に生息し、その蜜は催眠、洗脳を立ち所に直すと言われている。汚れない乙女しか近寄ることが出来ない。

ラプ

丸い者の一種。歌を愛する妖精のような種族で、争いを好まない。捨てられたスーを育てるなど、心優しい種族である。

パワーゴリラZ

体力と力に優れたモンスター。ぶたバンバラよりも強く、ぞうバ

ンバラよりは弱い中堅モンスター。

らーめん

二つ星女の子モンスター。赤いチャイナ服が特徴的。麺類が好物で、それ以外は口にしない。

ライカンスロープ

女の子モンスター。変身を得意としており、星の数は何に変身出来るかで変わってくる。素の状態なら一つ星。

ワープリンセス

ライカンスロープの変身的一种。お姫様の格好をしており、ウルウルと涙目をお願いしながら攻撃してくる。

第49話 襲撃

・レッドの町 司令部・

「がはは！英雄の俺様が、ユニコーンの蜜を取ってきてやったぞ！」
「なんと！流石はランス殿とルーク殿！」
「お疲れ様、みんな！」

司令部に入るや否や、ユニコーンの蜜を手に入れた事を宣言するランス。バレスが感激に打ちひしがれ、マリアがみんなを労う。シルがマリアに蜜が入った瓶を手渡す。

「こちらです、マリアさん」

「ありがとう、これでレイラさんを救えるわ。早速飲ませてくるわね」

「よし、俺様も立ち会おう！」

「駄目に決まっているでしょ！」

そう言っマリアは奥の部屋へと入っていく。ルークが椅子に腰掛けると、リックが話しかけてくる。

「ルーク殿！レイラ殿救出のための蜜を取ってきていただき、感謝します！」

「俺だけの力じゃないさ。それに、礼を言うのはまだ早い。レイラさんが助かるのを確認しないと」

「ええ、上手く効けばいいのですが…」

「大丈夫よ。情報は完璧だわ」

真知子がそう言いながら、ルークの前にコーヒーの入ったコップを置く。

「お疲れ様、ルークさん。ブラックで良かったわよね？」

「ああ、ありがとう」

「ほう、ルーク殿と真知子殿はそんな事を知る間柄で？」

バレスがそう聞いた瞬間、明らかに反応した人物が数人部屋の中にいた。それに気がついたエクスは、おやおや、と声を出す。いつの間にかリーザス軍の副将が一人増えていたからだ。

「情報屋に客として出入りしていたから、その時に出されていただけさ」

「ふふ、ただのお客さんの好みなんか、いちいち覚えていないのだけれどね。大事な人だけよ」

「おー！ブラックなんて大人なのらー！」

「ん？」

コーヒーを飲むルークをキラキラとした目で見てくる少女がいる。まだ5歳にも満たないのではないか。そんな少女がなぜここに、と疑問に思うルークにエクスが説明してくる。

「紹介が遅れましたね。彼女がリーザス魔法軍の隊長、アスカです」

「アスカなのらー！よろしくだおー！」

「こんなに小さいのか？」

「彼女は少々特別だね…正確には彼女が身につけている着ぐるみが隊長なんですよ」

エクスがそう言うと同時に、アスカが被っている帽子が動く。人の顔の形をしたそれが、ルークに話しかけてくる。

「どうも、儂が隊長のチャカですじゃ。アス力は儂の曾孫に当たります」

「何？生きているの、その服！？」

「……チャカ？」

「む？お主は……」

志津香が言葉を話す着ぐるみに驚くが、ルークはその声に聞き覚えがあった。チャカもルークの顔と声を見ると、考え込んでしまう程なくして、チャカが絶叫する。

「ま、まさかルーク殿か！儂です、チャカですじゃ！魔女パンドーラを共に討った……」

「そうか！チャカという名前に聞き覚えがあったが、あの時の……」

「お懐かしゅうございます。生きていらっしゃったのですね！捜したんですぞ！」

「チャカ殿、ルーク殿と面識が？」

「ひじじ、知り合いらる？」

エクスとアス力がチャカに問いかける。チャカが昔を思い出すように目を瞑りながら、それに答える。

「うむ。10年以上前、この世を暴力が支配する世界にしようとした恐るべき魔女、パンドーラ。この者を倒す際、協力して貰ったのじゃ」

「依頼を受けた訳じゃなく、魔女と戦っている所にお節介にも割り込んだだけだな」

「いえいえ、あの時ルーク殿が来てくれていなかったら、儂は死んでいた。感謝しておりますぞ」

「それよりも、ルークを捜していたっていうのは？」

「ルークさんに何かあったんですか？」

志津香とかなみが話しに入ってくる。うむ、とチャカが答え、話を続ける。

「魔女になんとか勝利した儂らじゃったが、奴の死に際に放った魔法が強力での。儂はご覧の通り、着ぐるみの体にされてしまった。このせいでしばらく隠居していたのじゃが、最近生まれた曾孫のアス力が共に戦ってくれると言ってくれての。こうして軍に戻って来られた訳じゃ。じゃが、戻ってからこれが大変での……」

「チャカ様、貴方のお話は後で聞きます。ルークさんはどうなったのですか？」

笑顔だが、どこか恐怖を感じる表情で真知子も話しに入ってくる。子供のアス力が敏感にそれを感じ取る。

「恐いのら……」

「う、うむ。魔女の魔法をかけられたルーク殿はその場から姿を消してしまつたのじゃ。恐らく、どこかへ転移されたものと。後から駆けつけた別の仲間に儂は回収され、その後必死にルーク殿を捜したのじゃが、結局見つからなかつたのじゃ……」

「そんな事が……」

「ですが、こうして再会出来て嬉しいですよ。あの後、どこへ飛ばされていたのですかの？」

「それは……」

「みんな、お待たせ！ユニコーンの蜜はバッチリ効いたわ！」

ルークが言いあぐねる。すると、マリアが笑顔で司令部へと戻ってきた。その傍らにはレイラが立っている。若干衰弱した様子だが、特に問題はなさそうだ。部屋にいたみんなに深々と頭を下げる。

「ご迷惑おかけしました」

「レイラさん、無事で何よりです!」

「また貴女と肩を並べて戦えると思うと、嬉しい限りです」

メナドとハウレーンが声をかけて喜びを露わにする。自分の部下である親衛隊だけでなく、他の隊の女性からの人望もあるようだ。その様子を見ながら、コーヒーを飲み干してルークが席を立つ。

「それじゃあ、俺は傭兵部隊の方に行つて来る。お飾りの隊長だが、何も把握していないのはマズイからな」

「あつ、ルークさん…」

司令部を後にするルーク。その姿はまるで、先程の話題から逃げるようには見えな

・ レッドの町 傭兵部隊詰め所 ・

「それじゃあ、ジオの町の進行時もセシルとルイス、そしてアリオスが中心になつてくれ」

「了解だ。傭兵の意地を見せてやろう」

「苦しんでいる人々を救い出すために、精一杯努力させて貰う」

「けっけっけ。ルークの旦那とも一緒に戦いたいんだがねえ!」

「悪いな。極力指揮するようにはするが、どこから呼ばれるか判らないんでな」

「あのランスという男か。腕は立ちそうだが、唯我独尊を地で行きそうな男だったな」

「あの、ルークさんはいらっしやいますか?」

「ん？セルさんか」

傭兵部隊との会合を終え、少し雑談しているとセルが詰め所にやってきた。後の処理をセルたちに任せ、ルークは詰め所から出て行く。

「どうした？何か用か？」

「ルークさん、私…もう少し一緒に行動してもよろしいでしょうか？」

「それは構わないが…危険だぞ？それと、スーはどうした？」

セルの予想外の申し出に驚くルーク。彼女が争いごとを嫌っているという話を町の人から聞いていたが、そんな彼女が何故。

「スーさんは私が留守の間、町の人たちが見てくれることになりました。今は解放軍には治療部隊が足りないのでしょうか？少しでもお役に立ちたくて。それに…」

「それに？」

「ランスさんの行動には神の子として許されない事が多くあります。彼を正しい行動へと導くのが、神が私に与えられた試練なのです！」

右手をグツと握りしめ、その瞳が決意に燃える。それを見ながらルークが苦笑する。

「それは茨の道だと思っがな…」

- 夜 レッドの町 宿屋前 -

「ふうっ……」

ルークが軽く素振りを終え、宿の前にある石段に腰を下ろす。この数日の間に立て続けに出会った魔人、そして、先程のチャカとの再会で少し昔を思い出していたルークは、一人夜風に当たっていた。先程まで騒がしかった準備の音も止み、町は静寂に包まれていた。その時、宿の中から二人の人物が出てきて話しかけてくる。

「精が出るわね」

「お疲れ様です、ルーク殿」

「リック將軍とレイラさんか」

「呼び捨てで構わないですよ、ルーク殿」

「それではリックと。そちらも呼び捨てで構わないぞ」

「自分のは性分でして……」

「固いのよ、リックは。それじゃあ、私はルークって呼ばせて貰うわ」

そう言つて笑いあう三人。すると、レイラがルークに礼を言ってくる。

「ありがとうね。お陰でまだまだ親衛隊を率いることが出来るわ」

「なに、こちらとしても貴重な戦力を失う訳にはいかなからな」

「ヘルマン第3軍…そして魔人…青の部隊も未だ洗脳されたままです」

「そういえば、ルークたちが森へ行っている間にヘルマンに動きがあったわ」

「なんだと？」

ルークがレイラの顔を見る。真剣な表情でレイラが話しを続ける。

「リーザス各地に散らばっていた軍を一カ所に集めているみたい。解放軍を一気に叩くつもりらしいわ」

「ですが、各地でゲリラ的な抵抗が起こり、招集は思うように進んでいないようです」

「軍を引退したペガサスさんやアビアートルさん、フリーの女剣士ユランに天才学生カーチス、それに、来年軍に入ることが決まっている子たちも各地で反乱を起こしているみたい」

「彼らの思いに応えるためにも、負けられません」

「アビアートル…それは親衛隊に所属していたアビアートル・スカットか？」

「あら？知っているの？」

聞き覚えのある名前にルークが尋ねる。レイラが驚いたようにこちらを見てくる。

「もう10年以上会っていないがな。そうか、引退したのか…」

「10年？それじゃあアビアートルさんが私の前の親衛隊隊長だったことも知らないのかしら？」

「隊長！？そうか…彼女は夢を叶えたんだな…引退の理由は怪我か何かか？」

「寿引退よ。名前は変えてないみたいだけど、もう旦那さんがいるわ。今度リーザスに女子士官学校の校長になってくれないか、マリスさんが打診しているみたい」

「……そうか。そういう話を聞くと、時の流れを感じるな…」

「もしかして、昔アビアートルさんと？」

「さあ、どうだろうな」

フツと笑うルーク。その時少しだけ風が吹いた。薄手の鎧であるレイラが寒そうにする。

「春だつていうのにまだまだ冷えるわね。私は中へ戻るけど?」

「自分はまだルーク殿と話したいことが…」

「ああ、さっきのあれね。じゃあ、先に戻っているわ。程々にね」

呆れた顔をしながらレイラが宿に戻っていく。残されたルークがリックに問いかける。

「で、話したい事っていうのは?」

「……一度手合わせ願いたいのですが」

「侵攻戦も近いのにか?」

「軽くて構いません。臆気な記憶ですが、操られていた時のルーク殿の太刀筋が忘れられませんので…」

「ふ、まあ少しだけなら良いか。約束もしていたことだしな。ここだと邪魔だから宿の裏手に回ろう」

「おお、ありがとうございます」

リックが頭を下げ、二人は宿の裏手に回っていく。人気のない開けた場所で、二人が剣を抜く。前回の互いに全力を出していない状況とは違う、軽くとはいえ互いに手を抜く気はない。二人に緊張が走るが、その剣が交わることはなかった。すぐ近くで気配がし、同時にそちらを向いたからだ。そこに立っていたのは、全身が岩のようなもので覆われたガーディアン。頭に「EE」という数字が刻まれている。

「何者だ!?!」

「こいつは…魔人サテラが連れていたガーディアンだ!」

「なんですって!?!」

「……………」

不穏な空気で佇むガーディアンにルークが問いかける。

「何のようでここに現れた？」

「……………」

「どうやら言葉は喋れないようですね」

「そのようだな…貴様の目的は宿の中か？」

「……………」

この質問に、ガーディアンはコクリと頷く。

「なるほど、理解は出来るようだな」

「そのようですね。ルーク殿、手合わせはまた近い内という事で」

「ああ、そうするしかあるまい」

ルークとリックが抜いていた剣をガーディアンの方に向ける。宿の中が目的と言われて、おめおめ通すわけにはいかない。こちらが臨戦態勢に入ったのを理解したガーディアンは、自身も剣を抜き、超スピードでルークとリックに迫ってきた。

・レッドの町 宿屋表玄関・

「き、貴様ら何者だ！？ぐああああ！！」

静けさを打ち破る悲鳴。同時に宿の玄関が破壊され、二人組が中へ進入してくる。いち早く駆けつけた警備隊は、ことごとく侵入者に打ち倒されていった。宿の中で休んでいたバレスに報告がいき、大急ぎで廊下に飛び出る。先程宿に戻ってきていたレイラと、ドッチ、サカナク、ジブルの三人が既に廊下には立っていた。

「どこだ、乱入してきた不届き者は！」

「はっ、一階を壊滅させ、こちらに上がってきていると思われます」

「一階を壊滅だと！？白の軍と魔法軍の隊長格が寝ていたんじゃ…」

「！？来ました！」

ジブルの叫びに、一斉に階段の方を向く。赤い髪の女が、ガーディアンを引き連れて階段を上ってくる。バレスたちを発見するとため息をつく。

「また雑魚だ。お前らに用はない。さつさとランスを出せ」

「何者だ。この宿はリーザス解放軍の詰め所も兼ねている。それを知つての狼藉か！」

「当然だろう。このサテラ直々に聖剣をいただきに来たのだ。ランスが持っているのはもう判っているんだ。そこをどけ！」

そう宣言するサテラに対し、バレスが剣を抜く。他の四人も剣を抜き、臨戦態勢に入る。

「そういう輩に、ここを通す訳にはいかぬわ！」

「我らの剣の錆にしてくれる！」

「きやははは！人間ごときがこのサテラに勝てるっても？さつき一階でも威勢良く掛かってきたメガネとかいたけど、全く相手にならなかったぞ」

「エクス將軍！？となると、一階の者は本当に…」

「ハウレーン…くっ！かかれ！！」

バレスの号令と共に三人の副将が飛びかかる。ガーディアンに対し剣を振るおうとするが、その剣が届く前にガーディアンが持っていた長剣に叩き伏せられる。

「ぐあっ!!」

「ドッヂ!ぬっ、ぐあああ!」

「うぐわっ!」

「よそ見してる場合か?馬鹿」

サテラが鞭を振り回し、サカナクとジブルを同時に倒す。三人ともリーザス軍の中では紛れもない精鋭。その三人が十秒と持たず倒れる。幸い息はあるようだが、気絶してしまっている。

「弱い、弱すぎるぞ。なあ、シーザー!」

「ハイ、サテラ様」

「うぬっ、おのれ!」

「今度は私たちが相手よ!」

そう言っただけでバレスとレイラが飛びかかる。長剣を振るうシーザーだが、バレスはそれを躲し、その体に剣を振るう。剣はその体を確実に命中したが、あまりの硬さに傷一つ付いていない。

「うぐ、なんて硬さ!」

「バレス様!危ない!」

あまりの硬さに怯んでいるバレスの体に、シーザーが振るった長剣が命中する。斬られたというよりも、そのパワーで吹き飛ばされる形となったバレスは、壁に叩きつけられる。

「うぐあっ...不覚...」

「くっ...やっ!!」

レイラが剣を振るうが、シーザーはまるで避ける気がない。全て命中するが、相手の体には傷一つ付かず、レイラの手が痺れるだけ。

「こんなの…どうすれば…」

「そつだ、絶望しろ！人間ごときが勝てる訳ないだろ！」

サテラの鞭が連続で振るわれ、レイラも崩れ落ちる。高笑いを浮かべるサテラだが、一つ気に掛かる事があつた。

「裏口から回ったイシスは何をやってるんだ？」

「判リマセン」

「まあいい、行くぞ！」

そう言つて宿の奥へと進んでいくサテラとシーザー。部屋の前を横切つた時、突如扉が開け放たれミリとラン、かなみとメナドが飛び出してくる。シーザーの脇腹に剣が突き立てられる。

「おらよっ！」

「はっ！」

「ムッ…」

奇襲を受けたシーザーだが、先程まで同様全くダメージを受けていない。ミリが舌打ちをし、ランとメナドの目が見開かれる。

「化け物め…」

「お前ら人間が貧弱すぎるだけだ。やれ、シーザー！」

「ハイ、サテラ様。フン！」

「うわあああつ！」

剣を突き立てていた四人を長剣で横薙ぎにする。その驚異的なパワーに、一度に四人とも吹き飛ばされる。ランとメナドは気を失い、かなみとミリは意識はあるが立ち上がることが出来ない。その二人

を見下しながら、サテラが更に奥へと進んでいく。角を曲がり、最奥の部屋の扉を開けた瞬間サテラの体を光が包む。

「白色破壊光線――！」

ラギスを打ち破った志津香の最強魔法がサテラとシーザーを飲み込む。扉の向こうで白色破壊光線の準備をしていた志津香は、扉が開けられると同時にそれを放ったのだ。少しでもダメージを与えられればと考えていた志津香だったが、光が晴れ、出てきたのは無傷のサテラであった。これが魔人の持つ能力、無敵結界。神や悪魔などの攻撃以外は全て無効化するこの結界を前にしては、解放軍はあまりにも無力であった。シーザーもサテラの後ろに立ち、結界の恩恵を受けて無傷でやり過ごしていた。

「そんな魔法じゃサテラには効かないぞ？ もっと強い魔法を撃つたらどうだ？」

「……くっ」

「きやははは、もしかしたら今のが最強の魔法か？ やはり人間は情けないな。じゃあ、今度はサテラから行くぞ！」

そう言っただけで鞭を振るうサテラ。その鞭に軽く吹き飛ばされ、志津香は気絶してしまう。

「この奥だな！」

サテラが部屋の奥の扉を開け放つ。中は寝室になっており、ランス、シイル、マリアの三人がいた。魔人の襲撃をマリアはランスの部屋まで報告に来ていたのだ。

「もうここまで……それじゃあみんなは……」

「馬鹿者！俺様に抱いて貰いたいんだったら、もつとおとなしく偲んでこい！」

「まさか、あの時の馬鹿が聖剣の保有者とは思わなかったぞ。痛い目に会いたくなかったら、さっさとサテラに聖装備を全て寄越せ！」

「ランス様……」

「ふん、誰が渡すか！どうしても欲しいなら一発やらして貰おうか！」

そのランスの言葉にサテラが笑い出す。

「きやははは、勘違いするな。サテラはお願いしているんじゃない。命令しているんだ。早く渡せ」

「ふん、俺様の所有物を盗もうなど百年早いわ！」

「どうやら馬鹿には力で教えるしかなさそうだな。シーザー、行くぞ！」

「ファイヤーレーザー！」

向かってくるサテラに向けてシルがファイヤーレーザーを放つ。しかし、無敵結界に阻まれ、ダメージを与えることが出来ない。シーザーが拳を振るい、側にいたマリアが吹き飛ばされる。

「きゃあああつ！」

「マリア！ええい、貴様！」

ランスが剣を抜き、高く飛び上がって剣を振り下ろす。

「必殺、ランスアタアアック！！」

「ふん」

サテラがシーザーの前に立つ。ランスアタックはサテラを直撃す

るが、シイルと同様に結界に阻まれ、傷一つ与えられない。

「な、なんだとおおー！」

「弱いのにサテラに歯向かうから痛い目に会うんだ。はあっ！」

「あんぎやああああ！」

サテラの鞭がランスを襲う。無防備な状態で直撃を受けたランスの体が崩れ落ちる。そのランスを見下ろしながら、部屋の中にあつた盾を手取る。

「これが聖盾だな、貰っていくぞ。聖剣と聖鎧はどこだ？」

「……」

「まあいい。サテラに隠し事は通用しないからな。シーザー！」

「きやあああ、ランス様！」

「シ、シイル！」

シイルがシーザーに一撃を受け、気絶させられる。そのシイルを左腕に抱えたシーザー。サテラがその肩に乗り、ランスに宣言をする。

「この女を返して欲しければ、聖剣と聖鎧を持ってハイパービルまで来い！交換だ！」

「なんだと！」

「早く来なければこの女の命はないぞ。サテラは待つのが嫌いだからな。じゃあな」

そう言つて窓をぶち破り、サテラとシーザーはシイルを連れ去つてしまふ。宿の中の者は皆傷つき、後を追える者はいなかった。

・レッドの町 宿屋裏口・

「はあっ！」

「ふんっ！」

「……！」

ルークとリックの猛攻を、イシスが両手に持った二刀で受けきる。と思えば、今度はイシスが二人に高速の剣を振るう。本来動きの遅いものが多いガーディアンだが、目の前のイシスは二人のスピードと互角。その上耐久力も高く、何度か体に命中させたが傷ついた様子はない。宿の中の騒ぎは聞こえていた。だが、イシスの足止めで精一杯であった二人は駆けつけられない。下手に動けばイシスも宿に侵入し、事態が悪化しかねない。

「宿の中では何が……」

「みんなを信じるしかあるまい。リック、一瞬気を引いてくれ」

「了解です」

ルークが剣を両手で握り直し、リックがイシスに向かって再度猛攻をかける。それを受けきるイシス。この場にいた三人、その全てが達人であった。リックの猛攻が止んだと思い、イシスが反撃に出ようとするが、ルークが飛びかかってくる。

「真滅斬！」

「……！」

剣でのガードが間に合わず、左腕で受けるイシス。しかし、その腕を切り落とすことは出来なかった。驚異的な耐久力。その時、真上の部屋の窓が割れ、そこから何者かが飛び出してくる。

「イシス、何を遊んでいる。行くぞ！」

「……」

「あれは…魔人サテラ！」

「ルーク殿、あのガーディアンが抱えているのはシイル殿です！」

「何！待て、サテラ！」

「きやははは、人間の言うことなど誰が聞くか！サテラはハイパービルで待つ！聖剣と聖鎧を早く持って来ないと、この女は殺すからな！」

そう言つてサテラたちは去っていく。イシスもその後を追ひ、残されたのはルークとリックのみ。サテラたちの去るスピードはあまりにも速く、ルークたちでは追うことは出来なかった。

「シイル殿が攫われた…」

「こいつは…まずいことになったな…」

ジオの町侵攻戦を目前に控え起きた不足の事態。魔人が遂にその牙を剥いた。サテラは聖盾を持っていた。シイルと聖盾を取り返す必要がある。だが、立ちふさがるのは魔人。ガーディアン一体倒せない現状で勝ち目はあるのかと、ルークは拳を握りしめていた。

- 街道 -

「きやははは、やっぱり人間なんかサテラたちの相手じゃないな！」

ハイパービルに向かい、闇の中を走るシーザーとイシス。サテラはシーザーの肩に乗りながら笑っていた。ふとイシスの方を見る。

「イシス、何あんな奴らに足止めされて…おい、その左腕どうしたんだ！」

「……」

「動かないのか？」

「……」

コクリと頷くイシスにサテラが驚愕する。

「そんな馬鹿な…人間ごときがイシスの装甲を破ったとでも言うのか…」

「信ジラレマセン、サテラ様」

「イシス、ビルに到着したら可能な限り修復してやるからな。ん、何で左腕が動かないのに嬉しそうなんだ？」

「……」

「サテラ様、イシスハアノ二人トノ戦闘ガ楽シカッタヨウデス」

「馬鹿！そんな油断しているから怪我するんだ。さっさとハイパービルに行くぞ！」

言い合いながら、魔人サテラたちは夜の闇に消えていった。

第49話 襲撃（後書き）

「人物」

レイラ・グレクニー

LV 34 / 52

技能 剣戦闘LV1 盾防御LV1

リーザス親衛隊隊長。親衛隊とは女性だけで構成された女王直属の部隊で、地位は四色の將軍たちと変わらない。リーザスではリツクに次ぐ剣の腕であり、周りにもよく気が利くため隊内外問わず信頼は厚い。

アスカ・カドミウム

LV 39 / 44

技能 魔法LV2

リーザス親衛軍隊長。アスカはまだ幼い少女であり、実際には彼女が身につけている着ぐるみのチャカが隊長である。レベルや技能もチャカのもの。かつてはゼスからもスカウトが来るほどの魔法使いであったが、魔女パンドーラの死に際に放った魔法で着ぐるみにされてしまう。ルークとは共にパンドーラを倒した間柄。

パンドーラ（半オリ）

LV 40 / 45

技能 魔法LV2

かつてルークとチャカが協力して倒した魔女。エターナルヒーローと死闘を繰り広げた魔女、エイナの末裔。七色の風を操り、変幻自在の攻撃を仕掛けてくる。この世を暴力が支配するものにしようと思っていたが、その野望は破られる。死に際に放った魔法でルークのある場所へ飛ばし、チャカを着ぐるみにしてしまう。名前はノベル版ランス「極寒のパンドーラ」より。

サテラ

LV 100 / 105

技能 魔法LV2 ガーディアンLV2

ホーネット派に属する人間の魔人。ホーネットの遊び相手として連れてこられた少女で、ガイの手により魔人になる。ホーネットとは幼なじみでもあり、親友。ガーディアン製作能力に長けており、その強さは驚異的。但し、彼女自身は生まれてからの期間や実力から、魔人の中では下位に位置している。

シーザー

LV 0 / 0

技能 剣戦闘LV1

サテラに作られたガーディアン。250cmの大剣から繰り出されるパワーと頑丈な体でサテラを警護する。その実力は主であるサテラとも互角である。片言であるが言葉を話せ、自我もある。サテラが最もお気に入りになっているガーディアン。

イシス

LV 0 / 0

技能 剣戦闘LV1

サテラに作られたガーディアン。実力ではシーザーに劣るが、パワー型のシーザーに対し、イシスはスピード型。並の人間ではそのスピードについてくることすら出来ない。サテラが手抜きをしたため、言葉を話すことは出来ない。

「技能」

ガーディアン

ガーディアンを製作する能力。レベルが高ければ、魔人と同等の

力を持ったガーディアンを作り出すことさえ可能にする。

「アイテム」

ユニコーンの蜜

催眠、洗脳などの状態異常を治療する秘薬。レア女子モンスターユニコーンの愛液。

第50話 セルの切り札

- 翌朝 レッドの町 宿屋 -

「ええい、これだけ揃っておきながらあつという間に負けるとは、使えん奴らだ!!」

「面目ありません、ランス殿…」

宿にランスの怒声が響き渡り、バレスが頭を下げる。その様子を見ながらハウレーンが悔しそうに唇を噛む。サテラが去った後、駆けつけたセルの治療により、宿にいた者は何とか動けるまでには回復していた。奇跡的にも死亡者は0。遊ばれていたという事だろうか。

「あれが魔人の力なのね。強すぎるわ…」

「ぼくたちに…勝ち目はあるのかな…」

かなみとメナドがそう言葉を漏らす。普段であればその弱気な態度に他のリーザス兵が渴を入れているところだろうが、全員が魔人の強さをまざまざと見せつけられた直後。誰もメナドの言葉を否定できず、場の空気が一層暗くなる。と、そのメナドの肩に手を乗せながら、ルークが口を開く。

「勝てるさ、いや、勝たなきゃいけない」

「肝心なときにいなかったくせに何を偉そうに!」

「馬鹿、ルークとリックさんは外でガーディアンを一体足止めしてくれていたんでしょ!」

「我らが為す術なく敗れたガーディアンと同種の者を、たった二人

で足止めするとは…」

ランスがルークに文句を言うが、志津香がその言葉に反論する。
だが、リックがランスに向かって頭を下げる。

「いえ、肝心なときに駆けつけられなかったのは事実です。申し訳
ありません、ランス殿」

「ふん！」

「で、どうするの？ シイルちゃんは攫われちゃったし…やっぱり聖
剣と聖鎧を見つけて返して貰うしか…」

「馬鹿言え！ 誰があんな女の言うことを聞くか。これからハイパー
ビルに向かい、力尽くでシイルを奪い返す！」

「そんな、無茶よ！」

マリアの提案を切り捨て、魔人を倒すと宣言するランス。その言
葉に周囲がざわつく。

「俺様を誰だと思っている。空前絶後の超英雄、ランス様だぞ！ 魔
人なんぞクス同然だ」

「負けたくせに」

「あれは不意を突かれた上に、寝ぼけていたから負けただけだ！ 正
々堂々戦えば俺様の圧勝に決まっている！」

「しかしランス殿！ ジオの町への侵攻はどうするつもりで？」

「もたもたしていたのでは、各地から敵が集結してきます」

「今がチャンスなのです！」

黒の三副将が次々と進言してくる。ランスが言い返そうとするが、
その前にルークが口を開く。

「いや、今は魔人サテラが優先だ。奪われた聖盾は魔人討伐に必須

のもの。今ならサテラが持っていることが判っているから取り返し
やすいが、もし時間をかけている間に他の魔人と合流され聖盾を手
渡されたら、誰が持っているのか判らなくなり、取り返すのは困難
になる」

「それに、兵を指揮する私たちがこんな状態では、ジオに攻め込ん
でも苦戦は必死だわ」

レイラの言うように、セルの治療で動けるようにはなったものの、
全員完治とまではいつていない。今なおセルとロゼが治療を続けて
いるのだ。

「そしてこれが一番の理由だが、シイルちゃんを放っておくわけに
はいかない！」

「シイルは俺様の奴隷だ。人の所有物に手を出しやがって…ただの
お仕置きでは済まさんぞ！」

「そうね…シイルちゃんを無事に取り返さないと！」

「エクス、リスの手がかりは掴めたか？」

ルークが以前頼んでおいた事をエクスに尋ねる。

「何だ？リスの手がかりなんて知ってどうする？」

「聖剣と聖鎧を持つていなければ会っても貰えない可能性があるか
らな。下手するとシイルちゃんの命も危ない。それでエクス、どう
なんだ？」

「リスの手がかりも聖剣と聖鎧の隠し場所も掴めていません。です
が、一っだけ気になる事が…」

「気になる事？」

「自分を元はリスだと名乗る青年が見つかりました。一応言いくる
めてこちらで保護しています。お会いになれますか？」

「元リスと名乗る人間？判った、案内してくれ」

・レッドの町 白の軍詰め所・

エクスに案内されて白の軍の詰め所までやってくるルークとランス、かなみと志津香の四人。エクスが部下に指示を出し、少し待っているとお奥から白髪の青年が連れてこられた。こちらに気がつくと、青年は嬉しそうに駆け寄ってくる。

「ランスとルークだ！久しぶり！」

「誰だ？俺様のファンか？男のファンなぞいらんぞ」

「ランス、僕だよ。リスだよ」

「……？」

「ほら、人間になったんだ。ランスの言ったとおり、気合いと根性があれば何でも出来るんだね！」

「なっ！まさか、本当にあのリスか！？」

「信じられない……」

ルークとかなみが同時に驚く。ランスの適当な言葉を真に受けて旅立ったリスが、まさかこの短期間で本当に人間になって戻ってくるとは思わなかったからだ。あの場になかった志津香は話しの流れが判らず、不思議そうにしている。

「大変だったけど、ローラへの愛が僕を支えてくれたんだ！もう誰も僕たちの愛を邪魔することは出来ない！」

「ローラ……そうだ、貴様の女のせいで大変な事になっているんだ！責任を取れ！」

「ローラが何かしたの？」

「まあ、お前から説得して貰えるか。ローラのいる所まで案内しよ

う」

「やったー！ずっとローラに会いたかったんだ！」

無邪気に喜ぶリス。ルークがエクスに礼を言い、詰め所を後にする。一行はリスを引き連れて、うし車に乗りラジールの町へと向かう。

・ラジールの町 酒場・

酒場では相も変わらずローラがミルクセーキで飲んだくれていた。町から出ないようにアムロとレイリイからの命令で見張っている男も、いい加減飽きてきていた。その男に一声かけつつ、ルークたちは酒場の中へ入っていく。こちらに気がついたローラがギロリと睨んできた。

「何よ！何度来たって聖剣と聖鎧は…」

「ローラ！やっと会えた！」

「…えっ？」

「僕だよ、リスだ！君と暮らすため人間になったんだ！」

「えっ…そんな…嘘よ…だって、リスは死んだんじゃ…」

動揺しながらルークの方を見てくる。

「だから勘違いだって言っていただろ」

「死んでないし、嘘でもないよ、ローラ。何を話せば信用して貰えるかな？君との出会い？両親に反対されたときの言葉？何でも聞いてくれ！」

「ほ…本当にリスなの…リス！」

そう言つて二人は抱き合い、熱いキスを交わす。泣きじゃくるローラに、これからはずっと側にいるよと囁くリス。完全に二人だけの世界を作り出していた。かなみはその様子を羨ましそうに見ている。ランスがいらいしながら口を開く。

「って、そんな事は後でやれ！どうだ、リスを目の前に連れてきてやったんだ、盗んでいた物を返して貰おうか！」

「ローラ、何か盗んだりしたのか？」

「そんな事してないわ。何の事かしら。はい、預かっていたこの聖剣と聖鎧は返しますね」

とぼけながらテーブルの下から聖剣と聖鎧を出してくるローラ。ランスがそれを受け取るのを見ながら、ルークがぼつりと呟く。

「灯台もと暗しとは言うが…白の軍はあれを発見できなかったのか…」

「何言つてるのよ、ルークだって彼女と酒場で会ったとき発見できなかったんでしょ」

「……どうだったかな？」

志津香の言葉にとぼけながら頭を掻くルーク。何はともあれ聖剣と聖鎧を遂に取り返したルークたち。また二人だけの空間を作り出しているリスたちをそのままにし、レッドの町へと引き返す。目指すはレッドの町の側に立つ、ハイパービル。

- ハイパービル 入り口 -

ただ高さのみを追求した謎の巨大建造物、ハイパービル。いつ誰が建てたのかも判っていないビルだ。ここで魔人サテラが待っている。先程までの四人に、今はセルが加わっている。レッドの町に一度寄った際、ついて来たのだ。リーザス兵は傷ついた軍の状況を再確認するのに忙しく、ついて来ていない。あの状況でヘルマンに攻め込まれたらまずいため、あちらも早急に立て直す必要があるのだ。

「だがセルさん。どうして一緒に？」

「……もしかしたら、魔人相手に私の力がお役に立つかもしれませんが。治療はロゼさんがやってくれるとの事でしたので、お邪魔になつてしまうかもしれませんが同行させて貰います」

「いや、シイルちゃんがいなくて回復にも困っていたところだ。頼りにしている」

「さあ、ビルに入るぞ！」

ランスが先頭を歩き、ビルの中に入っていく。ルークたちもその後を追うが、その背中を追いながらかなみがランスに尋ねる。

「ランス…聖剣と聖鎧を、サテラに渡すの…？」

「かなみ、お前は渡した方がいいと思うか？」

「それは……」

珍しくランスが意見を問う。困った様子のかなみ。彼女の立場からすると難しいところだろう。シイルのことは心配だが、聖装備はリーザス奪還の為に必要不可欠なものだからだ。代わりにセルが答える。

「人の命は何物にも代えられません。まずは聖剣と聖鎧を渡して、シイルさんを解放して貰うべきです」

「……そうですね。ランス、ひとまず聖剣と聖鎧は……」

セルの言葉に考え込んでいたかなみも同意する。ランスにそう言おうとするが、ランスの笑い声に阻まれる。

「がはは、どちらかというせこい考えをする必要はない。欲しい物は全ていただくのが俺様のやり方だ！聖装備もシイルも全て俺様の物、どれも渡す必要なんて無い！」

「ふ、お前ならそう言うと思っていたよ」

「でもランス、サテラの逆鱗に触れたらシイルちゃんがどんな目にあうか…」

志津香の言葉にランスが一言だけ返す。

「シイルに手を出したら…殺す」

確かな殺気を含んだその言葉に、かなみの背中を一筋の汗が伝うのだった。

- ハイパービル 1階 第一エレベーター前 -

ビルの中に入り、少し進んだところにあるエレベーターの前までやってきたルークたち。そこにサテラの姿はなく、代わりにサテラのガーディアンであるシーザーとイシスが立っていた。こちらの姿を見るとシーザーが話しかけてくる。

「ランスダナ。聖剣ト聖鎧、持ッテキタカ」

「がはは、知らんな！」

「サテラ様ハ201階デ待ッ。聖剣ト交換デ、コノエレベーターヲ

動カスIDカードを、聖鎧ト交換デ女ヲ返シテヤル」

「手の込んだことで」

「持ッテイナイナラ用ハナイ。出直シテ来イ」

そう言ッてエレベーターの前から動かないシーザー。イシスは喋れないため、黙ッて横に立ッたままだが、何故かルークの方をジッとしてきていた。一度この場を離れ、作戦会議をする。

「どうする？201階など上ッてられんぞ」

「確か奥にもう一台エレベーターがあッたはず。50階くらいまでしかいけないが…」

「そこからはどうするつもり？」

「……歩くか？」

「イヤに決まッているだろ！何とかIDカードを手に入れる手段はないのか！？」

「確か55階にこのビルの管理コンピュータがあッたはずだ。それに頼めば…」

「じゃあ、とりあえず55階を目指しましょう」

- ハイパービル 55階 制御室 -

第二エレベーターで50階まで上がり、その後階段で55階まで上ッてきたルークたち。その階は巨大な制御室になっており、所々にコンピュータが置かれていた。その一番奥のコンピュータがルークたちに話しかけてくる。

「オハヨウゴザイマス ワタシハ ハイパービル セイギョコンピュータ エロヤツクALV」

「誰だ？変な声で話すのは」

「コンピュータが喋っているのよ」

「すごいわね。マリアが見たら大喜びするわ」

「オマエタチハ デバツガー チガウノカ？ ワタシハ 322ネ

ンカン デバツガー マツテイル」

「デバツガー？悪いが違うな」

「ソウカ ザンネンダ 56カイニイル バグヲ タオシテ モ

ライタカツタ ノダガ」

「…それを倒したら頼みを聞いてくれないか？第一エレベーターを
使いたいんだ」

「ソナナコト オヤスイ ゴヨウダ デハ タノンダゾ」

そう言い残しエロヤツクALVの声が止む。エレベーターを動か
す手段が見つかったため、ルークたちはバグを倒すべく上の階に上
っていった。

- ハイパービル 201階 -

「離してください」

「うるさいな。少しは静かにしろ。まったく…」

サテラが退屈そうにしながら、ランスが現れるのを待っている。

部屋の奥ではシイルが縄で縛られており、身動きが取れないでいる。

「ランス様…シイルは必ず来てくださると信じています…」

「ふん。ランスが聖剣と聖鎧を持ってきたら纏めて殺してやるから
な」

「えっ…そんな…」

「あはは。人間なんかとの約束など、サテラが守るはずないだろう？」

そう笑いながら、サテラは足下をうるちよろしていたバグを踏みつぶす。

「みぎゃー！」

「それにしてもこのビルはバグが多いな。覚えておけばいつか何かの役に……立つ訳ないか。それにしても暇だ。1階にシーザーとイシス、両方を置いてきたのは失敗だったな」

ぶつぶつ言いながら待つサテラ。シイルはサテラの言葉にその表情が曇る。

「（ランス様……魔人は約束を守る気はありません……どうかお気を付けて……）」

- ハイパービル 1階 -

「……」

「ン？ドウシタ、イシス」

エレベーターの前で立っていたシーザーだが、イシスが肩を叩いてくる。そのままイシスがエレベーターの方を指さす。

「……ドウイウ事ダ。エレベーターが動イテイル！マサカ、人間共力！」

IDカードがないと動かせないはずのエレベーターが動いている。
不測の事態に主の身が心配になる。

・ハイパービル 第一エレベーター内・

「がはは！バグなんぞ俺様の手に掛かったらただの雑魚モンスターだ！」

「何言ってるのよ、結構苦戦したくせに」

「バグって強いんですね……」

「みなさん、大丈夫ですか？」

「素早い割に、攻撃力もあるからな。セルさんがついてきてくれていてよかったよ」

エレベーター内でセルが全員を回復しながら、ルークたちは201階を目指していた。56階に大量発生していたバグを倒し、エロヤックALVにエレベーターの使用許可を貰ったのだ。程なくしてエレベーターが200階に到着する。一気に201階まで上がり、目の前にサテラがいたら準備もないまま戦うことになるからだ。200階で戦い方について話し合うルークたち。

「それで、どうするの？何か作戦は？」

「当然、俺様の圧倒的な強さで叩き伏せるだけだ！そして倒した後
は……ぐふふ……」

「正気？あれだけ惨敗しておいて」

「……とりあえずフェリスを呼び出すか。勝てる可能性もこれ
少しは……」

「待ってください」

フェリスを呼び出そうとするルークをセルが止める。

「私が……何とか出来るかもしれません」

セルのその言葉に全員が一斉にセルを見る。そのままセルの作戦を聞き、ルーク以外の全員が即座に賛成する。ルークは一瞬複雑な顔をしたが、最終的には賛成し、ルークたちは201階に上っていく。しかし、ルークたちは気がついていなかった。第一エレベーターが1階に向けて動き出していたことを。更なる驚異となるガーディアン二体が、迫ってきていることを。

- ハイパービル 201階 -

「ふあ、なんだか眠くなってきたな……」

「あの……トランプでもしますか？」

「おっ！……馬鹿言っな！なんでサテラが人間なんかと遊ばなきゃいけない！」

サテラが201階で暇を持て余している。シイルは部屋の隅で縛られたままだ。眠そうにしているサテラにシイルが提案をすると、一瞬嬉しそうな顔をしたサテラだが、すぐに怒鳴ってくる。その時、部屋の入り口から一人の男が現れる。

「がはは！スーパー英雄のランス様、参上！」

「ランス様！」

「えっ！どうしてここに……シーザーとイシスが見張っていたはずだが？」

「ふん、あんな奴ら俺様の相手ではなかったわ！軽く捻り潰してや

ったわ！」

その言葉にサテラの目が見開かれる。

「ばかな！人間如きにシーザーとイシスが負けるはずない！」

「弱すぎて相手にもならなかったぞ。さあ、次はお前だ！軽く叩きのめしてやる」

「シーザーとイシスを侮辱するな！殺してやる！」

サテラが鬼の形相でランスに迫る。それを見るとランスが部屋から出て行く。

「待て、逃げる気か！八つ裂きにしてやる！」

「がはは、鬼さんこちら、手の鳴る方へ！」

「ば、馬鹿にするな！」

サテラが怒り狂いランスを追う。ランスがとある部屋に入っているのを見たサテラは、そのままの勢いで扉をぶち破り部屋に入る。そのまま部屋の奥にいたランス目がけて飛びかかるが、ランスがニヤリと笑う。

「馬鹿め、罠に掛かったな！」

「え？」

瞬間、サテラは気がつく。部屋の四方に結界志木と呼ばれる金属が立っていること、それぞれにルーク、かなみ、志津香、セルが側に立っていること、そして、自分が部屋のことにあること。ルークが叫ぶ。

「セルさん、今だ！」

「はい！ワルヤテジ閉テシ間空ノ遠永カンナ物魔イ悪…魔封印結界！」

セルがそう叫ぶと、四方の結界志木から強力な魔力が部屋の中にいたサテラに放たれる。それを受けたサテラは、無敵結界のお陰でダメージこそないが、身動きが取れなくなる。

「し…しまった…いきや…」

「がはは、そのまま永遠に封じられてしまえ！俺様の命令に聞くらしい従順になつたら出してやつてもいいがな！」

これがセルの使うことの出来る最強魔法、魔封印結界。準備や発動条件が厳しいため、実戦では中々役に立つ機会は少ないが、対象を永遠の空間と呼ばれる異次元に封じる恐るべき魔法だ。倒すことは出来ないが、セルが許可しなければいくら魔人のサテラでも二度とこちらの世界には戻ってこられない。サテラの表情が恐怖に歪む。

「い…やだっ…サテラ、封じられたくない…」

「……」

「まだ……ホーネット様の…ホーネットの役に立っていない…こんなところで……」

「！？セルさん、やはり魔法を止める！」

「……！！」

魔法を止めさせようとしたルークだが、それとほぼ同時に部屋の中にイシスが飛び込んでくる。そのままサテラを突き飛ばし、自ら身代わりに結界の中心へと入っていった。

「イ、イシス……」

「なっ！自分から飛び込むなんて……」

無理矢理結界の中に入ってしまったイシスは、魔力の暴走をその体に受け、体が消滅していく。崩れゆく体で、ルークの方を見てくる。言葉は発せず、表情も判らないガーディアン。だが、ルークにはどこか物悲しそうに見えた。先の決着をつけられなかったことを悲しんでいるのだろうか。が、その体が完全に消滅しきる前に魔法が止まる。セルが先程のルークの叫びに反応し、途中で魔法を中断していたのだ。頭部だけになったイシスが床に落ちる。

「イ、イシスう…貴様らよくも！」

「がはは、予定は狂ったが十分消耗したな。覚悟するんだな！」

サテラがふらつく体でイシスに近寄っていき、その頭部を大事に抱える。ランスが剣先を向けるが、イシスに遅れてシーザーが部屋に飛び込んでくる。一直線にサテラに近寄っていき、進言する。

「サテラ様、ココハ撤退ヲ！サテラ様ハ消耗シテイマス！」

「くっ…こいつらを八つ裂きにしてやりたいが、早くイシスを修復してやらないと…」

「な、そのガーディアンまだ生きているの！」

「頭さえ無事なら修復は可能だ。だがこの恨みは忘れないぞ！次に会うときは覚悟しろ！」

頭部だけになってもまだ生きていることになんか驚愕する。部屋の中にいた全員を睨みながら、サテラはシーザーに担がれる。

「ランスさん、ルークさん、魔の物を逃がしてはなりません！」

「待て！お前に聞きたいことが…」

「えーい、まだその体を味わっていないんだ！勝手に逃げるな！」

ルークとランスが叫ぶが、シーザーは壁を破壊しサテラを抱えてビルから飛び降りる。ルークがその壁に近づくが、その姿はすでにどこにも見当たらなかった。志津香が顔を歪める。

「くっ…もう一息だったのに…」

「ランス、とにかくシルちゃんと聖盾を！」

「ああ、勝手に攫われたんだ。たっぷりとお仕置きしてやらんとな！」

そう言つて奥の部屋へ駆けていくランスたち。程なくしてシルが無事であった安堵の声や、聖盾を取り返し、聖装備が遂に全て揃った歓喜の声が聞こえてきた。だが、ルークはシーザーが破壊した壁の前に立ち尽くしながら、拳を握りしめていた。

「サテラ…やはりお前はホーネット派なんだな。ならば、何故こんな事をしている……」

- ハイパービル近辺 街道 -

「むかつく、むかつく、むかつく！奴ら絶対八つ裂きにしてやる！」

「サテラ様、アマリ暴レルト体二触リマス」

「くそっ！とりあえずジオの町に向かつてくれ。今あそこにはあいつがいるはずだ。イシスを修復するには魔人界に戻る必要があるな…イシス、この戦争が終わるまでちょっとだけ我慢していてくれ…」

抱えているイシスの頭部に話しかけるサテラ。イシスも無言ではあるが意識はあるようで、少しだけ反応したように見える。

「サテラ様、今度八言語機能モチャント付ケテアゲテ下サイ」

「ん、そうだな。だがここまでボロボロにされるとは…イシス復活まで何年かかるかな…ああ、むかつく！」

サテラのガーディアンは驚異的な強さだが、職人氣質であるサテラは、納得のいかないガーディアンは途中で次々と壊してしまうため、一体作るのに長い年月が掛かる。その貴重なガーディアンを大破させられた事に、また怒りが再燃する。

「ソレト……」

「ん？」

「今度八寝ボケテ男性器ヲ付ケナイデアゲテ下サイ」

「ああ、判っている。イシスは女の子だからな」

「……」

魔人の中でも知っている者の少ない驚愕の真実をさらりと話しながら、シーザーはジオの町に向けて駆けていくのだった。ルークたちは遂に聖装備を全て揃える事が出来た。だが、この一件で侵攻が遅れている隙に、ジオの町にはヘルマン各地から部隊が集結していた。

・ジオの町 ヘルマン司令部・

「いよいよ明後日、リーザス反乱軍に殲滅戦を仕掛ける！」

司令部には各地の部隊を纏めていた司令官が集まっていた。まだ到着していない司令官が数人いたが、部屋にいる者はみな強者の空

気を纏っていた。その中でも一際強烈な空気を纏う男、部屋の中央で先程から声を荒げている男。この男こそ、ヘルマン第3軍総司令官にして、人類最強の男という呼び名で大陸にその名を轟かしている、トーマ・リプトン将軍だ。

「作戦は昼の会議で話した通りだ！戦力的には我が軍の圧倒、計画通りに戦えば負ける事はない！」

「はっ！」

「各部隊、準備は進んでいるか！」

「ガイヤス隊2000、いつでも出発できます！」

「我がダルム隊2000も準備万端でございます！」

「シルビア隊1000、士気も高くいつでもいけます！」

「デストラー隊は、魔物の部隊10000を率いて、いつでも出撃可能です」

「ナビオ隊1000もいつでも大丈夫です。先陣は是非私に……」

「ナビオ、貴様のふぬけ隊に先陣など勤まるか。トーマ将軍、先陣はこのダルムにお任せを……」

「静かにしろ！先陣はデストラー隊に決定したはずだ！」

トーマが二人の司令官に一括する。デストラーが薄く笑いながら一歩前にでる。

「はっ！我が部隊だけでも十分撃破可能です。なんなら明日にでも出陣しても構いませんか？」

「全部隊揃ったの出撃というパットン皇子の命令だ。ミネバ隊を待たねばならん」

「ミネバ副将には今セピアを向かわせています。明日には到着するかと……」

「それではミネバの到着を待ち、明後日の決戦に備えろ。出発は明日の夜、テラナ高原で休息の後、その明朝よりレッドの町を攻める

「！」

「はっ！」

全員が返事をし、会議が終了する。指揮官が去り、司令部にはトーマだけになった。そこに、一人の男が突如闇の中から現れる。

「準備は万全か……？」

「魔人アイゼルか……貴様の手など借りずとも、我らだけで十分殲滅は可能だ」

「まあ、そう言っな。明後日は私も手を貸してやる」

そう言い残し、アイゼルはまた闇の中へ消えていった。それを見送るトーマ。その表情はどこか苦々しげであった。

・ジオの町近辺 街道・

「ミネバ様、お急ぎ下さい。既に他の指揮官は集結しています」

「判っている。全く騒がしい娘だねえ……」

そう急かすのはミネバを呼びに来た司令官、セピア・ランドスタ―だ。その声を聞きながら面倒くさそうに部下を引き連れて歩いていたミネバだが、急に森の方に目を向ける。

「……悪い、少し話しがある。立場上こいつらに聞かせられる話じゃない。こっちに来てくれるかい？」

「？判りました」

ミネバにそう言われ、部下をその場所に待機させた二人は森の中

へ入っていく。しばらく歩き、到底話し声は聞こえない位置まで来る。

「それで、話しというのは？」

「……悪いねえ」

「……えっ？ぐふっ！！」

突如腹に強烈な一撃を入れられ、崩れ落ちるセピア。その様子を見ながらミネバが後ろに声をかける。

「タミ、この女をうし車に乗せてレッドの町へ。さっき渡した手紙も一緒にな」

「はっ、ミネバ様」

いつからそこに控えていたのだろうか。木の後ろからタミと呼ばれた巨漢の男が現れ、セピアを肩に担ぐ。

「ですが、危険な橋では？」

「ふっ、大したことないさ。……本当なら、こんな事する気はなかったんだが、反乱軍が頑張るもんだから、欲が出ちゃってねえ……この戦争は長引かせるよ」

「……はい」

「トーマの奴には、そろそろ隊長の席を空けて貰わないとねえ。名譽の戦死……ご立派じゃないか」

口元に笑みを浮かべながら、ミネバが部下たちの元へ戻っていく。陰謀が渦巻く中、ジオの町の決戦は着実に迫っていた。そして、その決戦において遂にルークは魔人と聞きたかったことについての対話をする事になる。そしてその対話は、非常に多くの者の運命を変えていくことになるのだが、まだそれを知る者はいない。

第50話 セルの切り札（後書き）

「人物」

リス

元モンスターの青年。ランスの言葉を信じ、人間になるべく努力していたら案外何とかなってしまった。恋人のローラとはラブラブ。今は結婚式の準備を進めており、一応恩人ということでルークとランスも招待する予定。

「モンスター」

バグ

コンピュータのあるところに現れるモンスター。一説にはコンピュータが生みだしている生成生物という意見もある。小さな体だが、素早い動きに強烈な攻撃と、意外な強敵である。その姿はハニーキングすら震え上がらせるという。

「技」

魔封印結界

四本の結界志木と呼ばれる金属を使い、対象を異空間へ送り込む神魔法。準備が大変なため、実戦で使える機会は少ないが、その威力は絶大で、サテラ程度の魔人なら為す術もなく異空間へ送り込まれる。

「その他」

エロヤックALV

ハイパービルを管理するスーパーコンピュータ。バグに悩まされ

ていたが、ルークたちに退治して貰い本来の機能を取り戻す。

第51話 歴史の動くとき

・レッドの町 傭兵部隊詰め所前・

「ふう」

「これはルーク殿。会議は今終わりです」

「ああ、そういうリックとエクスもか？」

「ええ。丁度いい時間ですし、食事でも一緒にどうですか？」

シイルを取り返し、聖装備も揃えたルークたちは、リーザス奪還に向けての心配事は無くなり、後はひたすら進軍するのみとなった。ジオの町に攻め込むのは三日後に決まり、それに向けて各部隊は最終調整を行っていた。アレキサンダーは傭兵部隊に参加することになり、話し合いを終えたルークが詰め所から出てくると、丁度前をリックとエクス、ハウレーンとメナドが通ったところだった。赤の軍と白の軍の会議もほぼ同時に終わり、酒場に食事を取りに行くところだったようだ。

「そうだな、じゃあ一緒に貰おうか」

「歓迎しますよ」

「あ、あの。ルークさん！」

「ん？」

同行することを決めたルークに、メナドが話しかけてくる。

「こ、この戦争が終わったら、一度ばくと手合わせをしていただきたいのですが……」

「別に構わないぞ。リックともする約束があるしな。戦争が終わっ

たら赤の軍に一度お邪魔させて貰おう」

「本当ですか！ありがとうございます！」

「ルーク殿、自分も楽しみにしています」

メナドの顔がパアツと明るくなる。その様子を見ながら、エクスがハウレーンに小声で話しかける。

「これは赤の軍に一步リードされてしまいましたかね…ハウレーン、貴女も手合わせに誘ってみてはどうです？」

「そうですね、私もルーク殿の腕には興味があります。今度誘ってみましょう」

そう何とも無しに答えるハウレーンを見ながら、かなみやメナドのように積極的に行ってくれるようにはならないものとエクスは考える。白の軍副将ハウレーン、幼い頃からバレスの背中を見て育ったため、女性としてよりも騎士として生きたいという思いが強いランスに対するような不快感は無いが、まだまだルークに対して何とも思っていないかった。酒場に向けて歩いて行く一行だが、その時目の前に一台のうし車が止まり、運転していた男が話しかてくる。

「すみません、リーザス軍の方ですか？」

「そうですが…なんの用ですか？」

「ゲリラ軍を名乗る男性から荷物を頼まれましたね。荷台に積んであるんで受け取ってください」

「荷物？一体何なんですか？」

「さあ？私も見ちゃいけない契約になっていまして…」

「とりあえず見てみましょうかね」

「プチハニーが敷き詰めてあって、いきなり爆発したりしてな」

「こ、恐いこと言わないでくださいよ、ルークさん…」

ルークの言葉にメナドが怯える。そのメナドの様子を見て悪戯心が働いたのか、エクスがそれに続く。

「あるいは…いきなりお化けが飛び出してくるかもしれませんね」
「ひっ！」

エクスの言葉に反応したのはメナドではない。ルークが後ろを振り返ると、ハウレーンが顔を赤らめながら、誤魔化すように咳払いをしていた。ルークとメナドが同時に吹き出し、ハウレーンが更に顔を赤くする。おやおや、という顔でその様子を見るエクスにリックが近づいていき、小声で話しかける。

「エクス、あまりそういう話しはしないでくれ…」
「ああ、リックもそうでしたね。これは失礼しました」

穏やかな空気の中、うし車の後ろに回り、荷台を覆う布を開ける瞬間、空気が凍り付く。荷物は女性。全裸で縛られ、薬を投与されているのか目は虚ろで涎の跡が口元にくっきりと残ってしまっている。側には手紙が置かれており、こう書かれていた。

・リーザス軍の皆様へ ヘルマン軍の司令官を捕らえました。自白剤を投与してあるので好きにお使いください。ゲリラ軍より・

それを読んだ瞬間、ルークが手紙を破り捨てた。

「リック、セルさん…いえ、ロゼさんを至急呼んできてください！」
「酷い…」
「これを…同じリーザスの民がやったというのか…」

エクスが即座に指示を出し、リックが全力で駆ける。メナドが悲

痛な声を漏らし、ハウレーンが嫌悪感を露わにする。その時、ルークが荷台の布を斬り、ヘルマン軍の女性にかけ、その体を隠してやる。

「…弁償代はこちらで払っておきますよ」
「すまん、頼む」

エクスと話し合うルークの横顔を、メナドとハウレーンは確かに見る。静かに、されど確実に怒りを燃やしているその表情。ルークの発する殺気に、メナドもハウレーンも動けなくなってしまうていた。

・レッドの町 司令部・

「なんと…そのような事が…」
「酷いわ…」

司令部で先程の出来事の報告を受け、バレスとマリアがその表情を曇らせる。二人だけではない、自分たちの味方のゲリラ軍が行った蛮行に、他の者も表情を曇らせていた。

「…とにかく、この事は他言無用。士気に関わる。それと、三日後に向けて準備を進めておくように」

「バレス將軍、三日後では間に合いません。今晚にでも進軍を！」

そこへ、司令部に入ってきたエクスが声を上げる。

「どういう事じゃ、エクス殿？薬を投与されていたヘルマンの者は

「どうなった？」

「彼女なら今ロゼさんが治療に当たっています。名前はセピア・ランドスター。ヘルマンの司令官みたいです。幸い命に別状はなく、二、三日もすれば薬は抜け、後遺症も残らないようです」

「よかった…」

「ですが、投与させられた前後の記憶は残らない薬のようで、そのような行為をしたゲリラ軍が何者なのかは判らないようです」

エクススの報告に、とりあえず胸をなで下ろす一同。報告を聞きながら、ルークが口を開く。

「それで、今晚に進軍というのは？」

「ええ、彼女の話では明日、ヘルマン軍の大規模な襲撃があるようです。ヘルマン軍は、今晚テラナ高原で休息を取る模様。そこを奇襲するべきですね」

「エクス様…あの状態の彼女から情報を聞き出したのですか…」

「…軽蔑してくれて構いませんよ。全てはリーザスのためです」

「ふん、貴様の事なんかどうでもいい！セピアちゃんは必ず元の状態に戻せよ。お礼に一発やらせて貰うんだからな！…ゲリラ軍じゃなくて、ヘルマン軍が送ってきたんじゃないのか？」

それまで黙っていたランスが口を開くと、そのとんでもない発言に皆が驚く。真っ先に志津香が反論する。

「馬鹿ね！普通の状態ならいざ知らず、あんな状態で送られてきたら何話すか判ったもんじゃない。そんな事、ヘルマン軍がやる訳ないでしょ！」

「それに一般兵ではなく司令官。ヘルマン軍の仕業とは考えにくい」「ふん、それが狙いなんじゃないのか？まあいい、今晚奇襲をかけるぞ！」

こうして今晚、テラナ高原へ奇襲をかけることが決定した。各部隊大急ぎで準備を整え、夜になり、ヘルマン軍に気がつかれないよう進軍を開始した。先頭を行くのはチューリップ3号、これまで以上に大規模な一戦。兵たちにも緊張が走る。このテラナ高原の戦いは、後の世に語り継がれる事となる。リーザスとヘルマンの戦争の最も大きな一戦として、そして、人類と魔人の歴史を変える邂逅のあった一戦として。

・テラナ高原・

「おお、寒い、寒い。まだまだ冷えるな…」

「デストラー司令官、お疲れ様です」

テラナ高原で夜営をしているヘルマン軍。その先頭では、明日先陣を切ることになっているデストラーが部下と談笑していた。

「ふふ、先陣を任されたのはラッキーだったな。魔物部隊を率いて初めてよかったと思っただ瞬間だよ」

「おめでとうございます。明日はリーザスのクズ共を蹂躪しましょう」

「当然だ。ん？なんだか騒がしいな…」

「デ、デストラー様！大変です！敵の奇襲が…うわあっ！」

報告に来た部下の体が爆風で吹き飛ぶ。それを見ながら、デストラーは確かに見る。高原の向こうから、リーザス軍が迫ってきているのを。その戦闘を走る鉄の塊から、再度砲撃がこちらに放たれたことを。逃げる間もなくデストラーはその砲撃に巻き込まれ、その

生涯に幕を閉じた。

「うわあああ、リーザスの連中だあああ！！！」

「た、助けてくれえええ！！！」

「がはははは、ヘルマン軍をぶち殺せ！前進あるのみだ！後退した奴は俺様が斬り殺すぞ！」

ランスが上機嫌に笑う。奇襲作戦は完全に成功した。自分たちが解放軍に奇襲をかけるつもりだったのだ、まさか奇襲をかけられるなど夢にも思っていなかったのだらう。慌てふためく敵の部隊を、解放軍は易々と撃破していった。その報告にトーマが声を荒げる。

「奇襲だと！何故情報が漏れている！」

「判りません！我が軍は混乱、指揮が全くとれない状況です！」

「また、デストラー様、ナビオ様の戦死が確認されています！」

「何という事だ…乱戦状態、こういうのはミネバの隊が一番慣れているのだが…」

「ミネバ様の部隊は最後方ですし…」

「遅れた罰に最後方に回るなど、珍しいことを言い出したと思ったが、裏目に出たな…ええい、儂も出る！」

こうしてテラナ高原の戦いはなし崩し的に始まった。当初こそ解放軍が圧倒していたものの、夜襲という事もあり、いつの間にか敵味方入り交じる乱戦となる。こうなっては解放軍も統制の取れた戦いは不可能、敵も味方も判らない中、混乱したヘルマン軍との激戦が続く。

「大丈夫よ、私たちは優位に立っているわ！」

「このまま敵を攻めていりゃ、総崩れになるはずだぜ！」

「うおおお、やってやるですう！」

ランとミリもカスタム防衛軍を鼓舞する。ランの言うとおり、乱戦になっていて戦局は掴みづらいが、解放軍が押しているのは確かである。トマトが気合いを入れ、敵に突っ込んでいく。

「これは…青の軍も参加しているのか！」

「気をつけて！暗闇で判りにくいけど、青の軍がいるわ！極力殺さないように！」

リックがヘルマン軍の中に、洗脳された青の軍が参加していることに気がつき、レイラが周囲に聞こえるよう大声を上げる。洗脳されたリーザス最後の軍、防衛力に優れた青の軍は今の戦闘こそ驚異ではあるが、もしこの戦闘が終われば頼れる仲間になる。その事が更に解放軍の指揮を高めた。

「うむ、大分数が減ってきたな」

「はい、ランス様！みなさん頑張っていらっしゃいます」

ランスが更に高笑いを上げる。解放軍とヘルマン軍の激突から約二時間、既に勝敗は決していた。二倍以上の戦力を持つヘルマン軍だが、混乱と同様で本来の組織的な力を発揮できず、次々と撃破されていった。この頃にはデストラー、ナビオに続き、ダルム、ガイヤス両司令官も戦死。ミネバ隊は最後方で撤退を始めており、戦場に残っている指揮する立場の者は、シルビア司令官とトーマ將軍を残すのみだった。特に戦果を上げたのはマリアが乗るチューリップ3号。側にカスタム魔法軍とリーザ魔法軍を携えながら、大量の敵を蹴散らしていった。戦局は奇跡でも起こらない限り、変わり様はなかった。

戦場から少し離れた小高い丘の上、ヘルマン軍を見下ろしながらアイゼルが小さく呟く。

「馬鹿め、敵に奇襲されるとは…この戦は負けだな」
「アイゼル様、どうされますか？」

側に控えていた女性がアイゼルに問いかける。彼女たちはアイゼルの使徒と呼ばれる忠実な部下で、魔法使いの三姉妹だ。その問いかけにアイゼルが少し考え込みながら答える。

「お前たちの力を試す時が来たようだな。サファイア、オパール、ガーネット！お前たちは個々の力は小さいが、三人の力を合わせれば強力な魔法を使うことが出来る」

そう言いながら、アイゼルが丘の上から指を指す。その先は、解放軍の先頭に行くチューリップ3号。

「目標は、あの戦車だ！」
「はっ！」
「やれ！」

アイゼルがそう指示すると、三姉妹は魔法を唱える。三人の魔力が合わさり、その中心に強力な魔法の塊が出来上がっていく。そして、三姉妹が一斉に口を開く。

「黒色破壊光線！！」

黒い光線は一直線にチューリップ3号へ飛んでいく。その時、ア

イゼルは気がつく。チューリップ3号の側に、緑色の髪の魔法使いがいることに。

「あれは…あの位置はマズイ！」

「あ、アイゼル様！」

「私は戦場に行く。お前たちも適当に参加し、やられる前に撤退しろ！」

それだけ言い残し、アイゼルは全力で丘を降りていく。

「香澄、次の敵の集団に突入するわ！弾薬を補給しておいて！」

「はい、マリア先生！」

前線でヘルマン軍を蹂躪していくチューリップ3号。その驚異的な戦果に、ヘルマン軍は恐怖し、解放軍は鼓舞される。マリアが笑いながら進軍していく。

「ふふふ、このまま蹴散らしてやるわ。私のかわいいチューリップ3号は無敵よ！」

「マリア先生！黒い光が…こちらに…」

「えっ…きゃああああ！」

三姉妹の放った黒色破壊光線が、チューリップ3号を貫いた。戦車の右半分が吹き飛び、その爆風で側にいた魔法部隊も数名吹き飛ばされる。そしてその中には、解放軍の主力でもある人物も混ざっていた。

「おらおらおら、死にやがれて言ってんだろうがああ！」

「属性パンチ・炎！大分数も減ってきましたな、ルーク殿！」

「ああ、もう一息だ！」

傭兵部隊と共に前線で戦うルーク。ルーク、アレキサンダー、ルイス、セシル、アリオスという五人が所属するこの部隊は、リーザス正規軍に劣らぬ活躍を見せていた。その時、かなみがルークに向かって戦場を駆けてくる。

「ルークさん、大変です！チューリップ3号が破壊されました！」

「なんだと！マリアは無事か！？」

「あの装甲を誇るチューリップ3号が…」

「マリアさんも香澄さんも奇跡的にほとんど怪我はありません。でも…」

「どうした！？」

「側で戦っていた志津香さんが爆風に巻き込まれて行方不明に…あつ！ルークさん」

かなみの言葉を聞いた瞬間、ルークは駆けだしていた。脳裏をよぎるのはかつて志津香と共に見た光景。志津香の父である篤胤が殺される瞬間。

「ルーク殿、こちらは我らに任せられよ！」

「ルークさん、私も行きます！」

アレキサンダーが後ろから声をかけ、かなみも後をついてくるが、ルークの耳には届いていなかった。一刻も早く志津香の下へ。それだけを考え、戦場を駆けていく。目の前にヘルマン兵が立ちふさが。が、そのヘルマン兵は一瞬の内に首を斬り落とされる。

「邪魔をするな！どけえええ！」

普段のルークからは想像つかないような形相と絶叫を放ちながら、ルークはかなみと共に駆けていくのだった。

・テラナ高原近辺　森の中・

「んっ…」

志津香が目を覚ます。確か自分はチューリップ3号の爆風に巻き込まれて…そこから記憶がない。どうやら気を失っていたようだ。全身が痛む。ふと、自分が抱きかかえられていることに気がつく。傷ついた自分を誰かが運んでくれているのだろう。一瞬、志津香の頭にある男性の顔がよぎる。共に復讐を誓った男の顔。が、意識のはっきりした志津香が見たのは想像していた男の顔ではない。ラジールを解放する際、出会った男。

「魔人！くっ…」

「あっ、いけない！」

自分を抱きかかえ歩いているのが魔人アイゼルだと気がついた志津香はすぐに飛び上がる。腕から解放された志津香だが、全身の痛みで地面に倒れ込む。

「大丈夫か。気がついたようで何よりだ」

「くっ…魔人が…私を何故運んでいた…」

立ち上がることにすらままならない体だが、気丈にもキッとアイゼルを睨み付ける。アイゼルが心配そうに声をかける。

「まだ動かない方が良くぞ。酷い怪我で、応急処置しか出来ていないんだ。今から小屋に運んでやるわ。そこでなら、もう少しマシな治療が出来るはずだ」

「…どういっつもり!?!」

「どういっつもりとは?」

「とばけないで! 敵である私をどうして助けたのよ! 私をどうするつもり。拷問されたって情報は喋らないわよ!」

志津香の言葉に、アイゼルが一瞬躊躇いながらも口を開く。

「…どうもしない」

「嘘を…」

「嘘ではない。君を助けたのは、私の独断でしたことだ。他意はない!」

「えっ…」

アイゼルが若干顔を赤らめながら言葉を続ける。

「ラジールで会ったときから…気にはなっていた。あの乱戦の中、勇猛に戦うその姿、そして、傷つき倒れる君を見たとき…私は…」
「……」

「私は…君を…」

「志津香! 無事か!」

「ルーク!?!」

アイゼルがある言葉を言おうとしたその時、ルークとかなみが森を掻き分けて現れた。ヘルマン兵から金髪の男が女を抱えて森に入ってしまったという情報を聞き出したルークたちは、ここまで追ってきてようやくアイゼルに追いついたのだ。アイゼルは見てしまう。

ルークを見た瞬間の志津香の表情を。そして、全てを察する。

「そうか…既に…心に決めた人が…ふっ、とんだピエロだな…」

「ま、魔人！」

「くっ…来い！フェリス！！」

かなみが魔人アイゼルの姿に驚き、ルークが瞬時にフェリスを呼び出す。

「お呼びですか、ルーク様。ランスの奴はHで頻繁に呼び出すのに、ルーク様が呼び出すのは初めてですね…って、どういう状況！？」

目の前に傷つき倒れている志津香、臨戦態勢のルークとかなみ、そして目の前で佇むアイゼル。状況が判らず混乱するフェリス。が、更にこの場が混沌と化する。

「アイゼル！こんな所にいたのか。イシスの修復材料調達の件なんだが…って、お前は！」

「サテラ様、ルークデス！」

「くっ…ここで魔人が増えるなんて…」

「えっ！？魔人！この二人魔人なの！？とんでもない状況で呼び出さないでよ！」

魔人サテラがアイゼルを探しに森の奥からやってきて、ルークたちと対峙する。かなみの言葉にフェリスが驚きの声を上げる。呼び出されたら目の前に魔人が二人いるのだ、とんでもない状況だ。丁度、志津香を中心に対峙する形となった三人と三人。アイゼル意外は互いに臨戦態勢。一触即発だ。サテラがこちらに向かって叫ぶ。

「イシスの体の仇、ここで取らせて貰うぞ！シーザー、奴らを八つ

裂きに……」

「待て、サテラ！ここは退くぞ！」

「えっ！」

「……どういうことだ？」

アイゼルの言葉に、この場にいた全員が驚く。一番驚いているのは仲間のサテラで、アイゼルに食って掛かる。

「おい、何で逃げる！サテラはこいつらを八つ裂きにしないと気が済まないんだ！」

「今ここで戦えば……私は嫉妬に駆られて相手を殺した醜い男になる。そんな事は……我慢ならん……」

「何訳の判らない事言ってるんだ。とにかくこいつらを八つ裂きに……」

「サテラ、材料調達の協力を約束した際、何でも言うことを聞くと言っていたな。ならばここは退くぞ」

「んぐっ……ふん、命拾いしたな、ルーク！」

「さらばだ、人間共よ。次に会うときは覚悟しておけ」

そう言っただけでアイゼルがこの場から立ち去ろうとする。納得のいかない表情だが、サテラもシーザーの肩に乗り直し後に続く。かなみは内心安堵していた。ルークがいるとはいえ、この少人数に魔人二人にガーディアン。流石に無謀すぎる。去っていく背中を見送ろうとするかなみだが、ルークがそれを阻止する。

「待て！お前らに聞きたい事がある！」

「……？人間に話す事など、こちらには何もないぞ？」

アイゼルが振り返り、答える。ルークは少しだけ目を瞑り、考える。今この場にはかなみと志津香、そして自分の従者であるフェリ

ス。ならば…と決断する。そして、ラジールの町で会ったときに言えなかった言葉を口にする。

「…ホーネット派の魔人であるお前らが、何故ここにいる!？」

「…!？」

「ホーネット…派？」

「ルークさん…それはいったい…？」

ルークの言葉にアイゼルとサテラの目が見開かれる。今日の前の男が発した言葉、それは人間が知るはずのない事。アイゼルが歩みを止め、ルークに体ごと向き直る。

「貴様…何を知っている！」

「知っているさ…魔人が二手に分かれて戦争をしているのは人類でも周知の事だが…それを指揮するのは前魔王の娘、魔人ホーネット、対峙するのは魔人ケイブリス！」

「な、なんで人間のお前がそんな事知っている!どうせ知ったかぶりだろ!そうじゃないっていうなら、ホーネット派のメンバーを言ってみろ！」

サテラの言葉にルークが少し考え込む。かなみと志津香は目の前で繰り広げられる状況に驚き、言葉を発せずにいた。考え終わったのか、ルークがサテラの問いに答える。

「少し誤差はあるかもしれないが…ホーネット、シルキィ、ノス、アイゼル、サテラ、サイゼル、ハウゼル、レイ、ジーク、メガラス…こんな所か？」

「ふん、やっぱり知ったかぶりだ。サイゼルもレイもジークもケイブリス派だ！」

「いや、これは…」

サテラがルークを罵るが、アイゼルはこのラインナップに驚愕していた。ルークの外した面々は、確かにケイブリス派ではあるがまだ話しの通じる面子。サイゼルは本来ならホーネット派にいてもおかしくない魔人だし、レイもケイブリスに弱みを握られていなければこちらに属していただろう。ジークも最後まで悩み、より魔人らしいという理由でケイブリス派についたが、一つ何かが違えばこちらにいてもおかしくなかった。下手に的中されるよりも、こちらの方が恐ろしい。この男は、ただホーネット派とケイブリス派という情報を知っているだけではない。魔人の内情を、かなり深いところまで知っているのだ。冷や汗を掻くアイゼルに、ルークが更に問いかける。

「もう一度聞く。何故、人類不可侵のホーネット派がここにいる！
？もう一人の魔人というのは誰だ！？」

「そんな事、人間なんかに教える訳……」

「もう一人はノスだ。我らはカオスを手に入れるため、リーザスに
来た」

「おい、アイゼル！」

ルークの問いにアイゼルが答え、サテラが文句を言う。が、アイゼルはルークに興味が沸いていた。この男、一体どこまで知っているのかと。

「……その事を、ホーネットは知っているのか？」

「ホーネット様には知らせていない。だが、カオスを手に入れば
ケイブリス派に引導を渡せる。そうなればホーネット様も喜ぶと
ノスが言っていた」

「……そんな事はない！ホーネットは、人類を傷つけるこんなやり方
を望んじやない！お前らは、ノスに騙されているんじゃないのか

「!?」

「馬鹿言つな、どうしてノスがサテラたちを騙す必要がある!」

「…っ!」

サテラが先程以上にルークを罵るが、アイゼルが黙り込む。それは、一度アイゼルも考えた事であった。何故ホーネットに連絡せず、自分たち三人だけ独断で動いているのか、ノスには他に目的があるんじゃないかと。だが、ホーネット派でも上の立場であるノスが裏切るはずないと、これまで深くは考えずにいた。そのアイゼルの様子を見て、ルークが言葉を続ける。

「可能性は…あるんだな?」

「…あるな」

「おい、アイゼル!」

「ならば自分たちで確認をしろ。こんな事、ホーネットがするはずがない!」

アイゼルの態度とルークの叫びにサテラが遂に切れる。普段、周りに他の人がいる時はホーネットの事を様付けで呼んでいるが、ついついそれも忘れてルークに食って掛かる。

「ホーネット、ホーネットって、お前がホーネットの何を知っているんだ!サテラはホーネットの親友だぞ!会った事もないお前なんかよりずっと…」

「会った事なら…あるさ」

「何?」

その言葉に、アイゼルが眉をひそめる。これまで黙って聞いていたかなみ、志津香、フェリスの三人も一斉にルークに注目する。

「俺はかつて…この命、彼女に救われた！」

「「！？」」

「魔人に…」

「ルークさん…」

「どうなっているのよ…」

ルークは目を閉じ、昔を思い出す。それは今より10年以上前。ルークの死の運命を変え、その後の目的の根幹になる出来事。魔人、ホーネットとの出会いと生活の事を。

第51話 歴史の動くとき（後書き）

「人物」

アイゼル

LV 90 / 140

技能 魔法LV2 変身LV1

ホーネット派に属する変身人間の魔人。ガイの手により魔人になり、その忠誠心は死後も変わっておらず、その為ホーネット派にいた。人間を見下してはいるが、卑怯な戦法などは好んでおらず、その辺りはジークと気が合う。自身が操る洗脳魔法も、基本的には単純な戦闘しかさせず、脅迫などには使わない。また、一度目の前に対峙した相手を洗脳するのは礼儀に反するというポリシーを持つため、戦闘が始まれば洗脳魔法は使ってこない。

サファイア

LV 25 / 40

技能 魔法LV1

アイゼルの使従。三姉妹の長女。本人の魔法の腕はたいしたことはない。

オパール

LV 25 / 40

技能 魔法LV1

アイゼルの使従。三姉妹の次女。自分たちがアイゼルの評判を下げているんじゃないかと不安に思っている。

ガーネット

LV 25 / 40

技能 魔法LV1

アイゼルの使従。三姉妹の三女。姉妹仲は良く、三人が力を合わせれば黒色破壊光線を放つ事も可能。

セピア・ランドスター

LV 22 / 35

技能 弓戦闘LV1

ヘルマン第3軍司令官の一人。若いながらに優秀な女性で、性格は真面目一辺倒。ミネバの策略に填り、リーザス軍に送り届けられるが、無事に回復に向かっている。敵である自分に温かくしてくれたりリーザスの人たちに心を打たれ、ヘルマンに戻るか悩んでいる。

ガイヤス

ヘルマン第3軍司令官の一人。本来はジオの町の司令官であったが、あまり優秀な人物ではなく、全軍集結の際には後方に下げられた。テラナ高原にてルークに討ち取られ、戦死。

ダルム

ヘルマン第3軍司令官の一人。目立ちたがり屋で、ナビオとは仲が悪い。テラナ高原にてリックに討ち取られ、戦死。

シルビア

ヘルマン第3軍司令官の一人。美しい女剣士で、本国にもファンが多い。テラナ高原にてランスに犯され、戦意喪失後捕虜に。

デストラー

ヘルマン第3軍司令官の一人。魔物部隊を率いる司令官で、先陣を任されていた。テラナ高原にてチューリップ3号の砲撃を受け、戦死。

ナビオ

ヘルマン第3軍司令官の一人。ふぬけと呼んでくるダルムと仲が悪い。テラナ高原にて、バレスに討ち取られ戦死。

第52話 夢迷い無く、道険し

GI1006

- 自由都市 とある農村近隣 森中 -

「真滅斬！」

「ぐ…がああっ…！」

「おおっ！」

チャカが歓喜の声を上げる。昔なじみの農夫に頼まれて魔女の討伐に来てみれば、想像を遙かに超える強さ。しわくちやのばーさんという話しだったのに、戦闘が始まるや否や若返り、とてつもない魔法を繰り出してくる。チャカは死を覚悟していたが、颯爽と現れたルークという冒険者が助太刀をしてくれた。そして今、そのルークの剣が魔女パンドーラを斬り裂く。が、魔女が死に際に強力な魔法を放つ。

「き、貴様らにも地獄の苦しみを…」

「ぬおっ…体が!？」

チャカの体が光に包まれ、体が縮んでいく。身動きが取れなくなり、自分が着ぐるみになってしまったことに気がつく。そして、ルークの体も光に包まれていた。

「くっ…!？」

「そして貴様は…人間がとても生きてはいけない場所に転移を…絶望の中死んでいけええ！」

「ルーク殿！」

魔女が絶叫し、ルークの体が光と共に消え去る。同時に、魔女の肉体が塵となって消えていく。

「何という事じゃ…誰か！誰か来てくれ！」

声を聞きつけた農夫によってチャカは救出される。その後、手を尽くしてリーザスと自由都市中を探し回ったが、遂にルークの居場所を突き止める事が出来なかった。

・魔人界 硫黄の森南部・

「ここは…」

光に包まれ辺りが真っ白になったと思うと、次の瞬間ルークは森の中にいた。鼻につく硫黄の臭い。その時、後ろから物音がする。ルークが振り返ると、そこには今まで見た事もないようなモンスターが数体いた。見ただけで判る、こいつらは今まで戦ってきたモンスターとは格が違う。

「ニンゲン？」

「ニンゲンダ！キャキャキャ、ゴチソウダ！」

「ちっ、魔女と戦ったばかりだというのに…はあっ！」

迫ってきたモンスターをルークが斬り伏せる。数分後、全てのモンスターを何とか倒したルークだったが、森を彷徨い歩いていると、また次から次へとモンスターがやってくる。それらを倒しながら森を進んでいくが、出てくるモンスターはどれも驚異的な強さだった。

気がつけば鎧はひび割れ、全身から血を流している。特に危険なのは、直前につけられた胸の傷。流れ出る血が止まる気配がない。意識が朦朧としてくる。

「15年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

気がつけばそんな事を呟いていた。自分が長くない事を悟っていたのだらう。その時、背後から物音がする。ルークがため息をつきながら、覚悟を決めて振り返る。

「さて…最後くらい楽に殺して欲しいものだが…」

そして見る。自分を殺すであろう相手の顔を。背後に立っていたのは女性。その容姿は美しく、どこか気品に満ちあふれていた。髪の色は緑。周囲に五色の玉が浮かんでおり、驚いたようにこちらを見ている。ルークはその姿を見て内心思う。最後の相手としては、文句なしだな、と。

「人間…？なぜこのようなところに…？」

女性の呟きが耳に届くと同時に、ルークの意識は途絶えた。

- 魔人界 硫黄の森南部 ホーネット別宅 -

「……生きているのか、俺は」

ルークが目を開くと、ベッドの上に寝させられていた。全身が痛む。見れば身体中に包帯が巻かれている。少し不格好な巻き方。

巻いた者があまり慣れていなかったのだろうか。すると、部屋の入り口から声がする。

「目が覚めましたか？」

「貴女が…これを…？」

「すみません、治癒魔法は不得手でして…」

声の主は先程の女性。穏やかな表情を浮かべながらこちらの様子を見ている。その動作一つ一つが気品に溢れている。

「何故、このような場所にいらしたのですか？」

「…そこから聞いても良いかな？ここはどこなんだ？」

「…まさか、知らずにあの森を彷徨っていたのですか！？」

「色々あつてな。気がつけばあの森にいたんだ」

「そうでしたか…それは災難でしたね。ここは魔人界、硫黄の森。人間界では魔の森と呼ばれている場所の一角です」

その言葉にルークがため息をつく。あの魔女め、とんでもないところに送ってくれたものだ。となると、目の前の彼女の正体も予想がついてくる。彼女の目を見ながら、ルークが問いかける。

「とすると、貴女も魔人か？」

「はい。私の名はホーネット。魔人であり、魔王ガイの娘です」

「なるほど…どつりで気品があるはずだ」

「…あまり驚かれないのですね？」

「魔人である事は見当がついていたんでな。今更魔王の娘と聞いたところで、これ以上驚きようもない。それに、魔王の娘という事は関係ない。貴女は貴女だしな」

「そついうものですか…」

ルークの言葉に、少し考え込むホーネット。名乗らせておきながら自分が名乗っていない事に気がつき、ルークが話しを続ける。

「名乗りが遅れた。俺はルーク・グラント。見ての通り人間だ。助けていただき、感謝する」

「感謝されるような事は…」

「そこだ。どうして魔人である貴女が俺を助けてくれたんだ？」

その言葉に、一瞬悲しそうな表情を浮かべながらホーネットが答える。

「我ら魔人、その全てが人間を蹂躪しようとしている訳ではありません。私の父、魔王ガイは人類に対して不可侵の方針を取っています。そして、それは娘である私も同じです」

「確かに、昔に比べ、今の時代は魔人の侵攻が殆ど無い。それは魔王の意志だったのか…」

「ですが、その方針に反対し、人間を卑下し、蹂躪する対象としてしか見ていない魔人が多いのもまた事実…」

「魔人も一枚岩ではないという事か。その辺は人間と変わらん…」

「魔人と人間、根本では似ているのかもしれませんが、判り合える事はない…」

その言葉に、部屋にしばしの沈黙が訪れる。一分ほど立った頃、ルークが口を開く。

「それでは、次に細かい事を聞いていっても良いかな？この屋敷や怪我の状況、それと俺はどうしたら人間界に戻る？」

「この屋敷は私の別宅です。父が一人での時間や鍛錬を積めるようにと私に与えてくれたものです。周囲には結界が張っており、基本的には私以外何者も入ってくることはありません」

「なるほど…だから誰にも襲われずにすんでいる訳か」

「怪我は…完治まで数ヶ月はかかると思います。治癒魔法を使える者も知り合いにいます…」

「俺の存在をあまり広めるのは芳しくないだろ。この状況でも感謝し足りないくらいなんだ。これ以上迷惑はかけられんさ。だが、数ヶ月もの間お邪魔しても大丈夫なのか？」

「それは構いませんよ。元々、この別宅は月に一度ほどしか使っていませんでしたから」

そう話した後、ホーネットが少しだけばつの悪そうな顔をする。その表情を見て、ルークは覚悟する。悪い予想が当たってしまったか、と。

「それと…滞在するのは数ヶ月ではすまないかもしれません。貴方が人間界に戻るのには難しいと思います。この別宅は魔人界の中ではまだ人間界に近い位置にあります。それでもほぼ丸一日森を走り抜けないと脱出出来ません。その間、魔人やモンスターに見つかからないのは不可能かと。人間の臭いに敏感な魔物も多いですから…」

「そして一度見つかれば…」

「魔人界中に情報が行き渡り、貴方の命を狙ってきます。人間が魔人界に入るのを快く思わない者も多いですから。父も、魔人界に侵入してきた人間を生かしておくほど甘くはありません」

「まあ、こちらから不可侵を破っている訳だからな…ふう、脱出方法は無しか…」

「申し訳ありません…」

謝るホーネットにルークが慌てて答える。

「貴女が謝る必要はない。そもそも、貴女がいなければ俺は死んでいたんだ。何、その内チャンスがあるはずだ。迷惑かもしれないが、

気長に待たせて貰うさ」

「そうですか…あら、もうこんな時間。すみません、私はこれで一度失礼させて貰います」

「色々と迷惑をかける」

「いえ…それと、申し訳ないのですが、私は毎日この屋敷に来られる訳ではありません。屋敷にある者は何でも使って良いですし、食事も勝手に取って貰って構いません。人間の口に合うかは判りませんが。録に看病も出来なくて本当に…」

「いや、本当に何から何まで感謝する。魔人の娘ともなれば、立場上勝手には動けないんだろう？これ以上望んだらバチが当たるってもんだ」

「…出来る限り、顔は出すようにしますので」

そう言つてホーネットが部屋を出て行く。ルークが起こしていた体を再びベッドに沈め、これからの事を考え込む。これはしばらく帰れそうにない。もし帰れたとしても、時間が経ちすぎていたら妹に殺されるな。魔人界に飛ばされるという非現実的な出来事の中、ルークは極力現実的な事を考えるよう努力していた。そうでなければ、精神がおかしくなってしまう。その点では、ホーネットに出会えて事は幸運かもしれない。そんな事を思いながら、ルークは眠りについたのであった。

GI1007

- 魔人界 硫黄の森南部 ホーネット別宅 -

屋敷の庭、周りに被害を出さないよう、結界の中に更に結界を張った鍛錬用の場所。そこでホーネットが自身の体に魔力を帯びさせ、自らを鍛えていた。ふいに声をかけられる。

「相変わらず精が出るな、ホーネット」

「ルーク、勝手に外には出ないようにあれ程…」

屋敷の中から現れたルークにホーネットが苦言を呈す。あれから数ヶ月、ルークとホーネットは親交を深め、いつしか互いを呼び捨てで呼び合っていた。普段のホーネットを知る者なら、この光景には驚くだろう。静かに笑いながらルークが言葉を返す。

「ここは結界の中だろ。誰にも気がつかれないさ」

「そうでなく、怪我に触ると…」

「その事なんだが…ようやく完治したようだ」

そう言いながらルークが右腕をぐるんぐるんと回す。怪我が治った事を確認し、穏やかな表情になるホーネット。そのホーネットに、ルークが言葉を続ける。

「それじゃあ、約束通りやるとするか。長い事鍛錬していないんで、迷惑なだけかもしれないがな」

「本当に大丈夫なのですか？魔人である私には結界が…」

「前にも言っただろう。俺は特別なんだよ」

ルークが剣を取り、結界を無効化して鍛錬場の中に入っていく。初めてこれを見せた時はいたく驚かれた。対結界技能。そして今、この技能を引く提げルークはホーネットと模擬戦を行う。威勢良くホーネットに向かっていったルークだが、三分と持たず赤い玉から放たれた魔力に吹き飛ばされ敗北する。

「駄目だ、歯が立たん。筋トレはしていたんだが、流石にLV12じゃ話しにならないか」

「ですが、驚きました。本当に結界を無効化出来るのですね。…もしよろしければ、これから定期的に模擬戦を行いませんか？」
「こちらとしては大歓迎だが…そちらはいいのか？経験値にならないだろう？」

「ええ、相手になりません」
「……」

そのホーネットの言葉にルークが惚ける。すぐにホーネットが慌てた様子で取り繕う。

「じよ、冗談だったのですが面白くなかったでしょうか？」

「いや、ホーネットの口からそういう冗談が出た事に驚いていたただけだ」

「ふふ、ルークの影響でしょうね。それと、模擬戦は私にとっても十分鍛錬になります。私たち魔人は、結界がある安心感からつい防御をおろそかにした戦い方になりがちですので。結界を無効化されることを意識した戦いの良い練習です」

「そう言って貰えると、こちらも遠慮しないで付き合えるってもんだ。それで、次はいつ来られる？」

「次は…三日後ですね」

「それでは、それまで一つでもレベルを上げておくとするかな。楽しみにしているぞ」

「私も楽しみにしています。それでは、また三日後に」

GI1009

- 魔人界 シルキイの城 -

「シルキイ、私は別宅に行ってきますので、後はお願ひします」

「はい、ホーネット様」

話し合いを終え、城を後にするホーネットを見送る魔人シルキィ。
そこにサテラがやってくる。

「ホーネット、最近暇があれば別宅に行つてばかりだ」

「…サテラ、呼び方」

「つと、ホーネット様だな」

「ふう、親友なのは判るけど、周りの目も考えなさい」

そう困つたようにしながらも、シルキィはホーネットを呼び捨てに出来るサテラの関係を羨ましく思っていた。サテラが謝りながら、話を続ける。

「それにしても、なんで今になって修行を積んでいるんだ？」

「立派な事です。最近は以前にも増して強くなっていますし、ケイブリスに迫る勢いだわ」

「でもさ…サテラ難しい事は判らないけど、あれなんだろう…」

「…まだ決まつた訳ではないわ」

場の空気が重くなる。時期魔王としてホーネットは期待されているが、魔人たちの間ではある噂が流れていた。魔王ガイは、娘のホーネットに魔王を継がせる気はないのではないかと。生まれたときから魔王としての英才教育を施していたはずのガイは、ある日を境に魔王候補になれる器を別に探し始める。当初は万が一の保険とも思われていたが、既に魔王の任期である1000年は過ぎている。とすれば、そちらが本命なのではないのかと何人かの魔人が言い出し、その噂はじわじわと広がり続けていた。自分が変えてしまった空気を払拭するように、サテラが明るく話題を変える。

「でもさ、ホーネットは…じゃなかった、ホーネット様は最近明るくなったよな」

「…そうね。ほんの少しだけれど、柔らかい表情をするようになったわ」

「ふふん。これも親友であるサテラのお陰だな！」

「違ウト思イマス、サテラ様」

「シーザー！お前が突っ込むな！」

「ふふっ」

一気に場の空気が変わる。やはりサテラはムードメーカー、ホーネットの側になくはならない存在だ。だが、本当にサテラのお陰なのだろうか。ホーネットが纏う空気が変わったのは、別宅によく行くようになってから。何か別宅でしているのだろうかと思うシルキイだが、特に追求をすることはなかった。

- 魔人界 硫黄の森南部 ホーネット別宅 -

「ルーク、一週間も空けてしまい、申し訳ありません」

「その間に俺はまた強くなったぞ。さて、早速やるとするか」
「そうですね、早速手合わせを」

ルークが迷い込んで約三年、既にルークの傷は完治し、ホーネットがこうして足繁く通う必要もないのだが、怪我をしていたとき以上に頻繁に別宅に顔を出していた。魔王の娘という立場である彼女にとって、気の抜ける瞬間はほとんどない。その一挙手一投足に注目される。常に気を張っていなければいけないホーネットにとって、その必要のないルークの存在は貴重であつた。気がつけば別宅に通い、共に鍛錬をし、近況を語っていた。ルークからも人間界の話し

を聞かされる。そのどれも新鮮で、穏やかな時間を過ごさせていた。

「なるほど…サテラがそんな事を」

「ええ、メガラスにいきなり「ギャグの一つも言ってみろ！」って騒ぎ立てて。でも無口なメガラスがあんな事を言うなんて…ふふっ、笑いを堪えるのが大変でした」

「意外だな。他の魔人も大騒ぎだろ」

「そうですね。普段冷静なシルキイが吹き出し、ジークが大笑い。レイやカイトも笑いを堪えている様子でした。ケッセルリンクが途中で退席しましたが、口元を手で覆って出て行ったので、おそらく堪えられなくなったものだと」

「ふふ、俺も現場に居合わせたかったな」

穏やかな時を過ごせていたのはホーネットだけではない。ルークも彼女と過ごす時間が楽しく、気がつけば既に三年。脱出する方法がなかったというのは真実だが、それは言い訳に過ぎない。ただ、この日々が楽しかった。妹の事やギルドの仲間の事、旧友サイアスや魔想夫妻の事、気になる事は沢山あった。だが、この日々を捨てる気にはどうしてもなれなかった。そして、理由はもう一つある。魔人ホーネット、当初は彼女が強い女性であるとルークは思い込んでいたが、日々を過ごす内にそうでない事に気がつく。常に周囲に気を張っている彼女の繊細さに気がついてしまっていた。その彼女を放つてここを去る事が、ルークにはどうしても出来なかった。

「それでは、また五日後に」

「ああ、待っている」

互いを必要とし合っていた二人だが、男女の関係にはならなかった。恋人という関係とは少し違う。大切な友であり、互いを高め合う存在。いつしか二人共が、この日々がいつまでも続けばいいと思う

い始めていた。

GI1012

- 魔人界 硫黄の森南部 ホーネット別宅 -

その日は雨が降っていた。ホーネット以外の進入を防ぐ結界も、雨は通す。雨の中での鍛錬も積んだ方がいいというガイの考えだ。今日はホーネットが来る日。屋敷の外の屋根のある場所で雨宿りをしながら、ルークはホーネットがやってくるのを待っていた。程なくしてホーネットがやってくる。穏やかな表情で迎えようとするルークだが、その表情を見てルークの表情が一変する。

「…何があつた!」

「…何の事ですか?」

「惚けるな。どれだけの付き合いだと思っている!」
「……」

その暗く沈んだ表情を見たルークは、理由を問う。少し言いあぐねたホーネットだが、静かに喋り始めた。

「今日正式に…私に魔王を継承する気はないと…言われました…」
「!?!」

以前ルークもホーネット自身から聞いていた話、魔王の継承問題。それが今日、正式に言い渡されたのだ。生まれた頃から魔王になるべく努力をしてきた彼女にとって、その衝撃を、悲しみを、無念を、誰も理解する事は出来ないだろう。

「ただ…父の役に立ちたかった…」

「……」

「でも…私にはそれすらもする事が出来ない…」

「そんな事は…ない…」

かける言葉が見つからない。いや、下手な言葉をかけるべきではない。ルークがホーネットの前に立ち尽くしていると、思い詰めた表情でホーネットから思わぬ言葉が飛び出る。

「ルーク…私の使徒に…なってはくれませんか…？」

「……」

それは、ホーネットが初めてルークに見せた弱気な姿。ルークはその姿を見ながら、はつきりとホーネットに答える。

「それは…出来ない」

「…そうですか…私は…ルークにも…必要とされては…いないのですね…」

「そうじゃない！」

気がつけば、ルークはホーネットを抱きしめていた。力の入っていないその体を、強く抱きしめる。

「使徒になったら…俺は君よりも下の立場になる。それじゃ駄目なんだ！」

「……」

「俺は…君とは対等な関係でいなくてはいけない！対等な関係でいたいんだ！」

「ルーク…」

「魔王になれなくても…ホーネットはホーネットだろう！サテラが、

シルキイが、そんな事で君から離れていくのか！」
「……」

ホーネットが体をルークに預けてくる。これだけ長い年月を共に過ごした二人の、たった一度の抱擁。どれだけの時間そうしていたらうか、いつの間にか雨は止み、晴れ間が差し込んでいた。程なくしてホーネットがルークから離れる。その顔には涙の跡がくつきりと残っていたが、その表情は普段通りに戻っていた。

「すみません、ルーク…もう二度と、弱気な姿は見せません」

「たまには頼ってくれてもいいんだけどな」

「恥ずかしいですし、私も貴方とは対等でいたいですから」
「それは嬉しい事を言ってくれる」

涙の跡を拭いながら、顔を洗つてくると屋敷の中へ向かう。屋敷に入る前に一度だけ振り返り、ルークに向かって言う。

「それと、たまにはではなく、いつも頼りにしていますよ。ルーク」

そう言いながら、笑顔を向けてくるホーネット。ルークも自然と微笑む。穏やかな時間。しかし、この日々はある日唐突に終わりを告げる事になる。

GI1015

- 魔人界 硫黄の森南部 ホーネット別宅 -

その日、ルークは異変を感じていた。結界の外が騒がしい。魔人の間で何かあったのだろうか。どこか嫌な予感がする。そして、そ

の予感は的中する。数時間後、ホーネットが慌てた様子で別宅にやってくる。ルークの顔を見るや否や、口を開く。

「父が…魔王ガイが殺されました」

「なん…だと…」

「既に次の魔王は継承されているのですが…その女性、魔王リトルプリンセスが、魔王を継ぐ気は無いと言って、父を殺した男と共に逃げ出しました。今は親衛隊長バークスハムが後を追っていますが…どうなるか判りません」

悲痛な面持ちで話しを続けるホーネット。父が殺された直後、その悲しみは計り知れない。それに、ホーネットの立場を考えれば、そんな状況でルークの下にわざわざ来てくれたのだ。他の魔人の手前、一体どれほどの無茶をしてきたのか。ホーネットが話しを続ける。

「リトルプリンセスがこのまま逃げ続ければ、これから魔人界は間違いなく二つに割れます。父の遺言通り、リトルプリンセスの下で人類不可侵を貫く派閥と、人類を蹂躪しようとする派閥に…」

「ケイブリスたちが…」

長い事ホーネットと過ごしていたルークは、魔人の内情をかなり深く知っていた。それぞれがどのような考えの持ち主か、ホーネットの知る範囲で聞かされていたからだ。その中でも真っ先に反乱する魔人として浮かぶのが、魔人ケイブリス。苦々しい顔をするルークに、ホーネットがその手を握り、口を開く。

「ルーク、今ならここから脱出出来ます！」

「!？」

「今、魔人だけでなく末端にいたるモンスターも含め、そのほとん

どが魔王の城周辺に集まっています。今なら…今ならここから逃げ出せます」

「だが…」

「戦争が始まってしまえば、最早ここは安全な場所ではなくなりま
す。そしてその戦争は、何年、何十年にも及ぶ激しいものとなるで
しょう。もう、これしか方法がないんです…」

「…判った」

ホーネットも悲痛な表情をしている。そして、ここに留まってい
てはホーネットに迷惑をかけるだけだ。魔人界から脱出する決断を
するルーク。ホーネットに連れ添って屋敷の周りを覆っていた結界
から出る。その時、一人の女性がこちらに駆けてくる。

「ホーネット様、こんな所で何をしているのですか！今は大事な…
に、人間！？」

「シルキイ！？」

「彼女が…シルキイ…」

現れたのは魔人四天王であり、ホーネットの会話の中にサテラと
並んでよく出てきた魔人、シルキイ。思わぬ事態に、互いに目を見
開く。

「そう…別宅によく通うようになってから変わったとは思っていた
けど…そういう事だったの」

「シルキイ…彼はもう、人間界に戻るところなの…お願い…」

シルキイが一度だけ目を閉じ、少しだけ過去を思い出す。人間と
して魔王ガイと対峙し、敗れた自分の姿。魔人となった後、魔王ガ
イに惹かれていく自分の姿。目の前に立つホーネットと人間を見て、
自分のかつての姿を重ねてしまう。元人間でありながら、魔王を愛

してしまった自分を。そして、決断する。

「行け、人間！一度だけ見逃す！」

「シルキィ！」

「…感謝する」

「ホーネット様、すぐに魔王の城へ！」

「ええ、行きましょう！ルーク、どうか元気で…さよなら」

別れの言葉を残し、シルキィに連れられこの場を後にするホーネット。その背中にルークが叫ぶ。

「また会いに来る！人類をまとめた後、共にケイブリス派を倒すため、必ず君の援軍に駆けつける！だから、それまで待っていてくれ！」

「人間が…魔人を倒す…馬鹿なことを…」

シルキィが怪訝な表情になるが、ホーネットが一度だけ振り返り、はつきりとルークに言う。先程までの悲痛な表情ではない。いつもルークに向けてくれた、穏やかな表情で。

「待っています、ルーク！」

そして二人は互いに逆方向に駆け出す。分かたれた二つの道が、また重なり合う日が来る日を信じて。ホーネットの言ったとおり、ルークはモンスターに出会うことなく魔人界を抜け出せた。目の前に広がるのはクリスタルの森。ここでルークは一人のカラーにお茶に誘われ、家に案内されるのだが、時間がなかったためすぐに抜け出す。寄り道などしてられない。目指すはアイスの町。

- ペンシルカウ 女王の屋敷 -

「あれ、サクラ？連れてきたかつこいい冒険者さんは！？」

「逃げたようです。先程結界を破り出て行つたと報告がありました」

「あーん、せつかく一緒にお茶しようと思ったのに…あわよくば、精液貰つて子供を…」

「モダン様、貴女様はもう長くないというのに、まだ子供を産むつもりなのですか？」

「えへ。女はいくつになつても女なのよ！」

- 数日後 アイスの町 キースギルド -

キースが椅子に深く腰掛けながら、葉巻を吸う。先日新しく入った冒険者が、早くも戦死したのだ。

「リムリアも死んじまつたし…安心して任せられるのはラークとノアくらいだな。ランスの奴がもうちょい仕事してくれりゃいいんだがなあ。どっかに良い新人は転がってないもんかねえ…」

煙を吐き出しながら一人愚痴る。その時、キースの部屋の扉が開く。扉の前に立っていたのは一人の男。どこか見覚えのあるその顔を見たキースは、一瞬考え込んだ後、一つの結論に辿り着く。

「ま、まさか…ルークか？お前…生きていたのか！？」

「キース。ギルドにまだ俺の席はあるか？」

こうしてルークは十年ぶりにキースギルドに復帰する。キースか

ら妹の死を聞かされ、十年も帰らなかった自分を責め、後悔する。だが、立ち止まる訳にはいかなかった。ホーネットとの約束のためにも。冒険者としてがむしゃらに依頼を受けた。繋がりを得るために。アレキサンダー、アニスといった強者との繋がり。リア、サイアスといった国との繋がり。全ては人類統一と、その後の大戦争のために。

LP0002

- テラナ高原近辺 森の中 -

「何、黙り込んでいるんだ！」

急に黙り込んだルークに対し、サテラの怒声が森に響き渡る。その声でルークの目が開かれる。少しだけ昔を思い出していたルーク。そのルークに対し、サテラが言葉を続ける。

「ホーネットに命を救われただって？嘘を言うな！ホーネットは魔人界から出た事は一度だってないんだぞ！」

「いや、真実だ」

「…それが真実かどうかはさておき、貴様が魔人の事を詳しく知っているのは事実のようだな。それだけの知識を持った貴様の目的は何だ？」

「そうだ！ホーネットが知っていようが知っていまいが、お前には関係ないだろ。一々口出ししてきて。お前の目的は何だ！？」

アイゼルとサテラの問いかけに、ルークが少し考えた後、口を開く。

「俺の目的か…」

彼女を気高いと思った。その姿に惹かれた。だからこそ、対等でありたいと願った。人類不可侵、その高潔なる信念。

「俺の目的は…」

だからこそ、彼女よりも高い目標を立てた。対等であるために、彼女と同じ夢であってはいけない。彼女よりも更に高めへ。だがそれは、人間が持つにはあまりにも無謀な夢。その夢に、いつかルークは押し潰されてしまう日が来るかもしれない。

「人類と魔人の共存！」

「………！？」

だがこの夢を、途中で投げ出すつもりはない。例えこの身が朽ち果てようとも。

第52話 夢迷い無く、道険し（後書き）

「人物」

ルーク・グラント （3）

LV 50 / 200

技能 剣戦闘LV2 対結界LV2 冒険LV1

この物語の主人公。かつてホーネットと結んだ約束を守るため、人類と魔人の共存という無謀な夢を達成しようと動いている。この目的を他人に話すのは初めてである。ホーネットに抱いているのは恋愛感情ではなく、また別の何か。

ホーネット

LV 215 / 320

技能 魔法LV2 聖魔法LV2 剣戦闘LV2

ホーネット派を束ねる魔王と人間の間生まれた魔人。前魔王ガイの娘で、現魔人筆頭。亡き父の遺言に従い、人類不可侵を決めている。常に鍛錬を積み続け、その実力は魔人内でもケイブリスに次ぐ。ルークの運命を変えた魔人であり、同時にルークも彼女の運命を変えた人間である。二人の道が再び交わるのは、まだ先の事である。

シルキイ・リトルレーズン

LV 118 / 205

技能 魔物合成LV2

ホーネット派に属する人間の魔人。魔人四天王。かつて人間だったときに単身魔王ガイに挑み、瀕死になりながらも多くのモンスターを倒した事でガイに興味を持たれ、魔人に勧誘される。その際に人類不可侵をガイに約束させ、ガイがこれを承諾。これにより人類は魔人の支配から解放されたため、知る者は少ないが数多くの人類

を救った英雄。ホーネット派に属するのはホーネットへの忠誠心と、自分との約束を守ったガイを愛していたため。

モダン・カラー

LV 17 / 22 (生前)

技能 呪術LV2 魔法LV1

カラーの女王。おおらかな性格で、捕らえた人間の内、気に入った男性とお茶をするなど自由に暮らしていた。こういった性格から、50人もの娘を産む事になる。ルークと出会ってしばらくの後、亡くなる。女王は娘が継ぐ事になる。唯一の心残り、死ぬ前にあったイケメンとお茶が出来なかった事と言い残し、娘に引っぱたかれ大往生。

「技能」

聖魔法

闇属性の特殊な魔法を放つ事が出来る技能。治療魔法である神魔法とは全くの別物。

魔物合成

合成魔物を作り出す事が出来る技能。高レベルであれば戦闘用の魔物だけでなく、装備品の用に身につける合成魔物も作り出す事が可能。

呪術

様々な呪いを使う事の出来る技能。相手を殺すものから、思考を周囲にまき散らすものなど、その種類は様々。

第53話 嵐の前の静けさ

・テラナ高原近辺 森の中・

「ルークさん…さっきの話は…」

「本気なの…？」

森の中には既に魔人の姿はない。先のルークの話を聞いた後、サテラが散々に罵ってから撤退していった。アイゼルは何も語らず去っていったが、ルークを見るその目は、まるで狂人を見るかのような目であった。志津香は今ルークに抱きかかえられており、ルークとかなみは部隊に戻ろうと歩いているところだ。先の話のことを、かなみが不安そうに尋ね、志津香もそれに便乗する。その問いかけに、ルークが静かに答える。

「…ああ、本気だ」

「でも、そんな事が…」

「不可能よ。魔人は人類の敵なのよ」

「…難しい事は判っているさ。それと、二人に頼みがある。この事は、他言無用でお願いしたい。あまり事を荒立てたくない」

「ルークさんがそう言うのでしたら、私は喋る気はありません」

「まあ、いいけどね…」

ルークの言葉にかなみと志津香が了承する。確かに、あまり多くの人に知られてしまうのは芳しくない。狂人と思われても仕方の無いような事だ。

「フェリスも他言無用で頼む」

「契約主の頼みだから従うけど…ルーク様、一つ良いですか？」

「ルークで構わないぞ。何だ？」

ルークが、まだ悪魔界に帰らずに後ろをついてきていたフェリスにも頼む。難しい顔をしながら何か言いたそうなフェリスに言葉を続けさせる。

「…そんな望みは絶対に叶わないぞ。人間と魔人。神と悪魔。対極に位置する関係だ。分かり合える事なんてない」

その言葉だけ残し、フェリスの姿が消える。悪魔界に帰ったのだ。それを無言で見送りながら、ルークたちは皆のところに戻っていた。ルークたちが部隊に合流して見れば、既に戦闘は終結。解放軍の勝利であった。混乱の中、敗走できた司令官はトーマ將軍とミネバ副將のみで、ヘルマン軍は大打撃。解放軍も全戦力の三割を失う大混戦であったが、新たに青の軍が解放軍に加わった。この戦いで遂に解放軍とヘルマン軍の戦力は逆転、リーザ解放が現実味を帯びてきたのだ。ジオの町を解放し、休息を取る解放軍。

「セルさん、志津香の治療を頼む」

「あつ、はい。任せてください」

セルに傷ついた志津香を預け、ルークも休息を取るべく宿に向かう。その背中を、かなみと志津香は複雑な表情で見送るのだった

・リーザス城　ヘルマン軍司令部・

「なに…負けただど!？」

「敵に奇襲をかけられてしまい、暗闇の中の戦いで我が軍は指揮系統が混乱。そのまま撃破されてしまいました」

「おい…マジかよ…」

「あのトーマ將軍が…」

届けられた報告に、パットンが大声を上げる。周りに控えている警護兵もにわかに騒ぎ出す。ヘルマンが誇る名将、人類最強トーマ・リプトン。その指揮の下での敗北がもたらす影響はあまりにも大きい。

「リーザス国内に逃げおおせた司令官はトーマ様とミネバ様のみ。

我が軍の主力は、既に壊滅状態です…」

「もう一度、軍を整備して反撃は出来ないのか！」

「我が第3軍には、もう反撃するだけの戦力は残されていません。各地でのゲリラもますます勢いづいており…もう限界なのです」

「ぐっ…」

パットンが頭を抱える。こんなはずではなかった。つい先日まで、リーザスと自由都市は自らの手に落ちる寸前だったはずだ。憎々しげに言葉を漏らす。

「親父は何をしているんだ！魔人の作ってくれた転移装置で援軍を送るよう、使いを出しておいたはずだ！」

「そ、そんな事を期待していたのか！？」

「ん？どういう意味だ、ハンティ？」

パットンの言葉に驚愕するハンティ。その理由が判らず、パットンは聞き返す。一瞬黙り込んだ後、静かに口を開く。

「援軍など…来やしないよ、パットン」

「なに！それはどういう事だ！？」

「皇帝はパメラに誑かされている。シーラ姫を次の皇帝の座につけようと…それくらいは判っているだろう？」

「ああ、妾の子である私は、奴にとって邪魔な存在でしかない。…まさか！？」

「……」

「このまま私を見捨てるつもりか！？皇子である私を！ここにはトーマたちもいるんだぞ！」

「パットン…」

パットンの脳裏に最悪の予想が浮かび、口にする。そしてそれは、ハンティの反応を見て確信に変わる。勝てばもうけもの、負けても邪魔なパットンが死んでくれる。端から援軍など寄越す気はなかったのだ。狼狽えるパットン。

「そうだ…アリストレス！あいつなら来てくれるはずだ。いや、レリューコフでも、ロレックスでも誰でもいい！誰か…」

「…今上がった三人は特に嚴重に監視されている。特にアリストレスは、ほとんど身動きが取れない状況だ…」

「…くそっ！」

パットンが玉座を叩きつける。意外にも玉座の端に少しだけヒビが入るが、それに気がついたものはいない。その狼狽ぶりは警護兵にも伝わり、部屋には嫌な空気が充満していた。そのパットンをじっと見ながら、ハンティが一括する。

「皇帝を目指すものがこの程度で狼狽えるな！周りを不安にさせるんじゃないよ！」

「…ハンティ」

「まだトーマもミネバもいる。それに…お前にはあたしがついてい

るだろ！」

その言葉に、パットンが多少落ち着きを取り戻す。その人格においても、強さにおいても、最も信頼の置いている人物、ハンティ。人類最強トーマと、副将でありながらそのトーマに次ぐとも言われている実力者ミネバ。それに、魔人は未だ三人とも健在。ふう、とため息をつき、ハンティに向き直る。

「情けない姿を見せた。もう大丈夫だ」

「ふん、まだまだ手の掛かる奴だな」

静かに笑いあうパットンとハンティ。だが、パットンは気がついていなかった。魔人ノスの真の思惑に。そして、元から魔人を信用していないハンティだが、もう一人の暗躍にはこちらも気がつけずにいた。ミネバ・マーガレット、その獅子身中の虫には。

- リーザス城 地下牢 -

「ひいひい！」

「あはは、王女さんは良い声で鳴いてくれるねえ！」

地下牢では未だリアとマリスの拷問が続いていた。サテラがランスの情報を手に入れた今、既に拷問をする意味はない。これはサヤの悦楽のため。魔人ノスから許可を貰い、今なお拷問を続けていたのだ。

「どんな気持ちだい？必死に黙っていた情報が別の所から漏れてしまった気持ちは。残念だったねえ？このまま一生可愛がつてあげる

よ！」

「（ダー…リン…）」

隣の部屋ではマリスの悲鳴も聞こえてくる。終わりの見えない拷問の中、それでも二人は狂うことなくひたすらに待ち続けた。必ず助けが来る事を信じて。

・ジオの町 司令部・

「迷惑かけちゃったようだな。すまねえ。これからはその分暴れさせて貰うぜ

「粉骨碎身、働かせて貰います」

ジオの町解放の翌日、司令部に新たな顔が加わる。青の軍將軍コルドバと、副将キンケードだ。先の戦いで洗脳の解けた二人は、こうして会議に参加していたのだ。志津香も思ったより怪我は酷くない、セルの懸命な治療によりほぼ完治し、会議に参加している。被害状況や物資の補給などの話しが続く中、ランスが欠伸をしながら唐突に切り出す。

「で、次の進軍はいつなんだ？」

「そこが意見の分かれているところでした…」

「今攻め込めば楽に進軍できるでしょうけど…私たちにも大きな被害が出たから…チューリップ3号も壊れちゃったし…ううっ…」

バレスとマリアがその問いかけに答える。面倒くさそうにランスが耳をほじりながら、一言告げる。

「そんなもの進軍に決まっているだろう」

「ですがランス殿！ここは冷静に行くべきでは！」

「怪我が完治していない人もまだ多いですし…」

ジブルとランが反論するが、その意見をバツサリと切り捨てる。

「相手が弱っているのに攻めない馬鹿がどこにいる。明日進軍だ！これは総司令官命令だ！」

「くっ…」

その横暴に一部の者が不快感を露わにするが、進軍派でもあるルクがフォローを入れる。

「オクの町ではゲリラ軍が戦っているんだろ？早く助けにいつてやるのも軍の勤めさ。それに、心配しなくても大がかりな戦いにはならんさ。怪我人を置いていっても十分勝てる戦だ」

「はい。軽く偵察してきましたけど、オクの町からは既に多くのヘルマン兵が敗走しています。この状況で攻め込まれるのを恐れているんですよ」

「私の得た情報でも同様です。ここは攻め込むのが得策かと…それに、自由都市のジオと違い、オクはリーザス領。協力者も増えるでしょうし、これまでに以上に補給がしやすくなるはずですよ」

かなみと真知子もフォローを入れる。ランスの適当な采配には文句を言っていた者たちも、こう理論づけられれば考えも変わる。それに元々進軍派であったリックやコルドバ、ハウレーンも加わり、流れは完全に進軍ムードになる。

「では、明日オクの町に進軍する！怪我の酷い者は一度置いていき、後から合流させる。全軍で攻め込む必要も無い相手じゃ！」

バレスの言葉に、眠ってしまったているアス力以外の全員が返事をする。オクの町侵攻戦、しかし、この侵攻戦はあっけなく終わる事になる。

- 翌日 オクの町近辺 荒野 -

「なんだ、全然敵のお出迎えが無いではないか。つまらん」
「何言っているのよ。敵なんかいないに越した事ないでしょ」

文句を言うランスに苦言を呈すマリア。ランスの言うように、ここまでまともな戦闘はほとんどなく、既にオクの町目前。やはりヘルマン軍の受けたダメージは大きいらしく、より奥へと敗走して体勢を立て直しているのだろう。

「では全軍突撃！」
「油断はするなよ」

奥の町の中にも僅かなヘルマン軍しかおらず、それも先に町に攻め込んでいたゲリラ軍と戦っている最中であつた。なだれ込む解放軍に慌てふためき、一時間も掛からずオクの町は解放されたのだつた。長い自由都市での戦いを経て、遂にリーザス領の一角を取り返した解放軍。皆が歓喜する。

「遂に…遂にここまで…」
「バレス殿、まだまだ戦いはこれからですよ」
「うむ…だが、やはり感慨深いものがある…」

- 夜 オクの町 -

「がはは、宴だ！その娘、もつとこっちに来い！」

「ランス様、へんでろばを取ってきました」

その夜、オクの町では軽い宴が開かれていた。これはランスの提案だ。まだ戦争の最中であるのにと反対意見も多かったが、辺りにヘルマン軍はいないという報告もあり、また、今回は碌な戦闘がなかったため被害は限りなく0。次の町の様子を探った斥候が帰ってこなければ大した会議も開けないため、軽いものならばと最終的には宴は承諾された。最初は渋っていた者たちも、やはりリーザ領を奪還できたことが嬉しかったのだらう。皆が宴を楽しんでいた。ルークも軽く酒を飲みながら、辺りの喧騒を楽しんでいた。そこに志津香が近寄ってくる。

「程々におきなさいよ。まだ戦争中なんだし」

「少しくらいなら、程よく気が抜けるもんさ。志津香は飲まないのか？」

その問いかけに、志津香がギロリと睨んでくる。

「私は飲まないわ。一生ね！」

「まだあの時の事を気にして……」

「まだ覚えていたの？忘れなさいって言ったでしょ？」

志津香が脇腹にパンチを入れてくる。カスタムの町での失態を未だに後悔しているらしい。そのような感じで自然に話す二人。先程かなみとも自然に話したルーク。あのような話を聞いたにも関わ

らずだ。そんな二人の態度がルークは嬉しかった。

「志津香…」

「ん？」

「ありがとな」

「…何のことだか判らないわ」

「なーに、良い雰囲気出してるの、お二人さーん！」

静かに話す二人に、いきなり肩を組んでくる人物。振り返れば顔を真っ赤にしたレイラがそこにいた。

「ぶっ…はー！ー！」

「うっ…お酒臭い…」

「レイラさん、どれだけ飲んだんだ？」

「何言ってるのよ！こんなの…全然飲んだ内に入らないわよ！」

「典型的な酔っ払いね…」

志津香が眉をひそめると、その様子を見たバレスが叫ぶ。

「誰じゃ！レイラにこんなに酒を飲ませたのは！レイラに酒を飲ませすぎないのは、軍の暗黙の掟じゃろうが！」

「ミリさんがレイラさんを挑発して飲み比べになって…すいません、バレス様！」

「ええい、セル殿を呼んできてくれ！」

バレスに命じられてメナドが駆けていくが、すぐに慌てた様子で戻ってくる。

「駄目です。セルさんもトマトさんと一緒に潰れています！真知子さんと一緒に飲んでいたみたいです！」

「なんじやと!？」

「ああ…真知子さんはああ見えて酒豪だからな…」
「そうなの!？」

メナドの声を聞いて、真知子と飲んだ事のあるルークが呟く。うふふ、と笑いながら次々と酒瓶を空けていく姿は中々に恐ろしいものがあつた。あのペースに付き合っていたのでは、そりゃ潰れるなと酒を口にしながら考える。そのルークにレイラが更に絡んでくる。

「なーに、静かに飲んでるのよー!それと!ルークに一つ言っておきたい事があるわ!」

「言っておきたい事?」

「ランスくん程とは言わないまでも…もっと!女の子に!優しく!でも八方美人過ぎ!」

「耳が痛い話だな…」

「(……自覚はあつたのね)」

レイラの言葉に、同じく肩を組まれて動けない志津香が耳を傾ける。レイラがそのまま続ける。

「そうよ!あんなに美人さんたちに好かれているのに!まずは手始めに誰かの想いに応えるべきなのよ!例えば…」

「ちよっ!」

「はい、そこまで!」

「きゃんっ!」

レイラが酔った勢いでとんでもない事を言い出しそうになり、焦る志津香だったが、そのレイラの頭に拳骨が落ちる。

「いたた…一体誰よ!…って、アビートル隊長!？」

「元ね。いいから顔を洗ってらっしゃい。それとも、もう一発受けてみる？」

「い、今すぐ顔を洗ってきます！」

立っていたのは親衛隊前隊長アビートル。お世話になった人の姿に、一気に酔いの覚めるレイラ。そのまま猛ダッシュでこの場を去っていく。その背中をやれやれ、と見送ったアビートルが、ルークの方を向いてくる。

「お久しぶり。本当にルークなのね……」

「……ああ」

「……ちよつとマリアの様子を見てくるわ。ミリに巻き込まれているかもしれないし」

二人の様子に何かを感じ取ったのか、志津香が席を外す。少しの沈黙の後、ルークが口を開く。

「どうしてここに？」

「オクの町のゲリラ軍を率いていたの、私なの」

「……なるほど。どうりで俺たちが来る前に敵がボロボロな訳だ」

「……いつ戻ってきていたの？死んでしまったとばかり思っていたのよ」

「一年半くらい前だな」

「……そう」

二人がほぼ同時に酒を口に含む。アビートルの左手の薬指に、指輪が光る。

「私も今じゃ主婦よ。貴方が行方不明になって十年以上……人が変わるには十分過ぎる時間だわ」

「…すまない」

「謝らないでよ。今の旦那の事は、本当に愛しているんだから」

かつて、リーザス親衛隊に入って間もない頃のアビートルは、故郷の町にギルド仕事で訪れた冒険者に惹かれた。男の名はルーク。自分より一つ年下だったが、強く、大人びていたルークに稽古をつけて貰い、その実力を高めていった。だが、告白を決意した矢先、ルークは行方不明になる。失意の中、それでも職務は全うし、親衛隊隊長となるが、心の隙間は埋まらなかった。そんな時、士官学校の同期であつた男性に優しくされ、その男と結婚をする。

「当時、私の気持ちには気がついていたんでしょ？」

「ああ…」

「そう…そうよね。これ以上は未練になるから、私はもう行くわ。今、側にいる娘たちには、優しくしてあげて」

「…判った。そういえば、女子士官学校の校長を打診されているんだって？」

「ええ、少し迷っているんだけどね」

「受けてくれないか。君の教え子なら、リーザスの未来を安心して任せられる」

「…考えておくわ」

そう言つて去っていくアビートル。彼女も、ルークが魔人界で過ごした十年の途中で悲しませてしまった人物の一人だ。妹の死に目に会えなかった事も思ひだし、酒を一気に飲み干す。その時、少し離れた位置にいるキンケードが目に入る。

「…キンケード様。ご報告が…」

「…！？」

部下に耳打ちされ、目を見開くキンケード。そのまま周囲にばれないようにその場を抜け出していく。ルークはその姿が気に掛かり、気がつかれないように後を追った。そのルークの背中をかなみが見つける。そして、かなみもルークの後を追うのだった。

・オクの町近辺　森中・

「お、お前たちは何をしている！」

キンケードの怒声が飛ぶ。森の中ではキンケードの部下二人が一人の女性を犯していた。側には一人のヘルマン兵の死体が転がっている

「これはキンケード様。何、ヘルマン兵が女を人質にしながら森に隠れているのを発見しましてね」

「我ら二人が殺しておきましたのでご安心を。女性は既にヘルマンに犯され抜き、意識が朦朧としていたので我らもついでに楽しませて貰っているところです」

「さっき一瞬、意識を取り戻しかけましたが、強く殴ったら気絶したので顔は見られていません」

さも当然の事のように言っただけの二人の若者に、キンケードが更に語気を強める。

「ば、馬鹿者！今すぐ止めないか！」

「何言っているんですか？キンケード様がいつも戦闘の後、慰安でさせてくれる事じゃないですか」

「それは相手を選んでいる！その女性はリーザスの民だろうが！」

「これだけ朦朧としてりや、覚えちゃいませんって。キンケード様も混ざりませんか？」

確かにキンケードは、ヘルマン軍や盗賊といった輩を倒した際、それに属していた女性を捕らえ、慰安のために性処理要因として使っていた。だが、流石にリーザスの民を犯した事はない。こんな事がもしばれてしまえば、と焦るキンケード。その時、女性を犯していた二人の部下の首が飛ぶ。飛ばしたのは二人の背後にいた男。冒険者ルーク。意識を失っている女性を抱きかかえながら、キンケードを睨み付ける。

「こ、これはルーク殿」

「キンケード…話しは聞かせて貰ったぞ。随分と軍規に違反した行為を行っているみたいだな」

「な、何の事でしようか…」

惚けるキンケード。その時、ルークの後ろからかなみがやってくる。

「ルークさん？森の中で一体何を…えっ!？」

「かなみ、丁度良いところに来てくれた」

かなみが周囲に転がる死体と、ルークが抱きかかえていた女性に驚く。ルークがかなみに女性を預ける。キンケードは自分の地位の終わりを覚悟するが、ルークの発した言葉は意外なものだった。

「かなみ、この女性を口ゼに治療させてやってくれ。リーザス兵に扮したヘルマン兵に犯され、意識を失っている。宴の席に水を差すのは士気に関わる。内密に事を運んでくれ。報告は…エクスだけにし、他の者には伝えないように。俺はこの場でヘルマン兵の死体を

片付けておく」

「は、はい！」

慌てていたのか、その指示に特に違和感を覚える事もなく、かなみは女性を連れてこの場を去っていく。この場に残されたのはルークとキンケード。まさか、助けて貰ったのか、とキンケードが安堵する。そのまま調子の良い声でルークに礼を言う。

「いやあ、ルーク殿。危ないところを…」

「何を勘違いしている？別に助けた訳ではないぞ？俺がこの事を報告すれば、どうなるかは判っているだろう？」

冷たく言い放つルークに、キンケードの表情が再び凍り付く。目の前の男はただの冒険者ではない。自分が洗脳されている内に、いつの間にか隊長たちの評価を得ていた男。バレスも、リックも、エクスも、レイラも、チャカもこの男を信頼している。その男がこの事を報告し、自分が知らないと白を切ったとして、果たして皆はどちらを信用するのか。その上、目の前には部下の死体が転がってしまっている。このような行為を、リア王女もマリスも、バレスも毛嫌いしている。となれば、下手すれば処刑まで…。キンケードの背中を冷たい汗が流れる。その様子を見ながら、ルークが静かに口を開く。

「…助かりたいか？」

「も、勿論です」

「…ならば、やって貰いたい事がある。それをすれば…まあ口利きはしてやる」

「やって…貰いたい事…？」

「ああ、お前みたいな奴が適任の仕事だ。この二人に比べて、リーザスの民には手を出さない辺り、お前はまだ多少救いはあるみたい

だからな」

「……」

「選択する余地はないぞ？」

「…判りました」

この晩、ルークとキンケードの間である密約が結ばれる。死体はルークと駆けつけたエクスが処理。大規模な戦争の後で死人の把握まで完璧には行き渡っていなかったため、二人の失踪を疑問に思うものはいなかった。

・翌日 オクの町 司令部・

「斥候に行っていた者が情報を持ち帰った。ここから北のノースの町にはトーマ率いる部隊が、東のサウスの町にはミネバ率いる部隊が共に守備しているようじゃ」

「でも相手の戦力はどちらも1000に満たないそうよ」

「ようやく相手の戦力が底をついてきたみたいね…いたた…」

「レイラさん、二日酔いなんですから無理しないでください…」

バレスとマリアの報告に、部屋が歓喜に沸く。いよいよリーザス奪還が現実味を帯びてきたからだ。

「とすると、どちらを先に落とすかですね」

「戦略的に見ると、ノースを落とすのが良さそうですわね」

「うむ、真知子殿の言う通りですじゃ」

「…真知子さん、二日酔いは大丈夫なんですか？」

「ふふ、あの程度、飲んだ内に入らないわ」

「……」

「がはは、こりゃ豪快なお嬢さんだ！」

メナドの問いかけに、ケロリと答える真知子。絶句するハウレーンの前の席でコルドバが大声で笑う。

「では、ノースから攻めるという事で。サウスからの攻撃も備えなければいけないので、向かう軍は…」

「ふん、一々そんな面倒な事を考えていられるか。既に敵の兵数はクズ同然。せこくいかず、両方同時に攻めるぞ！」

「えっ…」

「何と…」

「そりゃいいな。一気に倒しちまおうぜ！」

ランスの提案に絶句するバレス。ミリが賛同するが、エクスが口を開く。

「有利と思われていた戦において、両面作戦を取ったが為に負けた事例が、歴史上何度でもあります。無茶な戦いはせず、確実に行くべきでは…」

「そんな退屈な作戦を取れるか！両方同時に攻める！俺様はもう決めたのだ！」

「はあ、また馬鹿な提案を…」

「まあ、成功すればその分早くリーザスに辿り着ける。なくはないな」

「自分は賛成です。ここは一気に叩くべきかと」

志津香がため息をつくが、ルークとリックは賛成のようだ。最終的にはランスの総司令官権限が発動し、二力所同時攻略を行う事となった。

「では部隊の分け方だが、俺様と女たちはノース、むさ苦しい男共はサウスだ」

「そんな無茶苦茶な部隊分け、出来る訳ないでしょ！」

流石にこの提案は却下され、しばしの話し合いの末、部隊分けが決定した。ノースを攻めるのは、ランス、シイル、マリア隊、赤の軍、白の軍、リーザス魔法軍。サウスはルーク、かなみ、志津香隊、黒の軍、リーザス親衛隊、傭兵部隊。オクの防衛にはミリ隊、青の軍、ゲリラ軍が残る事となった。待ち受けるは僅かなヘルマン軍。だが、それを率いるのは共に猛将。トーマとミネバだ。一筋縄でいく戦いではないだろう。

・リーザス城 東の塔・

あまり他の者が立ち寄る事のない場所。ここにサテラは呼び出されていた。やってくると、呼び出した相手、アイゼルが既に立っていた。

「なんだよ、アイゼル。こんな所に呼び出して」

「サテラ、これより私はノースを探る。お前はいつも通り振る舞いつつ、もし私を怪しむような動きがノースにあれば、すぐに報告してくれ」

「なっ！？おい、人間なんかの言った事を本当に信じてるのか！？」「別に信じている訳ではない。だが、少しばかり気になる事があるのは事実」

そう話し合う二人。だが、その会話を遠見の魔法で見ている者がいた。その者は、魔人ノース。

「アイゼルめ、感づいたか。もし邪魔をするのであれば……二人とも始末する必要があるかもしれないな」

第53話 嵐の前の静けさ（後書き）

「人物」

コルドバ・バーン

LV 29 / 44

技能 剣戦闘LV1

リーザス青の軍將軍。リーザスの青い壁という異名を持ち、その鉄壁の部隊は世界に名を轟かせている。豪快な性格だが、趣味はハイモニカを吹く事。フルルという15歳の幼妻がいる。バレスやリツクの認めたルークの事を早くも気に入っている。

キンケード・ブランブラ

LV 25 / 36

技能 剣戦闘LV1

リーザス青の軍副將。実力はあるのだが、軍務を職業的にこなしているため兵としての誇りや情熱は無い。年下のコルドバよりも下の地位だが、本人は副將辺りが一番好き勝手出来て良いと考えている。普段から陰に隠れて蛮行を行っていたが、その事がルークにバレ、ある密約を結ぶ。

アビートル・スカット

LV 21 / 54

技能 剣戦闘LV1

リーザス親衛隊元隊長。レイラの前任で、寿引退をし、現在では主婦をしていたが、リーザスの危機にゲリラ軍として動く。ルークとは旧知の仲。

「都市」

オクの町

リーザスの南に位置する町。経済力、防衛力共にリーザスの中でも下位に位置する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750x/>

ランスIF 二人の英雄

2011年11月29日12時22分発行